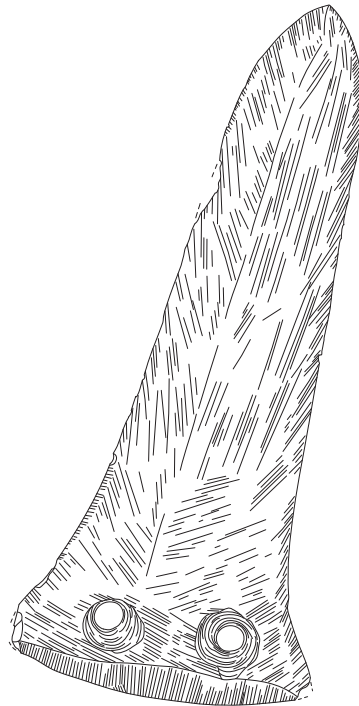


熊本県文化財調査報告第264集

きた さき  
北の崎遺跡  
けん ぬき  
釵拔遺跡

—木葉川災害復旧等関連緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—



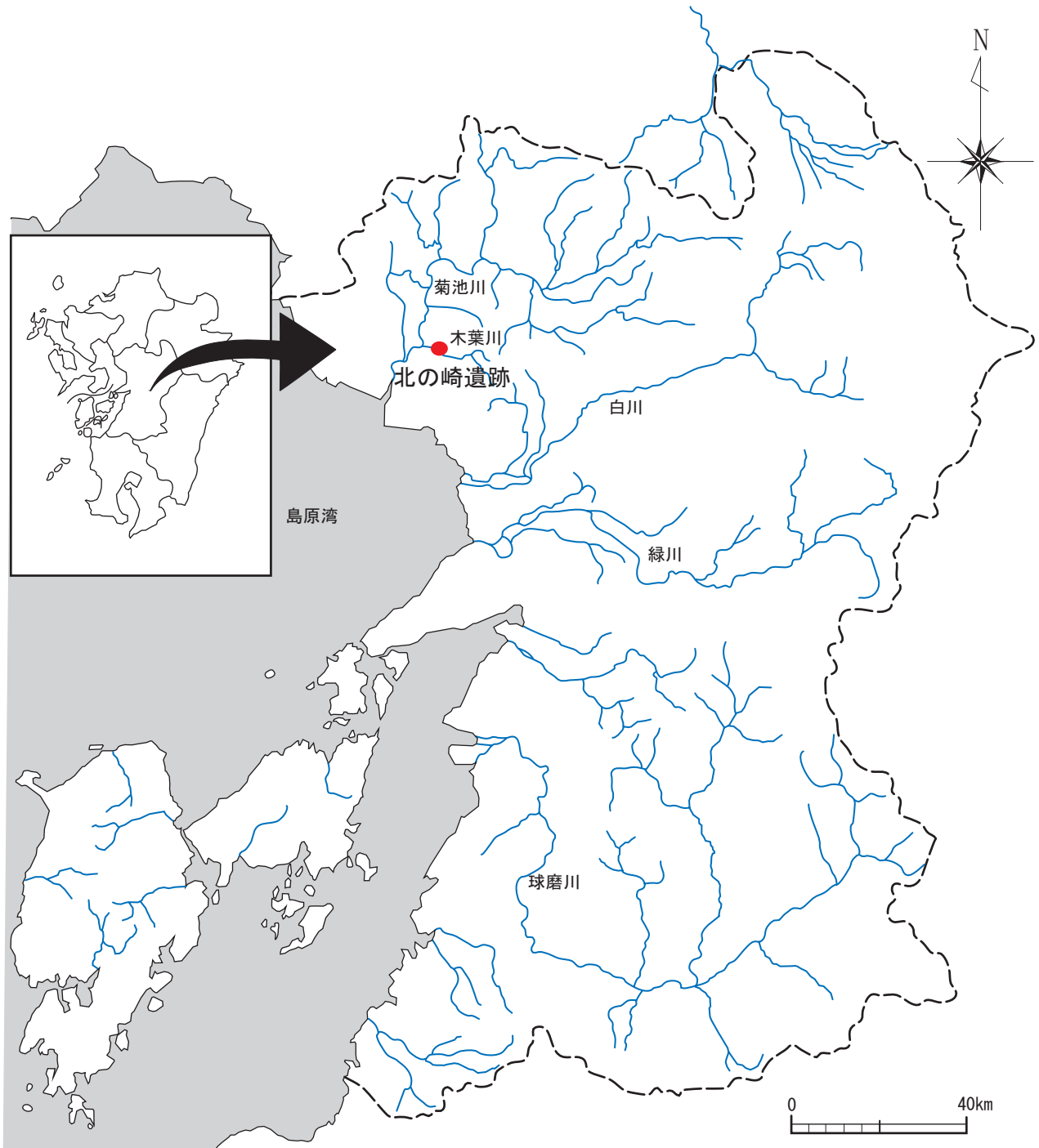
第1分冊

2011.3

熊本県教育委員会

Copyright by Board of Education, Kumamoto Prefectural Office

# きた さき 北の崎遺跡







口絵-1 北の崎遺跡上空より小岱山方面を望む



口絵-2 北の崎遺跡上空より金峰山方面を望む





口絵一3 北の崎遺跡平坦地区全景（各調査区の合成写真）





口絵-4 10号甕棺墓出土状況



口絵-5 8号住居から出土した弥生土器





口絵-6 23号住居から出土した古墳時代前期の土師器の壺



口絵-7 8号住居から出土した弥生土器



口絵-8 1号住居と遺物包含層（2b層）から出土した縄文土器



口絵-9 10号甕棺墓から出土した甕と蓋





口絵-10 畿内の影響を受けた古墳時代前期の土器



口絵-11 古墳時代前期の複合口縁壺と複合口縁甕



口絵-12 8号住居から出土した石戈<sup>せっか</sup>



口絵-13 古墳時代の勾玉



口絵-14 石包丁



口絵-15 古墳時代前期の小形器台



口絵-16 49号住居から出土した灯明皿として使用された<sup>つき</sup>坏と椀



きた さきいせきはくつちようさ がいよう ばん  
北の崎遺跡発掘調査の概要 (ダイジェスト版)

えいち ちえぶくろ  
遺跡は英知がつまった知恵袋  
たまなし へん  
北の崎遺跡 (玉名市) 編

## 1. はじめに

いままで報告書は、発掘調査でわかったことをかなり専門的な内容で説明してきました。このため考古学を専門に学んでいない人にとっては、とてもわかりにくい用語等が多く非常に読みづらいものでした。将来の人々に継承していくためにも、社会教育を含めた教育の場で使用していただかなければ、万人の財産にならないのではないかと考え、発掘調査で見えてきたことを簡潔にまとめたダイジェスト版を作成しました。用語などで児童・生徒が理解できる内容として編集しましたので、多くの人々に活用していただければ幸いです。

## 2. 発掘調査のきっかけ

北の崎遺跡は、玉名市と玉名郡玉東町の市町境の玉名市田崎にある遺跡です。田崎の中でも、古い絵図を見たところ、字が「北の崎」という地域でしたから「北の崎遺跡」と命名されました。文化財保護法では、工事などを行うことによって、遺跡を壊したり、この先見ることができなくなる場合、発掘調査を行わなければならないと定められています。そこで今回、木葉川このはがわが狭く大雨が降ると水があふれ出して被害を出すため、川幅を広くし、堤防にあった道路を移設するための工事を行う計画が出されたため、遺跡が壊れる部分と道路を移設してこの先見ることができなくなる部分について発掘調査を行いました。調査は、平成 15 年 5 月から平成 16 年 11 月までの期間で、約 5038 m<sup>2</sup>の範囲を行いました。

## 3. 発掘調査でわかったこと

### (1) 玉名地方の大地のおこり

約 9 万年前までは、玉名平野周辺では現在とは異なり、今のような平野はなかったと考えられています。現在の菊池川きくちがわあたりは谷になっていて、そこを川が流れていたようです。そして、その周りも現在のような平らな土地はあまりなく、小岱山しょうたいさんや木葉山このはやまからの斜面が緩やかに伸びてきている景色があったことでしょう。

ところが、周辺の様子を一変させる大きな出来事が約 9 万年前に起こったのです。それは、現在の阿蘇あそのカルデラを作り出した大噴火である火砕流噴火かさいりゅうふんかです。この辺に植わっていた木や草や多くの動物たちを、数百度 (500 ~ 1000℃) にもおよぶ高温の岩や軽石かるいしなどを含んだ砂あらしである火砕流が焼きつくしたと思います。それらの岩石などはあまりの高温のため、一度溶けて再びかたまって溶結凝灰岩ようけつぎょうかいがん (別名「灰石」はいいし) と呼ばれています) となり、谷になっているところはすべて埋め尽くされたと思います。この岩石には、丸いものが押しつぶされたような形をしている黒い模様もよう (レンズ) があるのですぐわかると思います。もちろん現在の玉名平野にもこれらが埋まっていたのです。おそらくこの周辺では、高い山だけがぼつんと顔を出すまっ平らな土地がつくられたでしょう。



図－1 縄文時代の玉名平野のようす 稲葉洋一 画

そして、この平らになった土地は雨などによってどんどん浸食<sup>しんしょく</sup>され、平らな土地に溝が次々と形成され、川がつくられていきました。その中の1本の川が、現在の菊池川付近にもつくられたと考えられます。そして、固い石でつくられている木葉山や小岱山を残しながら火砕流でできた土地が徐々に削られていったことでしょう。今から1万年前をすぎたころから人がここでも生活を営むようになりました。当時の人々は、森林が生い茂った尾根や谷が交互にあるような土地を見ていたことと思います。

そして、約7000年前から地球に大きな変化が起こり始めました。温暖化<sup>おんだんか</sup>です。この温暖化により、海面が4～5m近くは上昇していたことが日本各地で行われた調査でわかっています。この遺跡でも海水の影響を受けたか調べたところ、すぐ近くまで海がせまっていたらしいことがわかりました（図－1：縄文時代の玉名平野のようす）。この海面が上昇したことにより、今まで有明海に運び出されていたものが、海が近くまでせまってきたため、この地でたい積するようになったわけです。このことにより、現在の有明海に見られる干潟<sup>ひがた</sup>のような環境が作り出され、平らな土地がつけられたのです。また、現在の玉名平野は、周囲は山々に囲まれていて、川の出口は現在の玉名大橋付近しかなく容易<sup>ありあけかい</sup>に有明海に流出できない構造になっていたことも、この平らな土地を作りあげるために影響<sup>えいきょう</sup>したかもしれません。

その後、徐々に海水面は下がり、約4000年前から海岸線は後退していきました。その結





図-2 弥生時代の玉名平野のようす 稲葉洋一 画

果、干上がり現在のような平野が形成されたと考えられます（図-2：弥生時代の玉名平野のようす）。この平らな土地が、のちの時代（弥生時代）に米作りを盛んにさせ各地にムラをつくらせた<sup>いちいん</sup>一因になったかもしれません。この縄文時代に海水面が上昇したことを「縄文海進」といいます。当時の海岸線は、縄文時代に作られた貝塚の位置によっておおよそ推測できます。この玉名平野には、<sup>なごみまち</sup>和水町（旧菊水町）に<sup>きくすいまち</sup>若園貝塚があります。ここは河川が平野部に出る境となるところにあることから、現在の平野部一帯は、一面海水の影響を受けるような環境であったことが考えられます。なお、玉名平野の南東にある熊本平野では貝塚の位置から縄文時代の海岸線の様子がみとれます（図-528）。海面が上昇したときやその後の<sup>だんそう</sup>断層などの変動により、どこでも同じとは言えませんが標高5m付近が海岸線であったようです。話は変わりますが、天草に行くときに皆さん1号橋を渡っていきますよね。その橋の下にある<sup>かいしよくどう</sup>海食洞が現在の海面から5～6m高い位置にあるのも理解できます（写真-480）。

北の崎遺跡でも約7000年前の土器の破片（1点）が発見されていますので、人々がこの地で生活していたのは間違いなく、海が近くまで広がっていた風景や、少しずつ海が<sup>こうたい</sup>後退していったころの風景を見ていたことでしょう。その後人々は作物をつくるなどの目的に合わせた土地の改良を行い（図-3：奈良時代や平安時代の玉名平野のようす）、現在の土地をつくりあげてきました。



図-3 奈良時代や平安時代の玉名平野のようす 稲葉洋一 画

## (2) 縄文時代の人々の生活

北の崎遺跡では、人々は縄文時代早期（約 10000 年前～ 6000 年前）にも生活していたようですが、本格的に生活しはじめたのは、縄文時代後期（約 4000 年前～ 3000 年前）に入ってからです。縄文時代の人々は、多くの生活のこん跡を残しています。今回の発掘調査では、1 軒のたて穴住居と 3 つの貯蔵用に使用したかもしれない穴（土坑）、そして 2 つのたてに埋められた鉢（埋鉢）（写真-1）が発見されました。たて穴住居は、調査地には一部しかかかっていなかったため全体像ははっきりわかりませんが、円形の形をしているようです。床は人が日常的にふみつけるためやや固くなっていました（硬化面といえます）。他にも柱を埋めるために掘ったのかわかりませんが、数個の穴がありました。このたて穴住居からは、縄文人が使っていた「鉢」などの土器が発見されました。また、貯蔵用に使用したかもしれない穴からも同じように割れた土器の破片が出てきました。なお、「写真-2」の縄文土器は、出土した破片の一つ一つを接着して組み立てたものです。今回発見された埋鉢は、鉢形の土器を地面にそのまま埋めたもので、



写真-1 発掘されたときの様子



写真-2 接合したあとの埋鉢



鉢の大きさは、高さが約 50 センチ、直径が約 40 センチでした。他の遺跡では、人骨が入っていた例もありますが、食料保存のためという説もあり、はっきりした使いみちは分かっていません。鉢の中を埋めた土も調べましたが骨の破片も見つかりませんでした。



写真-3 縄文土器の模様

**【縄文土器 ～人類がはじめて熱による化学変化を利用した道具～】**

縄文土器は、熱によって粘土の鉱物がガラス状になって固くなり、それが粒同士の間をうめて水がもらえないものとなったのです。それまで採ったものをすぐに食べていた人々の食生活を大きく変化させるものとなりました。土器を使って水をためることができるようにもなりました。また、食物を煮たり炊いたりできるので、ドングリなどの灰汁が強くて生では食べられないものも灰汁抜きをすることにより食べることができるようになりました。



写真-4 磨石とたたき石

この時代の土器は、種類はあまり多くなく鉢が中心でした。しかし、表面に刻まれた模様（写真-3）はとても神秘的でおしゃれなものが多いですね。



写真-5 縄文時代の石鏃（やじり）

**【石器 ～石をつかったさまざまな道具～】**

縄文時代は、狩猟採集を中心とした生活です。ですから、動物を捕まえるための道具や木の実などを料理するための道具がたくさん発見されます。磨石やたたき石（写真-4）は、石皿の上ののせた木の実などをたたいたり、すったりして粉状に加工するために使用したものと思われます。また、石鏃（写真-5）は石のやじりで、弓矢の先にとりつけ狩猟用として使ったものです。北の崎遺跡では、黒曜石やチャートという石を使用しています。これらの石



写真-6 石さじ



写真-7 打製石斧

は、佐賀県や大分県、熊本県内では九州山地から採ってきたものではないかと思われます。

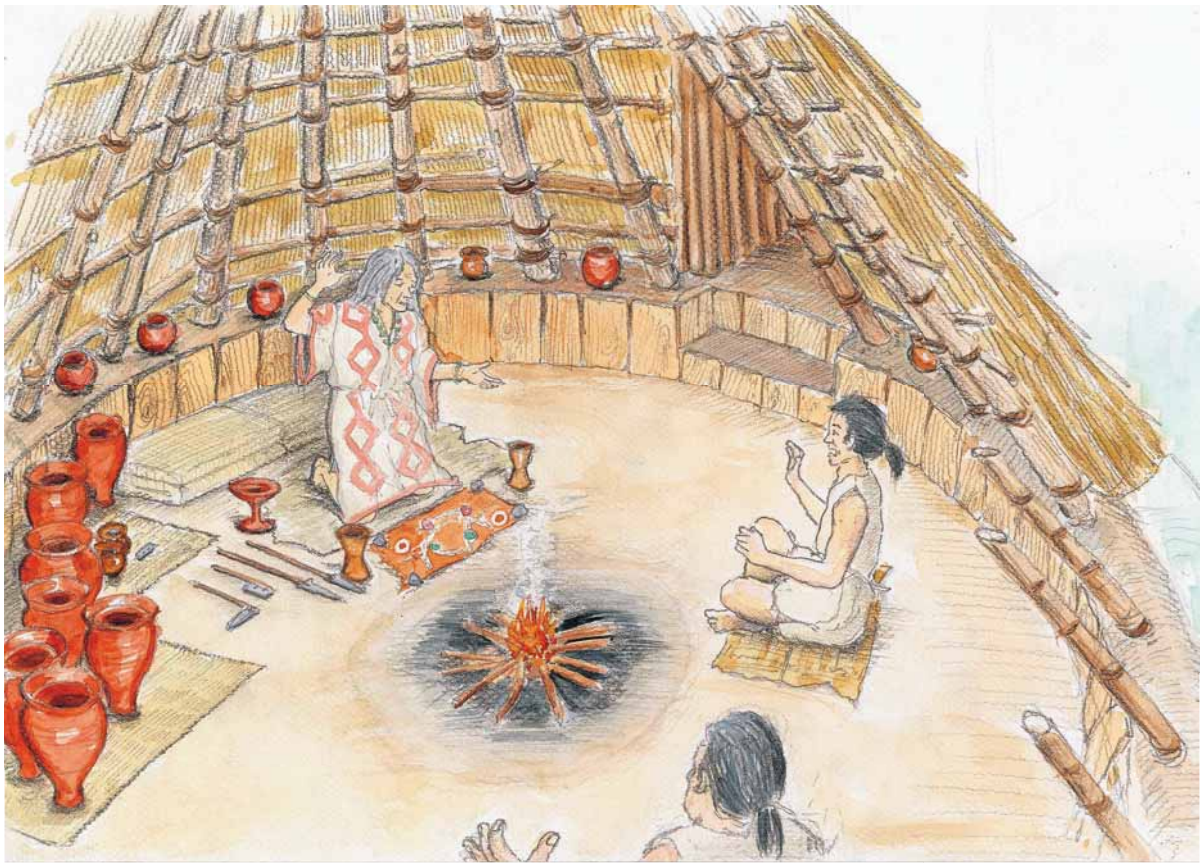


図-4 出土物から想像した8号住居のようす 稲葉洋一 画

材料になった石を見ると、どこから持ってきたかおおよそ推測できます。その他、石匙（写真-6）は、動物の皮をはいたり、植物のつるなどを切ったりと万能ナイフの役割をはたしていたと言われています。つまみにひもをつけ腰などにかけていたのかもしれませんが。石斧（写真-7）は、土掘りに使用されていたのではないかと思います。

### (3) 弥生時代の人々の生活

北の崎遺跡の弥生時代の人々の生活のあとは、中期（紀元前1世紀～紀元1世紀）が中心となります。出土したものからも、縄文時代の狩猟生活とは異なり農耕を中心とした生活へ変わったということがわかります。農耕具や工具類が非常に多くなるので



図-5 弥生時代のたて穴住居と倉庫 稲葉洋一 画

す。また、土器などに赤い顔料をぬり魔よけをおこなったりなど、呪術的なものを感じるのもこの時代に入ってからではないでしょうか（図-4）。今回の発掘調査では、たて穴住居が21軒、倉庫ではないかと思われる建物あとが1棟（図-5）、目的はわかりませんが弥生人が掘った穴（土坑）が61個、溝状に掘ったものが4本、そしてかめ棺墓といわれ



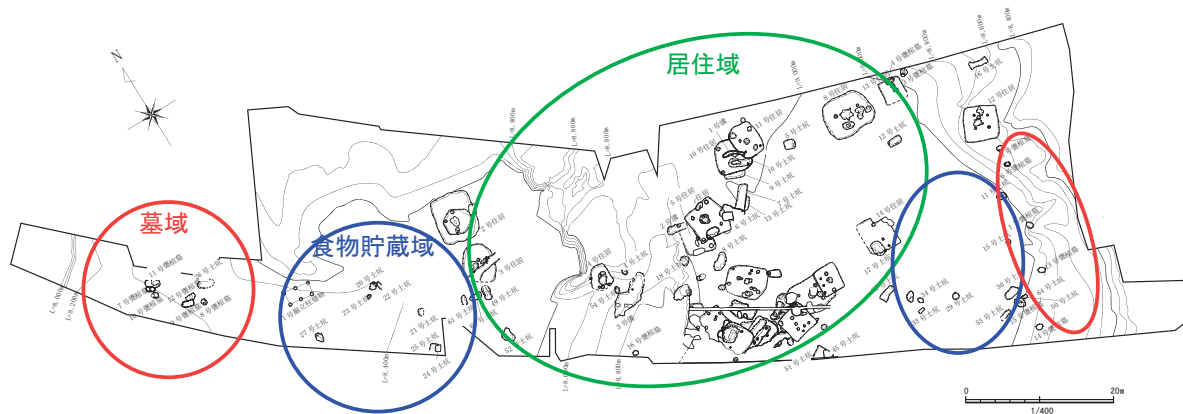


図-6 弥生時代のムラのような様子

墓が14個発見されています。遺跡内の遺構（建物あとやお墓など当時の人々が作ったもの）の位置関係から平坦地の中央に住居があって、その周りに倉庫や貯蔵した穴、さらにその周囲に墓があったことがわかり、当時のムラのつくりがわかりました（図-6）。たて穴住居は縄文時代と異なり、家をつくるために掘った穴の形が楕円形や四角形の形をしています（写真-8）。縄文時代は円形でしたから、大きく変化してきていることに気づくと思います。また、すべての住居というわけではありませんが、屋根を支えた柱も2本が多いようです。そして、これもすべての住居にあるわけではありませんが、中央に火を燃やすために掘った穴（炉）が取り付けられています。また、貯蔵のため掘られた穴（貯蔵穴）を取り付けてある住居もあります（写真-8）。そもそも当時の人はなぜ穴を掘っていろいろな施設をつくったのでしょうか。夏は、日光さえあたらなければ、穴の中は涼しく、冬は、風をさえぎることができるので逆にあたたかいという特徴があります。農耕生活を営むために定住した弥生時代の



写真-8 たて穴住居のあと



写真-9 破片を接合したかめ棺



図-7 埋葬の様子 稲葉洋一 画



写真-10 かめ棺墓発掘の様子

人々にとっては、快適に過ごす知恵だったのではないのでしょうか。この遺跡からは、弥生時代中期ごろに北部九州から中部九州を中心にさかんに作られたかめ棺墓（写真-9）というお墓も発見されています。かめ棺というのは、北部九州に特有のかめで作った棺のことです。大型の素焼きのかめに、亡くなった人の手足を折り曲げて入れ、土の中にななめに埋めるという埋葬の方法で、弥生時代の中頃のおよそ



写真-11 8号住居の弥生土器

200年の間、北部九州を中心にさかんに各地で取り入れられました。北の崎遺跡では、大型のかめに小さいかめや鉢でふたをしてありました。残念ながら多くのかめ棺墓は、のちの人々が上の部分を壊したりしてなくなっていました。写真-10のかめ棺は、土の重みでつぶれていましたが、ほぼ完全な形で発見されました。

では、今回の発掘調査で発見された弥生時代の人々が使用したものを見ていきましょう。

### 【弥生土器 ～稲作により機能的な美しさをもたらした土器～】

弥生土器は、縄文土器と同じ素焼きの土器です（写真-11：8号住居の弥生土器）。水稻耕作によって変化した人々の生活に応じて、形や使い方が縄文時代とは異なってきます。弥生土器では、縄文時代にはなかった壺という形が生まれたり、貯蔵という使い方が生まれてきました。または、盛りつけ用の鉢や高坏などがつくりだされ、土器の使い方によってさまざまな形の土器が生まれてきたのです。弥生土器は、縄文土器と比べて、飾りつけは少ないのですが、表面はみがかれ、形はなめらかで、そこには機能的な美しさがあります。



写真-12 弥生時代の石斧

### 【石器 ～米作りとともに変化した石器～】

狩猟採集を中心とした生活から農耕を中心とした生活にかわることによって、道具にも大きな変化がみられます。弥生時代になると、農耕具や工具類などが多くなります。だからといって狩猟採集の道具が完全に消えさってしまったというわけではありません。この遺跡からも、弥生時代の



写真-13 いろいろな石包丁

石鏃や磨石などが発見されていますので、狩猟や採集も縄文時代に引き続いて行われていました。ただし、弥生時代の終わりのころになると石の道具はほとんどなくなるようです。

この遺跡では、石の工具類の代表的なものとして、刃の先が蛤のようにぶ厚い大型蛤刃石斧（左）や柱状片刃石斧（右）（写真-12）があります。大型蛤刃石斧は、刃部を正面から見た形がハマグリに似ているためこの名がついたもので、木の伐採に適してい



ると言われています。また柱状片刃石斧は、断面が柱状もしくは台形で片方にしか刃がついていないもので、木の皮をはいたり、表面を削ったりするとき使用したと言われています。このような石斧を使って、たて穴住居の柱などを作るときに木を切り出し、木の皮をはいでいたのでしょう。



写真-14 石戈

この遺跡から出土した石でできた農耕具の代表的なものとして石包丁（写真-13）があげられます。この遺跡からは、13個の石包丁が発見されました。さて、石包丁というからには、「どんなものを切っていたのかな？」と思う人がいるかもしれませんが、これは茎を切る道具ではなく、稲穂をつみとる道具なのです。石包丁には、ひもを通すための穴が2か所あけられていて、そこにひもを通し、手の甲に巻きつけて、稲穂の部分を刈り取ったと言われています。これらは、朝鮮半島や中国から米作りとともに、日本にもたらされたものと言われています。

この遺跡で、もっとも特徴的な石器といえば、石戈（写真-14）ではないでしょうか。「戈」は、中国をその始まりとする青銅や鉄で作られた武器です。柄に直角にとりつけられ使用されていました。石戈は、この金属で作られていた「戈」をまねて石で作ったもので、祭祀用として使用されたと言われています。石戈が発見されたたて穴住居（図-4）からは、他にも石鎌や器台といったものが一緒に見つかっています。この住居の中ではこれらの道具で農耕のまつりをおこなっていたのかもしれませんが。

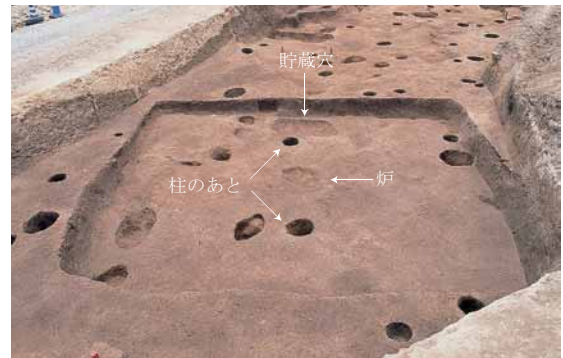


写真-15 古墳時代のたて穴住居のあと

#### (4) 古墳時代の人々の生活

この北の崎遺跡で古墳時代の人々の生活のあとが残っていたのは、古墳時代のはじめのころ（古墳前期：4世紀頃）が多いようです。今回の発掘調査で、たて穴住居が2軒、用途は不明ですが人々が掘った穴（土こう）が7個、そして溝は1本発見されました。たて穴住居は、弥生時代よりはっきりした四角形をしており、柱の数は弥生時代同様2本の柱もあれば4本の柱をもつものもあります（写真-15）。炉は弥生時代と同じように住居の中央に作られています。一方で、弥生時代とは大きく異なるものがあります。それは、床より一段高くなったベッドとよばれる設備がついたことです。使用目的ははっきりとはわかっていませんが、文字どおりベッドとしても使われていたのではないかと思います（図-8）。

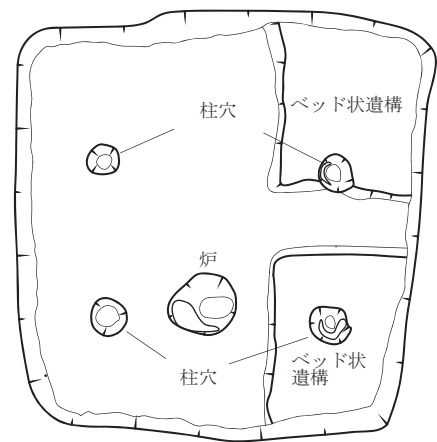


図-8 ベッドがある住居

使用目的ははっきりとはわかっていませんが、文字どおりベッドとしても使われていたのではないかと思います（図-8）。

古墳時代の特徴は、やはり権力者のお墓として古墳を築いたことでしょう。北の崎遺跡には古墳はありませんが、玉名を含め菊池川流域では、数多くの古墳が発見されています。なかでも、前方後円墳は近畿地方で発生したとされていて、統一された大きさや形をもつ古墳です。古墳時代の後半にあたる5世紀頃に菊池川流域ではたくさんつくられています。このような前方後円墳が出てくる前に、広い範囲に権力がおよぶ政治連合が形成されていて、古墳がこの政治連合に加わった各地の首長たちの共通の墓の様式として造りだされたものであることが推測できます。広い範囲に権力がおよぶ政治連合こそが、大和政権であったと考えられています。前方後円墳が造られる前の古墳時代初期の頃（古墳前期）の土器を注意深く見ると、近畿圏で発見されているものと同じような「つくり」をもった土器が多数発見されています。この時期から近畿地方とは交流があっていたことがわかります。また、山陰地方に見られるつくりをもった壺などが発見されているのもたいへん興味深いものがあります。熊本・福岡・大分の古墳で発見される石馬（古墳に配列された石製の馬の像）が、鳥取県米子市淀江町の古墳で発見されたことからわかるように、古墳時代からなんらかの交流があっていたのでしょう。

### 【土師器 ～遠くは近畿圏や山陰の影響も～】

古墳時代になると弥生土器にかわって土師器といわれる土器が出てきます。土師器は赤焼の土器をいいます。3世紀ごろから焼かれ、日常用の壺、煮炊きの甕、物を盛る坏や高坏、鉢、器台（「マツリ」の時に使用する器をのせる台）、竈に使われていました。ただし、古墳時代になったからといって、ある日突然、全てが土師器になってしまうというわけではなく、徐々に入れかわっていくものと考えてください。土師器は弥生土器の延長線上にある土器なのです。この土師器のなかには、奈良県天理市布留遺跡で最初に発見された布留式土器といわれる土器があります。弥生土器と非常に異なるのは、土器の厚さです。通常弥生土器では、4～5mmですが、この布留式土器（写真-16）では、2mm程度の薄さになります。この薄さによって、煮沸したときに熱の通りが非常によくなります。弥生土器からさらに機能的に進化させているのです。また、壺では、口（口縁）に段がつく二重口縁壺といわれるものの中に、山陰地方でみられる独特のつくり（写真-17）をしたものがあります。この時代は、



写真-16 近畿の影響を受けた土器



写真-17 山陰や近畿の影響を受けた土器



写真-18 近畿の影響を受けた器台

きだい  
器台にも大きな変化が現れます。この北の崎遺跡において弥生時代の器台というと、大きな筒型をした器台でしたが、古墳時代になると小型化し、大きな甕や壺はのせることができないサイズになります（写真-18）。「マツリ（どのようなマツリであったかは不明）」に使用されていたのではないかと考えています。他にも「マツリ」に使用されていたのではないかと考えられるのが、小型の丸底土器（写真-19）です。小型の壺や鉢で、底が丸くなっているため実用的なものとは思えません。器台にのせ使用したのでしょうか。



写真-19 底が丸くなった小さめの壺

### 【石器 ～石製品の衰退～】

古墳時代の初めのころでは、石の製品が非常に少なくなります。この時代になると、石から鉄の製品に代わっていきます。ところが、この北の崎遺跡では鉄の製品はあまり多くは出土していませんが、ここ北の崎遺跡でもおそらく鉄の製品に代わっていったものと考えられます。当時、鉄は非常に貴重であったため簡単に捨てるようなことはせず、使えるものであれば研ぎなおしたりして、再利用していたものと思われる。今回の発掘調査では、たまたま発見できなかったのではないのでしょうか。また、たて穴住居からは、使いこんだといし砥石が発見されていますから、鉄でできたこがたな小刀などを研いでいたことが予想されます。

### (5) 奈良時代から鎌倉時代にかけての人々の生活

北の崎遺跡では、古墳時代の終りごろ、いったんすいたい衰退しますが、奈良時代になると再び人々がこの地に帰ってきて生活を始めるようになります。奈良時代から平安時代にかけての住居の跡や鎌倉時代の初めのころに造られた溝（写真-20）などが発見されています。奈良時代になると、中央集権国家のしくみが、しだいに整えられ奈良にへいじょうきょう平城京がおかれました。また文化的にはぶつぎょうぶんか仏教文化がさかんになった時期です。仏教とともに漢字も使うようになったのもこの時期です。8世紀の中ごろになると、世の中が乱れ、がいてき外敵やさいなん災難をしず仏教の力で鎮めて国を守るため、国ごとにこくぶんじ国分寺やこくぶんじ国分尼寺を建立しました。仏教は、熊本県内に国家の保護・支配のもと郡寺やかんじ官寺などを多く建てさせました。その一つにたまなぐんぎよくとうまち玉名郡玉東町にいなさはいじ稲佐廃寺があります。この北の



写真-20 平坦地区で見られる大きい溝



写真-21 丸い形をした硯すずり



崎遺跡から木葉川<sup>このはがわ</sup>をはさんで、500 mほどしか離れていません。北の崎遺跡からは、墨<sup>すみ</sup>で字が書かれた土器や円形の硯<sup>すずり えんめんけん</sup>（円面硯）（写真-21）などが発見されています。当時、字を書けた人といえば、役所<sup>やくしょ</sup>に勤めている役人<sup>やくにん</sup>かお寺<sup>ぼう</sup>のお坊さんでしたから、そういう意味からも、この北の崎という土地の近くには、お寺関係の人々が住んでいたことが考えられます。

さて、今回の発掘調査では、7軒のたて穴住居、16個の土坑<sup>どこう</sup>及び8本の溝が発見されました。奈良時代のたて穴住居は、きれいな四角形の穴を掘って上に屋根を取り付けていました。4本の柱で屋根を支えるタイプのももありましたが、柱を埋め込む穴<sup>うみこむあな</sup>を設けないものもありました。直接柱を置いたのかもしれませんが。また古墳時代のたて穴住居と全く違う設備がつけられていました。それは、「かまど」（図-9）

です。「かまど」は、家のまわりの壁付近に取り付けてありました。「かまど」自体は壊れてなくなりましたが、「かまど」の周りを固めた土や煮炊き用の土器を下から支えた石<sup>しきやく</sup>（支脚）や赤くなった焼けた土が出てきました（写真-22）。家の中からは、煮炊き用の「かめ」や食器のお椀<sup>わん</sup>や皿といった生活用品が発見され、破片が多かったのですが、当時の人の生活がうかがえます。中には、油に火をつけることで付着した「すす」がついた皿やお椀がたくさん発見された住居もありました。

### 【さらに進化した日用品 ～須恵器<sup>すえき</sup>の登場～】

奈良時代になると、古墳時代と異なった土器が登場します。それが須恵器<sup>すえき</sup>です。古墳時代の後半に、朝鮮半島から伝わった窯<sup>かま</sup>（かま）とロクロの技術を使って作られました。須恵器は窯<sup>かま</sup>をつかった焼き物で、色が灰色で土器自体固く水もれが少ないという特徴があります（写真-23）。古墳時代までの土師器<sup>はじき</sup>は屋外で焼いていて、せいぜい500～900℃までしか温度が上がらなかったもの

が、窯<sup>かま</sup>を使うことで1200℃まで温度を上げることができるようになり、固く水もれの少ない土器をつくりあげることができるようになりました。この北の崎遺跡からも、須恵器がたて穴住居などの遺構<sup>いこう</sup>から発見されています。ただし、須恵器は、どこでも生産されていたわけではなく、窯<sup>かま</sup>の場所が限定されていて、そこには専門の職人たちがいたのです。

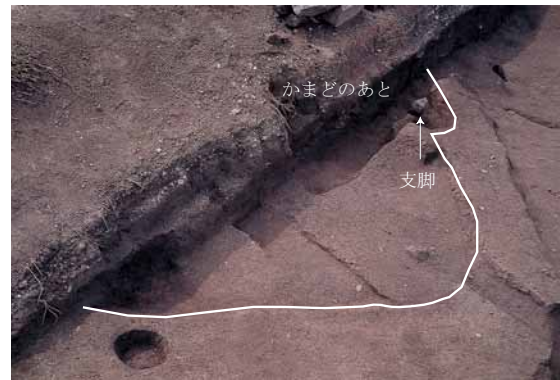


写真-22 平安時代のたて穴住居あと

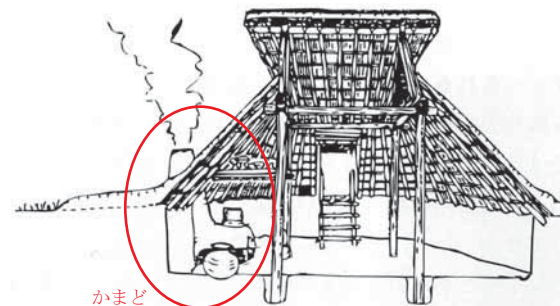


図-9 たて穴住居のかまど



写真-23 須恵器の器や蓋

今回発見された土器は、住居から須恵器だけでなく、古墳時代からみられる土師器とともに発見されています。溝からは、土師器の内側を黒くいぶした土器（こくしよくどき黒色土器）（写真-24）、焼くときの最終段階で炭を表面に吸着させた灰色をしている土器（がきしつどき瓦器質土器）なども発見されています。特に、しつちく湿地区からは、お椀の底に字が書かれている土器も発見されていて、「菌」（写真-25）と書かれていました。奈良・平安時代に建てられた国分尼寺や郡寺では、自分たちが食べたりする野菜、果物、薬草などを栽培する畑を「えんいん菌院」と呼んでいました。菌院があった遺跡から「菌」という文字が入った土器が全国で見つかります。そこで北の崎遺跡内か周辺部のどこかで、お寺内で消費する野菜・果物・薬草・とうみょうあぶら灯明油用の菜種などを栽培する畑が近くにあったのではないかと考えています。北の崎遺跡の近くに郡寺である稲佐廃寺跡があるのはたいへん興味深いところです。この湿地区の奈良時代から鎌倉時代の地層から、アブラナ科の花粉が見つっています。他の層では見つからないのにこの層で見つかるということは、アブラナの栽培がこの時期に始まった可能性を見出す1つの証拠になるのかもしれませんが。この層になると爆発的にイネの花粉も増えています。稲作が本格的になった時期であることも示しています。土器は、煮炊き用の「かめ」や食器類のわんお椀やふたなどの日用品が中心でした。



写真-24 黒色土器



写真-25 文字が書かれている土器

住居からは、土師器のお椀や皿に「すす」が付着したものが多量に発見されました（写真-26）。この建物は、灯明油をつくる作業場であったのかもしれない。



写真-26 火をともしたと思われる皿

また、溝からは、かつせき滑石という石で作られた鍋（いしなべ石鍋）（写真-27）や布目の模様がついた瓦（写真-28）が発見されました。石鍋は、煮炊き用の調理具で、表面にススがべったりとついていま



写真-27 いしなべ 石鍋の一部



写真-28 奈良・平安時代の瓦（凹面）かわら

した。滑石という石は、<sup>ながさきけんにしそのぎはんとう</sup>長崎県西彼杵半島で採れる石で、加工しやすく保温性にすぐれていることから、鍋として平安時代末期から使用されました。また、溝から発見された瓦は、<sup>ぬのめがわら</sup>布目瓦といって、瓦のへこんだ面に布の目が入っているもので、奈良・平安時代につくられました。これは、木の型から粘土をはがしやすくするため、木の型との間に布をはさんだためについた模様です。この瓦からも、瓦ぶきのお寺の存在を考えさせられます。

このように、食器や調理具がますます進化していつている一方で、石でできた製品は<sup>といし</sup>砥石や鍋を除いてはほとんど使用されなくなりました。現代と同じように発展していくものもあれば、このように<sup>すいたい</sup>衰退していくものもあるのです。

#### 4. おわりに

今回、北の崎遺跡ダイジェスト版では、遺跡で見つかった<sup>いこう</sup>遺構（建物跡）や<sup>いぶつ</sup>遺物（使用したもの）を玉名地方の当時の情勢とともに時代を追って紹介してきました。このように、人類は、時代ごとに<sup>はんえい</sup>繁栄と<sup>すいたい</sup>衰退をくり返しながら、器具や道具をどんどん使いやすく便利なものへと発展させてきました。現在、我々が使用しているものも、このように昔の人々の知恵がたくさんつまった<sup>ちえぶくろ</sup>知恵袋のようなものなのです。人類の過去の歴史を解明していくためにも、発掘調査は必要なものであり、発見したもののやわかったことは未来の人々に受け継がなければならないものなのです。この報告書も、未来の人々に過去の事実を伝える一助となれば幸いです。

文化課で使用しているキャラクターは、  
この遺跡のかめ棺がモデルになったんだよ



## 序 文

熊本県教育委員会では、平成15年1月から平成16年11月まで、熊本県土木部河川課が計画した木葉川災害復旧等関連緊急事業にともない、玉名市大字安楽寺字舟島に所在する釧拔遺跡と玉名市大字安楽寺字田崎に所在する北の崎遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、釧拔遺跡ではこの地域を反映した遺物が発見され、北の崎遺跡では縄文時代から平安時代まで断続的に集落が営まれていた様子が確認できました。特に、縄文晩期、弥生時代中期、古墳時代前期、奈良・平安時代の竪穴住居跡が確認され、当時の生活様式等をうかがい知る貴重な資料が数多く発見されました。各時代の情勢の変化とともに生きてきた人々の暮らしぶりを理解する上で貴重な資料になるものと思われまます。

この報告書が県民の皆様をはじめ多くの方々に活用され、文化財に関する関心と理解を深めていただき、学校教育における郷土の歴史理解の一助となれば、喜びに堪えません。

最後に、発掘調査を実施するにあたり、ご協力をいただいた熊本県土木部河川課ならびに貴重なご指導ご助言を頂いた諸先生方に対して厚く御礼申し上げます。

平成23年3月31日

熊本県教育長 山本隆生



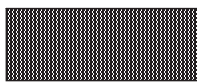
## 例 言

- 1 本書は、木葉川河川災害復旧等関連緊急事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、熊本県土木部の依頼を受けて平成15年5月から平成16年11月まで熊本県教育委員会が実施した。
- 3 現地調査は、平成15年度は馬場正弘・後藤貴美子・鶴崎裕子が担当し、平成16年度は馬場が担当した。
- 4 現地での図面作成及び写真撮影は、平成15年度は、馬場・後藤・鶴崎・河原京子・本多麻紀が分担し、平成16年度は、馬場・中尾健照・内田成香・松野直子が分担して行った。図面作成の一部は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 5 国土座標軸による測量基準杭の設定は、有限会社坂井設計コンサルタント及び株式会社有明測量開発社に委託した。
- 6 自然科学分析は、応用地質株式会社及びパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 7 空中写真撮影は、九州航空株式会社及び有限会社スカイサーバイ九州に委託した。
- 8 図版の製図は、坂田美智子が統括し、西口（松野）直子・草野千鶴子・石堂敬介・大森紘・藤崎正人が補佐した。
- 9 報告書作成業務は、平成18年度から20年度まで実施した。出土遺物の整理作業は坂田が担当し、遺物実測は坂田・桂木美美・井島秀子・島川千秋・金子美代子・府内博子・草野・藤崎・石堂が行い、遺物製図は、坂田・桂木・井島・島川・草野・金子が行った。本遺跡では、遺物の出土量が莫大であったため、土器の実測図作成及び製図の一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託し、石器の実測図作成及び製図を東海アナース株式会社・株式会社九州文化財研究所・株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。木器の実測図作成及び製図は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム熊本支店に委託した。
- 10 出土遺物の写真撮影は、村田百合子・馬場が行い、平岡浩晃・福浦晶子・坂田・橋口冬美・藤崎が補佐した。出土遺物写真図版は、馬場監修のもと村田が作成した。
- 11 木製品の保存処理は、株式会社吉田生物研究所が行い、木製品の樹種同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社吉田生物研究所が行った。
- 12 鉄製品の保存処理は、谷川亜紀子・今田里枝・大塚トシ子・平川早苗が行った。
- 13 本書の執筆を馬場が行い、編集は坂田・馬場が行った。
- 14 発掘調査・報告書作成にあたっては、業務の迅速化、情報の共有化、普及資料の作成を試みた。
  - ①遺構実測業務の迅速化……トータルステーションによる電子図化を行った。電子図化のソフトウェアには遺構実測支援ソフト「遺構くん」(CUBIC社)を使用した。
  - ②情報の共有化……ボーリングコア試料の微化石分析を試み玉名平野の環境変遷を調査し、各時代の玉名平野の土地活用の参考にしてもらう基礎資料の作成を行った。
  - ③普及資料作成……報告書の巻頭においてダイジェスト版を配置し、児童・生徒向けに調査の概要を付した。
- 15 遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室（熊本市城南町沈目1667）に保管されている。
- 16 遺跡の復元絵画では、考証を馬場が担当し、イラストを稲葉洋一が担当した。

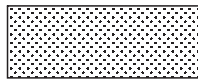


## 凡 例

- 1 本書で使用している方位は、真北を示す。
- 2 本書に掲載した実測図の縮尺は、住居跡が80分の1を基本とするが、遺構の大きさ次第では変倍しており、縮尺については各頁に明記した。
- 3 出土遺物の縮尺は、土器類は3分の1を基本とし、小型品及び大型品は不統一であり遺物ごとに縮尺表示した。石器類及び鉄器類は2分の1を基本とし、小型品は原寸である。
- 4 遺構内より一括して出土している遺物の位置を示した遺物出土状況図は、重要度に応じて遺物番号と縮小した遺物の図面を付している。なお、現地の調査で遺物出土状況図を作成できなかったものや破片が多いものについては、出土地点をドットで示している。
- 5 出土遺物の種別・出土位置・法量等は、出土遺物観察表で掲載した。
- 6 須恵器については、断面を黒で塗色し、その他のものは白抜きにした。
- 7 土器器甕および鉢の内面の調整で、ヘラ削りは矢印で方向を示した。また、刷毛目の方向は、終点方向をかすれ線によって示した。
- 8 土層及び土器の色調は、農林水産省水産技術会議事務局 監修「新版 標準土色帖」（日本色研事業株式会社；1997）に準拠した。これに依ることができない色調については「中国の伝統色（第2版）」（大日本インキ化学）により記載している。
- 9 遺構図におけるパターンの表記法は、以下のとおりである。



焼土範囲



硬化面範囲

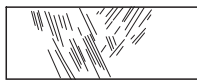


地山

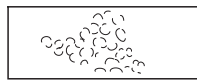


炭化物範囲

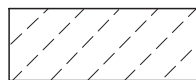
- 10 石器実測図におけるパターンの表記法は、以下の通りである。



擦痕



敲打痕



節理面



自然面



磨り面

- 11 出土遺物の計測部位は、図-10に示した模式図に準じる。

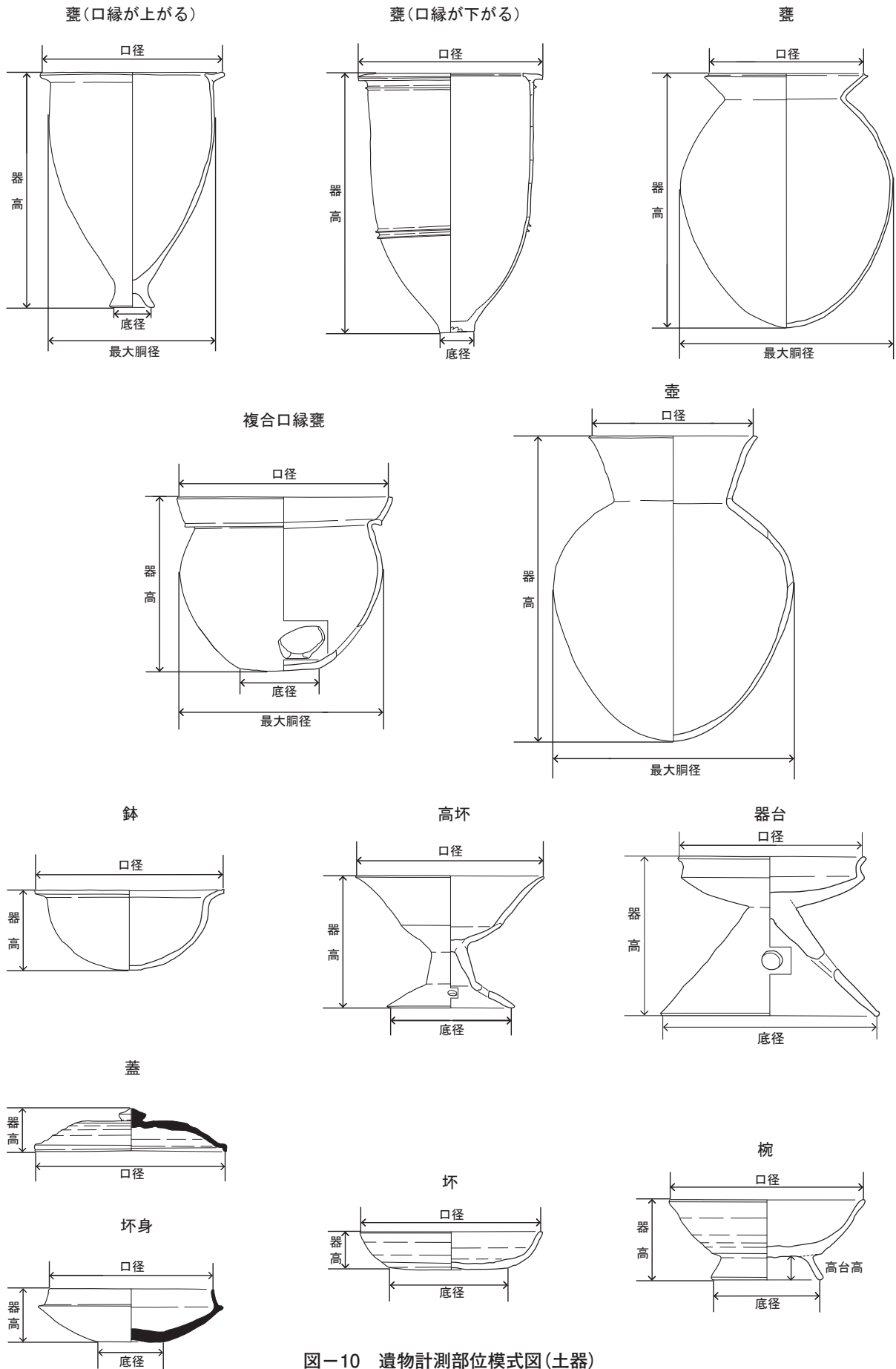


図-10 遺物計測部位模式図(土器)

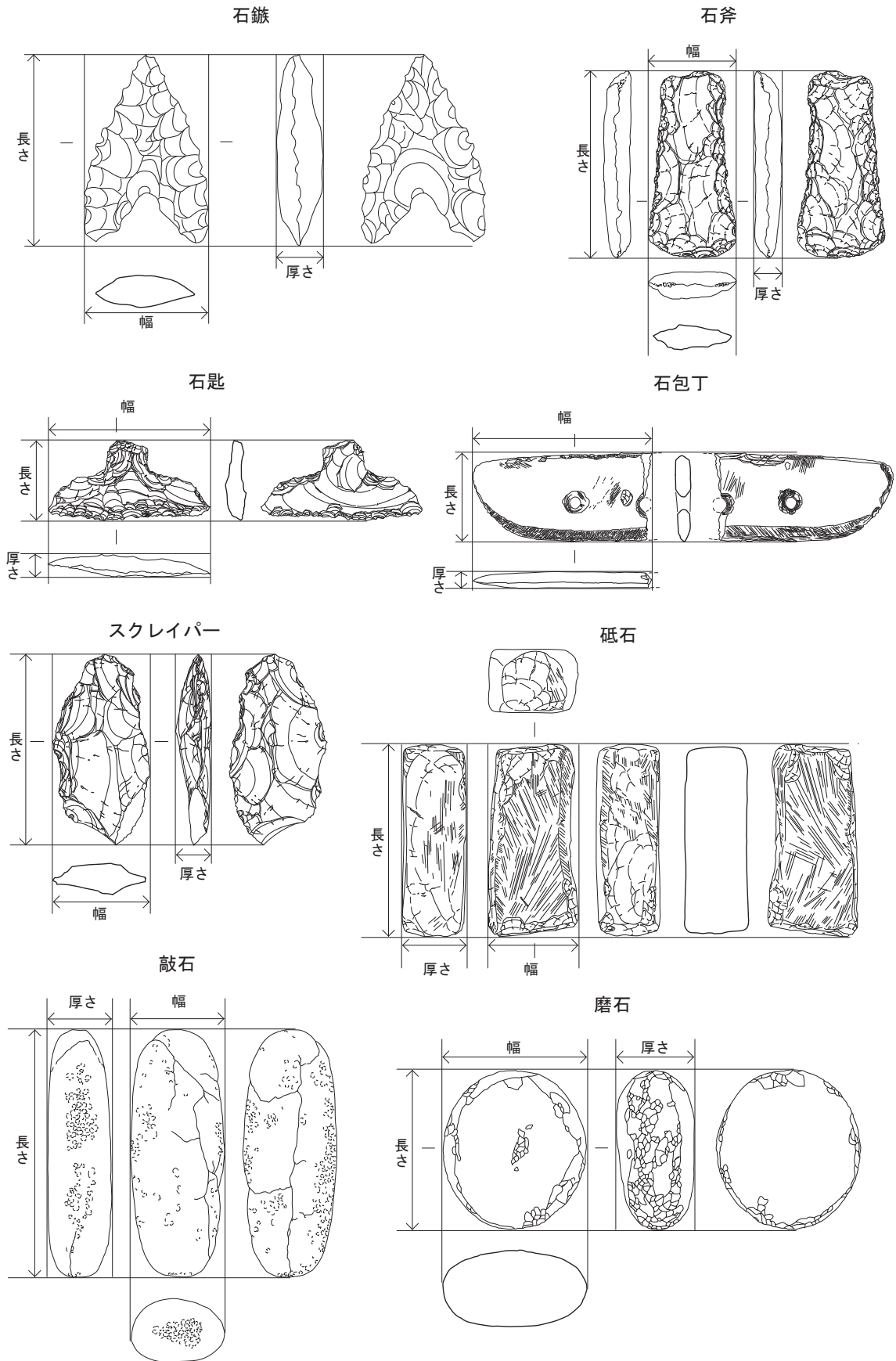


図-10 遺物計測部位模式図(石器)

## 本文目次

### 第一分冊

#### 北の崎遺跡

口絵	
北の崎遺跡発掘調査の概要（ダイジェスト版）	
序文	
例言・凡例	
本文目次	
挿図目次	
表目次	
写真図版目次	
第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査組織	1
第2節 調査の経過	3
第Ⅱ章 遺跡の概要	
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	14
第Ⅲ章 調査成果	
第1節 調査について	23
第2節 北の崎遺跡の地質及び基本土層	
1 北の崎遺跡の地質及び古環境	26
2 北の崎遺跡基本土層	28
第3節 遺構及び遺物	
1 平坦地区	
(1) 縄文時代	31
(2) 弥生時代	43
(3) 古墳時代	175
(4) 古代・中世	248
(5) 三池往還	300
(6) 平坦地区の遺物包含層から出土した遺物	302
2 湿地区	
(1) 湿地区の遺構	366
(2) 湿地区の遺物包含層から出土した遺物	369

### 第二分冊

第Ⅳ章 理化学分析	
1 北の崎遺跡における古環境調査について	379
2 玉名平野における古環境関連調査について	399
3 北の崎遺跡における甕棺内の炭化物による放射性炭素年代測定	406
4 北の崎遺跡及び釧拔遺跡における木製品の樹種同定	408
5 北の崎遺跡出土勾玉類の石材同定	416
第Ⅴ章 総括	419
北の崎遺跡遺物観察表	461

#### 釧拔遺跡

第Ⅰ章 調査の概要	
第1節 調査組織	530
第2節 調査の経過	532
第Ⅱ章 遺跡の概要	532
第Ⅲ章 調査成果	
第1節 調査地について	533
第2節 調査の方法	533
第3節 釧拔遺跡基本土層	535
第4節 遺構及び遺物	536
第Ⅳ章 理化学分析	
釧拔遺跡出土木製品の樹種調査	551
釧拔遺跡遺物観察表	555
写真図版	561
附論	
1 生見の「六地藏」及び「大永の卍板碑」	659
2 北の崎遺跡より出土した戦争関連遺物について	667
3 熊本県内の平野部における縄文海進・海退について	674
報告書抄録	696
参考文献	698

## 挿図目次

図-1	縄文時代の玉名平野のようす……………巻頭	図-34	1号埋鉢平面図及び断面図……………41
図-2	弥生時代の玉名平野のようす……………巻頭	図-35	1号埋鉢出土遺物実測図……………41
図-3	奈良時代や平安時代の玉名平野のようす……………巻頭	図-36	2号埋鉢平面図及び断面図……………42
図-4	出土物から想像した8号住居のようす……………巻頭	図-37	2号埋鉢出土遺物実測図……………42
図-5	弥生時代のたて穴住居と倉庫……………巻頭	図-38	北の崎遺跡平坦地区遺構重複関係図…43
図-6	弥生時代のムラのようす……………巻頭	図-39	2号住居平面図及び断面図……………44
図-7	埋葬のようす……………巻頭	図-40	平坦地区弥生時代遺構配置図…45-46
図-8	ベッドがある住居……………巻頭	図-41	2号住居出土遺物実測図 1……………47
図-9	たて穴住居のかまど……………巻頭	図-42	2号住居出土遺物実測図 2……………48
図-10	遺物計測部位模式図……………巻頭	図-43	2号住居出土遺物実測図 3……………49
図-11	北の崎遺跡及び鈕拔遺跡周辺の地質図……………8	図-44	2号住居出土遺物実測図 4……………50
図-12	菊池川および木葉川の旧河道……………10	図-45	2号住居出土遺物実測図 5……………51
図-13	玉名平野における基盤水準……………11	図-46	3号住居平面図及び断面図……………52
図-14	肥後国中之絵図……………12	図-47	3号住居出土遺物実測図 1……………53
図-15	大日本帝国陸地測量部発行地形図……………13	図-48	3号住居出土遺物実測図 2……………54
図-16	北の崎遺跡周辺遺跡分布図……………21	図-49	4号住居平面図及び断面図……………55
図-17	玉名郡村図……………22	図-50	4号住居出土遺物実測図 1……………56
図-18	北の崎遺跡発掘調査位置図……………23	図-51	4号住居出土遺物実測図 2……………57
図-19	北の崎遺跡調査区及びグリッド設定図……………24	図-52	5号住居平面図及び断面図……………58
図-20	北の崎遺跡湿地区総合柱状図及び古環境変遷……………27	図-53	5号住居出土遺物実測図……………58
図-21	北の崎遺跡平坦地区基本土層図……………29	図-54	6号住居平面図及び断面図……………59
図-22	北の崎遺跡湿地区基本土層図……………30	図-55	6号住居出土遺物実測図 1……………60
図-23	1号住居平面図及び断面図……………32	図-56	6号住居出土遺物実測図 2……………61
図-24	平坦地区縄文時代遺構配置図……………33-34	図-57	6号住居出土遺物実測図 3……………62
図-25	1号住居出土遺物実測図 1……………35	図-58	7号住居平面図及び断面図……………63
図-26	1号住居出土遺物実測図 2……………36	図-59	7号住居出土遺物実測図 1……………64
図-27	1号住居出土遺物実測図 3……………37	図-60	7号住居出土遺物実測図 2……………65
図-28	1号土坑平面図及び断面図……………37	図-61	8号住居平面図及び断面図……………66
図-29	1号土坑出土遺物実測図……………38	図-62	8号住居遺物出土状況図……………67
図-30	2号土坑平面図及び断面図……………39	図-63	8号住居出土遺物実測図 1……………68
図-31	2号土坑出土遺物実測図……………39	図-64	8号住居出土遺物実測図 2……………69
図-32	3号土坑平面図及び断面図……………39	図-65	8号住居出土遺物実測図 3……………70
図-33	3号土坑出土遺物実測図……………40	図-66	8号住居出土遺物実測図 4……………71
		図-67	8号住居出土遺物実測図 5……………72
		図-68	8号住居出土遺物実測図 6……………73
		図-69	8号住居出土遺物実測図 7……………74
		図-70	8号住居出土遺物実測図 8……………75
		図-71	9号住居平面図及び断面図……………76

図-72	9号住居出土遺物実測図……………76	図-112	10号土坑平面図及び断面図……………105
図-73	10号住居平面図及び断面図……………77	図-113	10号土坑出土遺物実測図……………105
図-74	10号住居出土遺物実測図……………78	図-114	11号土坑平面図及び断面図……………105
図-75	11号住居平面図及び断面図……………79	図-115	12号土坑平面図及び断面図……………106
図-76	11号住居出土遺物実測図 1……………80	図-116	12号土坑出土遺物実測図……………106
図-77	11号住居出土遺物実測図 2……………81	図-117	13号土坑平面図及び断面図……………106
図-78	11号住居出土遺物実測図 3……………82	図-118	14号土坑平面図及び断面図……………107
図-79	11号住居出土遺物実測図 4……………83	図-119	15号土坑平面図及び断面図……………108
図-80	12号住居平面図及び断面図……………84	図-120	16号土坑平面図及び断面図……………108
図-81	12号住居出土遺物実測図……………84	図-121	16号土坑出土遺物実測図……………108
図-82	13号住居平面図及び断面図……………85	図-122	17号土坑平面図及び断面図……………109
図-83	13号住居出土遺物実測図……………86	図-123	17号土坑出土遺物実測図……………110
図-84	14号住居平面図及び断面図……………86	図-124	18号土坑平面図及び断面図……………110
図-85	14号住居出土遺物実測図 1……………87	図-125	18号土坑出土遺物実測図……………111
図-86	14号住居出土遺物実測図 2……………88	図-126	19号土坑平面図及び断面図……………111
図-87	15号住居平面図及び断面図……………89	図-127	19号土坑出土遺物実測図……………111
図-88	15号住居出土遺物実測図……………90	図-128	20号土坑平面図及び断面図……………112
図-89	16号住居平面図及び断面図……………91	図-129	21号土坑平面図及び断面図……………112
図-90	16号住居出土遺物実測図……………92	図-130	21号土坑出土遺物実測図……………112
図-91	17号住居平面図及び断面図……………93	図-131	22号土坑平面図及び断面図……………113
図-92	17号住居出土遺物実測図……………94	図-132	22号土坑出土遺物実測図……………113
図-93	18・19号住居平面図及び断面図……………95	図-133	23号土坑平面図及び断面図……………113
図-94	18号住居出土遺物実測図……………96	図-134	23号土坑出土遺物実測図……………114
図-95	19号住居出土遺物実測図……………96	図-135	24・25号土坑平面図及び断面図……………114
図-96	20・22号住居平面図及び断面図……………97	図-136	26号土坑平面図及び断面図……………114
図-97	20号住居出土遺物実測図……………98	図-137	27号土坑平面図及び断面図……………115
図-98	22号住居出土遺物実測図……………98	図-138	27号土坑出土遺物実測図……………115
図-99	21号住居平面図及び断面図……………99	図-139	28号土坑平面図及び断面図……………116
図-100	21号住居出土遺物実測図……………99	図-140	28号土坑出土遺物実測図……………116
図-101	1号堀立柱建物平面図及び断面図……………100	図-141	29号土坑平面図及び断面図……………117
図-102	4号土坑平面図及び断面図……………101	図-142	29号土坑出土遺物実測図……………117
図-103	4号土坑出土遺物実測図……………101	図-143	30号土坑平面図及び断面図……………118
図-104	5号土坑平面図及び断面図……………101	図-144	31号土坑平面図及び断面図……………118
図-105	5号土坑出土遺物実測図……………102	図-145	31号土坑出土遺物実測図……………118
図-106	6号土坑平面図及び断面図……………102	図-146	32号土坑平面図及び断面図……………119
図-107	6号土坑出土遺物実測図……………102	図-147	32号土坑出土遺物実測図……………119
図-108	7号土坑平面図及び断面図……………103	図-148	33号土坑平面図及び断面図……………120
図-109	8号土坑平面図及び断面図……………103	図-149	33号土坑出土遺物実測図……………120
図-110	8号土坑出土遺物実測図……………104	図-150	34号土坑平面図及び断面図……………120
図-111	9号土坑平面図及び断面図……………104	図-151	34号土坑出土遺物実測図……………120



図-152	35号土坑平面図及び断面図	121	図-192	2号溝出土遺物実測図	138
図-153	35号土坑出土遺物実測図	121	図-193	3号溝平面図及び断面図	139
図-154	36号土坑平面図及び断面図	121	図-194	3号溝出土遺物実測図 1	140
図-155	36号土坑出土遺物実測図	122	図-195	3号溝出土遺物実測図 2	141
図-156	37・56号土坑平面図及び断面図	122	図-196	4号溝平面図及び断面図	142
図-157	38号土坑平面図及び断面図	122	図-197	4号溝出土遺物実測図	143
図-158	38号土坑出土遺物実測図	123	図-198	1号甕棺墓平面図及び断面図	144
図-159	39号土坑平面図及び断面図	124	図-199	1号甕棺墓出土遺物実測図	145
図-160	40号土坑平面図及び断面図	124	図-200	2号甕棺墓平面図及び断面図	146
図-161	41号土坑平面図及び断面図	124	図-201	2号甕棺墓出土遺物実測図	147
図-162	42号土坑平面図及び断面図	125	図-202	3号甕棺墓平面図及び断面図	148
図-163	42号土坑出土遺物実測図	126	図-203	3号甕棺墓出土遺物実測図	149
図-164	43号土坑平面図及び断面図	126	図-204	4号甕棺墓平面図及び断面図	150
図-165	43号土坑出土遺物実測図	126	図-205	4号甕棺墓出土遺物実測図	151
図-166	44号土坑平面図及び断面図	127	図-206	5号甕棺墓平面図及び断面図	152
図-167	44号土坑出土遺物実測図	127	図-207	5号甕棺墓出土遺物実測図	153
図-168	45・51号土坑平面図及び断面図	127	図-208	6号甕棺墓平面図及び断面図	154
図-169	45号土坑出土遺物実測図	127	図-209	6号甕棺墓出土遺物実測図	155
図-170	46号土坑平面図及び断面図	128	図-210	7号甕棺墓平面図及び断面図	156
図-171	46号土坑出土遺物実測図	128	図-211	7号甕棺墓出土遺物実測図	157
図-172	47・48号土坑平面図及び断面図	129	図-212	8号甕棺墓平面図及び断面図	158
図-173	47号土坑出土遺物実測図	129	図-213	8号甕棺墓出土遺物実測図	159
図-174	49号土坑平面図及び断面図	130	図-214	9号甕棺墓平面図及び断面図	160
図-175	50号土坑平面図及び断面図	130	図-215	9号甕棺墓出土遺物実測図	161
図-176	50号土坑出土遺物実測図	131	図-216	10号甕棺墓平面図及び断面図	162
図-177	52号土坑平面図及び断面図	132	図-217	10号甕棺墓出土遺物実測図	163
図-178	53号土坑平面図及び断面図	133	図-218	11号甕棺墓平面図及び断面図	164
図-179	54号土坑平面図及び断面図	133	図-219	11号甕棺墓出土遺物実測図	165
図-180	55号土坑平面図及び断面図	133	図-220	12号甕棺墓平面図及び断面図	166
図-181	57号土坑平面図及び断面図	134	図-221	12号甕棺墓出土遺物実測図	167
図-182	58号土坑平面図及び断面図	134	図-222	13号甕棺墓平面図及び断面図	168
図-183	59号土坑平面図及び断面図	134	図-223	13号甕棺墓出土遺物実測図	169
図-184	60号土坑平面図及び断面図	135	図-224	14号甕棺墓平面図及び断面図	170
図-185	61号土坑平面図及び断面図	135	図-225	14号甕棺墓出土遺物実測図 1	171
図-186	62号土坑平面図及び断面図	135	図-226	14号甕棺墓出土遺物実測図 2	172
図-187	63号土坑平面図及び断面図	136	図-227	平坦地区古墳時代遺構配置図	173-174
図-188	64号土坑平面図及び断面図	136	図-228	23号住居平面図及び断面図	176
図-189	1号溝平面図及び断面図	137	図-229	23号住居遺物出土状況図	177
図-190	1号溝出土遺物実測図	137	図-230	23号住居出土遺物実測図 1	178
図-191	2号溝平面図及び断面図	138	図-231	23号住居出土遺物実測図 2	179

図-232	23号住居出土遺物実測図 3	180	図-272	37号住居平面図及び断面図	219
図-233	23号住居出土遺物実測図 4	181	図-273	37号住居出土遺物実測図	220
図-234	23号住居出土遺物実測図 5	182	図-274	38号住居平面図及び断面図	221
図-235	24号住居平面図及び断面図	183	図-275	38号住居出土遺物実測図	222
図-236	24号住居出土遺物実測図	183	図-276	39号住居平面図及び断面図	223
図-237	25号住居平面図及び断面図	184	図-277	39号住居出土遺物実測図	224
図-238	25号住居出土遺物実測図 1	185	図-278	40号住居平面図及び断面図	225
図-239	25号住居出土遺物実測図 2	186	図-279	40号住居出土遺物実測図	225
図-240	26号住居平面図及び断面図	187	図-280	41号住居平面図及び断面図	226
図-241	26号住居出土遺物実測図 1	189	図-281	41号住居出土遺物実測図	227
図-242	26号住居出土遺物実測図 2	190	図-282	42号住居平面図及び断面図	228
図-243	27号住居平面図及び断面図	191	図-283	42号住居出土遺物実測図	228
図-244	27号住居出土遺物実測図 1	192	図-284	43号住居平面図及び断面図	229
図-245	27号住居出土遺物実測図 2	193	図-285	43号住居出土遺物実測図	229
図-246	27号住居出土遺物実測図 3	194	図-286	65号土坑平面図及び断面図	230
図-247	28号住居平面図及び断面図	195	図-287	65号土坑出土遺物実測図	230
図-248	28号住居出土遺物実測図	195	図-288	66号土坑平面図及び断面図	231
図-249	29号住居平面図及び断面図	196	図-289	66号土坑出土遺物実測図	231
図-250	29号住居出土遺物実測図	197	図-290	67号土坑平面図及び断面図	232
図-251	30号住居平面図及び断面図	199	図-291	67号土坑出土遺物実測図 1	233
図-252	30号住居出土遺物実測図	200	図-292	67号土坑出土遺物実測図 2	234
図-253	31号住居平面図及び断面図	201	図-293	67号土坑出土遺物実測図 3	235
図-254	31号住居出土遺物実測図	202	図-294	67号土坑出土遺物実測図 4	236
図-255	32号住居平面図及び断面図	202	図-295	67号土坑出土遺物実測図 5	237
図-256	32号住居出土遺物実測図 1	203	図-296	67号土坑出土遺物実測図 6	238
図-257	32号住居出土遺物実測図 2	204	図-297	67号土坑出土遺物実測図 7	239
図-258	32号住居出土遺物実測図 3	205	図-298	68号土坑平面図及び断面図	240
図-259	33号住居平面図及び断面図	206	図-299	68号土坑出土遺物実測図 1	241
図-260	33号住居出土遺物実測図 1	207	図-300	68号土坑出土遺物実測図 2	242
図-261	33号住居出土遺物実測図 2	208	図-301	68号土坑出土遺物実測図 3	243
図-262	33号住居出土遺物実測図 3	209	図-302	69号土坑平面図及び断面図	244
図-263	34号住居平面図及び断面図	210	図-303	69号土坑出土遺物実測図	244
図-264	34号住居出土遺物実測図 1	212	図-304	70号土坑平面図及び断面図	244
図-265	34号住居出土遺物実測図 2	213	図-305	70号土坑出土遺物実測図	244
図-266	35号住居平面図及び断面図	214	図-306	71号土坑平面図及び断面図	245
図-267	35号住居出土遺物実測図 1	215	図-307	5号溝平面図及び断面図	246
図-268	35号住居出土遺物実測図 2	216	図-308	5号溝出土遺物実測図	247
図-269	35号住居出土遺物実測図 3	217	図-309	平坦地区古代から中世の遺構配置図	249-250
図-270	36号住居平面図及び断面図	218	図-310	44号住居平面図及び断面図	251
図-271	36号住居出土遺物実測図	218			



図-311	4 4号住居遺物出土状況図……………251	図-351	8 3号土坑出土遺物実測図……………276
図-312	4 4号住居出土遺物実測図 1……………252	図-352	8 4号土坑平面図及び断面図……………276
図-313	4 4号住居出土遺物実測図 2……………253	図-353	8 4号土坑出土遺物実測図……………276
図-314	4 5号住居平面図及び断面図……………254	図-354	8 5号土坑平面図及び断面図……………277
図-315	4 5号住居出土遺物実測図……………254	図-355	8 5号土坑出土遺物実測図……………277
図-316	4 6号住居平面図及び断面図……………255	図-356	8 6号土坑平面図及び断面図……………278
図-317	4 6号住居出土遺物実測図……………256	図-357	8 7号土坑平面図及び断面図……………279
図-318	4 7号住居平面図及び断面図……………257	図-358	8 7号土坑出土遺物実測図……………279
図-319	4 7号住居出土遺物実測図……………258	図-359	6号溝平面図及び断面図……………280
図-320	4 8号住居平面図及び断面図……………259	図-360	6号溝出土遺物実測図……………281
図-321	4 8号住居出土遺物実測図……………260	図-361	7号溝平面図及び断面図……………282
図-322	4 9号住居平面図及び断面図……………260	図-362	7号溝出土遺物実測図……………283
図-323	4 9号住居遺物出土状況図……………261	図-363	8・9号溝平面図及び断面図……………284
図-324	4 9号住居出土遺物実測図 1……………262	図-364	8号溝出土遺物実測図……………285
図-325	4 9号住居出土遺物実測図 2……………263	図-365	9号溝出土遺物実測図……………286
図-326	4 9号住居出土遺物実測図 3……………264	図-366	10号溝平面図及び断面図……………287
図-327	5 0号住居平面図及び断面図……………265	図-367	11号溝平面図及び断面図……………288
図-328	5 0号住居出土遺物実測図……………266	図-368	11号溝出土遺物実測図 1……………289
図-329	7 2号土坑平面図及び断面図……………267	図-369	11号溝出土遺物実測図 2……………290
図-330	7 2号土坑出土遺物実測図……………267	図-370	11号溝出土遺物実測図 3……………291
図-331	7 3号土坑平面図及び断面図……………268	図-371	11号溝出土遺物実測図 4……………292
図-332	7 3号土坑出土遺物実測図……………268	図-372	11号溝出土遺物実測図 5……………293
図-333	7 4号土坑平面図及び断面図……………268	図-373	11号溝出土遺物実測図 6……………294
図-334	7 4号土坑出土遺物実測図……………269	図-374	11号溝出土遺物実測図 7……………295
図-335	7 5号土坑平面図及び断面図……………269	図-375	11号溝出土遺物実測図 8……………296
図-336	7 5号土坑出土遺物実測図……………270	図-376	平坦地区古代遺構配置図……………298
図-337	7 6号土坑平面図及び断面図……………271	図-377	12号溝平面図及び断面図……………299
図-338	7 6号土坑出土遺物実測図……………271	図-378	13号溝平面図及び断面図……………300
図-339	7 7号土坑平面図及び断面図……………271	図-379	平坦地区近世以降の遺構配置図……………301
図-340	7 7号土坑出土遺物実測図……………272	図-380	平坦地区第3包含層(3層)出土遺物実測図 1……………303
図-341	7 8号土坑平面図及び断面図……………272	図-381	平坦地区第3包含層(3層)出土遺物実測図 2……………305
図-342	7 8号土坑出土遺物実測図……………272	図-382	平坦地区第3包含層(3層)出土遺物実測図 3……………306
図-343	7 9号土坑平面図及び断面図……………273	図-383	平坦地区第3包含層(3層)出土遺物実測図 4……………307
図-344	7 9号土坑出土遺物実測図……………273	図-384	平坦地区第3包含層(3層)出土遺物実測図 5……………308
図-345	8 0号土坑平面図及び断面図……………274	図-385	平坦地区第3包含層(3層)出土遺物実測図 6……………309
図-346	8 0号土坑出土遺物実測図……………274		
図-347	8 1号土坑平面図及び断面図……………275		
図-348	8 2号土坑平面図及び断面図……………275		
図-349	8 2号土坑出土遺物実測図……………275		
図-350	8 3号土坑平面図及び断面図……………276		

図-386	平坦地区第3包含層(3層)出土遺物実測図 7	310	図-406	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 20	330
図-387	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 1	311	図-407	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 21	331
図-388	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 2	312	図-408	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 22	332
図-389	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 3	313	図-409	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 23	333
図-390	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 4	314	図-410	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 24	334
図-391	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 5	315	図-411	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 25	335
図-392	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 6	316	図-412	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 26	336
図-393	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 7	317	図-413	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 27	337
図-394	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 8	318	図-414	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 28	338
図-395	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 9	319	図-415	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 29	339
図-396	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 10	320	図-416	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 30	340
図-397	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 11	321	図-417	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 31	341
図-398	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 12	322	図-418	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 32	342
図-399	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 13	323	図-419	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 33	343
図-400	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 14	324	図-420	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 34	344
図-401	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 15	325	図-421	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 35	345
図-402	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 16	326	図-422	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 36	346
図-403	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 17	327	図-423	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 37	347
図-404	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 18	328	図-424	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 38	348
図-405	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 19	329	図-425	平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 39	349

図-426	平坦地区第2包含層(2b層)出土 遺物実測図 40	350	図-448	湿地区第2包含層(3層)出土遺物 実測図 1	372
図-427	平坦地区第2包含層(2b層)出土 遺物実測図 41	351	図-449	湿地区第2包含層(3層)出土遺物 実測図 2	373
図-428	平坦地区第2包含層(2b層)出土 遺物実測図 42	352	図-450	湿地区第2包含層(3層)出土遺物 実測図 3	374
図-429	平坦地区第2包含層(2b層)出土 遺物実測図 43	353	図-451	湿地区第2包含層(3層)出土遺物 実測図 4	375
図-430	平坦地区第2包含層(2b層)出土 遺物実測図 44	354	図-452	湿地区第2包含層(3層)出土遺物 実測図 5	376
図-431	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 1	355	図-453	湿地区第2包含層(3層)出土遺物 実測図 6	377
図-432	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 2	356	図-454	湿地区第1包含層(2層)出土遺物 実測図	378
図-433	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 3	357	図-455	C/N比分布図	381
図-434	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 4	358	図-456	北の崎遺跡における花粉ダイアグラム .....	384
図-435	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 5	359	図-457	北の崎遺跡における植物珪酸体分析 結果.....	388
図-436	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 6	360	図-458	北の崎遺跡における主要珪藻ダイア グラム.....	393
図-437	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 7	361	図-459	北の崎遺跡における分析結果総合図	396
図-438	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 8	362	図-460	上小田宮の前遺跡における分析結果 総合図.....	400
図-439	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 9	363	図-461	北の崎遺跡から出土した勾玉類の蛍 光X線スペクトル.....	418
図-440	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 10	364	図-462	縄文後晩期の土器分類図(深鉢及び 皿形土器).....	423-424
図-441	平坦地区第1包含層(2a層)出土 遺物実測図 11	365	図-463	縄文後晩期の土器分類図(浅鉢).....	425-426
図-442	表土出土遺物実測図.....	366	図-464	弥生時代の遺構配置図.....	427
図-443	カクラン出土遺物実測図 1	367	図-465	弥生時代の竪穴住居形態分類図.....	428
図-444	カクラン出土遺物実測図 2	368	図-466	弥生時代の土器分類図①.....	430
図-445	1号杭列平面図及び断面図.....	368	図-467	弥生時代の土器分類図②.....	431
図-446	湿地区第3包含層(4層)出土遺物 実測図 1	370	図-468	弥生時代の土器分類図③.....	432
図-447	湿地区第3包含層(4層)出土遺物 実測図 2	371	図-469	弥生時代の土器分類図④.....	433
			図-470	古墳時代における竪穴住居の形態構 造図.....	436
			図-471	古墳時代の竪穴住居形態分類図.....	437
			図-472	古墳時代の土器分類図 甕①.....	439
			図-473	古墳時代の土器分類図 甕②.....	440



図-474	古墳時代の土器分類図 壺①	441	図-506	生見六地藏実測図	660
図-475	古墳時代の土器分類図 壺②	442	図-507	生見六地藏の腫身に刻まれた銘文の 拓本	661
図-476	古墳時代の土器分類図 高坏	443	図-508	生見六地藏龕部や中台の拓本①②	662
図-477	古墳時代の土器分類図 小形丸底壺 (鉢)	444	図-509	生見六地藏龕部や中台の拓本③④	663
図-478	古墳時代の土器分類図 器台	445	図-510	生見六地藏龕部や中台の拓本⑤⑥	664
図-479	古代須恵器の分類図	449-450	図-511	六地藏及び板碑に刻まれている銘文	665
図-480	灯明皿の油煙のつきかたによるタイ プ別分類	451	図-512	熊本県内の縄文時代の貝塚の分布	675
図-481	灯明皿分類タイプ別個体数	452	図-513	分析を行った地点の位置図	676
図-482	縄文後晩期における土器の胎土系統 別組成	455	図-514	玉名平野における縄文海進前の等高 線図	677
図-483	弥生時代中期後半期における土器の 胎土系統別組成	455	図-515	熊本平野における縄文海進前の等高 線図	678
図-484	古墳時代前期における土器の胎土系 統別組成	457	図-516	熊本平野におけるアカホヤ火山灰層 基底面の等高線図	678
図-485	古代における土師器の胎土系統別組 成	458	図-517	縄文海進時に見られる特徴的な地層 の変化	679
図-486	玉名平野における系統別粘土の分布 推定域	459	図-518	玉名市上小田における珪藻分析	681
図-487	鈎拔遺跡の位置図	531	図-519	玉名市安楽寺田崎における珪藻分析	682
図-488	鈎拔遺跡調査地の位置図	531	図-520	熊本市池上における珪藻分析	684
図-489	鈎拔遺跡グリッド設定図	534	図-521	熊本市九品寺における珪藻分析	685
図-490	鈎拔遺跡土層柱状図	535	図-522	玉名市上小田における縄文海進の状 況	687
図-491	遺物包含層(2層)出土遺物①	537	図-523	玉名市安楽寺田崎における縄文海進 の状況	687
図-492	遺物包含層(2層)出土遺物②	538	図-524	熊本市池上における縄文海進の状況	689
図-493	遺物包含層(2層)出土遺物③	539	図-525	熊本市九品寺における縄文海進の状 況	690
図-494	遺物包含層(2層)出土遺物④	540	図-526	縄文海進により海水の影響を受けた 層の層厚変化	691
図-495	遺物包含層(3a層)出土遺物①	541	図-527	縄文時代最高海面期における玉名平 野の海岸線推定線	693
図-496	遺物包含層(3a層)出土遺物②	542	図-528	縄文時代最高海面期における熊本平 野の海岸線推定線	694
図-497	遺物包含層(3a層)出土遺物③	543			
図-498	遺物包含層(3a層)出土遺物④	544			
図-499	遺物包含層(3a層)出土遺物⑤	545			
図-500	遺物包含層(3a層)出土遺物⑥	546			
図-501	遺物包含層(3a層)出土遺物⑦	547			
図-502	遺物包含層(3a層)出土遺物⑧	548			
図-503	遺物包含層(3a層)出土遺物⑨	549			
図-504	遺物包含層(3a層)出土遺物⑩	550			
図-505	表土から出土した遺物	550			

## 表目次

表-1	遺跡地名表……………	17
表-2	平坦地区遺物包含層から出土した 土器の個体数……………	302
表-3	湿地区遺物包含層から出土した土 器の個体数……………	369
表-4	放射性炭素年代測定結果……………	379
表-5	炭素及び窒素含有量、花粉分析、 植物珪酸体分析、珪藻分析用試料 採取箇所一覧……………	380
表-6	C/N比測定結果……………	381
表-7	花粉分析結果……………	383
表-8	植物珪酸体分析結果……………	386
表-9	珪藻分析結果……………	392
表-10	北の崎湿地区の地質状況……………	394
表-11	上小田宮の前遺跡の地質状況……………	399
表-12	放射性炭素年代測定結果……………	407
表-13	暦年較正結果……………	407
表-14	樹種同定結果……………	411
表-15	分析試料……………	416
表-16	測定条件……………	416
表-17	蛍光X線分析結果……………	417
表-18	竪穴住居の主な特徴……………	447
表-19	石製品の石材とその比率……………	454
表-20-1	北の崎遺跡遺物観察表 土器……………	461
表-20-2	北の崎遺跡遺物観察表 土製品……………	519
表-20-3	北の崎遺跡遺物観察表 木製品……………	520
表-20-4	北の崎遺跡遺物観察表 石製品……………	521
表-20-5	北の崎遺跡遺物観察表 鉄製品……………	528
表-21	鋸抜遺跡出土木製品同定表……………	552
表-22-1	鋸抜遺跡遺物観察表 土器……………	555
表-22-2	鋸抜遺跡遺物観察表 土製品……………	558
表-22-3	鋸抜遺跡遺物観察表 石製品……………	558
表-22-4	鋸抜遺跡遺物観察表 木製品……………	559
表-22-5	鋸抜遺跡遺物観察表 鉄製品……………	560

## 写真図版目次

口絵-1	北の崎遺跡上空より小岱山方面を 望む……………	巻頭
口絵-2	北の崎遺跡上空より金峰山方面を 望む……………	巻頭
口絵-3	北の崎遺跡平坦地区全景……………	巻頭
口絵-4	10号甕棺墓出土状況……………	巻頭
口絵-5	8号住居から出土した弥生土器……………	巻頭
口絵-6	23号住居から出土した古墳時代 前期の土師器の壺……………	巻頭
口絵-7	8号住居から出土した弥生土器……………	巻頭
口絵-8	1号住居と遺物包含層(2b層) から出土した縄文土器……………	巻頭
口絵-9	10号甕棺墓から出土した甕と蓋……………	巻頭
口絵-10	畿内の影響を受けた古墳時代前期 の土器……………	巻頭
口絵-11	古墳時代前期の複合口縁壺と複合 口縁甕……………	巻頭
口絵-12	8号住居から出土した石戈……………	巻頭
口絵-13	古墳時代の勾玉……………	巻頭
口絵-14	石包丁……………	巻頭
口絵-15	古墳時代前期の小形器台……………	巻頭
口絵-16	49号住居から出土した灯明皿と して使用された坏と椀……………	巻頭
写真-1	発掘されたときのようす……………	巻頭
写真-2	接合したあとの埋鉢……………	巻頭
写真-3	縄文土器の模様……………	巻頭
写真-4	磨石とたたき石……………	巻頭
写真-5	縄文時代の石鏃……………	巻頭
写真-6	石さじ……………	巻頭
写真-7	打製石斧……………	巻頭
写真-8	たて穴住居のあと……………	巻頭
写真-9	破片を接合したかめ棺……………	巻頭
写真-10	かめ棺墓発掘のようす……………	巻頭
写真-11	8号住居の弥生土器……………	巻頭
写真-12	弥生時代の石斧……………	巻頭
写真-13	いろいろな石包丁……………	巻頭
写真-14	石戈……………	巻頭

写真-15	古墳時代のたて穴住居のあと……巻頭	写真-51	2号住居完掘状況……562
写真-16	近畿の影響を受けた土器……巻頭	写真-52	2号住居炉・焼土塊土層断面……562
写真-17	山陰や近畿の影響を受けた土器……巻頭	写真-53	3号住居遺物出土状況……562
写真-18	近畿の影響を受けた器台……巻頭	写真-54	3号住居完掘状況……562
写真-19	底が丸くなった小さな壺……巻頭	写真-55	3号住居炉・焼土塊土層断面……562
写真-20	平坦地区で見られる大きい溝……巻頭	写真-56	4号住居遺物出土状況……563
写真-21	丸い形をした硯……巻頭	写真-57	5号住居完掘状況……563
写真-22	平安時代のたて穴住居あと……巻頭	写真-58	6号住居完掘状況……563
写真-23	須恵器の器や蓋……巻頭	写真-59	7号住居完掘状況……563
写真-24	黒色土器……巻頭	写真-60	8号住居遺物出土状況……563
写真-25	文字が書かれている土器……巻頭	写真-61	8号住居西側ピット遺物出土状況……563
写真-26	火をともしたと思われる皿……巻頭	写真-62	8号住居遺物出土状況……563
写真-27	石鍋……巻頭	写真-63	8号住居完掘状況……563
写真-28	奈良・平安時代の瓦(凹面)……巻頭	写真-64	9号住居完掘状況……564
写真-29	北の崎遺跡周辺における遺跡位置……15	写真-65	10号住居完掘状況……564
写真-30	検出された花粉・寄生虫卵……402	写真-66	11号住居完掘状況……564
写真-31	検出された植物珪酸体……403	写真-67	12号住居完掘状況……564
写真-32	検出された珪藻Ⅰ……404	写真-68	13号住居完掘状況……564
写真-33	検出された珪藻Ⅱ……405	写真-69	14号住居遺物出土状況……564
写真-34	北の崎遺跡・釵拔遺跡出土木製品 顕微鏡写真①……412	写真-70	15号住居遺物出土状況……564
写真-35	北の崎遺跡・釵拔遺跡出土木製品 顕微鏡写真②……413	写真-71	15号住居完掘状況……564
写真-36	北の崎遺跡・釵拔遺跡出土木製品 顕微鏡写真③……414	写真-72	16号住居完掘状況……565
写真-37	北の崎遺跡・釵拔遺跡出土木製品 顕微鏡写真④……415	写真-73	17号住居完掘状況……565
写真-38	釵拔遺跡出土木製品顕微鏡写真①……553	写真-74	18号住居完掘状況……565
写真-39	釵拔遺跡出土木製品顕微鏡写真②……554	写真-75	19号住居完掘状況……565
写真-40	平坦地区基本土層……561	写真-76	20号住居完掘状況……565
写真-41	湿地区基本土層……561	写真-77	22号住居完掘状況……565
写真-42	作業風景……561	写真-78	1号掘立柱建物……565
写真-43	1号住居完掘状況……561	写真-79	5号土坑完掘状況……565
写真-44	1号土坑遺物出土状況……561	写真-80	6号土坑完掘状況……566
写真-45	1号土坑完掘状況……561	写真-81	8号土坑完掘状況……566
写真-46	2号土坑完掘状況……561	写真-82	9号土坑完掘状況……566
写真-47	3号土坑完掘状況……561	写真-83	10号土坑完掘状況……566
写真-48	1号埋鉢遺物出土状況……562	写真-84	11号土坑完掘状況……566
写真-49	2号埋鉢遺物出土状況……562	写真-85	12号土坑完掘状況……566
写真-50	2号住居遺物出土状況……562	写真-86	13号土坑完掘状況……566
		写真-87	14号土坑完掘状況……566
		写真-88	15号土坑遺物出土状況……567
		写真-89	15号土坑完掘状況……567
		写真-90	16号土坑完掘状況……567



写真-91	17号土坑完掘状况·····	567	写真-131	1号沟完掘状况·····	572
写真-92	18号土坑完掘状况·····	567	写真-132	3号沟完掘状况·····	572
写真-93	19号土坑完掘状况·····	567	写真-133	4号沟遗物出土状况·····	572
写真-94	20号土坑完掘状况·····	567	写真-134	4号沟完掘状况·····	572
写真-95	21号土坑完掘状况·····	567	写真-135	1号甕棺墓遗物出土状况·····	572
写真-96	22号土坑完掘状况·····	568	写真-136	1号甕棺墓完掘状况·····	573
写真-97	23号土坑完掘状况·····	568	写真-137	2号甕棺墓遗物出土状况·····	573
写真-98	28号土坑遗物出土状况·····	568	写真-138	2号甕棺墓完掘状况·····	573
写真-99	28号土坑完掘状况·····	568	写真-139	3号甕棺墓遗物出土状况·····	573
写真-100	29号土坑完掘状况·····	568	写真-140	4号甕棺墓遗物出土状况·····	573
写真-101	30号土坑完掘状况·····	568	写真-141	4号甕棺墓完掘状况·····	573
写真-102	31号土坑完掘状况·····	568	写真-142	5号甕棺墓遗物出土状况·····	573
写真-103	32号土坑完掘状况·····	568	写真-143	6号甕棺墓遗物出土状况·····	573
写真-104	33号土坑完掘状况·····	569	写真-144	6号甕棺墓完掘状况·····	574
写真-105	34号土坑完掘状况·····	569	写真-145	7号甕棺墓遗物出土状况·····	574
写真-106	36号土坑完掘状况·····	569	写真-146	7号甕棺墓完掘状况·····	574
写真-107	37号土坑完掘状况·····	569	写真-147	8号甕棺墓遗物出土状况·····	574
写真-108	38号土坑完掘状况·····	569	写真-148	8号甕棺墓完掘状况·····	574
写真-109	39号土坑完掘状况·····	569	写真-149	9号甕棺墓遗物出土状况·····	574
写真-110	40号土坑完掘状况·····	569	写真-150	9号甕棺墓完掘状况·····	574
写真-111	41号土坑完掘状况·····	569	写真-151	10号甕棺墓遗物出土状况·····	574
写真-112	42号土坑完掘状况·····	570	写真-152	11号甕棺墓遗物出土状况·····	575
写真-113	44号土坑完掘状况·····	570	写真-153	11号甕棺墓完掘状况·····	575
写真-114	45号土坑完掘状况·····	570	写真-154	12号甕棺墓遗物出土状况·····	575
写真-115	46号土坑完掘状况·····	570	写真-155	12号甕棺墓完掘状况·····	575
写真-116	47号土坑完掘状况·····	570	写真-156	13号甕棺墓遗物出土状况·····	575
写真-117	48号土坑完掘状况·····	570	写真-157	13号甕棺墓完掘状况·····	575
写真-118	49号土坑完掘状况·····	570	写真-158	14号甕棺墓遗物出土状况·····	575
写真-119	50号土坑完掘状况·····	570	写真-159	14号甕棺墓完掘状况·····	575
写真-120	52号土坑完掘状况·····	571	写真-160	23号住居遗物出土状况①·····	576
写真-121	53号土坑完掘状况·····	571	写真-161	23号住居遗物出土状况②·····	576
写真-122	54号土坑完掘状况·····	571	写真-162	23号住居遗物出土状况③·····	576
写真-123	55号土坑完掘状况·····	571	写真-163	23号住居完掘状况·····	576
写真-124	57号土坑完掘状况·····	571	写真-164	23号住居烧土塊土層断面·····	576
写真-125	58号土坑完掘状况·····	571	写真-165	24号住居完掘状况·····	576
写真-126	60号土坑完掘状况·····	571	写真-166	25号住居遗物出土状况·····	576
写真-127	61号土坑完掘状况·····	571	写真-167	25号住居完掘状况·····	576
写真-128	62号土坑完掘状况·····	572	写真-168	25号住居烧土塊土層断面·····	577
写真-129	63号土坑完掘状况·····	572	写真-169	26号住居遗物出土状况·····	577
写真-130	64号土坑完掘状况·····	572	写真-170	26号住居完掘状况·····	577

写真-171	27号住居遺物出土状況遠景……………577	写真-211	44号住居遺物出土状況②……………582
写真-172	27号住居遺物出土状況近景……………577	写真-212	44号住居完掘状況……………582
写真-173	27号住居完掘状況……………577	写真-213	45号住居完掘状況……………582
写真-174	28号住居完掘状況……………577	写真-214	46号住居完掘状況……………582
写真-175	29号住居遺物出土状況……………577	写真-215	47号住居完掘状況……………582
写真-176	29号住居完掘状況……………578	写真-216	48号住居完掘状況……………583
写真-177	30号住居遺物出土状況……………578	写真-217	48号住居カマド完掘状況……………583
写真-178	30号住居完掘状況……………578	写真-218	49号住居遺物出土状況……………583
写真-179	31号住居完掘状況……………578	写真-219	49号住居完掘状況……………583
写真-180	32号住居遺物出土状況……………578	写真-220	50号住居遺物出土状況……………583
写真-181	32号住居完掘状況……………578	写真-221	50号住居完掘状況……………583
写真-182	33号住居遺物出土状況①……………578	写真-222	72号土坑完掘状況……………583
写真-183	33号住居遺物出土状況②……………578	写真-223	76号土坑完掘状況……………583
写真-184	33号住居完掘状況……………579	写真-224	77号土坑完掘状況……………584
写真-185	34号住居遺物出土状況……………579	写真-225	78号土坑遺物出土状況……………584
写真-186	34号住居完掘状況……………579	写真-226	80号土坑完掘状況……………584
写真-187	35号住居遺物出土状況遠景……………579	写真-227	81号土坑完掘状況……………584
写真-188	35号住居遺物出土状況近景……………579	写真-228	82号土坑完掘状況……………584
写真-189	35号住居貯蔵穴遺物出土状況……………579	写真-229	83号土坑完掘状況……………584
写真-190	35号住居完掘状況……………579	写真-230	84号土坑完掘状況……………584
写真-191	35号住居焼土塊土層断面……………579	写真-231	85号土坑完掘状況……………584
写真-192	36号住居完掘状況……………580	写真-232	87号土坑完掘状況……………585
写真-193	37号住居遺物出土状況……………580	写真-233	6号溝完掘状況……………585
写真-194	37号住居完掘状況……………580	写真-234	7号溝完掘状況……………585
写真-195	38号住居完掘状況……………580	写真-235	10号溝完掘状況……………585
写真-196	39号住居完掘状況……………580	写真-236	11号溝完掘状況(北から)……………585
写真-197	40号住居完掘状況……………580	写真-237	11号溝完掘状況(西から)……………585
写真-198	41号住居完掘状況……………580	写真-238	1号杭列出土状況……………585
写真-199	42号住居遺物出土状況……………580	写真-239	3区調査完了……………585
写真-200	42号住居完掘状況……………581	写真-240	4区調査完了……………586
写真-201	43号住居完掘状況……………581	写真-241	4区出水状況……………586
写真-202	65号土坑完掘状況……………581	写真-242	12号溝と13号溝完掘状況……………586
写真-203	66号土坑遺物出土状況……………581	写真-243	5区調査完了……………586
写真-204	67号土坑遺物出土状況(南から)……………581	写真-244	昭和初期まで掘削されていた石切場 ……………586
写真-205	67号土坑遺物出土状況(北から)……………581	写真-245	発掘調査前の北の崎遺跡のようす……………586
写真-206	68号土坑完掘状況……………581	写真-246	工事後の北の崎遺跡……………586
写真-207	70号土坑完掘状況……………581	写真-247	発掘調査に携わった人々……………586
写真-208	71号土坑完掘状況……………582	写真-248	発掘調査前の釧拔遺跡のようす……………587
写真-209	5号溝完掘状況……………582	写真-249	発掘調査前の釧拔遺跡のようす……………587
写真-210	44号住居遺物出土状況①……………582		

写真-250	発掘調査中のおびただしい出水……587	写真-287	6号甕棺墓から出土した甕棺……598
写真-251	鈿拔遺跡1区調査完了(北から)……587	写真-288	7号甕棺墓から出土した甕棺……598
写真-252	鈿拔遺跡2区調査完了(西から)……587	写真-289	8号甕棺墓から出土した甕棺……599
写真-253	鈿拔遺跡3区調査完了(西から)……587	写真-290	9号甕棺墓から出土した甕棺……599
写真-254	工事後の鈿拔遺跡のようす(北から) ……………587	写真-291	11号甕棺墓から出土した甕棺……599
写真-255	工事後の鈿拔遺跡のようす(東から) ……………587	写真-292	12号甕棺墓から出土した甕棺……599
写真-256	生見六地藏 東より……588	写真-293	13号甕棺墓から出土した甕棺……600
写真-257	生見六地藏 西より……588	写真-294	13号甕棺墓から出土した甕棺……600
写真-258	1号埋鉢から出土した縄文土器……589	写真-295	14号甕棺墓から出土した甕棺……600
写真-259	2号埋鉢から出土した縄文土器……589	写真-296	14号甕棺墓から出土した甕棺……600
写真-260	1号住居から出土した縄文土器……590	写真-297	3、4号溝から出土した弥生土器……601
写真-261	1号住居から出土した縄文土器……590	写真-298	23号住居から出土した土師器……601
写真-262	1号住居から出土した縄文土器……590	写真-299	23号住居から出土した土師器……601
写真-263	1号土坑から出土した縄文土器……591	写真-300	23号住居から出土した土師器……602
写真-264	3号土坑から出土した縄文土器……591	写真-301	25号住居から出土した土師器……602
写真-265	2号住居から出土した弥生土器……591	写真-302	26号住居から出土した土師器……602
写真-266	2号住居から出土した弥生土器……592	写真-303	26号住居から出土した土錘……603
写真-267	2号住居から出土した弥生土器……592	写真-304	27号住居から出土した土師器……603
写真-268	3号住居から出土した弥生土器……592	写真-305	29号住居から出土した土師器と 須恵器………603
写真-269	3号住居から出土した弥生土器の 把手………593	写真-306	30号住居から出土した土師器……604
写真-270	10号住居から出土した弥生土器……593	写真-307	32号住居から出土した土師器……604
写真-271	6号住居から出土した弥生土器……593	写真-308	32号住居から出土した土師器……604
写真-272	4号住居から出土した弥生土器……594	写真-309	33号住居から出土した土師器等……605
写真-273	4号住居から出土した弥生土器……594	写真-310	34号住居から出土した土師器……605
写真-274	11号住居から出土した弥生土器……594	写真-311	35号住居から出土した土師器……605
写真-275	14号住居から出土した弥生土器……595	写真-312	37号住居から出土した土師器……606
写真-276	18号住居から出土した弥生土器……595	写真-313	38号住居から出土した土師器等……606
写真-277	6号住居から出土した弥生土器……595	写真-314	39号住居から出土した土師器……606
写真-278	7号住居から出土した弥生土器……596	写真-315	41号住居から出土した土師器……607
写真-279	28号土坑から出土した弥生土器……596	写真-316	42号住居から出土した底部に圧 痕が見られる土師器………607
写真-280	27号土坑から出土した弥生土器……596	写真-317	41号住居から出土した複合口縁 壺にみられる浮文………607
写真-281	36号土坑から出土した弥生土器……597	写真-318	41号住居から出土した複合口縁 壺にみられる文様………607
写真-282	1号甕棺墓から出土した甕棺……597	写真-319	42、43号住居から出土した土 師器と須恵器………608
写真-283	2号甕棺墓から出土した甕棺……597	写真-320	65、66号土坑から出土した弥 生土器………608
写真-284	3号甕棺墓から出土した甕棺……597		
写真-285	4号甕棺墓から出土した甕棺……598		
写真-286	5号甕棺墓から出土した甕棺……598		



写真-321	67号土坑から出土した土師器……608	写真-348	11号溝から出土した土師器と須 恵器……617
写真-322	67号土坑から出土した土師器……609	写真-349	11号溝から出土した瓦器……617
写真-323	67号土坑から出土した土師器等……609	写真-350	三池往還側溝から出土した戦争関 連遺物……617
写真-324	68号土坑から出土した土師器……609	写真-351	87号土坑から出土した瓦器と白 磁……618
写真-325	69号土坑から出土した土師器……610	写真-352	11号溝から出土した白磁……618
写真-326	67号土坑から出土した複合口縁 壺にみられる櫛描波状文……610	写真-353	11号溝から出土した青磁と白磁……618
写真-327	67号土坑から出土した複合口縁 壺にみられる波状文……610	写真-354	平坦地区第3包含層から出土した 縄文土器……619
写真-328	68号土坑から出土した複合口縁 壺にみられる鋸歯状突帯……611	写真-355	平坦地区第3包含層から出土した 縄文土器……619
写真-329	68号土坑から出土した器台の ミニチュア土器……611	写真-356	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……620
写真-330	5号溝から出土した土師器……611	写真-357	平坦地区第3包含層から出土した 縄文土器……620
写真-331	44号住居から出土した土師器……612	写真-358	平坦地区第3包含層から出土した 縄文土器……620
写真-332	44号住居から出土した土師器……612	写真-359	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……621
写真-333	44号住居から出土した須恵器……612	写真-360	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……621
写真-334	46号住居から出土した土師器と 須恵器……612	写真-361	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……621
写真-335	50号住居から出土した土師器と 須恵器……613	写真-362	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……622
写真-336	48号住居から出土した土師器と 須恵器……613	写真-363	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……622
写真-337	47号住居から出土した土師器と 須恵器……613	写真-364	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……622
写真-338	77号土坑から出土した土師器と 須恵器……614	写真-365	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……623
写真-339	73、74号土坑から出土した土 師器と須恵器……614	写真-366	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……623
写真-340	75号土坑から出土した土師器と 須恵器……614	写真-367	平坦地区第2包含層から出土した 縄文土器……623
写真-341	78、79、80、82、83号 土坑から出土した土師器と須恵器……615	写真-368	平坦地区第3包含層から出土した 弥生土器……624
写真-342	6号溝から出土した土師器と須恵器 ……615	写真-369	平坦地区第3包含層から出土した 弥生土器……624
写真-343	7、8号溝から出土した土師器と 須恵器……615		
写真-344	11号溝から出土した石鍋……615		
写真-345	11号溝から出土した瓦の凸面……616		
写真-346	11号溝から出土した瓦の凹面……616		
写真-347	11号溝から出土した土錘と羽口……616		

写真-370	平坦地区第2包含層から出土した 弥生土器……………624	写真-390	平坦地区第1包含層から出土した 弥生土器……………631
写真-371	平坦地区第2包含層から出土した 弥生土器……………625	写真-391	平坦地区第1包含層から出土した 土師器……………632
写真-372	平坦地区第2包含層から出土した 弥生土器……………625	写真-392	平坦地区第1包含層から出土した 土師器と須恵器……………632
写真-373	平坦地区第2包含層から出土した 弥生土器……………625	写真-393	平坦地区第1包含層から出土した 土師器と須恵器、黒色土器……………632
写真-374	平坦地区第2包含層から出土した 弥生土器等……………626	写真-394	平坦地区第1包含層から出土した 土師器と須恵器……………633
写真-375	平坦地区第2包含層から出土した 弥生土器にみられる浮文……………626	写真-395	平坦地区第1包含層から出土した 土師器と須恵器……………633
写真-376	平坦地区第2包含層から出土した 土師器……………626	写真-396	平坦地区第1包含層から出土した 瓦器と白磁……………633
写真-377	平坦地区第2包含層から出土した 土師器……………627	写真-397	湿地区第2包含層から出土した弥 生土器等……………634
写真-378	平坦地区第2包含層から出土した 土師器……………627	写真-398	湿地区第3包含層から出土した弥 生土器と土師器……………634
写真-379	平坦地区第2包含層から出土した 土師器……………627	写真-399	湿地区第2包含層から出土した須 恵器……………634
写真-380	平坦地区第2包含層から出土した 土師器……………628	写真-400	湿地区第2包含層から出土した須 恵器の底部（墨書）……………634
写真-381	平坦地区第2包含層から出土した 土師器と須恵器……………628	写真-401	湿地区第2包含層から出土した須 恵器の底部（墨書）……………634
写真-382	平坦地区第2包含層から出土した 土師器と須恵器……………628	写真-402	湿地区第2包含層から出土した土 師器と瓦器……………635
写真-383	平坦地区第2包含層から出土した 土製勾玉と土玉……………629	写真-403	湿地区第2包含層から出土した瓦器 ……………635
写真-384	平坦地区第2包含層から出土した 土錘……………629	写真-404	湿地区第1包含層から出土した弥 生土器と土師器……………635
写真-385	平坦地区第2包含層から出土した 底部に線刻がみられる土師器……………629	写真-405	湿地区第2包含層から出土した櫛……………636
写真-386	平坦地区第2包含層から出土した 円面硯……………630	写真-406	湿地区第2包含層から出土した木 製品……………636
写真-387	平坦地区第1包含層から出土した 土製品……………630	写真-407	湿地区第2包含層から出土した木 製品……………636
写真-388	平坦地区第1包含層から出土した 土製品……………630	写真-408	打製石鏃……………637
写真-389	平坦地区第1包含層から出土した 弥生土器……………631	写真-409	打製石鏃……………637
		写真-410	磨製石鏃……………637
		写真-411	削器等……………638
		写真-412	スクレイパー……………638
		写真-413	石匙等……………638

写真-414	三日月型石器	639	写真-451	釵拔遺跡遺物包含層(2層)から 出土した遺物	651
写真-415	剥片石器	639	写真-452	釵拔遺跡遺物包含層(2層)から 出土した遺物	652
写真-416	剥片石器等	639	写真-453	釵拔遺跡遺物包含層(3a層)か ら出土した遺物	653
写真-417	打製石斧	640	写真-454	釵拔遺跡遺物包含層(3a層)か ら出土した遺物	654
写真-418	打製石斧	640	写真-455	釵拔遺跡遺物包含層(3a層)か ら出土した遺物	655
写真-419	打製石斧	640	写真-456	釵拔遺跡遺物包含層(3a層)か ら出土した遺物	656
写真-420	打製石斧	641	写真-457	釵拔遺跡遺物包含層(3a層)か ら出土した遺物	657
写真-421	磨製石斧	641	写真-458	釵拔遺跡遺物包含層(3a層)か ら出土した遺物	658
写真-422	磨製石斧	641	写真-459	生見の「大永の祀板碑」の拓本	666
写真-423	磨製石斧	642	写真-460	日支事変救護記念湯呑	668
写真-424	磨製石斧	642	写真-461	日支事変救護記念湯呑	668
写真-425	磨石	642	写真-462	日支事変救護記念湯呑	668
写真-426	磨石	643	写真-463	日支事変救護記念湯呑	669
写真-427	磨石	643	写真-464	歩兵第13聯隊除隊記念盃	669
写真-428	磨石	643	写真-465	歩兵第13聯隊除隊記念盃	670
写真-429	敲石・磨石	644	写真-466	歩兵第13聯隊除隊記念盃	670
写真-430	磨石	644	写真-467	近衛聯隊	671
写真-431	打製石斧と石製模造品	644	写真-468	歩兵聯隊	671
写真-432	石包丁	645	写真-469	砲兵聯隊	671
写真-433	石包丁	645	写真-470	鉄道聯隊	671
写真-434	石包丁	645	写真-471	電信兵聯隊	671
写真-435	紡錘車	645	写真-472	騎兵聯隊	671
写真-436	石鎌、礫器等	646	写真-473	外面に鉄兜の意匠を凝らした盃	671
写真-437	石錘、円盤状石器等	646	写真-474	外面に鉄兜の意匠を凝らした盃	671
写真-438	砥石	646	写真-475	木盃を含む海軍の記念盃	672
写真-439	砥石	647	写真-476	海軍満期除隊記念盃	672
写真-440	砥石	647	写真-477	明治卅七八年戦役凱旋記念盃	672
写真-441	硯	647	写真-478	明治卅七八年戦役凱旋記念盃	672
写真-442	滑石製石製品	647	写真-479	熊本平野の奥地にあたる熊本市城 南町に所在する御領貝塚	674
写真-443	連盃	648	写真-480	海水面より高い位置にある海食洞	674
写真-444	歯車状石器	648	写真-481	益城町から望む熊本平野	692
写真-445	石鉢	648			
写真-446	湿地区第2、3包含層から出土し た石製品	648			
写真-447	遺構から出土した鉄器	649			
写真-448	平坦地区の包含層から出土した鉄 器等	649			
写真-449	平坦地区第2包含層から出土した 鉄器	649			
写真-450	釵拔遺跡遺物包含層(2層)から 出土した遺物	650			



## 第I章 調査の概要

### 第1節 調査組織

予備調査、発掘調査の調査体制及び整理・報告書作成業務に関わる組織は次の通りである（敬称略）。

#### 1 予備調査（平成14年度・平成15年度）

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者

熊本県教育庁文化課長 成瀬烈大  
（平成14～15年度）

教育審議員兼課長補佐 島津義昭  
（平成14～15年度）

調査総括

文化財調査第二係長 木崎康弘（平成14年度）

文化財調査第二係長 西住欣一郎（平成15年度）

調査事務局

教育審議員兼課長補佐 小田信也（平成14年度）

課長補佐 吉田 恵（平成15年度）

主幹兼総務係長 中村幸宏（平成14年度）

主幹兼総務係長 欄杭正義（平成15年度）

主任主事 天野寿久  
（平成14～15年度）

予備調査担当者

参事 廣田静学（平成14年度）

文化財保護主事 馬場正弘（平成15年度）

文化財保護主事 後藤貴美子（平成15年度）

文化財保護主事 鶴崎裕子（平成15年度）

嘱託 西 慶喜（平成14年度）

嘱託 西口貴志（平成14年度）

嘱託 河原京子（平成15年度）

嘱託 本多麻紀（平成15年度）

#### 2 発掘調査（平成15～16年度）

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 熊本県教育庁文化課長 成瀬烈大  
（平成15年度）

熊本県教育庁文化課長 島津義昭  
（平成16年度）

課長補佐 倉岡 博  
（平成16年度）

調査総括

文化財調査第二係長 西住欣一郎  
（平成15～16年度）

調査事務局

課長補佐 吉田 恵（平成15～16年度）

主幹兼総務係長 欄杭正義（平成15～16年度）

主任主事 天野寿久（平成15～16年度）

調査担当

文化財保護主事 馬場正弘（平成15～16年度）

文化財保護主事 後藤貴美子（平成15年度）

文化財保護主事 鶴崎裕子（平成15年度）

嘱託 河原京子（平成15年度）

嘱託 本多麻紀（平成15年度）

嘱託 中尾健照（平成16年度）

嘱託 内田成香（平成16年度）

嘱託 松野直子（平成16年度）

#### 3 整理・報告書作成（平成18～22年度）

調査主体 熊本県教育委員会

整理責任者

熊本県教育庁文化課長 梶野英二  
（平成18～19年度）

熊本県教育庁文化課長 米岡正治（平成20年度）

熊本県教育庁文化課長 小田信也（平成22年度）

課長補佐 江本 直  
（平成18～20年度）

課長補佐 木崎康弘（平成22年度）

整理総括

主幹兼文化財調査第二係長 西住欣一郎  
（平成18～22年度）

整理事務局

課長補佐 吉田 恵（平成18年度）

課長補佐 元嶋 茂（平成22年度）

教育審議員兼課長補佐 宗村士郎  
（平成19～22年度）

主幹兼総務係長 高宮優美（平成18～19年度）

主幹兼総務係長 川上勝美（平成20年度）

主任主事 小谷仁志（平成18年度）

主任主事 高松克行（平成19年度）

参事 山田京子（平成20・22年度）

整理担当

文化財保護主事 馬場正弘 (平成18～22年度)  
嘱託 坂田美智子 (平成18～22年度)  
嘱託 桂木美美 (平成19年度)  
嘱託 藤崎正人 (平成22年度)

4 調査指導及び調査協力者

発掘調査及び整理・報告書作成に関する指導・助言を頂いた先生方は以下の通りである。記して感謝の意を表したい(敬称略)。

(1) 調査指導

熊本大学文学部教授 甲元真之  
熊本大学文学部助教授 木下尚子  
熊本大学教育学部教授 渡辺一徳  
九州森林総合研究所 宮縁育夫  
山鹿市立博物館長 隈 昭志  
米子市教育委員会 下高瑞哉  
熊本市教育委員会 檀 佳克  
熊本県文化財資料室 島津義昭  
熊本県文化財資料室 野田拓治

(2) 調査協力者

佐々木賢二(鳥取県教育委員会事務局)  
岡野 雅則(鳥取県教育委員会事務局)  
竹田 宏司(玉名市教育委員会)  
宮崎 敬士(熊本県教育委員会)  
長谷部善一(熊本県教育委員会)  
前川 清一(熊本県教育委員会)  
栗谷 雅之(熊本県教育委員会)  
高木 正文(熊本県教育委員会)  
亀田 学(熊本県教育委員会)  
山下 義満(熊本県教育委員会)  
林田 和人(熊本市教育委員会)  
水野 哲郎(熊本県教育委員会)  
後藤 克博(熊本県教育委員会)  
池田 朋生(熊本県立装飾古墳館)  
西口 貴志(甲佐町教育委員会)  
今村 和徳(熊本県教育委員会)  
尾方 圭子(熊本県教育委員会)  
松村 由美(熊本県教育委員会)  
横田 光智(熊本県教育委員会)

宮崎 拓(熊本県教育委員会；

現(株)九州文化財研究所)

5 調査作業員(敬称略)

(1) 発掘調査

明石穂奈美 明石照弘 荒木優子  
生森キミヨ 池田八千代 上田嘉代子  
上野幸枝 榎本喜義 榎本ミチヨ  
大久保正春 大久保靖子 岡山喜代子  
北原靖治 木本勝雄 清田フクヨ 小島春子  
佐内誠志 谷川春美 徳山 司 中島真由美  
中林静代 中本フタミ 仲山光丸  
西嶋喜久代 西村国雄 平山節子 廣瀬正義  
藤嶽和義 村上敏則 村上洋子 雪野ミチ子  
荒木侯子 飯塚俊一 池田耕廣 石島カン子  
大野広行 木下希三子 木山鎮良 清田栄子  
清田淳二 猿渡カオリ 島崎ヤエ子 高村伸一  
田添五雄 田上敏子 中川正美 中林淳子  
中村次子 仲山諏訪子 仲山睦郎 東とし子  
平野富子 古庄哲子 星野テツヤ 前田道子  
松本肇代 三津家キミ子 村上勝也 森本起江  
矢加部潔 山戸ハルキ 山本美穂 吉川和子  
吉野千恵 竹熊健志 藤嶽美智子 上土井朋美  
石原紀久代 柏木愛矢乃 松本 崇 深見真紀  
土井口美穂 土島安臣 増田政隆 松山誠一  
本田 厚 平山竹次

(2) 整理作業

(一次整理)

吉本清子 米倉五月 篠崎チカ子 上野栄子  
石田敦子 中島ひろみ 富田知子 大澤由美  
江島園子 上村孝子 後藤直美 益田久子  
古閑知子 木村典子 国竹真由美  
ト・キエン 磯田勝美 永野千鳥 笹原英子  
上田寿美子 山内洋子 高松孝子  
東矢はるみ 山本やす子 岩瀬和代  
白木はる乃 木村壽子 畑島文博 古莊 隆  
荒木とよみ

(二次整理)

井島秀子 島川千秋 草野千鶴子  
金子美代子 府内博子

## 第2節 調査の経過

### 1 調査に至る経緯

平成11年に玉名地域振興局土木部から依頼を受け、県文化課が遺跡地図との照合と現地踏査を実施した結果、工事予定地内には埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、予備調査が必要な旨を玉名地域振興局に通知した。これを受け玉名地域振興局土木部（玉名工124号）から平成12年9月6日に予備調査の依頼が県文化課になされたため、平成14年6月5日から平成14年6月10日、平成14年8月30日、平成15年5月8日から5月9日に同調査を実施した。同調査では、試掘坑（トレンチ）を37箇所設定した。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡や溝などの遺構とおびただしい遺物が包含されていることが発見された。そのため、平成14年9月30日及び平成15年6月19日に玉名地域振興局に対し予備調査結果を通知し、併せて文化財保護法57条の3第1項に基づき発掘の通知が必要な旨を通知した。

これを受け平成15年4月24日に玉名地域振興局土木部から埋蔵文化財発掘に関する依頼が県文化課に提出されたため、県文化課は文化財保護法第58条の2第1項に基づき、平成15年5月2日に玉名地域振興局及び玉名市教育委員会に対し、発掘調査に着手する旨を通知した。

### 2 調査の過程

平成15年5月20日 北の崎遺跡発掘調査作業員募集の説明会を新橋区公民館（玉名市田崎）にて開催する。

平成15年5月23日 プレハブを設置する。

平成15年5月26日 熊本県文化財資料室から調査機材を搬入する。北の崎遺跡の調査方針を記した調査要領を調査員全員で確認し、共通認識のもと調査にあたることを確認する。

平成15年5月下旬 調査1区の表土を重機により掘削し、調査区内に10m間隔にメッシュ杭を設置。調査の準備を行う。調査区北東部に調査1区の地層の様子を確認する土層トレンチを掘り、堆積状況及び遺物の包含状況を調査員全員で確認する。

平成15年6月2日 北の崎遺跡の発掘調査を開始

する。草刈りや境界杭を打つなど環境整備を行う。

平成15年6月上旬 調査1区を開始する。調査区内にある現代の人々が掘り返した穴など（カクラン）を人力で掘削にあたる。

平成15年6月下旬 遺物を含む層（遺物包含層）である2a層を各グリッドごとに掘削する。

平成15年7月上旬 各グリッドごとに遺構検出を行い、包含層から出土した石器等の出土位置をトータルステーションにて測量し取り上げる。遺構検出にあたっては、遺構を埋めた土と地層中の土とにあまり差異がなく遺構の検出が非常に難しく全職員懸命に検出作業にあたるがなかなかわからない。かなり難航する。

平成15年7月10日 玉名中学校生徒6名が職業体験事業で2日間体験活動を行う。

平成15年7月中旬 カクラン部の検出状況を「遺構くん」を使用し電子図化していく。

平成15年7月18日 遺構が重複している箇所が出てきたため、重複関係を調べるため、全ての遺構を縦断するようにトレンチを入れる。

平成15年7月22日 4249グリッドにおびただしい量の遺物が検出される。しかしながら遺構プランがよくわからない。出土遺物がどのように検出されたか状況図や写真撮影を行う。

平成15年7月24日 土坑などの遺構の遺物出土状況図を作成する。

平成15年7月25日 2b層検出のピットの掘削開始する。

平成15年8月上旬 遺構の平面実測図を電子図化していく。古墳時代の住居跡と弥生時代の住居跡が同じ検出面で検出され、両時代のものが重複して認められる。

平成15年8月8日 台風10号接近のため現場作業を中止する。

平成15年8月13日 現場の進捗度を把握するため、成瀬文化課長が来跡する。

平成15年8月19日 本事業の工事に伴う移設を予定している生見六地蔵の拓本を前川課長補佐がとる。

平成15年8月20日 同上の生見六地蔵の写真を長



## 第 I 章 調査の概要

- 谷部主任学芸員が撮影する。
- 平成15年8月中旬 堅穴住居の埋土を掘削する。  
写真撮影や図面作成を同時に行う。
- 平成15年9月19日 現地調査指導のため、西住係長が来跡し、遺構の性格や掘削方法等の助言する。
- 平成15年9月24日 玉名地域振興局と今後の調査工程について調査事務所で協議を行う。
- 平成15年10月1日 本事業の工事に伴う生見六地藏の仮移設のため、正栄建装株式会社が補強しながら解体作業を開始する。
- 平成15年10月9日 調査1区の空中写真撮影のカラー・白黒あわせて16カットを委託した有限会社スカイサーベイ九州が大型ラジコンヘリコプターで行う。
- 平成15年10月17日 遺構の図面作成及び地形測量を完了し、調査1区の調査を完了する。
- 平成15年10月中旬 調査2区の表土を重機によって掘削する。土層トレンチで調査2区の地層の堆積状況を把握する。
- 平成15年10月下旬 カクラン部を掘削し、遺物包含層である2b層を掘削する。
- 平成15年10月30日 調査3区の表土掘削を行った場合の廃土置場について協議を行う。廃土の持ち出しの結論を得る。
- 平成15年11月上旬 調査2区は、2a層はほとんど残存しておらず、開墾により古代の遺構はほとんど壊されている様子である。
- 平成15年11月上旬 調査2区で、遺構の有無を確認する3層（古墳時代および弥生時代の検出面）で検出作業を行う。
- 平成15年11月7日 昨日（11月6日）の雨により調査2区は水没する。
- 平成15年11月中旬 調査2区の遺構の埋土を掘削する。掘削が完了したのから随時写真撮影と図面作成を行う。
- 平成15年11月中旬 調査3区の表土掘削を重機で行う。出水がおびただしい。
- 平成15年11月19日 玉名中学校2年生9名が職場体験で来跡する。
- 平成15年11月20日 調査3区は、11月19日の雨で水没する。
- 平成15年11月21日 調査3区に水中ポンプを設置し排水を行う。
- 平成15年11月25日 調査3区に廃土用のベルトコンベアを設置し、一部法面の崩落がおこり補強を行う。
- 平成15年11月26日 調査3区は湧水が激しいため、排水用の側溝を調査区の周囲に掘る。
- 平成15年11月下旬 調査2区住居跡6軒、土抗2基同時に調査を進める。
- 平成15年12月上旬 調査3区は、遺物包含層である2層を掘削する。遺構は検出されない。
- 平成15年12月中旬 調査3区は、木葉川等の氾濫による洪水による竹や流木などの漂着物が多量に検出される。
- 平成15年12月15日 8号住居から器台、石戈が発見される。通常の住居ではないことを認識する。
- 平成15年12月26日 本年の調査を終了する。
- 平成16年1月6日 本年の調査を開始する。調査2区では中世の溝である11号溝の埋土の掘削を開始する。調査3区では2層を掘削するが古代から弥生時代までの土器が混在して出土する。流れ込みを相当含むことを認識した。
- 平成16年1月8日 調査2区において数基の甕棺墓があることが判明する。今後の調査方法を検討・共通認識をする。
- 平成16年1月14日 熊本大学の甲元教授に、専門調査員として現地にて指導・助言をいただく。
- 平成16年1月26日 熊本大学の木下助教授に、専門調査員として現地にて指導・助言をいただく。
- 平成16年1月29日 調査2区の空中写真撮影を行う。カラー・白黒あわせて10カットの撮影をヘリコプター（九州航空株式会社）で撮影する。
- 平成16年2月3日 調査4区の調査について、玉名地域振興局と協議する。調査4区は木葉川の堤防側は法面保護のため矢板を打つこととした。
- 平成16年2月10日 遺構の図面作成及び地形測量を完了し、調査2区の調査を終了する。
- 平成16年2月12日 調査3区は、調査2区が完了したことで作業員全員で遺物包含層の3層の掘

- 削を開始する。
- 平成16年2月下旬 調査4区の表土を重機により掘削する。3月5日に掘削完了する。
- 平成16年2月26日 廃土用にベルトコンベアを調査4区に設置する。
- 平成16年2月27日 専門調査員として熊本大学の渡辺教授と九州森林総合研究所の宮縁主任研究員を招へいし、北の崎遺跡の低湿地部の地質について指導・助言をいただく。
- 平成16年3月上旬 調査4区の遺物包含層である2層を掘削する。調査4区の湧水ははなはだしく止めようがなく、排水施設を敷設する。出土遺物は少ない。調査区の西側の湧水が非常に激しく調査が不可能。層位もわからないような状況で、出土遺物が少量であることから西側の調査を打ち切る。
- 平成16年3月中旬 調査4区で、遺物包含層の3層を掘削する。中世の土器を中心に出土する。やはり流れ込みの遺物も多い。
- 平成16年3月22日 調査4区の遺物包含層3層の掘削を完了する。本調査区は湧水がはなはだしく、24時間水中ポンプを稼働させるような状況であり、弥生時代の遺物包含層まで掘削をすると2mの掘削深度となり土手・堤防の崩落が予想され、水位の低下による地下水への影響を総合的に考慮し4層以下の層については掘削しないことで合意する。
- 平成16年4月12日 調査5区の調査を開始する。北側半分は基本土層の6層より上位の層は全て削平されていることが判明する。
- 平成16年4月16日 北側半分の客土の除去が終了する。客土下から、石切り場が検出される。
- 平成16年4月21日 本年度調査に関して、玉名地域振興局と協議する。水道管移設と調査との日程調整が議題としてあがる。
- 平成16年4月23日 調査5区の基本土層2層の掘削が完了する。
- 平成16年4月28日 検出された石切り場に関して、聞き取り調査を行う。昭和9年まで切り出されていたことが判明する。
- 平成16年5月12日 玉名地域振興局と工事予定地内の私道及び県道部の調査について協議をする。
- 調査5区では、基本土層の3層の掘削が完了し、遺構の埋土掘削に移行する。
- 平成16年5月中旬 調査6区の表土を重機により掘削する。遺物包含層はほとんど残存しておらず、遺構検出面である3層が露出した状態で表土掘削を完了する。
- 平成16年5月19日 調査6区の遺構検出作業を行う。狭い範囲に住居跡が3軒、土坑が3基、溝2条あることが判明。遺構を検出した状況写真を撮影後、遺構埋土の掘削を開始する。
- 平成16年6月7日 調査6区の空中写真撮影を行う。カラー・白黒あわせて10カットをヘリコプター（九州航空株式会社）で撮影する。
- 平成16年6月10日 調査6区の調査を完了する。田崎橋の架け替え工事や水道管移設工事のため発掘調査を8月まで休止する。
- 平成16年8月上旬 調査7区の表土を重機により掘削する。
- 平成16年8月10日 調査7区内のカクランの土の除去作業を開始する。
- 平成16年8月7日 基本土層2b層で遺構の検出を行う。ピットと排水用の石組が認められた。
- 平成16年8月中旬 遺物包含層である2b層を掘削する。
- 平成16年8月24日 基本土層3層の遺構検出を完了し、遺構埋土の掘削を開始する。
- 平成16年8月30日 台風16号接近のため現場作業を中止する。
- 平成16年8月31日 調査7区の西側で甕棺墓が検出され、丘陵の西側にも東側同様に墓域が存在することが判明した。
- 平成16年9月7日 台風18号接近のため現場作業を中止する。
- 平成16年9月16日 古代の竪穴住居のかまどについて、長谷部主任学芸員と亀田主任学芸員が助言する。
- 平成16年9月27日 調査7区の空中写真撮影を行う。カラー・白黒あわせて10カットをヘリコプター（九州航空株式会社）で撮影する。

## 第I章 調査の概要

平成16年9月29日 台風21号接近のため現場作業を中止する。玉名地域振興局と調査8区の調査について工事施工業者である池田建設・広田組をまじえて打ち合わせを行う。

平成16年10月1日 調査7区の調査を完了する。

平成16年10月上旬 調査8区の表土を重機により掘削する。

平成16年10月15日 遺物包含層が西側の一部を除いてほとんど残存していなかったため基本土層3層の遺構検出を完了し、遺構埋土の掘削を開始する。住居跡、土坑、溝、甕棺墓が検出され、これまでの調査体制では期間内に完了できないと判断。作業員の増員、トータルステーションの増台による電子図化の強化、図面作成において民間委託を行うことで対応する方針を出す。

平成16年10月20日 現場がひっ迫している状況下で台風23号が接近し現場作業を中止する。

平成16年10月21日 住居跡を中心に、遺構埋土を懸命に掘削する。

平成16年10月28日 三池往還から「日支事変援軍記念」と書かれた湯呑が出土する。ようやく時代が判明する。

平成16年11月10日 熊日講座の遺跡見学で講師隈氏と受講者18名が来跡する。

平成16年11月29日 調査8区の空中写真撮影を行う。カラー・白黒あわせて6カットをヘリコプター（九州航空株式会社）で撮影する。

平成16年11月30日 北の崎遺跡の全ての調査を完了する。

平成16年12月2日 北の崎遺跡で出土した網コンテナ615箱を文化課健軍収蔵庫に搬出した。

平成16年12月3日 プレハブ等の施設を解体し、撤収を完了する。



菊池川に平行して流れる高瀬裏川で毎年行われている「花しょうぶ祭り」

高瀬裏川が船の物流港として栄えていたころから、花しょうぶの名所となっていたと言われており、5月には全長600mの高瀬裏川水際緑地公園には、紫色やピンク色の花しょうぶが咲きほこる。公園内には県指定重要文化財の「高瀬眼鏡橋」をはじめとする7つの石橋もある。

春



## 第II章 遺跡の概要

### 第1節 地理的環境

#### 1 地形

本遺跡が所在する玉名市は、九州最大の内湾である有明海中央部に面している。県内の3大河川である菊池川は、阿蘇カルデラを発し玉名市にて有明海に流れ出ている。その下流域には、標高10m以下の平坦な玉名平野が広がる。玉名平野は、南北約15km、東西約9kmの沖積平野である。この沖積平野の中央部にある高瀬付近にて低位段丘堆積物と金峰山系の凝灰角礫岩により平野部が狭まった狭さく部をもち、これを境に上流域の盆地状の平野部と下流域の三角州部とに分かれる。盆地状の平野部に流れる河川としては、菊池川とその支流である木葉川、繁根木川がある。本遺跡は、木葉川が盆地状の平野部への注ぎ出る地形変化点に位置し、木葉川左岸側に面している。尚、木葉川は、江戸期に流路を変えられ現在は玉名市田崎において洪積台地を寸断するように流下しているが、江戸時代以前は洪積台地を巻くように流下していた。

玉名市付近の地形は、主に比較的低い山地（小岱山地、白間山地、国見山地、金峰山地）と玉名平野から構成されている。平野周辺部の台地・丘陵・山地は、砂礫層からなる段丘堆積物、阿蘇火砕流堆積物、新第三紀火山岩類、中世代白亜紀の玉名花崗岩からできている。玉名平野をコの字形に取り囲むように山地が分布し、山地の周辺には菊水丘陵、小岱山丘陵、横島丘陵、金峰山麓丘陵などが存在する。明瞭な台地は玉名市岱明町にある玉名台地のみであるが、本来一つながりであった台地（阿蘇4噴火：約9万年前）が、河川による開析によって寸断され、菊水丘陵性台地、安楽寺丘陵性台地、伊倉丘陵性台地となった。これら丘陵性台地は、山地と平野部の境界に分布している。平野部は、菊池川の下流に展開する玉名平野であり、阿蘇3火砕流堆積物、阿蘇4火砕流堆積物、砂、シルト、粘土からなる。菊池川的位置は平野部に流入する白石と高瀬の狭さく部は9万年前から現位置とほぼ同じ位置にあると考えられ、

両者の間に広がる平野部で流路が変遷している。ボーリング資料や最近の発掘調査の結果、古墳時代には、現位置より東方の下小田の集落付近まで蛇行して菊池川が流れていたのではないかと考えられる。

狭さく部より以南では、菊池川の流路は、1589～1605年の改修工事により現位置に移されており、以前は現在の唐人川が菊池川の流路であった。唐人川西方の大浜や滑石に浜堤が形成され、弥生時代の遺構等が検出されている。現在は改修された菊池川により寸断されているが、当時は連続した浜堤があったのではないかと推察される。有明海の沿岸流は北西方向に流れていることで、川から流出した土砂が沿岸流にのり北西方向に発達する。唐人川の北西方向に浜堤が発達することも菊池川の変遷を考えると容易に理解できる。

尚、滑石・大浜・横島・部田見・小天以南の低地は、近世以降の干拓地である。

#### 2 地質

本遺跡の北東側には国見山、木葉山一帯は、古生代の木葉変成岩類からなっている。木葉変成岩類は、主に石英片岩、雲母片岩及び角閃岩からなり、これらの南側には一部石灰岩の分布も見られる。本遺跡では、打製石斧等の石器として石英片岩が使用されているので、木葉変成岩が使用されている可能性が高いと思われる。

南東から南部にかけては、金峰山系の凝灰角礫岩と阿蘇起源の火砕流堆積物が分布する。凝灰角礫岩を火砕流堆積物が覆うように堆積している。噴出時期は、金峰山系が新第三紀鮮新世（約50万年前）で、これを覆う火砕流堆積物が第四紀更新世（約9万年前）である。また、金峰山系の凝灰角礫岩の岩質は、輝石安山岩である。周辺の遺跡では、阿蘇の火砕流の中で最も大規模噴火であった阿蘇4火砕流の溶結凝灰岩や金峰山系の輝石安山岩は古墳の石室等の石材として使用されている。西側には、低位段丘堆積物（岱明層）、中位段丘堆積物（赤田層）、高位段丘堆積物（府本層）が分布し、これらは、礫層、砂層およびシルト層から構成される。また、これらの北側には、中生代



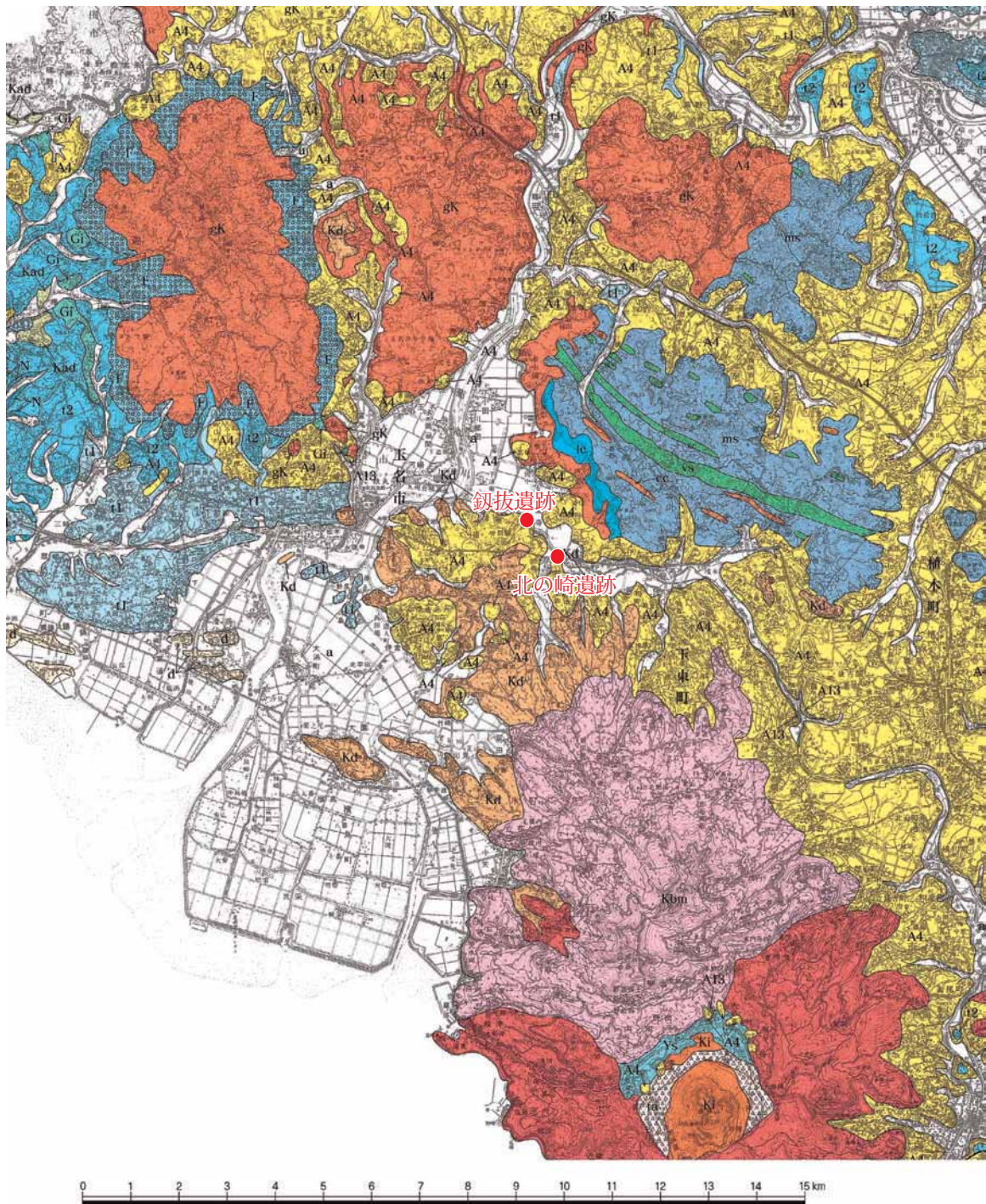


図-11 北の崎遺跡及び鈮拔遺跡周辺の地質図 熊本県地質図(10万分の1)説明書(2008)より引用

凡例

A4 阿蘇4火砕流堆積物 t1 低位段丘堆積物 t2 中位段丘堆積物 gK 花崗岩類 lc 結晶質石灰岩 cc 結晶質チャート  
 vs 緑色片岩 ms 泥質岩 Kd 金峰火山北麓岩屑堆積物 F 府本層 Kbm 金峰火山中期噴出物 a 沖積層  
 d 砂州堆積物 A13 阿蘇1～3火砕流堆積物 Ki 金峰火山新期噴出物 Kbo 金峰火山古期噴出物

白亜紀の玉名花崗岩が分布する。この玉名花崗岩が分布する地域では、風化して砂状化した「マサ」が山麓や台地に覆うように堆積している。「マサ」は、土器をつくる際に混入する緩和剤として利用

される。尚、玉名花崗岩の鉱物組み合わせは、基本的には角閃石、黒雲母、斜長石、石英からなる。これらに加えて白雲母が観察される。土器の胎土の観察の際、注意を要する。



これらに囲まれた部分に、礫、砂、シルト、粘土から構成される沖積層が分布する。長岡ら(1997)は、沖積層を層相により、下位より、砂礫から構成される標高-17~-8m付近に分布する基底礫層、砂層から構成される標高-22~-2m付近に分布する下部層、粘土・シルト層から構成される-10~-6m付近(狭さく部より上流域)に分布する中部層、砂層から構成される-6m以浅に分布する上部層に分類している。

### 3 高瀬付近の狭さく部以北の玉名平野の地形発達史

玉名市教育委員会(1989)のボーリング資料及び本遺跡で行ったボーリング資料の結果から考察を加えるが、平野部において基盤に達している資料が少なかったため更新世の堆積物から上位の環境を考察する。

本遺跡のボーリング資料からは、長岡ら(1997)が分類しているように、沖積層は、基底礫層、砂質の下部層、粘土・シルト質の中部層、砂質の上部層(菊池川両岸の低地では粘土及びシルト質粘土となる)に区分できる。これらの下位には更新世の堆積物である阿蘇3火砕流堆積物が堆積している。層相としては、軽石、スコリアを主体とする非溶結部である。玉名平野の東西方向での基底礫層以上を取り除いた地形(沖積層の下限)は、右岸・左岸とも標高-10mから-15mの位置にある。現在の菊池川付近には、標高-20mより深い埋没谷があり、1万年前以前も河床であったようである。

これらのことから、玉名平野の地形発達史として以下のようなことが考えられる。玉名平野付近では、玉名花崗岩や片岩類などの基盤の谷間を約11万年前に噴出した阿蘇3火砕流堆積物が埋積した。その後、河川の浸食により一旦谷地形となるが、約9万年前に噴出した阿蘇4火砕流堆積物によって再度埋積され平坦な地形を呈することとなる。最終氷期である約1万年前までは、海水準の低下による河川の浸食が進み谷地形を形成し谷底に砂礫が堆積された。その後、約9000年前(縄文早期)から縄文海進の影響を受け、海水準が上昇

することにより堆積が進み徐々に下部層や中部層の堆積により平野部が形成される。約6000年前(縄文前期)には海水準もピークをむかえたと考えられる。その後、約4000年前(縄文後期)から海水準の低下により砂質の上部層が形成され現在の地形に至っていると考えられる。

尚、菊池川両岸で見られる粘土及びシルト質粘土は、菊池川、木葉川、繁根木川の後背湿地にて形成された粘土と考えられる。

### 4 完新世における海面変化

玉名平野は、高瀬付近の狭さく部より南側部(横島町から岱明町にかけて)は、縄文海進時には、現在の海岸線より5km~8km内陸側にあったとされており、干拓地を除く平野部一帯は、砂、シルト及び粘土が卓越する海成層である。また、高瀬付近の狭さく部より北側の平野部には、狭さく部付近に明瞭な遷急点があるとし、縄文海進はこれより上流には及んでいない(長岡他、1997)と考えられている。

しかし、海性のマガキや汽水性のヤマトシジミを産する菊水町若園貝塚の存在すること。本遺跡において、30mのボーリングコアの花粉・珪藻などの詳細な土質分析で、縄文時代に湾外の海水の影響を受けているという結果を得ていること。また、玉名市上小田にある上小田宮の前遺跡でも同様の土質分析を行っているが、花粉・プラントオパール分析の結果、照葉樹林を主体とする温暖な気候でこれらのことがわかっており、珪藻分析やボーリングコアの観察により干潟や汽水域の環境を繰り返す海岸線の不安定な環境にあったことがわかっており、縄文海進は狭さく部より北側の平野部にまで及んだ可能性が高いと考えられる(詳細な記載は後述)。

本遺跡で土質分析の結果、標高約-2.8~-3.3mまでは海水・汽水域の内湾環境指標種群が優勢であり海水の影響を受けている。仮に3.3mの深度で高潮位であったとしても、有明海の潮位差5mを単純に2で割った値2.5mを海水準だとして、3.3mから2.5m差し引いた0.8mは海面後退期(年代は特定できない)に現在の海面より



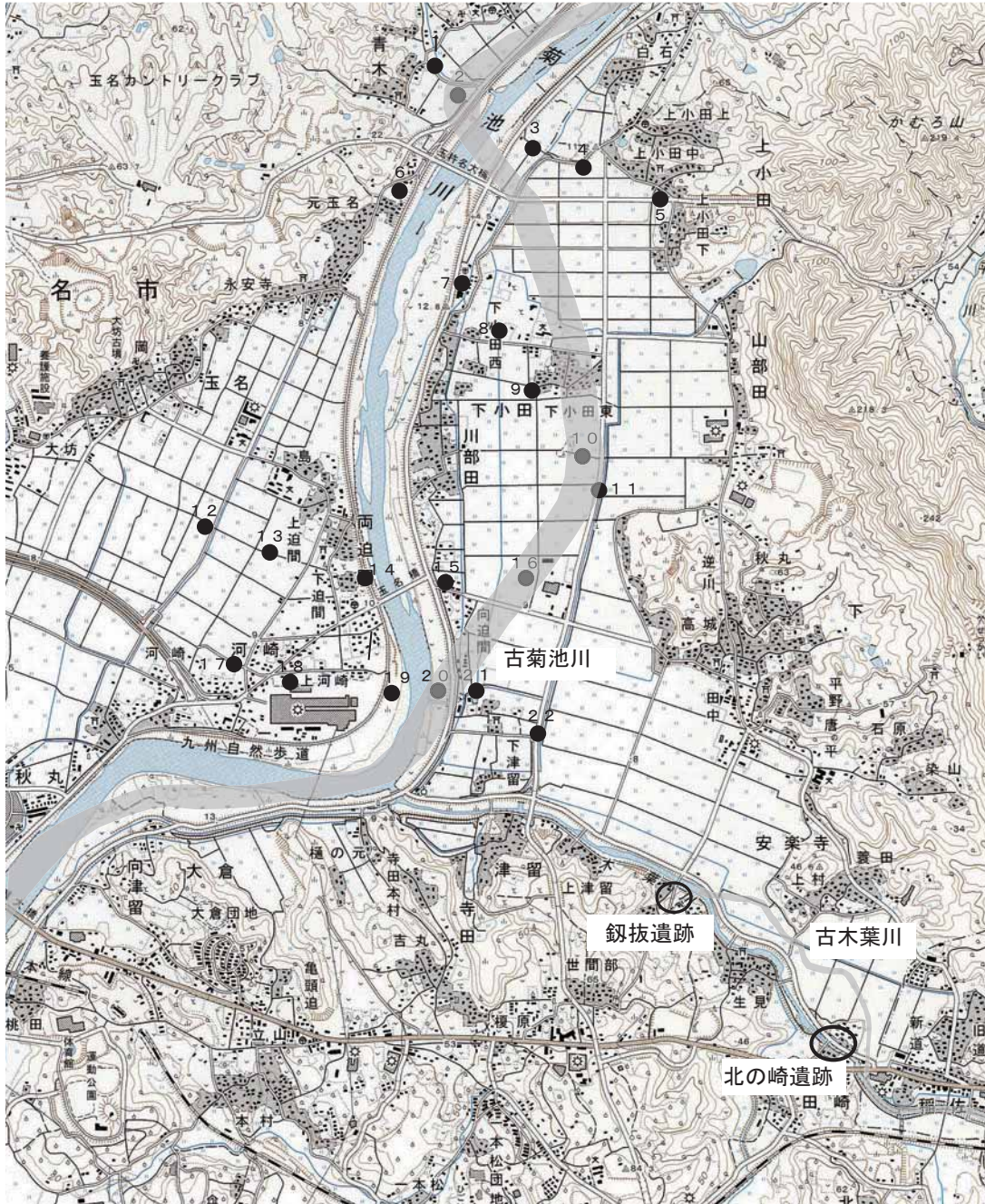


図-12 菊池川及び木葉川の旧河道（ボーリング地点は、菊池川流域遺跡詳細分布調査事業報告書（玉名市教育委員会）より引用）

少なくとも上昇していたと考えられる。本遺跡の洪積台地上で縄文前期形成の堆積層の標高は、8.7mであるが、この層位において海性及び汽水域の堆積物の様子を呈しないため、海面が最大に上昇したとしても本洪積台地が海水の影響を受けることはなかった。

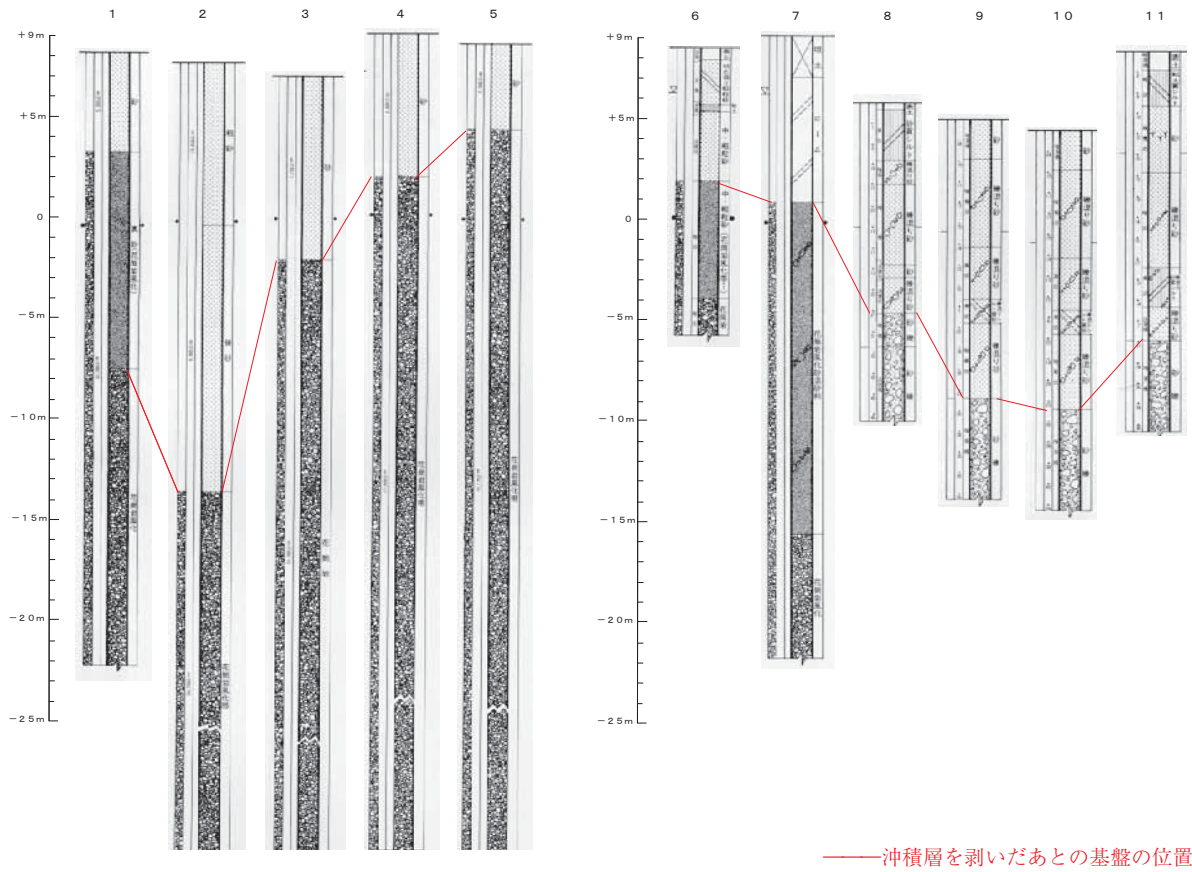
一方、上小田宮の前遺跡でおこなった土質分析の結果から、海面後退期（約5870年前より新しい

時期であるが年代は特定できない）において標高4.6mにおいて汽水域の環境にあったことがわかっており、2.5m差し引いても2.1mは少なくとも海面は高かったものと思われる。

### 5 菊池川の変遷

最終氷期である約1万年前までは、玉名市白石付近において扇状地の頂部とし、海水準の低下による谷底に砂礫が堆積された。ボーリング柱状図





—— 沖積層を剥いだあとの基盤の位置

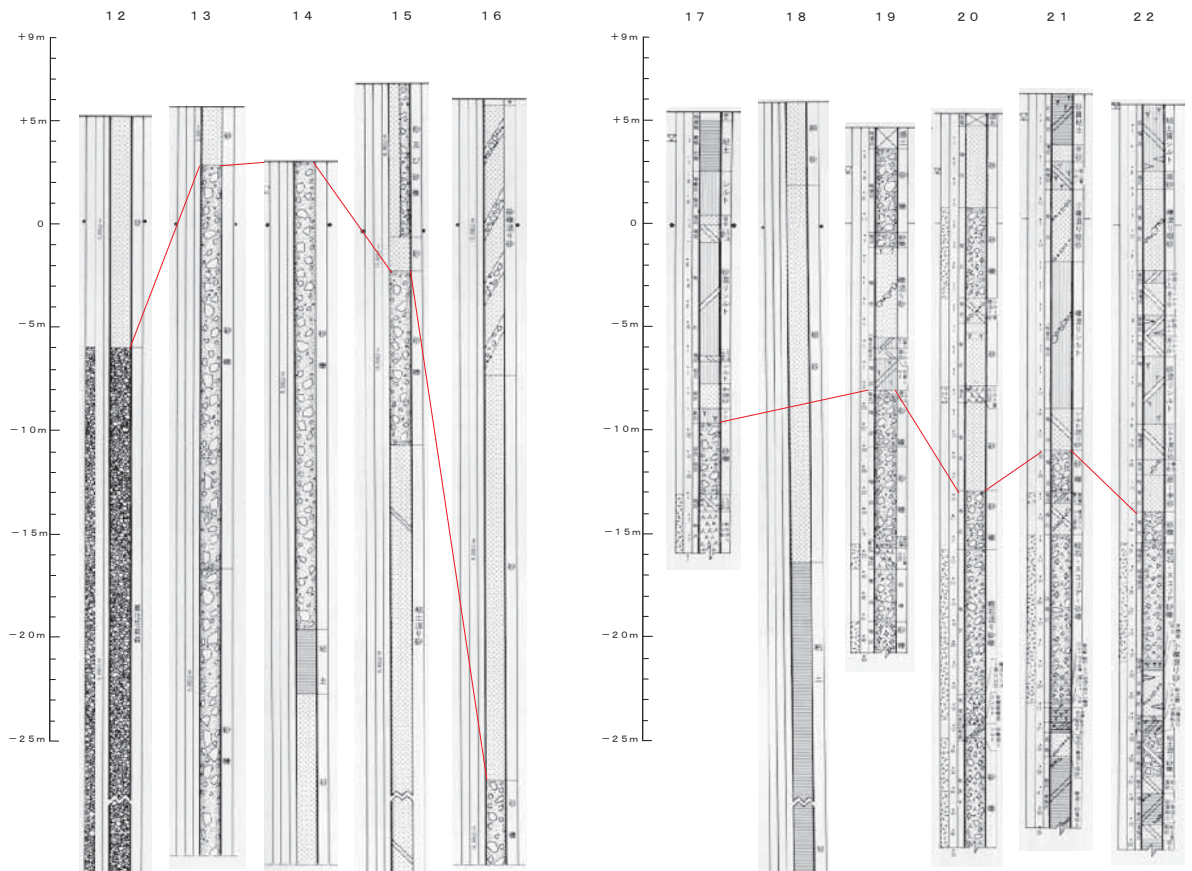


図-13 玉名平野における基盤水準（約1万年前の堆積物の高さ） 菊池川流域遺跡詳細分布調査事業報告書より引用・加筆



図-14 肥後国中之絵図（正保国絵図）に見られる菊池川と木葉川（玉名市史；1992）

（玉名市教育委員会：1989）をもとに玉名平野を横断する地点を配置したものが図-13である。砂礫層まで下刻された部分の各横断面で最も標高の低い所で海拔-10m程度であり、最終氷期（約1万年前）以前に下刻されたものであると考えられる。よって最も下刻された部分を河床付近と考えて旧河川の変遷を考察する。

最終氷期以前の菊池川は、玉名市下小田付近においては現在よりやや東側を流れていたと考えられる。その後、河川の堆積作用に伴う砂礫及び礫混じり砂が8・9・10・11付近、15付近、19・20・21付近で上位の堆積物から認められるため上記の地点付近を流れていて、比較的新しい時期（詳細は不明）に現位置を流れるようになったと考えられる。

上小田宮の前遺跡では、想定してる旧河川とほ

ぼ平行に旧河川が認められており本流であるか支流であるか不明であるが推定流路とほぼ合致するのは本流である可能性を大きく示唆しているものとする。尚、上小田宮の前遺跡で検出された旧河川の覆土から古代の遺物が認められ、少なくとも古代までは東側に大きく蛇行していたものと推定される。また、菊池川左岸側には、上小田古屋敷遺跡（縄文から中世）、太郎丸遺跡（中世）、祭田下遺跡（古墳・中世）が想定している流路の両側に位置することは非常に旧河川の位置関係に調和的である。

対して右岸側には、近年発掘がすすめられている玉名平野条理跡遺跡（弥生から中世）や柳町遺跡（縄文から中世）での調査成果等からも河川の痕跡は検出されておらず、ボーリング資料からも河川があったような堆積物も認められないことから



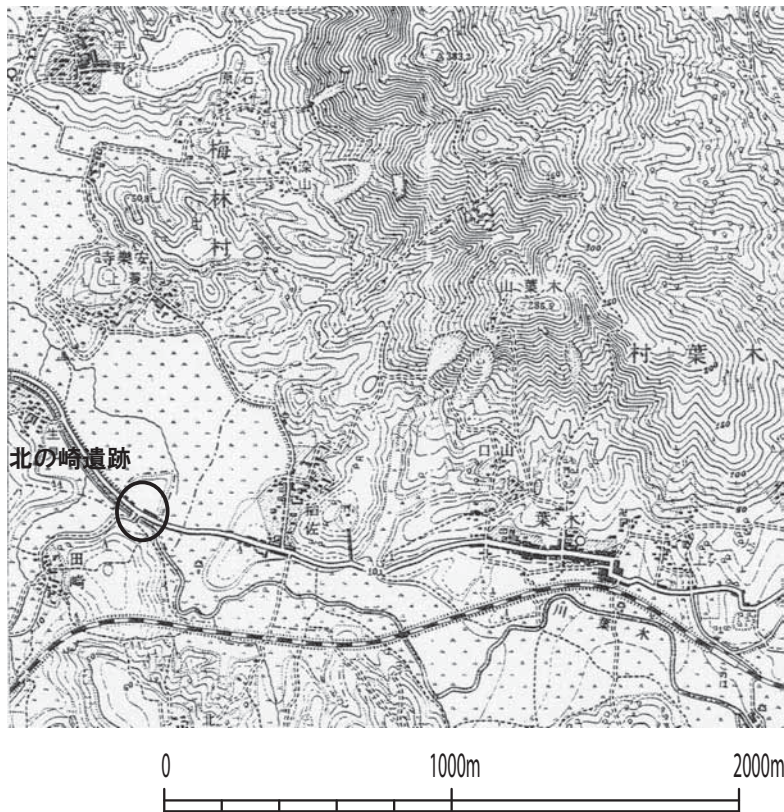


図-15 大日本帝国陸地測量部発行の2万分の1の地形図（植木）

ら縄文から中世まで菊池川が現位置より西側に移動した痕跡は見いだせない。これらの遺跡が当時自然堤防部に位置していたとすると中世まで菊池川が東側へ移動していたことが理解できる。

## 6 木葉川の変遷

旧河川の流路を調べるための資料は絵図である。絵図では、慶長国絵図や正保国絵図（図-14）などの国絵図が残されている。しかしながら、木葉川に関しては、地形との関係がわかるものはない。

そこで、大山〔祭田下遺跡（熊本県教育委員会）；2008〕は、木葉川について検討するうえで絵図は近世以降の村単位の絵図が有効であるとし考察を加えている。

「内田手長絵図」〔宝暦14年（1764）以降成立〕では、中世の安楽寺領玉名荘であった付近に大きな流路が二筋流れている。北側の流路は、安楽寺村のすぐ側を通り三池往還がその流れに沿う。南側の流路は、生見・部田・群前を通り現在の流路に近い（祭田下遺跡；2008）。

近代の「郡村図」〔明治12年（1879）から明治

15年（1822）成立〕では、三池往還が南側の流路の堤塘上を通っており、三池往還のルートが「内田手永絵図」以降に変更されたと考えられ、北側の流路に該当するのは安楽寺村の久保田溝と考えられるとしている（祭田下遺跡；2008）。

しかしながら、「郡村図」で北の崎遺跡が所在する田崎村において、木葉川は舌状に張り出す洪積台地を断ち切るように流れている。木葉川に沿うように三池往還も隣接している。筆者は、木葉川が氾濫や河川争奪により流路が変わり台地を横切る流路に変わってしまったとは考えにくいと思っている。河川は周囲より低い低地を流れるのが普通である。一気に高さ3m、幅約150mにわたり崩壊

させなければ流路は変わらない。水が大地を乗り越えるなど物理的にも無理がある。地質的にも深さ2m付近より下位には阿蘇の溶結凝灰岩があり岩盤にあたるものまで一気に削り取る必要があることになる。以上のことから、人為的に木葉川の流路を台地を横切る形に変えてしまったことが考えられる。本調査によって、中世の溝が木葉川に切られていることは付け替えたことに調和的である。明治45年7月30日大日本帝国陸地測量部発行の2万分の1の地形図に北の崎北側にある水路付近に旧木葉川があったと考えている。玉名市津留・安楽寺埋蔵文化財予備調査（熊本県教育委員会；2004）において、安楽寺上村において砂礫からなる河川堆積物が認められており、旧木葉川が現在の位置より北側に流れていたことが考えられる。

以上のことをまとめると、北の崎では、少なくとも宝暦14年（1764）以降には現位置に木葉川が流れておりそれ以前に流路を変える土木工事が行われた可能性が高い。しかし、約12世紀前半には遡ることはないと考えられる。

引用文献

玉名市教育委員会（1989）：「菊池川下流域遺跡詳細分布調査事業報告書（1）」（玉名市歴史資料集成第6集），玉名市，84p.

長岡信治・横山祐典・中田正夫・前田保夫・奥野淳一・白井克己（1997）：有明海南東玉名平野の地形発達史と完新世海面変化，地理学評論，70 287-306.

長谷義隆（1993）：第5章 地質，玉名市史編集委員会編：「玉名市史資料篇3 自然」，玉名市，47-63.

第2節 歴史的環境

北の崎遺跡・釵拔遺跡は、玉名市街地北側に位置する玉名平野の菊池川左岸側に位置する。九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査や木葉川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査により、弥生時代以降の古代・中世を中心に当該地域の歴史が少しずつではあるが、わかりつつある。これまでの発掘調査の成果や文献等から、玉名平野を中心にまとめる。

[旧石器時代]

玉名平野周辺では、玉名市岱明町（旧玉名郡岱明町）の西照寺遺跡からサヌカイト（結晶が少ないガラス質の輝石安山岩であり四国讃岐地方で産出し別名讃岐石とも呼ばれている）製の石器の出土や玉名市箱中から同じような石器の出土をみる程度である。

[縄文時代]

この時代では、晩期に朝鮮半島から北部九州へもたらされた稲作文化が、この玉名地域に伝わり定着させるための下地をつくったともいえる平野形成に大きく関わった縄文海進がおこった時期である。詳しくは前述しているため地理的環境を参照して頂きたい。

この時代は、玉名市高瀬を狭さく部として広がる玉名平野を形成した内湾と周囲の洪積台地とが接するような場所を中心に当時の生活が営まれている。当時の海岸線を復元する上で非常に参考となる貝塚が、縄文時代の遺跡としては中心となる。

縄文前期の尾田貝塚（旧天水町）、縄文中期の繁根木貝塚・保田木貝塚・桃田貝塚（玉名市）、縄文後期の若園貝塚等が代表的貝塚としてあげられる。一方沖積平野では、最近の調査で菊池川左岸に位置する上小田宮の前遺跡から後期から晩期にかけての縄文土器が出土している。中でも縄文晩期の炭化したドングリが付着した深鉢形土器が流路から出土している。また、台地（伊倉丘陵性台地）から後期から晩期にかけ最近発見されつつあり、吉丸前遺跡からは住居跡や土坑等の遺構が検出されている。このように最近では伊倉丘陵性台地上での発掘調査が盛んにおこなわれることにより縄文時代後期から晩期の様子が少しずつではあるがわかりつつある。

[弥生時代]

弥生時代になると縄文時代とくらべて格段に遺跡の数も増加する。特に顕著となるのが菊池川流域の沖積地や洪積台地への進出である。

弥生前期では、玉名市伊倉の城ヶ崎貝塚や玉名市天水町の斎藤山貝塚がある。特に斎藤山貝塚からは、弥生前期の標識となる土器である板付式の甕や壺とともに、鉄斧が出土している。青銅器が台頭するこの時期に鉄器が出土しており新たな知見を提供した遺跡でもある。菊池川流域では、当時の自然堤防上にあつたであろう柳町遺跡からも夜臼式・板付式土器などが出土している。中期以降になると、菊池川流域を中心として集落跡が知られるようになる。中期においては、北部九州の影響をうけた墓の形態である甕棺墓や土器が出土している菊池川右岸に位置する前田遺跡がある。近隣では、御竈寺原遺跡（旧玉名郡菊水町）からも甕棺墓群が検出されている。後期においては、高岡原遺跡や諏訪原遺跡（旧玉名郡菊水町）などがある。特に諏訪原遺跡からは、環濠を伴った集落跡が確認されている。近年の調査では、本遺跡の当時の木葉川（旧河川）の対岸にあたる稲佐津留遺跡（玉名郡玉東町）から、後期の集落跡が確認されている。特筆すべきは、彷彿鏡や巴形銅器が発見されていることである。彷彿鏡や巴形銅器においては、菊池川流域の中流域に所在する山鹿







市の国指定史跡方保田東原遺跡からも出土している。方保田東原遺跡は、弥生時代後期の拠点集落であり、菊池川下流域において稲佐津留遺跡もかなり意味をもつ集落跡となりうると考えられる。

本遺跡は、弥生時代中期と古墳時代前期に栄えた遺跡であり、稲佐津留遺跡が繁栄した後期には、生活の痕跡がいったん途絶えてしまう。集落の変遷において稲佐津留遺跡とは大きく関わっている可能性があると思われる。

#### [古墳時代]

玉名平野付近では、小岱山丘陵や菊水丘陵からは中期から後期にかけて装飾古墳や横穴が数多く分布している。菊池川流域では最も古い前方後円墳である4世紀末の山下古墳は、左岸側に位置している。また右岸側には6世紀初頭の円墳の繁根木古墳がある。最古の複式横穴式石室と舟型石棺も直葬する。菊池川からやや離れたところでは小岱山丘陵に4世紀末から5世紀初頭の前方後円墳の院塚古墳がある。また菊水丘陵からは、銀象眼太刀や冠などの知名度の高い副葬品をもつ5世紀末の江田船山古墳がある。その後、主体部が石棺から石屋形に変化していき、装飾古墳の最盛期を迎える。国指定の大坊古墳、永安寺東古墳や永安寺西古墳などが代表的な遺跡である。内部の構造や装飾文様は完成されていく一方、前方後円墳の規模は小さくなる傾向を示すようになる。その後も横穴墓群が築造される。本遺跡に隣接する南側の台地の斜面には、阿蘇溶結凝灰岩をくりぬいて築造された横穴墓である田崎横穴群がある。近年の調査では、伊倉丘陵性台地にある城ヶ辻古墳群では、北部九州（筑後地域）の影響を受けた竪穴系横口式系統の石室が確認され、肥後における墓制に一石を投じる結果が得られている。

さて、これらの古墳を造り上げた集団が営んでいた集落との関係等の詳細なことは不明であるが、周辺の遺跡において集落が確認されつつあるので列挙する。古墳時代前期の集落として菊池川右岸側では玉名市の柳町遺跡・玉名平野条理跡などがあげられる。また菊池川左岸側では玉名市の東南大門遺跡や上小田宮の前遺跡などがあげられる。

古墳時代後期の集落になると蓮華遺跡等（玉名市遺跡地図）があげられる。今後の発掘調査により、古墳時代の集落跡が確認されていくものと思われる。古墳と造墓した集団が営んでいた集落の関連性を解明していくことが望まれる。

#### [奈良時代から平安時代（古代）]

玉名に関する地名の表記において、文献における最初の記載は「日本書紀」で「玉杵名邑」であり、玉名郡は「釈日本紀」における「玉名郡長渚」である。この玉名郡は、「和妙類聚抄」では「多萬伊奈」と表記されており、「日置・為太・石津・下宅・宇部・大町・大水・江田」の八郷がこれに属するとされている（長谷部ほか；2008）。

奈良時代における発掘調査の成果としては、玉名市立願寺地区の調査によって、8世紀ぐらいの礎石群が検出されそこから布目瓦は発見されたことにより、この地に行政中心機関である「玉名郡衙」があったと推定されている。また、「大湊」（玉名市六田）から「上立願寺」（玉名市立願寺）にかけて伸びる8世紀の道路状遺構が検出されており、西海道とは別に郡衙道としての主要幹線道路が存在していたことが明らかになった。さらにこの道路状遺構は、真南方向の海に向かってることから延びる方向からも水駅の存在が想定される。1992年にトレンチ調査が行われ、棧橋に伴う杭列と立石がセットで発見され港の施設ではないかと思われる遺構も検出されている。有明海と菊池川の利用に使用された地方港湾があった可能性がある。当時の大湊は地形的にも袋状の入江が想定されているが、現在はその形状は呈していない。しかし、大湊の南側を流れていた菊池川から流れ出た土砂が北上する沿岸流の影響で埋められたことが容易に想定されその存在は十分考えられる。

さらには、古代の玉名郡には、郡の北の方を南北に「西海道」が通っているとされており、郡内には「大水」と「江田」に駅が置かれていた。本遺跡は金峰山からのびる丘陵部低地域から平野部への開口部にあたるため、本遺跡周辺を「西海道」が通って玉名郡の北側へ延びていた可能性も否定できない。

表-1 遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
045	青木磨崖梵字群	青木 田代上前田	中世	石造物	県	熊野社境内20数個の梵字あり
048	玉名の平城跡	玉名 平城	中世	城		菊池川右岸に屹立、眺望地
049	青木横穴	青木 上前田	古墳	古墳		青木梵字の北40m 1基、羨門損壊
050	上小田宮の前	上小田 宮の前など	弥生	包蔵地		弥生土器・石斧・土師器・須恵器
055	四十九	築地 四十九	縄文～中世	包蔵地		須恵蔵骨器1個出土
109	大坊古墳	玉名 出口	古墳	古墳	国	横穴2室、三角連続彩色あり
110	大坊寺跡	玉名 東屋敷	中世	寺社		大坊前天満宮社地、糸切皿が出土する
111	大坊五輪塔群	玉名 大坊	中世	石造物		部落中5～6基祀る
116	岡箱式石棺群	玉名 上原	弥生	埋葬		妙修寺の墓地内3基・2基保存
117	永安寺西古墳	玉名（通称永安寺）	古墳	古墳	国	横穴単式、円文線刻
118	永安寺東古墳	玉名（通称永安寺）	古墳	古墳	国	横穴複式、円・三角・舟・馬を描く
119	永安寺跡・永安寺古塔碑群	玉名（通称永安寺）	中世	寺社		東古墳の東隣、玉名大神宮西、五輪塔・宝塔、在銘
120	伝玉依姫塚	玉名 釈迦		石造物		社伝で上記古塔群をいう
121	馬出古墳（1～2号）	玉名 馬出	古墳	古墳	市	円墳、横穴式、舟形・箱式石棺。出土品市指定
122	小路古墳	玉名 小路	古墳	古墳	市	27mの山上にあった。他へ復元。出土品市指定
123	絵下経塚古墳	玉名 絵下	古墳	古墳		玉名大神宮裏山にあり、封土・周溝あり
124	大永・弘治の板碑群	玉名 浦小路	中世	石造物		元玉名の地藏堂前に2基あり
125	元玉名横穴群	玉名 実極田	古墳	古墳		風化、2基
126	上小田古屋敷	上小田 古屋敷	縄文～中世	包蔵地		土師器・須恵器片散布
127	下小田西丸塚	下小田 陣の浦	古墳	古墳		五輪塔部分あり、中世墳墓か
128	下小田養寺丸塚	下小田 養寺	中世	墳墓		養音寺跡という、板碑あり
129	小森田松	山部田 猿喰	古代	包蔵地		墓標に「金誉秀清尼」とあり
130	長建寺跡	山部田 瀬戸坂	中世	寺社		木葉山の西裾、現在形跡なし
131	諏訪宮跡	山部田 出羽	中世	寺社		熊野宮に合祀、現在形跡なし
132	小森田七右衛門墓	山部田 新宮	近世	墓		内田郷惣庄屋、旧白石堰建設者
133	山下古墳・山下古墳碑	山部田 山下	古墳	古墳		前方後円墳、舟形棺。弘化5年石碑前方部石棺上
134	高城	下 高城	古墳	包蔵地		土師器・須恵器・青磁片少量散布
135	下村城跡	下 高城	中世	城		本丸跡に薬師堂・五輪塔群あり
136	秋丸	下 秋丸	弥生	包蔵地		弥生土器多量出土
137	松村・永鳥兄弟墓地	下 井尻	近世	墓		幕末勤王志士兄弟
138	両迫間日渡	両迫間 日渡	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器・須恵器包含、水田中
140	上小田下丸塚	上小田 堂の後	古代	墳墓		円墳状を呈する
141	上小田城跡	上小田下 徳丸など	中世	城		中世丘城古墳、改造の形跡
142	大宝院跡	下 和田	中世	寺社		
143	金光寺跡	川部田 東屋敷	中世	寺社		
144	海福寺跡	下 白丸	中世	寺社		
145	養音寺跡	下小田 養寺	中世	寺社		
146	普門寺跡	下 田中	中世	寺社		
147	長慶寺跡	両迫間 上川端	中世	寺社		
151	平町	築地 平町	古代・中世	包蔵地		土師器・須恵器片分布
152	小路	築地（通称小路）	近世	包蔵地		寛永通宝数400個出土
153	浄光寺南大門跡	築地 南大門	中世	寺社		寺跡より南約300m三巴布目瓦多量出土
154	南大門地下式横穴	築地 南大門	古墳	古墳		

第Ⅱ章 遺跡の概要

155	浄光寺蓮華院跡	築地 南大門	中世	寺社	市	仏具・仏像等出土、現在新寺建つ。 出土品は市指定
156	浄光寺蓮華院跡閼白塔	築地 南大門	中世	石造物		大五輪塔2基並ぶ
226	松林寺山古墳	向津留 下	古墳	古墳		大型舟形石棺露出、棺蓋不明
233	金盆山玉飯寺跡	川崎 出の上	中世	寺社		川崎八幡神宮寺墓地のみのこる
242	飯塚古墳	向津留 飯塚	古墳	古墳		円墳、保存度良し
243	亀頭迫	大倉 亀頭迫など	弥生～中世	包蔵地		土師器、弥生後期
244	木村鉄太の墓	大倉 亀頭迫	近代	墓		木村家墓地内、日本最初世界一周者
245	立山	大倉 (通称立山)	弥生～中世	包蔵地		弥生後期、土師器等散布
246	城が辻古墳群 (1～5号)	寺田 城が辻	古墳	古墳		1号箱式石棺・2号円墳、完形遺存・ 5号丘陵先端
247	城が辻城跡	寺田 城が辻	中世	城		
248	寺田古墳群 (1～4号)	寺田 宇土	古墳	古墳		1号台地北端、2号舟形、3号箱式 石棺、4号処女墳
249	吉丸	寺田 吉丸	古代・中世	包蔵地		菊花文入瓦器多量出土
250	ナカント塚古墳	寺田 吉丸	古墳	古墳		部落西南畑中、封土あり、内部不明
251	吉丸西	寺田 吉丸	縄文～中世	包蔵地		
252	久保地下式横穴	寺田 久保	古墳	古墳		国道208号線の北大穴窟、出土品なし
253	寺田久保	寺田 久保	縄文～中世	包蔵地		
254	世間部塚古墳	寺田 世間部	古墳	古墳		「塚さん」という、山伏塚か
255	部田	津留 部田	弥生～中世	包蔵地		高台畑地、磨製大型石鏃出土
256	上津留古墳	津留 小部田	古墳	古墳		円墳、高台北端に位置、径25mの封 土遺存
257	花群山吉祥寺跡	津留 堂園	中世	寺社		狭い高台上、跡地に毘沙門天を祀る
258	安楽寺跡	津留 太郎丸	中世	寺社		跡地に氏神菅原神社を祀る
259	安楽寺居館跡	津留 太郎丸	中世	包蔵地		跡地に氏神菅原神社を祀る
260	菅原神社の六地藏	津留 白柏子	中世	石造物		
261	太郎丸	津留	中世	寺社		
263	朝日寺跡	安楽寺 生見	中世	寺社		跡地に観音堂・板碑あり、規模拡大
264	田崎横穴群	田崎 楯山	古墳	古墳		国道208号沿い、3基と造りかけ
265	随月古墳	安楽寺 随月	古墳	古墳		
266	善応寺跡	下 平野	中世	寺社		
267	賢長寺跡	下 桑迫	中世	寺社		
268	金盆山玉飯寺跡	川崎 畑尾	中世	寺社		
269	金地山松林寺跡	向津留 下	中世	寺社		
270	津留中林	津留 中林	縄文～中世	包蔵地		
271	随岸寺跡	安楽寺 陀羅原	中世	寺社		境内の洞穴中に不動尊を祀る
272	浦方染山横穴群	安楽寺 (通称裏方)	古墳	古墳		梅林小学校裏手谷合い、4基風化する
273	蓑田横穴群	安楽寺 蓑田	古墳	古墳		稲佐への県道東入り、数基
274	長福寺跡	安楽寺 蓑田	中世	寺社		横穴近くの藪中跡地に観音堂・五輪塔
275	安楽寺京塚	安楽寺 京塚	中世	経塚		十王社を祀る
276	一本松	田崎 一本松ほか	弥生～中世	包蔵地		甕棺群あり
277	田崎	田崎 天神原・辻	古墳～中世	包蔵地		台地畑、土師器・須恵器片少量散布
278	中神久	安楽寺 中神久	古代・中世	包蔵地		古代・中世遺物散布
302	振倉謝公墳	伊倉北方	中世	墓		安山岩自然石板碑形式、本堂山にあり
303	大宮司宇佐一族の墓・石碑	伊倉北方 堂山	中世	石造物	市	7基あり、市指定3基
304	中尾山報恩寺跡	伊倉北方 堂山	中世	寺社		本堂山、墓地だけが残る
305	補陀落渡海碑	伊倉北方 堂山	中世	石造物		本堂山墓地内にあり、日照渡海、天 正4年建立
306	本堂山古塔碑群	伊倉北方 堂山	中世	石造物		本堂山報恩寺跡あり、板碑12基、外塔
307	本村屋敷古塔碑群	伊倉北方 本村屋敷	中世	石造物		板碑1基、五輪塔部分多数散乱



308	福田寺跡	伊倉北方 本村屋敷	中世	寺社	跡地に豪壮な地藏堂・宝篋印塔・五輪塔あり
309	福田寺跡宝篋印塔	伊倉北方 本村屋敷	中世	石造物	地藏堂前にあり、「文政十有一年戊子春」
310	本村	伊倉北方 本村	縄文～中世	包蔵地	
333	伊倉八幡古墳	伊倉北方 宮の後		古墳	北八幡宮境内、社前に巨石材2個あり
334	伊倉宮の後	伊倉北方 宮の後	縄文	包蔵地	縄文、阿高式・御領式土器・石斧・石鏃
335	伊倉宮の後甕棺群	伊倉北方 宮の後	弥生	埋葬	合口甕棺多数
336	伊倉古宮原	宮原 古宮原	弥生	包蔵地	弥生土器・土師器・須恵器散布
337	垣塚古墳	伊倉北方 東垣塚	古墳	古墳	くり抜き石棺形式出土、封土不明
338	岩井口横穴	伊倉北方 岩井口	古墳	古墳	伊倉台西端崖面、かなり崩壊
340	伊倉犬塚古墳	伊倉北方 鳥越	古墳	古墳	現在封土を失う
351	青野原	青野 原・北原	弥生・古墳	包蔵地	
352	合田	青野 合田	弥生・古墳	包蔵地	
353	青野屋敷跡	青野 合田・田の尻	中世	包蔵地	古井戸、現在雑木林
354	青野本村曲畑	青野 本村・田の尻	弥生・古墳	包蔵地	弥生～古墳土器多量包含
355	七浦経塚	青野 本村・七浦	中世	経塚	内容不明
356	青野古墳	青野 本村	古墳	古墳	
359	青野天神原	青野 天神原	弥生・古墳	包蔵地	弥生～古墳期土器包含
360	青野火葬墓跡	青野 天神原・辻	古代	包蔵地	八弁花文瓦器蓋付深鉢（火葬骨入）、蓋付碗
361	中坂門田	中坂門田 西	弥生・古墳	包蔵地	
362	京塚古墳	中坂門田 京塚	古墳	古墳	内容不明
363	島田一族墳墓地	北坂門田 水落		墓地	宮大工、自然石切石5基
364	白骨どん古墳	北坂門田 井戸	古墳	古墳	小円墳、箱型石棺露出
365	古閑	中坂門田 古閑	古墳～中世	包蔵地	須恵器・土師器片
388	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
389	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
390	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
391	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
392	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
393	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
394	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
395	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
396	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
397	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
399	大坊	玉名 大坊			玉名市遺跡地図にあり
414	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
415	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
416	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
417	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
418	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
419	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
420	新宮宮前	山部田	弥生・古代	包蔵地	玉名市遺跡地図にあり
421	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
422	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
423	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
424	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
425	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
426	名称不明				玉名市遺跡地図にあり

## 第Ⅱ章 遺跡の概要

427	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
428	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
429	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
430	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
431	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
432	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
433	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
434	瀬萩	安楽寺 瀬萩	古代～中世	包蔵地		玉名市遺跡地図にあり
435	祭田下	津留 祭田下	古代～近世	包蔵地		玉名市遺跡地図にあり
436	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
437	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
438	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
439	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
440	寺田山口	寺田 山口	縄文～近世	包蔵地		玉名市遺跡地図にあり
441	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
442	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
445	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
446	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
447	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
448	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
453	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
455	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
456	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
457	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
458	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
459	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
460	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
461	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
463	名称不明					玉名市遺跡地図にあり
482	柳町	玉名市河崎柳町	縄文～平安	集落		県調査、文字資料
483	玉名平野条里跡	玉名、迫間ほか	古代・中世	生産		
484	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
485	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
489	玉名平野条里跡		古代・中世	生産		
493	群前	寺田 群前	弥生～近世	集落		
494	北の崎	安楽寺 北の崎ほか	縄文～中世	集落		弥生土器、土師器、須恵器、土坑
495	鋤拔	安楽寺船島ほか	弥生～古代	包蔵地		弥生土器、土師器、須恵器
498	上ノ辻	玉名 上ノ辻				

古代の出土遺物として特筆すべきものとしては、立願寺廃寺から出土している円面硯・土馬・墨書土器や柳町遺跡から出土している木筒状木製品等があげられる。

条里制跡については、条里に関わる地名として玉名市高瀬を狭く部として広がる玉名平野全域に広がる。菊池川右岸側では、玉名市岩崎付近の

字「四ノ坪」「三十六」や同山田付近の「十六」があたる。左岸側では、同下村付近の字「唐ノ平」「十五」や同安楽寺付近の字「三十六」がそれにあたり比較的大きな条里地割が想定される。本遺跡の発掘調査では、畦等の水田に伴う遺構は検出されなかった。



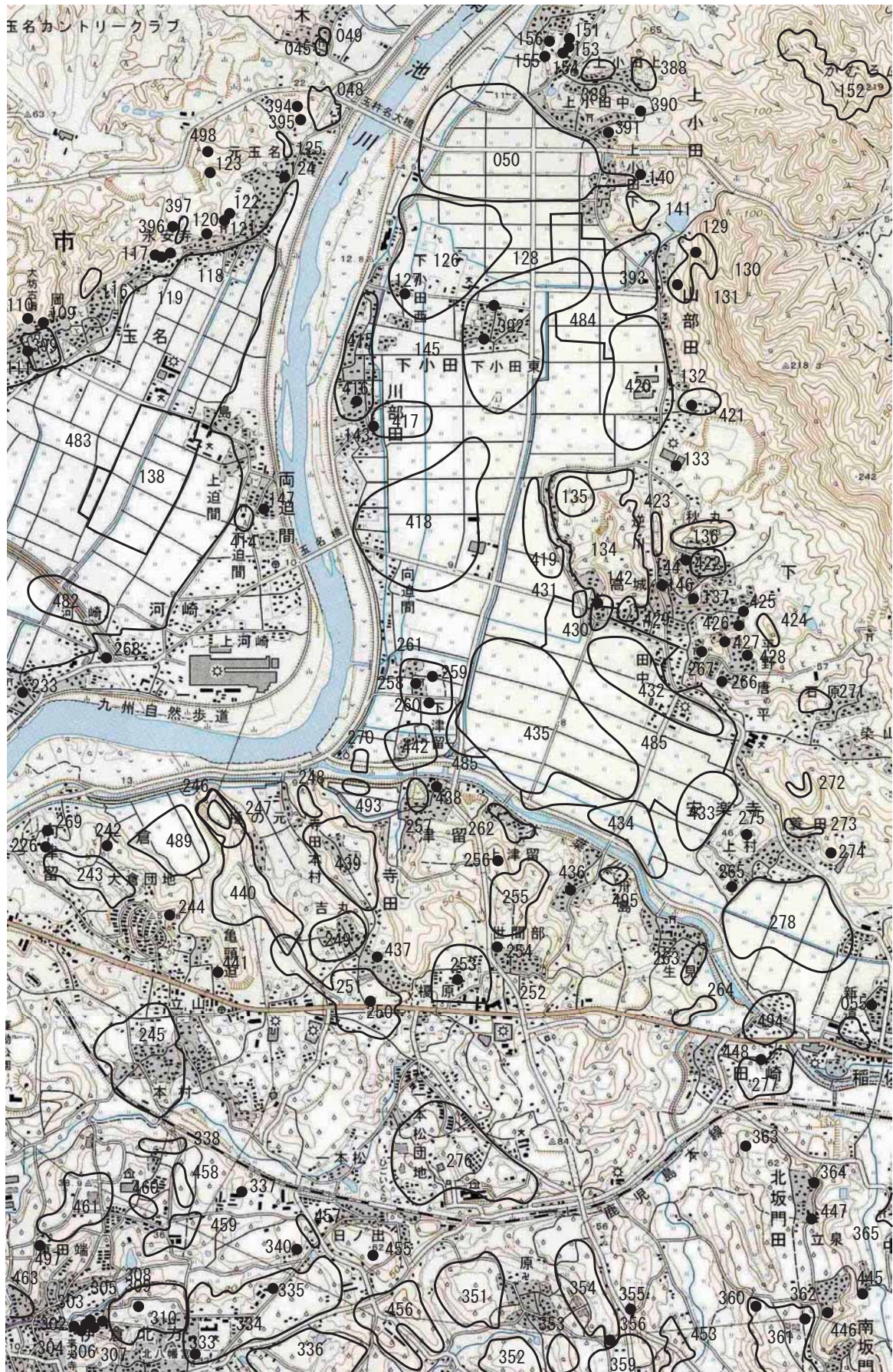


図-16 北の崎遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)



〔鎌倉時代以降（中世から近世）〕

中世にはいると、荘園が成立し、これを単位として領域を行政的に管轄するようになった。11世紀はじめには、菊池川の左岸側に大宰府天満宮安楽寺領玉名荘が成立し、12世紀前半には伊倉に宇佐八幡宮伊倉別符が成立する。南北朝には、白木原・稲佐・白間野で戦闘があり、菊池氏は、伊倉次郎や稲佐次郎光宇らと同じ南朝方で活動し、建武3年には高瀬に進出している。この高瀬は、朝鮮・明の地誌である「図書編」や「海東諸国紀」にも記されており、菊池一族がこの港を通じて明や朝鮮と貿易をおこなっていたことがわかっている。高瀬は、当時博多に次いで九州では第2位の港湾都市として栄えたところである。菊池氏において、港を制圧し自己管理下におくことは、非常に重要な課題であり、高瀬進出のねらいもそこにあったといえる（村上；1987）。本遺跡においてもこの時期の遺構が検出されており、多くの出土遺物が発見されている。

近世以降になると、天正16年（1588年）に豊臣系大名として肥後北部の領主となった加藤清正は、隈本城を本城と定めて統治を開始した。慶長5年（1600年）に小西行長が関ヶ原の合戦により所領を没収（除封）された後は、肥後国を加藤清正

が統治することとなった。清正は、唐人川流路を廃止し、菊池川の流路を変更し一本化した。また、現在の伊倉方面に流れていた菊池川の本流を、現在の大浜方面に付け替えるため塘や堤防を築き治水事業をすすめるとともに、有明海の干拓をすすめたとされる。

寛政9年（1632年）に加藤氏改易後に細川氏が入封し玉名地域を統治した。細川氏は、寛政12年に郡と村の間に手永という行政区を設置し、各手永は惣庄屋が支配した。当地域は、小田手永、内田手永、坂下手永に分割されている。高瀬は独立した行政区で一大拠点であった。菊池川流域の各手永からの年貢米は舟で下りこの高瀬に集約され、舟から直接町屋の倉に運び入れることができることとなる。また、高瀬にはこの年貢米の集約地として藩倉がおかれている。有明海の家交通と菊池川の河川交通の結節点という地の利を生かして城北地方の一大中心地となっていった。

最後に北の崎遺跡と命名することとなった字図を付しておく。なお、明治12年から明治15年に作成された「玉名郡村図」から玉名市教育委員会が作成されたものである。なお、「玉名郡村図」は、熊本県立図書館に所蔵されている。



図一17 玉名郡村図 (玉名市史資料篇1 絵図・地図より引用)

### 第三章 調査成果

#### 第1節 調査について

##### 1 調査地について

###### (1) 調査にあたっての開削工法及び調査機材

本遺跡は、洪積地と沖積地をもつ遺跡である。洪積地（1区・2区・5区・6区・7区・8区）について、7区と8区の調査においては、調査区より2mほど高くなって隣接する県道302号線の法面保護のため矢板を打って開削工法をとる。沖積地（3区・4区）においては、3区では木葉川の左岸堤防の法面保護のため3区北側に矢板を打つこととなった。3区及び4区では、調査区の周りを矢板で囲まない「止水鋼矢板なし開削工法」をとり掘削することとなる。

調査機材にあたっては、洪積地である7区及び8区において、現地表面からの掘削深度が深いためベルトコンベアによる廃土運搬を行うこととした。一方沖積地である3区・4区は、現地表面からの掘削深度が深いことからベルトコンベアを使用し廃土運搬を行うとともに、調査中湧水する箇所が出現した

ため水中ポンプにより恒常的に排水した。

###### (2) 調査区の設定

調査総面積は、5038㎡である。調査地は、(現)木葉川の北側の道路、宅地及び水田部である。本工事は旧県道302号線を隣の宅地部に移設した後、旧県道302号線を河川拡幅のため掘削する工事工程があったため、まず宅地部の調査を完了した。その後集落への進入路となる里道を移設し、その後現里道の調査を行うこととした。これらが完了したのち、県道302号線を調査完了した宅地部へ移設し、旧県道302号線の調査を行うこととなった。そのため、発掘調査順に、宅地部を1区・2区、里道部を6区、道路部を7区・8区と設定した。また、宅地の調査とほぼ同時期に沖積地と洪積地の一部の調査を行ったため、それぞれ3区・4区及び5区と調査区を設定した。

##### 2 調査の方法

調査にあたっては、調査を開始する前に発掘調査要領を作成し、調査担当者が共通理解を行い同じ調査の精度であたれるようにした。以下その要旨のみを記載しておく。

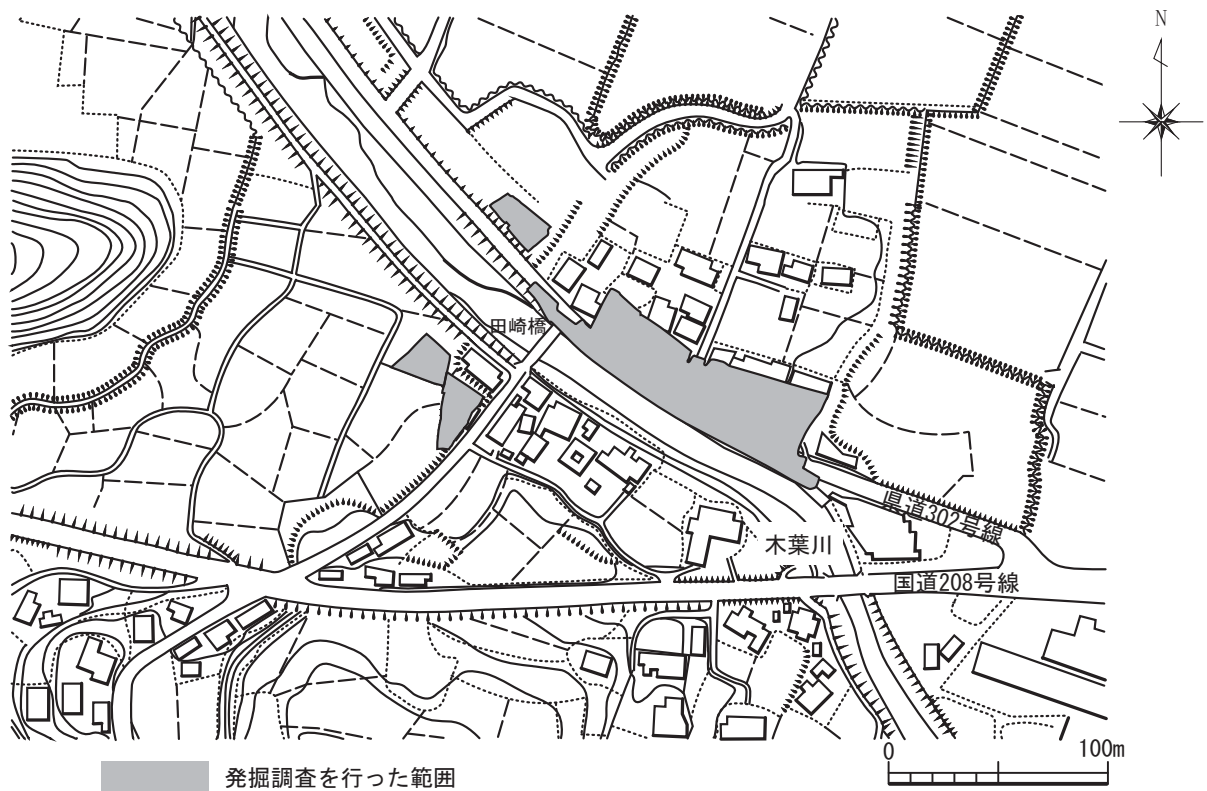
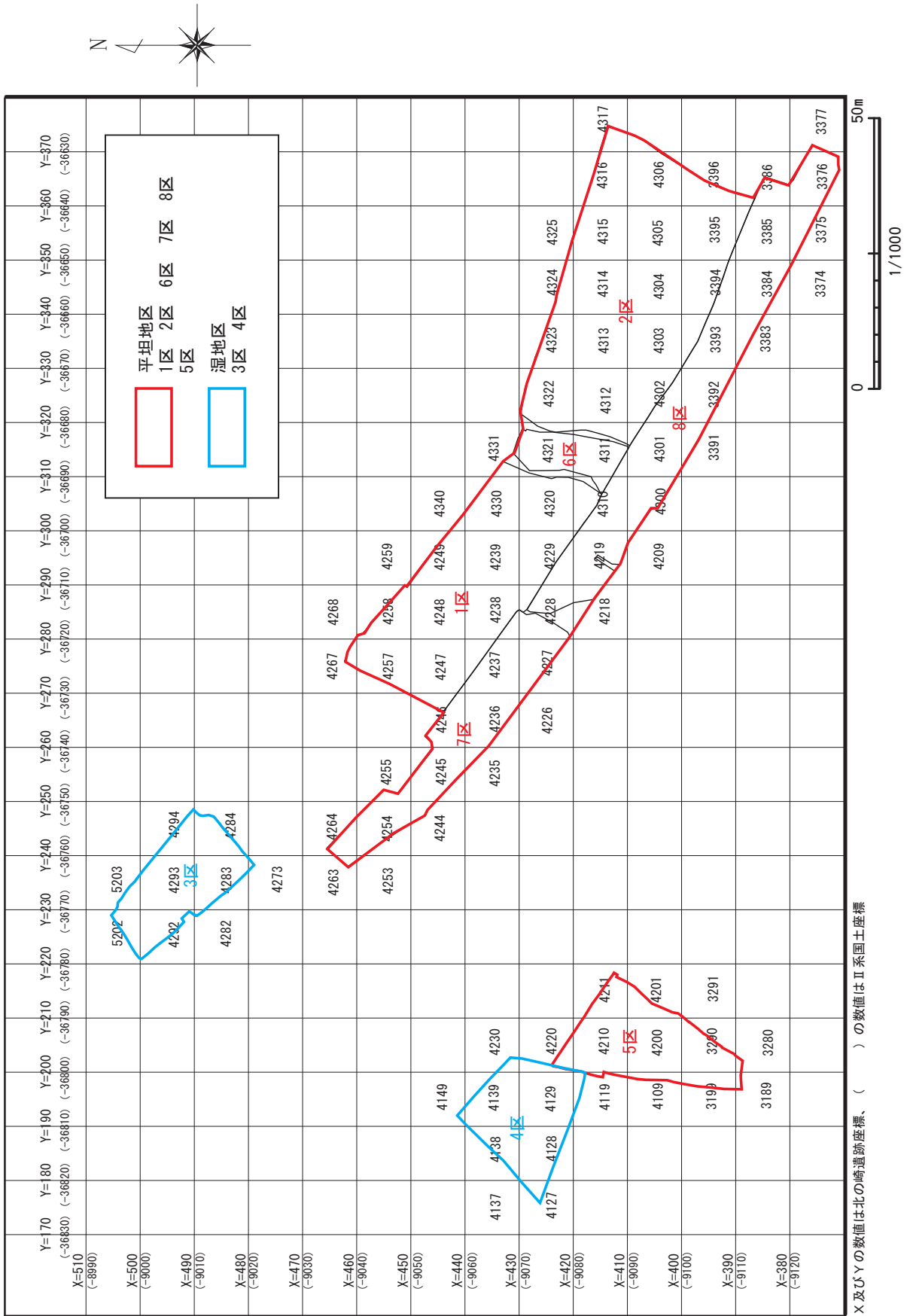


図-18 北の崎遺跡発掘調査位置図



図一十九 北の崎遺跡調査区及びグリッド設定図 (1/1000)



### (1) 測量

木葉川災害復旧等関連事業において熊本県土木部が設置した日本測地系の基準点資料をもとに、既知点間を検査測量精度確認した上で、新設基準点を打設し結合トラバースを組み基準点測量を調査区ごとに行った。また、メッシュ杭設置においては、設置した4級の新設基準点をもとに、調査区域内のメッシュ杭を10mピッチで打設した。よって、今回、北の崎遺跡は、木葉川災害復旧等関連事業に伴う基準点資料を使用したことにより日本測地系による座標を用いることとした。

### (2) グリッド調査法

国土座標（Ⅱ系）に準拠した10mグリッドを基本単位とするグリッド法を用いた。北の崎遺跡は、玉名市田崎地区の広い範囲に所在する遺跡である。すべての範囲を網羅するために、国土座標に基づき北の崎遺跡座標を設定した。国土座標（ $X = -9500\text{m}$ 、 $Y = -37000\text{m}$ ）を北の崎遺跡座標を原点（ $x = 0\text{m}$ 、 $y = 0\text{m}$ ）として、3桁の正の整数で表すこととした。国土座標から北の崎遺跡座標への変換式は次の通りである。（ $x$ 、 $y$ ）=（ $9500 +$  国土 $X$ 座標、 $37000 +$  国土 $Y$ 座標）また、10mごとに打設したグリッド杭の名称は、北の崎遺跡の座標値（ $x = 100a + 10b$ 、 $y = 100c + 10d$ ： $a$ は $x$ 座標の百の位の数字、 $b$ は $x$ 座標の十の位の数字、 $c$ は $y$ 座標の百の位の数字、 $d$ は $y$ 座標の十の位の数字である）を「 $abcd$ 」として表し、各グリッドの南西隅の杭名をグリッド名とした。

### (3) 分層調査法

層位については、遺物包含層（土器や石器などの遺物を含んだ自然堆積層）の層位と遺構内の埋土（人為的もしくは自然に遺構を埋めた土）で使用する層位を区別するために、遺物包含層については、算用数字で上層から1層、2層…と表記し、遺構内の埋土の層を表す時には算用数字の前に埋められた土であるという意味を持たせるため「埋」をつけ、埋1層、埋2層…と表記した。尚、調査の途中で漸移層（層と層の境界で漸移的に移りかわっていく部分）や新たに認識された層が出てきたときには、アルファベットの小文字をつけ、埋2 b層のように細

分した。

### (4) 実測図作成

現地での発掘調査における実測図作成にあたっては、1/20の縮尺で断面図・平面図・遺物出土状況図を作成した。ただし、詳細にとる必要があるものについては、1/10の縮尺で作成した。

尚、遺構実測図作成、出土遺物の座標の測量、地形測量においては、出土遺物の量が多量であり作業量が莫大になることから、実測業務の迅速化を図るため光波測距儀を使用したデジタル図化を行った。デジタル図化においては、遺構実測支援ソフト「遺構くん（cubic）」を使用した。

### (5) 写真撮影

遺構検出時（掘削前）、遺物出土時（掘削中）、完掘時（掘削後）の各段階において、調査担当者が小型カメラと中型カメラを使用し、モノクロとカラーで撮影した。また、各調査区において調査が完了した際に実機ヘリコプター等を使用し、航空写真を撮影した。

### (6) 出土遺物の取り上げ

出土遺物の取り上げについては、各グリッド、各層位ごとに一括して取り上げる方法と出土地点を平面座標と標高を記録して取り上げる方法のどちらかを必要に応じて採用した。なお、遺構において、床直（床面の上に直接留まっている）の遺物においては、遺物出土状況図を作成し図面上に遺物名を与え記録していくとともに「遺構くん」によりデジタル点データとして記録していった。遺構埋土中や遺物包含層中では重要度や破片の大きさなどをもとにデジタル点データとしても記録していった。

### (7) 地形測量

今回の調査では、上位の層が後世の土地利用のため削平をうけており、良好な遺構検出面が基本土層3層しか存在しなく、この面で縄文晩期から古代までの遺構を全て検出しなければならない環境にあった。そこで、2層や3層の各層の堆積状況が一定していたため、各包含層の掘削が完了した4層で地形測量を行った。

さらに、過去の地形復元のため10cmピッチで等高線図を作成した。

## 第2節 北の崎遺跡の地質及び基本土層

### 1 北の崎遺跡の地質及び古環境

本遺跡は、住宅が広がる平坦地区の部分と水田が広がる湿地区からなっている。平坦地区の部分に関しては、約25000年前より古い砂礫層（低位段丘面）の上に、縄文時代（約7000年前）以降に形成された土壌が堆積している。少なくとも18000年間は堆積できる環境になかったため侵食を受け続け削平されている。

尚、縄文時代以降の地層に関しては、2において述べる。縄文時代の早期から後期にかけ、地球規模で温暖化し、海水面が上昇した縄文海進の時期を迎える。この縄文海進は、本遺跡が所在する玉名平野においては、平野形成に大きく関与したことであり、いずれ到来する稲作に大きく関与しているため、本遺跡で実施した古環境変化に関する調査成果をもとにやや詳しく報告するものとする。尚、詳細な内容については、附論において熊本県全体に広げ記載するので、そこでご覧頂きたい。

さて、本遺跡の縄文海進時の環境変遷については、湿地区において地層の中に多くの情報が保持されている。地層の中でも、粘土や粘土に近い土壌には、当時の炭化した植物、植物が残した花粉、植物の中でもイネ科の植物の体の中には植物珪酸体と呼ばれるガラス質の結晶及び水の中に住む珪藻が残されている。しかしながら平坦地区（一段高くなった土地）では、乾燥しているため植物の花粉等は上から覆いかぶさるものが少ないためほとんど花粉等のこん跡は残されていない。よって、水分を多量に保持して外へ流れ出るのが少ない湿地区は、平坦地区と比較して当時の情報を莫大に保持している。

図-20の左側に載せている柱状図の地質名を見て頂くと、地表からの深さ約11mより深いところでは、主に砂や礫が堆積しており、それより浅いところでは、粘性土（粘土のような粘り気のある土）とシルト（手で触るとややザラザラ感のある土）が中心となる。砂や礫は、大雨や洪水時に流れ出たものであり扇状地を形成するような谷の出口にみられるような堆積物である。一方、粘性土は水の働きにより細

粒化されたものが堆積したもので海面上昇に伴う湿地化等によるものであり、堆積物の種類からどのような地形の部分になっていたか推測できる。これに図-20の右側のC14年代値をあわせてご覧頂きたい。粘性土が中心になっていく深さ約11m付近では、約7190年前という結果がでていいる。縄文海進は約7000年前に開始されたとされているので、地層の特徴と年代が非常に合致している。さらに、堆積する速度を算出すると、弥生時代の土器を包含する基本土層4層（約2560年前）から2層（約820年前）までの堆積速度は100年あたり6.9cmに対し、海水の影響を受けたと考えられる深度3.4mから深度10.75mまでの堆積速度は100年あたり15.9cmにも及び、はるかに深度3.4mから深度10.75mまでは堆積しやすい環境にあったことが推察できる。堆積物が、粘性土からシルトの比較的粒の小さいものから構成されていることや最近の堆積環境よりも速い場所であることから河川が海にそそぎ出る河口付近で、近くにはミオ（河口付近の河道の両側にできる砂でできた高まり）があり湿地を形成するような環境であったことが推察できる。

また、花粉や植物珪酸体の種類から本遺跡周辺の植生の変遷は次のように考えることができる。周辺植生は、大きく分けて3時期に区分できる。深さ11mから8mまで、深さ8mから3.5mまで、深さ3.5mから約2mまでの3時期である。照葉樹のコナラ属アカガシ亜属など中心とし、エノキ属-ムクノキなどの落葉広葉樹、スギモなどの針葉樹も生息するような環境であった。しかし、深さ8mから3.5mまでの時期では、照葉樹林が拡大し、落葉広葉樹や針葉樹が減少するなど温暖化が進むような傾向をしめすようになる。深さ約3.5mから約2mまでの時期では、水田による稲作がおこなわれるようになり、周辺では水田雑草が生育していた環境であったことがうかがわれる。

珪藻の種類や堆積物の種類から、堆積環境は次のように考えられる。約6000年前から7000年前を中心に海水が上昇し、外洋から内湾の海水の影響を受けながらも若干淡水や陸に近い環境であった。ところが、その後、徐々に淡水や陸域の環境に変化してい

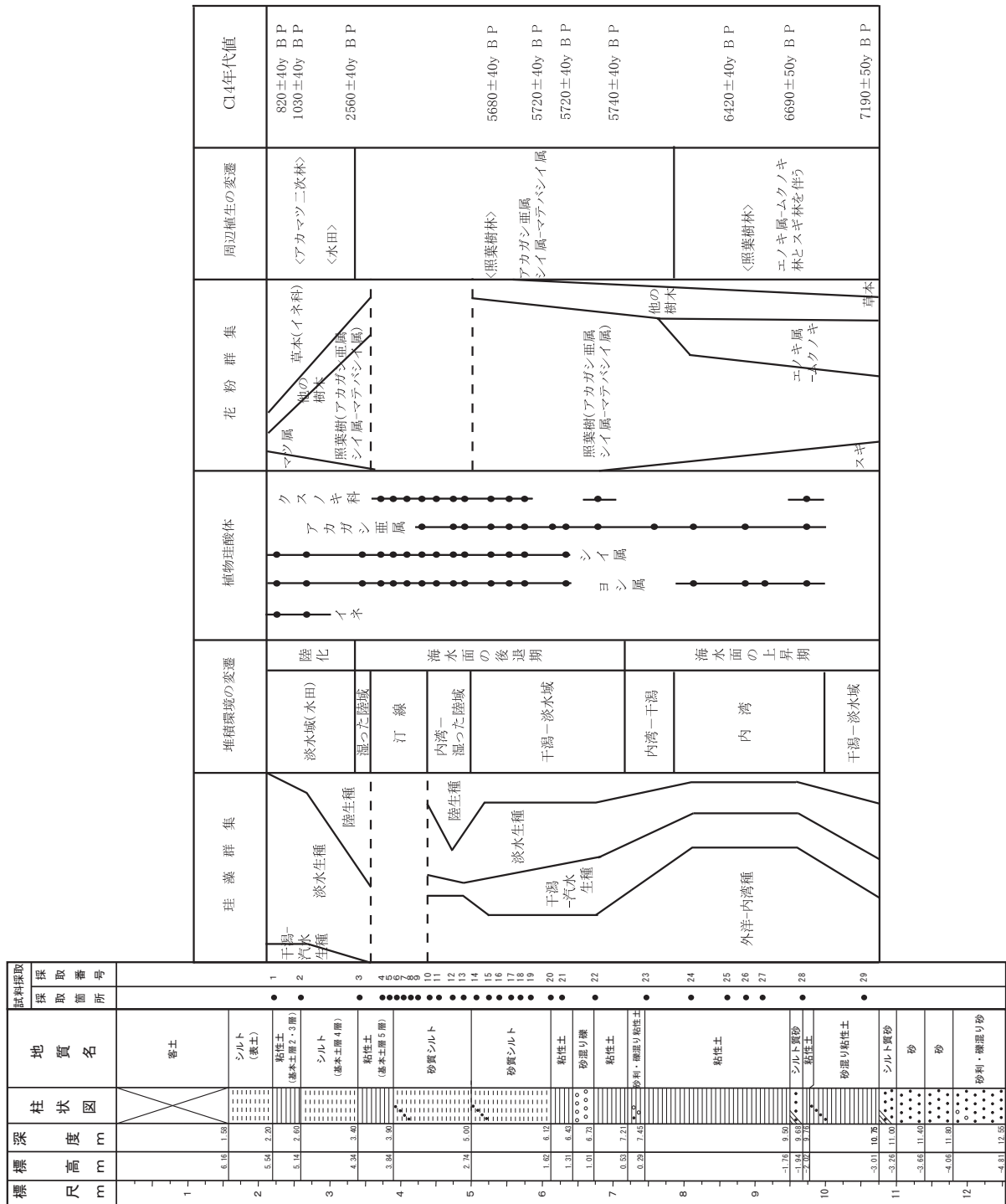


図-20 北の崎遺跡湿地地区総合柱状図及び古環境変遷

き、約2500年前には完全に陸域になっていったことが考えられる。

本遺跡は玉名平野の最も東側に位置し、平野部の中でも一番奥にある。本遺跡がある盆地状の平野部に注ぎ出る地形変化点付近においても縄文海進の影響

を受けている。本遺跡周辺では、縄文海進前では全く海水の影響を受けるところではなかったが、海水の上昇により、地下水が上昇し淡水域へ変化し、さらに海面の上昇により干潟が形成されるような環境となり、さらには海水が入り込んできて内湾へと



変化していった。その後海面が降下しはじめ、干潟から淡水域へと変化していき海水の影響を受けないような環境へと変化していったと考えられる。約2500年前からは、完全に陸化して現在の玉名平野の平坦な土地へと変化していったと考えられる。

尚、縄文時代以降に海進に伴う環境変化によって地形変化が上記のように起こっているが、今回具体的に当時のおおまかな様子をイメージ図として復元した。図-1（ダイジェスト版）は、縄文早期から後期にかけ海面が最も上昇した時期で、遺跡周辺まで海がせまった環境で、図-2（ダイジェスト版）は、海水面が後退した時期にあたり現在の菊池川周辺まで海が引いた環境で、さらに図-3（ダイジェスト版）は、現代の環境に比較的近い水田による大規模な稲作が始まった時期の環境である。

## 2 北の崎遺跡基本土層

発掘調査では、分層調査法を用いて地層を観察しながら各層ごとに掘削を加えていき各時代の人々が生活していた層はどの層なのか考慮した上で調査を進めていく。どの層に当時の人々が残した土器や石器などが含まれているか理解することは当時に生活の様子を復元していく上で重要となる。よって、局地的でも面的に広がる地層を把握することは、発掘調査において極めて重要となり、この作業を怠ると誤った見解を導くことになりかねない。

本遺跡では、前述したように地形・土質的に全く異なる洪積地である平坦地区と沖積地である湿地区の2種類の土層が存在する。よって成因が全く異なる2つの土層を一律に各層ごと結びつけることができないため、それぞれの基本土層を記載する。ここでいう洪積地とは約1万年前（縄文時代早期）以前に形成された土地、沖積地とは約1万年前以降に形成された土地を意味している。尚、沖積地は菊池川左岸側の玉名平野においては連続して広がる地層であるようである。これは、他の遺跡の基本土層の各層と対比できる。よって本事業で前年度に発掘調査を行った釧拔遺跡も基本土層を同じくする。

洪積地の土層は、図-21に示している通りである。

尚、平坦地区の各調査区において安定して同じ土

層を形成し同じ特徴を有していたため、1つの柱状図しか掲載していない。

通常地層の様子を表すために柱状図<sup>ちゅうじょうず</sup>という図を用いる。柱状図には、地表の標高（海拔）と各層の厚さ（層厚）によって表す。各層の詳しい特徴についてはそれぞれ右に解説している。まず層の名前は、算用数字によって上から1層・2層・3層…と名付けている。各層の色については、各調査員全員が客観的に色調をとらえることができるように「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を利用し記録している。尚、土の色は乾燥の程度によって変化するため土の表面を削った直後（乾燥している場合は水をかけ表面が半乾きの状態にして観察）の色を記載することとした。この遺跡でいう表土とは、畑の耕作や住宅の建設等の攪乱や掘削等によって乱された土のことを称している。一部古代（奈良・平安時代）の遺物を含む層が残存していたが、ほとんどの調査区において古代以降に形成されていた地層は削平（削られて消失）もしくは攪乱されていた。本遺跡での包含層の名称を以下のように命名する。2 a層を第1包含層、2 b層を第2包含層、3層を第3包含層とする。2 a層は安定して古代の遺物を包含するが、2 b層については古墳時代・弥生時代・縄文時代晩期の遺物が混同して出土しているため、堆積物をもたらすような堆積場の環境ではなく、逆に侵食が堆積を上回るような場所であるがゆえ約2500年間の遺物が混同するように出土しているものと考えられる。このように堆積する場所でなかったゆえ堆積層が薄く、後世の耕作によって各時代の遺物が攪乱され混ざり合っていることが考えられる。2 b層には古代の遺物がほとんど含まれないことから、古墳時代前期に耕作や他の土地利用によって攪乱された可能性が高い。尚、2層を2 a層と2 b層の2種類に分けているのは、調査開始当初は、表土直下の層は、2層と称して、のちの2 b層しかないと考えていた。しかし調査の進行と同時に、表土の直下に新たな層である2 a層が存在することが明らかとなったため、2層を細分し2 a層と2 b層の2種類を設定し直した経緯がある。3層にも弥生時代及び縄文時代の遺物をはさむが、量的に

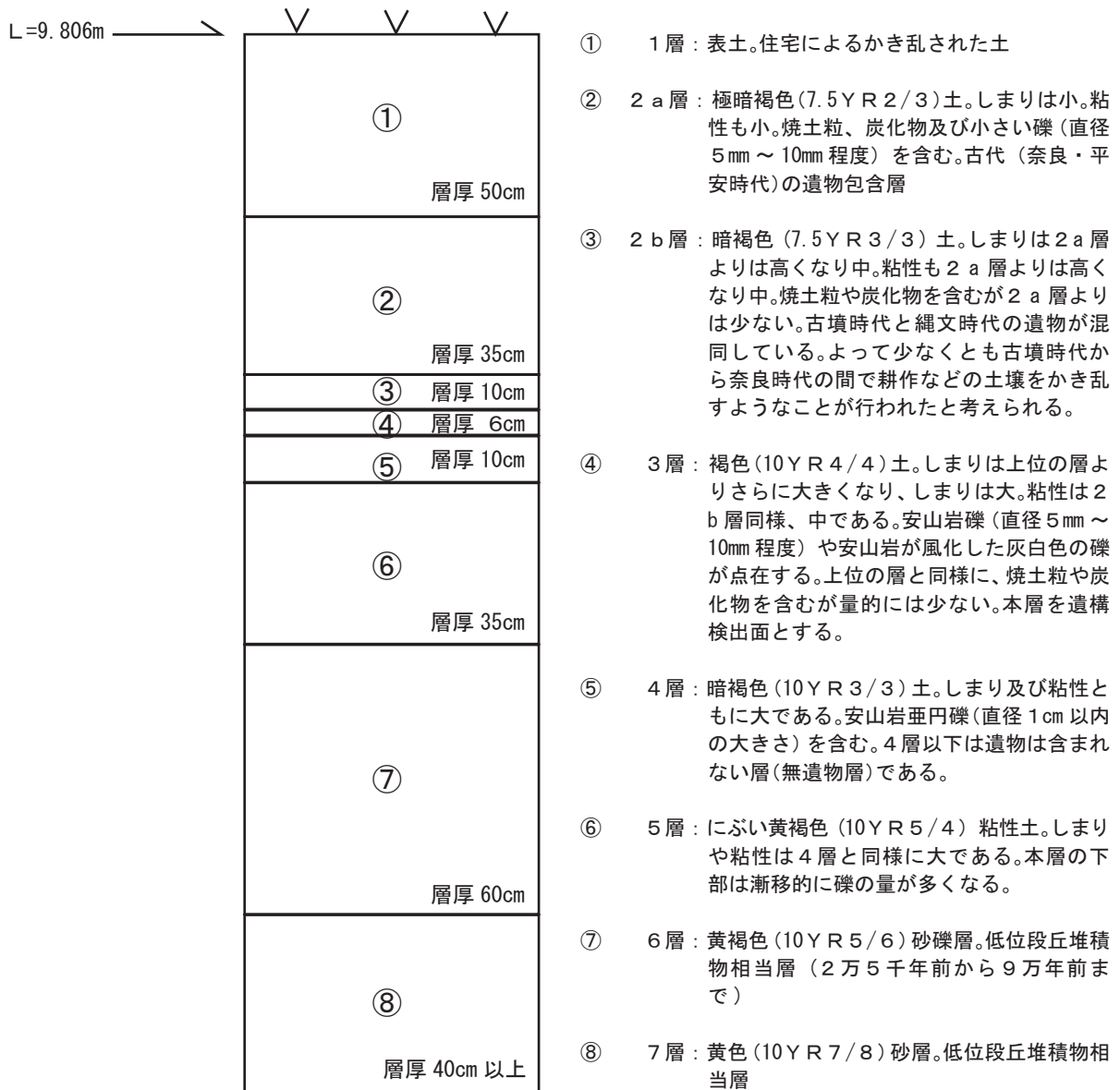


図-21 北の崎遺跡平坦地区基本土層図

上位の層である2 a層と2 b層ほどではない。この3層が本遺跡では遺構を発見する層(遺構検出面)となる。遺構を埋めた土(埋土)は、当時の生活面である黒い土が入り込む。よって埋められた土は黒くなる。遺構の周りも黒い土であればどこに遺構があるかわかるわけがない。そこで遺構の周囲を明るい色でそろえてやると遺構にあたる部分が黒色であるので発見できるのである。そのため他の層と異なり明るい色の地層である3層で遺構を探すこととなる。このように遺構を探すための地層を遺構検出面

という。4層以下の層は無遺物層といい遺物を全くはさまない層である。6層や7層は、少なくとも始良カルデラから噴出のAT(始良・丹沢火山灰)が降灰する以前の層である。全国に降灰した有名な火山灰(広域テフラ)として九州を起源とするアカホヤ火山灰(Ah)と始良Tn火山灰(AT)がある。これらの火山灰は、発掘調査では地層の基準となる有効な鍵層となるのであるが、この両者とも本遺跡は欠落(浸食の場であるがゆえ堆積しない)して存在していない。約4000年前の縄文後期の土器と

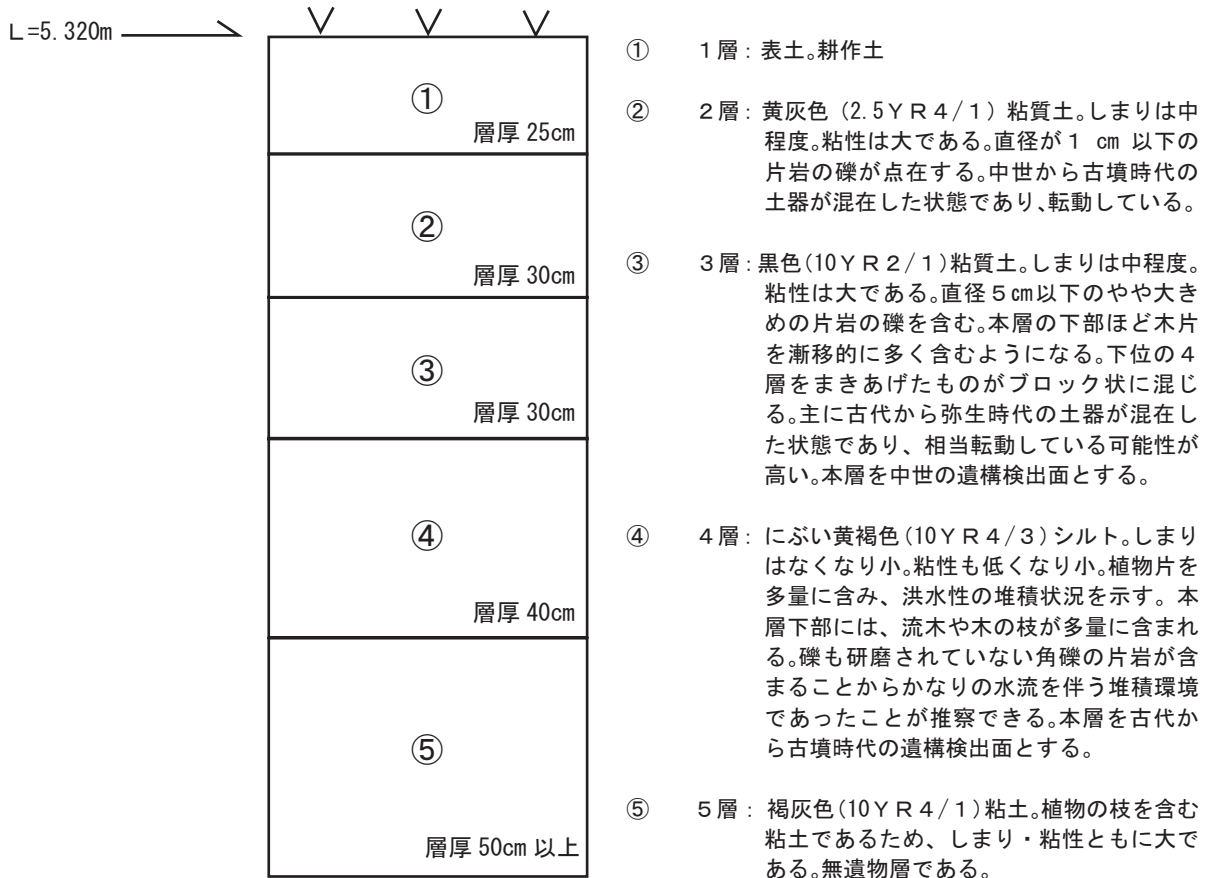


図-22 北の崎遺跡湿地区基本土層図

約1700年前の古墳時代の土器が約10cmの層に凝縮して混同して含むのもこのように堆積できない環境下にあったことを考えれば理解できることである。

一方、湿地区の土層であるが、平坦地区と比べ比較的きちんと層をなして堆積しているが、さまざまな時代の土器が混同して包含される様子からすると、やはり人為的に土が動かされたことをうかがい知ることができる。基本的に2層及び3層が、本遺跡における遺物包含層である。4層からも弥生時代の土器等が出土するが、出水が激しく層位もわからない状況であり調査不可能である。また、多量の水をくみ出すことによる地下水への悪影響が懸念された。尚、4層は主には弥生時代に形成された地層であると考えているが、この層は前述したとおり洪水や増水等によって形成された層と認識している。熊本県

では、この時代に異常気象による洪水等が引き起こされたのではないかと考えられる。他の平野部でも流木や植物片がこの時期の層から発見されているからである。筆者は、弥生時代に今では想像もつかないような天変地異が生じたのではないかと考えている。どのような状況であったのか導き出すためにも他県の沖積地の発掘調査の成果とともに、県内の遺跡のとりまとめが期待される。

尚、湿地区には、3区と4区があるが、両方の調査区で共通の土層を有しているため基本土層図は、図-22のみを掲載した。

本遺跡の湿地区における取りまとめは、「1 北の崎遺跡の地質及び古環境」のとおりである。縄文海進・海退については巻末の附論で古環境変遷について詳しく論じているので参照して頂きたい。



### 第3節 遺構及び遺物

#### 1 平坦地区

##### (1) 縄文時代

今回の調査において、縄文時代晩期における竪穴住居、埋鉢及び土坑を検出した。遺物包含層中から縄文後期の深鉢や浅鉢が出土しているが、この時期に伴う遺構は今回調査では検出されていない。縄文晩期では、天城式を中心とし、古閑式や黒川式の縄文土器が出土している。

#### 1号住居

1号住居が検出されたのは、調査1区の北東部である。全体の形状は、大部分が調査区外であったため、不明であるが、検出された部分の様子から円形の竪穴住居である。南側は古墳前期の土坑により破壊されている。床の部分も欠損した状態である。検出された部分から推定すると、直径約5mほどあり、炉は認められない。硬化面も他の時代の住居とは異なり、しっかりしていない。埋土とは明らかにしまりの状況が異なり、硬化面であることはわかるが、硬化面範囲を引けるようなしまりではなかった。柱穴は5基検出された。しかしながら、整然と並ぶわけではなく、全体の状況もわからないこともあり、どのように柱として使用されたかは不明である。検出面から床までの高さは約25～28cmほどあり、埋土の残りは良い。床面からの柱穴の深さは第1柱穴が約20cm、第2柱穴も約20cm、第3柱穴が40cm、第4柱穴も40cm、第5柱穴は50cmである。第5柱穴は67号土坑からの削平を受けた状態からの深さであるため、実際は約80cmはあると考えられる。深さでも統一性がなく複数回にわたり柱の付け替えがされている可能性がある。

出土遺物は、深鉢で13点、浅鉢で5点出土している。土器の形式では、縄文晩期の天城式を主体とするが、縄文後期と考えられている御領式も含まれている。1, 3, 4は凹線文であり、口縁から頸部の屈曲がきつい。7の口縁部の文様体には、沈線とは言えない押し引きの線を1本ではなく何回か施してある。他の土器は天城式の特徴を有する。1号住居は純粋に晩期の天城式のみではなく、やや縄文後期の御領式に似た特徴を有する土器も出土しており、天城式の時期でもやや古い時期のものである可能性がある。

尚、この1号住居から石器出土はなかった。

#### 1号土坑

1号土坑は、縄文晩期の遺構で、天城式から古閑式の時期の遺構であろうと考えられる。

1号土坑は平坦地区の6区で検出された遺構で、長軸方向が1.6m、短軸方向が1.1mの楕円形の土坑である。長軸方向はN55°Wである。埋土の堆積状況から東側から埋められたと考えられる。埋土の様子では、②で明褐色の焼土が検出され、火を伴う遺構であった可能性が高い。

出土遺物では、深鉢が7点、石器が1点出土している。深鉢では、19, 21で、口縁端部はやや形式的であるが少しつまみ出すだけの口縁部を形成している。20では、貝殻による連続刺突文が見られ、22は口縁部に疑似縄文が施され後期の様相を呈する。23は沈線文である。20や22は流れ込みが考えられ、遺構の時期としては縄文晩期であろう。26は剥片石器である。

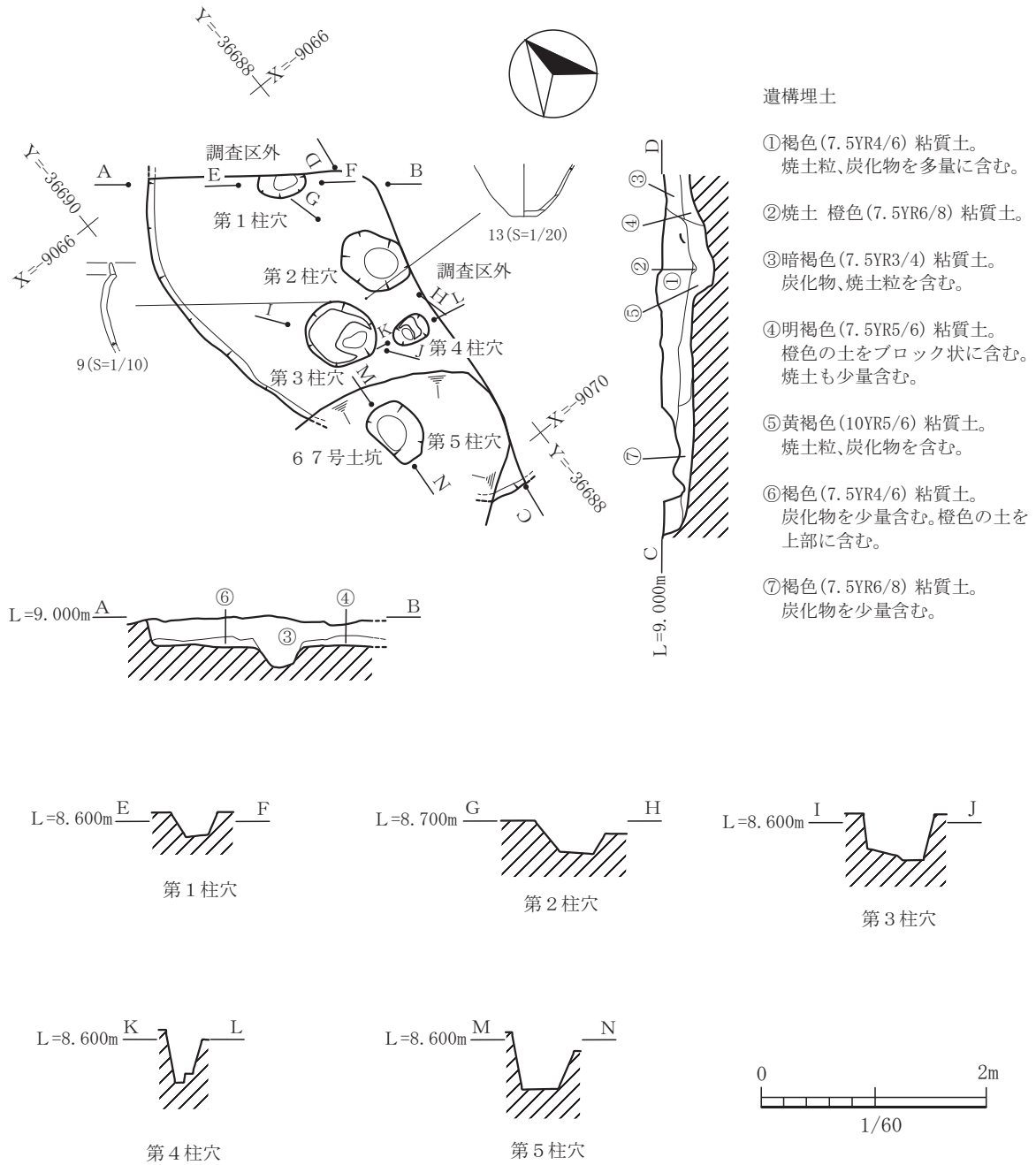
#### 2号土坑

2号土坑は、平坦地区の8区で検出された遺構である。北側半分は調査不可能な地域になり不明である。長軸は、約1.6mで、短軸は、不明である。調査ができた範囲からの推定では、約1m程度にはなりそうである。長軸の軸方向は、N63°Wで基本的に1号土坑とほぼ同じ方向に向いていると考えられる。検出面からの深さは、約50cmを測る。掘方は平坦となっている。埋土の観察からも、焼土を多く含むわけではなく、火を伴うような施設ではなかったようである。用途は不明である。

出土遺物は、縄文土器の深鉢の胴部の破片の1点のみである。胴部の屈曲の程度から、晩期のものであろうと考えられる。詳細な時期は不明である。石器の出土もなかった。

#### 3号土坑

3号土坑は、平坦地区8区で検出された。北側と南側はカクランにより削平を受け、西側は弥生時代中期後半期の9号溝により壊された状態であり全体像はつかめない。検出面から床面までの深さは約30cmであり、南東側の壁は傾斜が緩やかである。この南東部を残してほとんど壁が壊されており全体的な形状や軸は不明である。南東部側の壁の傾斜が緩やかになっているため、おそらくこの方向に軸があ



図一 23 1号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

るものと思われ、主軸は北西にあるものと思われる。焼土や炭化物の含有は少量であった。床面は中央にやや窪んだ部分があるものの平坦な形状を呈している。出土遺物は、深鉢の2/3程度残存する底部1点のみであった。南側の壁と床の境界部で出土している。内外面ともナデ調整である。平底である。底部外面には圧痕が残る。縄文晩期である。

1号埋鉢

埋鉢は俗に埋甕とも言われ、縄文時代において、住居内、外に埋められている鉢のことを言う。石蓋を伴う時もある。用途的には、貯蔵穴に関するものとか呪術的な意味があるとか、飲料水の貯蔵所とか便所、幼児墓棺などさまざまな説がある。しかし、実際はよくわかっていない。





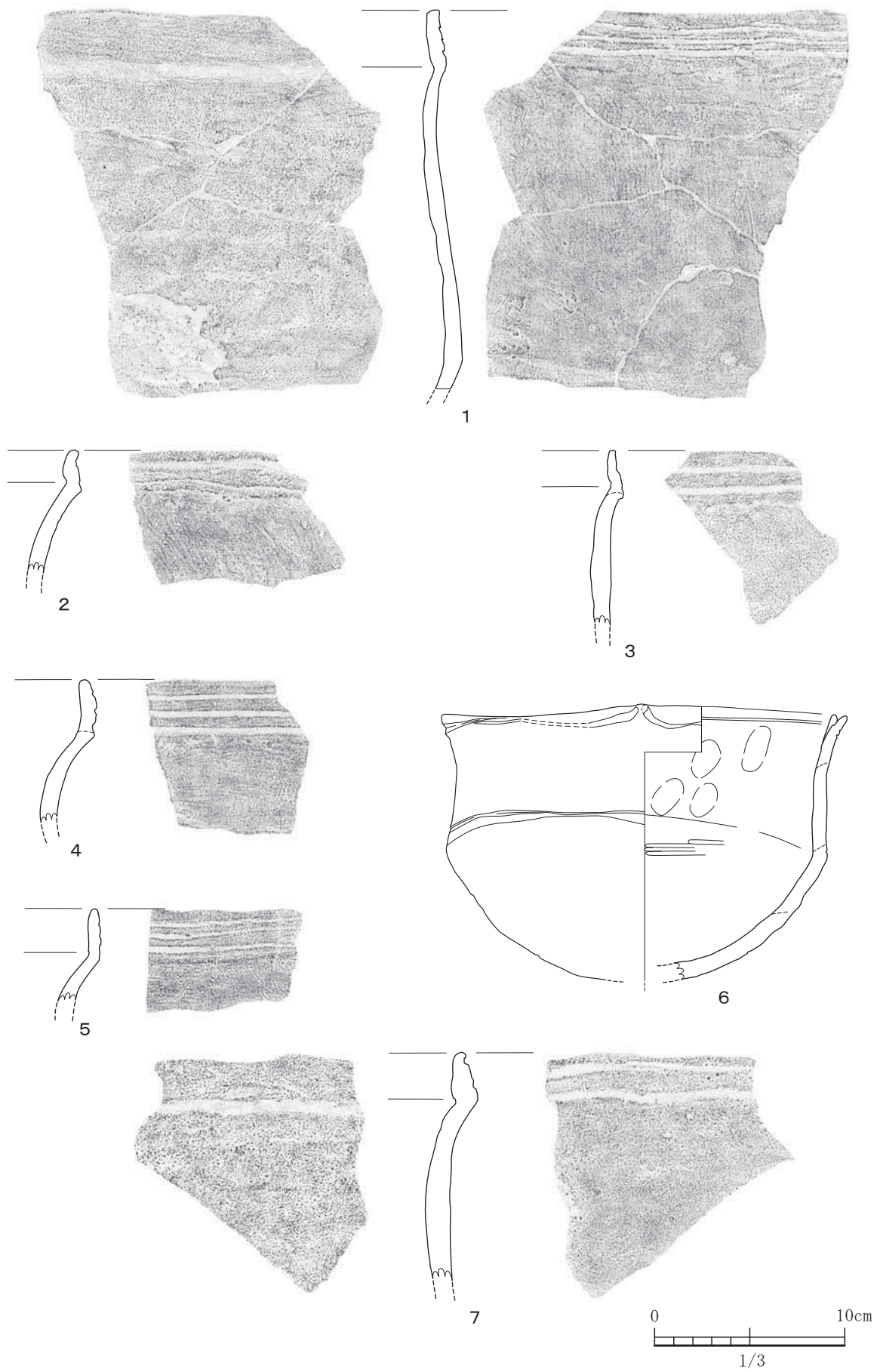


図-25 1号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

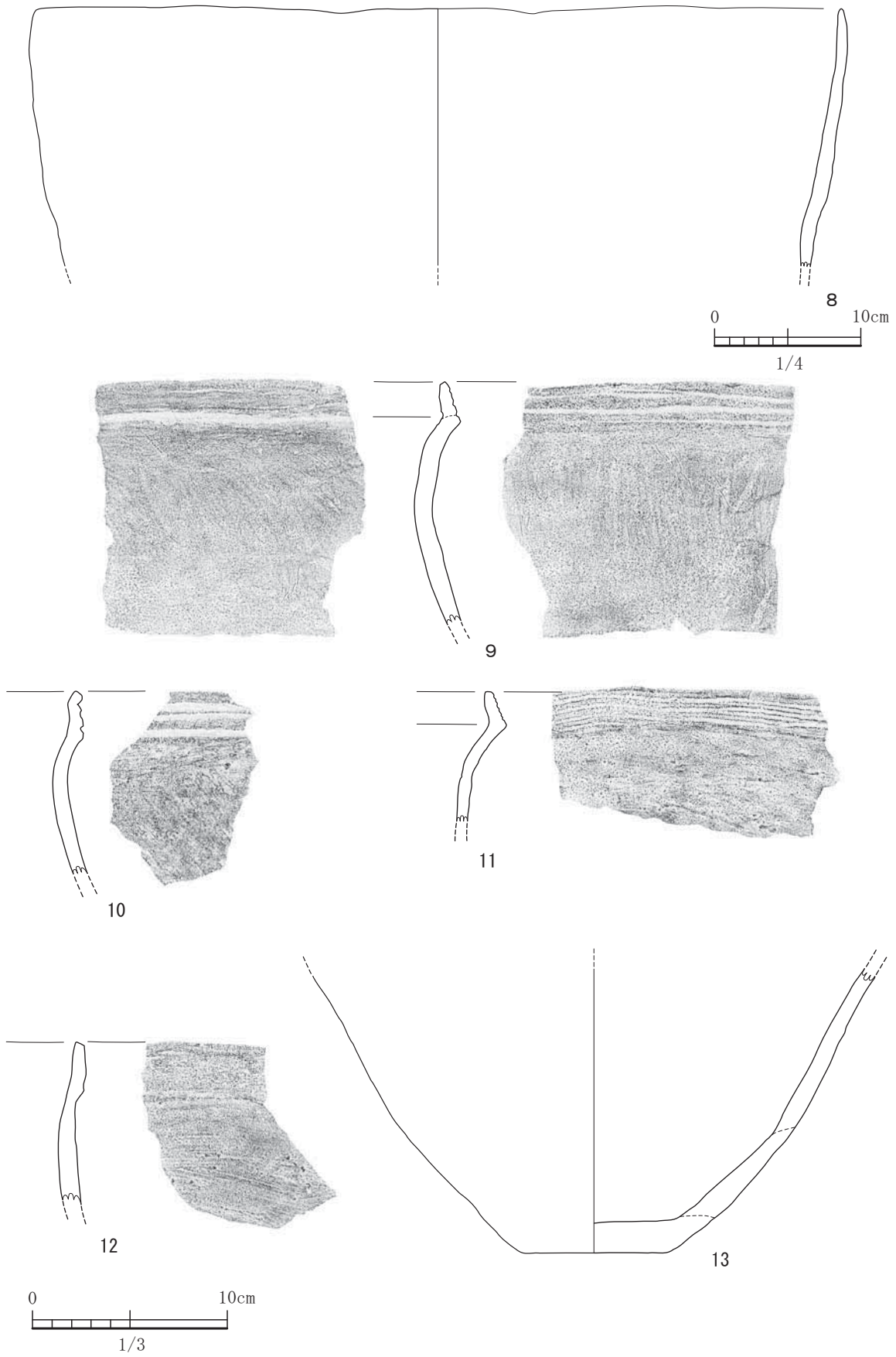


图-26 1号住居出土遺物実測図 2 (S=1/3,8 (≠ S=1/4))

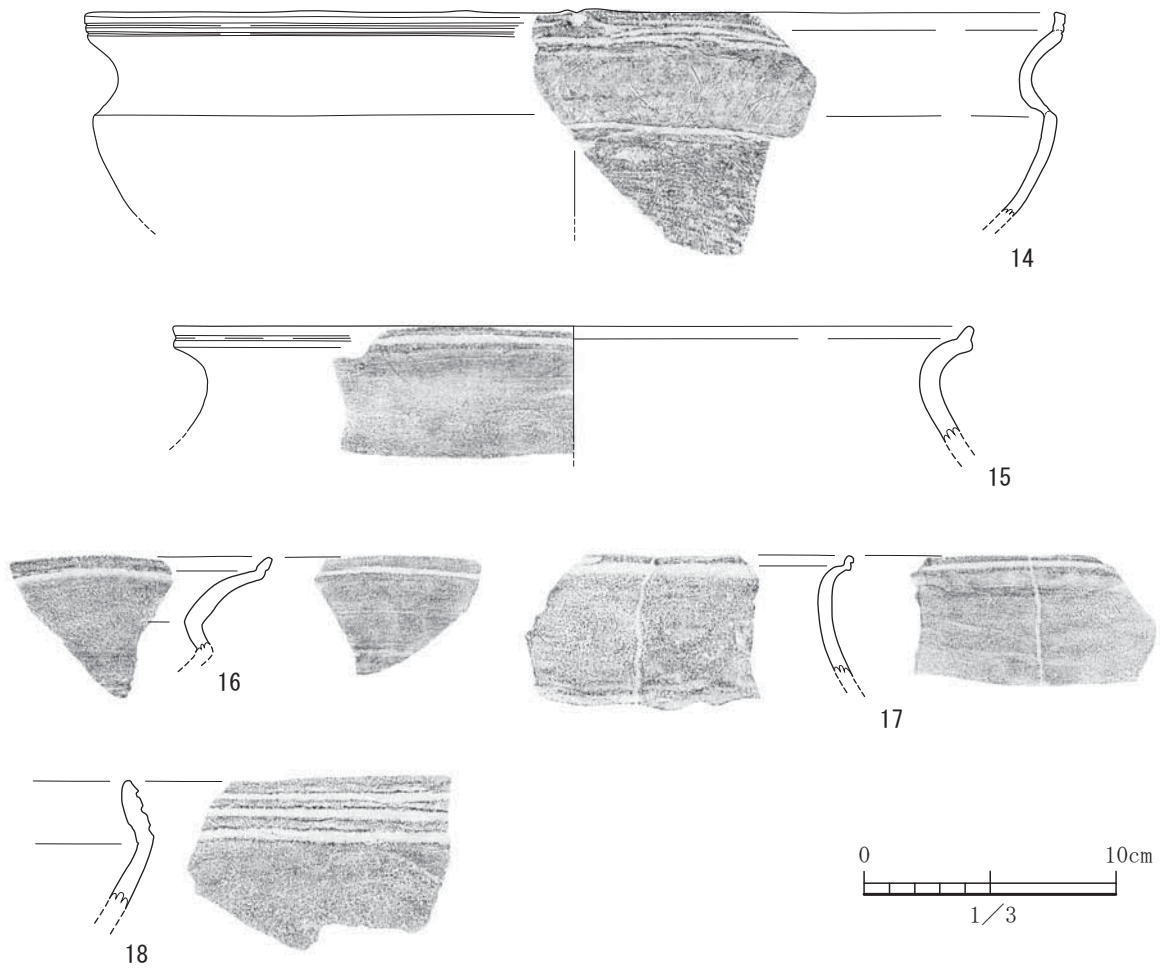


図-27 1号住居出土遺物実測図 3 (すべてS=1/3)

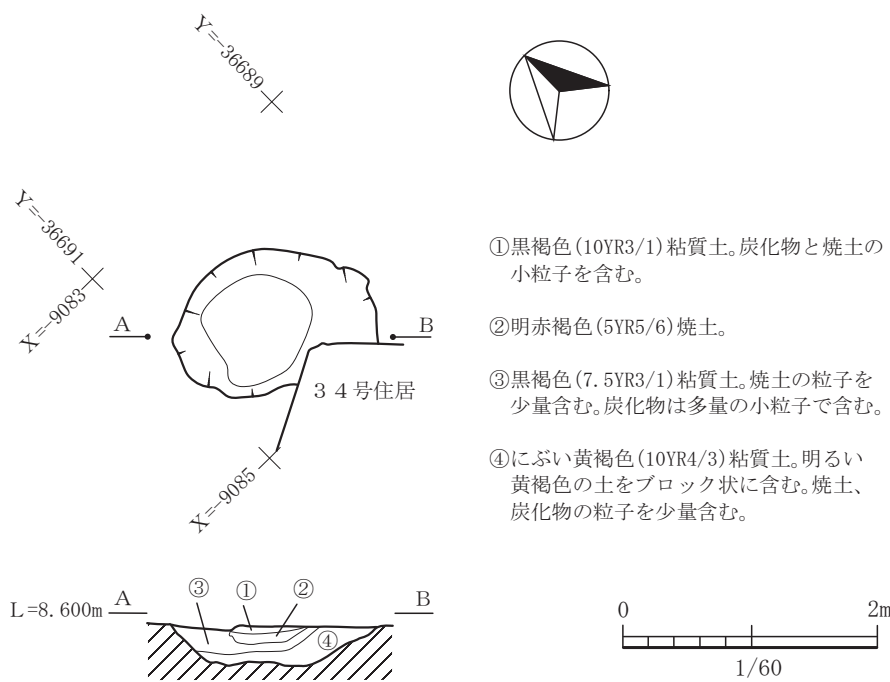


図-28 1号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)



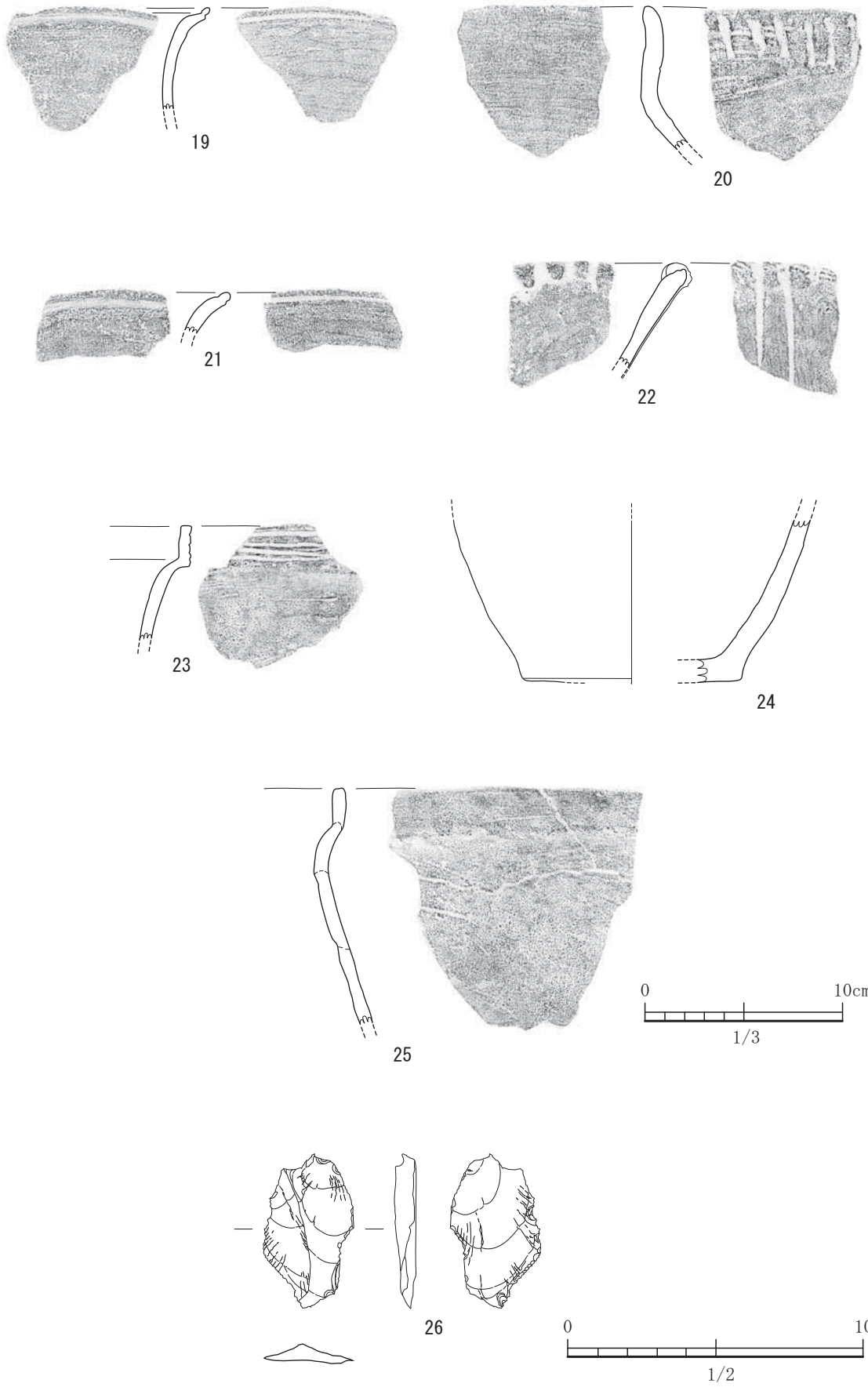


図-29 1号土坑出土遺物実測図 (S=1/3,26はS=1/2)

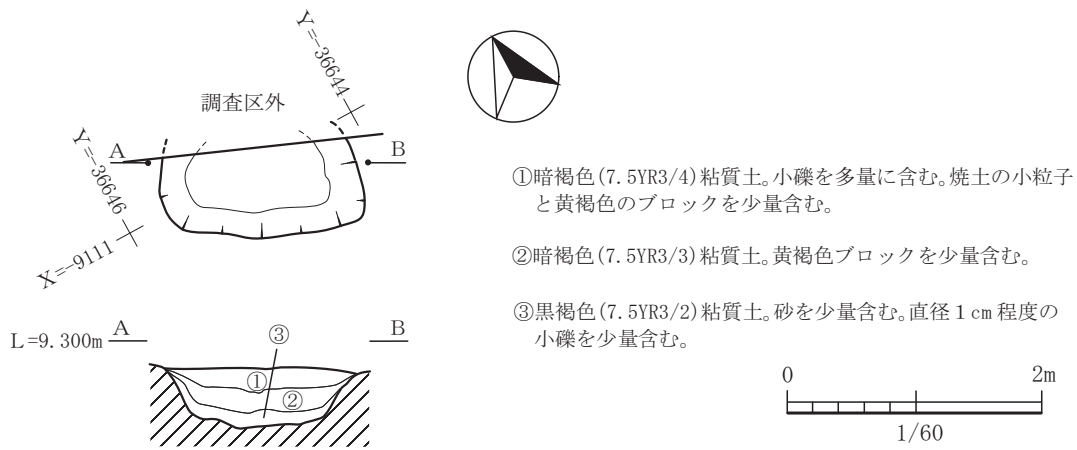


図-30 2号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

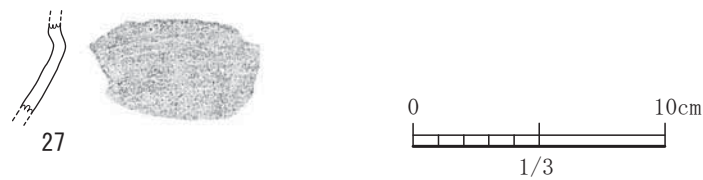


図-31 2号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

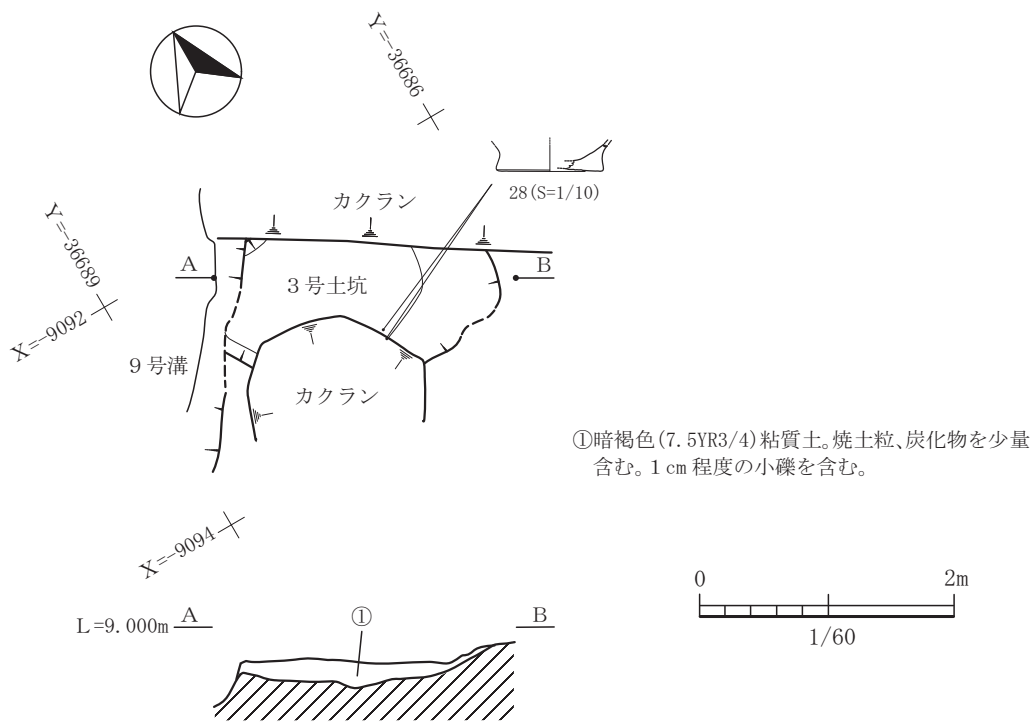


図-32 3号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

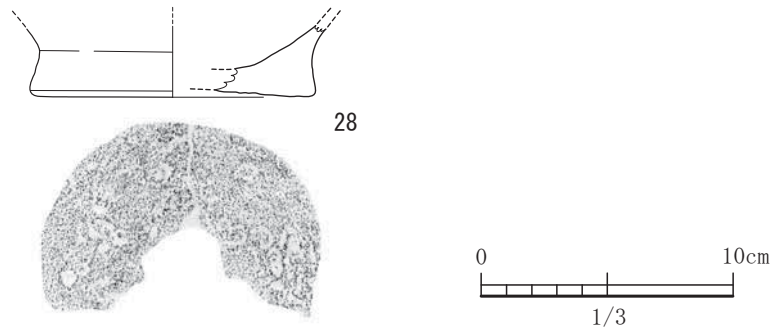


図-33 3号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

1号埋鉢は、平坦地区2区で検出された。平坦地区は舌状の台地部にあたるが、この台地の東側の崖状に落ちる地形境界部にあり、周囲はフラットな地形の場所にある。1号住居からは約45mほど離れた場所である。1号埋鉢は、検出面での直径で約45cmほどの円形の土坑に縦に据えてあったようである。検出面から床面までの深さは約15cmであり、胴部から口縁部にかけての一部が割れて崩落するように中央に落ちていた。残存していた埋土が約15cmしかないので1/2ほどしか残存していなかった。底部から胴部はある程度母坑の形状に沿って残存していた。埋土からの植物依存体や蓋の痕跡等がないか確認したが、それらしきものは検出できなかった。尚、胴部から口縁部の崩落部を観察すると、崩落した部分の上の埋土と下の埋土が同質のものであり、これは崩落した時に周囲の土が一気に鉢内に入ってきたことを意味しており、また有機質の蓋にあたるものが見ついていて、崩落とともに土が埋まったのではないかと考えられる。土器でできた蓋にあたるものは出土していない。

29が、埋鉢の本体であり、深鉢である。この深鉢は、胴部と頸部の境が、屈曲しており土器の最大径となっている。土器の重心はほぼ中央にあり、頸部はやや内傾しながら立ち上がり、わずかに屈折しながら口縁部につながり直立する。口縁部の文様体には沈線を3本引いているが、何回も引き直している。器面の調整は、内外面ともナデ調整で、胴部内面にはスス状に炭化物が認められる。重心の位置等から縄文晩期の古閑式の時期ではないかと考えられる。

## 2号埋鉢

2号埋鉢は、平坦地区7区において検出された。この埋鉢は、舌状台地の東側のフラットな地形の部分にあり、1号住居からは、約30m離れた距離に位置している。2号埋鉢の検出面での母坑の直径は、約50cmで、ほぼ円形の形状を呈する。床面の掘方の形状は、中央部に高まりをもたせたものになっている。埋鉢の本体の胴部から底部が欠損した状態で出土しており、据える前から底部を欠いているようである。その割れた胴部が掘方の床面中央部の高まりにかぶせたようになり、たいへんおさまりがよい。意図的に掘方の形状を整えた可能性がある。検出面から床面までの深さは約27cmある。一部壊れていたがほぼ完全に据わった時の状態で検出されている。

埋土は、埋鉢本体の内側と外側では異なっており、同時に埋められたものでなく、外側が最初に埋まり、内側は時間をおいて埋まったと考えられる。1号埋鉢と同様に、植物依存体は検出されなかった。また、蓋にあたるものは検出されなかった。仮に蓋が据え付けられていたのであれば、有機質の蓋で腐植が進んで消失してしまった可能性が考えられる。

30が、埋鉢の本体で、深鉢である。この深鉢も、胴部と頸部の境が屈曲しているが、最大径は、1号埋鉢と異なり口縁部になる。頸部はやや内傾しながら立ち上がり外反するように折れ曲がりその後は口縁とつながっている。口縁部は外傾しながら真っすぐにのびる。器面の調整は、内外面とも条痕後ナデである。口縁部には、貝殻条痕文を口縁に平行に引き沈線文のようにみせている。これらの特徴から1号埋鉢と同様、縄文晩期の古閑式の時期に相当する



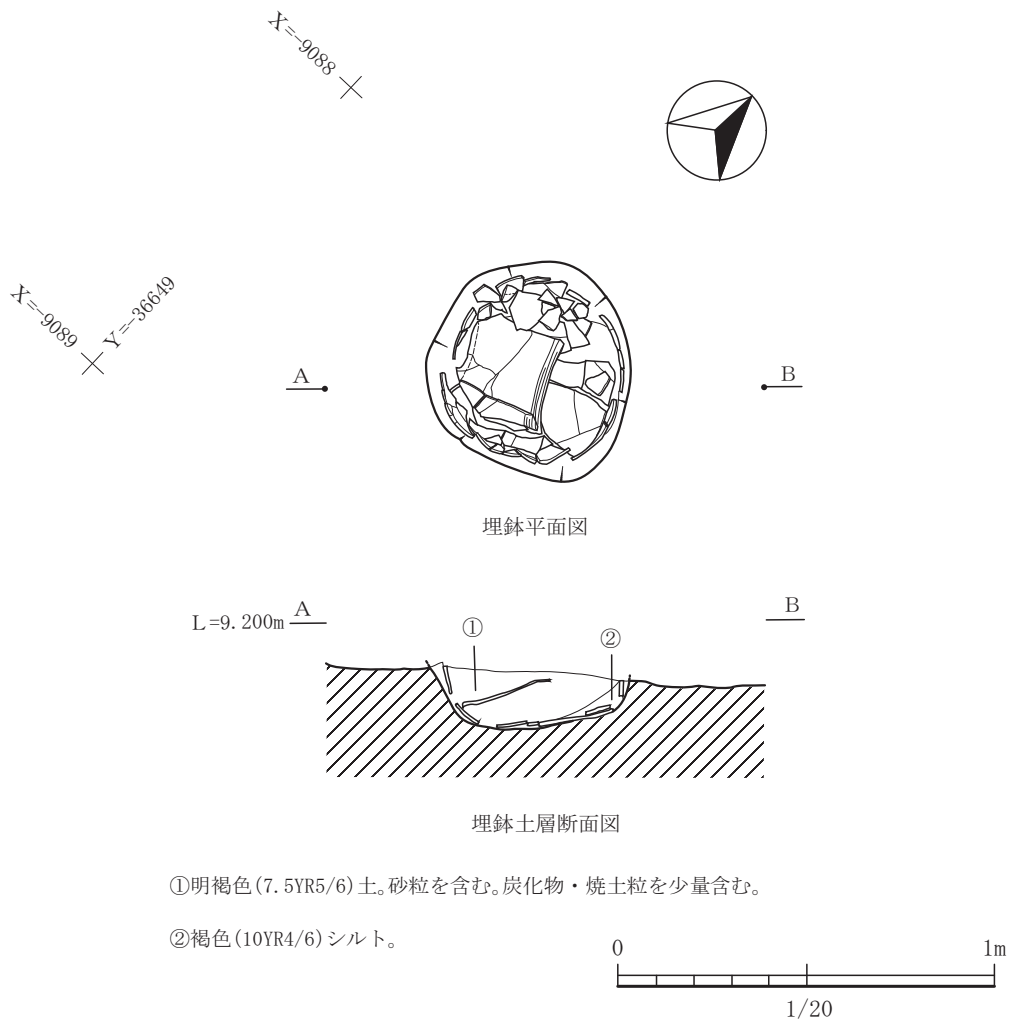


図-34 1号埋鉢平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

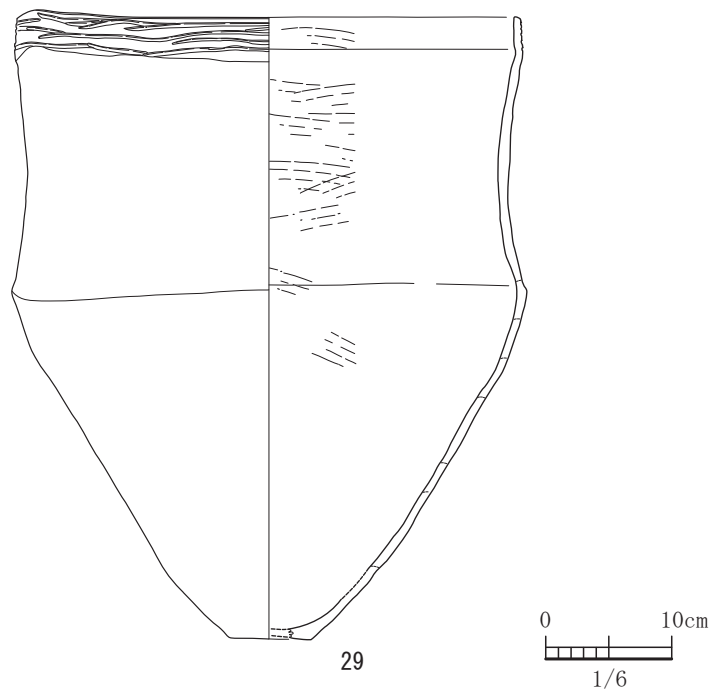


図-35 1号埋鉢出土遺物実測図 (S=1/6)

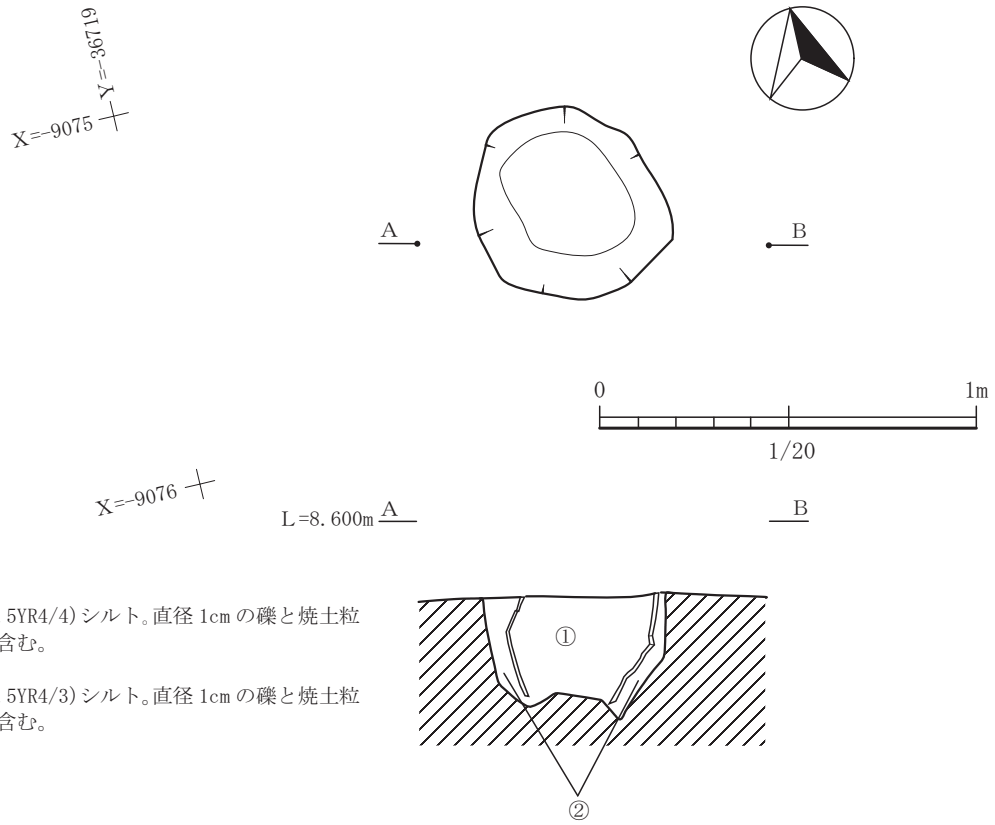


図-36 2号埋鉢平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

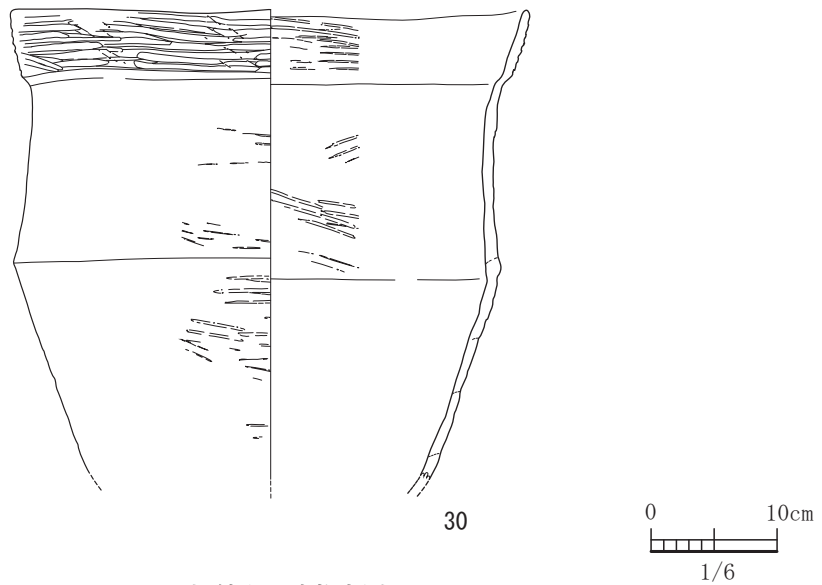


図-37 2号埋鉢出土遺物実測図 (S=1/6)

ものではないかと考えられる。内面下部にスス状の炭化物が付着していた。用途的には、底部が欠損し

ていることから、少なくとも水を貯めたりするものではなかったようである。

(2) 弥生時代

1) はじめに

弥生時代の遺構として、 堅穴住居跡が21軒、 掘立柱建物跡が1棟、 土坑が61基、 溝が4条、 甕棺墓が14基検出された。 今回の調査で、 堅穴住居跡が集中する地域、 掘立柱建物と土坑が集中する地域、 甕棺墓が集中する地域がそれぞれ区画できることがわかった。 平坦地区弥生時代遺構配置図（図-40）からもわかるように、 平坦地区中央部の周囲よりやや高い部分に堅穴住居跡を中心とする居住域、 その周囲に土坑が集中する貯蔵域。 その中に掘立柱建物跡がある。 さらに周囲に甕棺墓が集中する墓域が配置されているようである。 尚、 土坑の用途において埋土から植物依存体等の抽出を試みるも残念ながら検出できなかった。 よって、 土坑が集中する地域を貯蔵域と断言はできない。 しかしながら、 掘立柱建物跡と土坑が同じ地域に配置してあるなど、 遺構同士の配置具合から貯蔵域ではないかと考えられる。 であれば、 掘立柱建物跡は倉庫としてのものではないだろうか。 墓域とその他の地域を区画する結界を意味する溝遺構は今回検出されなかった。 遺構配置全体からすると、 平坦な地形のところでは遺構がない地域が2号住居西側や8号住居南側に見られる。 堅穴住居の立地条件としては好条件にも関わらず作れないのは、 広場等の想定が必要になるのではないだろうか。 しかし、 今回の調査ではそこまで考察を加えるだけの情報がなかったため、 今後周辺の情報を増やしていく必要がある。

さらに、 弥生時代の中でも、 今回の調査区を中心として生活を営んでいたのは、 弥生時代中期後半期から弥生時代後期前半期であるが、 そのほとんどが弥生時代中期後半期のものである。

尚、 図-40に示しているように、 7号住居周辺では特に遺構の密集度が高く、 激しい切り合い関係を示している。 そこで、 この部分を中心に拡大したものを左下に別途示すほか、 図-38に遺構重複関係図として、 遺構の新旧関係を示している。 参考にしていただきたい。

2) 各遺構・遺物について

2号住居

2号住居は、 非常に検出しづらい堅穴住居であった。 遺構検出当初からプランがぼんやり見えるものの、 線がはっきりしないため、 遺構内にサブトレンチをいれ、 遺物の出土状況を見ながら掘削を進めた遺構である。 ベルトの位置が遺構の軸方向に沿って設定できなかったのはそのためである。

2号住居は、 平坦地区1区で検出されたもので、 主軸N14°Eにもつ堅穴住居で、 6.9×5.4mの長方形プランである。 検出面から床面まで約30cmを測る。 東側壁の一部がカクランによって破壊されていた。 上屋の設備として、 柱は2本柱で、 長軸方向と一致する。 床面の特徴として床を張った（貼り床）部分が中央にあり周囲は、 明瞭ではないがベッド状遺構のように若干高まりをもたせるような構造となっている。 その高まりは地山を直接床にしている。 よっ

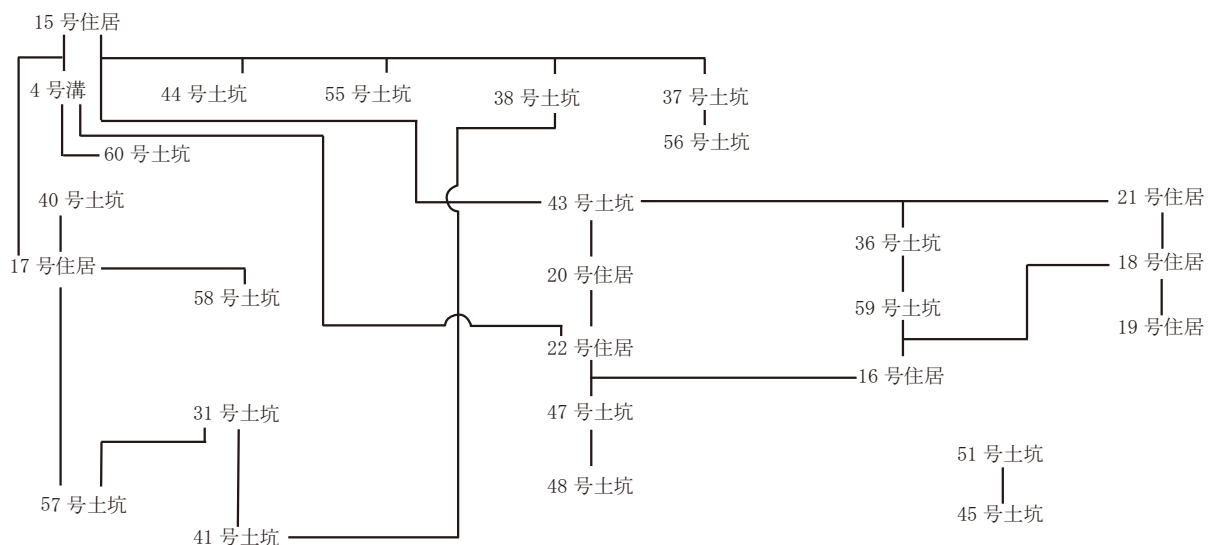


図-38 北の崎遺跡平坦地区遺構密集部重複関係図



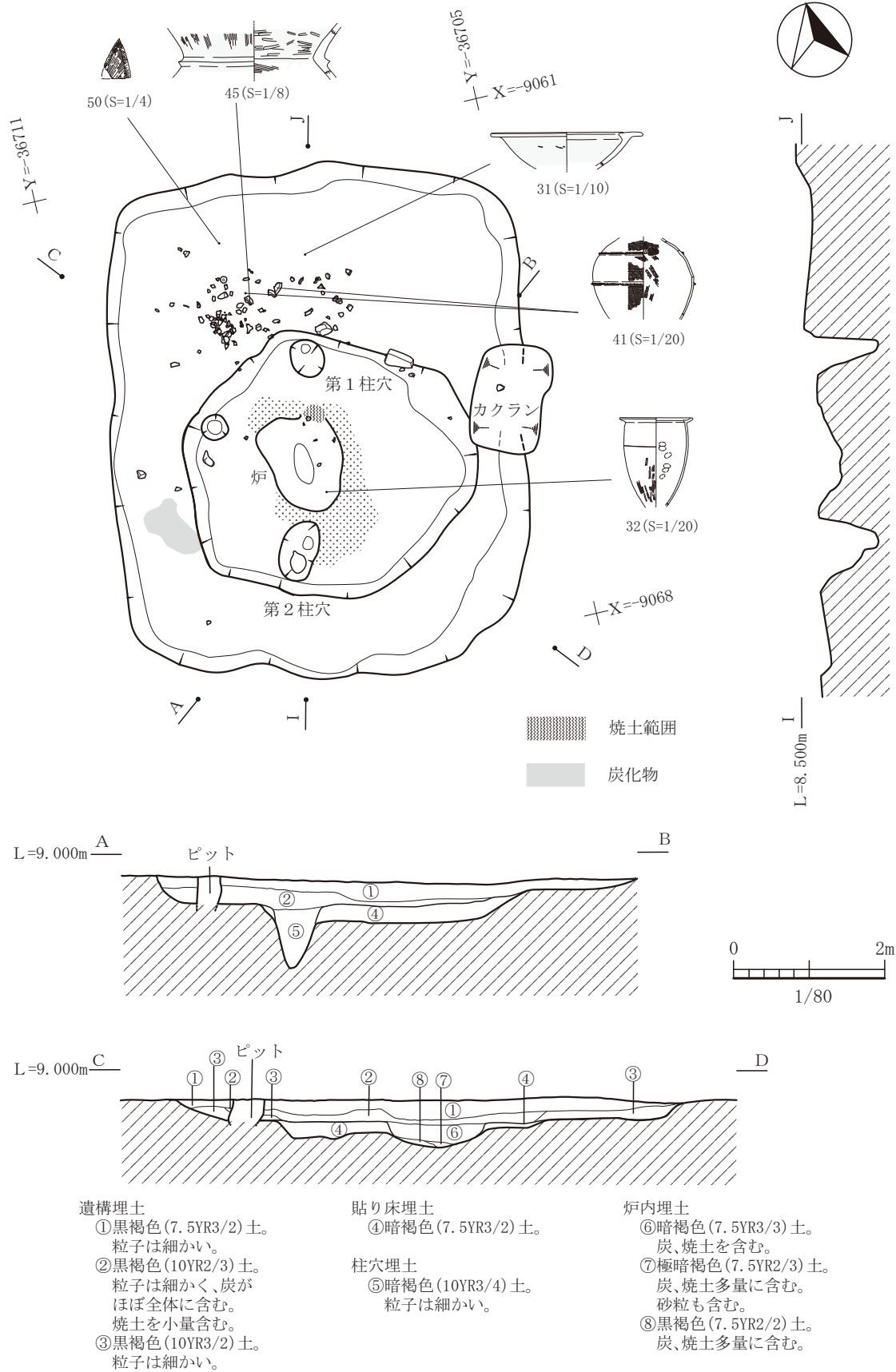


図-39 2号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)



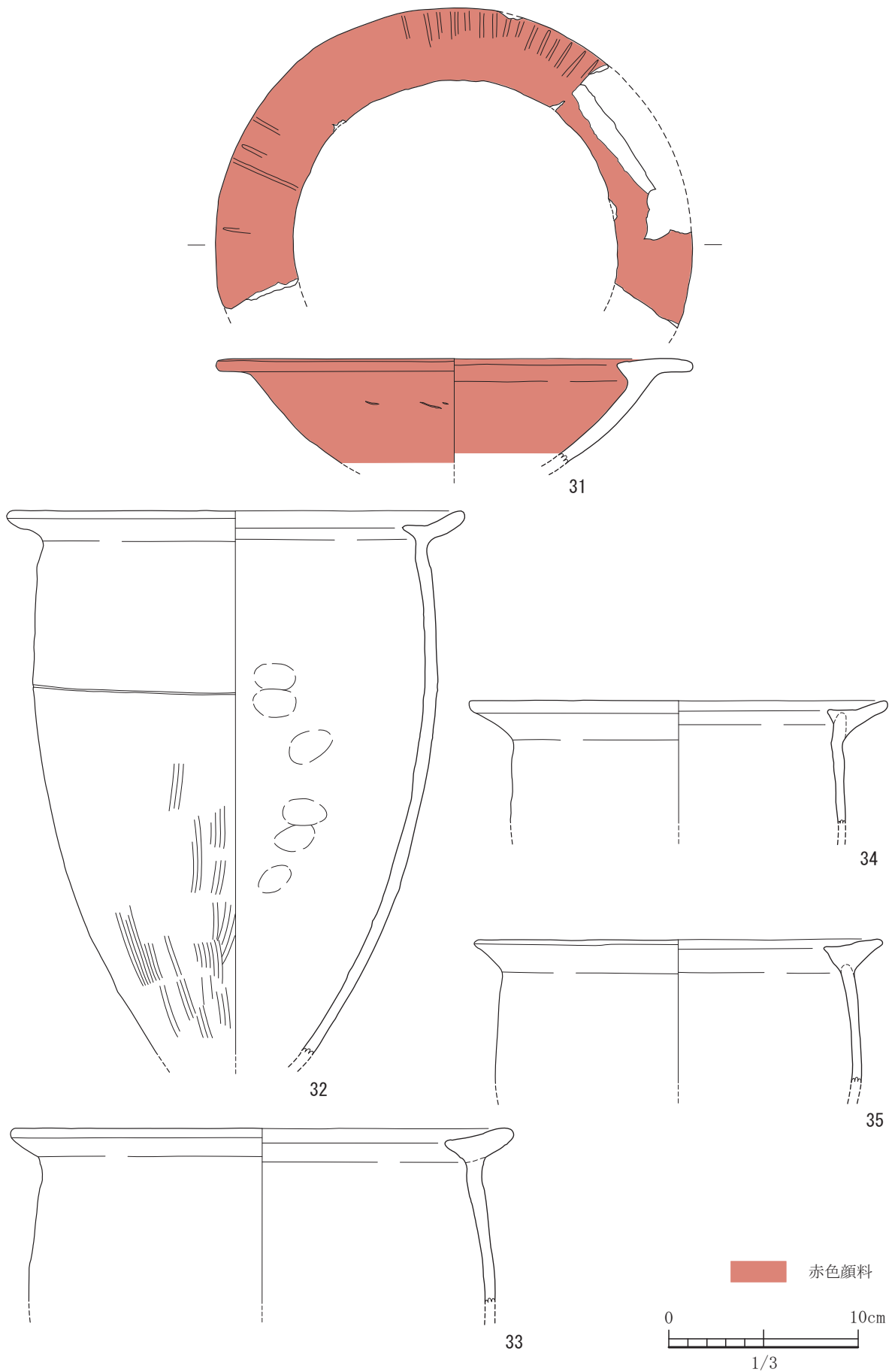


図-41 2号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)



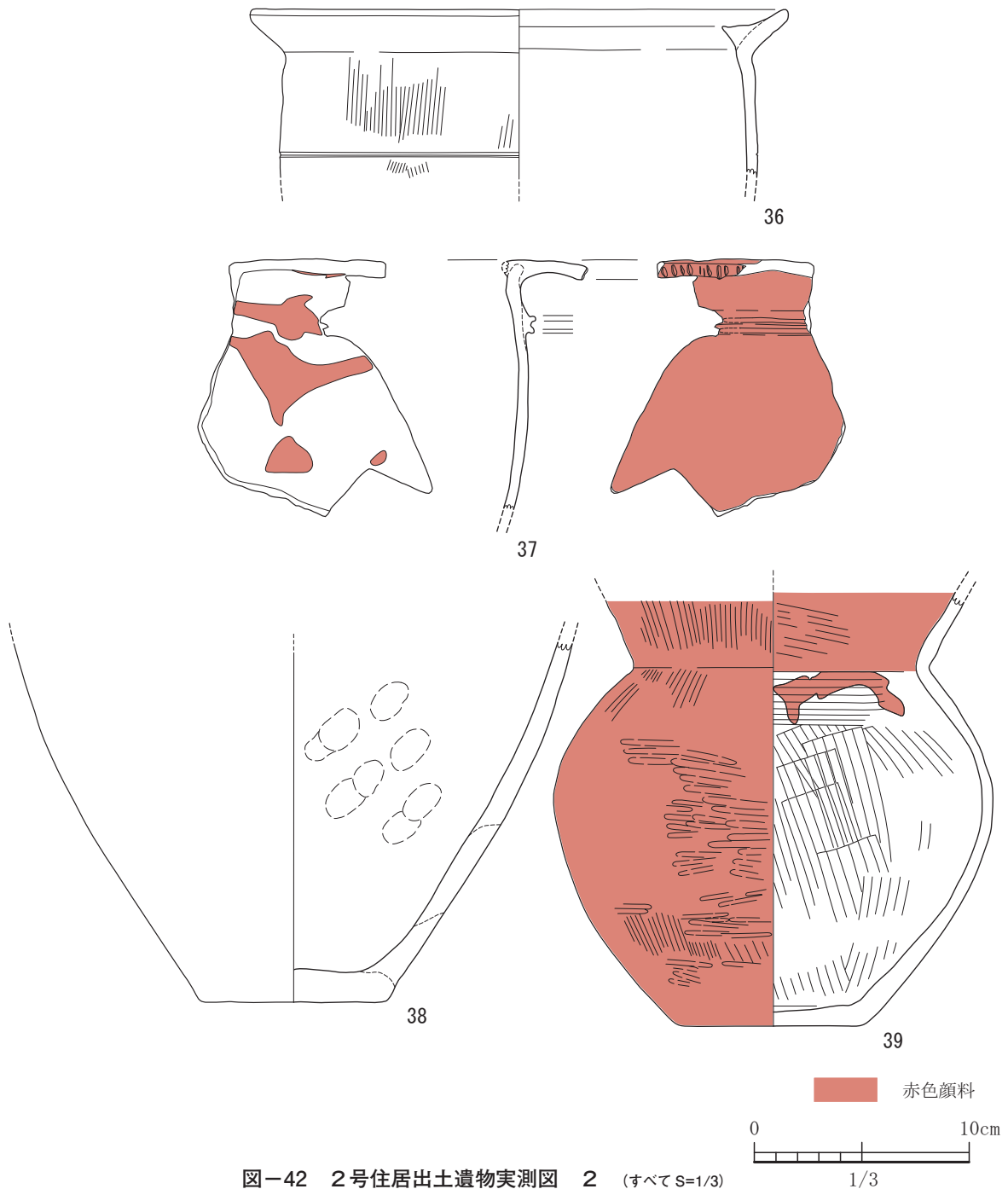


図-42 2号住居出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

て、高まりにみえるのは貼り床部に入れた土であるがゆえ、沈み込み、結果的にベッド状に見えているのかもしれない。他の付帯設備としては、炉が中央に楕円形を呈し据えてある。炉内埋土中から多量の焼土と炭化物が検出されている。この住居跡からは、貯蔵穴は検出できなかった。住居跡南西隅に炭が広がっていた。柱穴の深さは70cm以上になりかなり深い。2号住居から出土した遺物は、北側半分

集中する。接合できた遺物の総点数は、土器が17点であった。高坏1点、甕形土器7点、壺形土器8点、鉢形土器1点である。石器は、石鎌、磨石、歯車状石器等が出土している。

31は丹塗りの高坏で、口縁部には暗文を施してある。32から36は甕形土器で、口縁部において内側に細長く突起をもち、外側にも同じ厚さで延びる。中央はやや凹む。最大胴部の部分に1条の沈線を一周

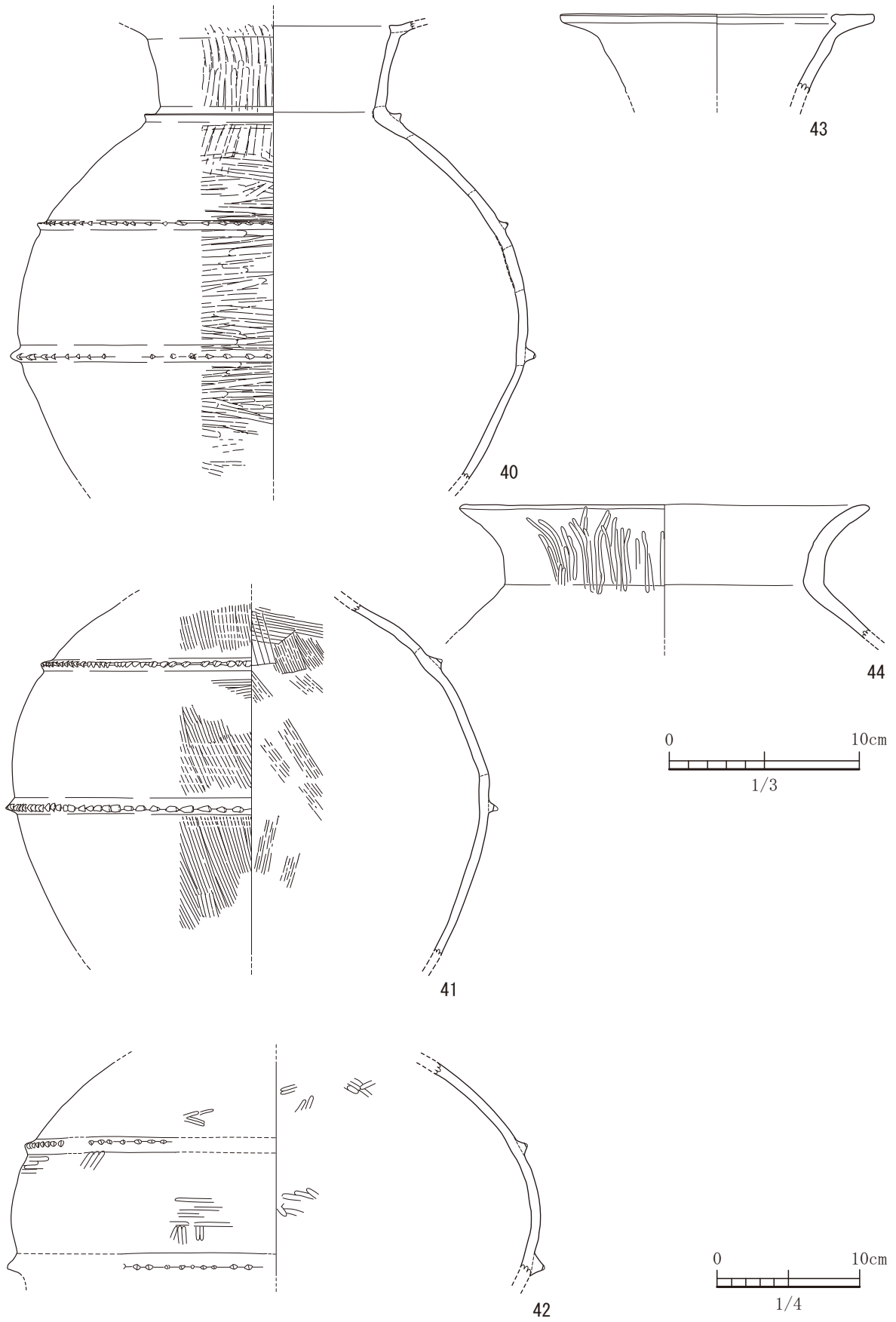


図-43 2号住居出土遺物実測図 3 (43,44 は S=1/3, 40,41,42 は S=1/4)

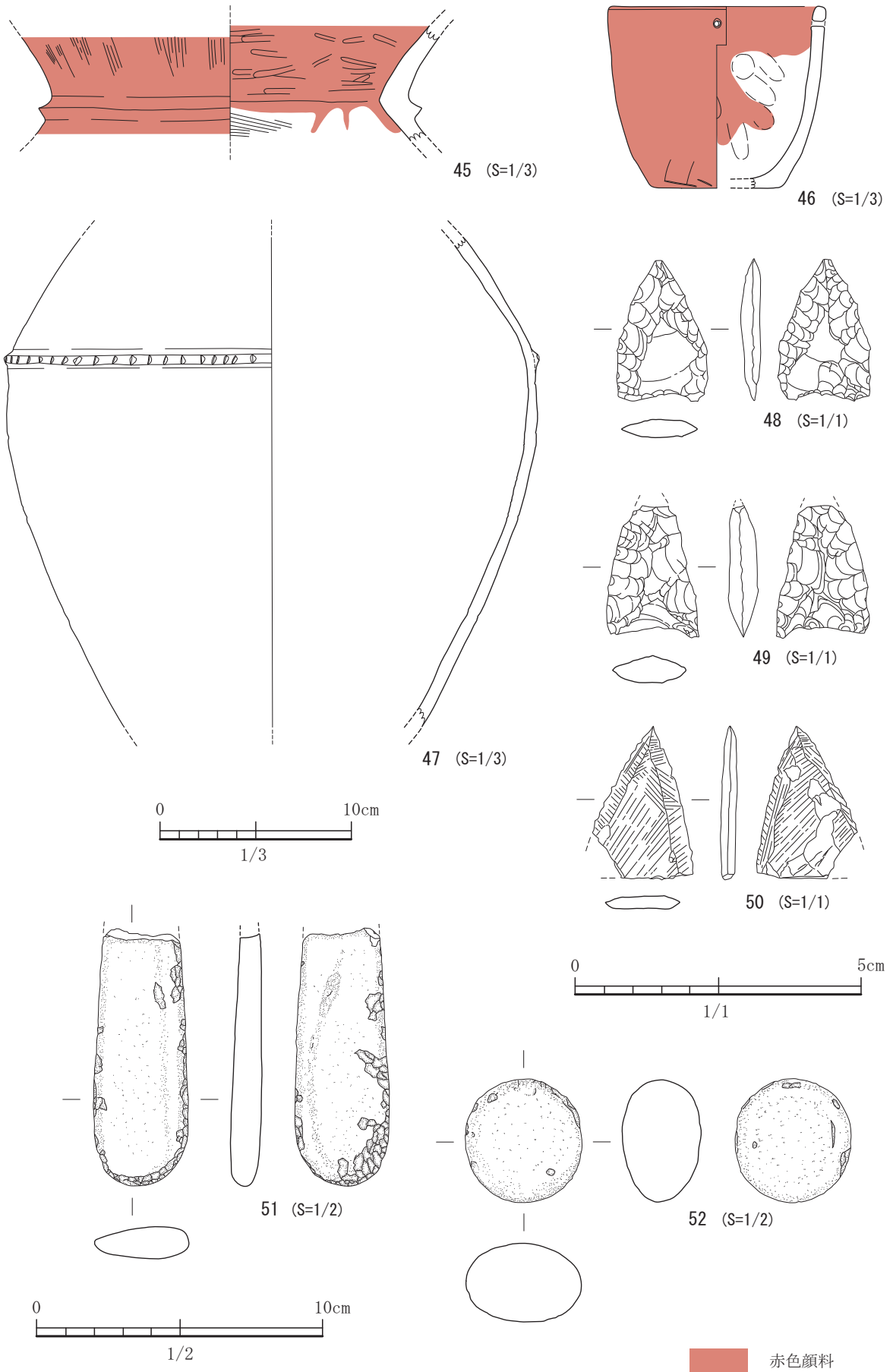


図-44 2号住居出土遺物実測図 4



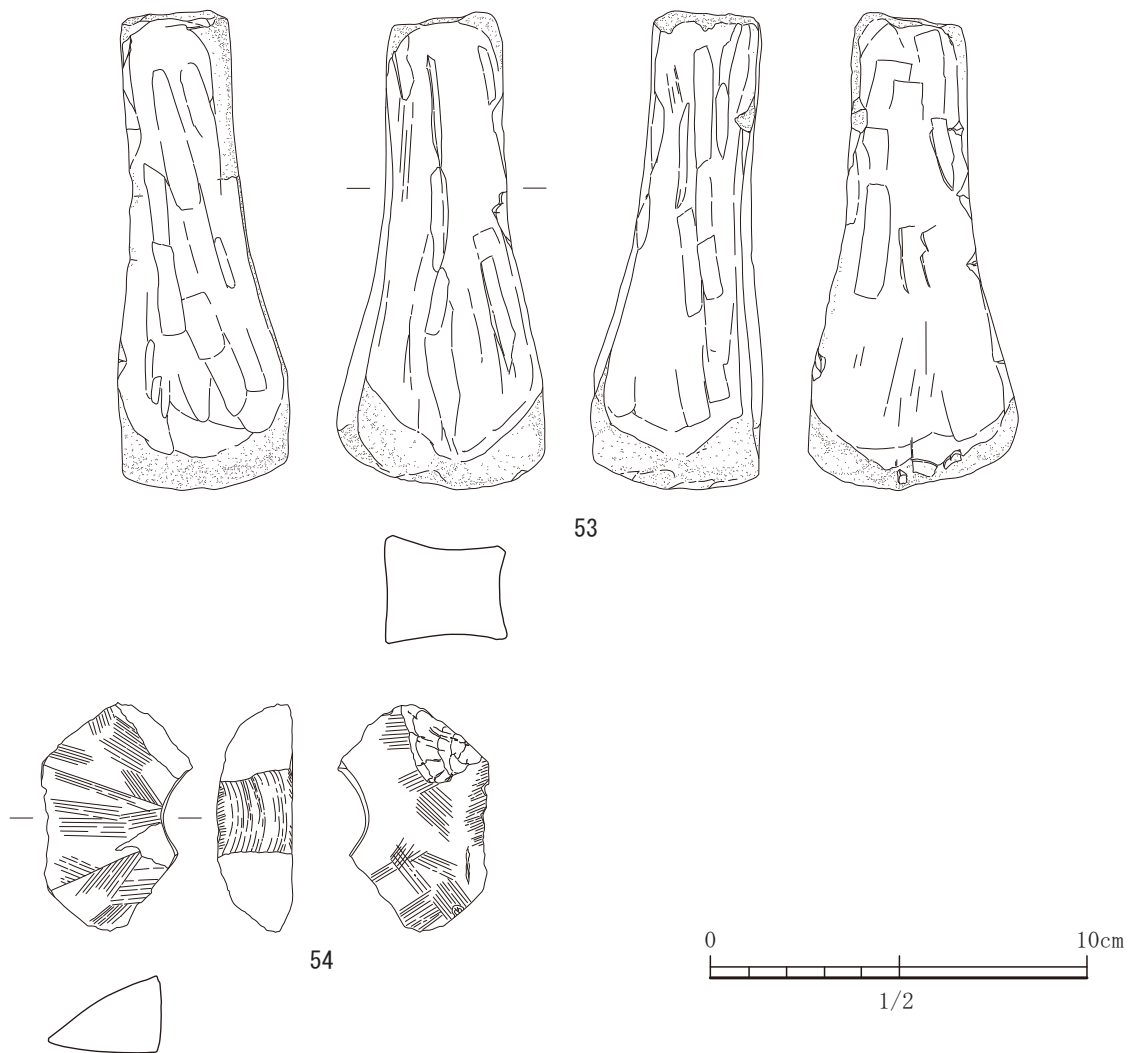


図-45 2号住居出土遺物実測図 5 (すべてs=1/2)

めぐらす。37は、丹塗りの甕形土器である。口縁部は下に垂れさがるようにつくられ、端部には刻み目を施してある。突帯はM字突帯文である。39は丹塗りの壺形土器で、口縁部が欠損している。46を除いて40から47まで壺形土器である。44は頸部から口縁部にかけて暗文を施す。45は丹塗りの壺形土器で頸部に1条の突帯をめぐらす。47は最大胴部のやや上部において1条の刻み目突帯を施す。46は、鉢形土器である。口縁部において焼成前に外から内に空けられた穿孔がある。黒髪式土器と須玖Ⅱ式の特徴を備えた土器が中心である。よって弥生中期後半から後期初頭頃の遺構であると考えられる。

石器では、48と49が平基無茎鏃の打製石族である。50は平基無茎鏃の磨製石族である。51は結晶片岩製、52は安山岩製の磨石である。53は、砂岩製の砥石で

ある。54は、蛇紋岩製の歯車状石器である。2/3程度の残存である。穴が空けられており、放射状に肋が伸び6本はあったのではないかと考えられる。祭祀的な用途、紡錘車的な用途であったかは不明。紐によって擦れた痕跡はない。

### 3号住居

3号住居は、平坦地区1区で検出された竪穴住居である。2号住居のすぐ南に位置する。住居跡の南側壁付近は道路仮設工事の影響で調査ができず不明である。また住居跡を横断するように古墳時代に溝が形成しており、これにより床ごと欠損した状態である。この住居跡も検出ができずサブトレンチと遺物出土状況から遺構のプランを探るような状況であった。主軸はN31°Eであり、約5.4×4.4mの隅丸方形のプランの竪穴住居である。中央の炉周辺部

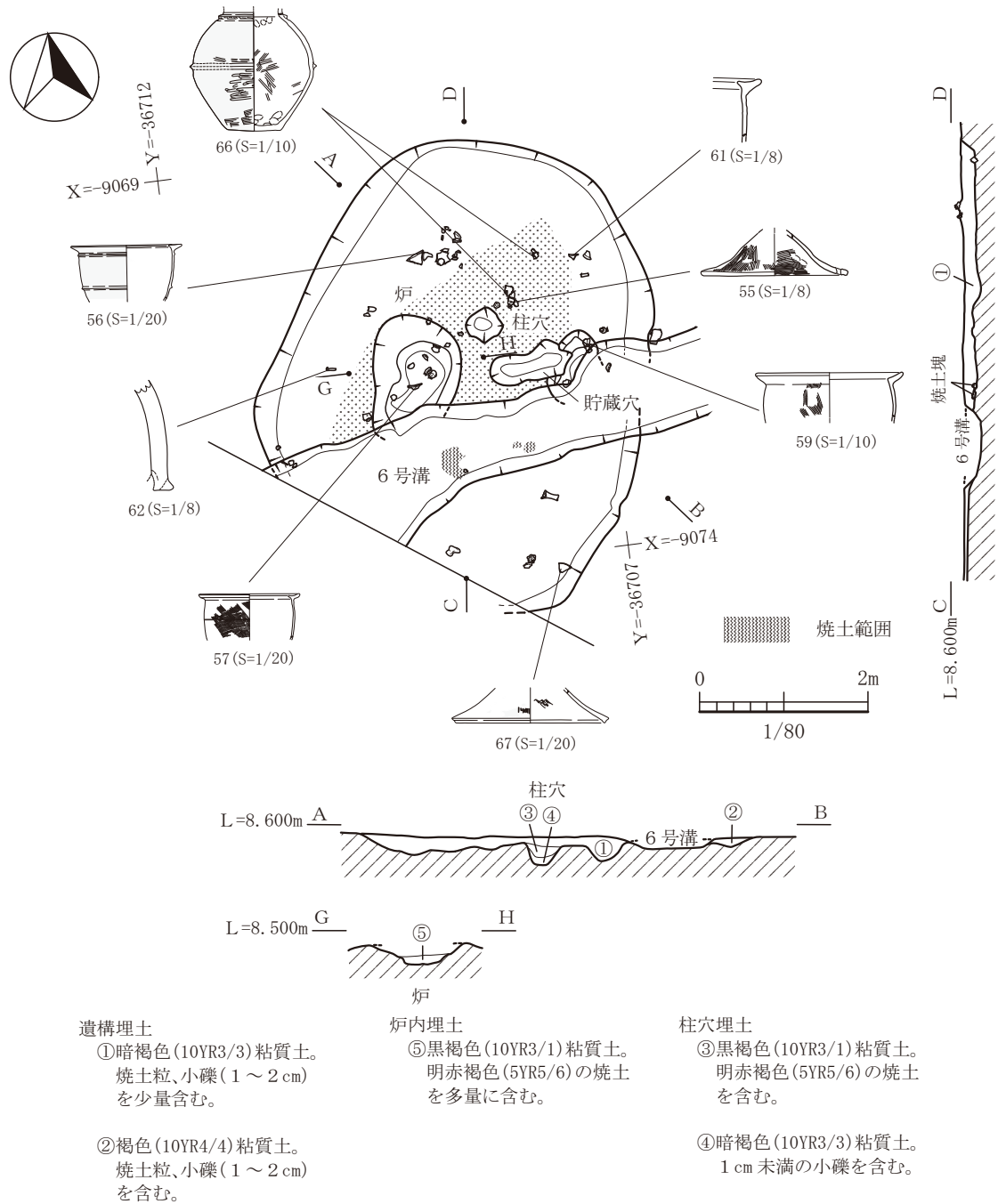


図-46 3号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

にはしっかりとした硬化面が形成されていた。住居跡のほぼ中央部に柱穴が1基検出された。付帯設備としては、炉と貯蔵穴が検出された。炉の埋土には、明赤褐色の焼土が多量に含まれていた。柱穴埋土の上層からも焼土が認められるが、柱が無くなった後、炉周辺から焼土が流れ込んで埋積したものと考えられる。住居跡の東側には土坑状のものが2基連結して検出されている。右側の土坑の床面からの深度が、

40cm、左側の土坑が20cmである。この土坑と遺構内を同じ埋土で埋められているので貯蔵穴と考えている。

出土遺物は、接合できた土器が13点である。55は蓋で口縁部に2箇所穿孔が施されている。4穴あるようである。56から61までは甕形土器で、56は丹塗りで突帯が2条めぐらされている。57は1条の沈線をめぐらす。内外面にススの痕跡がある。58には内外面

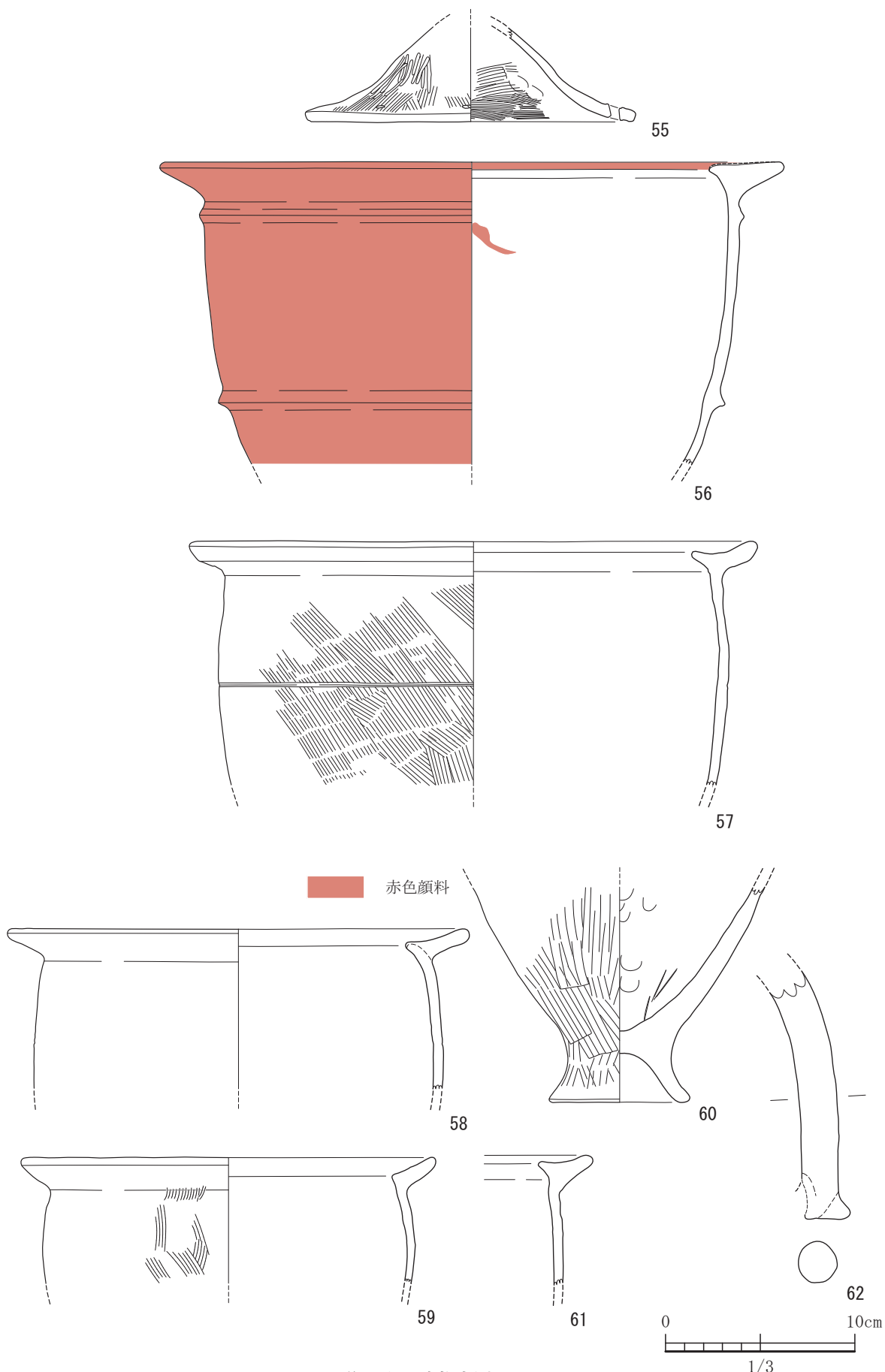
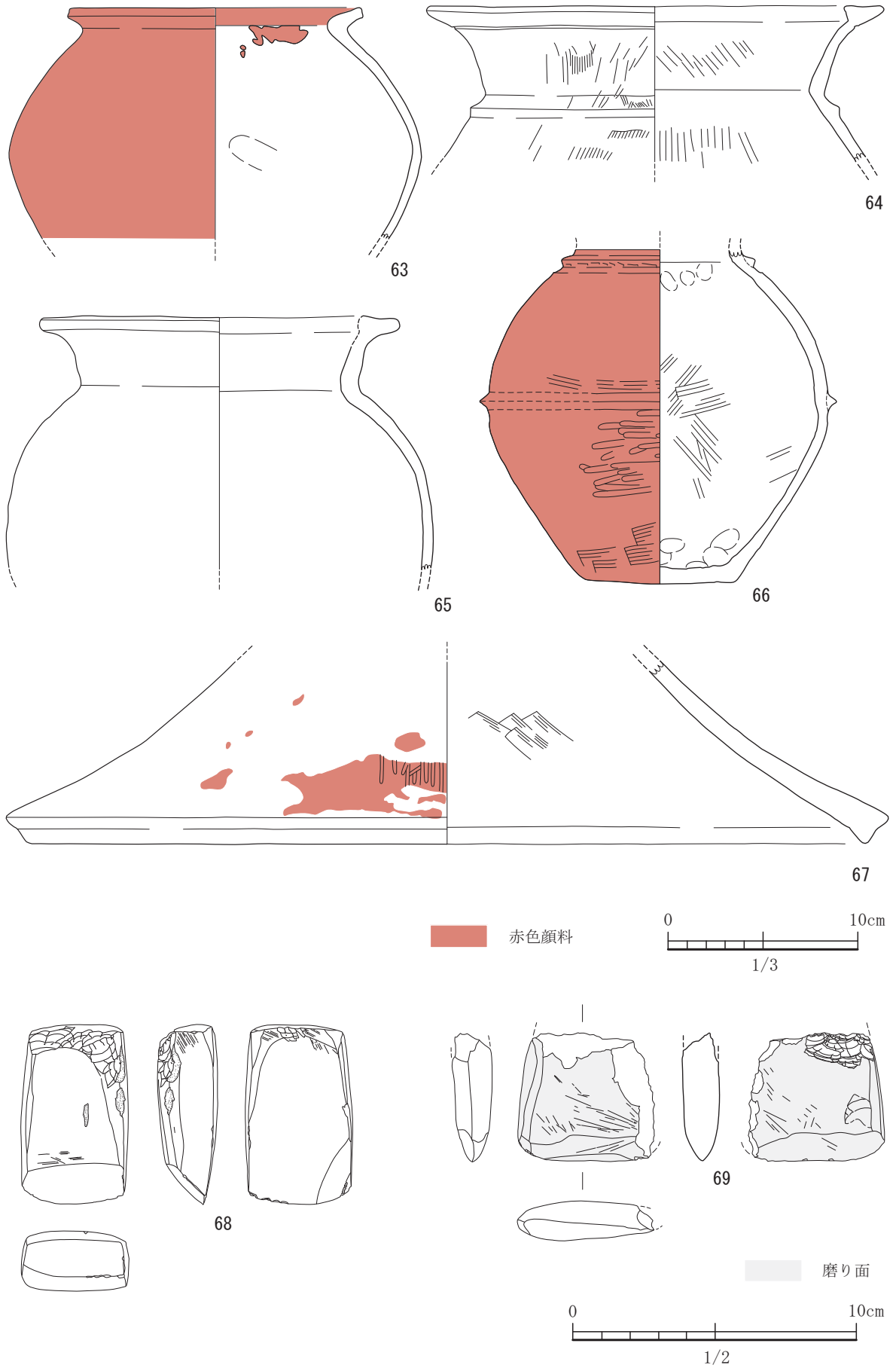


図-47 3号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)





図一48 3号住居出土遺物実測図 2 (S=1/3, 68,69 は S=1/2)

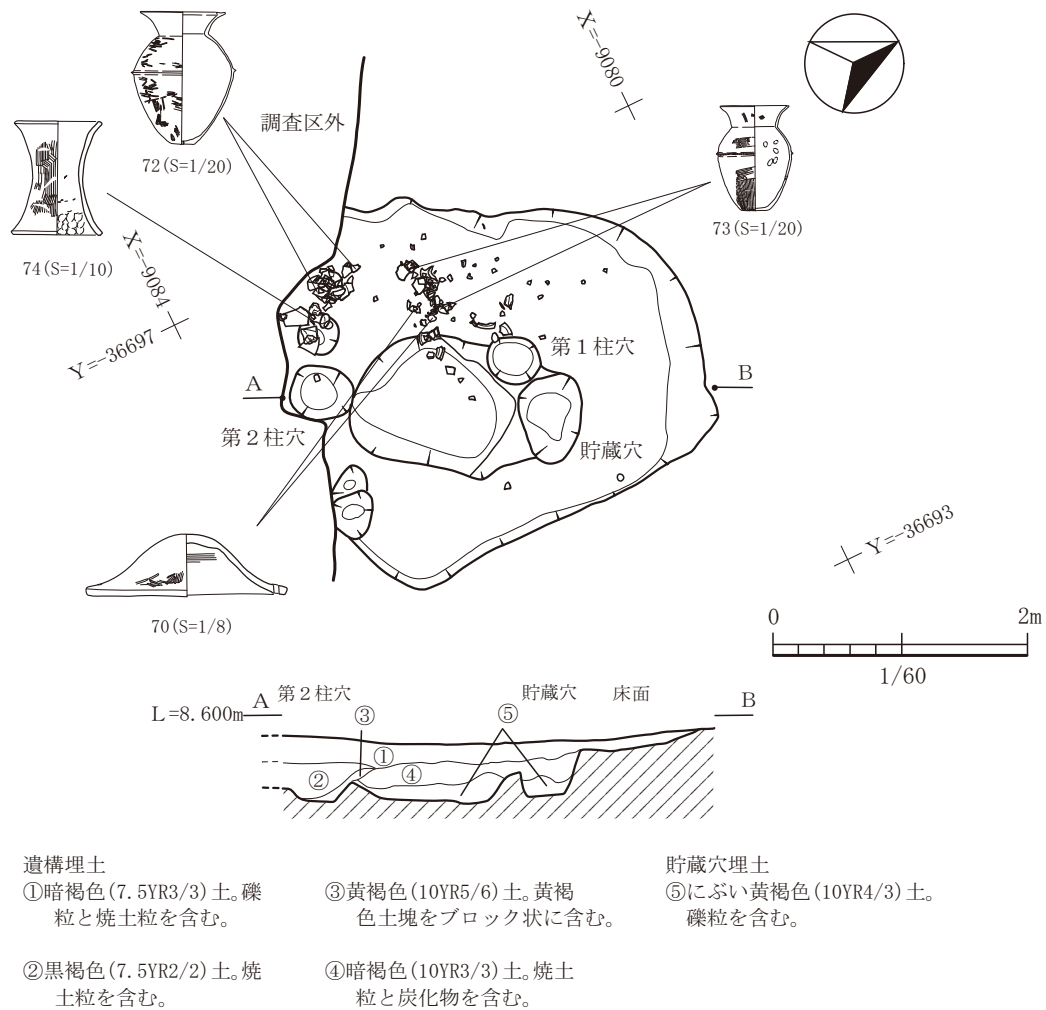


図-49 4号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

にススの痕跡が残る。59には外面にススの痕跡がある。62は把手であり、接合部から剥離したようである。鉢形土器の把手ではなかろうか。63から66は壺形土器である。63は胎土で細粒の黒雲母の量がかなり多く他の土器とは異なる。67は、筒形器台の裾部である。外面には赤色顔料が塗布されており、内面にも一部端部に残る。

石器では、磨製石斧である。68は柱状片刃石斧で完形で、石材は蛇紋岩製である。69は刃部は両刃で、石材はホルンフェルス製である。

#### 4号住居

4号住居は、平坦地区1区で検出された竪穴住居である。主軸はN10°Eであり、3.2×2.9mの隅丸方形ではあるが、やや台形の形状を呈する。南側壁付近は仮設道路工事のため一部調査できず不明。

整然と並ぶ柱穴は確認できず、位置関係から2本

柱ではないかと考えている。床面は、検出面からの深さで10cmほどである。付帯設備として、中央に直径1.2mで床面からの深さは37cmほどのやや大きめの土坑状の施設がある。軸方向に両端部に柱が位置する構造となっている。第1柱穴の東側に位置する穴は貯蔵穴ではないだろうか。この住居跡では、埋土中に焼土を含むものの炉は検出できない。床面においても赤色酸化したような土も検出されなかった。炉はないものと考えられる。また、人が日常的に踏み固めるためにできる硬化面も検出されていない。

出土遺物は、接合できた土器が5点、石器が1点である。ほとんど住居跡の西側半分から出土している。70は、蓋である。穿孔が対面に2箇所設けてある。71は、甕形土器である。微量ではあるが全面にススが附着している。72と73は壺形土器である。外面には、ミガキ調整を施されているが、摩耗が激しく部分的に

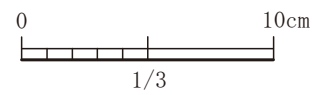
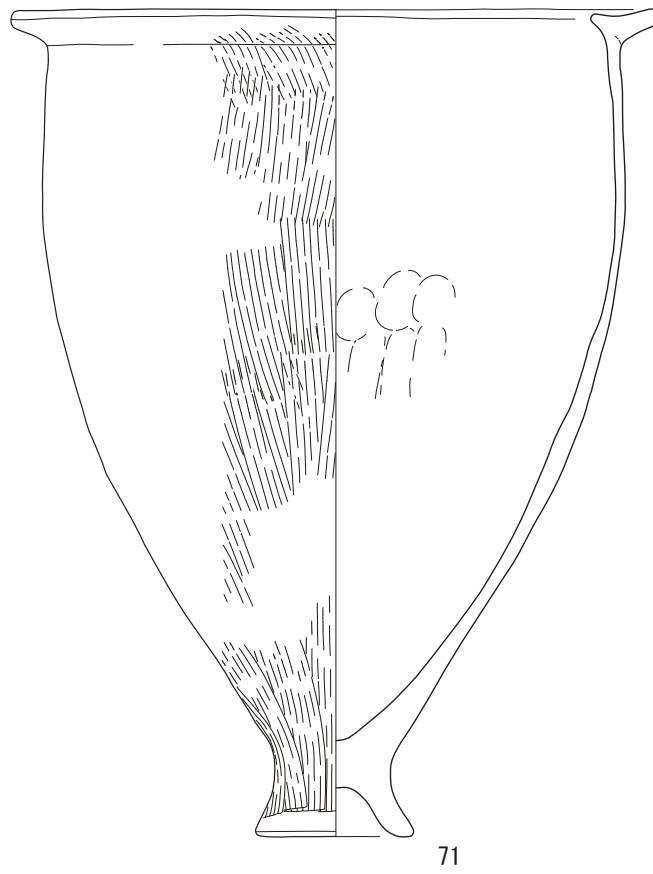
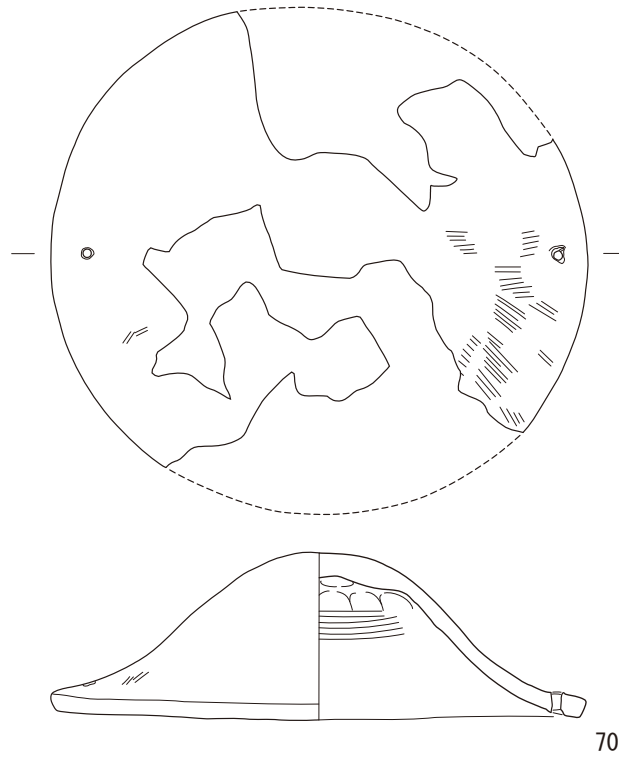


図-50 4号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)



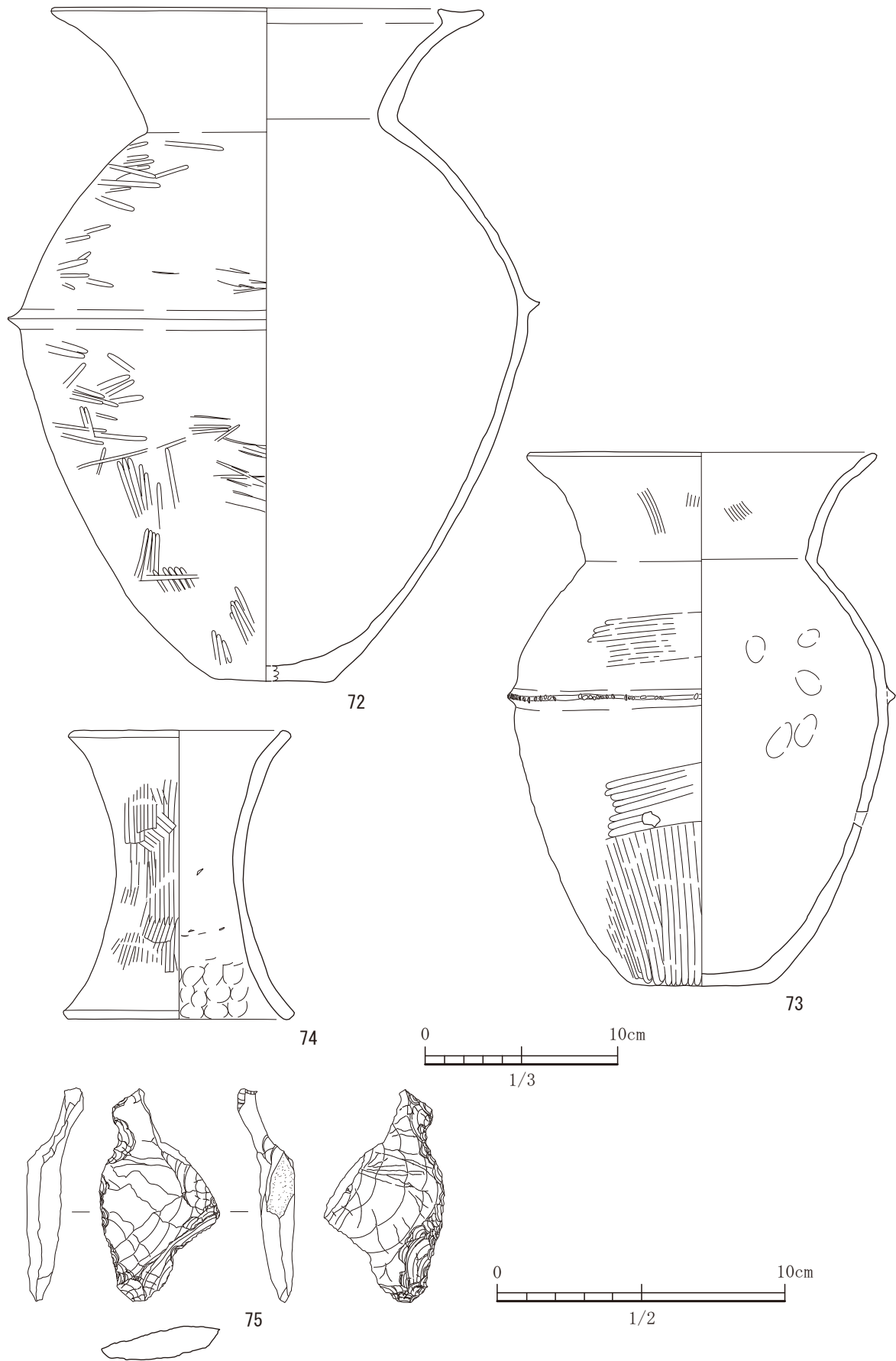


图-51 4号住居出土遺物実測図 2 (S=1/3, 75はS=1/2)

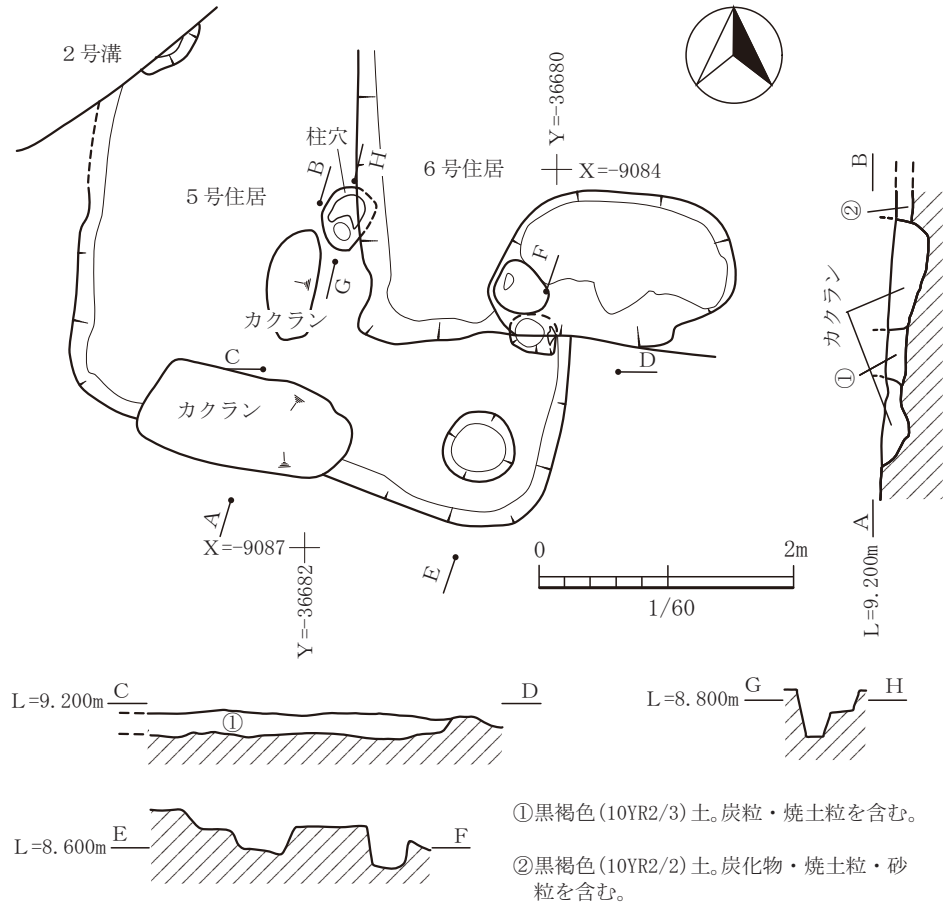


図-52 5号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

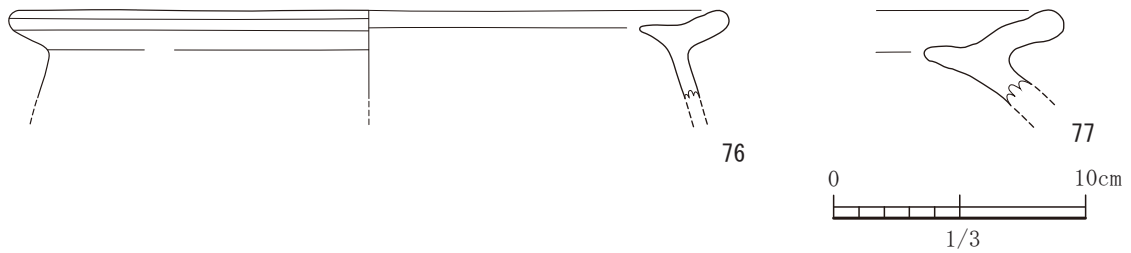
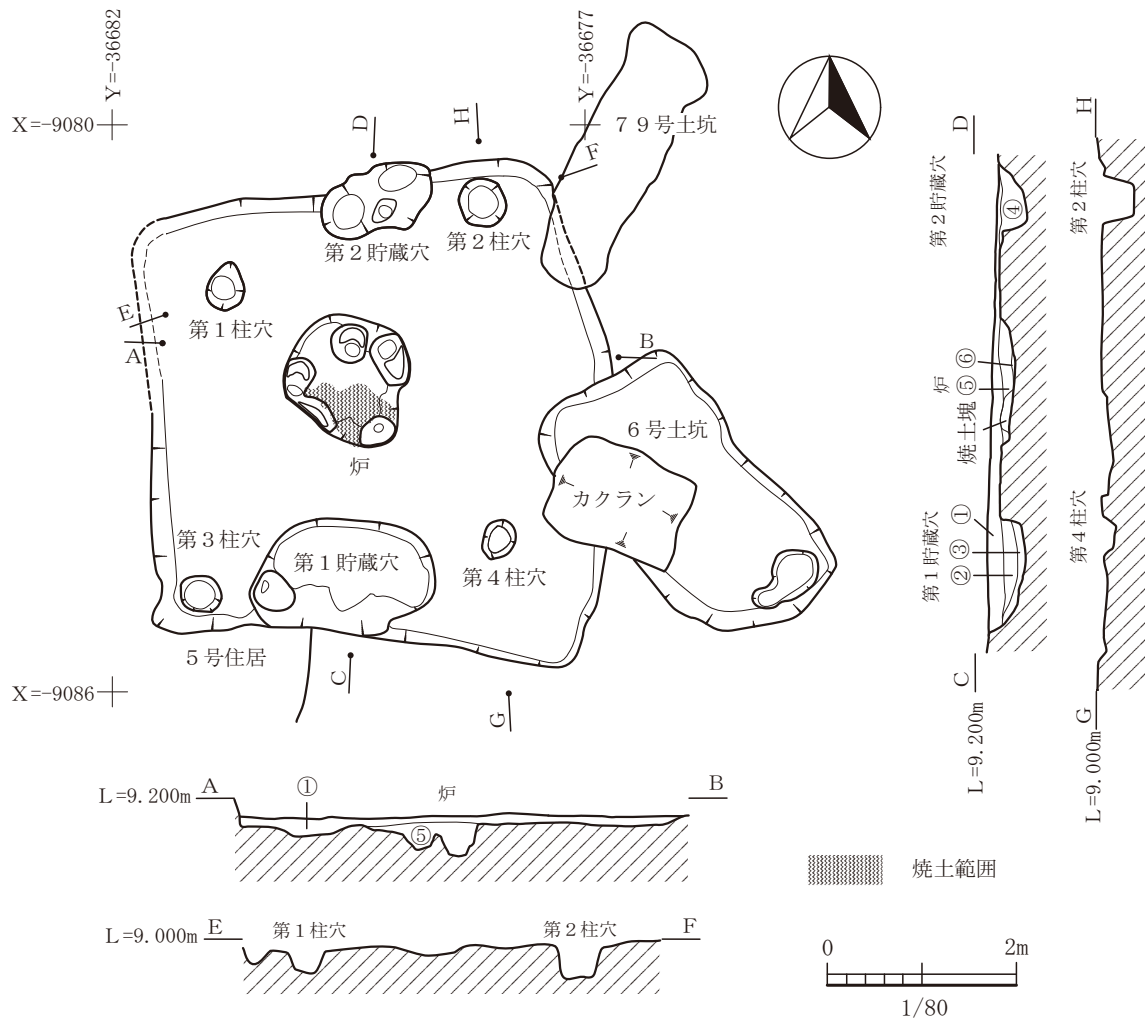


図-53 5号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

しか残っていない。最大胴部に突帯をめぐらす。73は、最大胴部に刻み目突帯文を一周めぐらす。外面には縦方向のミガキのち横方向のミガキが施されている。横方向のミガキが施されているところに1箇所穿孔がある。外側からの圧力によるものであろうが目的は不明である。74は器台である。外面では下から上へのハケメ調整である。75は、未製品であるが、スクレーパーとして機能させようとしたものではないだろうか。

### 5号住居

5号住居は、平坦地区2区で検出された方形の竪穴住居である。北側は弥生時代中期の2号溝と6号住居によって削平を受けている。N9°E方向に軸がある。長軸と短軸は削平のため不明である。東西方向の住居跡の幅は、約4.0mである。床面には人が日常的に踏みつけることによってできる硬化面は確認できなかった。住居跡を埋積した土(埋土)は、



遺構埋土

①黒褐色(10YR2/2)土。炭化物・焼土粒・砂粒を含む。

炉内埋土

⑤暗褐色(10YR3/4)土。褐色ブロック・砂粒・炭化物・焼土粒を含む。

⑥暗褐色(10YR3/4)土。炭化物・焼土・褐色ブロックを含む。

第1貯蔵穴埋土

②黒褐色(10YR2/3)土。褐色ブロック・炭化物を含む。

③黒褐色(10YR2/2)土。炭化物・焼土粒を含む。

第2貯蔵穴埋土

④黒褐色(10YR2/2)土。炭化物・焼土粒を含む。

図-54 6号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

炭化物や焼土を含んでいる。しかしながら、火を使ったような施設は検出されていない。5号住居の東側は、6号住居と切り合っている。埋土が非常に似通っているため切り合い関係の把握は困難であった。色調からは区別できず、埋土の粘性の違いから線引きをしている。住居内からピットが4基検出されているが整然と並ばない。中央に位置するピットが柱穴と考えられる。床面からの深度は30cmを測る。付帯設備としては、炉や貯蔵穴らしきものは検出されていない。

出土遺物は、接合できた遺物で2点出土している。

ともに甕形土器の口縁部の破片であり、内側に細長く突起をもつものである。弥生中期後半から後期初頭の時期である。

6号住居

6号住居は、平坦地区2区で検出された方形の竪穴住居である。西側は、同じ弥生中期後半期の5号住居と切り合っている。重複関係では、6号住居が新しい。また、6号土坑、79号土坑及び28号住居とも切り合っているが、79号土坑が古代で、28号住居は古墳前期の竪穴住居で後世のものである。軸方向は、N4°Wで、4.8×4.9mのプランで



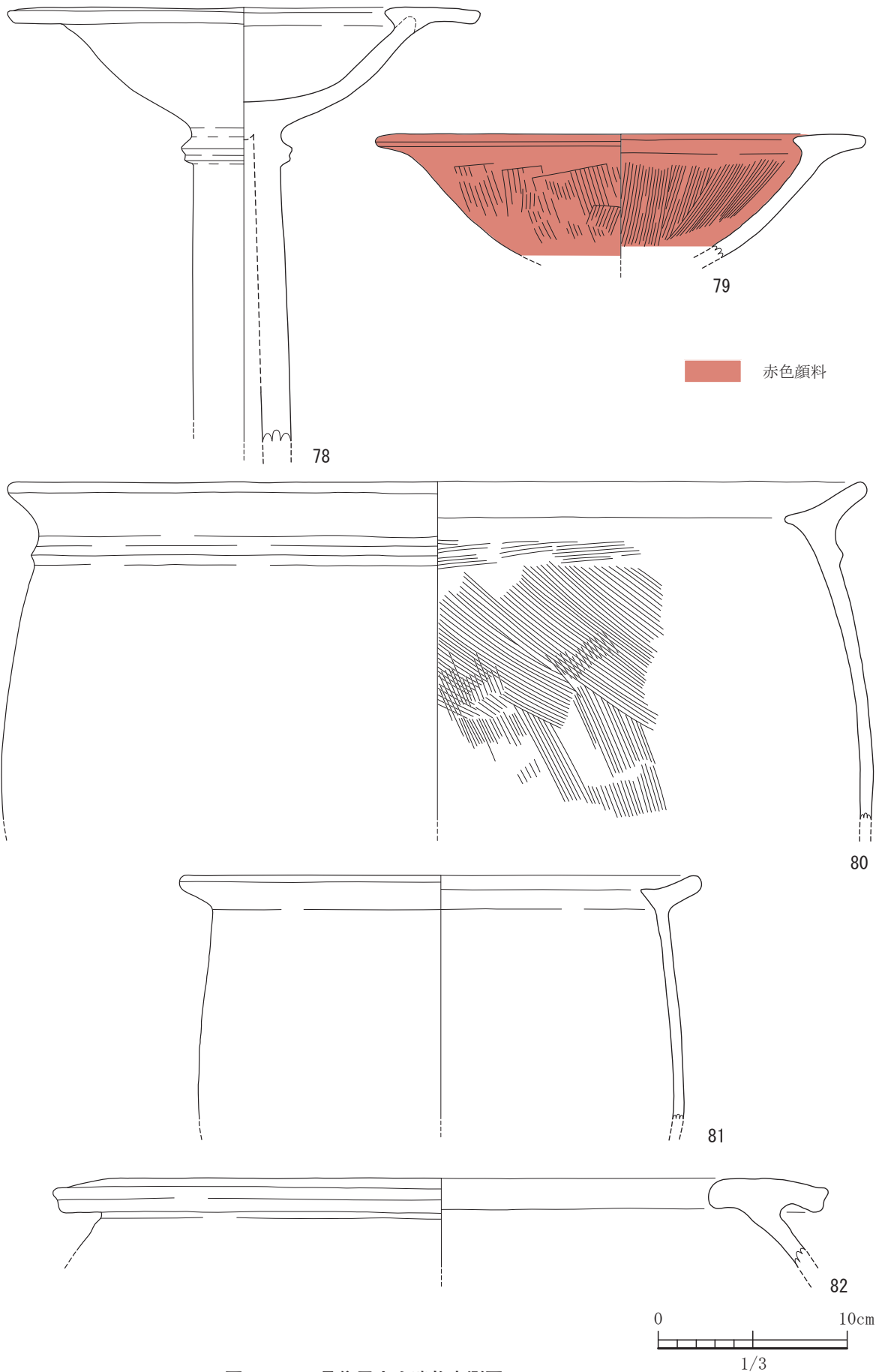


図-55 6号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

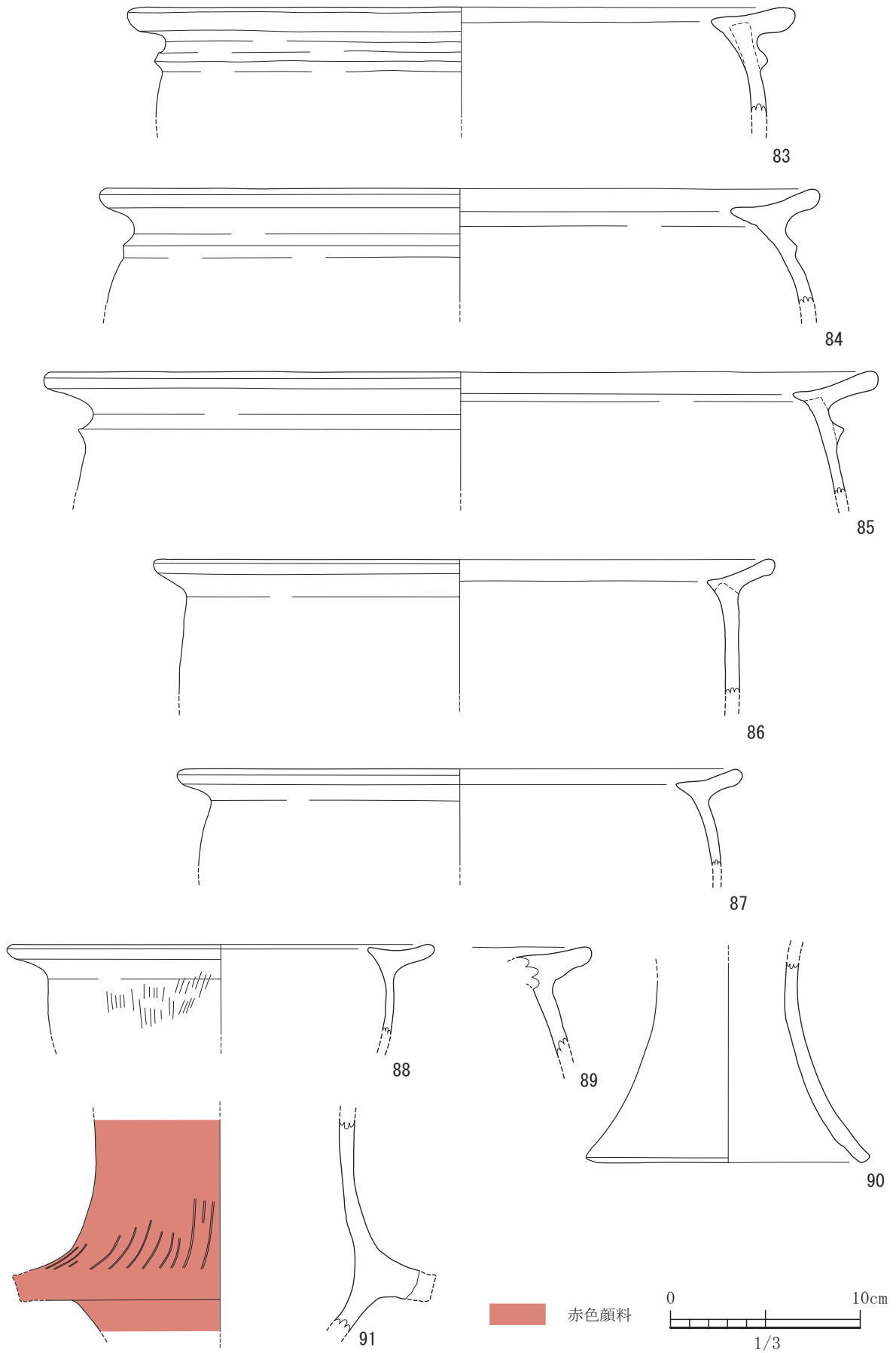


図-56 6号住居出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

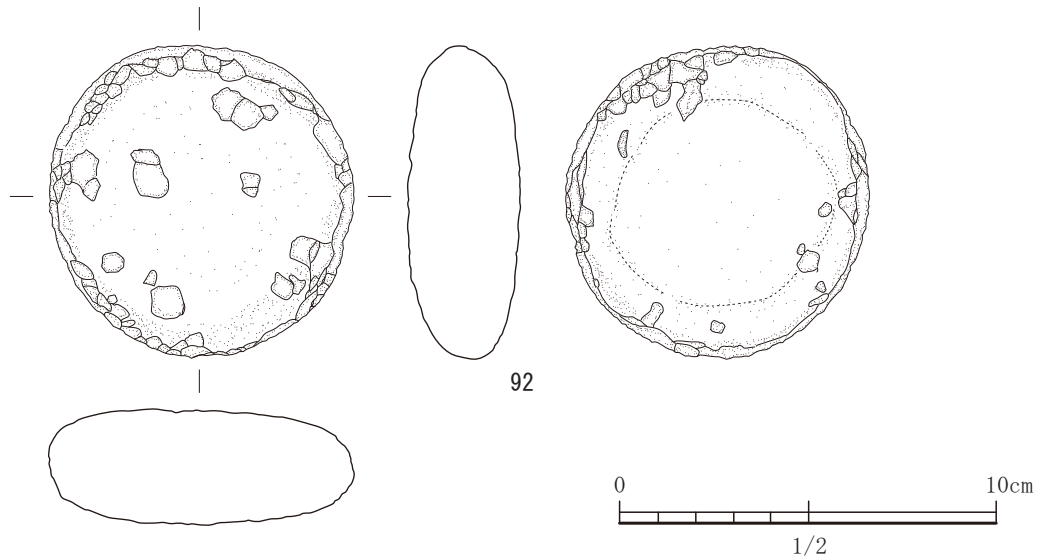


図-57 6号住居出土遺物実測図 3 (S=1/2)

ある。検出面から床面までの深さは10cm程度であった。柱穴と考えられるピットを4基検出した。整然とは並ばない。深さもなく全体的に浅い。住居跡の中央部には直径約1.4mの炉が設けてある。約15cmほどの深さで掘りこまれていて、中央部は平坦な形状を呈している。炉の南側には厚さ約10cmの赤色の焼土塊が検出された。高温酸化のために赤色化した土であり、明らかに火を使った痕跡である。この炉の縁に沿って、4基の小規模のピットが確認できた。炉に伴う施設であるが用途は不明である。付帯設備としては、貯蔵穴と思われる土坑が炉を中心として南北の壁に接して検出された。床には、硬化面は確認できなかった。床を形成する地山がシルト質であるがゆえ硬化しないのかもしれない。

出土遺物は、土器と石器が出土している。

土器では、甕形土器が10点、高坏が2点、器台が2点の14点である。78と79は高坏である。78は部分的に赤色顔料痕が確認できるが、摩耗が著しく塗布された範囲を示すことはできない。口縁部が若干垂れ下がる。台部の上部には、断面がM字の形を呈する突帯文が一列めぐらす。79は、内外面とも赤色顔料が塗布されている。80から89まで甕形土器である。82以外は、口縁部において内側に細長く突起をもち、中央がやや窪むものである。80は口縁部の下に突帯を1条めぐらす。82は、口縁部のみで、端部の形状は鋤先状になって、やや垂れさがる。83から

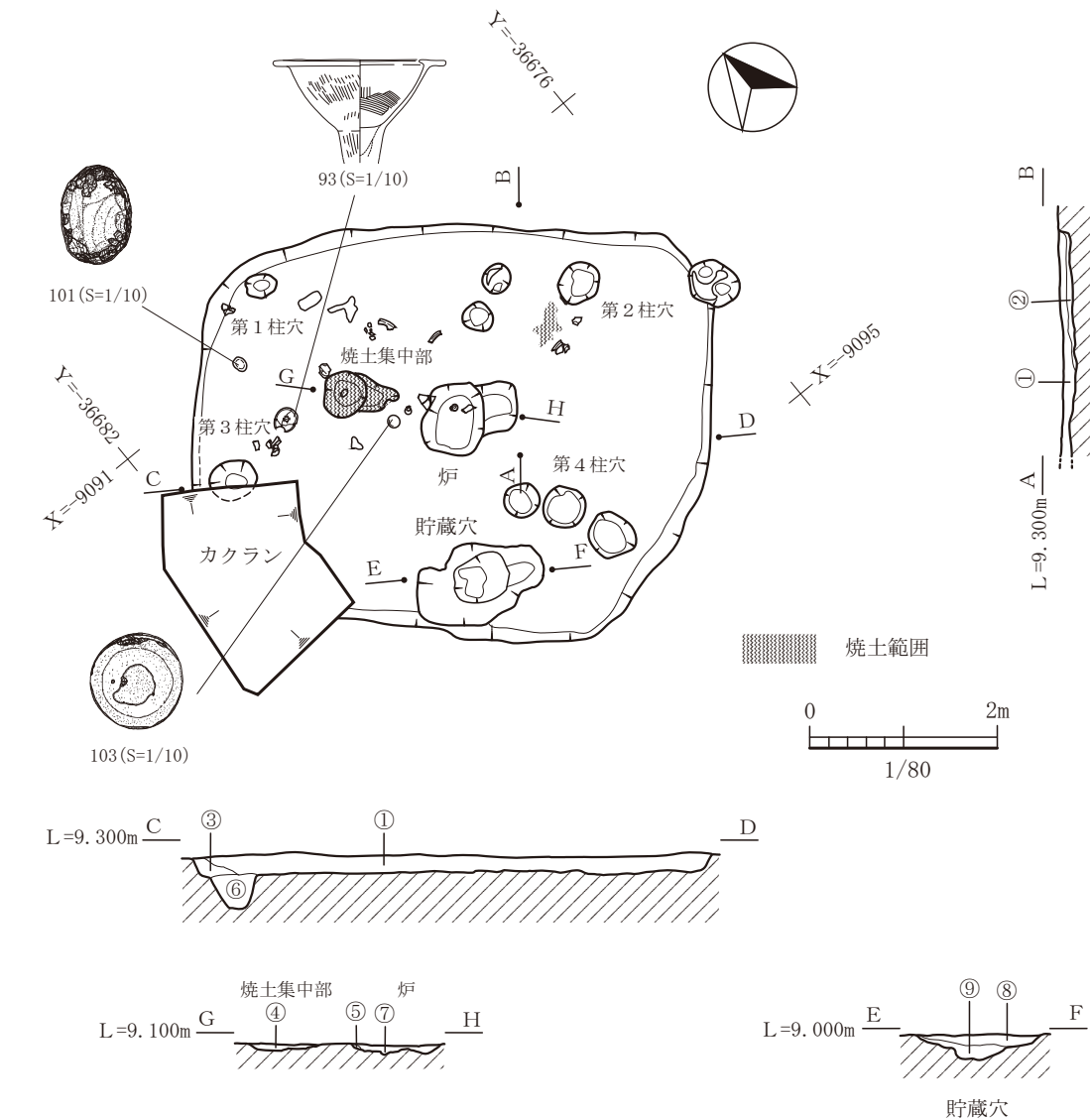
85は、胴部の上端に1条の突帯をめぐらす。90及び91は、器台であろう。91は、筒形器台の受け部に相当すると考えられる。突帯は下にやや垂れ下がるように付けてあり、先端部は欠損している。赤色顔料が外面に塗布されている。突帯の上には暗文が施されている。82とともに91も須玖Ⅱ式である。弥生中期後半の遺構と考えられる。

石器では、石材が輝石安山岩の磨石である。石器はこの1点のみである。

### 7号住居

7号住居は、平坦地区2区で検出された竪穴住居である。西側はカクランのため壊されていた。東側では14号土坑と切り合っているが、7号住居が新しい。主軸は、N48°Wの方向にとり、5.5×4.3mの隅丸方形のプランである。柱は4本柱を想定している。炉を中心としてやや北西側に偏っているものの整然と並ぶところから柱として判断している。炉は住居跡の中央に位置し、楕円形の形を呈している。南東側にテラス状に窪んでいる。ほぼ同じ深さをもつものである。炉としての別の施設の窪みかもしれない。埋土が同じもので、同時期に使用されていたものであり、炉の付け替えではない。また、炉の北西側には焼土が集中する部分がある。約7cmほど掘りこまれた部分に高温酸化に伴う赤褐色を呈する焼土が入れられていた。これも炉と同様、図中では右側にテラス状の施設が設けてある。おそらく機





遺構埋土

- ①黒褐色(10YR3/2)粘質土。橙色のブロックと黄色の粒を含む。1～10mm程度の焼土粒を含む。炭化物を含む。
- ②黄暗褐色(7.5YR3/4)粘質土。
- ③褐色(10YR5/6)粘質土。暗褐色のブロックと黄色の土をブロック状に含む。焼土粒・炭化物を少量含む。

炉内埋土

- ⑤赤褐色(2.5YR4/8)土。
- ⑦褐灰色(7.5YR4/1)粘質土。焼土粒(1～5mm)を多量に含む。炭化物(1～5mm程度)を多量に含む。黄色のブロックを少量含む。

焼土集中部

- ④赤褐色(2.5YR4/8)土。

柱穴埋土

- ⑥灰黄褐色(10YR4/2)粘質土。暗褐色のブロックと黄色の粒を含む。焼土粒・炭化物を少量含む。

貯蔵穴埋土

- ⑧黒褐色(7.5YR3/2)粘質土。焼土粒と粘土ブロックを含み、炭化物を少量含む。
- ⑨黒色(7.5YR2/1)粘質土。全体的に少量の礫と粘土粒を含み、この層の下部に黄褐色粘土ブロックを含む。

図-58 7号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

能的には炉であろう。これは以前使っていて廃棄したあと図中右側の炉を使用するようになったと考えている。炉の位置と住居跡のピットの位置関係、図中の右側が、若干掘方がやや深く掘りこまれ、左側の床より下がっており、形状の面で異なっているのて拡張された可能性がある。南側の壁に接するよう

に土坑があるが、貯蔵穴であろうと考えている。植物依存体は検出されていない。7号住居も硬化面は認められなかった。

出土遺物は、接合できた土器が8点、石器が4点である。土器は高坏が2点、甕形土器が4点、壺形土器が1点、把手が1点である。93は高坏の台部か

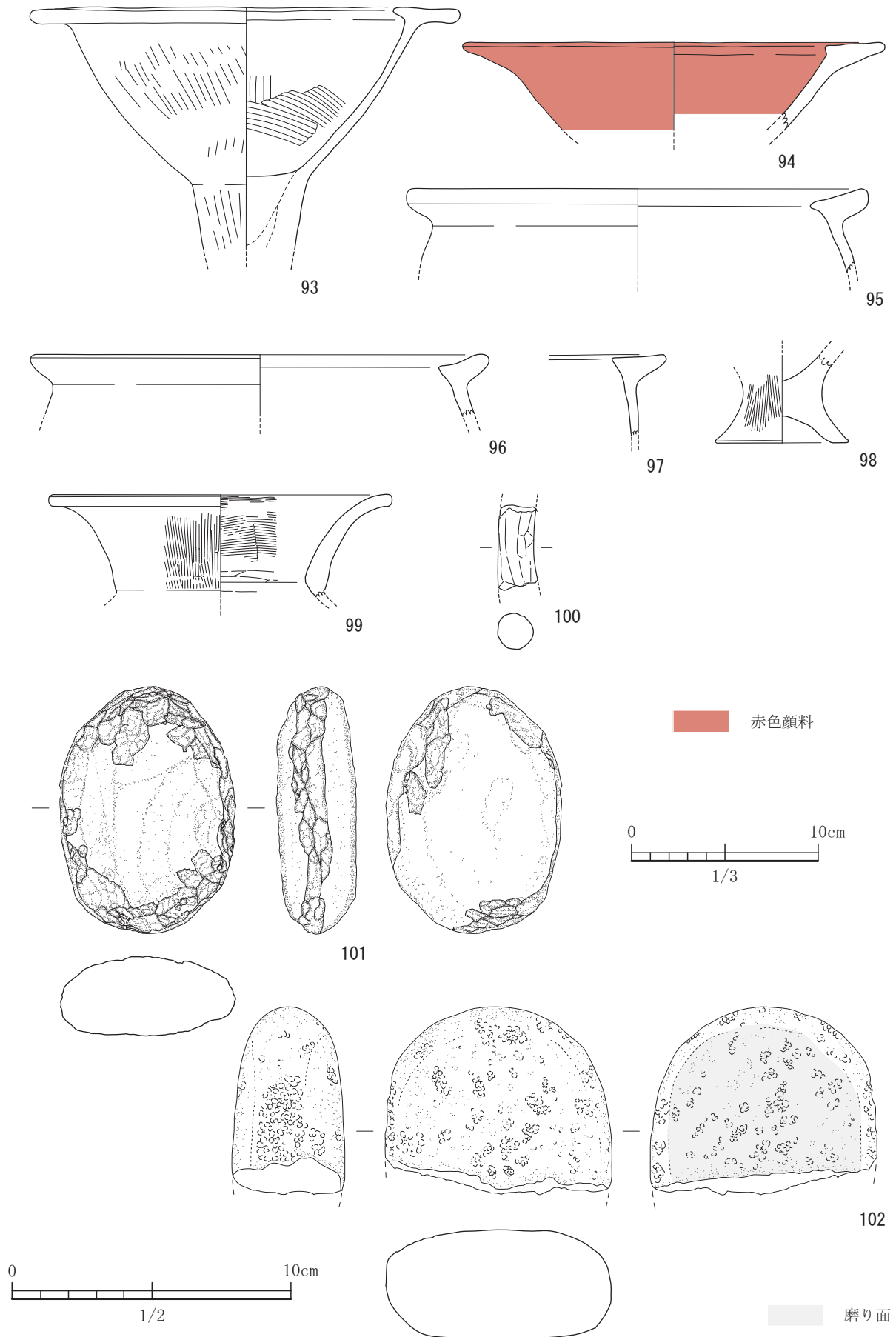


図-59 7号住居出土遺物実測図 1 (S=1/3, 102はS=1/2)

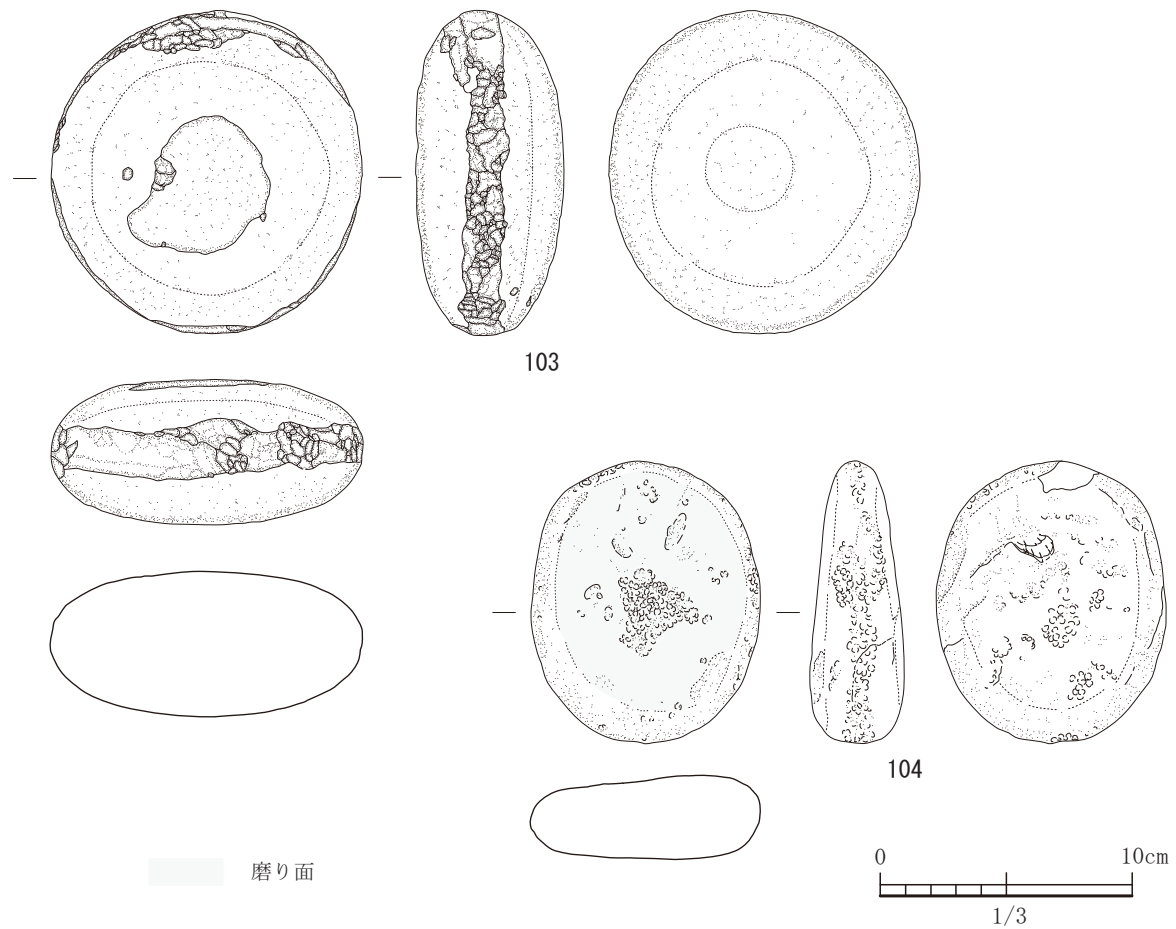


図-60 7号住居出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

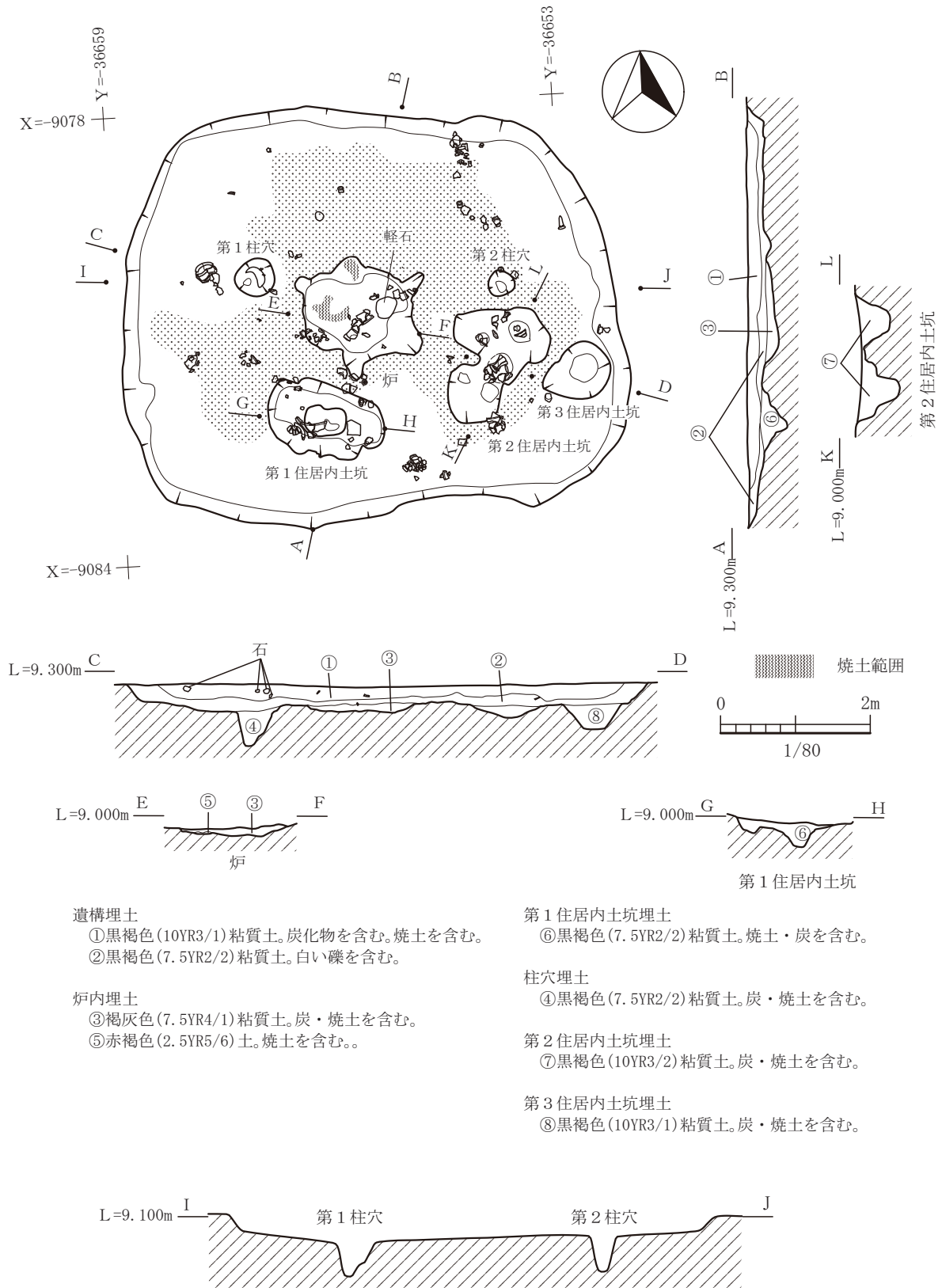
ら口縁部である。内外面ともにハケ目のちナデ調整である。94は、口縁部において若干内側の突起が見られる。内外面とも赤色顔料が塗布されている。95から97は甕形土器の口縁部である。口縁部の内側に突起をもつ。96は中央に窪みをもつが、95と97は平坦である。98は台付甕の脚部である。脚部の高さは低い。99は、壺形土器の口縁部の破片である。内外面ともハケ目調整である。100は、把手であるが、甕形土器の口縁部につけてあったものであろう。

石器は、全て磨石である。石材は、101は阿蘇溶結凝灰岩、102から104まで輝石安山岩である。それぞれの石材となる石は、北の崎遺跡周辺で得ることができる。

### 8号住居

8号住居は、平坦地区2区で検出された竪穴住居である。主軸はNで、6.6×5.4mの隅丸方形のプランである。長軸方向に平行して2本柱となって

いる。第1柱穴と第2柱穴ともに約45cmの深さがある。検出面から床面までの深さは約22cmである。硬化面は炉の周りで確認でき、しっかりしている。付帯設備として、中央に炉が設置してある。炉は楕円形で、大きさは1.5×1.2mである。炉の深さは約10cmあり楕円形の上端からテラス状の突出部が5箇所出ている。炉の中から、直径が30cm程の軽石が出土した。また焼土が塊となって2箇所から出土している。楕円形で、加工痕は認められない。焼けた痕跡も認められなかった。用途不明。住居跡の南側には、土坑が3基検出された。この土坑から、器台や丹塗り土器が出土しているため、単なる貯蔵穴ではないと考えられ、住居内土坑と名付けている。第1住居内土坑と第2住居内土坑は、ピットが連結されたような土坑であり、床部に2箇所窪みがある。連結したピットは同時に埋積されており、施設として機能していた時から2つ穴が開いていたと考えられ



遺構埋土

- ① 黒褐色(10YR3/1)粘質土。炭化物を含む。焼土を含む。
- ② 黒褐色(7.5YR2/2)粘質土。白い礫を含む。

炉内埋土

- ③ 褐灰色(7.5YR4/1)粘質土。炭・焼土を含む。
- ⑤ 赤褐色(2.5YR5/6)土。焼土を含む。

第1住居内土坑埋土

- ⑥ 黒褐色(7.5YR2/2)粘質土。焼土・炭を含む。

柱穴埋土

- ④ 黒褐色(7.5YR2/2)粘質土。炭・焼土を含む。

第2住居内土坑埋土

- ⑦ 黒褐色(10YR3/2)粘質土。炭・焼土を含む。

第3住居内土坑埋土

- ⑧ 黒褐色(10YR3/1)粘質土。炭・焼土を含む。

図一 61 8号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)



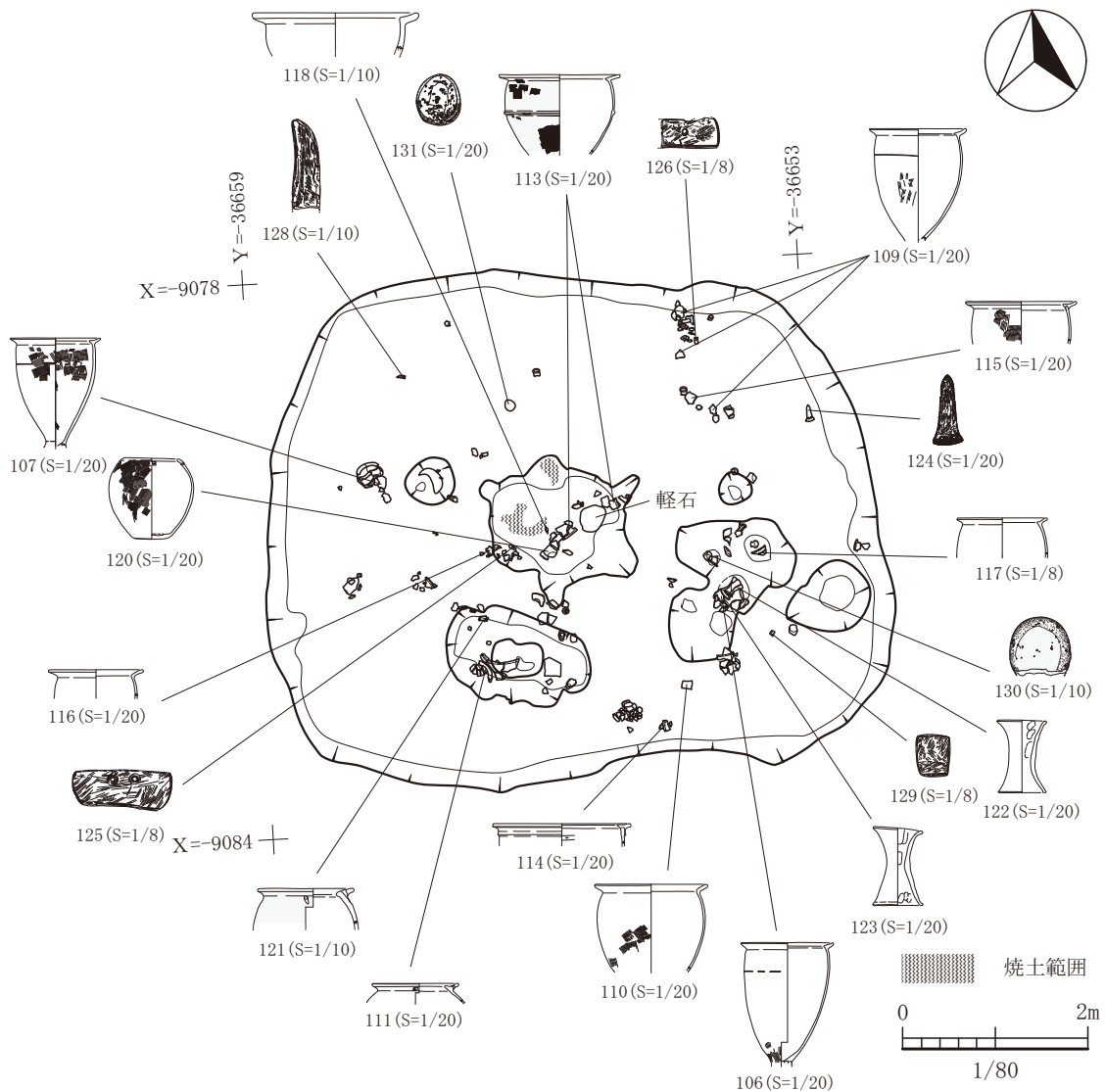


図-62 8号住居遺物出土状況図 (縮尺 1/80)

る。出土遺物で、石戈、石鎌、器台、丹塗り土器や石包丁などが出土しているため「工房」や「呪術的な施設」であった可能性がある。この竪穴住居の南側には、遺構がない空白地帯があり、広場的な空間があった可能性があり、居住のための建物ではないのかもしれない。

出土遺物は、接合できた土器が19点、石器が9点である。出土した土器では、高坏1点、甕形土器14点、壺形土器2点、器台2点である。105は、丹塗り土器で口縁部は端部がやや下に垂れ下がる。赤色顔料は内外面ともに塗られている。118の鉢形土器を除いて106から119まで甕形土器である。106は胴部に沈線を一周めぐらしているが、ほとんど上から

ナデ調整を施してあり、局部的にしかわからない。外面では胴部下半分は被熱による赤色化をしており、上半分はススが付着している。107も胴部に沈線があり一周めぐらす。外面には全体的にススが付着している。108も外面にススが付着。109にも胴部に沈線が施してあり一周めぐらす。胴部下半分は被熱による器面剥離が激しい。110にも内外面ともにススが付着している。111は、口縁部において、内側に突起をもち、その厚さで中央に窪みをもたせ、外側に延びる。焼成前に空けられた穿孔が完全な形で1箇所、欠損しているものが1箇所あり、口縁部に総数4箇所空けられていたと思われる。112は、丹塗り土器で、口縁部にミガキ痕が残存している。磨滅

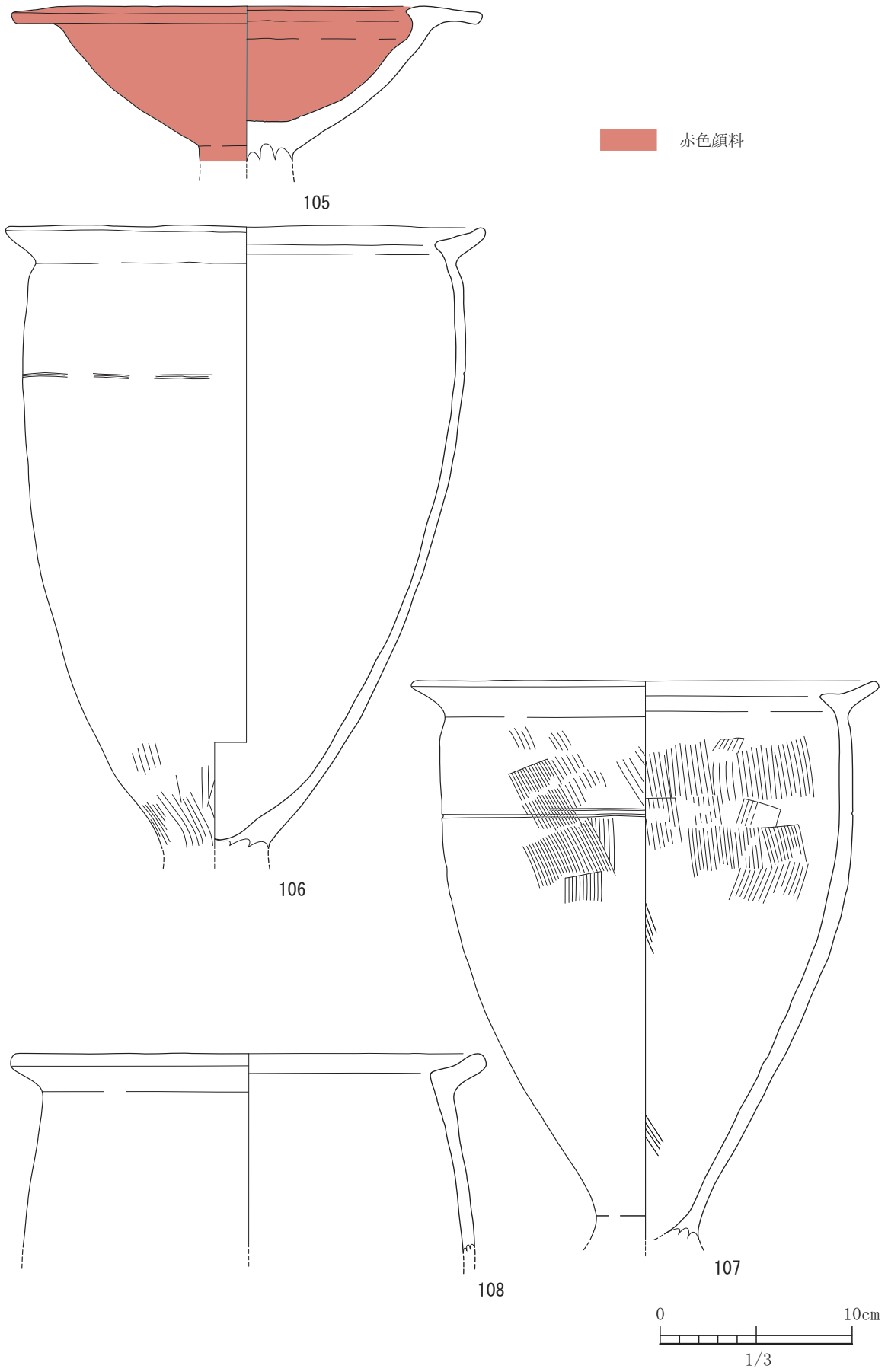


図-63 8号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

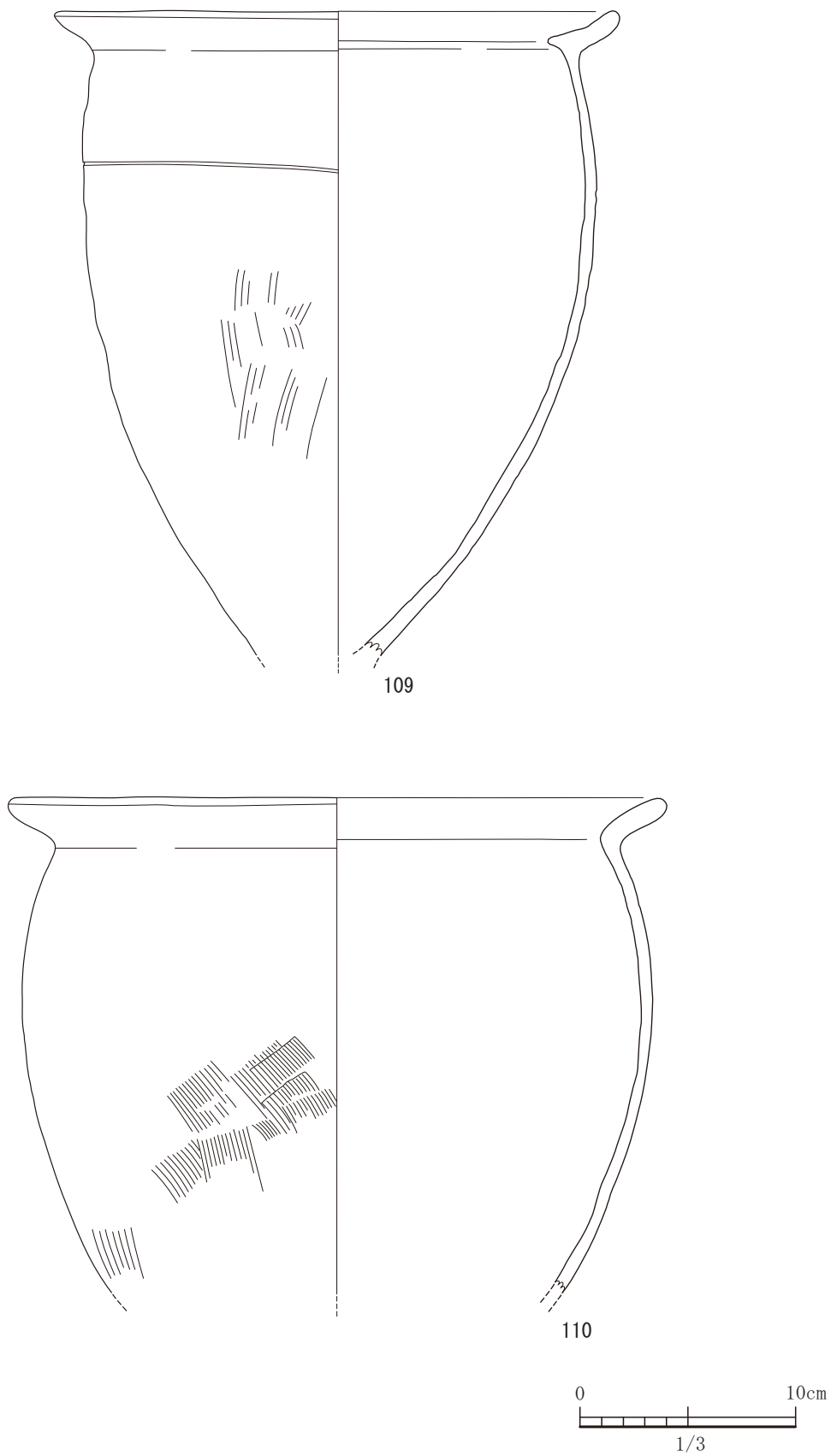


図-64 8号住居出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

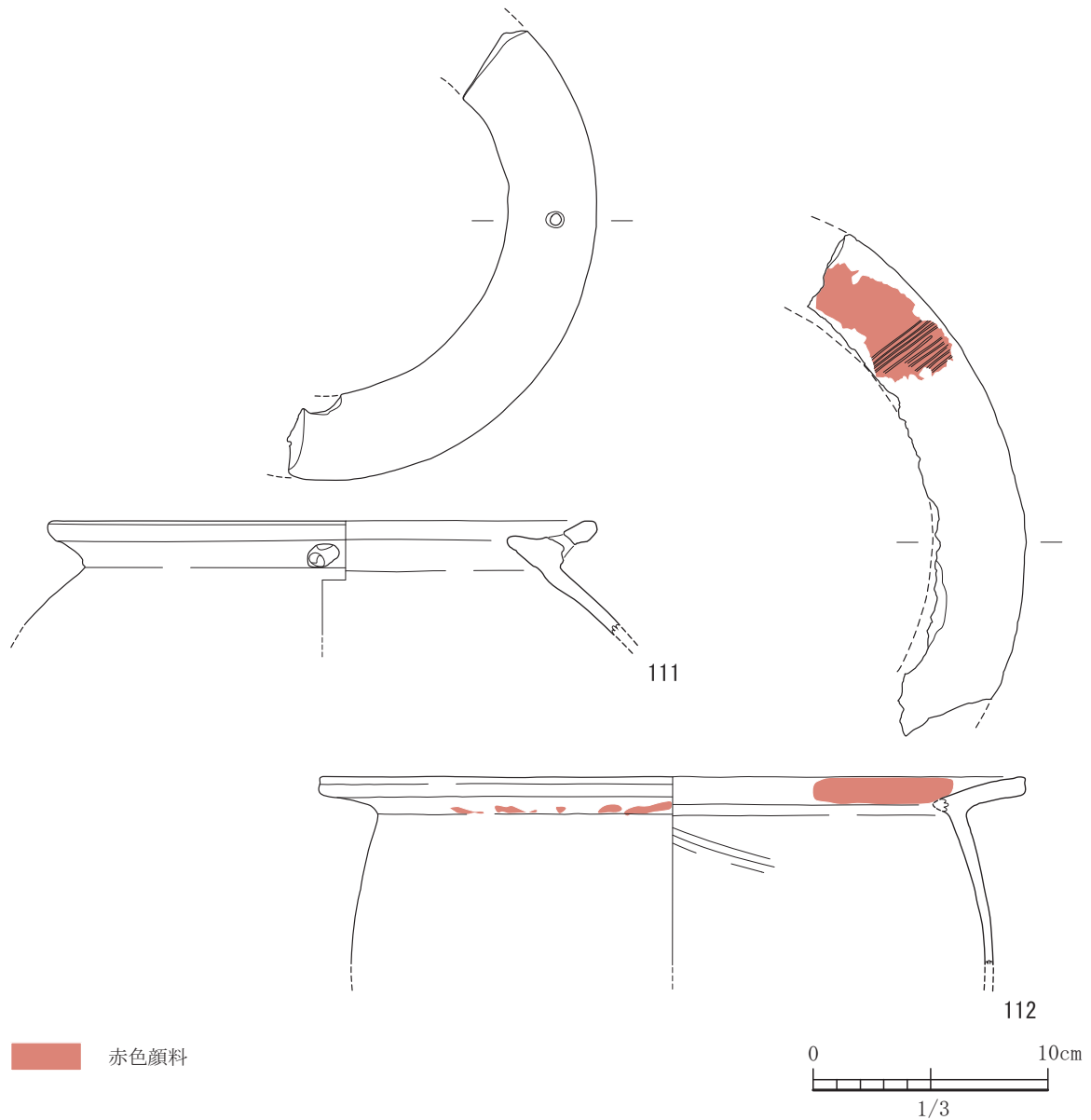


図-65 8号住居出土遺物実測図 3 (すべてS=1/3)

が激しく部分的にしか残存しない。口縁端部は中央を凹ませ鋤先状にしている。113は、丹塗り土器で丁寧なミガキが施されている。器面は磨滅しており部分的にしか観察できない。胴部に突帯が1条めぐっている。M字状に窪みをもたせている。114は、口縁部の下に突帯をめぐらす。118は鉢形土器である。120は、無頸壺で、外面がハケ目のちナデ調整で内面がていねいなナデ調整である。外面と内面の口縁部付近に赤色顔料痕が認められる。穿孔が口縁部に2箇所空けられている。そのうち1箇所は、貫通していない。121は、丹塗り土器で口縁部に穿孔を施してある。122と123は、完形の器台である。両

方とも丁寧なナデ調整で裾部に一部赤色顔料痕が認められる。124は、ほぼ完形の変ハンレイ岩製の石戈である。基部と刃部で一部欠損している。125から127までは頁岩製の石包丁である。125はほぼ完形である。126と127は約1/3程欠損している。128は、泥質片岩製の石鎌である。1/2程の残存である。129は蛇紋岩製の柱状片刃石斧で、全面に擦痕がある。130と131は磨石である。130には明瞭な磨り痕が両面に見られる。石材は、輝石安山岩である。132は、輝石安山岩製の石錘である。

#### 9号住居

9号住居は、平坦地区2区で検出された竪穴住



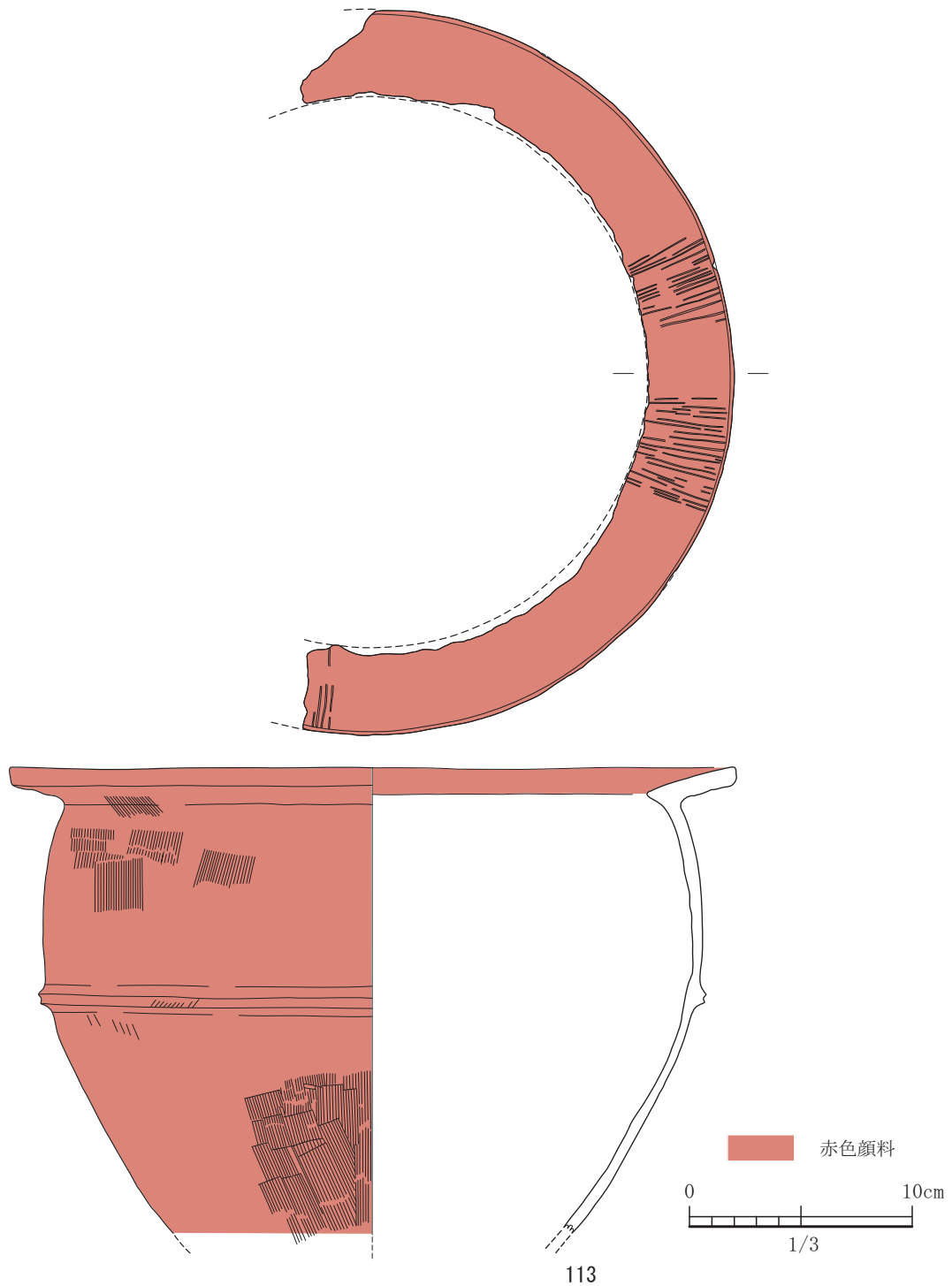


図-66 8号住居出土遺物実測図 4 (S=1/3)

居である。北東側がカクランによって欠損している。また、南西部には仮設道路建設のため調査ができない部分が生じた。主軸はN方向で、3.8×3.3mの方形プランである。検出面から床面までの深さは、3cmほどでほとんどの遺物は削平のため無くなって

いたものと考えられる。よって、接合でき遺物実測ができる土器は1点しかなかった。ほとんど小破片の状態での出土である。柱に関しては、長軸方向に2基の柱穴があり、2本柱である。両方とも深さは40cmほどある。西側にも長軸方向に並ぶ2基の柱

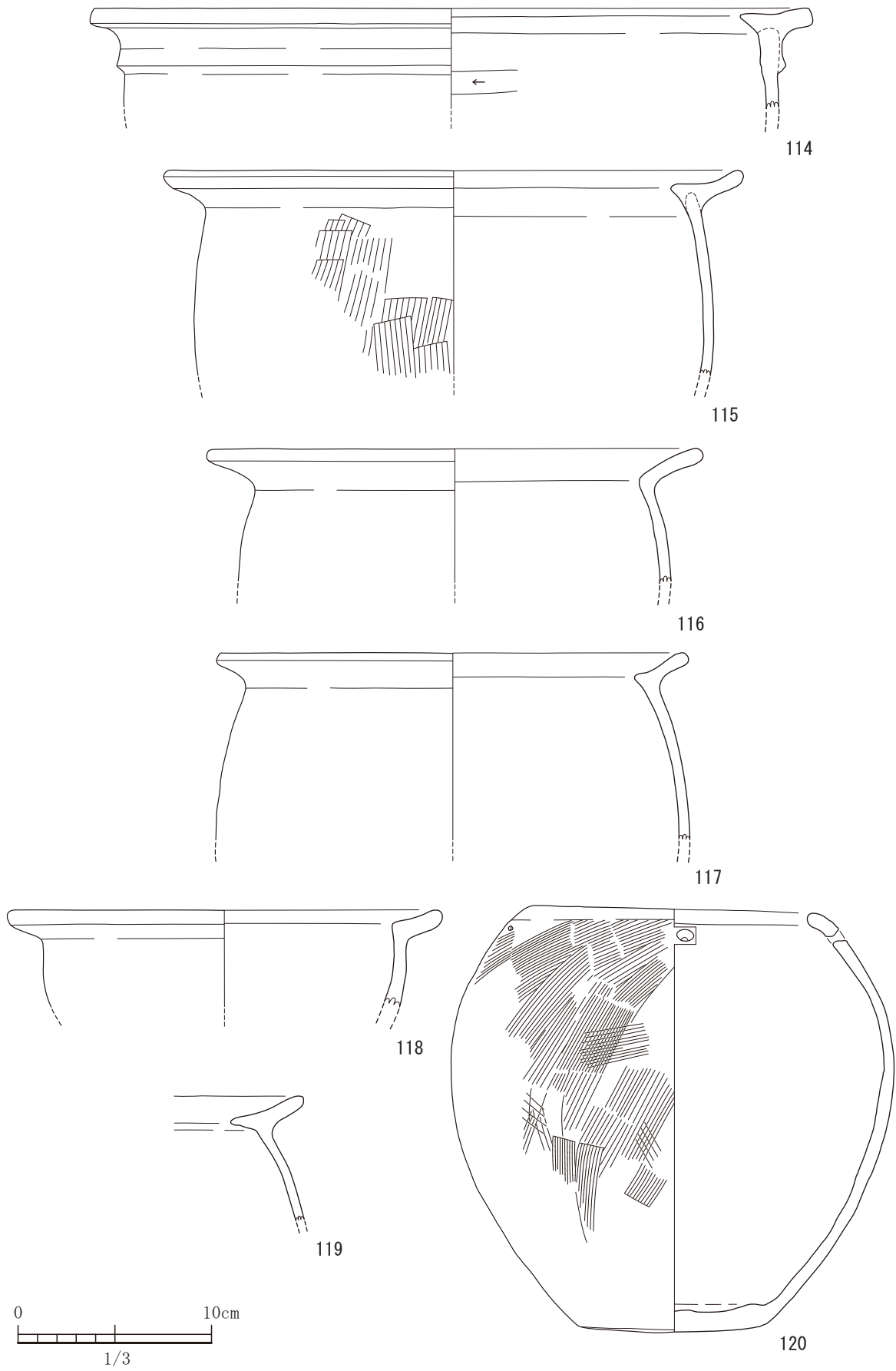
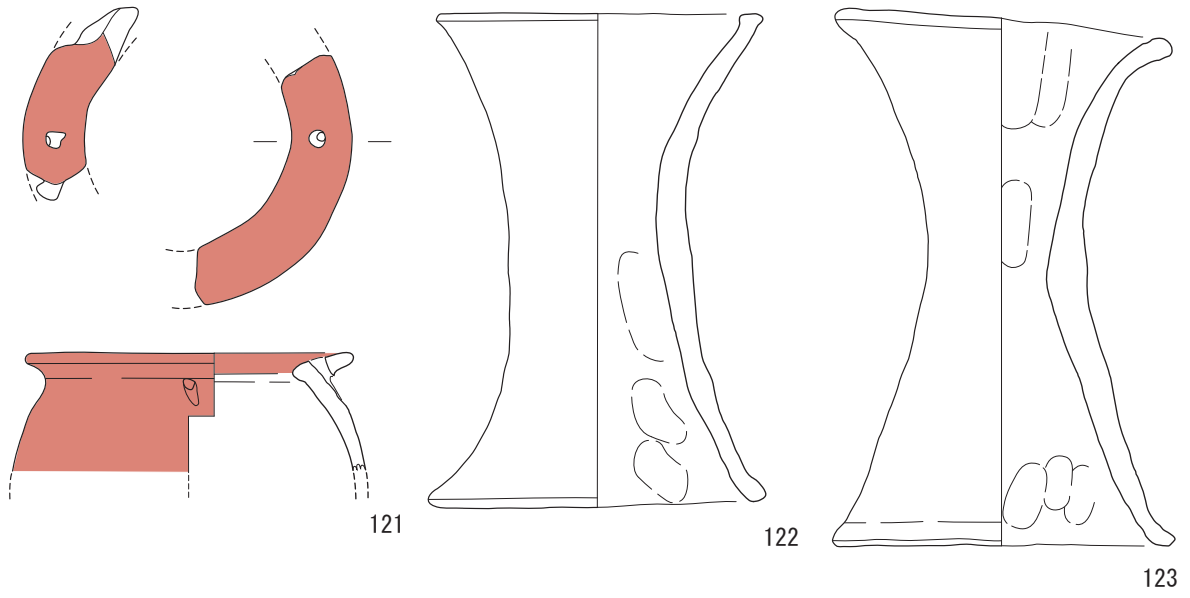
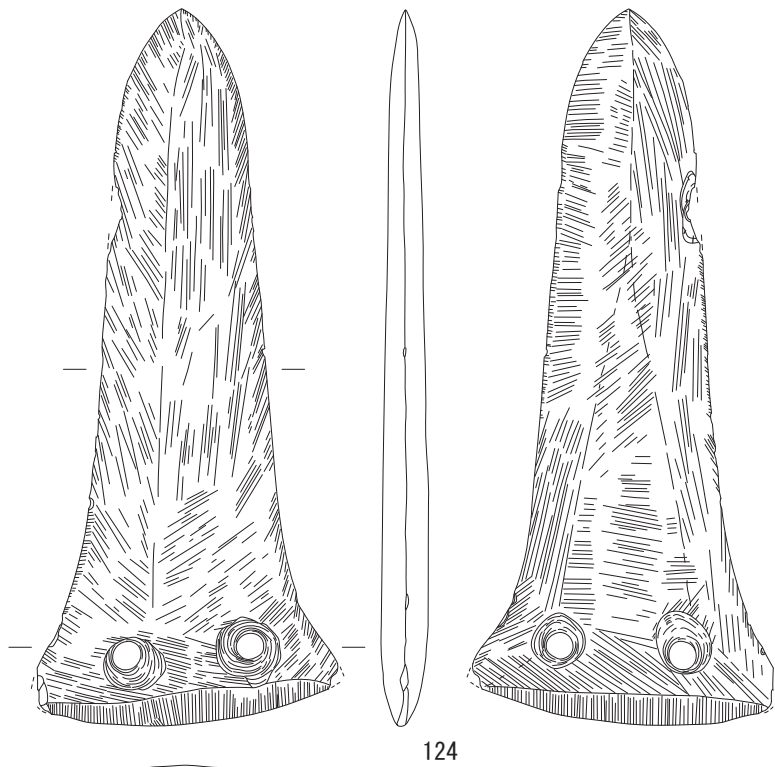
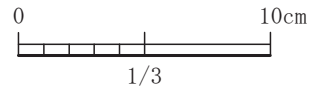


図-67 8号住居出土遺物実測図 5 (すべてS=1/3)



赤色顔料



124

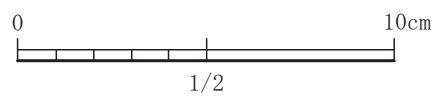


図-68 8号住居出土遺物実測図 6 (S=1/3, 124はS=1/2)

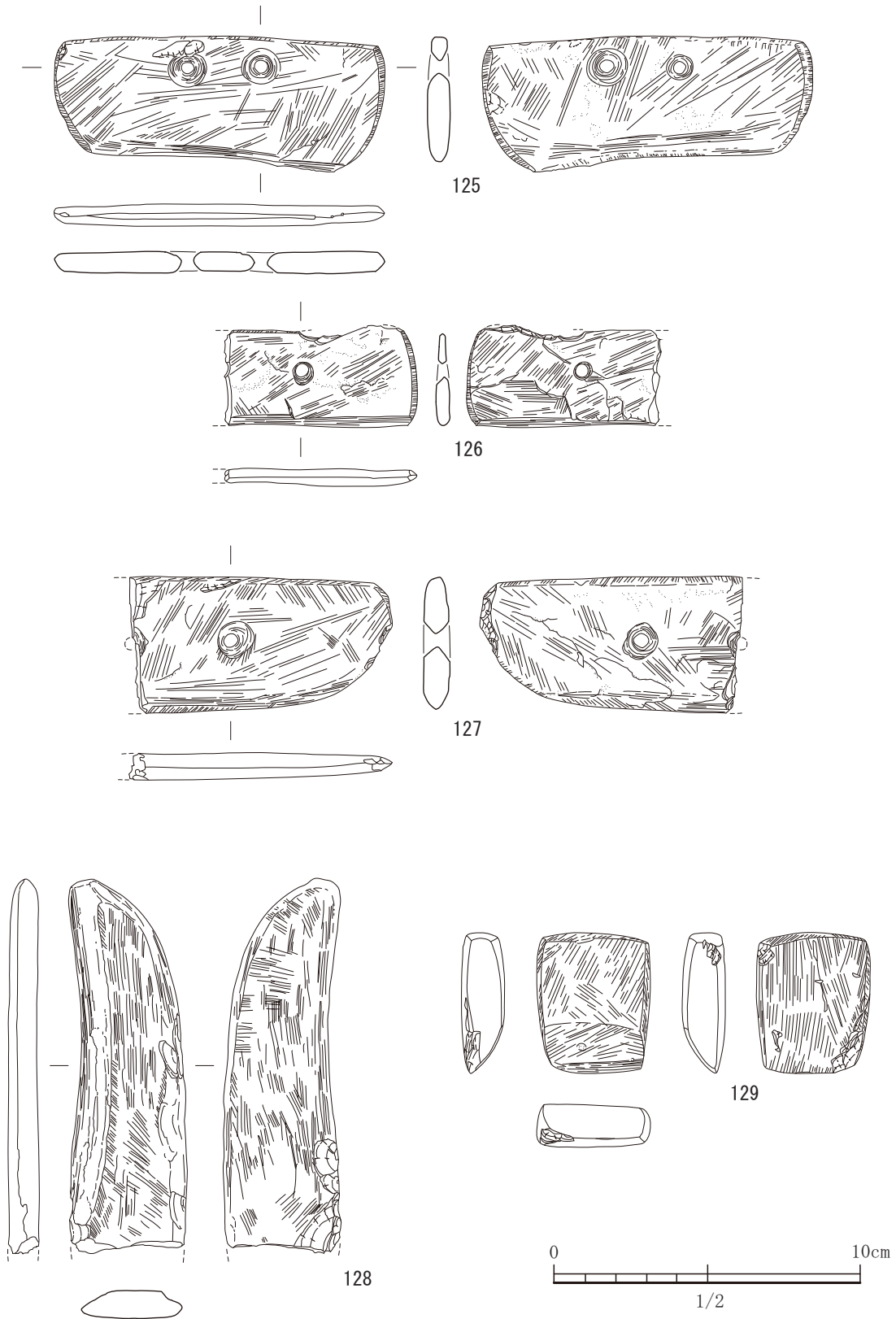


図-69 8号住居出土遺物実測図 7 (すべてS=1/2)

穴があるが、用途は不明。付帯設備として、中央に  
 炉が設置してある。直径約80cmのほぼ円形の炉であ  
 る。北側にテラス状に平らな部分がある。炉の底は

平坦な形状を呈し、炭が埋土中から検出された。貯  
 蔵穴は検出されない。炉や柱の周囲には、硬化面が  
 広がっていた。



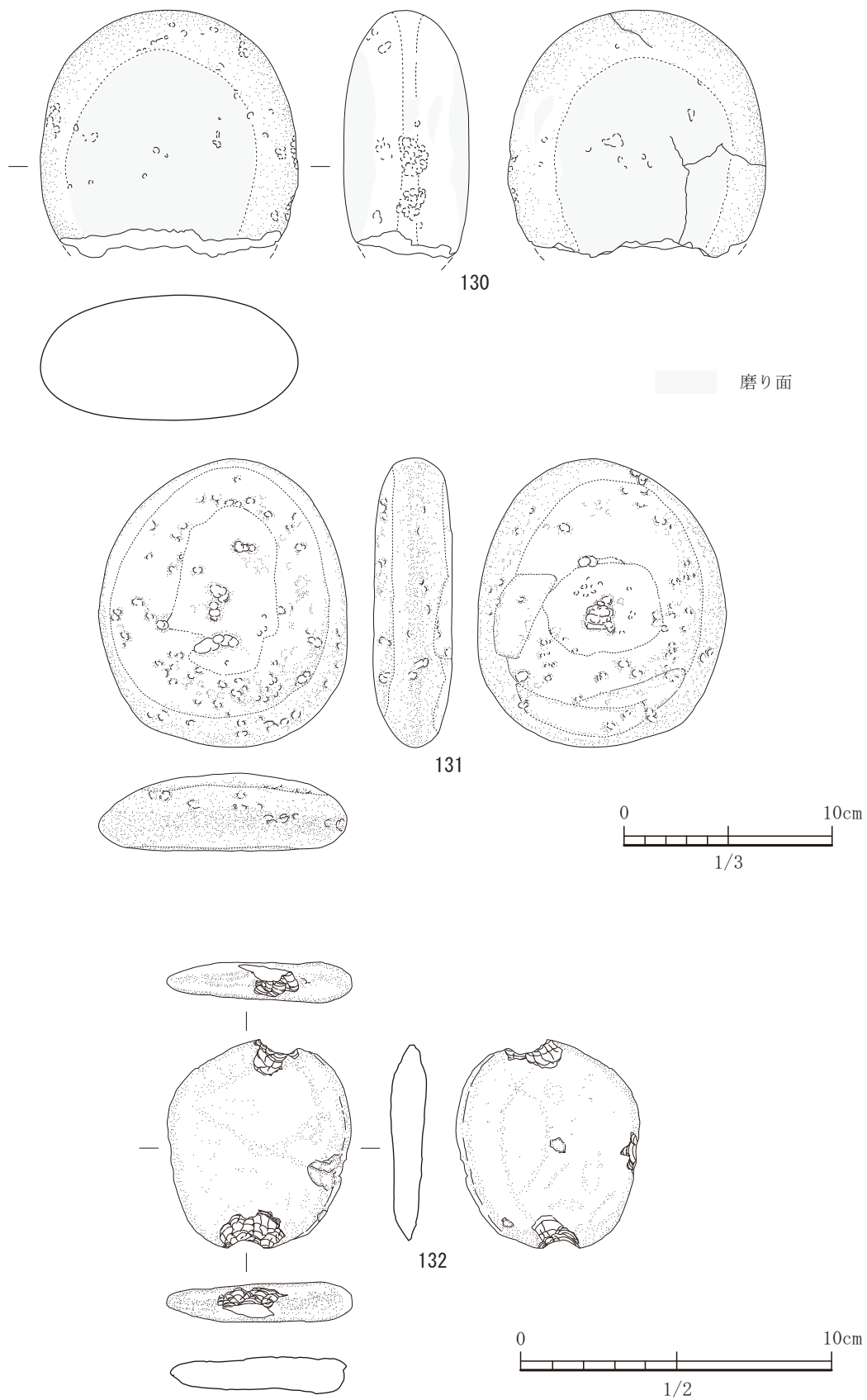


図-70 8号住居出土遺物実測図 8 (S=1/2, 131はS=1/3)

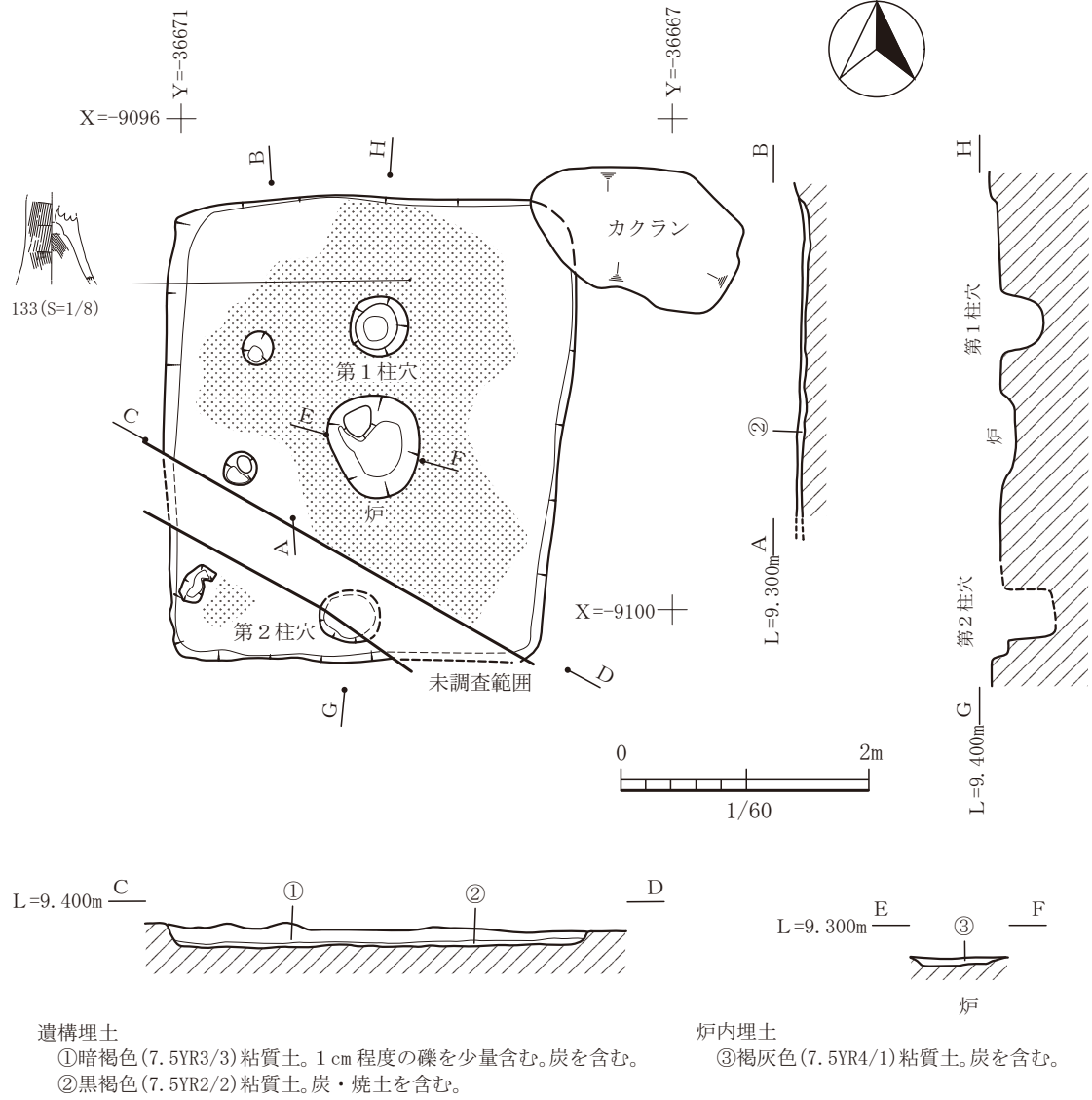


図-71 9号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

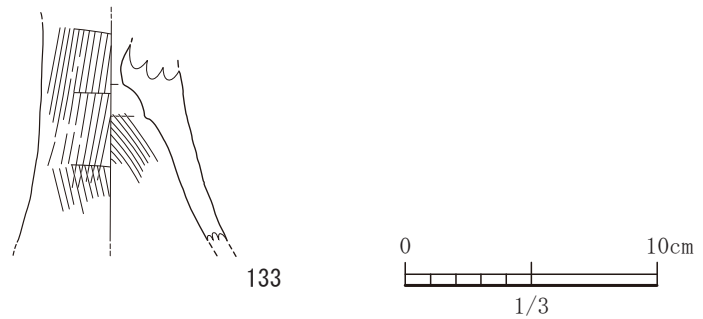
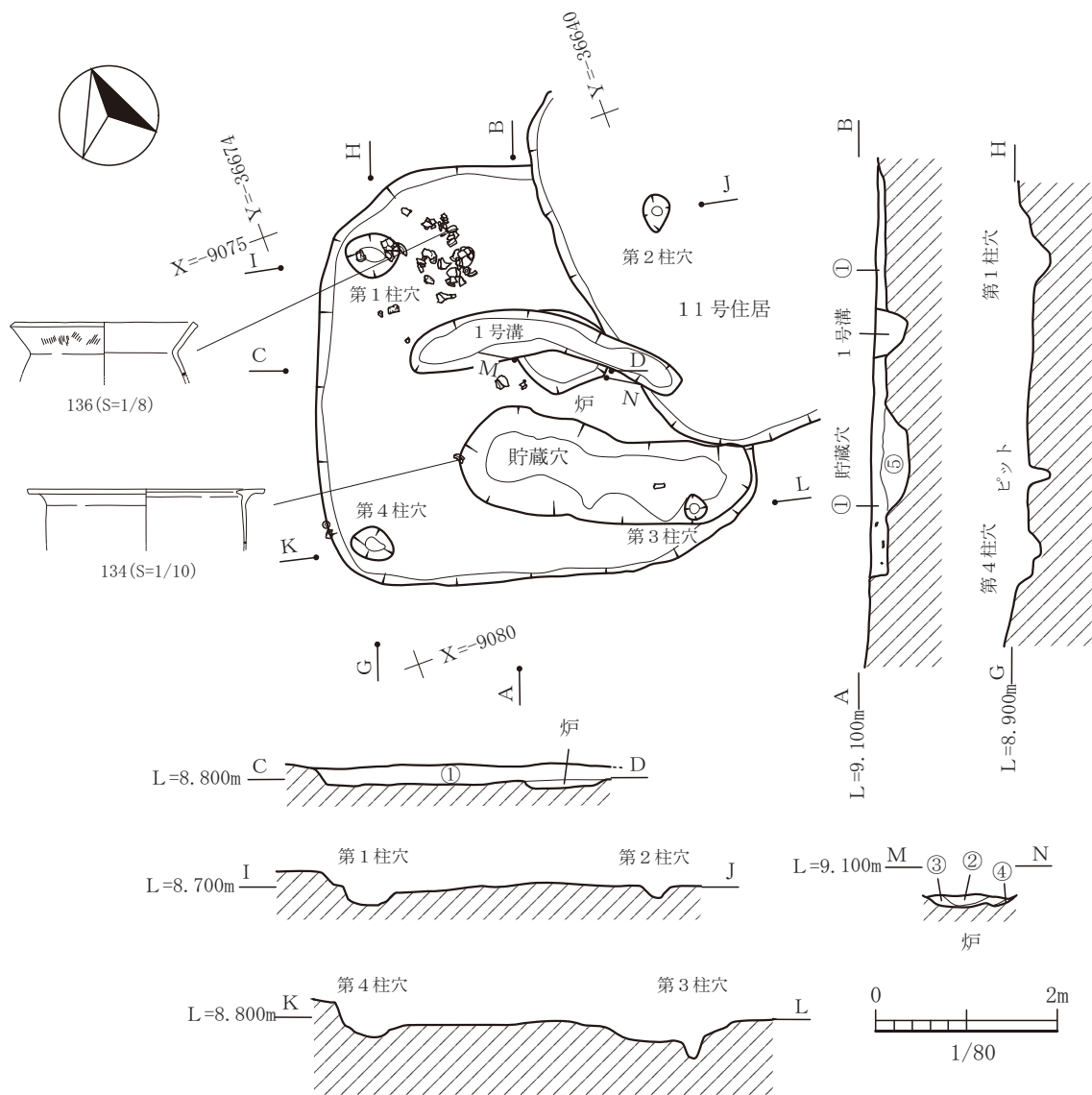


図-72 9号住居出土遺物実測図 (S=1/3)

出土遺物では、高坏の脚部が破片で1点のみである。内外面ともハケ目調整で、内面に絞り痕がある。

外面全体に赤色顔料痕がある。



- 遺構埋土  
 ①極暗褐色(7.5YR2/3)土。砂粒・炭化物・焼土粒を含む。
- 貯蔵穴埋土  
 ⑤暗褐色(7.5YR3/3)土。
- 炉内埋土  
 ②極暗褐色(7.5YR2/3)土。炭化物・焼土粒を多量に含む。  
 ③暗褐色(7.5YR3/3)土。橙色土ブロックを含む。  
 ④暗褐色(7.5YR3/2)土。

図-73 10号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

### 10号住居

10号住居は、平坦地区2区で検出された竪穴住居で、東側は11号住居によって切られている。中央には10号住居より新しい1号溝によって切られている。N17°Eに主軸をもち、4.8×4.6mの隅丸方形プランである。柱穴は住居跡のコーナー部に浅めに4箇所設けてあり、4本柱の上屋を持つと考えられる。付帯設備として、炉は中央に位置し1号溝

によって壊されている。埋土には多量の炭化物や焼土を含んでいる。住居跡の南側壁に平行するように貯蔵穴が設けてある。貯蔵穴は東側壁に接しており、掘りこんだ上端から外へ出ることはない。床面には硬化面は認められない。遺物の出土状況では、全体的に破片で出土し、北側にある程度まとまって出土した。

出土遺物は、接合できた土器が4点と石器が2点

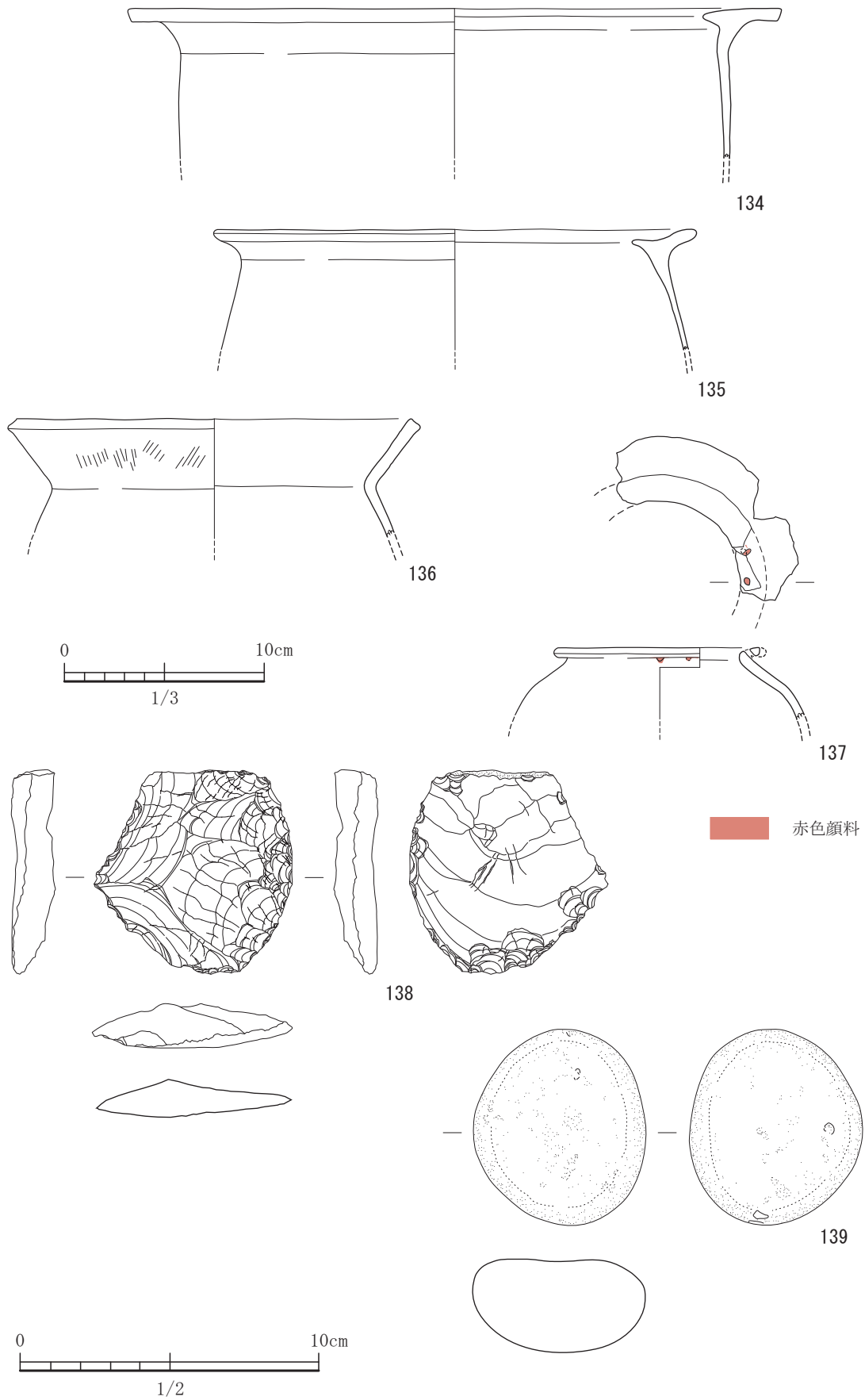


図-74 10号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 138,139はS=1/2)



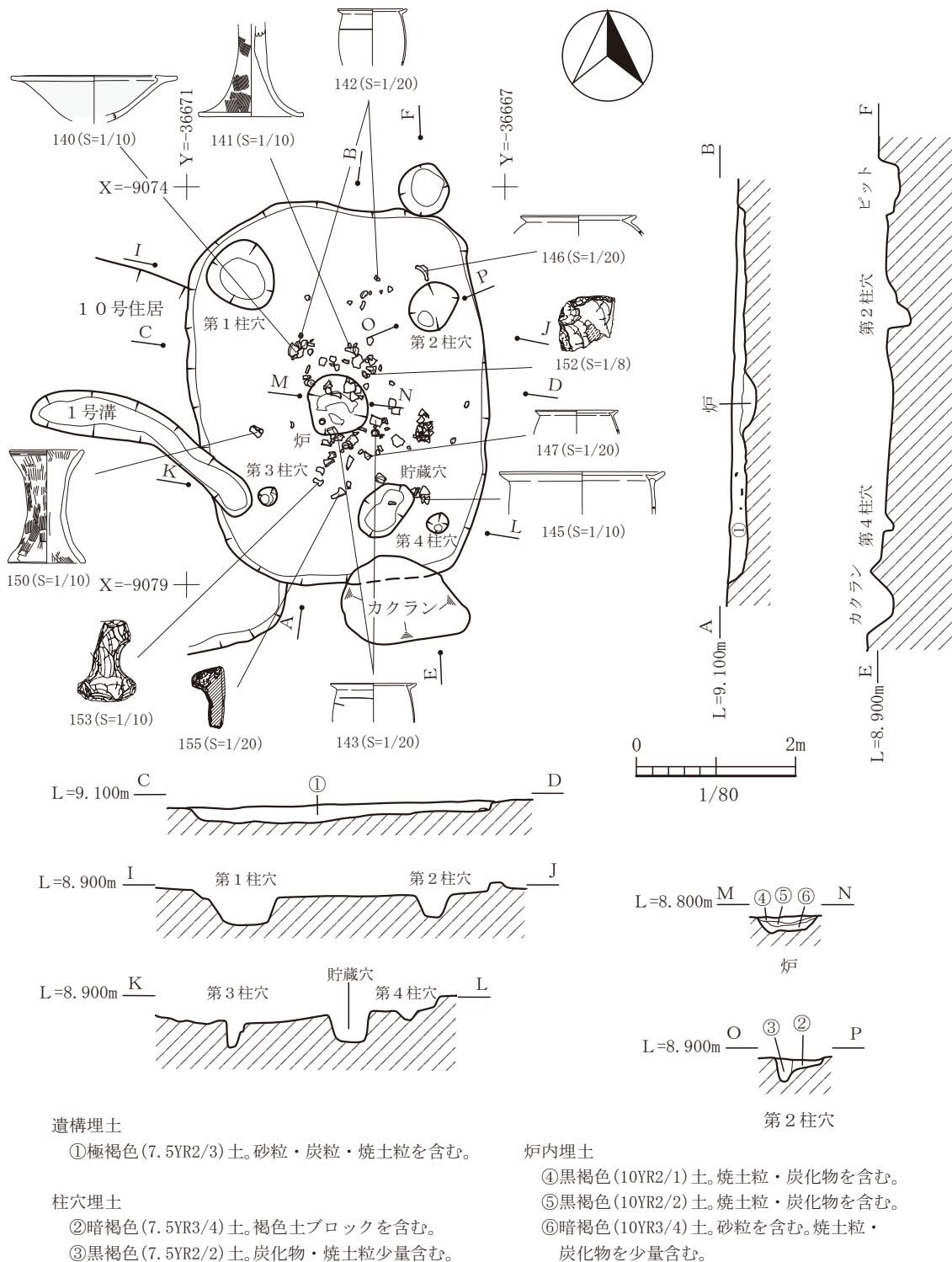


図-75 1号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

である。134から136は甕形土器である。134は、口縁部が平坦化されT字の形状を呈する。調整は磨滅して不明。135は、内側に細長い突起をもち中央をくぼませながら外側へと延びる。内外面ともナデ調

整である。136は、口縁部内外面にハケ目痕が残る。137は、壺形土器である。広口壺で穿孔が2箇所認められ、対向するところに2箇所あると考えられ、4箇所に施してあると思われる。穿孔内に赤色顔料

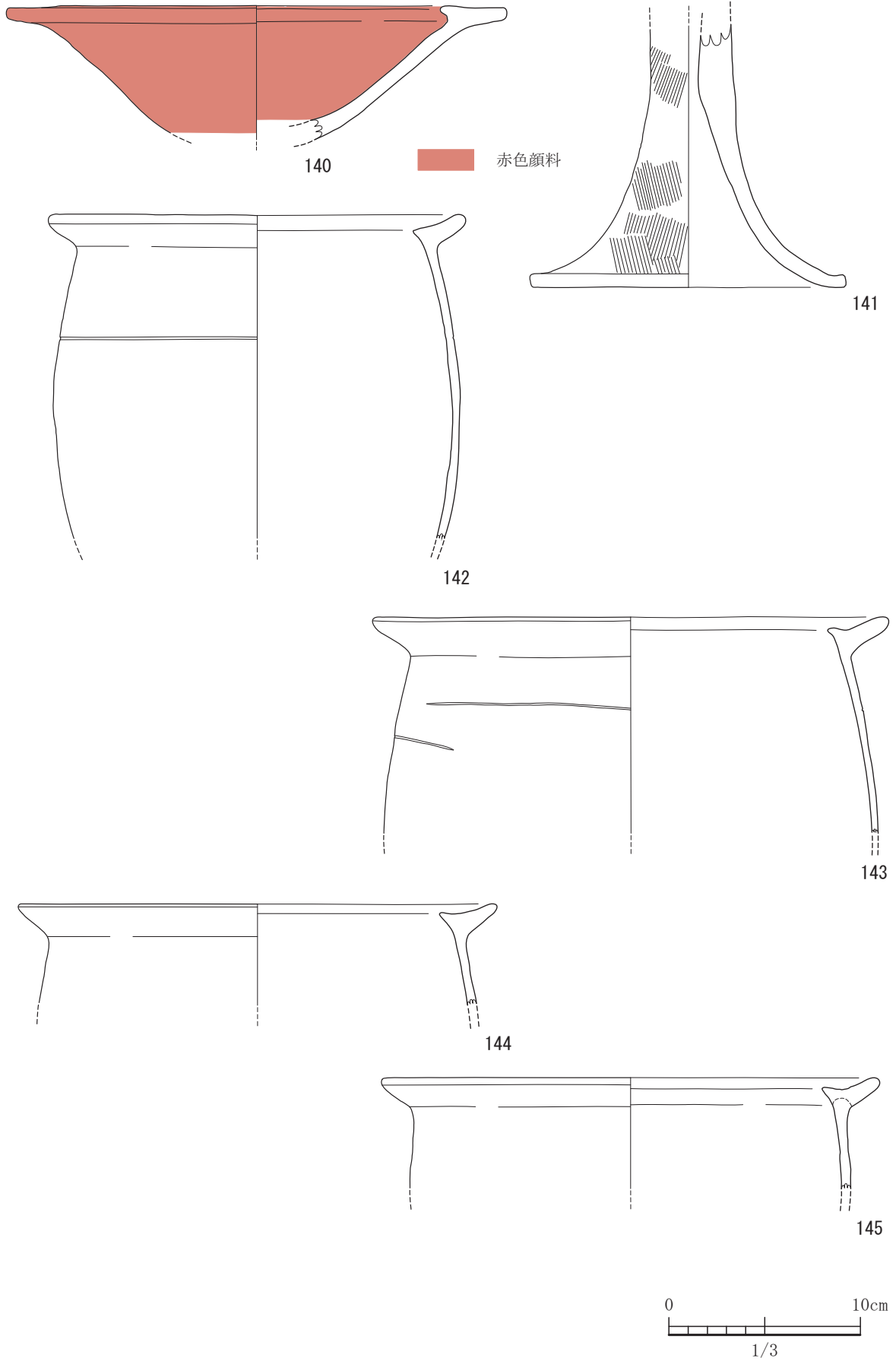


図-76 11号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

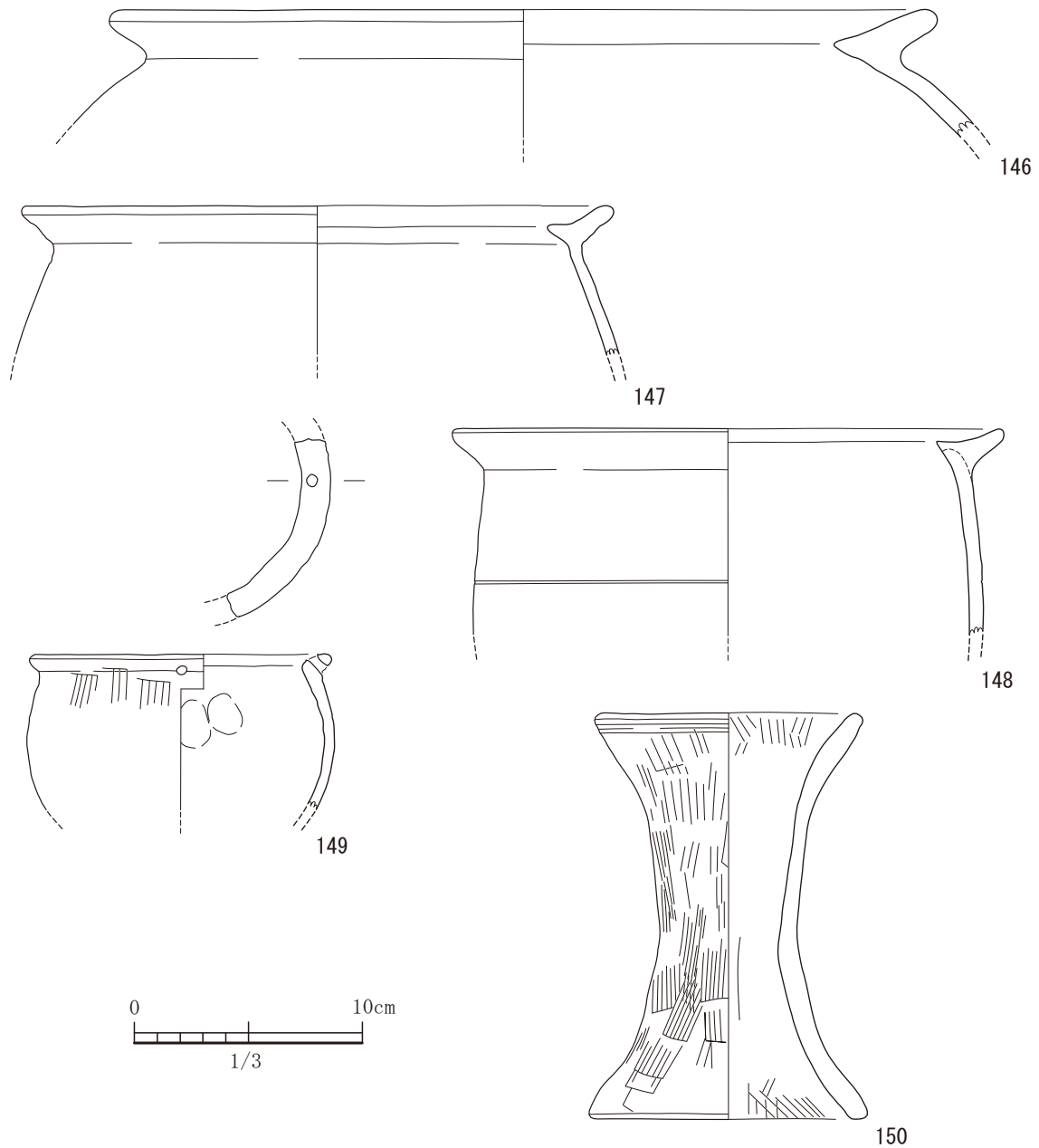


図-77 11号住居出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

痕があり丹塗り土器である。138はサヌカイト製の削器、139は輝石安山岩製の磨石である。

### 11号住居

11号住居は、平坦地区2区で検出された竪穴住居である。10号住居とは西側で切り合っているが、この11号住居が新しい。また1号溝によって切られている。N4°Wに主軸をもち、4.8×3.7mの隅丸方形プランである。柱穴は4基確認できており、4本柱の上屋であろうと考えられる。第2柱穴において柱痕が検出された。本遺跡では、包含層自

体が山の裾野に堆積する崖錐堆積物のようにいろいろなものが混濁した状態になって、土が汚い。よって土質に差異がなく検出が難しい。そのような中で確認できたものである。直径約19cmはあった。付帯設備として中央部に炉が配置されており、埋土は3層に区分でき、それぞれに炭化物や焼土が認められた。第4柱穴の西側にある土坑状のものは、貯蔵穴と考えている。また、床面の状況では、硬化面は認められなかった。遺構検出面から床面までの深さは約10cm程度であったが、遺物は床に張り付くように

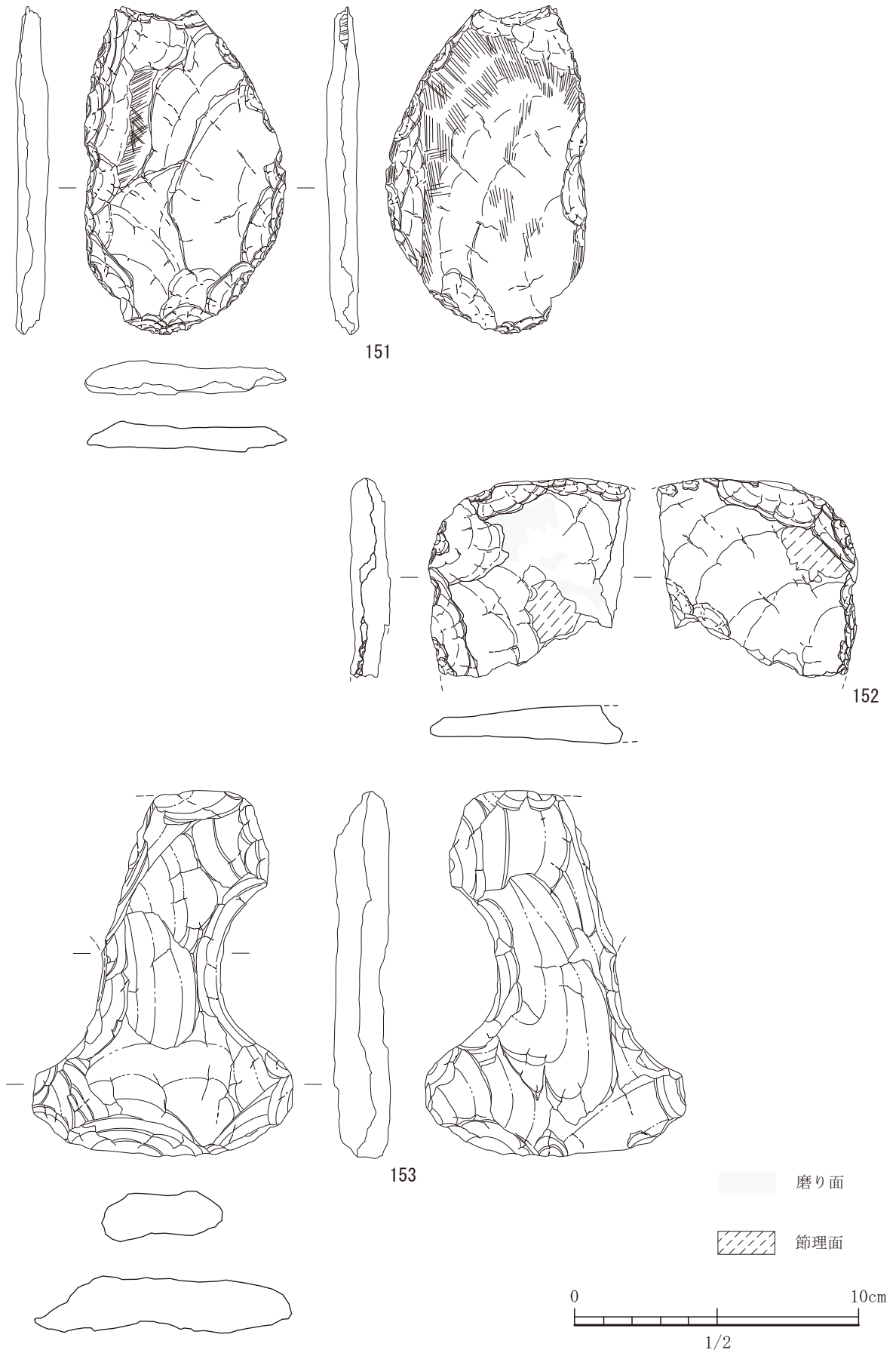


図-78 11号住居出土遺物実測図 3 (すべてS=1/2)



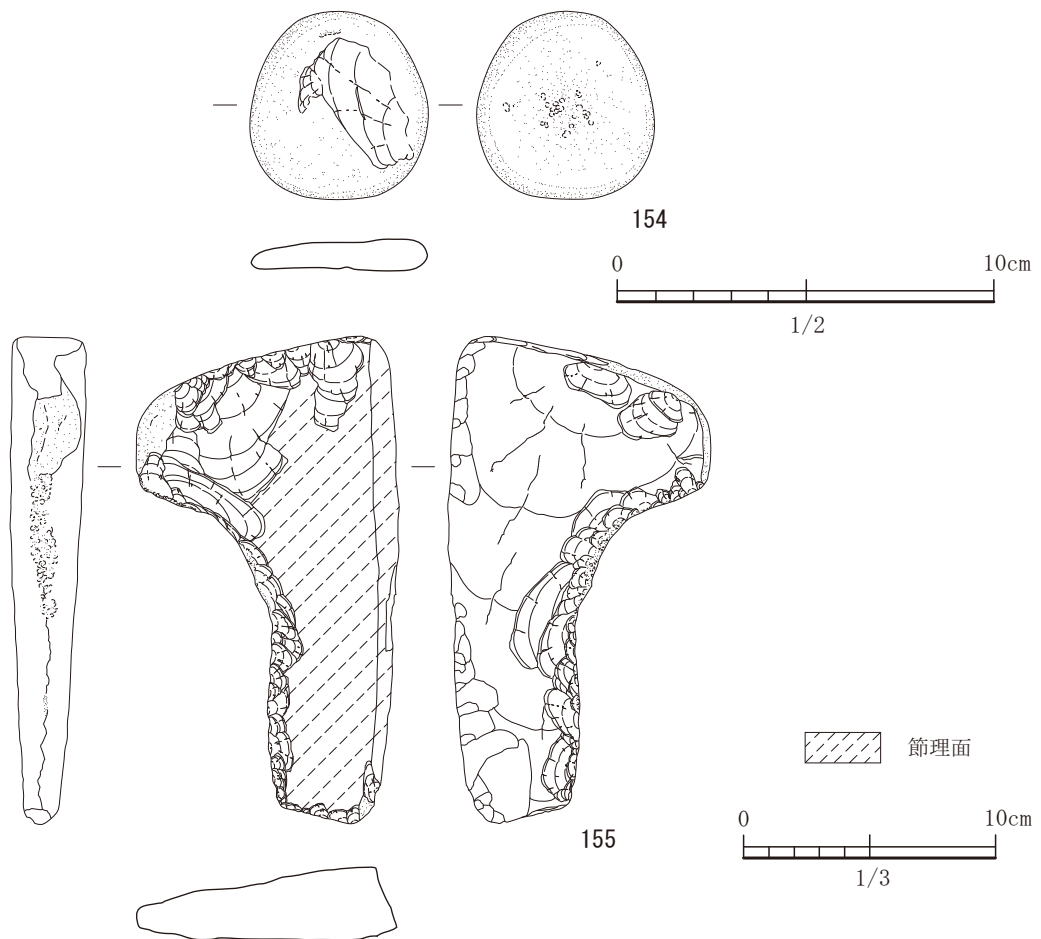


図-79 11号住居出土遺物実測図 4 (S=1/2, 155は S=1/3)

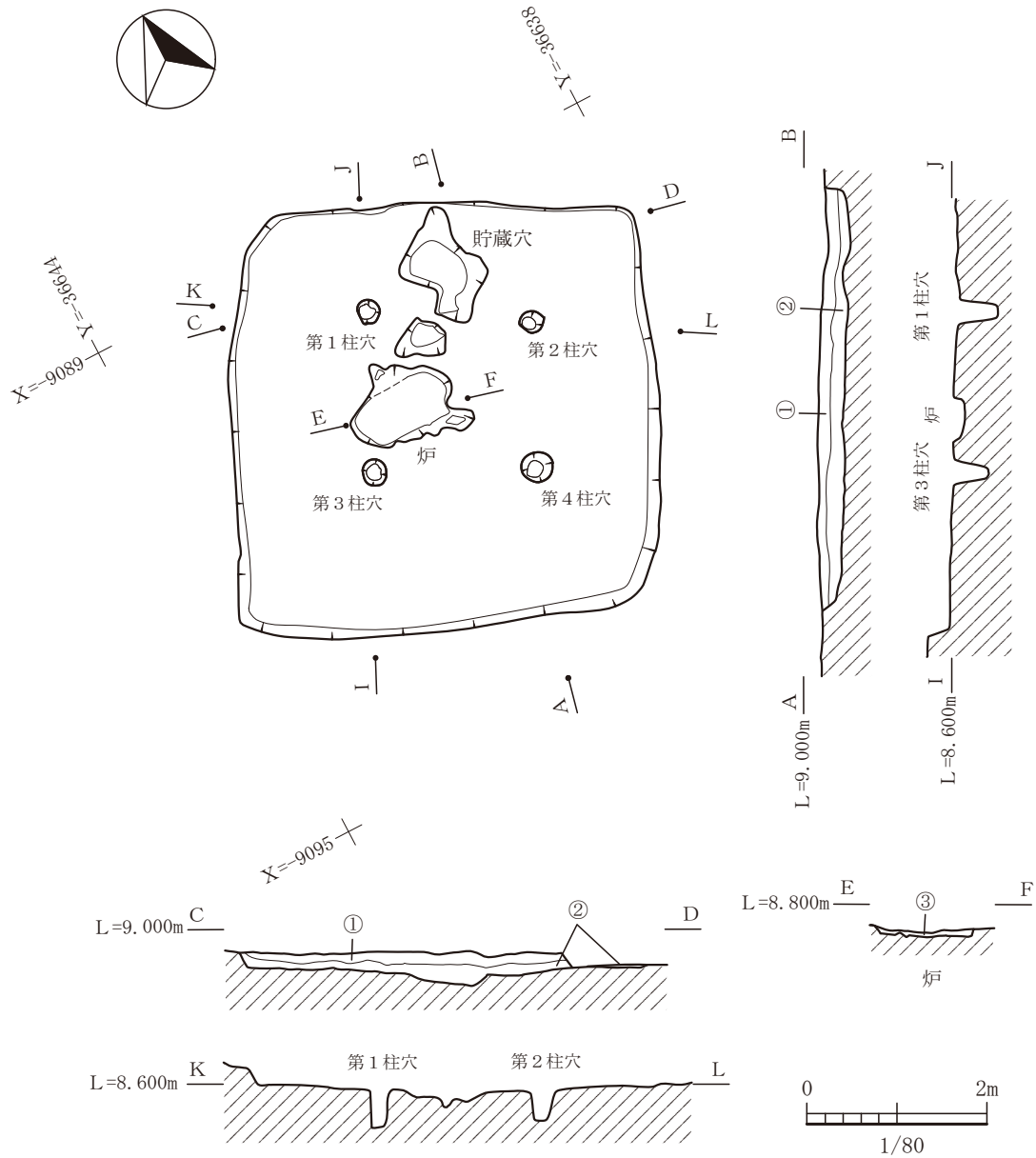
結構多く残っていた。

出土遺物は、接合できた土器で11点、石器で5点であった。140と141は、高坏である。140は丹塗り土器であり、内外面に塗布されている。外面の一部にススが付着していた。口縁部の形状では、若干ではあるが垂れ下がる傾向を示す。141は、高坏の脚部である。外面では、ハケ目後ナデ調整、内面ではナデ調整である。142から148までは甕形土器である。142は丁寧なナデ調整が施され、胴部に沈線が一周めぐっている。内外面にススが付着している。143にも、沈線が胴部に施されているが、一周するもずれている。口縁部にススが付着していた。144と145にも、口縁部から胴部の外面にススが付着していた。146も甕形土器であるが、胴部が大きく広がっていることから大型の甕であろう。148は、胴部に1条の沈線が施してある。内外面ともハケ目後ナデ調整である。149は、広口壺である。口縁部の下にハケ目痕がある。内外面ともナデ調整である。口縁部に穿孔

が1箇所確認できる。対向する場所に1箇所あることが想定され、2穴あるのではないだろうか。150は、器台である。口縁部に意識して沈線をめぐらしている。151から153まで、結晶片岩製の打製石斧である。151には擦痕がある。152は欠損している。153は、挟りを作りだしている。154は、変ハンレイ岩製の円盤状の石器である。敲打痕が認められる。磨り面はない。用途不明である。155は未製品であり、模造品ではないだろうか。石器も床面に張り付いて出土している。11号住居は弥生中期後半期から後期初頭の遺構と考えられる。

#### 12号住居

12号住居は、平坦地区の2区で検出された竪穴住居である。平坦地区の中でも、東側の崖に隣接して、甕棺墓群がある墓域にも極めて近い位置に所在する。また、出土遺物がほとんどなく、破片ばかりで、時期がわかるような遺物は弥生中期の土器の口縁部の1点のみである。これも流れ込みである可能



遺構埋土

- ① 黒褐色(7.5YR3/1)粘質土。1 cm 未満の礫を含む。焼土・炭を少量含む。
- ② 黒褐色(7.5YR3/2)粘質土。礫を少量含む。焼土・炭を多量に含む。黄色の粒を少量含む。

炉内埋土

- ③ 褐灰(7.5YR4/1)砂質土。黄砂粒を含む。1 cm 程度の風化した礫含む。焼土・炭を含む。

図-80 12号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

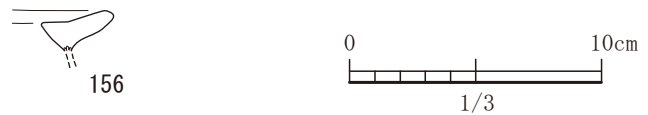
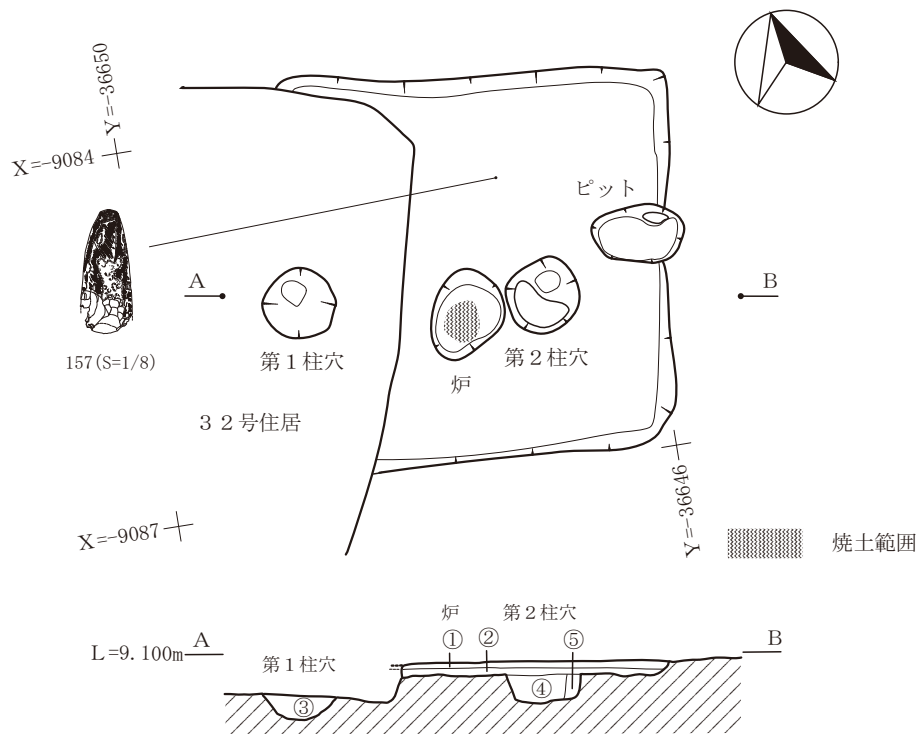


図-81 12号住居出土遺物実測図 (S=1/3)



遺構埋土

- ①黒褐色(10YR3/2)粘質土。1mm～5cm程度の礫を全体に少量含む。橙色のブロックと黄色のブロックを全体に少量含む。焼土粒を少量含む。
- ②褐色(10YR4/4)粘質土。1cm程度の礫を少量含む。白い粒・焼土粒・炭化物を全体に少量含む。橙色のブロックを全体に多量に含む。

第1柱穴埋土

- ③暗褐色(10YR3/4)粘質土。焼土粒・炭化物を少量含む。

第2柱穴埋土

- ④暗褐色(10YR3/4)粘質土。黄色、白色のブロックを全体に多量に含む。橙色の1cm程度のブロックを全体に多量に含む。焼土を含む。礫を少量含む。
- ⑤黒褐色(10YR2/2)粘質土。橙色、黄色のブロックを少量含む。

図-82 13号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

性があり、12号住居は弥生時代の他の住居とは異なる時期のものなのかもしれない。主軸もN24°Eと他の住居とは異なる。4.8×4.8mの方形プランでやや長方形になる傾向にある中でやはり特異的である。炉は中央に設置してあり、耳を持つ形状を示す。貯蔵穴と思われる土坑が中期の遺構であれば南側にあるのに対し、北側にある。このように遺物では中期後半から後期初頭を示すが、遺構の特徴、主軸の方向の違い、墓域にあまりにも接近し過ぎている点から時期が異なる住居跡である可能性が高い。

13号住居

13号住居は、平坦地区の2区で検出された竪穴住居である。主軸はN7°Eにあり、3.1×3.2mの方形プランである。この住居は4号甕棺墓を壊し

て構築している点や出土遺物が石器のみで弥生土器の胴部の破片は出土したが時期がわかる遺物はなかった。よって、この住居跡も12号住居跡同様、弥生中期後半期から後期初頭のものではない可能性が高い。本遺構の南側は、古墳時代前期の竪穴住居によって壊されており詳しくはわからない。その中に柱穴が深さ20cmほど残存していた。このことから2本柱の上屋をもっていたと考えられる。付帯設備としては、中央よりやや北側に炉が敷設してある。炉の掘り込みは非常に浅く、1cmほどである。その窪んだ部分から焼土が検出された。焼土がなければ炉としては見逃すぐらいの深さであった。10cm以上は掘りこむ傾向にある弥生中期後半期の遺構とは性格を異にする。また、北側壁に接するというよりも

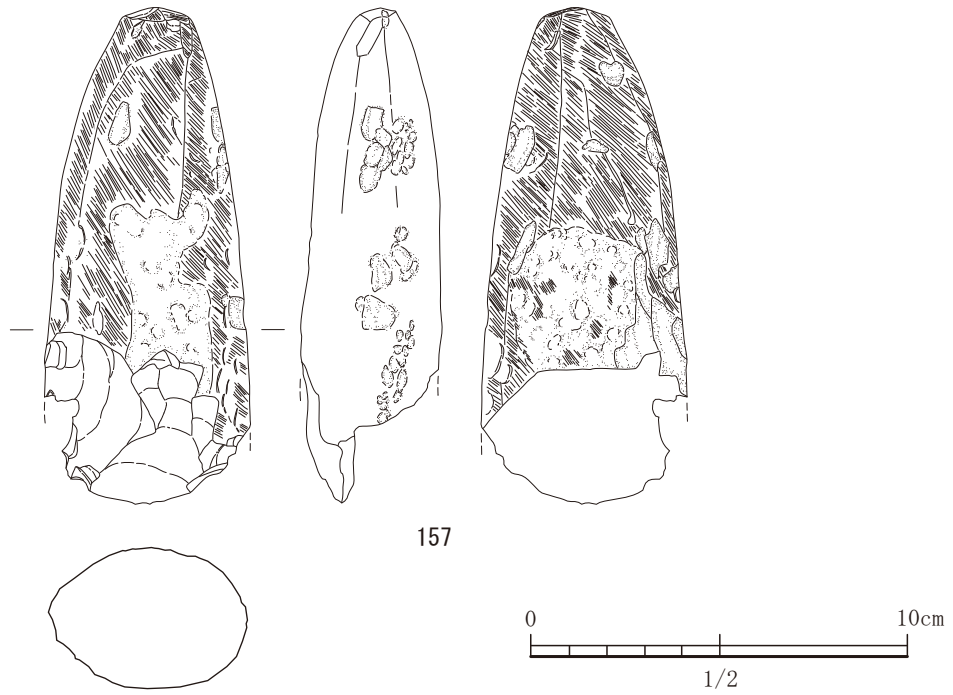
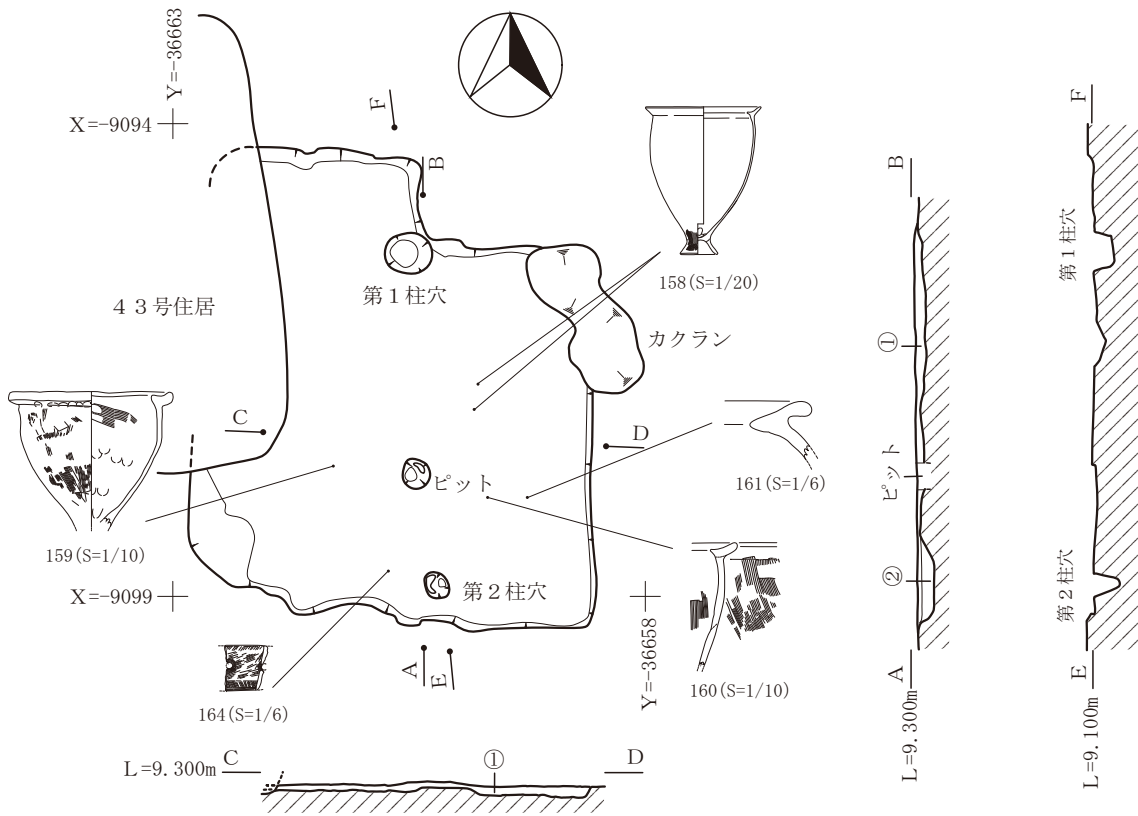


図-83 13号住居出土遺物実測図 (S=1/2)



①暗褐色(10YR3/3)シルト。礫・焼土粒・炭化物を少量含む。  
黄土のブロックを含む。

②褐色(7.5YR4/3)シルト。礫・焼土粒・炭化物を少量含む。

図-84 14号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)



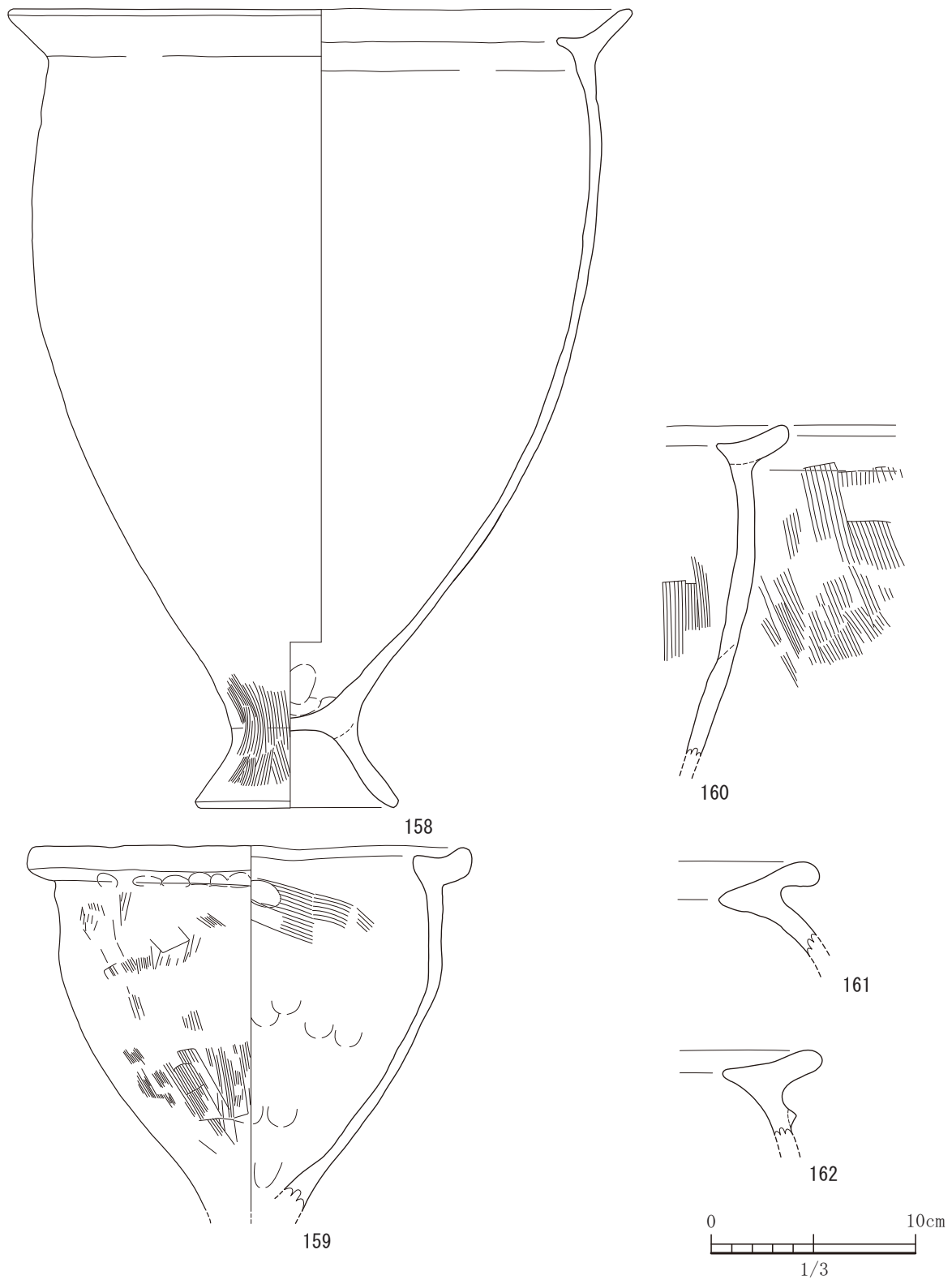


図-85 14号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

やや突出したように土坑があり、埋土は住居を埋積した土と同じものであった。よって使用時にはあったものであり、これを貯蔵穴とするならば、12号

住居と同じ北側に敷設してあり、弥生中期後半期の遺構とは性格を異にする。出土した157の石器は、安山岩製の磨製石斧で一部敲打面を残している。

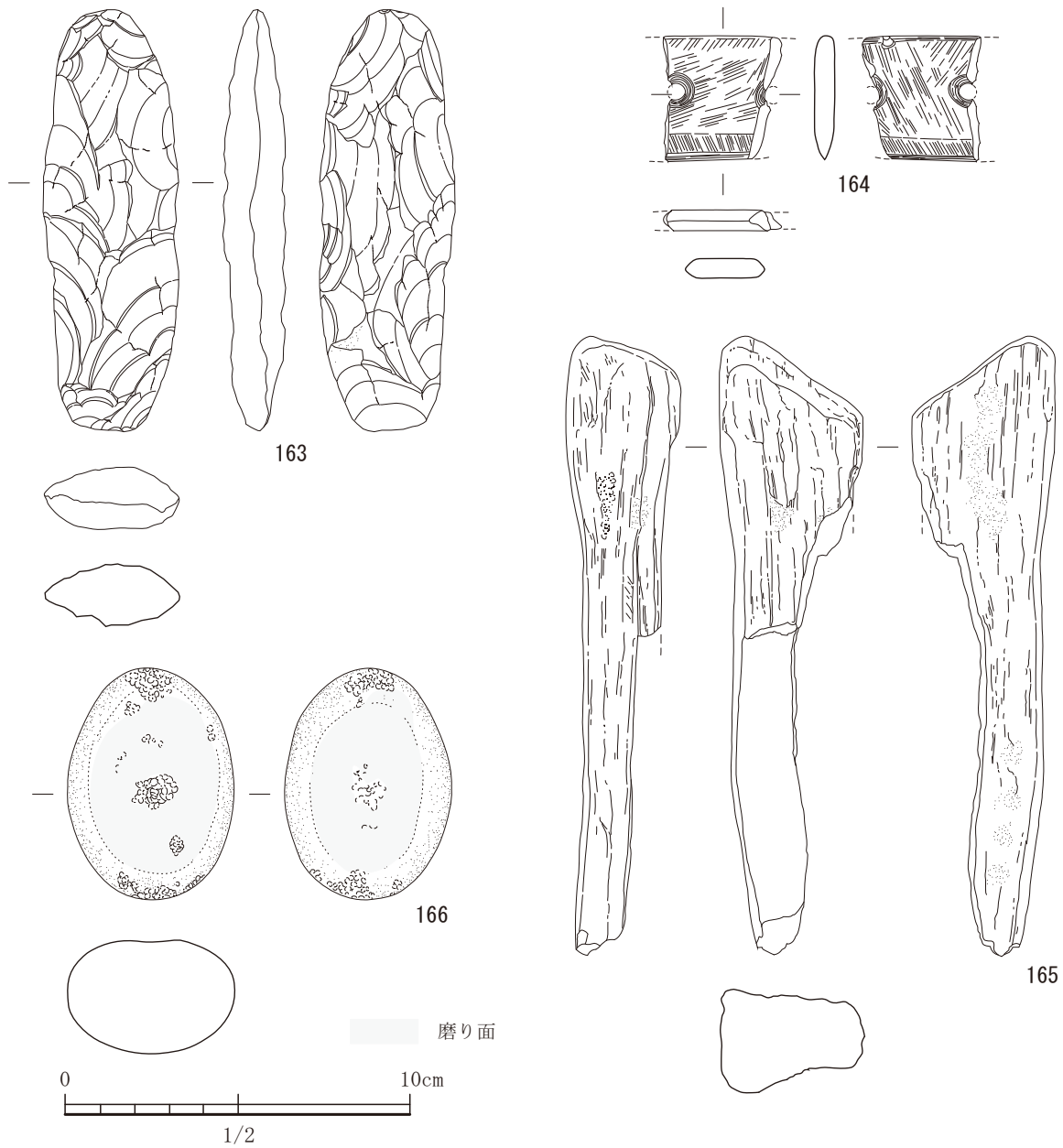


図-86 14号住居出土遺物実測図 2 (すべてS=1/2)

14号住居

14号住居は、平坦地区の2区で検出された竪穴住居である。主軸はN方向であり、4.2×4.1mの方形プランの竪穴に張り出し部をもつ住居である。張り出し部は北側壁の西隅に敷設されており、横2.2m、奥行き0.9mで床面が同じ高さでつながっている。このような張り出し部をもつ弥生時代の住居では、この住居のみである。この点からも特異的な住居であり弥生中期後半期ではなさそうである。この住居跡の西側は古墳時代後期の竪穴住居によって壊されて詳細な構造は不明である。また、北東隅はカ

クランによって壊されている。中央にあるピットは後世のものでありこの遺構に伴うものではない。柱穴は軸方向に2基検出した。2本柱の上屋が想定される。柱穴の深さは、第1柱穴が20cm、第2柱穴が28cmである。床面の特徴としては、住居跡の南西隅の壁は緩やかに立ち上がっていく。ややテラス状の形状を呈する。硬化面は認められない。出土状況としては、住居跡中央部に集中するが、多くは破片であった。

出土遺物は、接合できる土器で5点、石器で4点であった。158は台付甕である。脚部は比較的高く

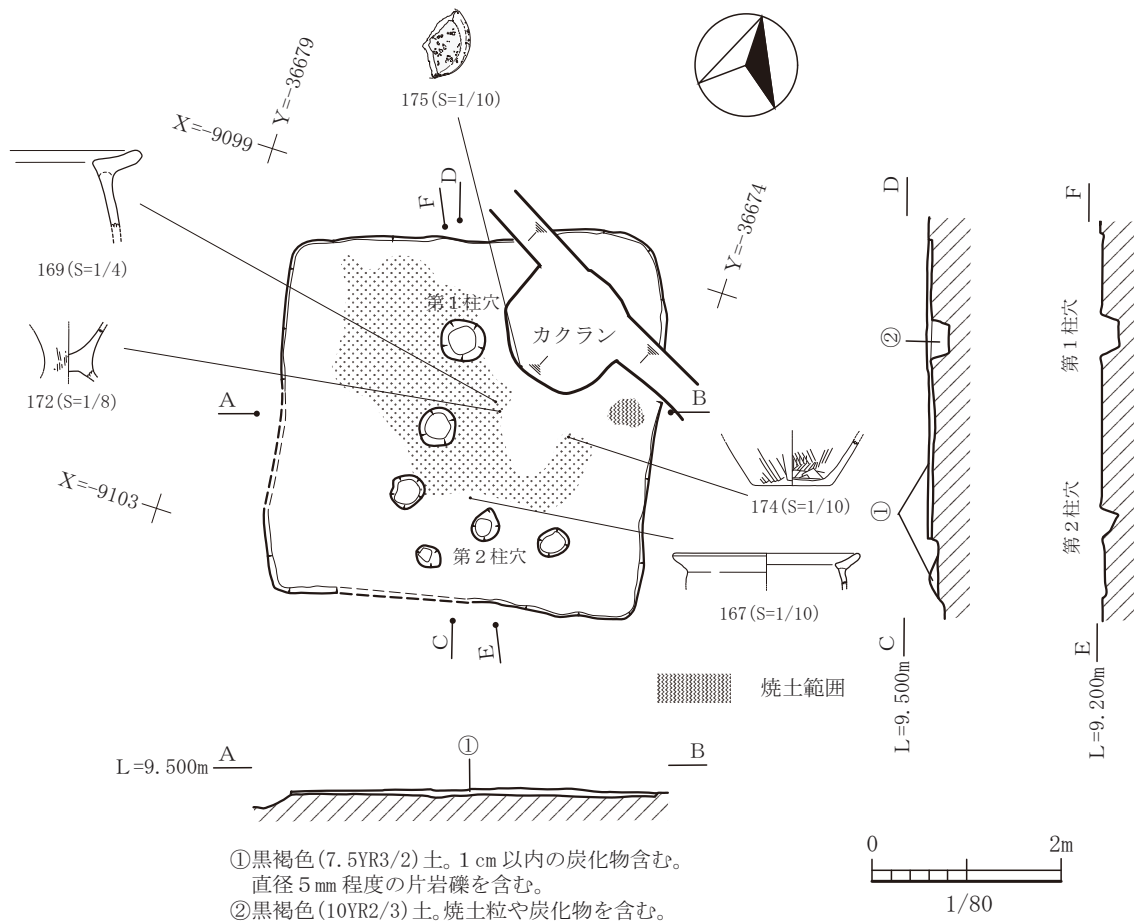


図-87 15号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

なる。口縁部においては、内側に細長く突起があり、外側に口縁が伸びるが、やや大きく上方に延びる。弥生時代後期前半の様相を呈し、中期後半期の土器とは異なるようである。脚部にハケ目調整が残るが、内外面ともに丁寧なナデ調整である。159は台付甕であろう。脚部は欠損している。内外面ともハケ目のちナデ調整であり、ススが付着している。口縁部の器壁が肉厚である。160は、外面にはススが全体的に付着している。161は、口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部の形状において端部がやや膨らみ、やや下に垂れさがるような傾向を示す。162は頸部に突帯文がある。土器では、中期後半～後期初頭の時期のものが多く出土しているが、破片であり流れ込みの可能性もあり、遺構の性格からも中期後半期のものとは異にしているの、弥生後期前半期の遺構の可能性が高いと考えられる。163は緑泥片岩製の打製石斧、164は緑泥片岩製に石包丁の一部である。165は、結晶片岩製の敲石である。166は、輝石安山岩製の磨石で、磨り面があり敲打

痕もあるため、磨石だけではなく敲石としても使用されていた。

#### 15号住居

15号住居は、平坦地区の8区で検出された竪穴住居である。主軸はN20°Eの方向に持ちほぼ北を示す。4.0×3.8mの方形プランである。北東部はカクランによって壊されている。検出面から床面までの深さは5～6cmほどしかなく、埋土の残りが悪く出土遺物も少ない。住居跡内にピットが6基検出された。配置の様子から2本柱で南北に2本あったものと考えている。この住居跡にも炉がない。ただし、遺構を埋積した埋土中には炭化物や焼土が検出されている。何らかの火を使うような施設があった可能性があるが今回の調査ではそのような施設が検出できていない。なお、東側壁付近に焼土が固まって検出されている。もしあるとすれば、東側壁付近であろう。また付帯設備として貯蔵穴も敷設されていない。床面の状況としては、北西から南東にかけ帯状に硬化面が形成されていた。遺物出土状況では、住

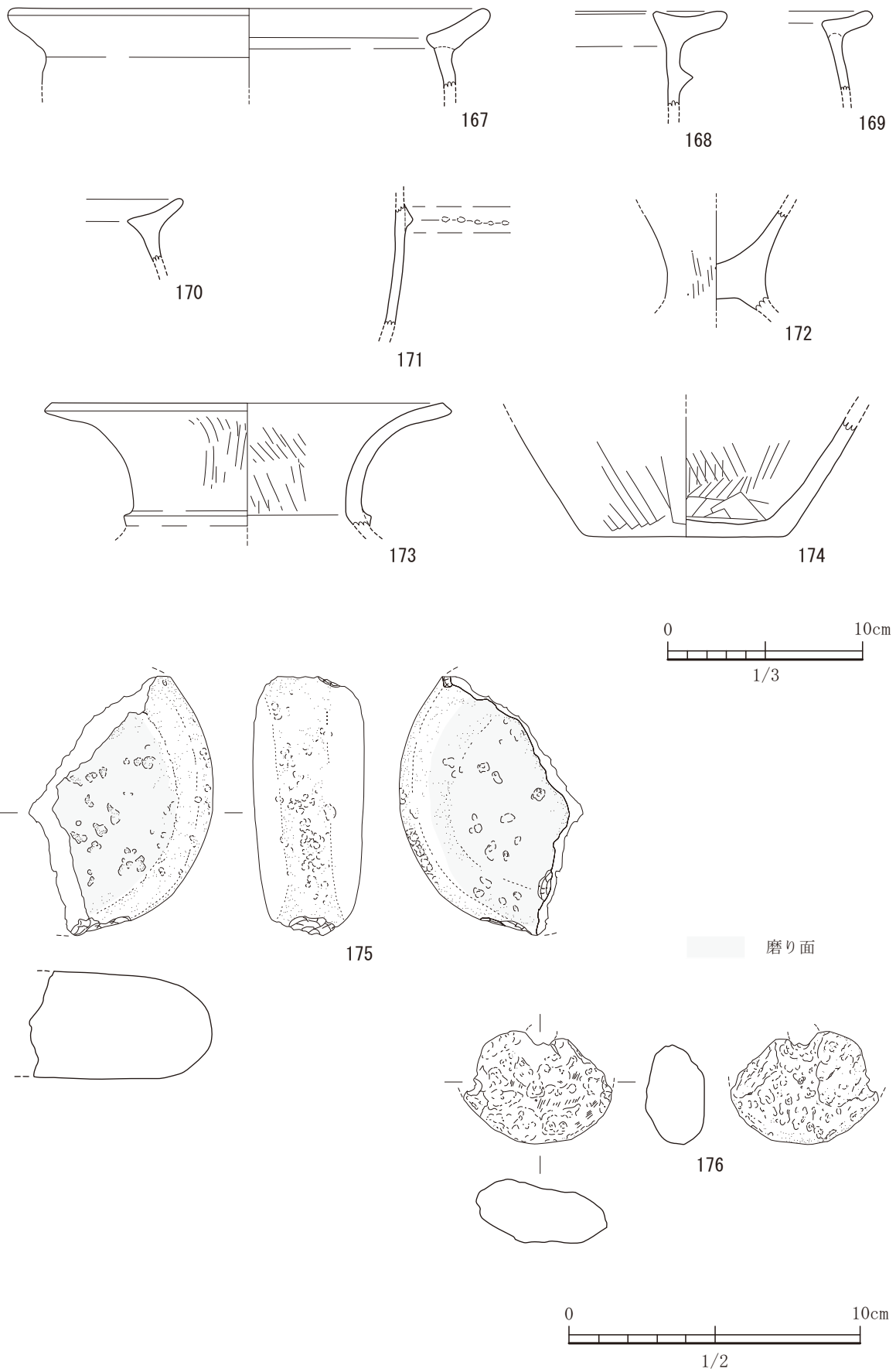
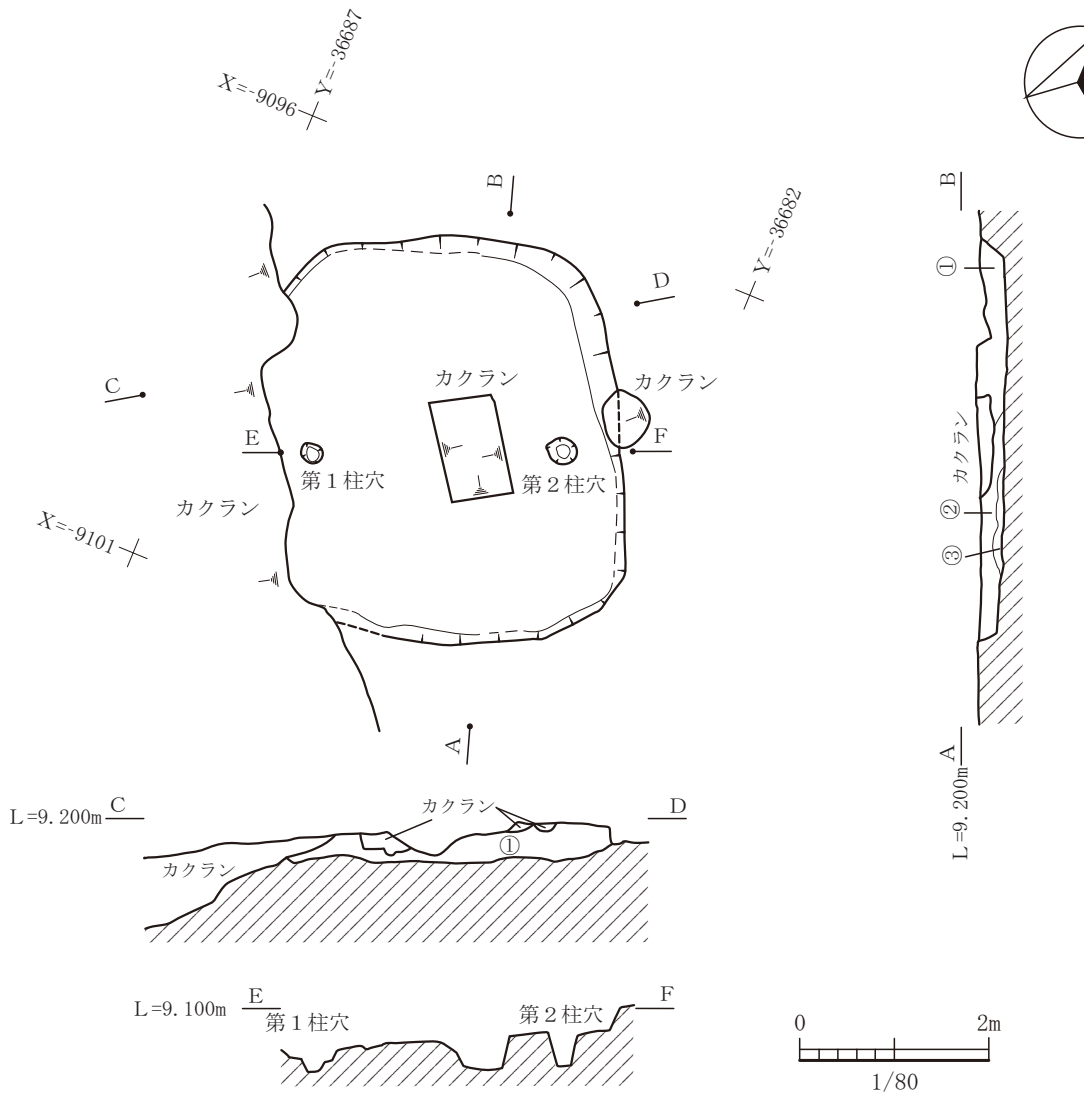


図-88 15号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 175,176はS=1/2)





- ①黒褐色(10YR2/3)土。炭化物は長さ1cm以内で点在。片岩礫を含む。褐色の土をブロック状に含む。
- ②暗褐色(10YR3/3)土。炭化物を少量含む。
- ③暗褐色(10YR3/3)土。炭化物を少量含む。片岩礫を少量含む。

図-89 16号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

居跡の中央部で破片ではあったが出土している。  
 出土遺物は、接合と実測ができる土器が8点、石器が2点出土している。167から171まで甕形土器である。167から170は口縁部で171は胴部の一部である。168と171には突帯文が施されている。172は甕形土器の台付甕で脚の部分である。173は壺形土器であり、頸部に1条の突帯文がある。174は鉢形土器か壺形土器の底部である。内外面ともハケ目のちなデ調整であり内面底部には工具によるナデた痕跡がある。175は、輝石安山岩製の磨石である。1/3程度の残存である。床直上からの出土である。磨り面と敲打痕があり、敲石としても使われていたようで

ある。敲打痕の部分から割れている。176は、床に張り付くように出土した軽石製の有孔円盤状の石器である。浮石でもあるようだが1/3程度の残存であり詳細はわからない。

### 16号住居

16号住居は、平坦地区の8区で検出された竪穴住居である。この遺構と切り合う遺構として59号土坑と36号土坑があるが、埋土の識別が困難で新旧不明の状態調査を行い、新旧を誤って掘削をしてしまった。本来であれば土坑2基が本住居の床面を掘り抜けているはずであるが、写真等で見られないのはこのような理由からである。主軸はN27°W

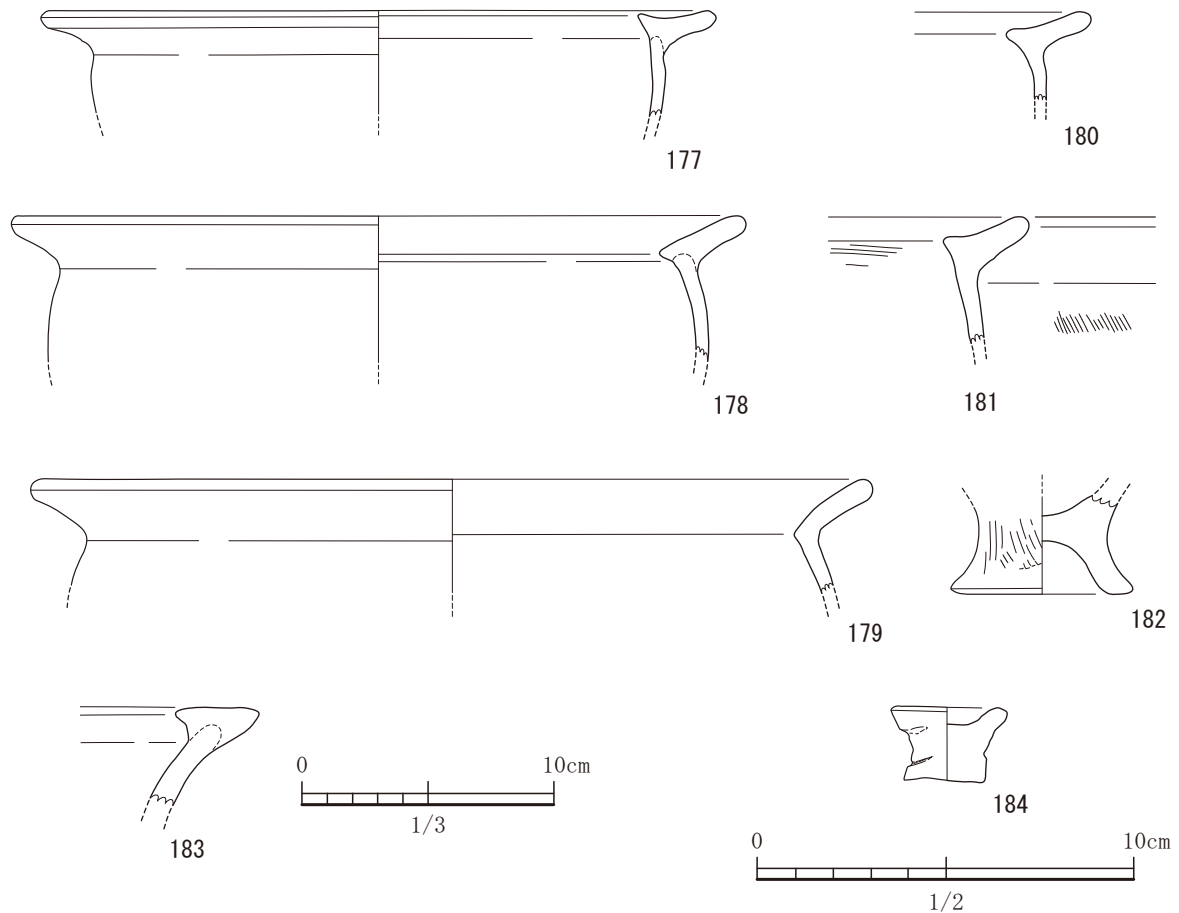


図-90 16号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 184はS=1/2)

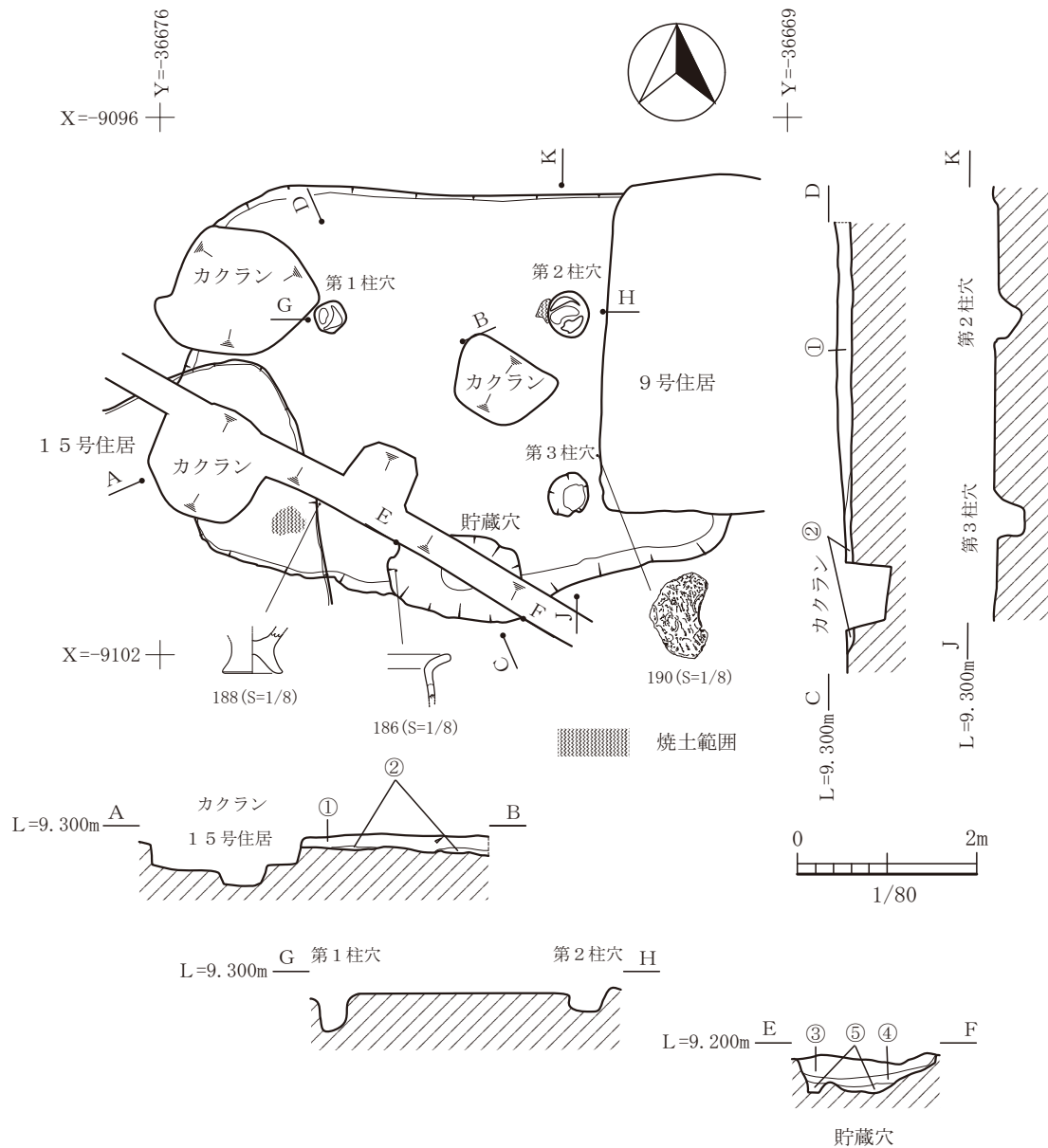
の方向であり、4.4×3.7mの隅丸方形プランの住居跡である。遺構中央部はカクランによって壊されていて、埋土は削平されなくなっているが床面までは削平されていない。また、南西部は、木葉川の河川工事によって削平されている。木葉川は、弥生時代には本遺跡が所在する舌状台地の東側を流れており、この位置に付け替えられたのは近世以降である。この遺構がいつの時代の工事によって壊されたのかはわからない。今回の発掘調査で少なくとも12世紀前半まではこの位置になかったのはわかっている。柱穴は2基確認できた。上屋は2本柱のものであったであろう。2基は短軸方向に並んでいる。2本柱の際、北の崎遺跡では基本的に短軸方向に2本並ぶ傾向にある。この傾向と同調的である。付帯設備としては、炉は通常、住居跡の中央にあるカクランの位置で検出されることが多い。しかしながら、このカクランは床面まで到達していないにも関わらず検出できないのは、ないことを意味するものである。埋土中から焼土が全く検出できないのも、炉がなかつ

た故のことではないだろうか。

出土遺物は、実測できる程度に接合できた土器は8点である。石器の出土はなかった。177から181まで甕形土器の胴部から口縁部の破片である。177から180までナデ調整であり、181はハケ目後ナデ調整である。182は台付甕の脚部である。外面がハケ目調整で内面がナデ調整である。183は、壺形土器の口縁部である。184は、手捏ね土器である。坏形をしている。これらの出土遺物から16号住居は弥生時代中期後半から後期初頭期のものであると考えられる。

#### 17号住居

17号住居は、平坦地区の8区で検出された竪穴住居である。17号住居の東側には9号住居と切り合い、南西隅は15号住居と切り合っている。よって17号住居の床面から上の様子は不明である。さらにこの遺構は全体的に標高が高い位置にあるため現代のカクランが多くみられ、この遺構にも削平が多くみられる。中央部から西半分はカクランが3箇



遺構埋土

- ① 黒褐色(10YR3/2)粘質土。焼土と炭化物の小粒子を多量に含む。黄褐色の土を小ブロックで含む。
- ② 暗褐色(10YR3/3)粘質土。焼土と炭化物の小粒子を多量に含む。黄褐色の土が大ブロックで含まれ、下部には小礫を含む。

貯藏穴埋土

- ③ 黒褐色(10YR3/1)粘質土。炭化物粒子を多量に含む。小礫も少量含む。茶褐色の粘土が帯状に入る。
- ④ 黒褐色(10YR3/2)粘質土。うすい黄褐色の粘土がブロック状に含む。焼土と炭化物の粒子を含む。
- ⑤ 褐灰色(10YR4/1)粘土。橙色の小粒子を含む。下部には砂を含む。

図-91 17号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

所ほど見られ、水道管敷設によって大きく破壊されている。主軸はNであり、北を向く。隅丸方形の竪穴住居である8号住居と方位を同じくする。6.3×4.5mの隅丸方形のプランであり、長軸は東西にとる。柱穴は、3基検出している。遺構プランに沿うように柱穴が3基そろっているのが確かであろう。しかし、水道管敷設のため掘られた深い溝が完全に遺構

を壊しているため、柱穴ごとに削平を受けていることが考えられる。このカクランの位置に1基柱穴があったのであれば、4本柱となり、整然と4本が並ぶこととなる。遺構埋土の①では焼土と炭化物を多量に含んでいたため、おそらく火を使う施設の炉があったであろうと考えられるが、想定される炉の位置にカクランがあって削平している模様である。付

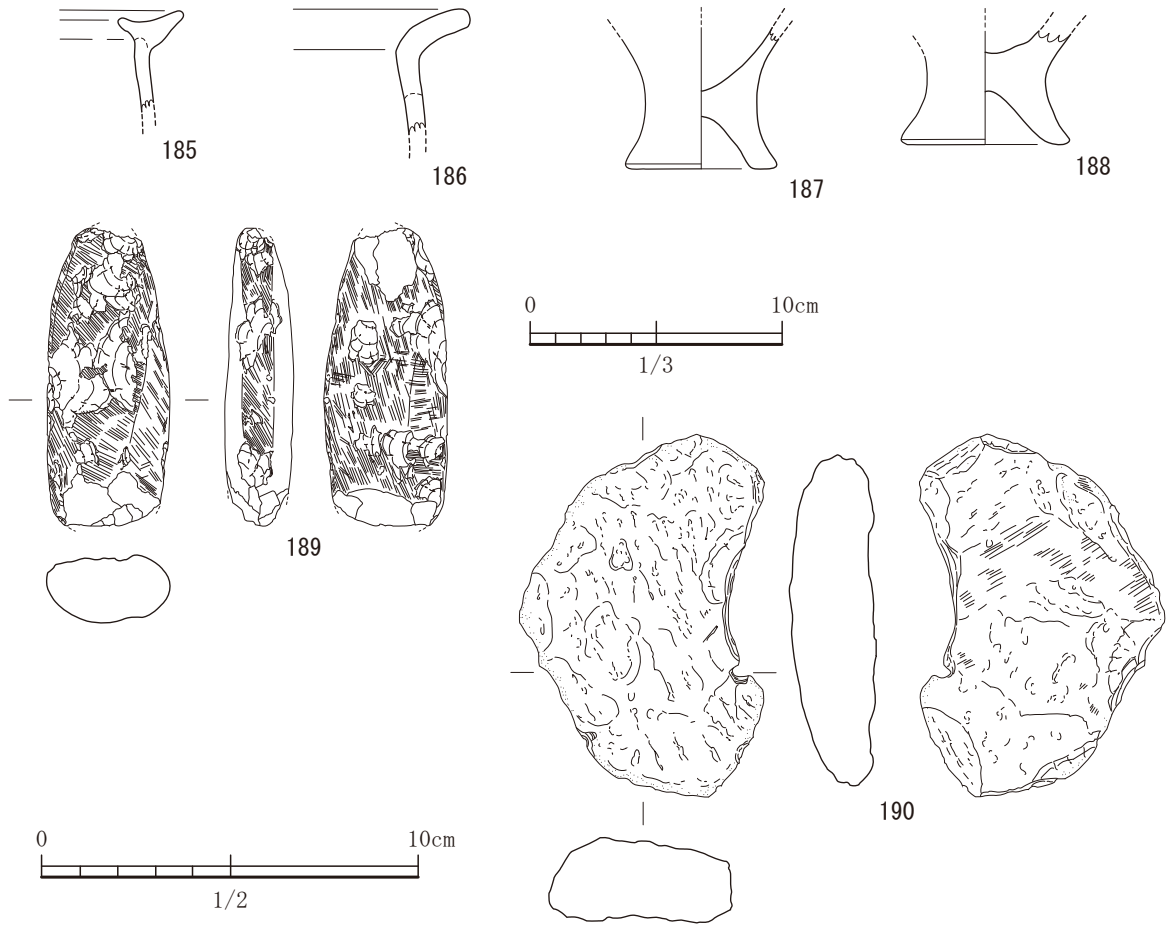


図-92 17号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 190はS=1/2)

帯設備では、南側壁付近に土坑状の貯蔵穴が設置されている。貯蔵穴の埋土は3層あり、最下層である⑤は粘土であり、貯蔵穴を使用していた際、粘土を貼って平坦化した状態で使用していたと考えられる。④は使用していた時に自然と埋積した土で、③が廃棄した後、遺構全体を埋めた時の土であろう。よって、この層だけに多量の炭が含まれていると考えられる。尚、15号住居と重複している部分から焼土がまとまって検出されている。また焼土は第2柱穴のすぐ横でも検出されている。床面には硬化面は認められなかった。

出土遺物は、実測ができるほど接合できた土器は、甕形土器の4点と石器が2点である。185と186は口縁部である。弥生中期後半から後期初頭の甕形土器の口縁部である。187と188は甕形土器の台付甕の脚部である。中期後半から後期初頭の時期の範疇であろう。189は、蛇紋岩製の磨製石斧である。190は、床直上からの出土で軽石製の製品で浮石として使用

されたかは不明である。中央の大きな孔の横に小さい穿孔が見られる。紐がかけられていたようである。

#### 18号住居

18号住居は、平坦地区の8区で検出された竪穴住居である。平坦地区の中で遺構が最も集中する舌状台地中央部に位置する。遺構のほとんどがカクランによって破壊されており、住居跡の北東部の一部のみが残存していた。住居跡南東部では、18号住居より古い16号住居と新しい59号土坑及び21号住居と切り合っている。また、19号住居を切っている。主軸はNで北を向いている。住居の規模は削平を受けており不明である。住居跡内からピットを5基検出したが、柱を立てることが可能なものは、北側の1基である。となると、2本柱の上屋であろうと考えられる。付帯設備として、炉や貯蔵穴等の検出等もなく、硬化面も認められなかった。ただし、埋土中から①で多量の焼土が含まれていたが、下位の床を覆う層の②で焼土を含まないため、使用時に



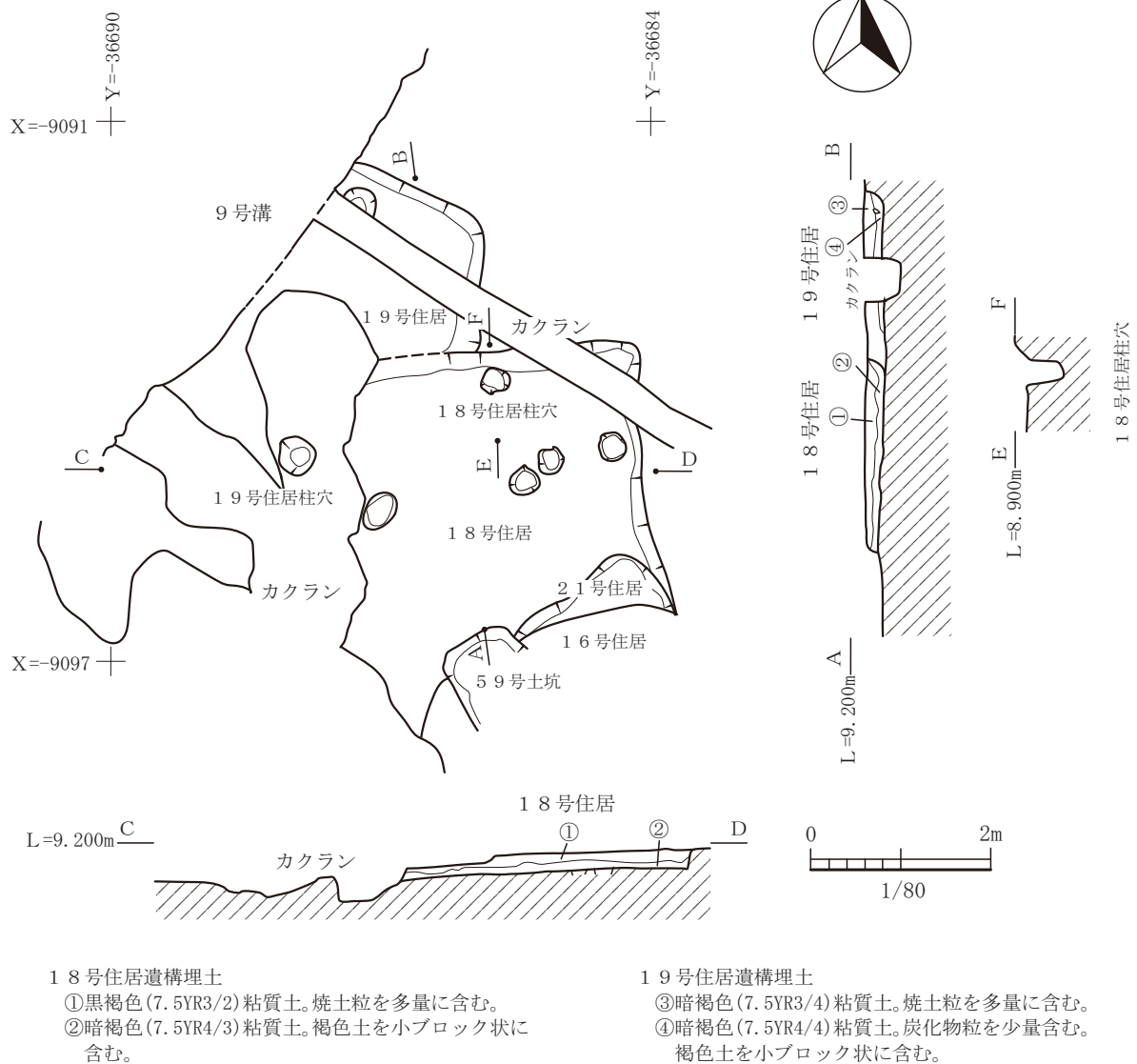


図-93 18号住居・19号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

火を使う施設はなかった可能性が高い。出土遺物は、土器では長頸壺が2点、磨石が1点出土している。191はそろばん玉形の胴部であり頸部と胴部の境に突帯をめぐらす丹塗り土器である。内面はヘラ状工具による調整が施されている。192は長頸壺の頸部から口縁部である。193の磨石には磨り面が明瞭ではなく、敲打痕が見られることから敲き石としての利用の方が強いのかかもしれない。191と192の長頸壺は弥生後期前半期の範疇であるが、周辺の切り合っている遺構から出土している遺物と比較すると時期的にやや疑問が残る。

#### 19号住居

19号住居は、18号住居と切り合っている竪穴住居である。北東コーナーが残る程度で、西側の9

号溝は古代の遺構である。主軸は、N21°Eでやや隅丸を呈する方形プランであろうが全体像がわからない。規模は不明である。この住居跡からは、2基の柱穴を検出した。炬が想定される位置はカクランによって大きく削平されているため有無は不明である。埋土中に多量の焼土が含まれていることから炬があったのではないかと考えられる。床面の状況では、日常的に踏みつけることによって形成される硬化面は認められなかった。出土遺物はほとんどなく、実測可能な遺物は、甕形土器の口縁部の破片が3点である。口縁部の形状において、内側に細長く突起がつき、やや中央をくぼませながら外側へと延びることから、弥生中期後半から後期初頭期の甕形土器の特徴をもっているため、この時期であろう。195

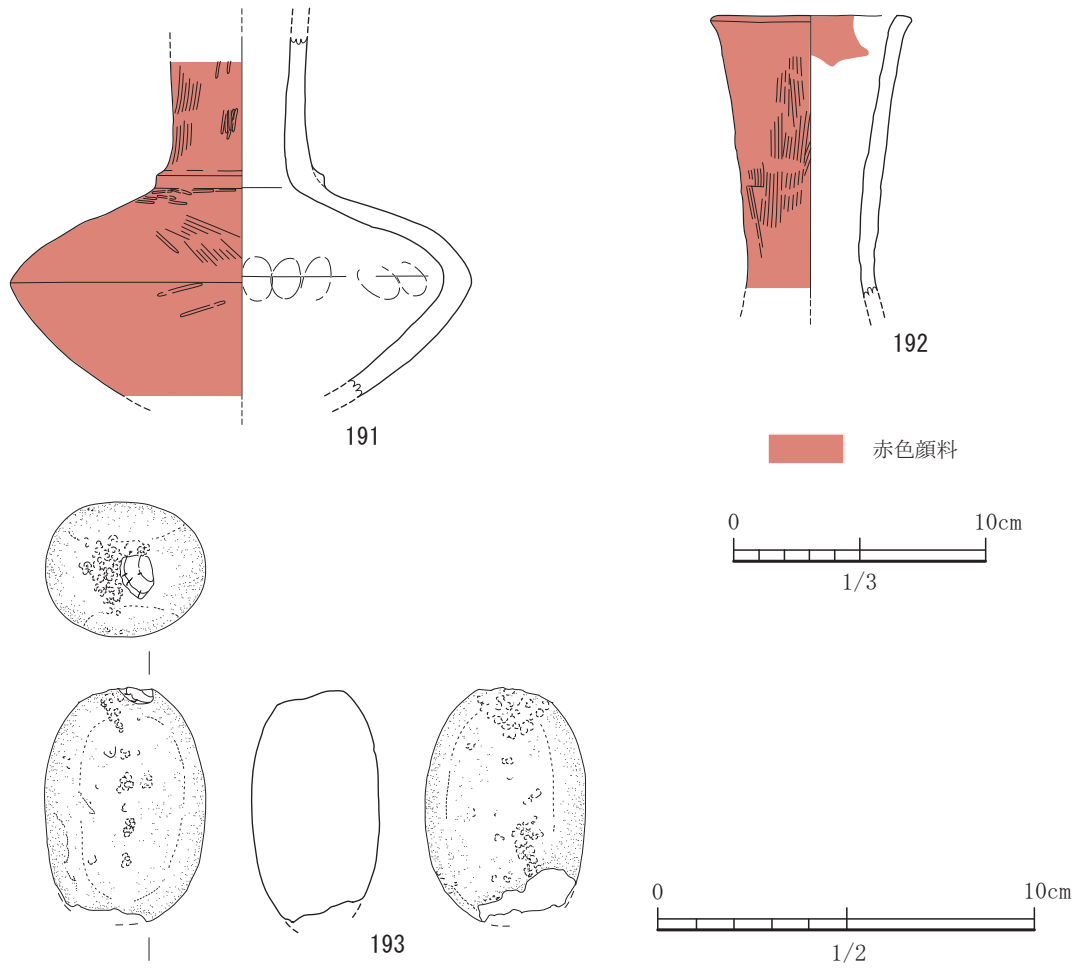


図-94 18号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 193はS=1/2)

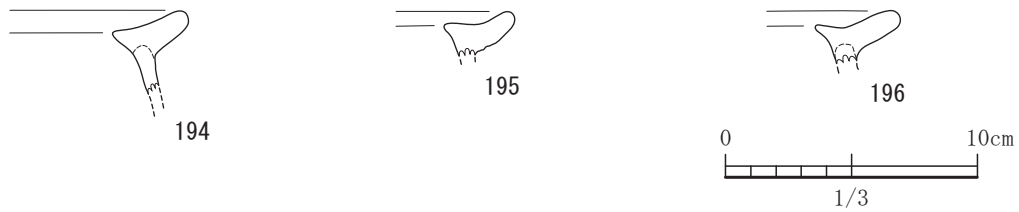


図-95 19号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

と196にはススが付着していた。

### 20号住居

20号住居は、平坦地区の8区で検出された竪穴住居である。平坦地区中央部の遺構が集中する地域にあり、弥生中期後半から後期初頭期の遺構である43号土坑に、住居跡の北側部分にすっぽり入るように切られており、遺構のほとんどが同じ弥生中期後半から後期初頭期の4号溝によって削平されている。北西部のコーナー付近を16号住居によって削

平されており北側の壁周辺の様子は不明である。また、この住居は22号住居を切っている。このように20号住居周辺においては、激しい切り合いを示し、弥生中期後半から後期初頭期にかけ何回も建物等を築造している。尚、20号住居の下位には47号土坑が伏在しており、土坑の上に20号住居を建てたようである。20号住居の主軸は、N20°Eの方向であり、主軸方向の住居跡の幅は3.9mであるが、東西方向は削平のため不明である。柱穴は、東西方向

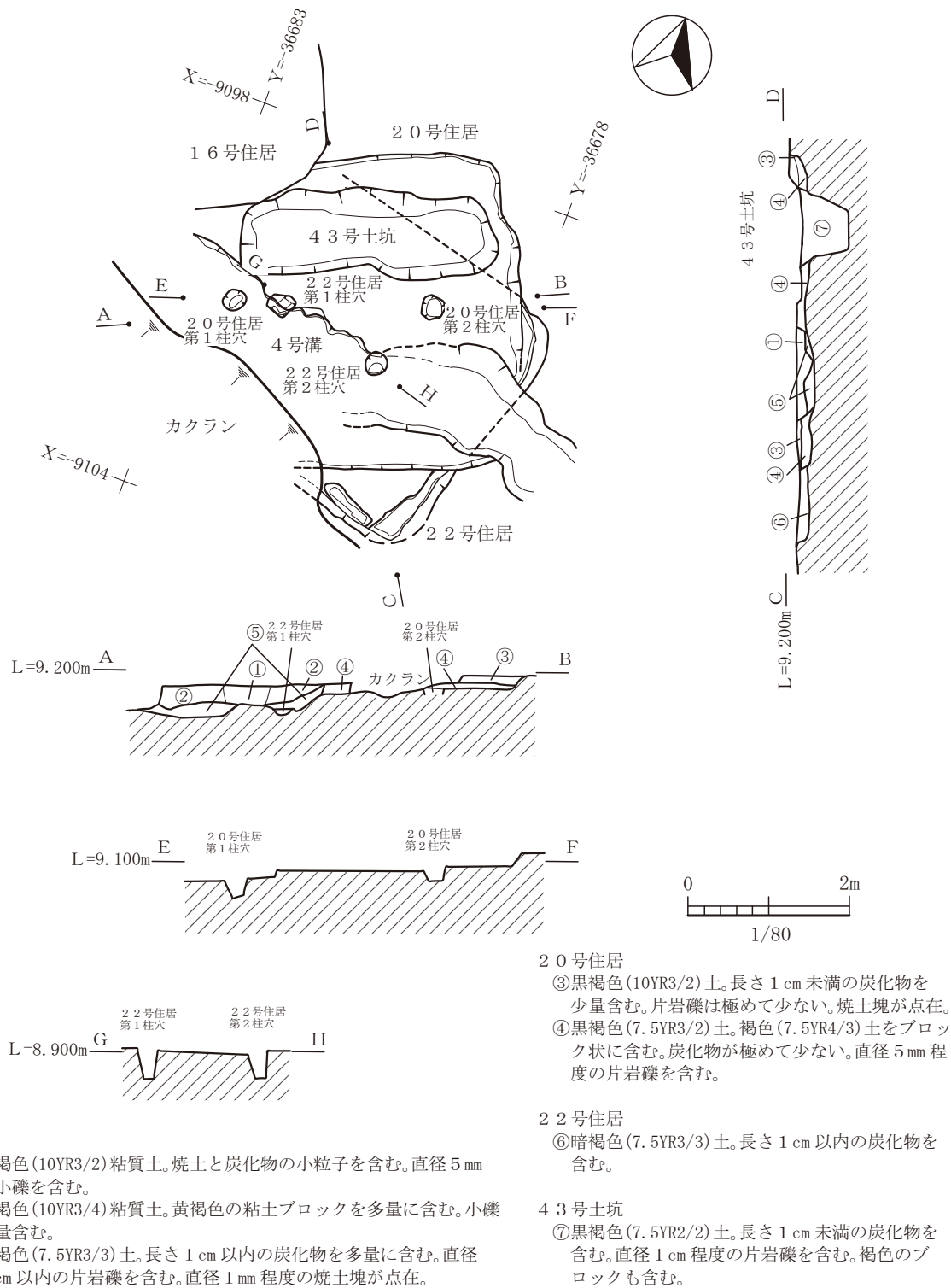


図-96 20号住居・22号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

4号溝

- ① 黒褐色(10YR3/2)粘質土。焼土と炭化物の小粒子を含む。直径5mmの小礫を含む。
- ② 暗褐色(10YR3/4)粘質土。黄褐色の粘土ブロックを多量に含む。小礫少量含む。
- ⑤ 暗褐色(7.5YR3/3)土。長さ1cm以内の炭化物を多量に含む。直径1cm以内の片岩礫を含む。直径1mm程度の焼土塊が点在。

20号住居

- ③ 黒褐色(10YR3/2)土。長さ1cm未満の炭化物を少量含む。片岩礫は極めて少ない。焼土塊が点在。
- ④ 黒褐色(7.5YR3/2)土。褐色(7.5YR4/3)土をブロック状に含む。炭化物が極めて少ない。直径5mm程度の片岩礫を含む。

22号住居

- ⑥ 暗褐色(7.5YR3/3)土。長さ1cm以内の炭化物を含む。

43号土坑

- ⑦ 黒褐色(7.5YR2/2)土。長さ1cm未満の炭化物を含む。直径1cm程度の片岩礫を含む。褐色のブロックも含む。

に2基検出されている。炉は検出されていない。この時期の住居跡では、柱の間に炉が配置されており、想定される部分にその痕跡が全くないことや、遺構を埋積した埋土中には、炭化物や焼土が量的に含まれていないので、炉がなかった可能性が高い。

出土遺物は、土器が4点と石器が1点である。197は、鉢形土器であろうと思われる。縦方向のミガキが施されている。199と200にはハケ目調整が残る。201は砂岩製の砥石である。側面に2箇所溝が掘りこまれている。

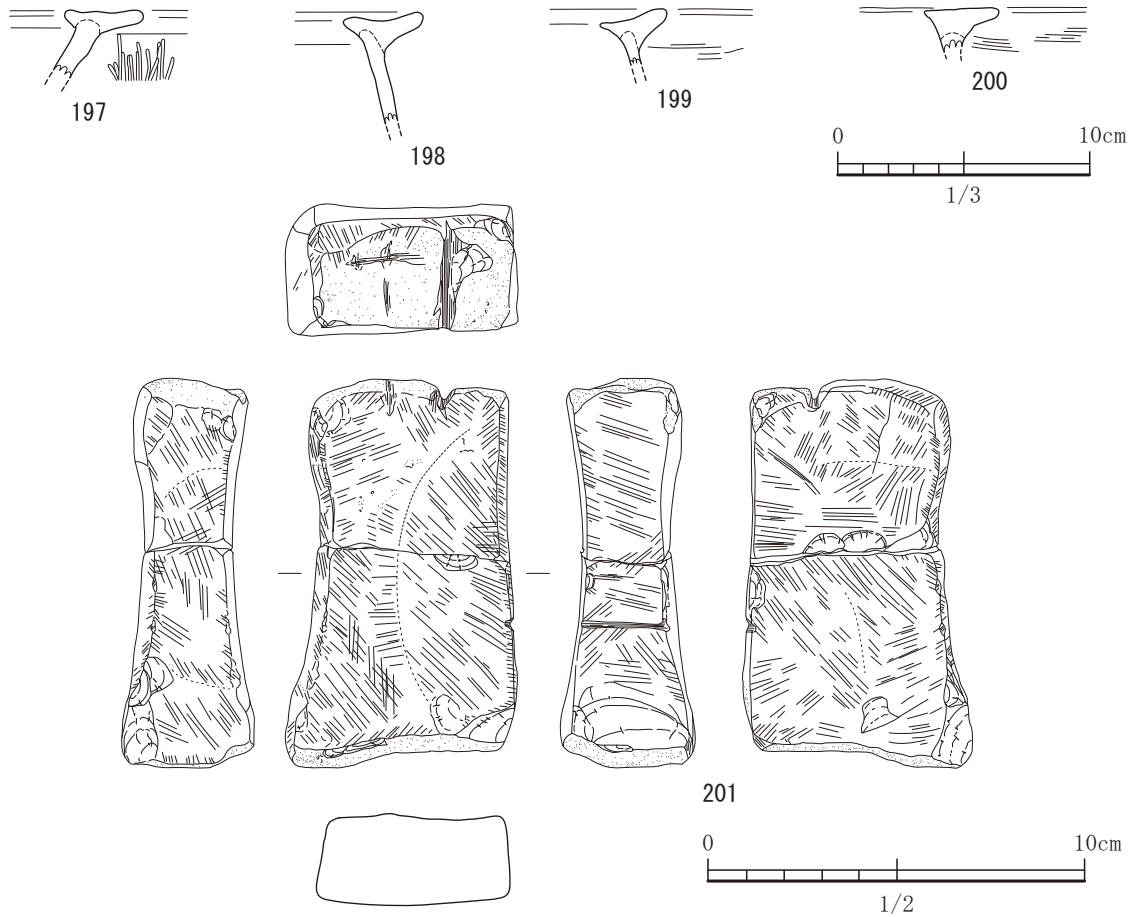


図-97 20号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 201はS=1/2)



図-98 22号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

### 21号住居

21号住居は、16号住居と切り合っけ検出された遺構である。住居跡のほとんどは16号住居によって削平されており詳細は不明である。北側のコーナーのみが残存する。実測可能な遺物は、202から204の土器が3点である。202と203は、甕形土器の平縁の口縁部である。203は内側に突起をつけて中央が凹む。204は甕形土器の口縁部にバスケット型の把手をつけたものである。弥生中期後半から後期初頭の遺構である。

### 22号住居

22号住居は、平坦地区の8区で検出された竪穴

住居である。22号住居は、南側を時期的に不確定であるが、木葉川の付け替えの河川工事によって、大きく壊されている。また、住居跡の大部分は、後世に構築された20号住居、43号土坑、47号土坑、4号溝によって壊されており詳細は不明である。北東コーナーと南東コーナーのみが残存している程度であり、非常に残りが悪い。主軸は、N18°Eの隅丸方形のプランである。主軸方向の壁から壁の幅は、約4.3mであるが、東西方向はほとんどが欠損しているため不明である。竪穴住居を埋積した埋土は約10cmほどの残存であり、土器の破片のみであった。付帯設備においては、遺構自体ほとんどが削平



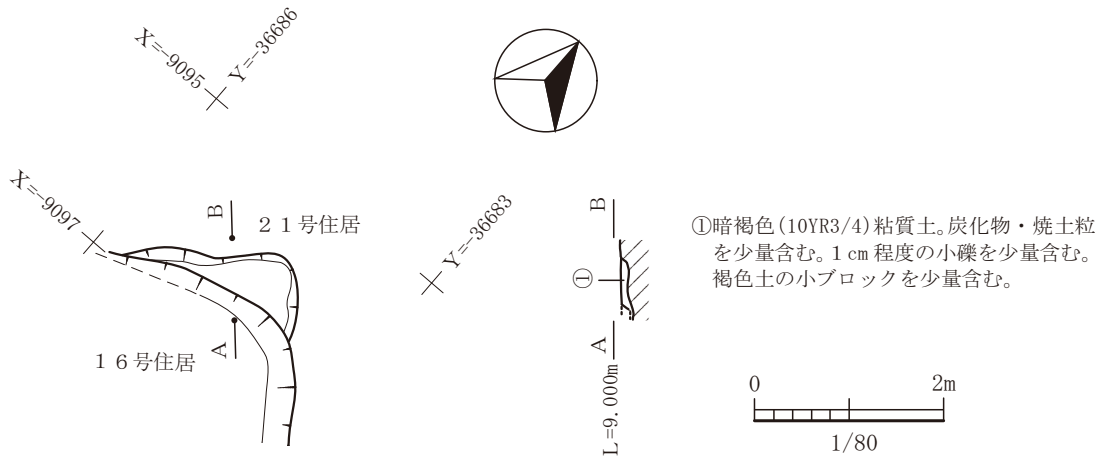


図-99 21号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

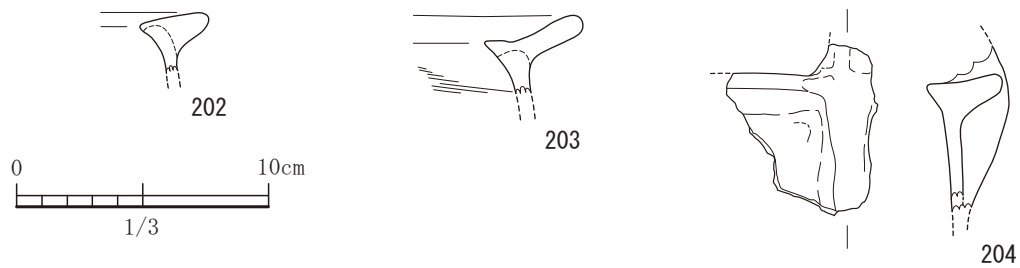


図-100 21号住居出土遺物実測図 (すべて S=1/3)

を受けており柱穴が残存するのみであった。柱穴は軸方向と直交するように東西方向に、2基配置されており、柱間の距離は1.4mを測る。第1柱穴の深さは37cm、第2柱穴の深さは32cmを測る。柱痕は他の住居跡と同様に検出できなかった。第1柱穴を検出した時の上端の直径が23～27cmであり、下端の直径は両方とも14cmであった。炉は他の住居跡では、柱間の中央に位置する傾向にある。その位置の埋土は4号溝によって全て削平されているので、有無については不明である。埋土中にも、焼土や炭化物が多く含まれてはいなかった。炉周辺部の埋土中에서도量的に少ないため、炉自体敷設されていなかった可能性がある。南東のコーナーには、側壁溝のような窪みが検出されている。全体の状況がわからないため、側壁溝が、壁周辺に設けられていたかは不明である。

出土遺物については、甕形土器の口縁部と考えられる破片が出土している。口縁部の形状が、内側に突起を設け、外側に伸ばしており、上の方に反るような形を呈していないため、時代的には弥生中期後半から後期初頭期であると考えられる。

#### 1号掘立柱建物

1号掘立柱建物は、平坦地区の7区で検出された遺構である。この周辺では、他の遺構と切り合うことなく単独で検出されている。この掘立柱建物跡の東側には、土坑がまとまって検出されている。また西側には、甕棺墓が集中して検出されている。土坑群のさらに東側には住居域があり、これらの遺構配置から、貯蔵域にあると考えている。これらの状況を考えると高床の倉庫が想定される。検出した時の平面形状は、1間×2間の建物で、東西方向に長く、柱間寸法は桁行約3.4m、梁行1.8mである。柱穴の直径は、45～52cmである。柱痕は6基とも検出されているが、柱痕の検出が難しく、断面での検出であった。柱穴の深さは、深いもので42cm程度であり、相当上部が欠損しているものと思われる。弥生土器の破片のみの出土で時期特定には至らなかったが、遺構配置の様子から、弥生中期後半から後期初頭期の遺構であろうと考えている。

#### 4号土坑

4号土坑は、平坦地区の1区で検出された遺構で切り合いはなく単独で検出された遺構である。平面

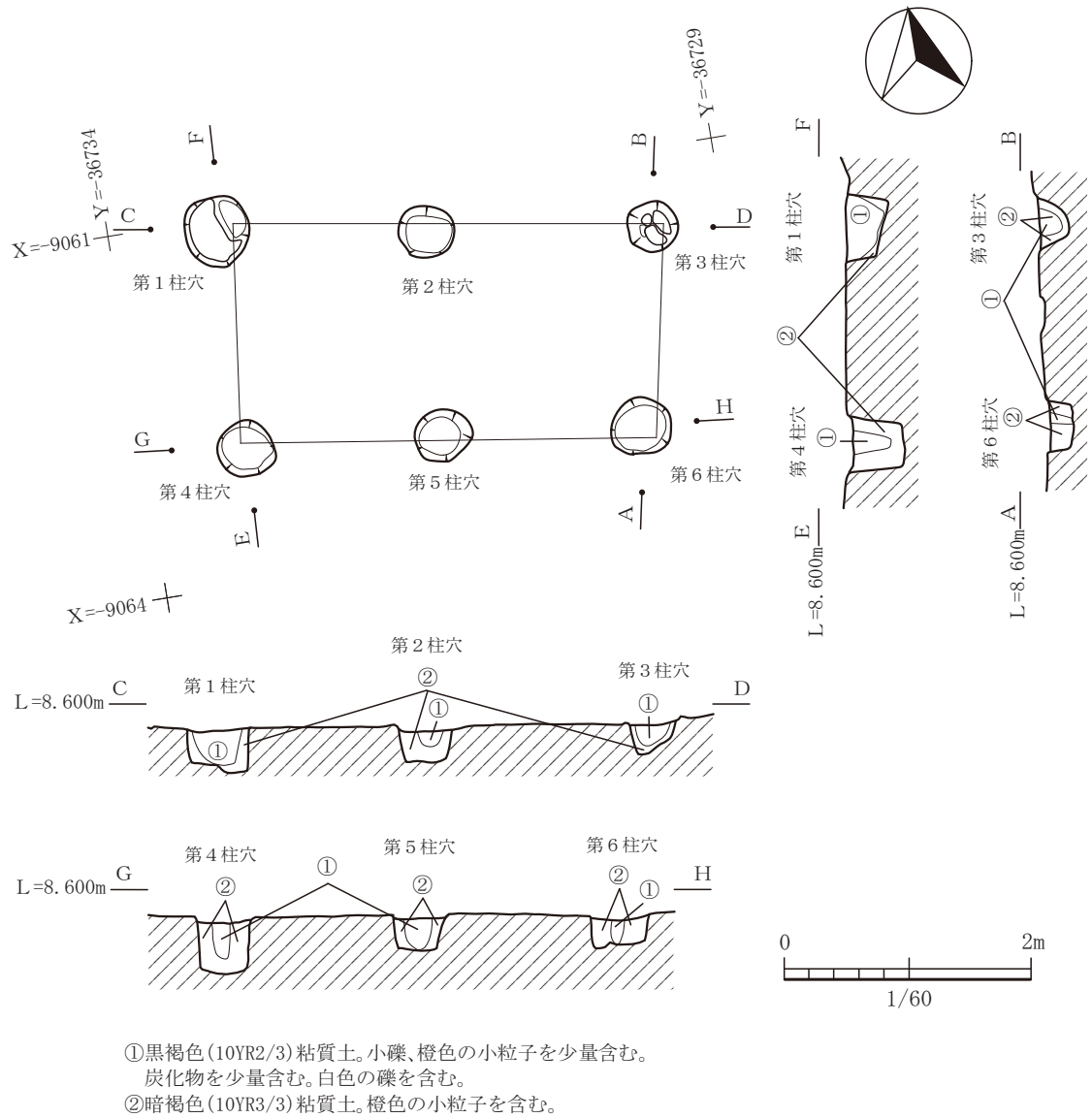


図-101 1号堀立柱建物平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

の形状は楕円形を呈する。長軸方向で92cm、短軸方向で62cmであり、主軸は北を向く。南側に円形に掘りこまれた部分があり、そこから北側に緩やかに浅くなる。埋土中には、焼土と炭化物が含まれているが、遺構内で焼かれた痕跡はない。南側の窪んだ部分の底から、2点の甕形土器の口縁部が出土した。弥生中期後半から後期初頭の所産である。

#### 5号土坑

5号土坑は、平坦地区の2区で検出された遺構で切り合いなく単独で検出された遺構である。平面の形状は、方形を呈するが、東側の壁付近に、土坑の床部分より一段高くなった部分に平坦なテラスがある。埋土中に炭を含むものの遺構内で火を使った痕跡は示さない。東西方向の長軸が1.5m、短軸が

1.3mである。出土遺物は、実測が可能な遺物は1点のみで、甕形土器の口縁部である。口縁部の形状で、端部が下に垂れ下がるような傾向を示す。弥生中期後半期の所産と考えられる。

#### 6号土坑

6号土坑は、平坦地区の2区で検出された遺構で、6号住居、7号土坑を切っている。いびつな方形プランで、長軸方向が3.2m、短軸方向が1.7mである。N40°Wに主軸をもち、南側壁付近には、浅いピット状の窪みを持つ。出土遺物としては、甕形土器の口縁部の破片が出土している。弥生中期後半から後期初頭の所産と考えられる。

#### 7号土坑

7号土坑は、6号土坑と13号土坑と切り合っ

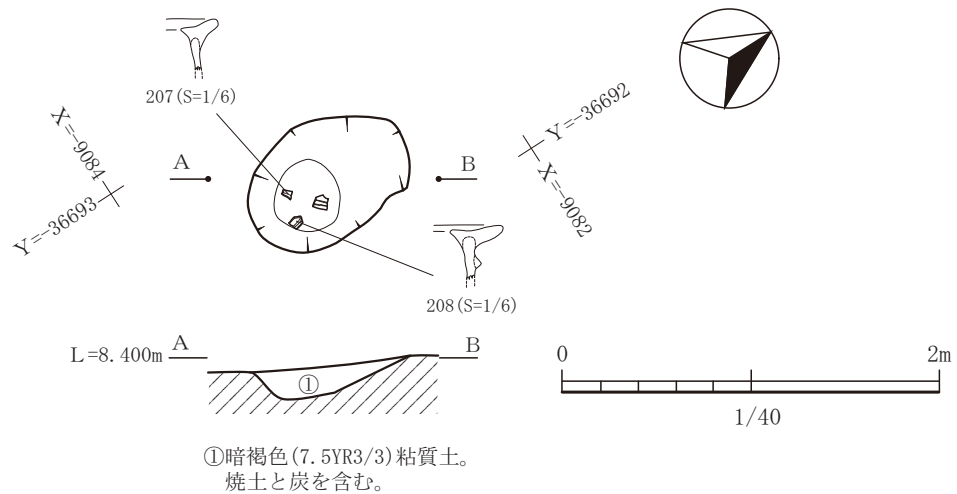


図-102 4号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/40)

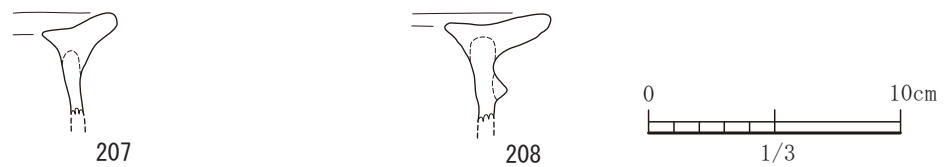


図-103 4号土坑出土遺物実測図 (すべて S=1/3)

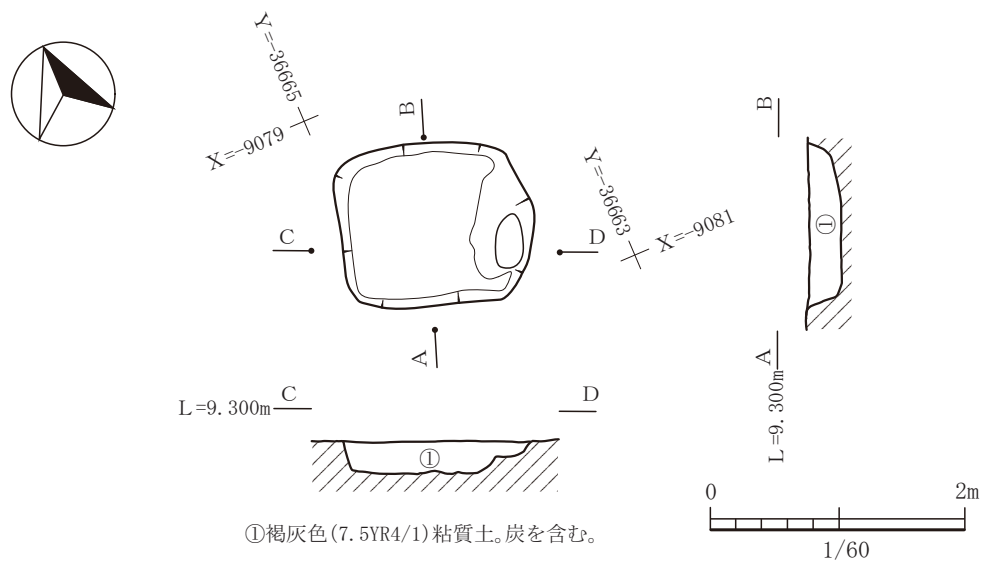


図-104 5号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

おり、13号土坑よりは新しく、6号土坑より古い遺構である。短軸方向で1.3m、長軸方向は3.5mほどの残存で、6号土坑により削平されているため詳細は不明。主軸は、N42°Eで切り合う6号土坑と直交する。出土遺物は、実測可能な遺物はなく弥生土器の破片が出土したのみである。

### 8号土坑

8号土坑は、平坦地区の2区で他の遺構と切り合うことなく単独で検出された遺構である。平面での形状はいびつな楕円形である。長軸方向で2.6mで、短軸方向で1.3mである。主軸はN44°Eで7号土坑とおおよそ一致する。出土遺物は、甕形土器の口縁

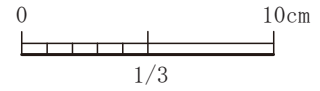
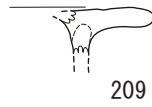
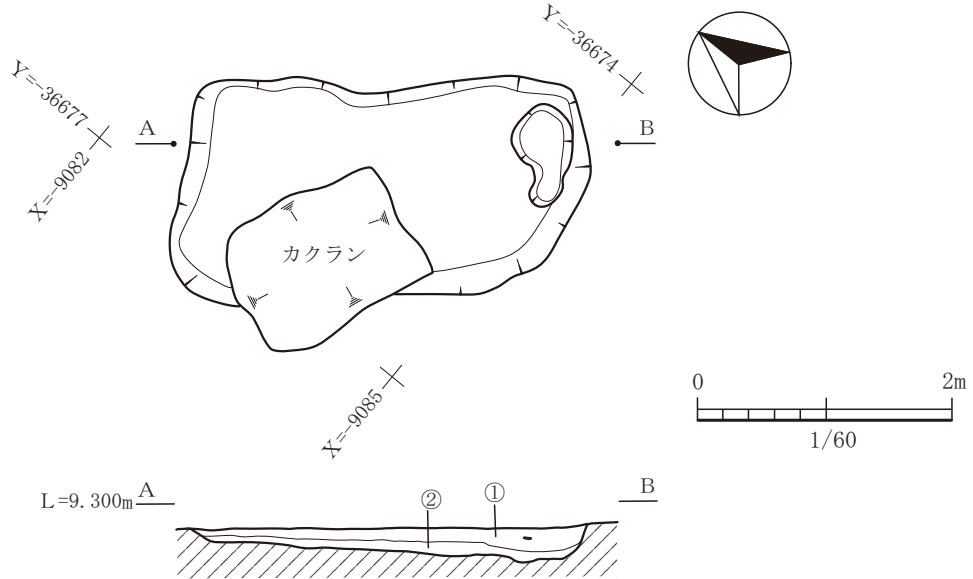


図-105 5号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)



- ①黒褐色(10YR3/2)粘質土。
- ②暗褐色(10YR3/3)粘質土。焼土粒・炭化物を少量含む。  
1～10mm程度の黄褐色土をブロック状に含む。

図-106 6号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

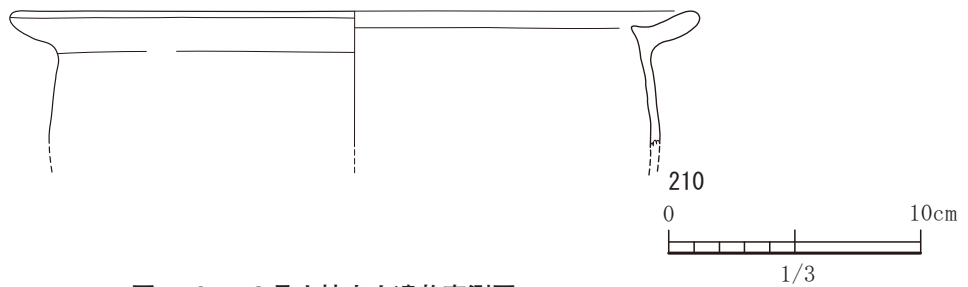


図-107 6号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

部の1点である。弥生中期後半から後期初頭の所産と考えられる。

**9号土坑**

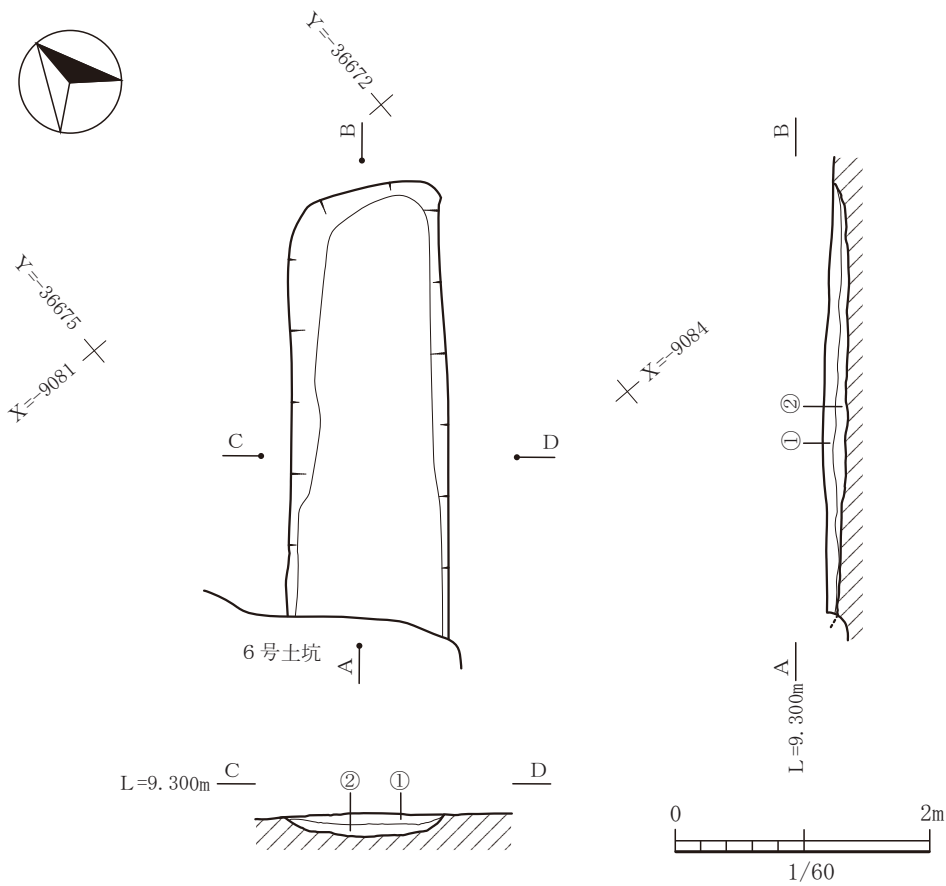
9号土坑は、平坦地区の2区で10号住居によって切られて検出された遺構である。平面の形状は隅丸方形であろうと考えられる。長軸方向は、2.8mであると思われるが、短軸方向は10号住居によって切られているため不明である。この9号土坑からの

出土遺物はほとんどなく弥生土器の破片で詳細な時期決定できるものは出土していない。しかしながら、弥生中期後半期の10号住居によって切られていることから、弥生中期後半期ぐらいであろうと考えられる。

**10号土坑**

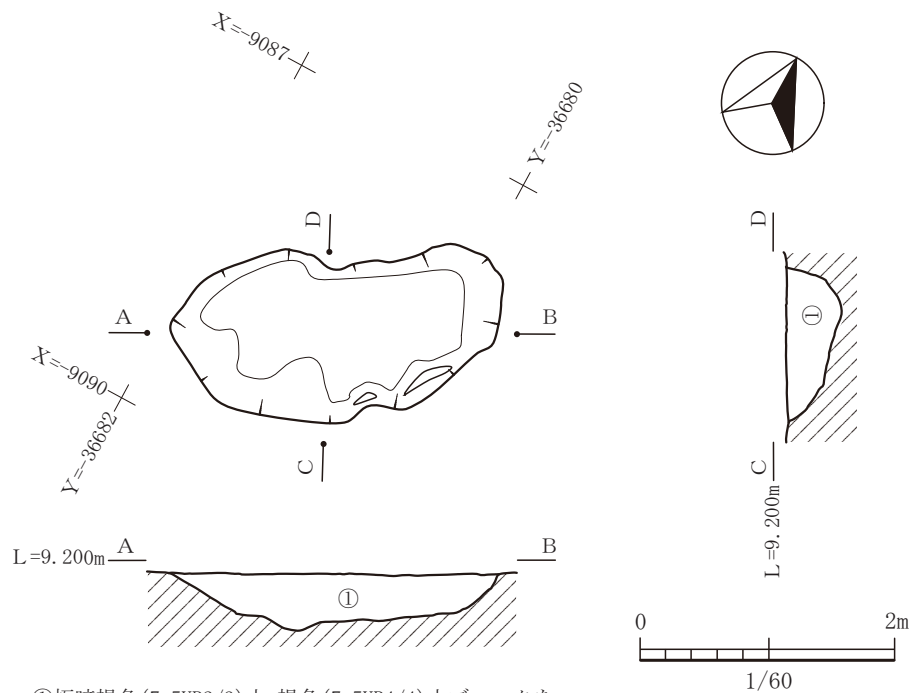
10号土坑は、平坦地区の2区の10号住居の貯蔵穴内から検出された遺構であり、10号住居より





- ① 暗褐色 (10YR3/3) 粘質土。焼土粒・炭化物を少量含む。
- ② にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質土。焼土粒・炭化物を少量含む。1～10mm 程度の黄褐色土をブロック状に含む。

図-108 7号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)



- ① 極暗褐色 (7.5YR2/3) 土。褐色 (7.5YR4/4) 土ブロックを含む。白色粒・橙色粒・炭化物も含む。

図-109 8号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

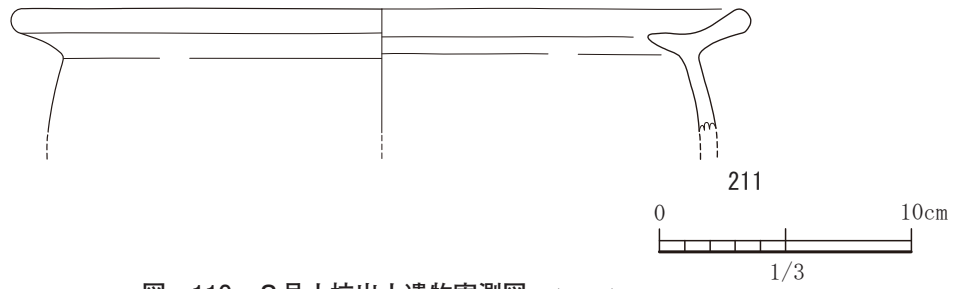


図-110 8号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

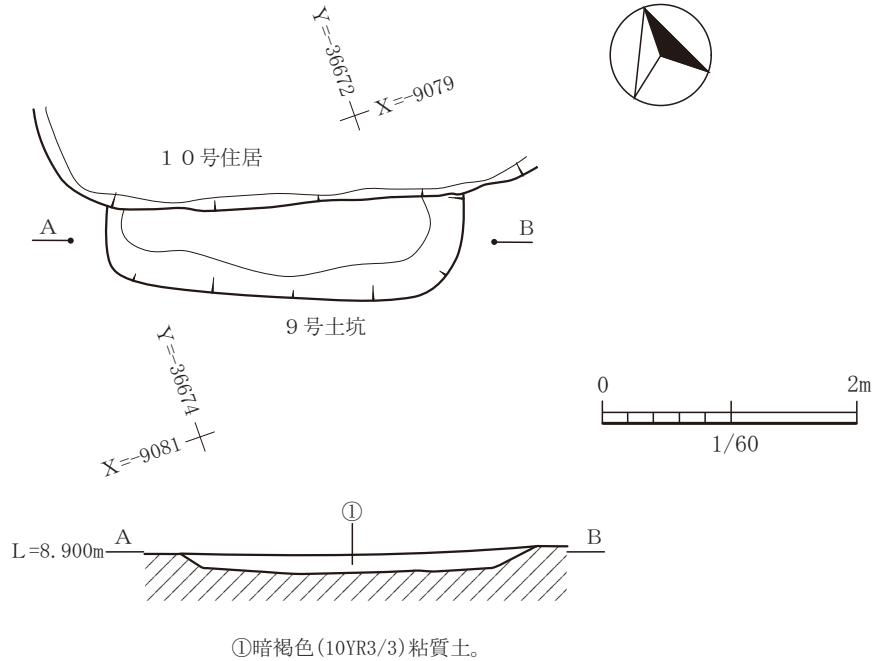


図-111 9号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

は古い弥生時代の遺構である。主軸をN59°Wに持ち、主軸方向が1.2m、短軸方向が0.5mの楕円形プランである。出土遺物は、甕形土器の口縁部が2点、壺形土器の口縁部が1点実測可能なものとして出土している。弥生中期後半から後期初頭期の範疇であろう。212の口縁部の形状で、内側に突起をもたない。213は、壺形土器で、口縁端部に刻み目を施してありススが付着している。214は、甕形土器でススが付着している。

### 11号土坑

11号土坑は、平坦地区の2区の甕棺墓が集中する墓域付近で検出された遺構である。長軸方向は1.4mで、短軸方向が0.9mの楕円形プランである。また主軸は、N68°Wで周辺の甕棺墓の主軸方向にほぼ一致し、遺構配置の面からも弥生時代の遺構ではないかと考えられる。尚、実測できるような出土遺物はないので詳細な時期は不明である。遺構配置か

らすると墓域中にあり甕棺墓と主軸を同じくすることから土坑墓の可能性もある。

### 12号土坑

12号土坑は、平坦地区の2区で他の遺構との切り合いがなく単独で検出された遺構である。長軸方向は1.9m、短軸方向は1.0mの隅丸方形プランである。長軸方向は東西にむく。西の壁と南の壁にテラス状の平坦部がある。検出面からの深さは約56cmであり、他の弥生時代中期後半期の土坑の中では、深く掘りこまれている方であり、埋土も2層認められたが、出土遺物はほとんどなく時代がわかる遺物は突帯がある甕形土器の胴部の1点であった。215は、M字突帯文であり須玖Ⅱ式であり、弥生中期後半期の所産であろう。

### 13号土坑

13号土坑は、平坦地区の2区で6号土坑と7号土坑と切り合っ検出された隅丸方形プランの遺構

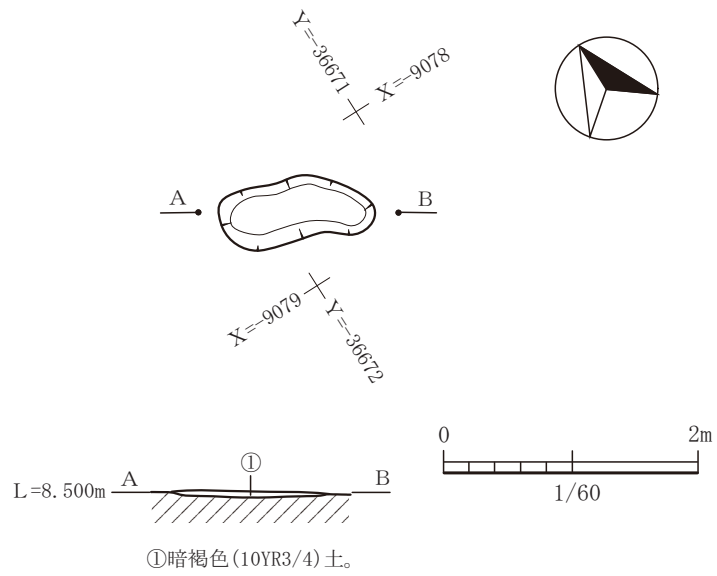


図-112 10号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

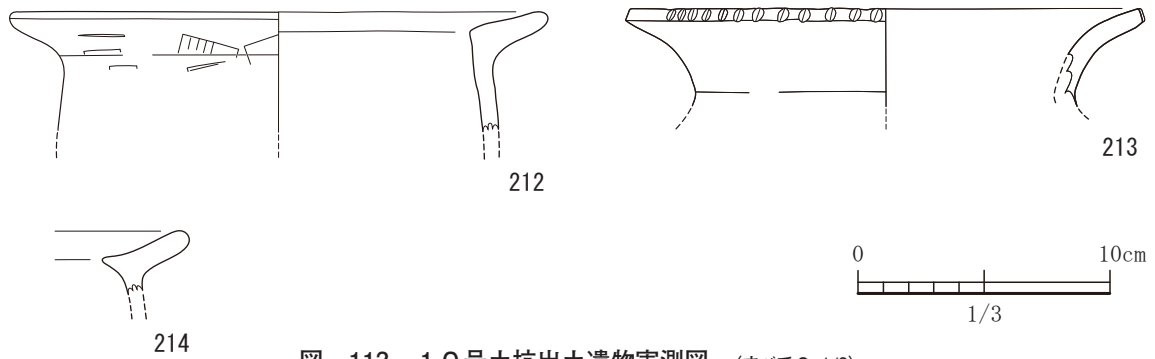
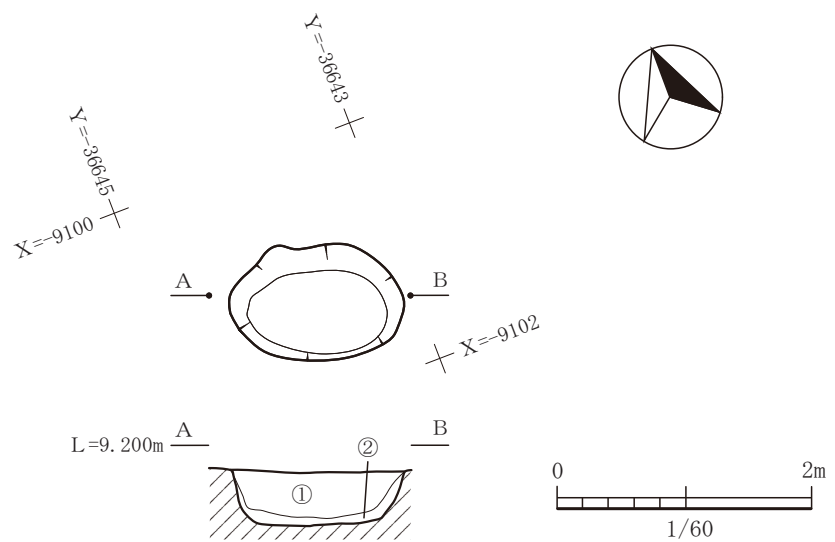


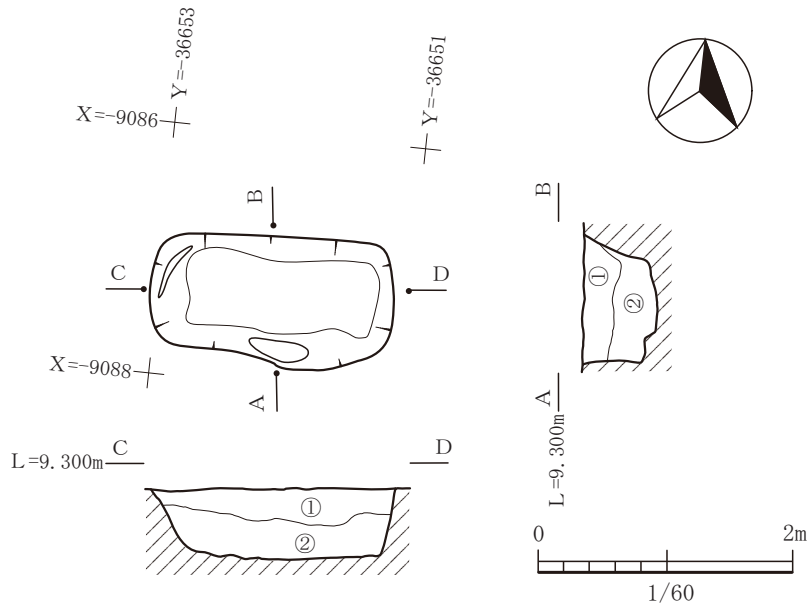
図-113 10号土坑出土遺物実測図 (すべて S=1/3)



①暗褐色(10YR3/3)粘質土。1 cm 程度の礫を含む。

②黄褐色(2.5YR5/4)粘質土。砂及び1 cm 程度の礫を多量に含む。

図-114 11号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)



- ①黒褐色(10YR2/2)土。焼土(直径5~7mm)片を含む。直径5mm程度の小礫を含む。長さ5mmの炭・直径2cmの褐色土をブロック状に含む。
- ②暗褐色(10YR3/3)土。長さ5mm程度の炭・直径5cmの黄褐色(10YR5/6)のブロックを含む。直径2mm程度の焼土を含む。直径1cmの小礫を含む。

図-115 12号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

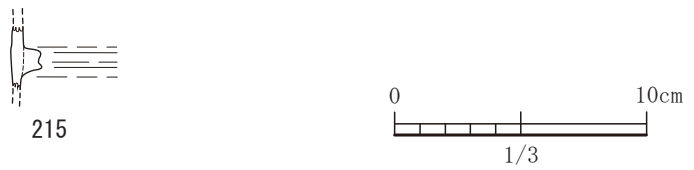
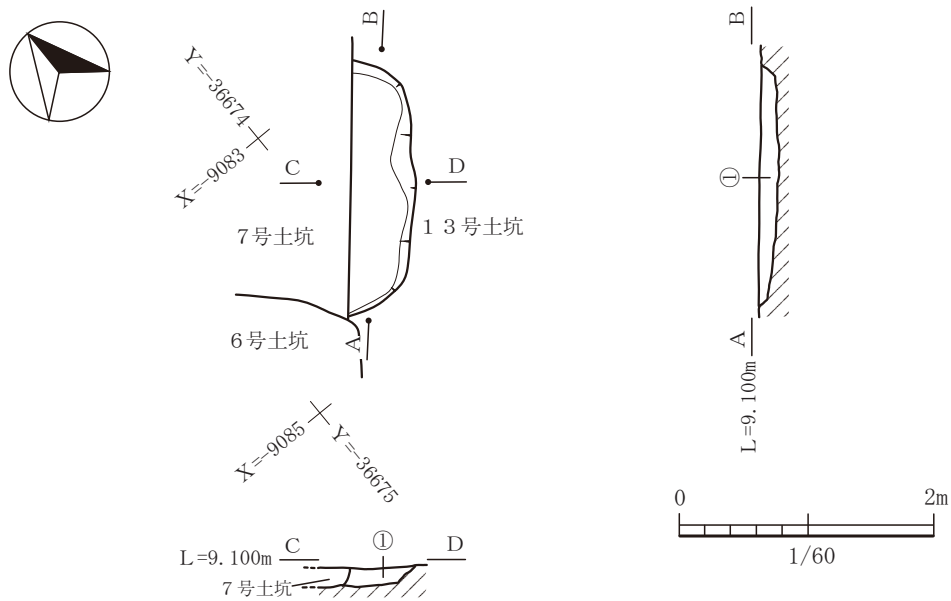


図-116 12号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)



- ①黒褐色(7.5YR3/2)土。炭・焼土を少量含む。

図-117 13号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)



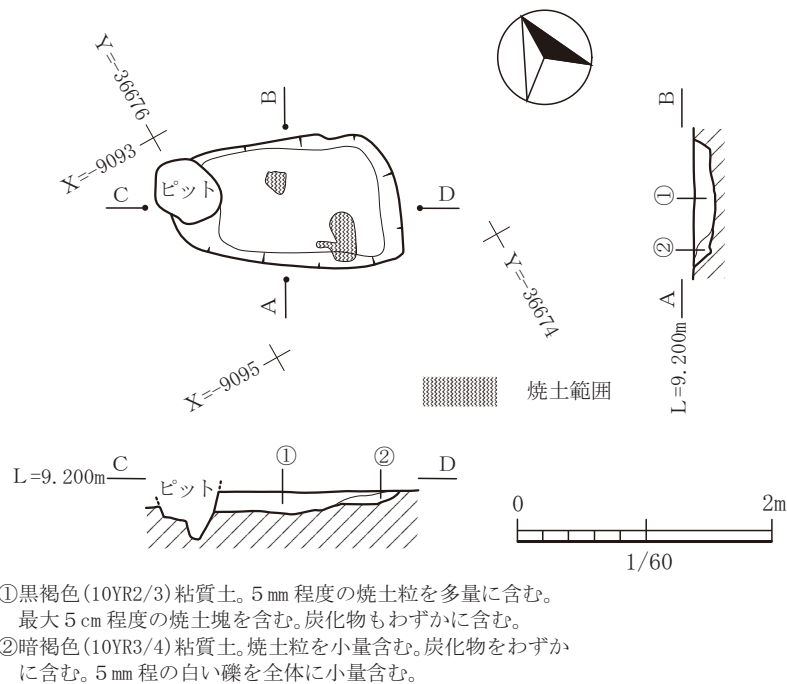


図-118 14号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

である。6号土坑や7号土坑よりは古い。6号土坑や7号土坑と切り合った際、削平を受けており遺構の半分程度の残存である。出土遺物はなかった。しかしながら、6号土坑が弥生中期後半から後期初頭期のものであることから、この時期より古いものであることは明らかである。長軸方向は2.0mである。短軸方向は削平を受け不明であるが、1.0mはあるようである。主軸の方向は、N40°Eであり、7号土坑の軸方向と同じである。

#### 14号土坑

14号土坑は、平坦地区の2区で7号住居と切り合っただけで検出された遺構である。7号住居を切っている遺構である。西側の壁付近で、後世のピットによって削平を受けている。主軸はN73°Wである。長軸方向の長さが1.8m、短軸方向の長さが1.1mの東側の辺が広い台形の形状を呈する。床面の北側と南側に焼土がやや固まって検出された。埋土中にも多量の焼土を含んでおり、火を使った痕跡が認められた。しかしながら、出土遺物は、弥生土器片のみであり実測可能な出土遺物はなかった。詳細な時期は不明である。

#### 15号土坑

15号土坑は、平坦地区の2区の甕棺墓が密集する地域で単独で検出された遺構である。平面形状は

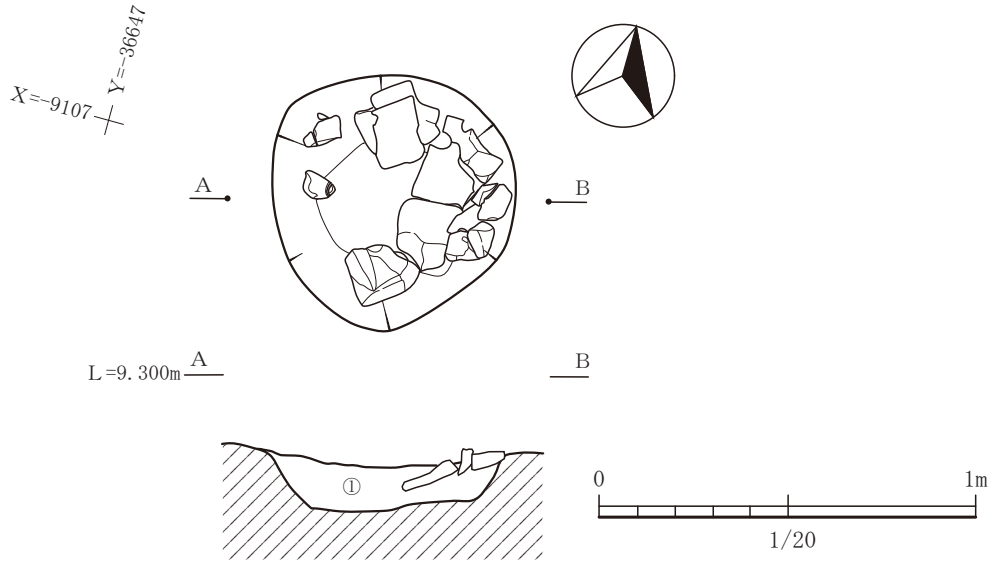
円形であり、直径は約65cmを測る。この遺構の特徴としては、円形の平坦な床面に阿蘇溶結凝灰岩が敷き詰められていたことである。埋土中には焼土や炭はほとんど含まれておらず火を使った痕跡はない。用途は不明である。出土遺物は弥生土器の破片のみで時期決定できる遺物はなかった。詳細時期は不明。

#### 16号土坑

16号土坑は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構で、甕棺墓が密集する地域に位置する。N80°Wに主軸を持ち、長軸方向に2.5m、短軸方向に0.7mの長方形プランであるが、東西の壁の両端部がやや張り出す形状を呈している。炭や焼土を含むものの火を使った痕跡はなかった。出土遺物は、実測可能な遺物は2点しか出土しなかった。216と217は共に甕形土器の口縁部であり、内側に小さい突起をもっている。弥生中期後半から後期初頭期の範疇である。遺構の形状と墓域と考えられる地域に位置することから土坑墓の可能性があると考えられる。

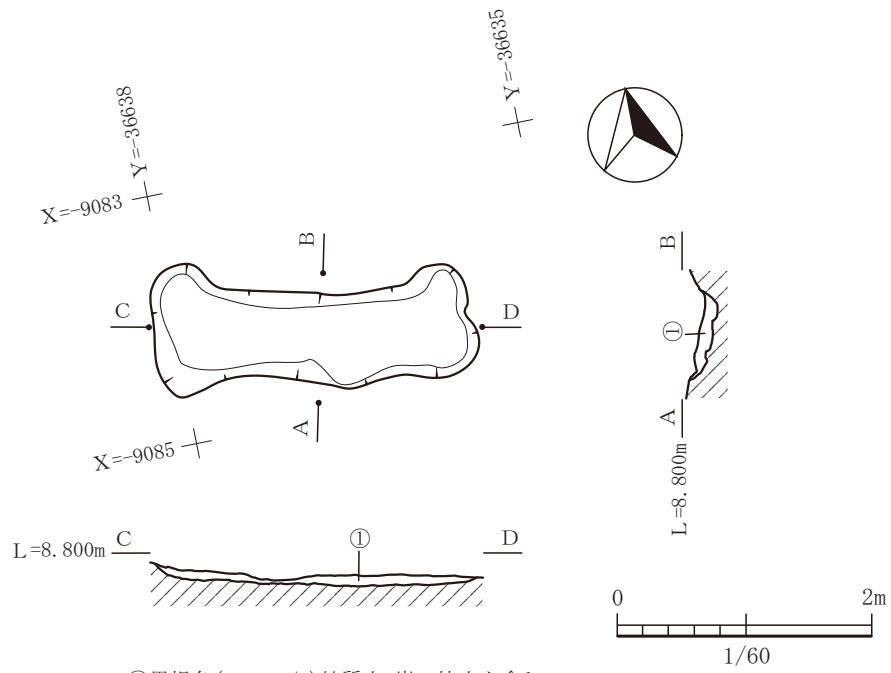
#### 17号土坑

17号土坑は、平坦地区の2区で14号住居と切り合っただけで検出された遺構である。14号住居の床面から検出された遺構である。主軸はN6°Wであり、長軸方向に2.2m、短軸方向に1.5mを測る。出土遺物は、実測可能なものとして土器が5点出土してい



①褐色(10YR4/6)粘質土。1mm程度の礫を全体に含む。橙色土のブロックを含む。

図-119 15号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

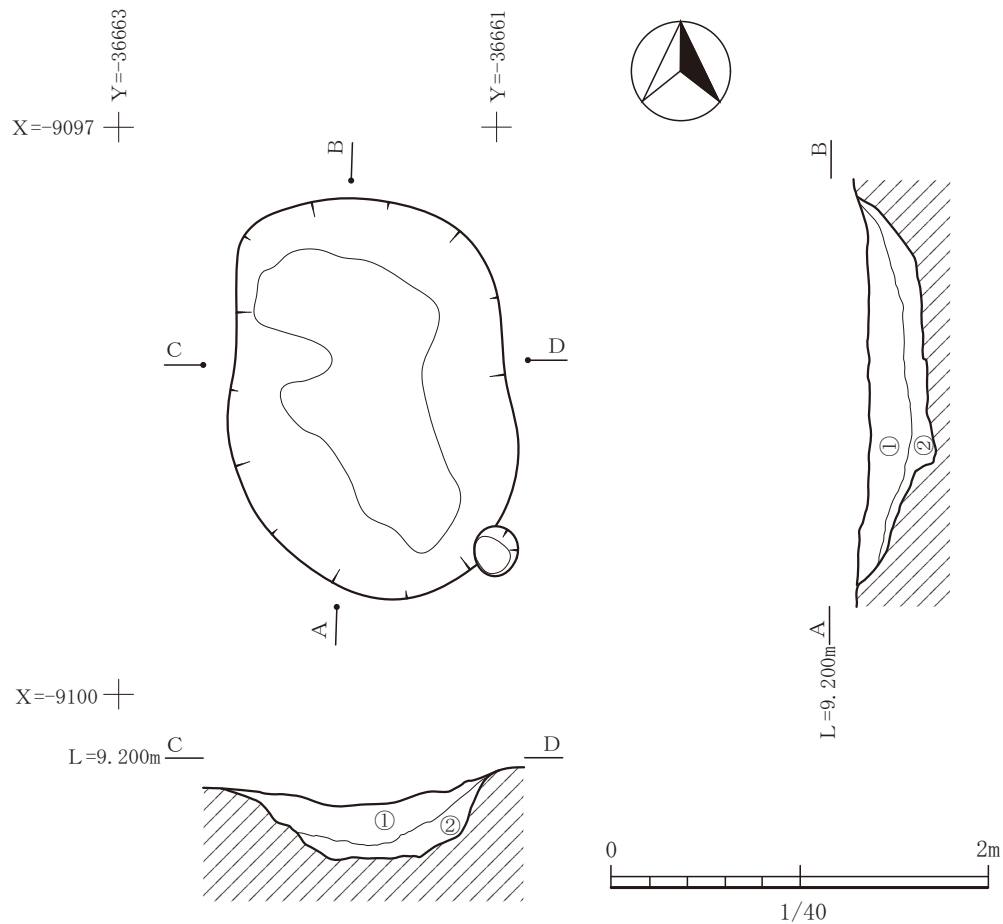


①黒褐色(7.5YR3/2)粘質土。炭・焼土を含む。

図-120 16号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)



図-121 16号土坑出土遺物実測図 (すべて S=1/3)



①暗褐色(10YR3/4)粘質土。1 cm 程度の小礫を含む。  
 ②褐色(10YR4/6)粘質土。黄色の砂を少量含む。

図-122 17号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/40)

る。218は、甕形土器である。口縁の内側に小さい突起を施すものである。丁寧なナデ調整で口縁部全体にスガが付着していた。219は、刻み目突帯文がある胴部の一部である。ナデ調整である。220は、甕形土器の口縁部で内側に突起を付けている。221は、台付甕の脚部である。外面は被熱に伴う赤色化が見られる。222は、短頸壺である。調整は内外面ともハケ目のちナデ調整である。弥生中期後半から後期初頭の所産である。

#### 18号土坑

18号土坑は、平坦地区の6区で単独で検出された直径約1.3mの円形プランの遺構である。東側壁にテラス状の平坦な部分がある。出土遺物は、実測可能なものとして、甕形土器の口縁部から胴部にかけての破片が出土している。223の口縁部は平坦な形状を呈している。弥生時代中期後半から後期初頭

に相当するものである。

#### 19号土坑

19号土坑は、平坦地区の6区で単独で検出された遺構である。仮設道路の設置のため南側の一部は未調査である。そのため、全体の形状は不明であるが、楕円形の大きい土坑で、中央は円形の掘り込みがあり西側はテラス状になっている。焼土や炭化物を含むようであるが、被熱による痕跡等は見当たらない。出土遺物は2点出土している。224は、頸部から口縁部にかけて外反し、頸部が長くなっている。外面はハケ目調整、内面はナデ調整である。225は、口縁部の内側に細い突起を持ち、しゃくれあがりながら口縁端部にいたっている。弥生後期前半期の様相を呈する。

#### 20号土坑

20号土坑は、平坦地区の7区で22号土坑と接

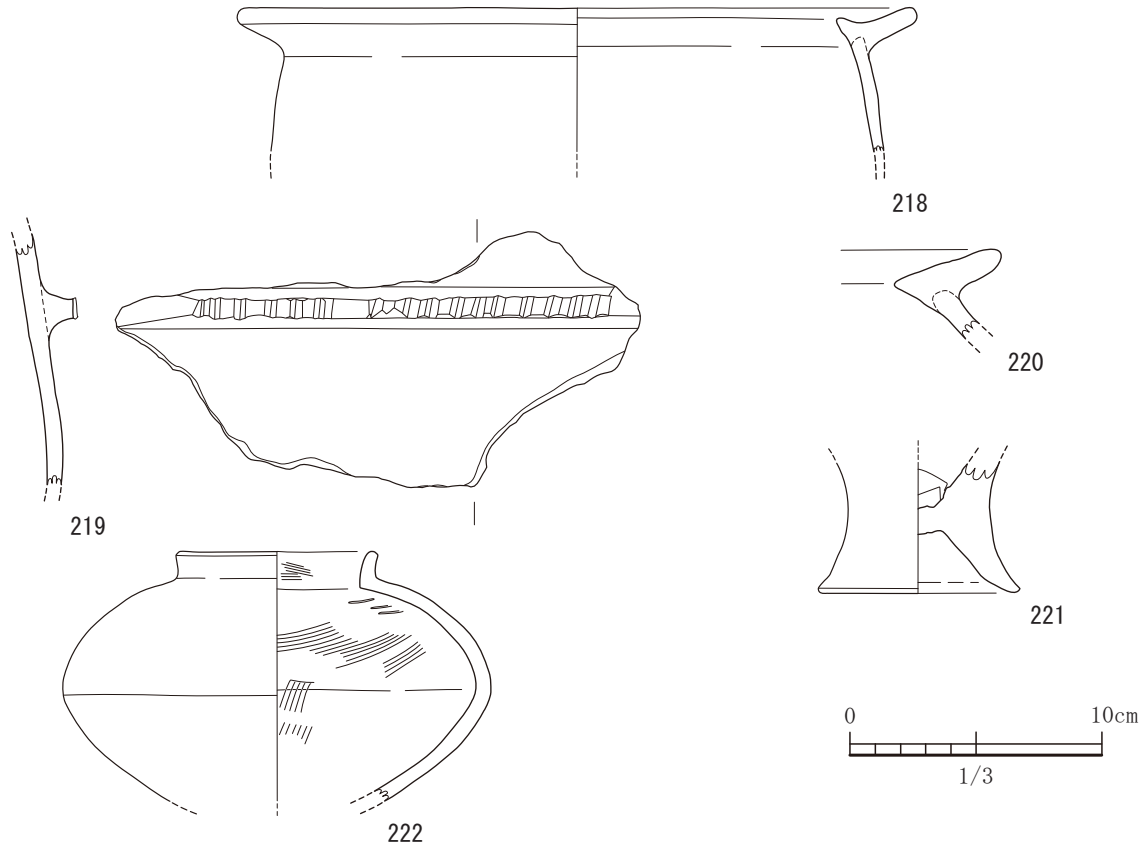


図-123 17号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

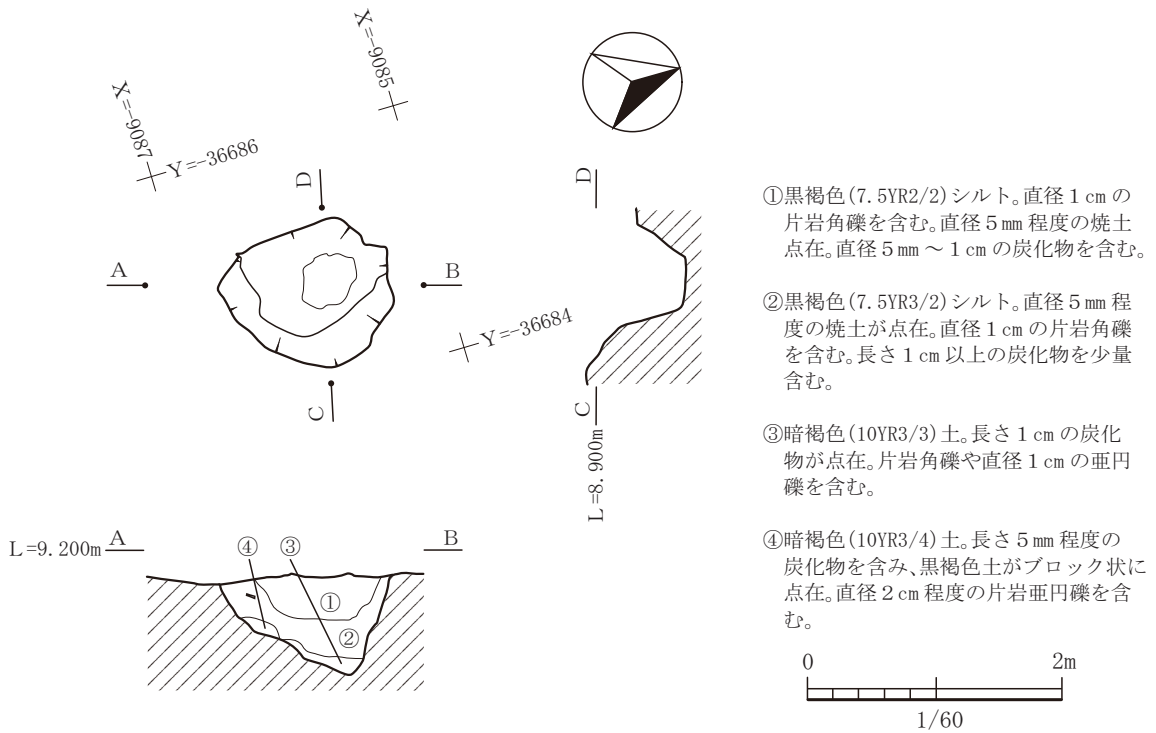


図-124 18号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)



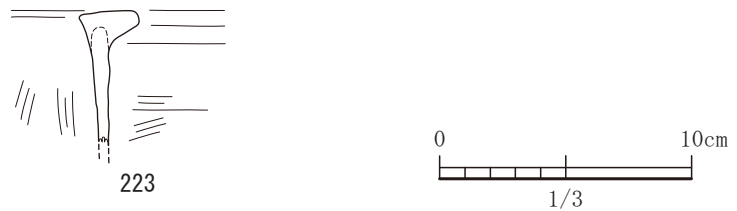


図-125 18号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

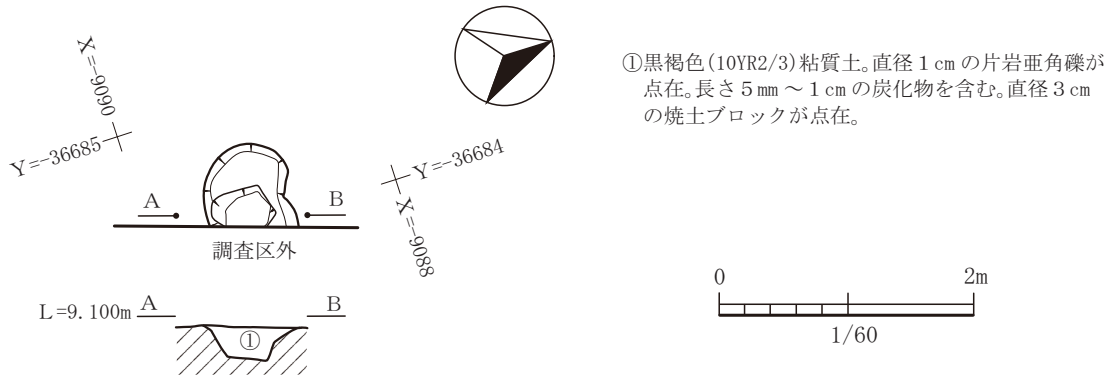


図-126 19号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

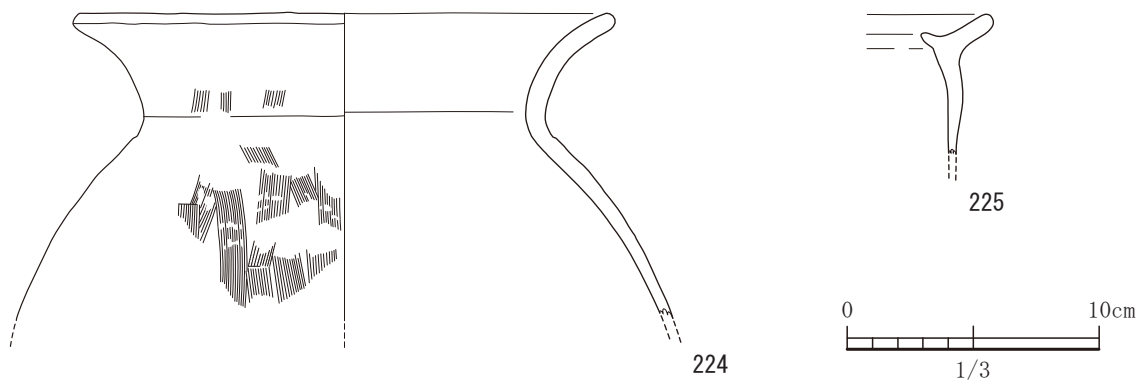


図-127 19号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

しながら検出された遺構である。主軸はN48°Eで、長軸方向約1.2m、短軸方向約0.8mのややいびつな方形プランである。床面には2箇所に凹地が設けられている。埋土は、3層あるが、最上位の層(①)に多量の炭を含み、下の2つの層には、炭化物を含むことなくブロックを伴って埋積していることから、自然に埋まったものではなく故意に埋めている。さらに炭の痕跡から、埋める途中に火を使っている様子がうかがえる。出土遺物はない。主軸方向や土坑の配置具合から弥生時代の遺構に位置付けている。

### 21号土坑

21号土坑は、平坦地区の7区で単独で検出された遺構で南東側はトレンチによって壊されている。N26°Eに主軸をとり、長軸方向は約1.0mである。短軸方向は削平を受け不明であるが、0.7mはあるようである。埋土中には、焼土や炭化物は含まれていない。出土遺物は、実測可能な遺物が3点である。226と227は、甕形土器の胴部から口縁部にかけてのものである。ともに口縁部の内側に小さい突起をもつ。228も甕形土器の口縁部と思われる。弥

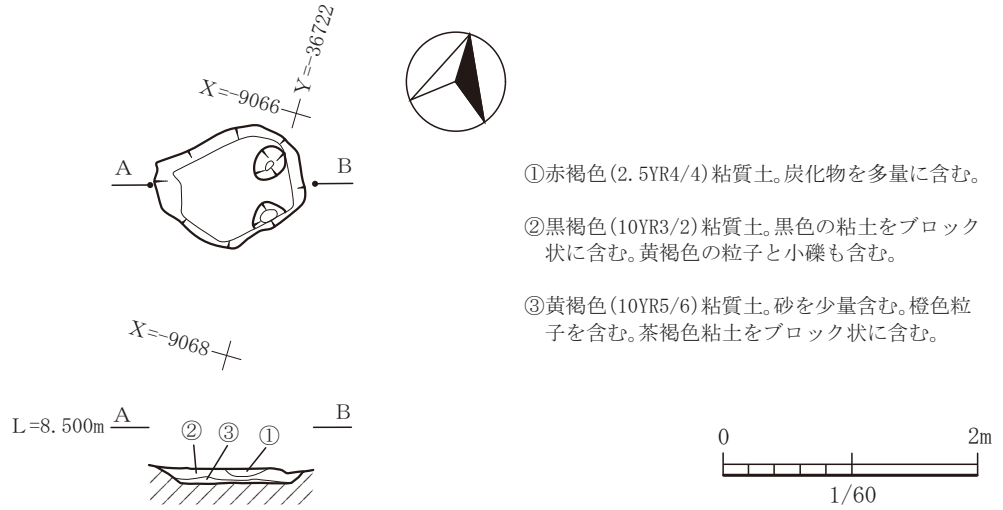


図-128 20号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

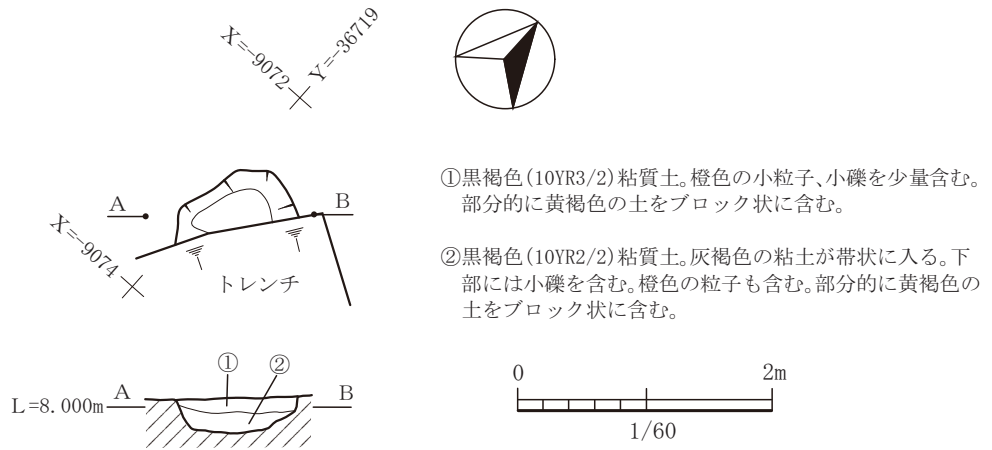


図-129 21号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

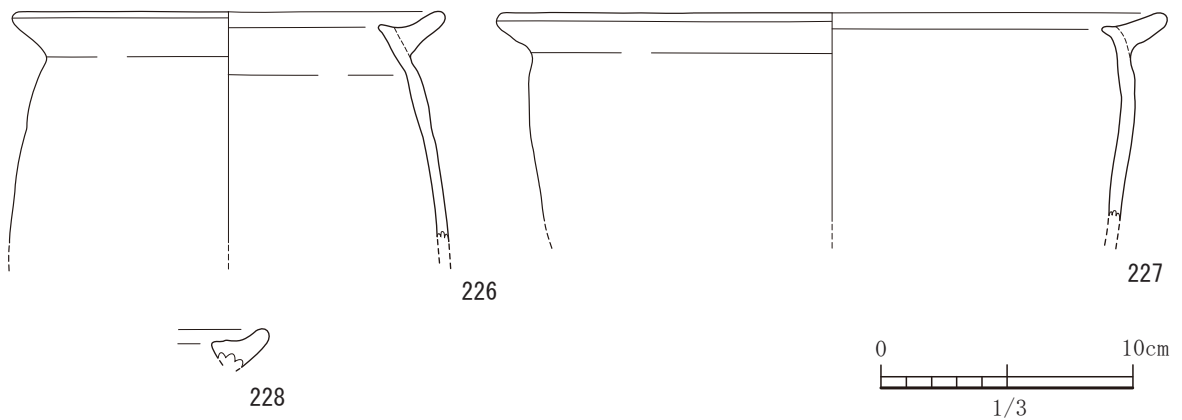


図-130 21号土坑出土遺物実測図 (すべて S=1/3)

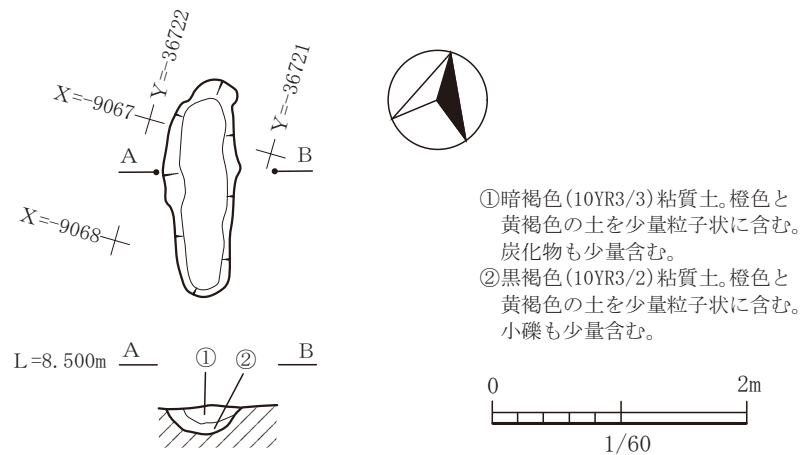


図-131 22号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

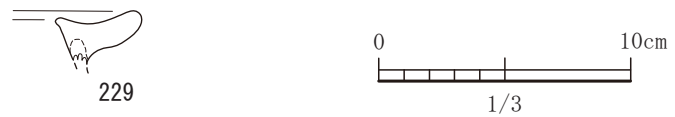


図-132 22号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

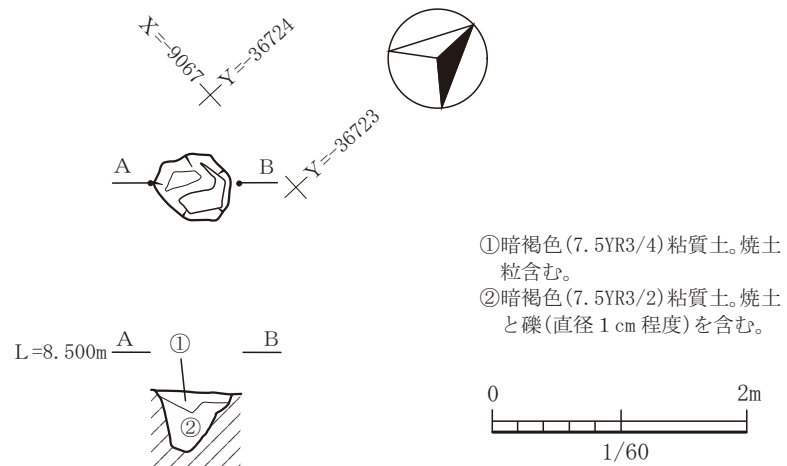


図-133 23号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

生時代中期後半期から後期初頭期の範疇である。

### 22号土坑

22号土坑は、平坦地区の7区で20号土坑と接しながら検出された遺構である。主軸はN15°Wである。長軸方向は1.7m、短軸方向は0.6mの楕円形プランの土坑である。周辺には土坑が集中しており、近くには掘立柱建物跡があることから、貯蔵穴として使用されていたのではないかと考えている。出土遺物は、実測可能なものとして1点出土している。

229は、甕形土器の口縁部と思われる。弥生中期後半から後期初頭期の範疇である。

### 23号土坑

23号土坑は、平坦地区の7区で20号土坑と22号土坑の近隣で単独で検出された遺構である。直径約0.6mの円形プランである。深さ約50cmのピット状の形状を呈している。底はやや平坦に整形してある。出土遺物は、ほとんどが破片であり、実測可能なものとしては1点である。230は、甕形土

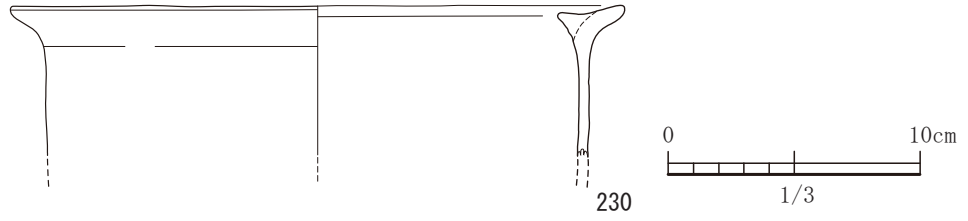


図-134 23号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

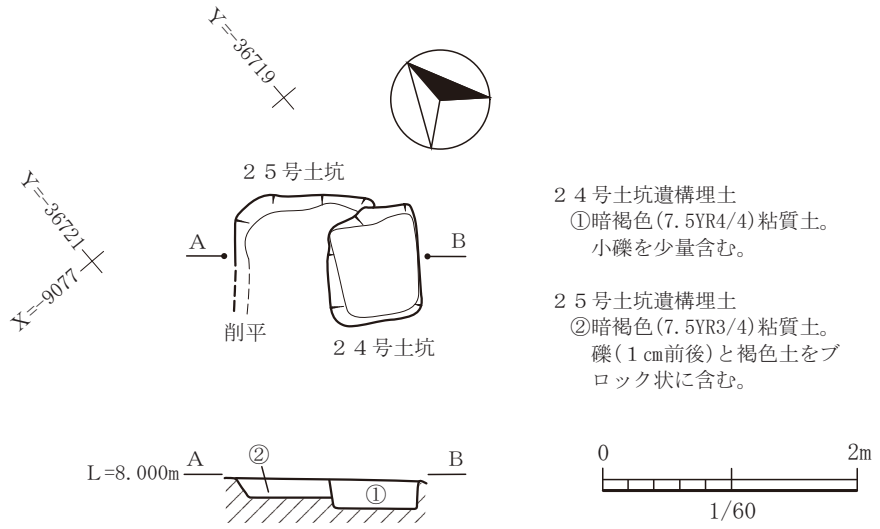
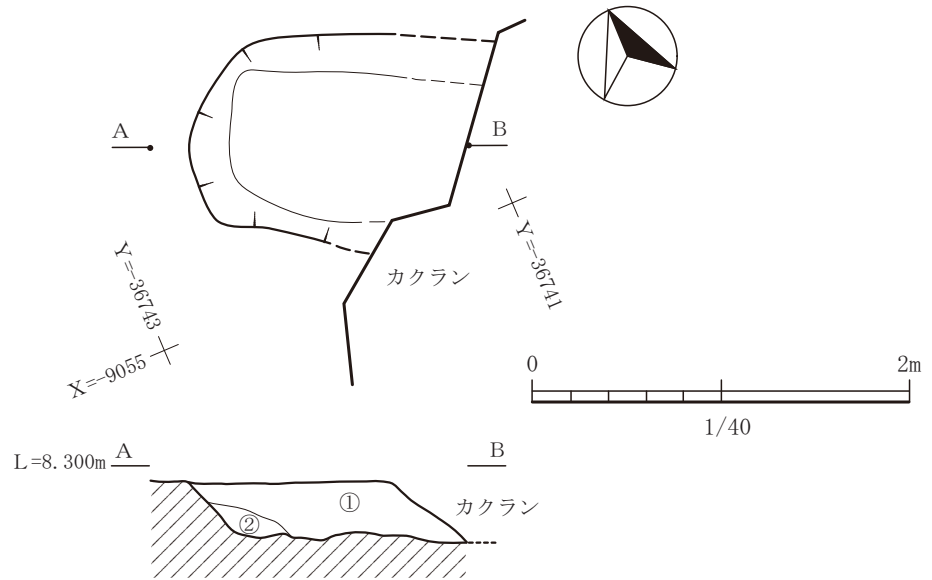


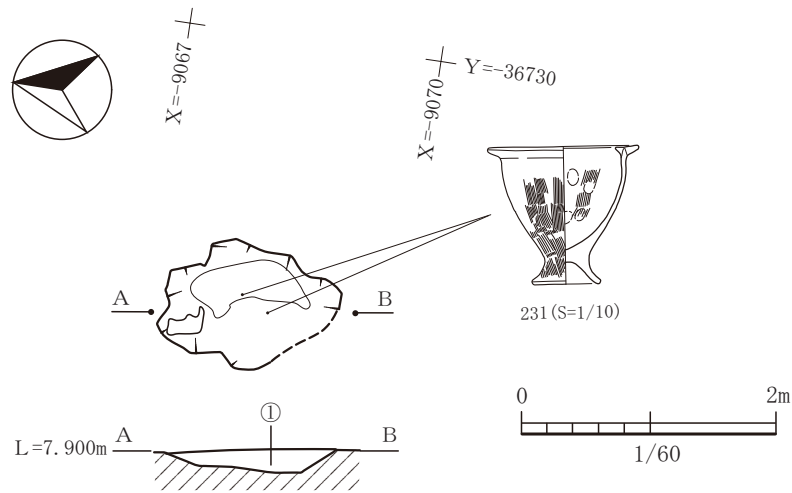
図-135 24号土坑・25号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)



- ①暗褐色(10YR3/4)粘質土。暗褐色の土をブロック状に含む。  
小礫を含む。
- ②黒褐色(10YR3/2)粘質土。小礫を含む。赤褐色の土を小  
さなブロック状に含む。

図-136 26号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/40)





①黒褐色(10YR3/2)粘質土。砂礫を多く含んでいる。炭化物、オレンジ色の小粒子を少量含む。

図-137 27号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

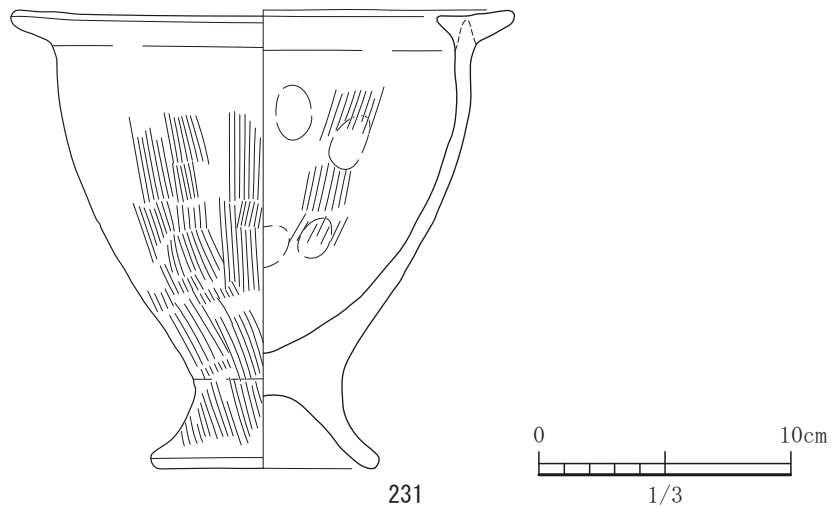


図-138 27号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

器の胴部から口縁部にかけてのものである。弥生中期後半から後期初頭期の所産である。

#### 24号土坑

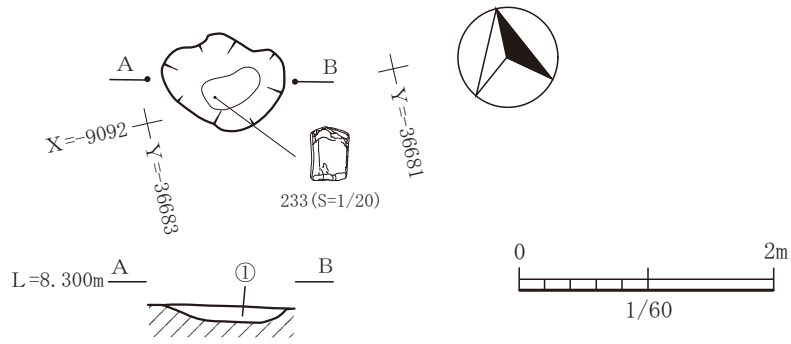
24号土坑は、平坦地区の7区から25号土坑と切り合いながら検出された遺構である。25号土坑を切っている。N36°Eに主軸をとり、長軸方向に0.9m、短軸方向に0.7mの長さの方形プランの土坑である。床部は整形されてフラットである。出土遺物はなかった。時期は不明であるが弥生時代中期の土坑と主軸を同じくするため、この時代に位置付けている。

#### 25号土坑

25号土坑は、24号土坑に切られている遺構である。南側は木葉川の河川工事の際に削平されており不明である。南西側は切り合っている24号土坑により削平され不明。主軸は24号土坑とほぼ同じくする。出土遺物は24号土坑とともになく、時期は不明であるが、位置関係や主軸方向からこの時代に位置付けている。

#### 26号土坑

26号土坑は、平坦地区の7区から単独で検出された遺構である。N66°Wに主軸をとり、周辺に配



①黒褐色(10YR2/2)粘質土。焼土と炭化物粒子を多量に含む。  
小礫を少量含む。

図-139 28号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

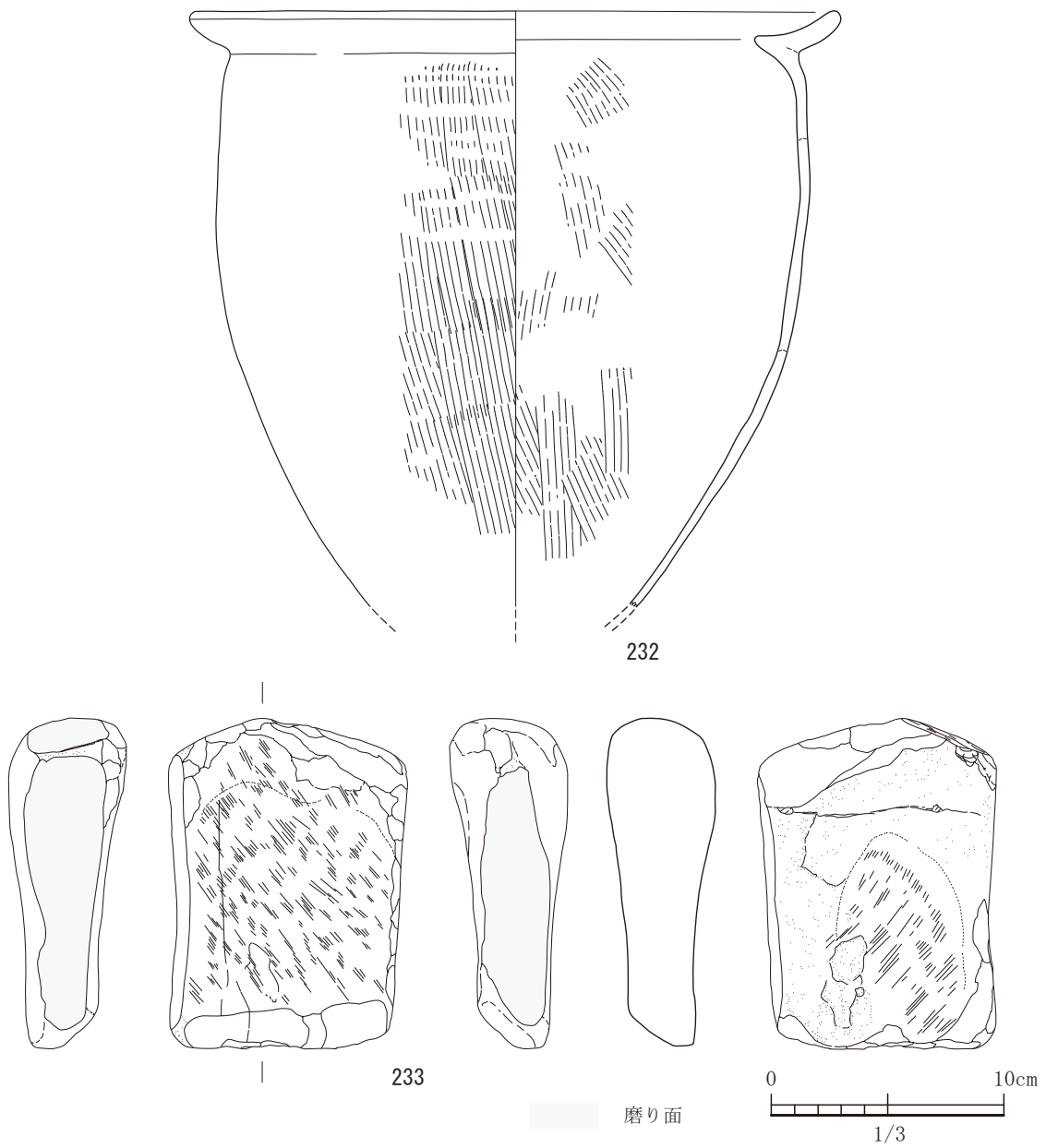


図-140 28号土坑出土遺物実測図 (すべて S=1/3)

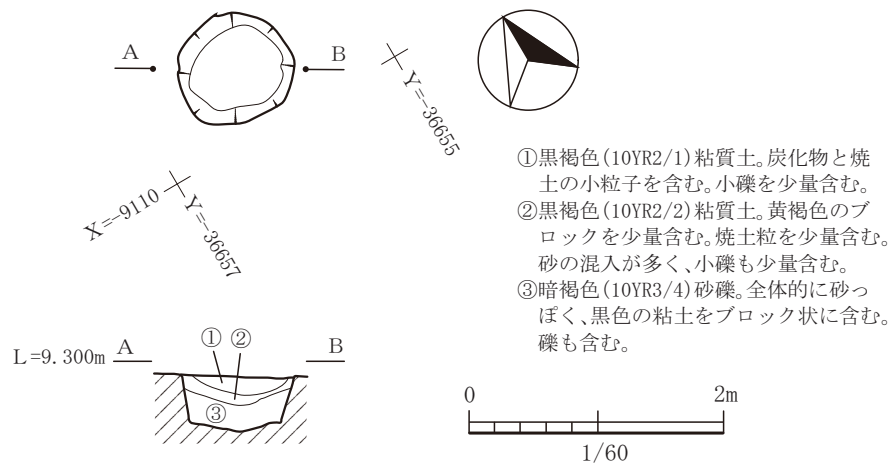


図-141 29号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

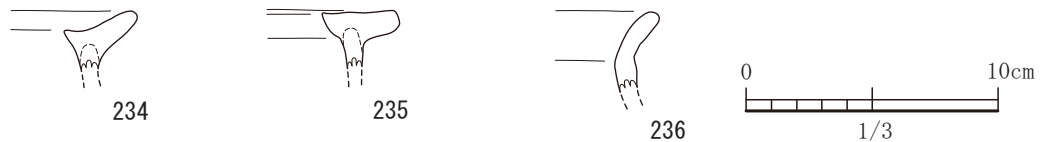


図-142 29号土坑出土遺物実測図 (すべて S=1/3)

置されている甕棺墓の主軸方向と方位を同じくする。長軸方向の長さは、カクランによって削平を受け、不明であるが、短軸方向は約1.2mはあるようである。出土遺物は1点もない。埋土は、粘性土が主体であるが、中にブロック状に別の土が混同しているため、短時間に埋積された可能性が高い。このことから墓域中に位置し、出土遺物もなく、短時間に埋積された可能性が高いことから、土坑墓の可能性が高いと思われる。

### 27号土坑

27号土坑は、平坦地区の7区の1号掘立柱建物の南側で検出された遺構である。平面形状は、ややいびつな楕円形を呈しており、上端の凸凹は、使用していた時に壊れたものなのかもしれない。床面は平坦な底を東側にもち、緩やかに西側は立ち上がるつくりになっている。また、北側にはテラス状の平坦な部分がある。N13°Wに主軸をもち、長軸方向に1.5m、短軸方向に1.0mを測る。出土遺物は実測可能なものが1点で、他は細片である。231は、床面上から出土した台付甕形土器である。内外面ともにハケ目調整のちナデ調整である。口縁部は丁寧な

ナデ調整を施す。胴部から口縁部にかけて外面にススが付着している。口縁部は内側に突起をつけている。口縁部は平坦な形状を呈している。弥生中期後半から後期初頭の所産であると考えられる。

### 28号土坑

28号土坑は、平坦地区の8区で7号住居と接しながら検出された遺構である。7号住居はカクランによって完全に削平されており、その削平された部分でこの28号土坑が検出されているため、新旧関係はわからない。長軸方向の長さが1.0m、短軸方向の長さが7.5mのやや楕円形の形状を呈するプランである。検出面からの深さはさほどなく、約14cmである。土坑の底の床面から砥石が出土している。

また、埋土中から土器片が出土している。232は、甕形土器の胴部から口縁部である。内外面ともにハケ目調整のちナデ調整を施してある。口縁部に一部赤色顔料痕が見受けられる。胴部から口縁部の外面にススが付着している。胎土には、白雲母が含まれていることから、小岱山系の粘土を使用している。

233は、緑泥片岩製の砥石である。木葉山周辺でとれる木山変成岩類の緑色片岩である。この地と

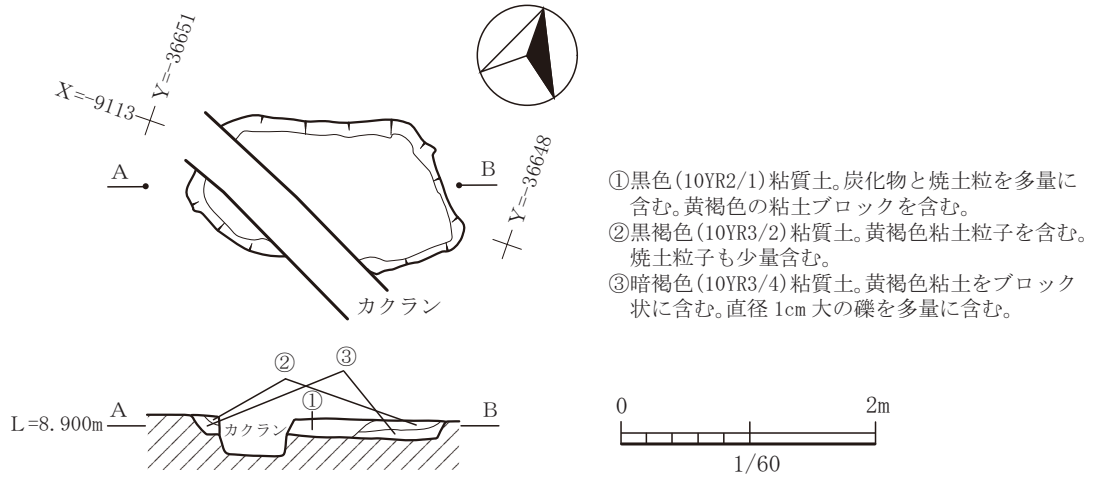


図-143 30号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

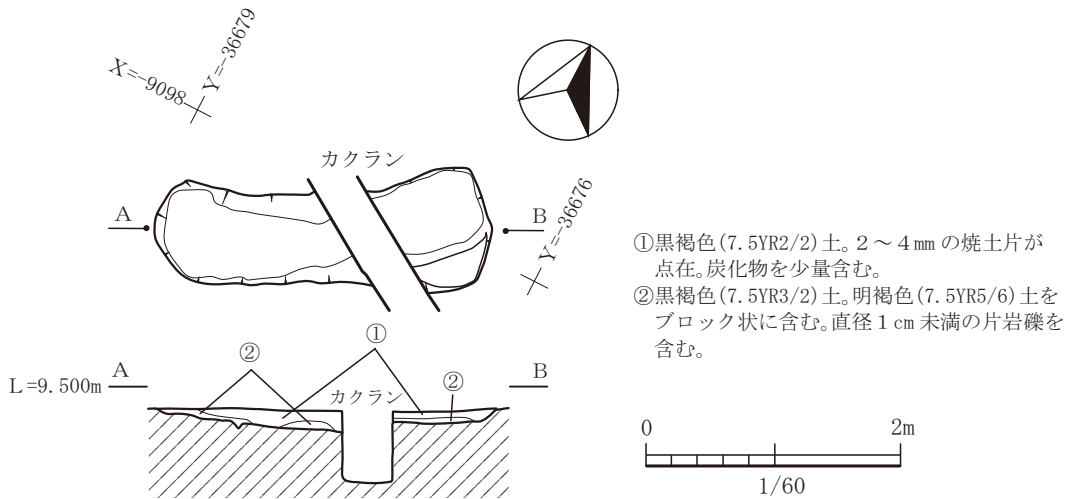


図-144 31号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

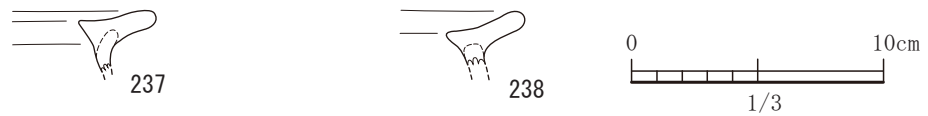


図-145 31号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

れる石材を使用している。表面がつるつるした明瞭な磨り面は3面ある。弥生中期後半から後期初頭期の所産である。

**29号土坑**

29号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された直径約95cmの円形プランの遺構である。土坑の床

面は平坦な形状を呈してきれいに円形を作り上げている。出土遺物は、実測可能な土器として3点出土している。234から236まで甕形土器の口縁部である。234は、口縁部の内側に小さい突起をもち、やや中央をくぼませて胴部の器壁の厚さで外側に口縁をつくっている。235は内側に突起をもつものの、口縁



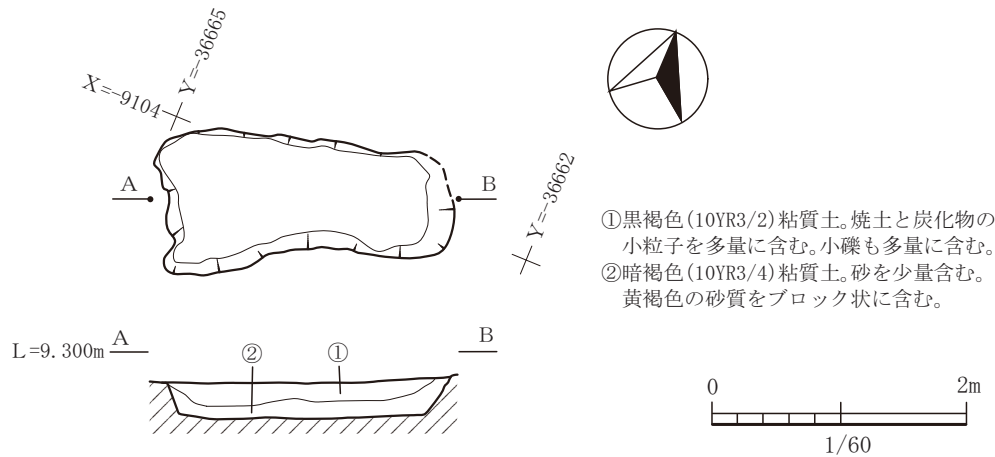


図-146 32号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

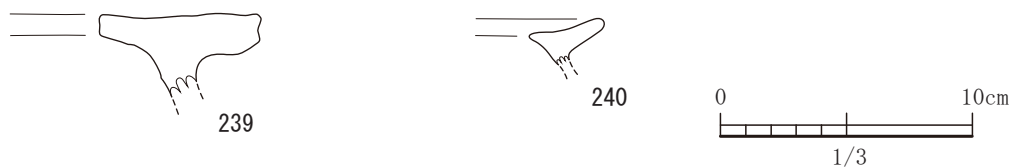


図-147 32号土坑出土遺物実測図 (すべて S=1/3)

は平坦なつくりである。236は、頸部でやや屈曲させ口縁部を立ち上げている。弥生中期後半から後期初頭期の範疇である。

### 30号土坑

30号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構である。主軸はN71°Eで、長軸方向が2.1m、短軸方向が1.2mの長方形プランである。一部カクランによって削平されている。埋土の特徴として、下の層では炭や焼土が少なく、最上位の層(①)において多量の焼土と炭化物が認められており、埋まる途中で火を伴うような行為を行った可能性がある。この土坑からの出土遺物はなかった。位置関係や主軸方向から、この時代の遺構として位置づけている。他の時代に所属する可能性も十分ある。

### 31号土坑

31号土坑は、平坦地区の8区の遺構密集部で検出された遺構で、57号土坑、38号土坑、41号土坑と切り合う遺構である。これらの切り合っている遺構の中では最も新しい遺構である。主軸はN63°Eであり、長軸方向に2.7m、短軸方向に0.7mの長方形の形状を呈するプランである。中央

部はカクランによって削平されている。検出面から床面までの深さが15cmほどしかなく、遺物の残りも悪い。実測可能な土器として2点出土している。237と238ともに甕形土器の口縁部である。弥生中期後半から後期初頭の所産と思われる。

### 32号土坑

32号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構であり、主軸はN69°Eに向き、長軸方向に2.3m、短軸方向に0.9mの長さをもつ、長方形プランの土坑である。やや西側の辺が長い。埋土中に焼土や炭化物を多量に含むことから、火を伴うような行為を周囲で行ってそれが遺構内に入っているという産状であった。遺構内で焼いた痕跡はない。出土遺物は、実測可能な土器が2点である。239と240とともに甕形土器の口縁部であろうと思われる。239は口縁端部が鋤先状になっており肉厚である。240は、口縁部の内側に小さい突起をもち、胴部の厚さと変わらないくらいの厚さで口縁部を形成している。しゃくりの程度は小さい。弥生中期後半期の範疇である。

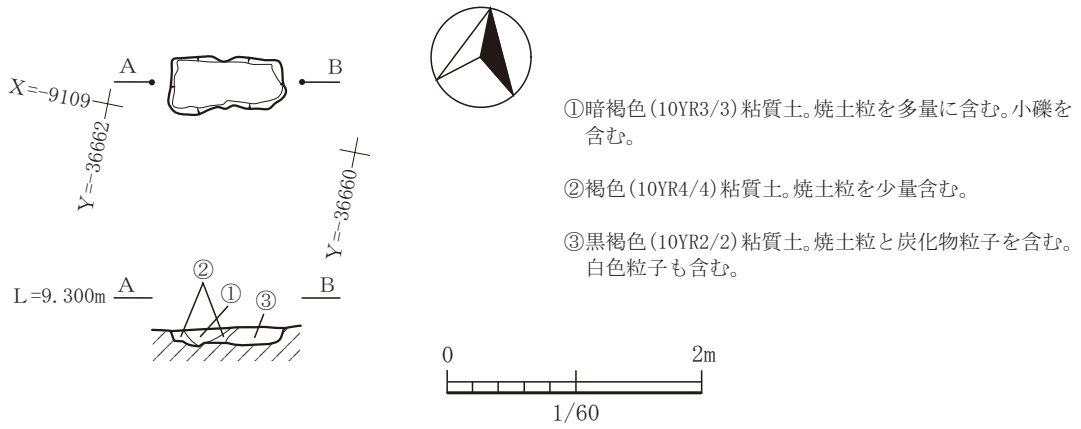


図-148 33号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

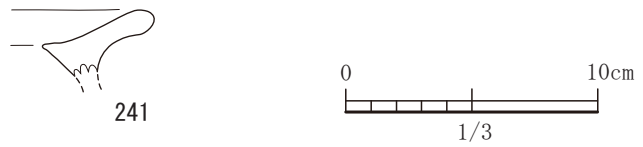


図-149 33号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

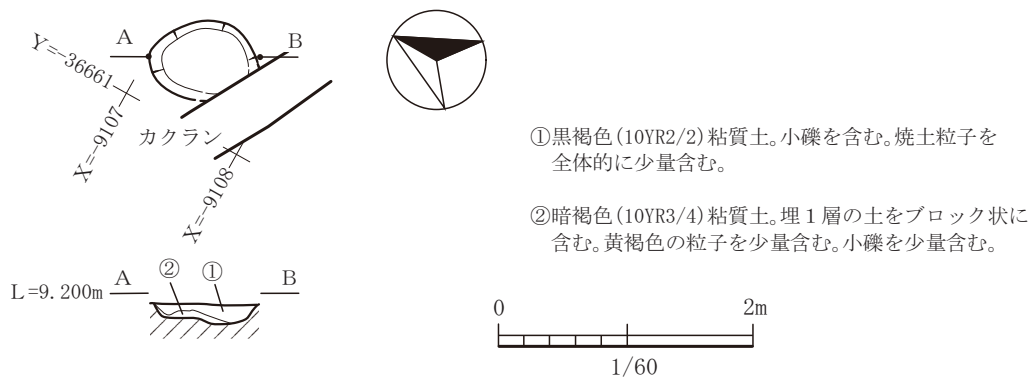


図-150 34号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

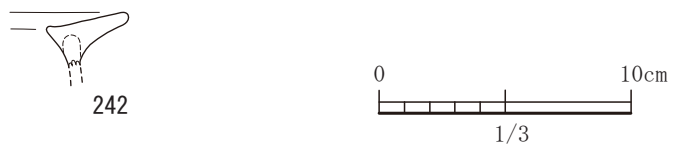


図-151 34号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

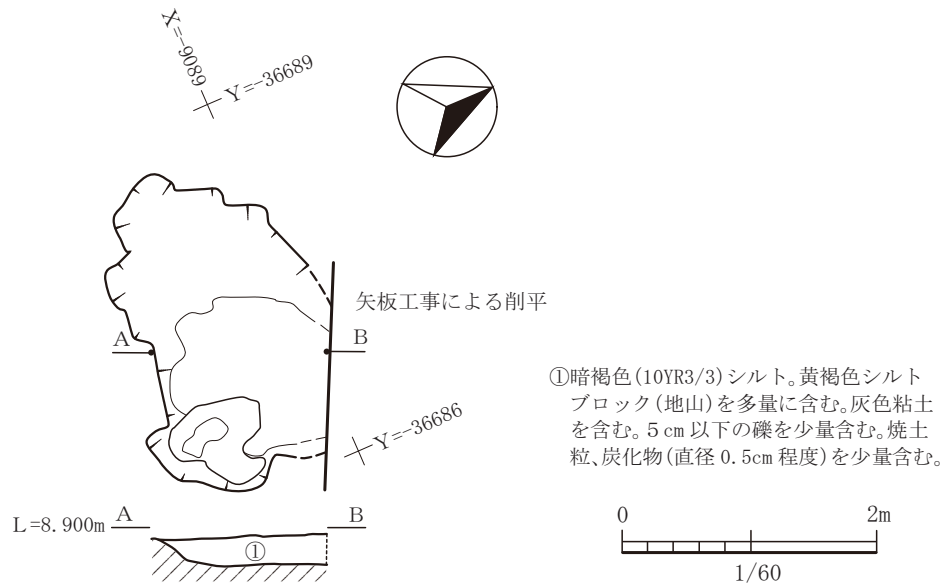


図-152 35号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

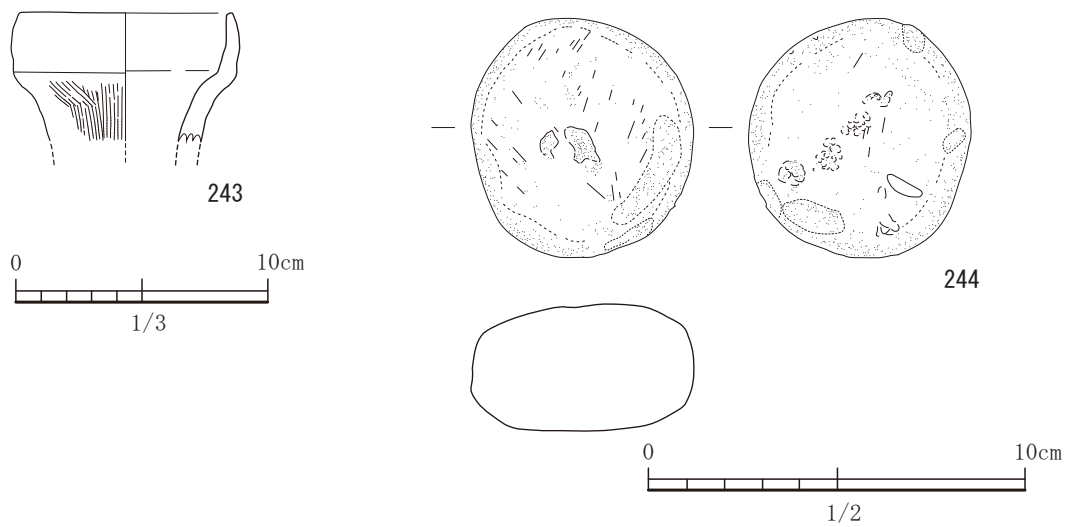


図-153 35号土坑出土遺物実測図 (S=1/3, 244 は S=1/2)

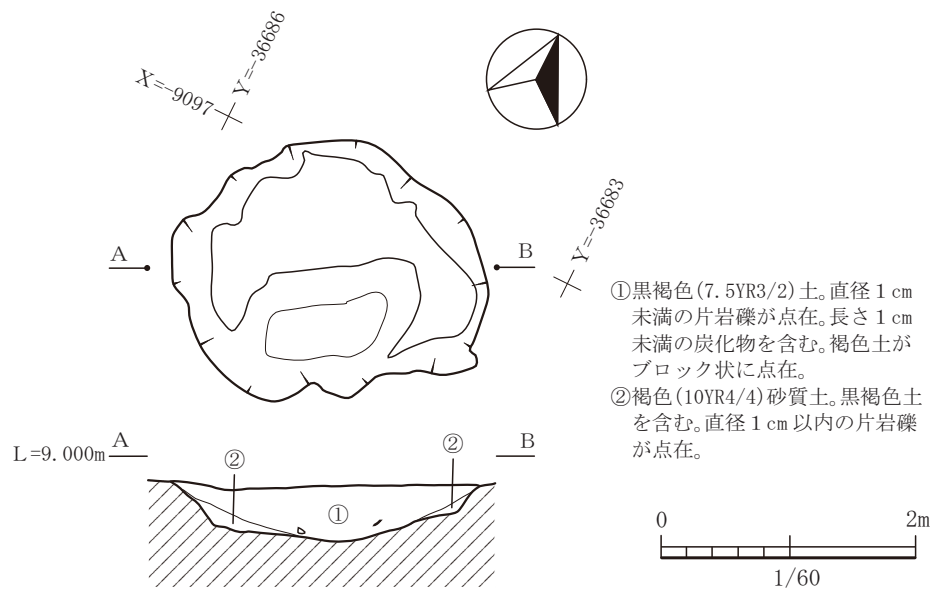


図-154 36号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

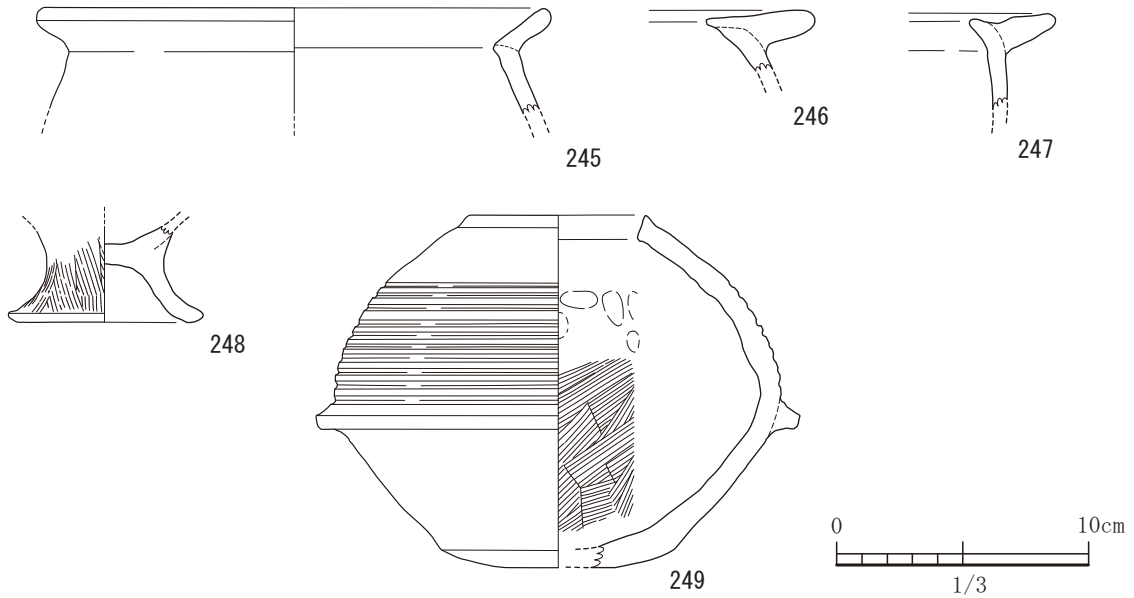


図-155 36号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

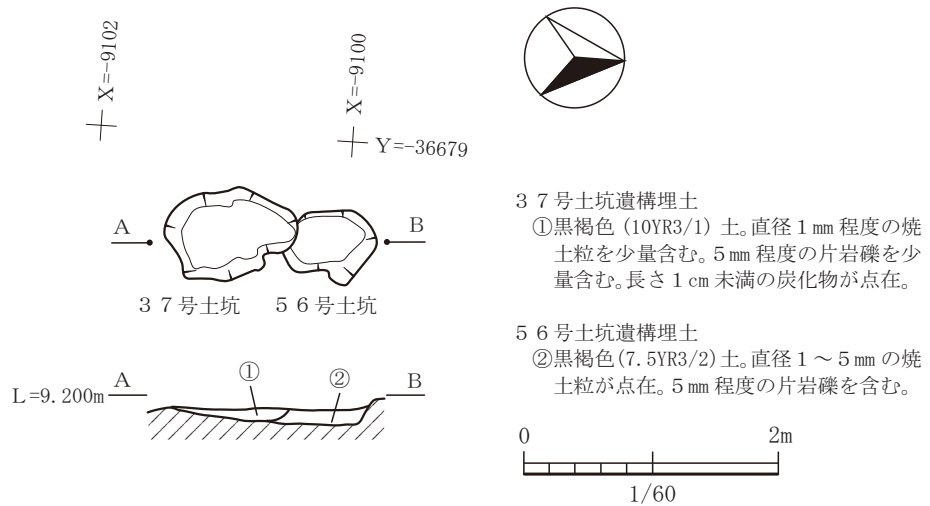


図-156 37号土坑・56号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

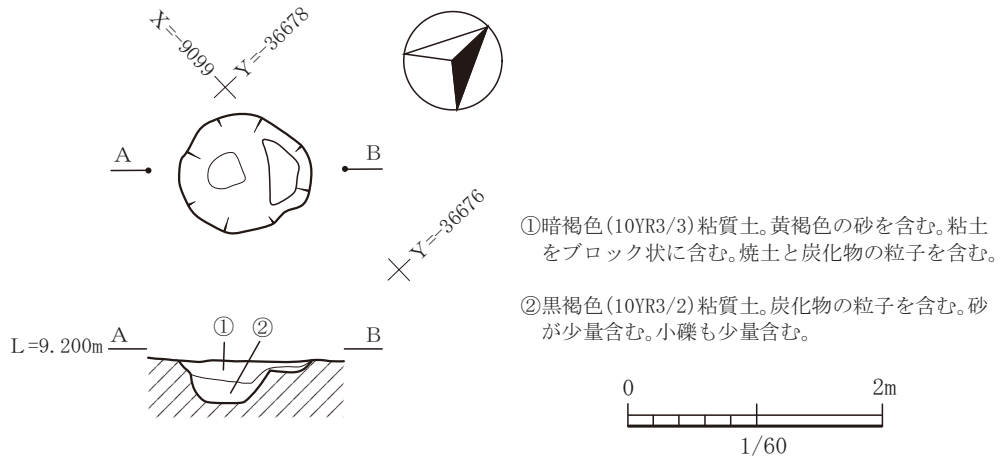


図-157 38号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)



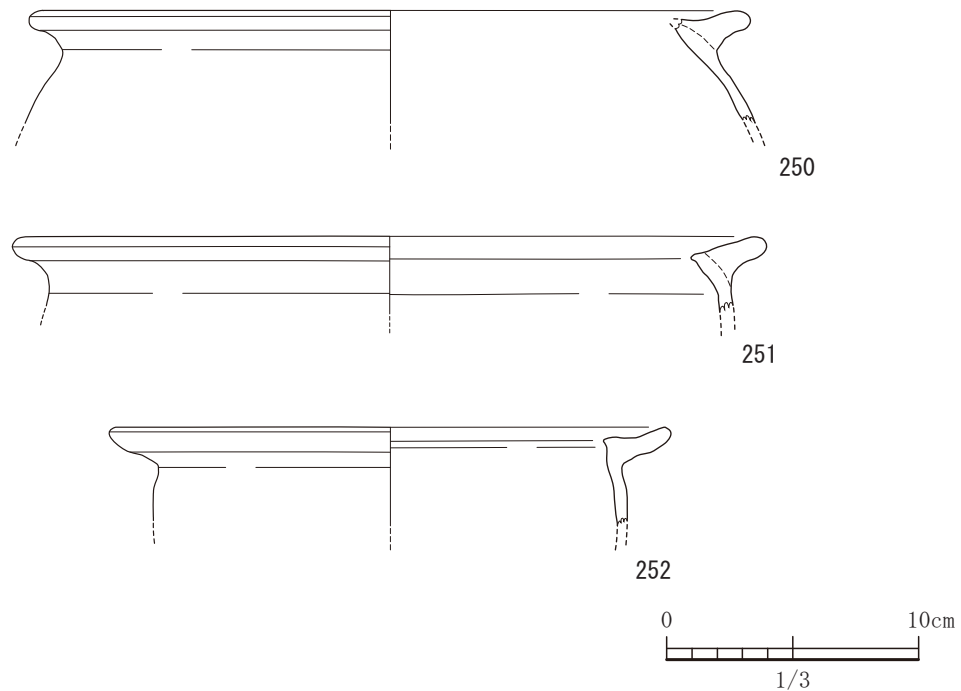


図-158 38号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

### 33号土坑

33号土坑は、平坦地区の8区単独で検出されたもので、長軸方向に0.9m、短軸方向に0.4mの長さをもつ長方形プランの遺構である。隅はやや角張る傾向にある。主軸はN87°Eにとっている。出土遺物は実測可能な遺物として、甕形土器が1点出土している。241は、口縁部の内側に細い突起をもち、口縁端部はやや膨らみをもち丸みを帯びている。弥生後期前半期の様相を呈している。

### 34号土坑

34号土坑は、平坦地区の8区で単独で土坑が集中する地域から検出された遺構である。主軸はN33°Wで、長軸方向に0.9m、短軸方向に0.7mの楕円形を呈したプランである。南西側はカクランによって壊されている。埋土中に少量の焼土を含むが目立った火の使用痕はない。床面は平坦である。出土遺物は、実測可能なものとして、242の甕形土器の口縁部の1点のみである。埋1層から出土している。

弥生中期後半から後期初頭の範疇であろう。

### 35号土坑

35号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構である。遺構の北東部は矢板工事のため未調査になった箇所である。形状的には、いびつな楕円形を呈しており、長軸方向に2.6m、短軸方向に

1.8mを測る。東側に平坦な床をもち、西側は緩やかに立ち上がる。また南側には凹地が認められる。埋土中に少量の焼土や炭化物が認められるが、目立った火の使用痕は認められない。実測可能な出土遺物は、埋土中の①より、土器と石器が1点ずつである。243は、袋状口縁壺の頸部から口縁部にかけてのものである。口縁部は内側への傾きが小さい。外面に赤色顔料痕が認められる。頸部以下の破片も確認されない。表面が磨滅していることから、流れ込みの可能性が高い。244は、輝石安山岩製の磨石である。敲打痕も一部見受けられる。弥生中期後半期であろうと考えられる。

### 36号土坑

36号土坑は、平坦地区の8区で検出された遺構で、16号住居、59号土坑と切り合っている。16号住居の解説で記載しているとおり、正しく検出できず新旧逆転して調査を行った遺構である。長軸方向が2.6m、短軸方向が2.2mの楕円形のプランの土坑である。南側にやや窪んだ部分がある。中央より北側は平坦な形状を呈す。出土遺物は、実測可能な土器が5点出土している。245から247まで甕形土器の口縁部である。245は、頸部で「く」の字に屈曲する。246は、口縁部の内側に小さい突起をもち口縁部は平坦である。247も口縁部の内側に細い

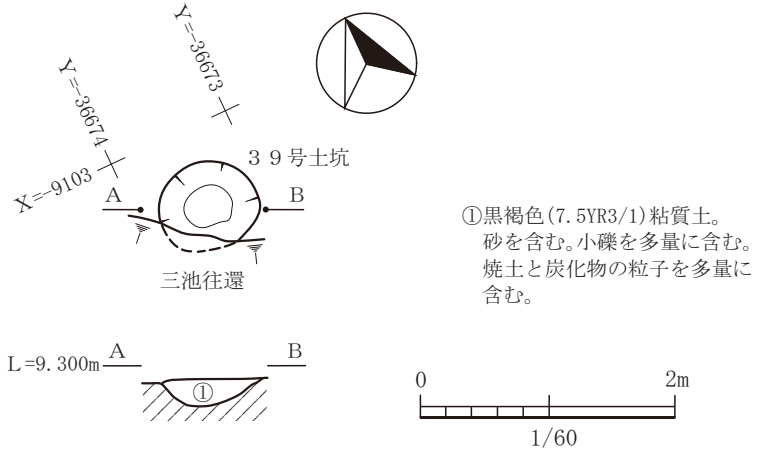


図-159 39号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

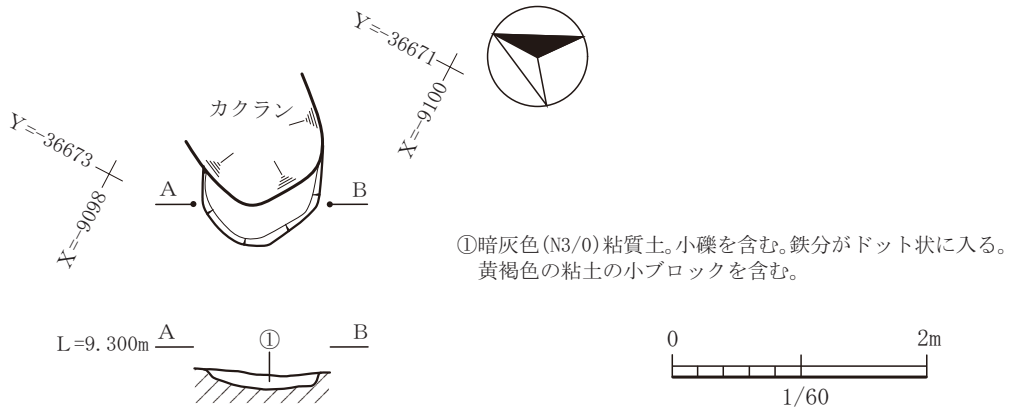


図-160 40号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

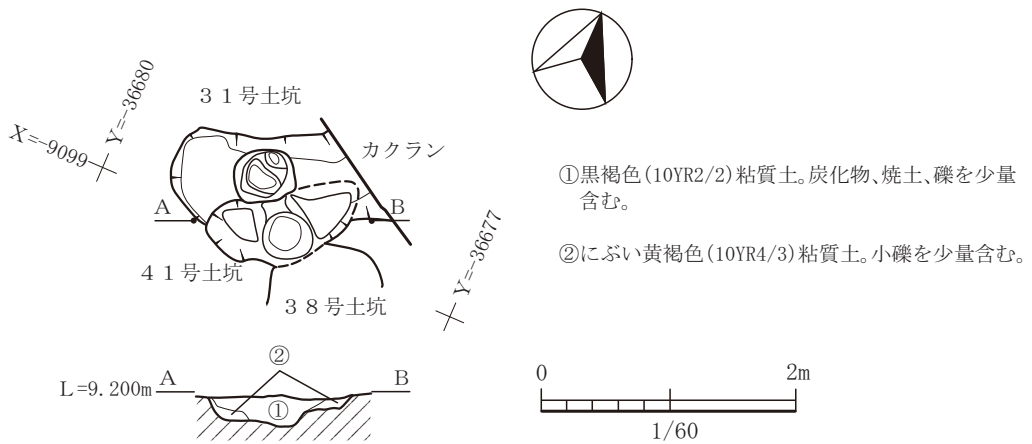


図-161 41号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

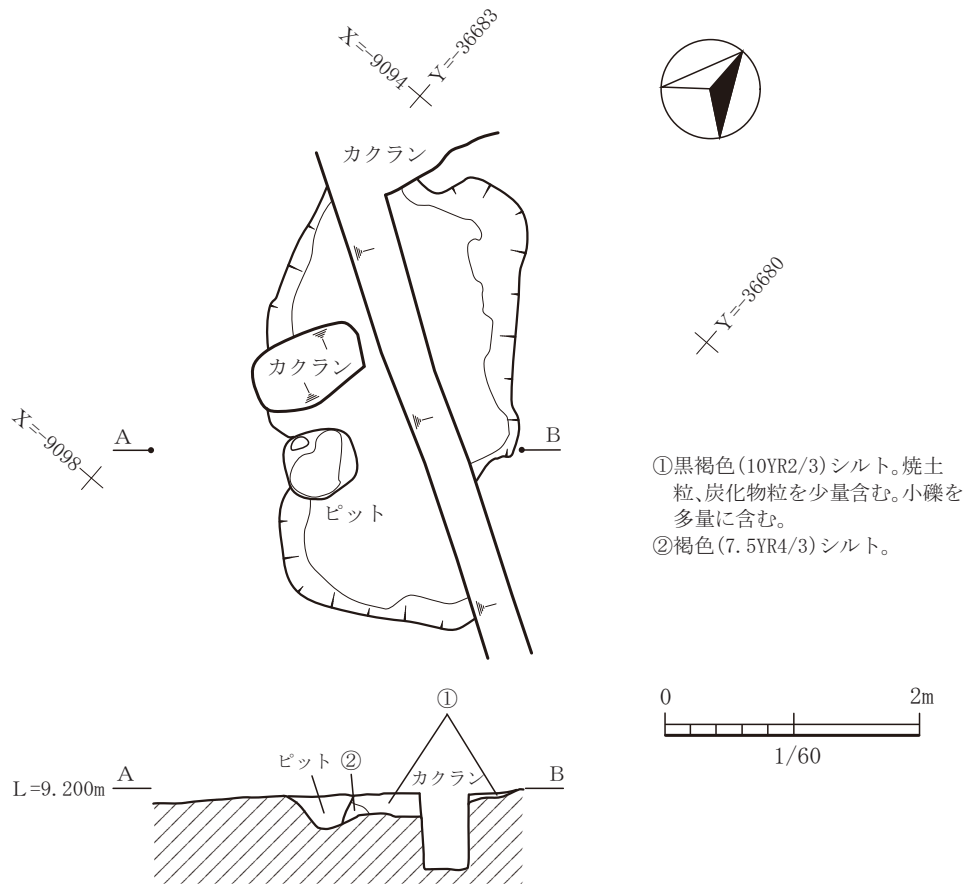


図-162 42号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

突起をもち、口縁部の中央をやや窪ませながら外側に伸ばしている。248は台付甕の底部から脚部にかけてのものである。底部は平底で脚部はラッパ状に広がり器壁はやや肉厚である。249は、無頸壺である。最大胴部に1条の突帯をめぐらす。その突帯の上には10条の沈線を平行にめぐらしている。内面にはハケ目調整を施し、上半部に指頭圧痕が残る。外面は丁寧なナデ調整である。246と247を除くと弥生後期前半期の様相を呈する。246と247は口縁部破片であり流れ込みの可能性も否定できない。

### 37号土坑

37号土坑は、平坦地区の8区で、15号住居、56号土坑と切り合って検出された遺構である。切り合い関係では15号住居より古く56号土坑よりは新しい。長軸方向に1.1m、短軸方向に0.7mの楕円形を呈したプランである。出土遺物はない。

### 56号土坑

56号土坑は、37号土坑、15号住居と切り

合っている遺構である。主軸はN9°Eであり、長軸方向に0.8m、短軸方向に0.5mのややいびつな楕円形を呈する。床面は平坦である。切り合っている37号土坑とともに出土遺物はない。時代は不明であるが、切り合い関係から、少なくとも弥生中期後半、もしくはそれより古いことは言えそうである。

### 38号土坑

38号土坑は、41号土坑、15号住居と切り合っている遺構である。41号土坑よりは新しく、15号住居よりは古い。主軸はN41°Eにとり、主軸方向に1.1m、短軸方向に0.9mを測り、平面形状ではほぼ円形を呈する遺構である。主軸方向である北東側に平坦なテラスが認められる。埋土は2層あり、ともに焼土や炭化物が認められるものの火を使った痕跡は認められない。出土遺物は、実測可能な土器が3点である。250は、口縁部は内側に突起を作り出しているようであるが、欠損しており詳細は不明。口縁部は器壁と比して肉厚である。251は、

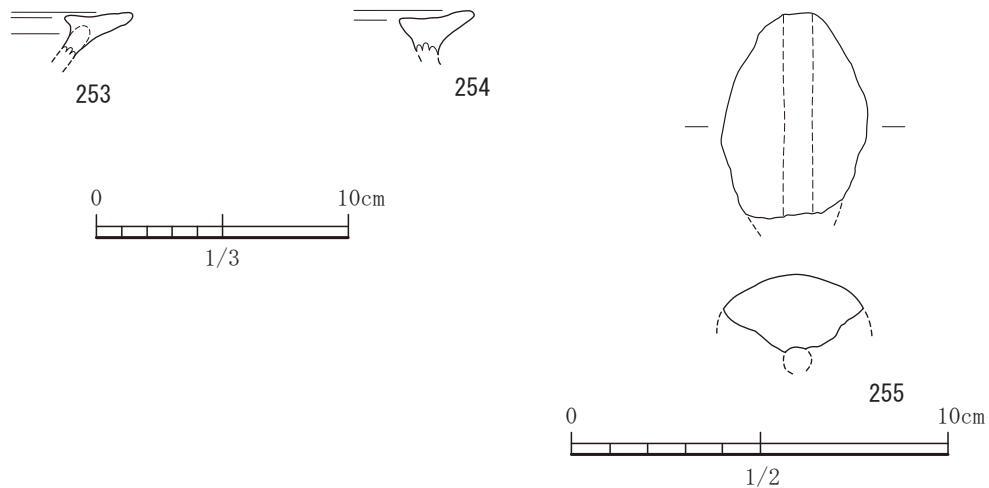


図-163 42号土坑出土遺物実測図 (S=1/3, 255はS=1/2)

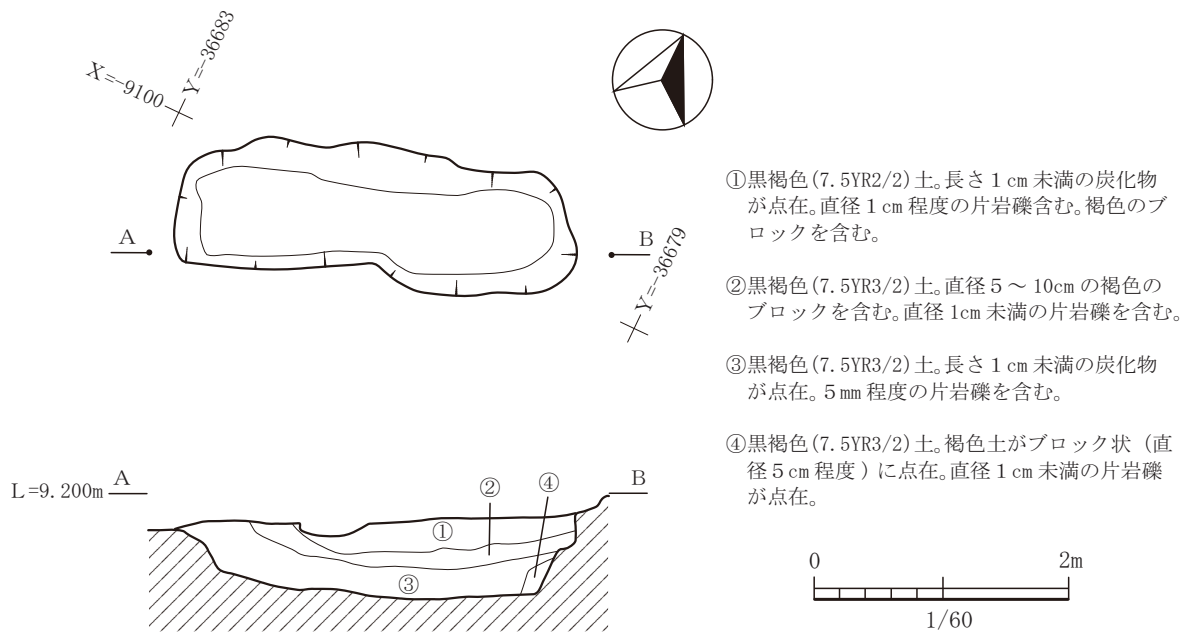


図-164 43号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

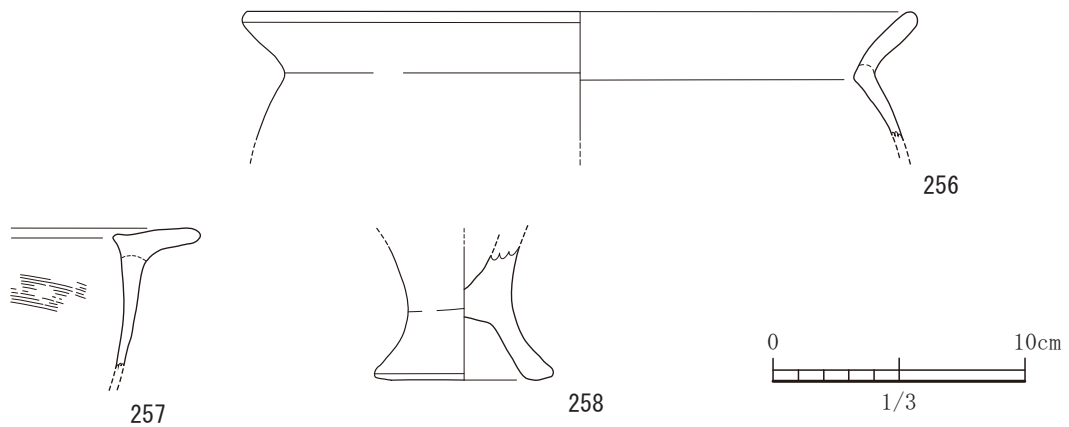


図-165 43号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)



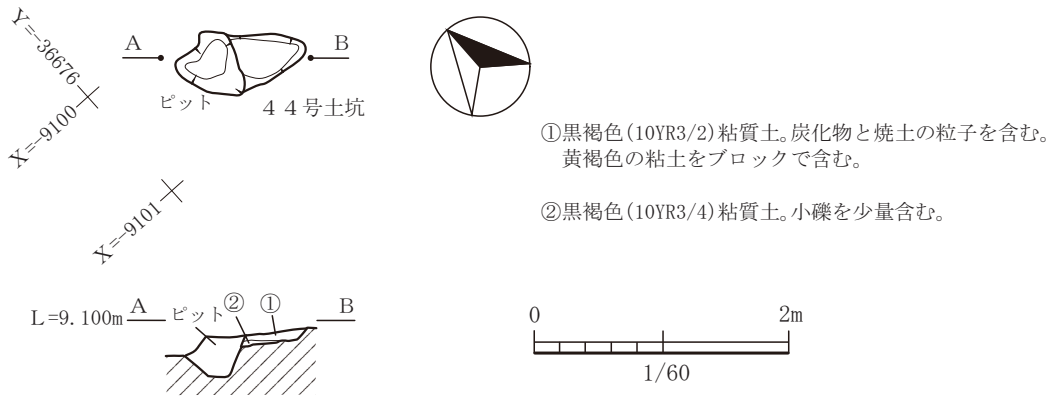


図-166 44号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)



図-167 44号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

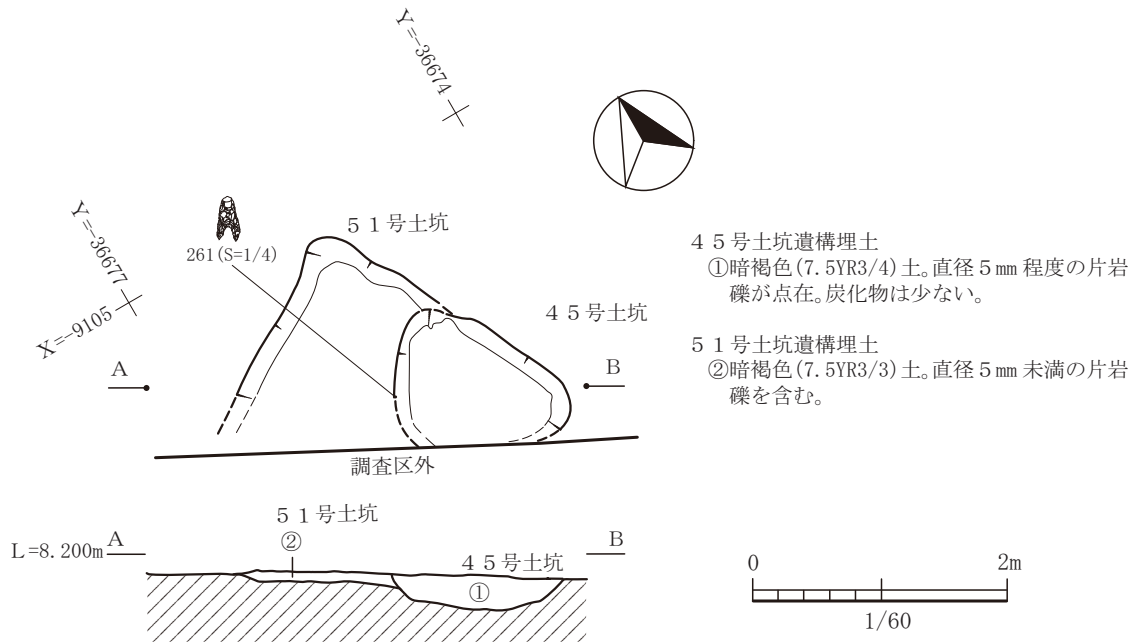


図-168 45号土坑・51号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

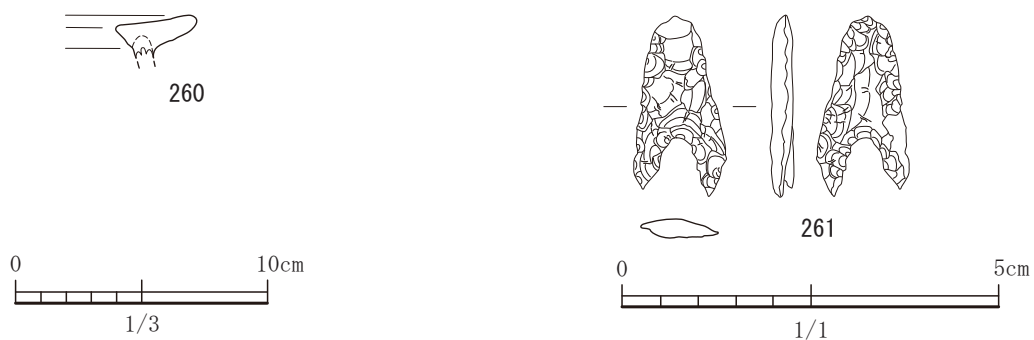


図-169 45号土坑出土遺物実測図 (S=1/3, 261はS=1/1)

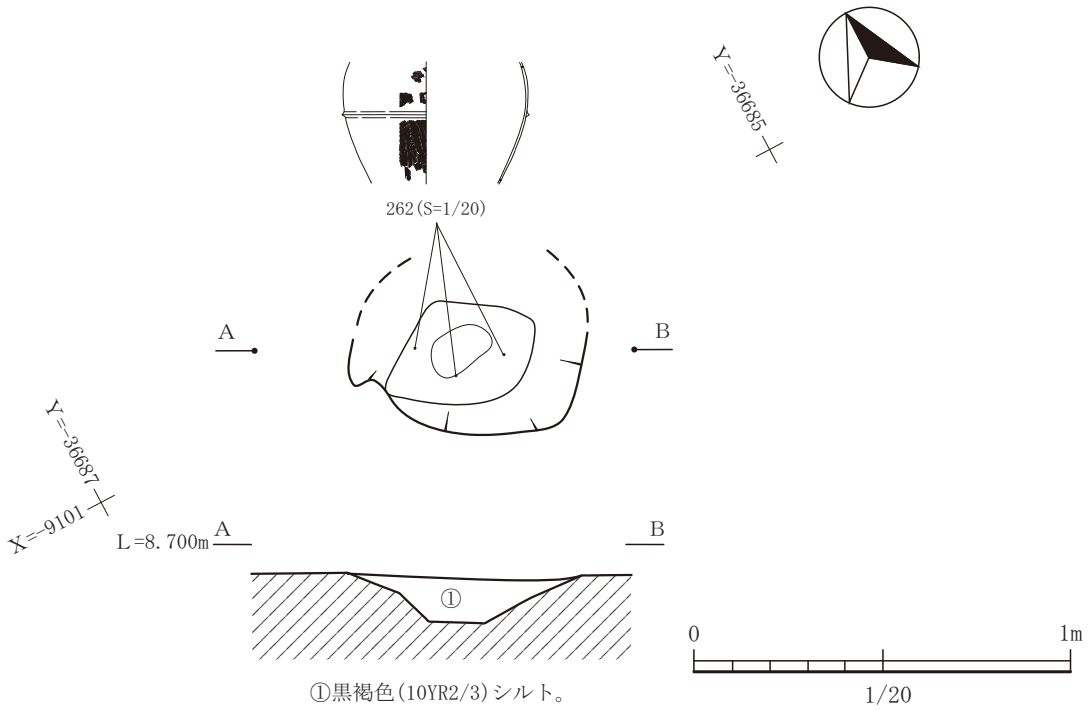


図-170 46号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

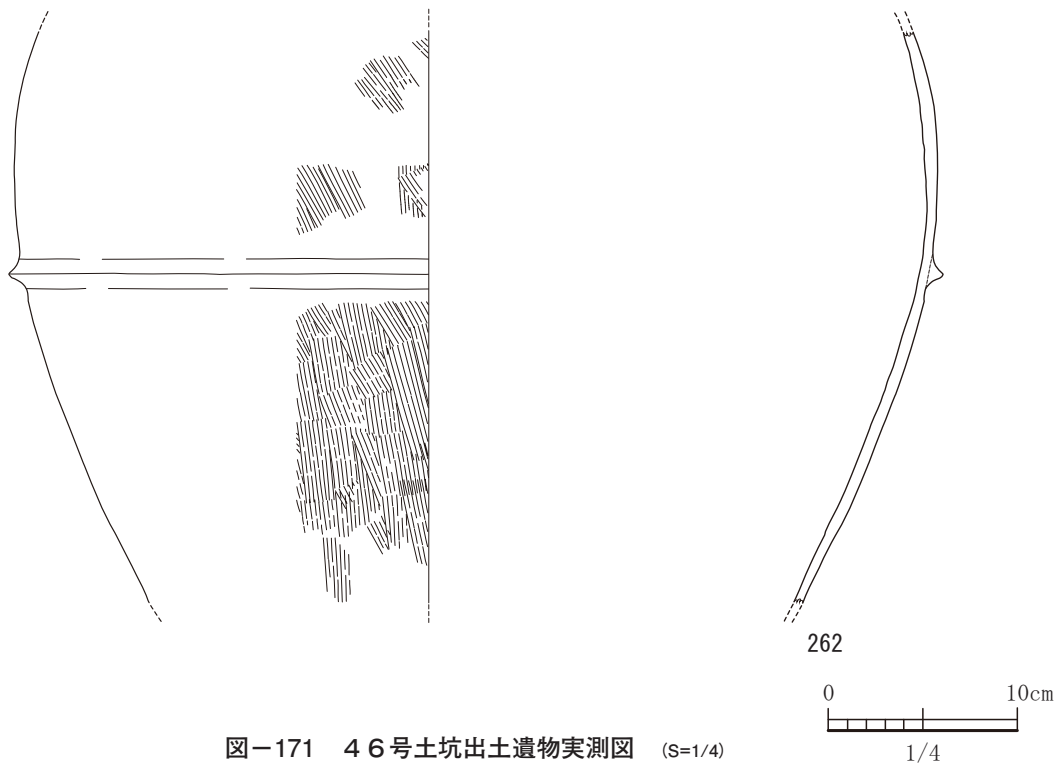


図-171 46号土坑出土遺物実測図 (S=1/4)

口縁部は平縁であるが、やや立てながら口縁を作りだしている。252は、口縁部は平縁であるが、内側への突起はつまみ出す程度であり小さい。弥生中期

後半から後期初頭の範疇であろうと考えられる。

**39号土坑**

39号土坑は、平坦地区の8区で検出された遺構で

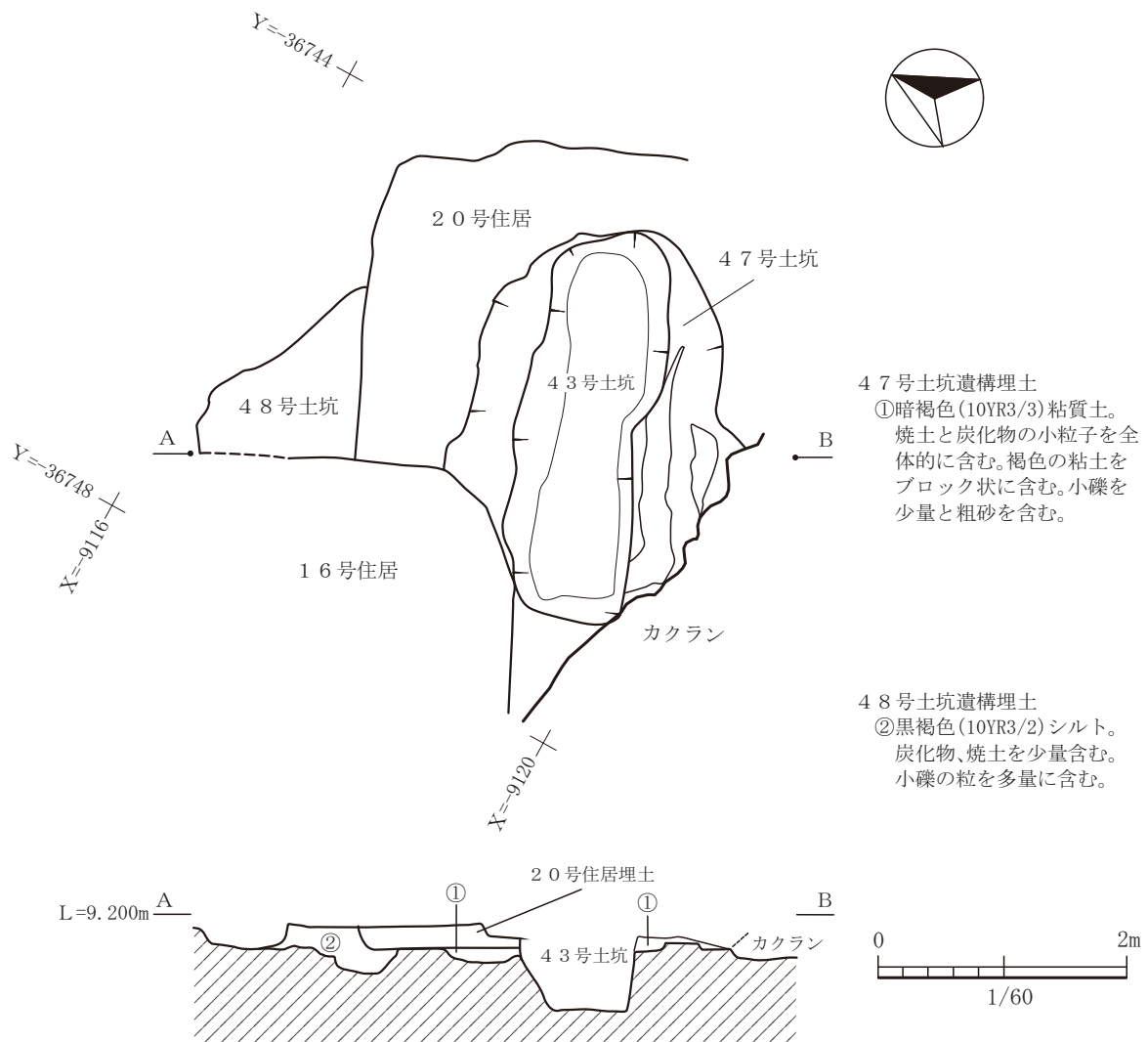


図-172 47号土坑・48号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

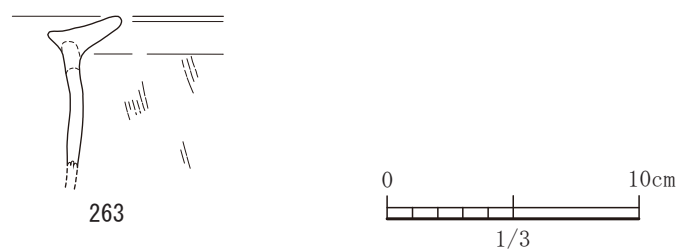


図-173 47号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

ある。南側は道路状遺構である三池往還によって削平を受けている。平面形状は、直径約0.8mの円形を呈する。検出面から床面までの深さは約20cmあったが出土遺物は、弥生土器の破片のみで詳細な時期は不明である。

#### 40号土坑

40号土坑は、17号住居のほぼ中央部で検出さ

れた遺構である。東側はカクランによって削平され詳細の形状等は不明である。おそらく直径0.94mほどの円形プランの土坑と考えられる。埋土中には炭化物や焼土は全く含まれない。17号住居のほぼ中央に位置していたので、炉ではないかと考えていたが、火を使った痕跡がないため、炉としては認められない。出土遺物はない。残念ながら、埋土中で検

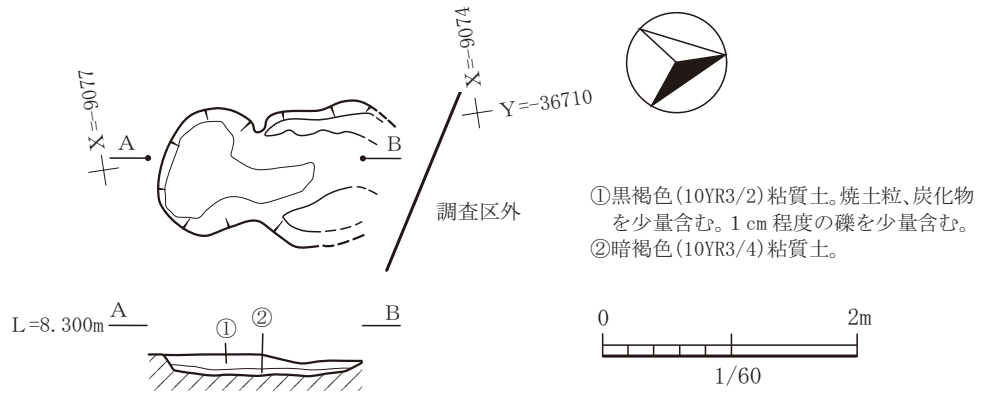


図-174 49号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

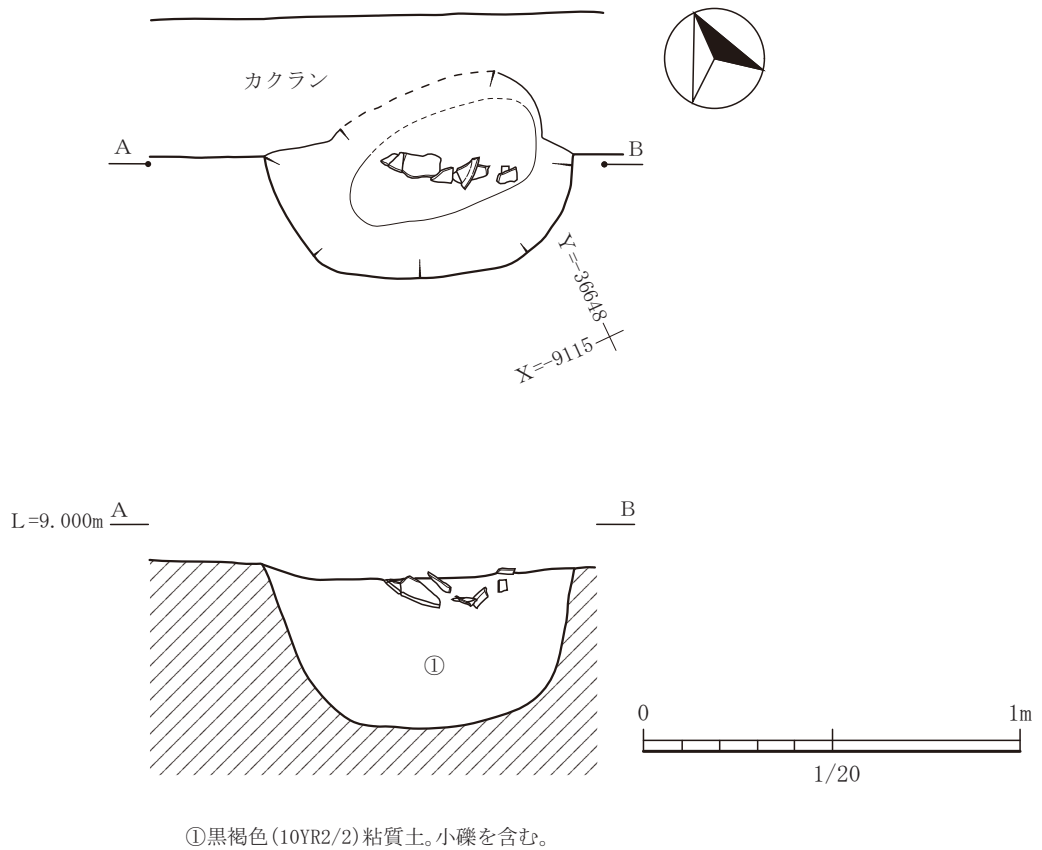


図-175 50号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

出できなかったため、明らかに新しいとは言えないところがあり、17号住居の付帯設備である可能性もある。

#### 41号土坑

41号土坑は、38号土坑、31号土坑と切り合っている遺構であり、両者より古い遺構であ

る。主軸N51°Eで、長軸方向に1.2m、短軸方向に0.5mの楕円形のプランである。中央にピットがあり両側はテラスをもつ。出土遺物はない。詳細な時代は不明である。

#### 42号土坑

42号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出され

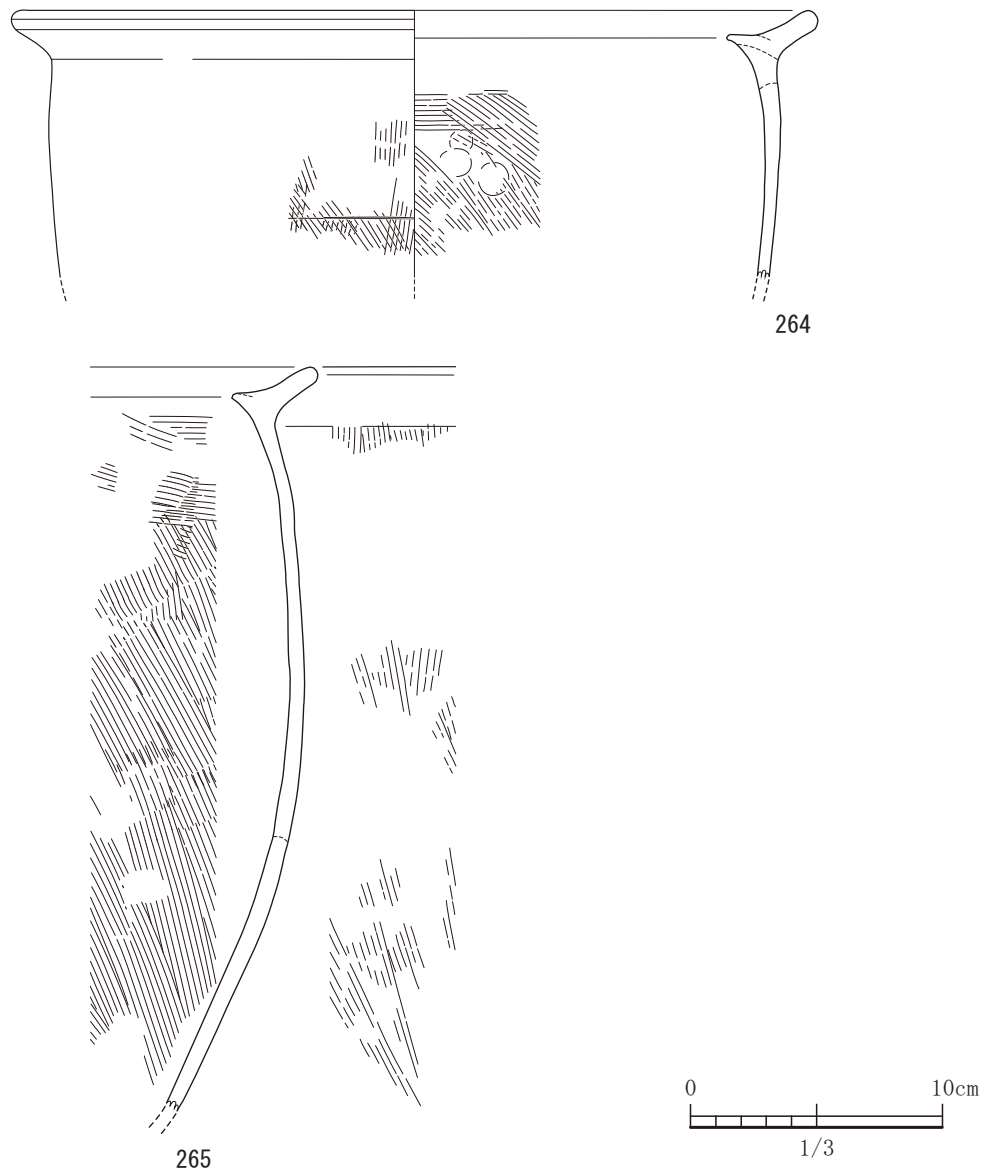


図-176 50号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

た遺構である。遺構を縦断するようにカクランがあり、南側には後世のピットが認められる。主軸はN33°Wで、長軸方向に3.6m、短軸方向に2.0mを測る。平面形状では、長方形プランである。出土遺物で実測可能な土器が3点出土している。253は平縁の口縁部をもつ鉢形土器か壺形土器と思われる。254は口縁部の内側に小さい突起をもち、平縁になっており中央はやや窪む。255は、土錘である。

#### 43号土坑

43号土坑は、20号住居、47号土坑より新しい。16号住居と接しているが新旧関係をとらえることができなかった。N68°Eに主軸をとり、長軸

方向に3.2m、短軸方向に1.1mを測る。出土遺物は実測可能な土器が3点である。256は口縁部が「く」の字に屈曲し、やや外反ぎみである。257は口縁部が平縁の甕形土器であろう。258は台付甕の脚部であり短い。弥生中期後半から後期初頭期の範疇であろう。

#### 44号土坑

44号土坑は、平坦地区の8区で15号住居と切り合って検出された遺構で、15号住居よりは古い。住居の床面で検出された。北西側にはピットやカクランによって、削平され不明である。主軸はN58°Wで、平面形状は楕円形と思われるが詳細は



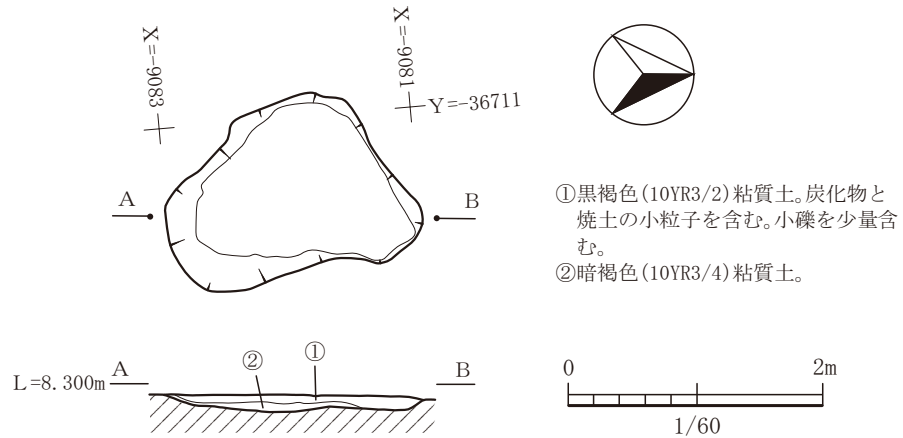


図-177 52号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

不明である。出土遺物は、接合可能な土器が1点のみである。259は、平縁の口縁部であり、内側に突起を設ける。弥生中期後半から後期初頭期であろうと考えられる。

**45号土坑**

45号土坑は、平坦地区の8区で51号土坑と切り合って検出された遺構である。51号土坑より新しい遺構である。南側は木葉川の河川工事によって破壊されており詳細は不明である。残存する部分からおそらく楕円形を呈する。長軸方向で1.5m程ありそうである。出土遺物は、土器が1点、石器が1点である。260は、口縁部が平縁であり、内側に突起をもつ。261は、打製石鏃である。凹基無茎鏃で平面形は五角形である。時代は弥生中期後半から後期初頭期であろう。

**51号土坑**

51号土坑は、45号土坑と切り合って検出された遺構である。南側は大きく河川工事で削平を受け詳細は不明である。51号土坑は、8cmほどしかなく遺物は出土しなかった。少なくとも弥生中期後半から後期初頭と同時期、もしくは古い時期となる。詳細は不明である。

**46号土坑**

46号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構である。直径約0.6mのほぼ円形のプランである。実測可能な土器は、262の1点のみである。262は、最大胴部のやや下側に1条の突帯文がめぐっている。内面は、かなり剥落している。外面には赤色顔料痕が残っている。外面はハケ目調整であ

るが、内面は剥落が激しく不明。出土したのは、胴部の一部の出土である。内面の剥落の状況や赤色顔料痕が残っていることから、甕棺であった可能性がある。ただし、本遺構は甕棺墓ではないと思われる。埋土も埋め戻したような土が混濁した状況ではない。

**47号土坑**

47号土坑は、平坦地区の8区で20号住居、16号住居、43号土坑と切り合っている遺構である。切り合っている遺構よりは古い。N71°Eに主軸をもち、長方形のプランである。47号土坑は、20号住居の床面で検出されたものであり、埋土は約10cm残っていた。出土遺物は、実測可能な遺物として、263が出土している。263は、口縁部の内側に小さい突起をもち、中央に窪みを持たせた平縁である。外面にハケ目調整が残存しているが、磨減が激しく、一部に見られるのみである。弥生中期後半から後期初頭の範疇である。

**48号土坑**

48号土坑は、16号住居と20号住居と切り合っている遺構である。2軒の住居跡よりは古い。48号土坑の平面形状は、他の遺構により削平を受け、詳細は不明である。出土遺物はなく、詳細な時期は不明であるが、少なくとも弥生中期後半から後期初頭期と同じ時期か古い時代のものと考えられる。住居のコーナー（住居跡の堅穴の隅）のように見えるところもあり、22号住居の北西方向のコーナーである可能性がある。埋土の色調として同じ黒褐色を呈しており焼土や炭化物も少ないことから、その可能性も否めない。

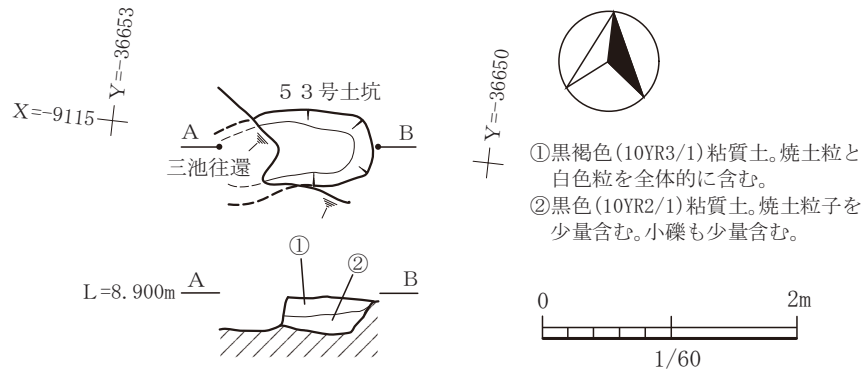


図-178 53号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

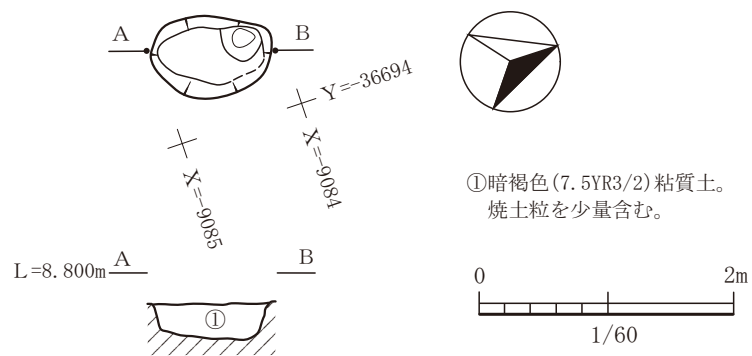


図-179 54号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

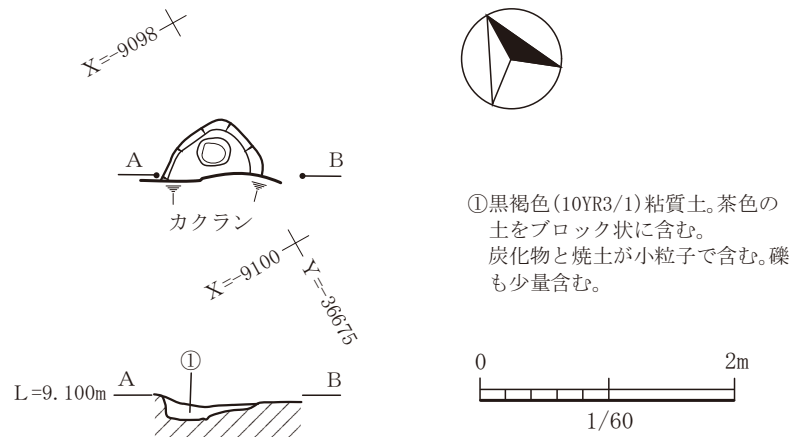


図-180 55号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

#### 49号土坑

49号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構である。仮設道路設置のため調査ができなかった部分に北側が一部かかっているため、詳細は

不明である。N7°E方向に主軸をもち、住居跡の軸方向にほぼ一致する。長軸方向の長さはわからないが、短軸方向は約1.1mの長方形を呈する平面形状をもつ。床面はほぼ平坦な形状を呈しており、埋

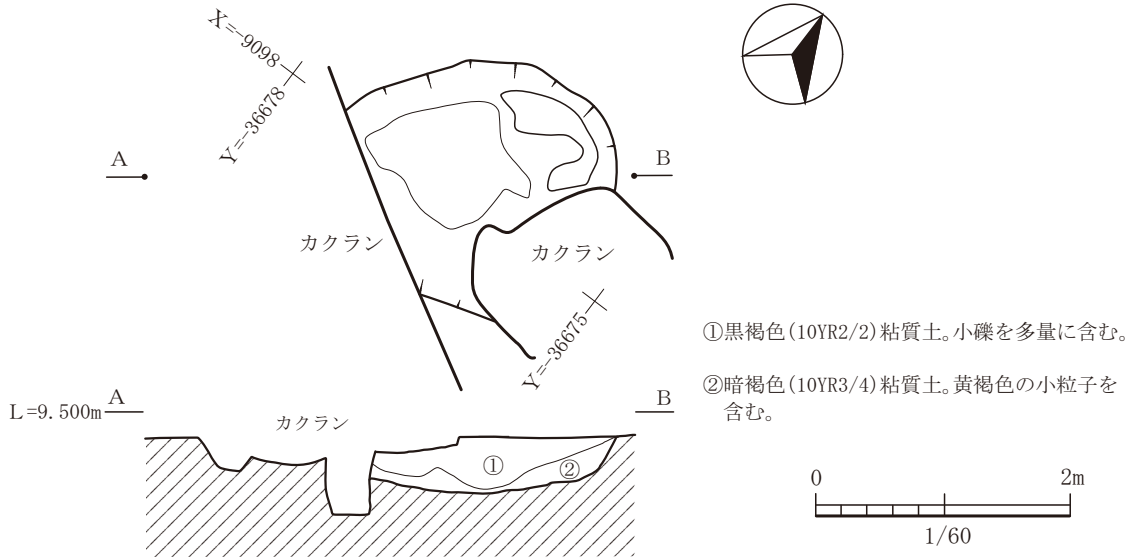


図-181 57号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

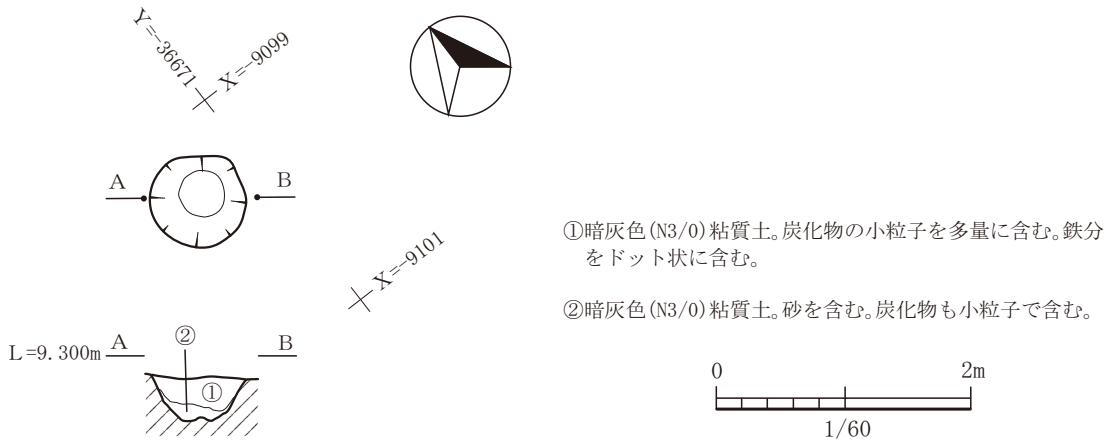


図-182 58号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

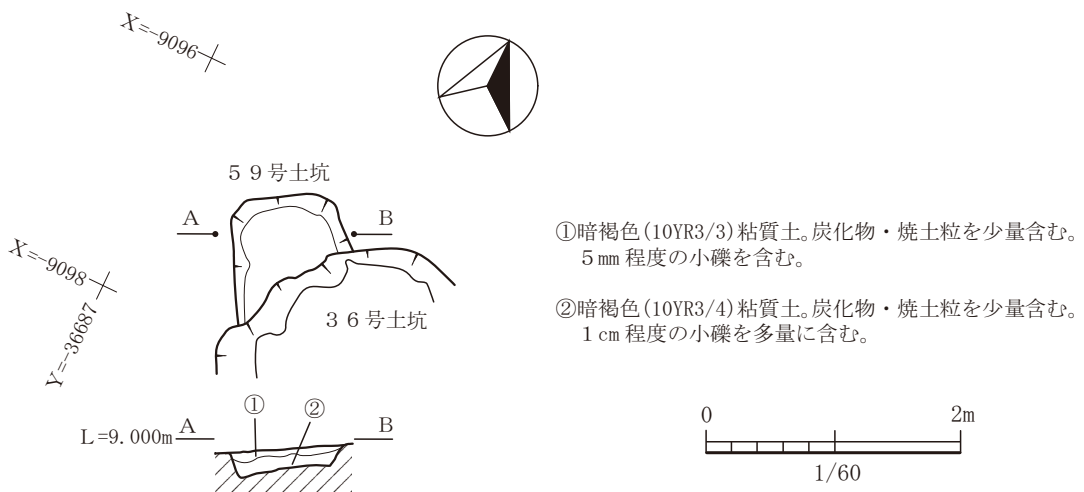


図-183 59号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

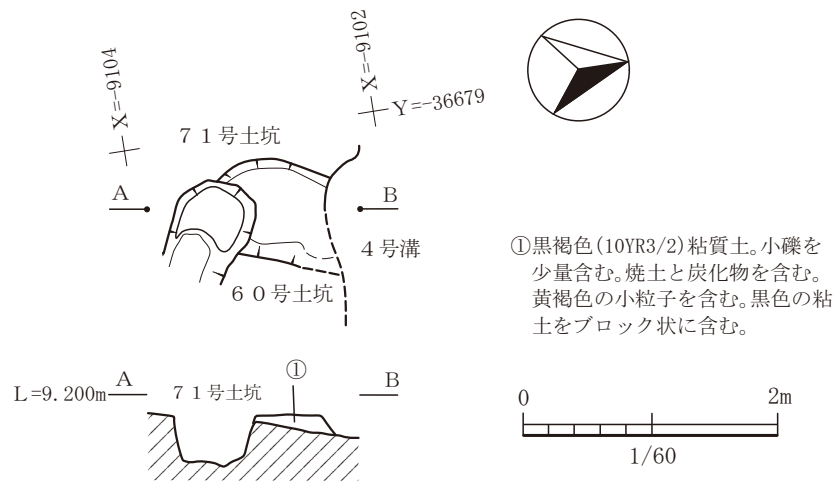


図-184 60号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

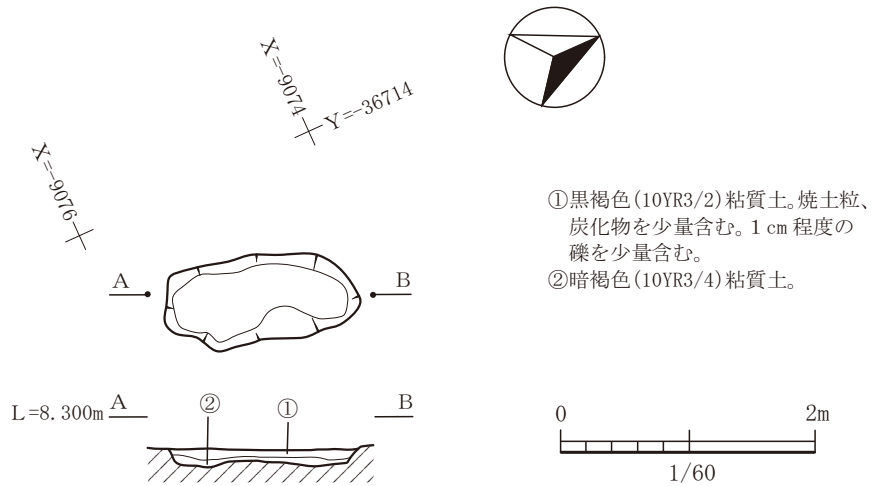


図-185 61号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

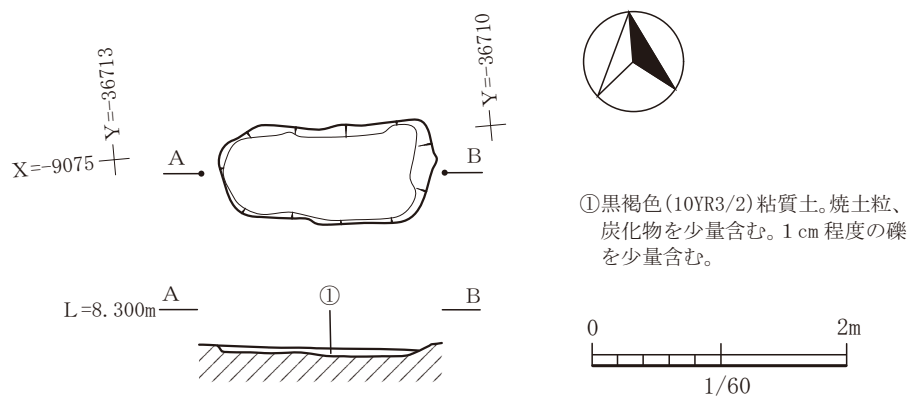


図-186 62号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

土は2層認められ焼土等の火を使った痕跡は認められない。出土遺物がないため、詳細な時期は不明である。

### 50号土坑

50号土坑は、13号甕棺墓と接するように検出された遺構である。北半部はカクランによって上半

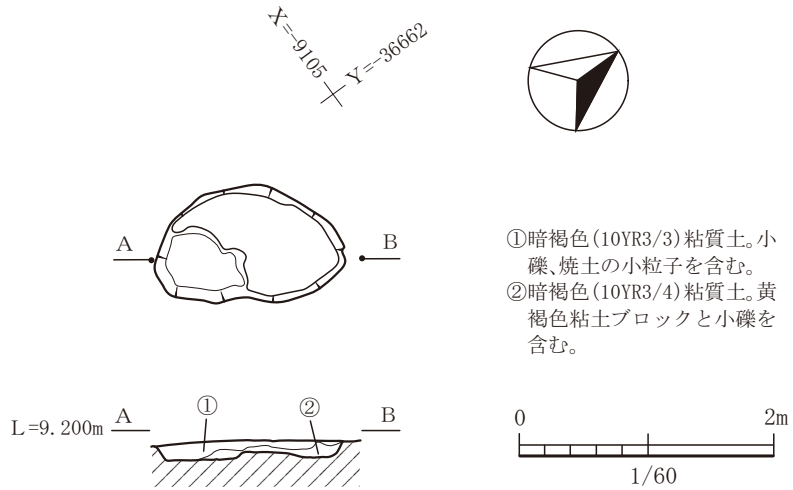


図-187 63号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

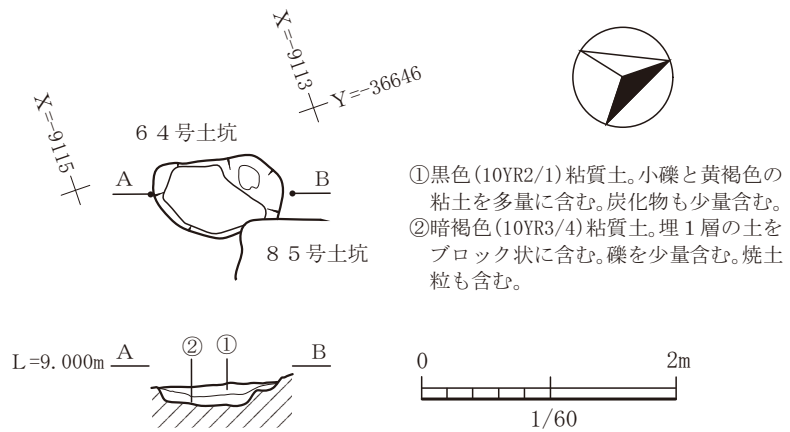


図-188 64号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

部が削平を受けている。主軸はN52°Wであり、周辺の甕棺墓の主軸と似ている。埋土の深さも検出面からの深さは40cmを超えている。この周辺の遺構の中では、甕棺墓並みの深さをもつ。ただし、遺物の出土状況としては、埋土は1層であるが、この層の上部にまとまって甕形土器が出土した。264と265は、ともに甕形土器であり、内外面ともハケ目調整である。口縁部は内側に突起をもち平縁の口縁部である。265の胴部にはやや赤色顔料と思われる顔料が付着していた。弥生中期後半から後期初頭期の範疇と言える。

### 52号土坑

52号土坑は、平坦地区の8区の西側で単独で検出された遺構である。平面形状では隅丸の三角形を

呈する。床面は平坦な形状であり、埋土は13cmほど残存していた。この遺構からの出土遺物は、弥生土器の破片しかなく詳細な時期決定はできない。

### 53号土坑

53号土坑は、平坦地区の8区で検出された単独で検出された遺構である。甕棺墓が配置される弥生中期後半期の墓域周辺にあり、30号、32号、33号土坑と主軸方向を同じくする長方形プランの土坑で、同じ時期であるとするならば、33号土坑が弥生後期前半期の土坑である可能性が高いと思われる。西半分は、後世の遺構によって壊されているため詳細は不明である。遺構配置から土坑墓の可能性が高いかもしれない。



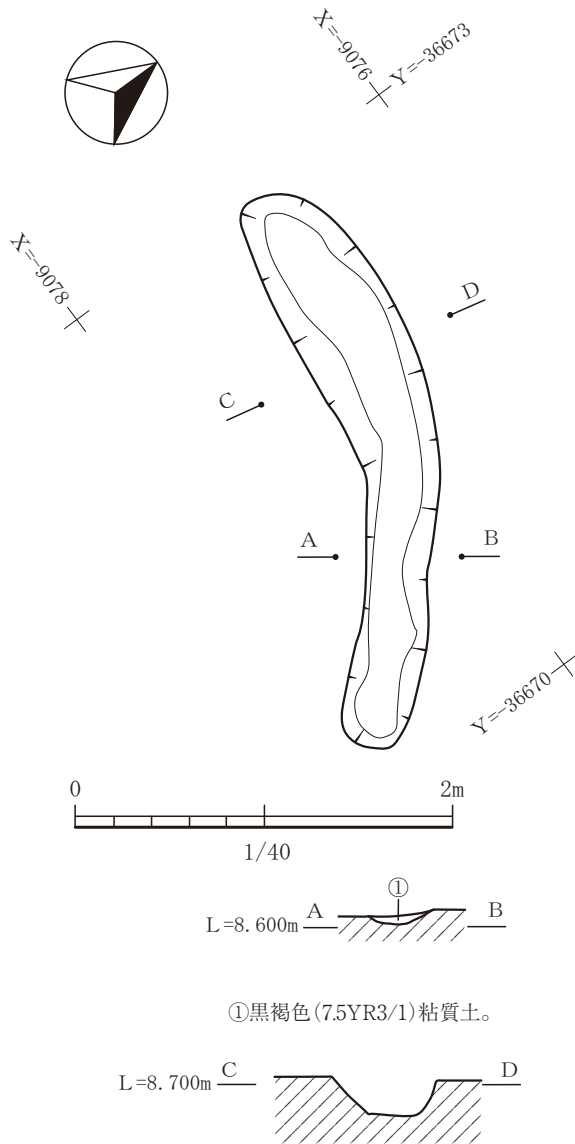


図-189 1号溝平面図及び断面図 (縮尺 1/40)

#### 54号土坑

54号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構で、主軸を北にもつ。平面形状は、長軸方向に1.0m、短軸方向に0.7mを測る。西側壁に浅い凹地が認められる。出土遺物は弥生土器の破片のみで詳細な時期は不明。

#### 55号土坑

55号土坑は、15号住居の北東のコーナー付近で検出された遺構である。15号住居の床面で検出されており、弥生中期後半から後期初頭期と同じ時期か、もしくはそれより古い時期となる。弥生土器の破片のみの出土であり、詳細時期は不明である。南側のプランは削平を受け、わからない。

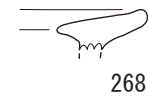


図-190 1号溝出土遺物実測図 (すべて S=1/3)

#### 57号土坑

57号土坑は、平坦地区の8区で、17号住居と31号土坑と切り合って検出された遺構で、両者より新しい。南側はカクランによって削平を受けている。主軸はN35°Eである。長軸と短軸の長さは不明である。出土遺物はなく、時代は不明であるが、弥生中期後半から後期初頭期と同時期か、それより古い遺構である。

#### 58号土坑

58号土坑は、17号住居と切り合って検出された遺構で、床面からの検出である。58号土坑は、17号住居の埋土中からは検出されていない。よって17号住居よりは古いか、17号住居の付帯設備である。ただ、出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。付帯設備である決定的な根拠がない。58号土坑の埋土の検出面では硬化面も認められない。

#### 59号土坑

59号土坑は、平坦地区の8区で検出され、36号土坑と切り合っている遺構である。出土遺物はない。36号土坑は弥生後期前半期の所産であるため、これと同時期かそれより古い。主軸はN32°Wで長方形プランである。同じプランの弥生中期後半から

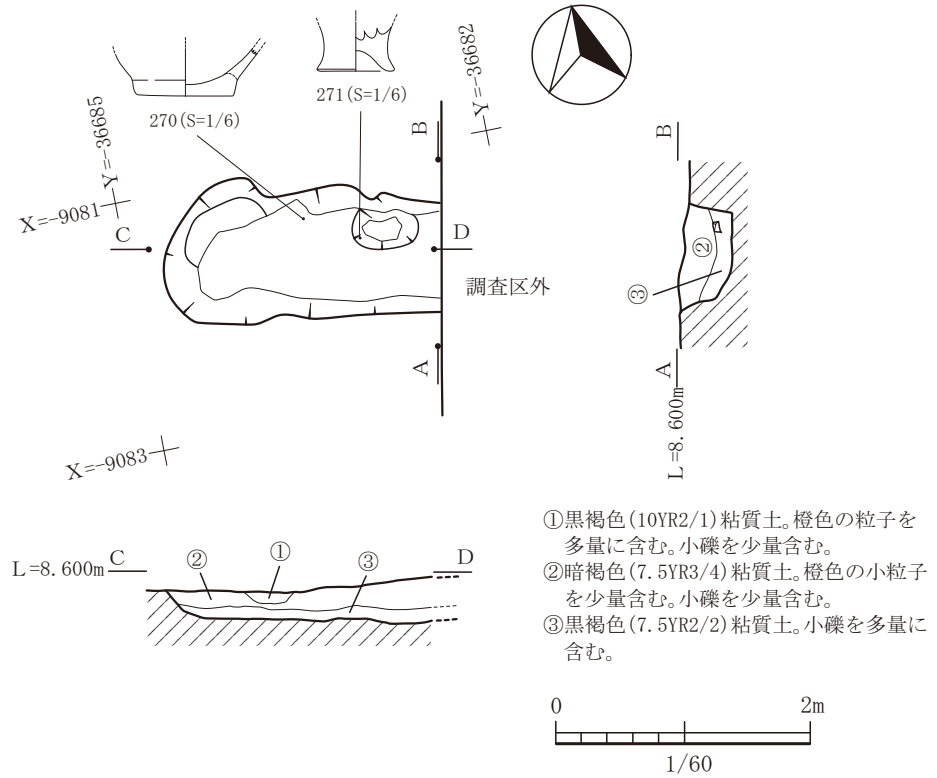


図-191 2号溝平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

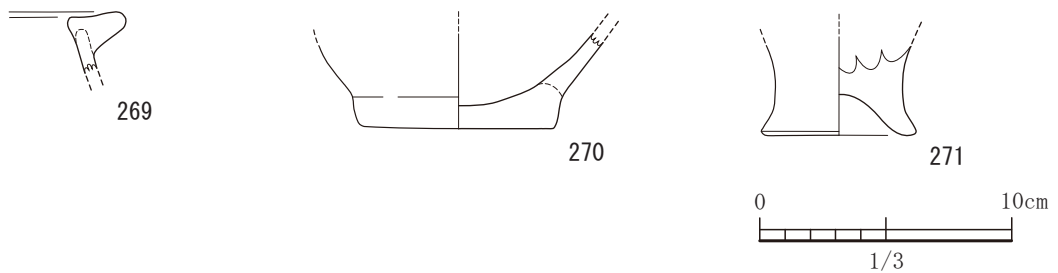


図-192 2号溝出土遺物実測図 (すべて S=1/3)

後期初頭期の土坑と主軸方向では一致している。

#### 60号土坑

60号土坑は、4号溝と15号住居と切り合っておりこれらより古い遺構である。また南側は古墳時代の遺構である71号土坑によって切られており、完全に削平されている。主軸はN19°Eである。4号溝(弥生中期後半から後期初頭期)と同時期かこれより古い。

#### 61号土坑

61号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構である。N19°Eに主軸をもち、長軸が1.6m、短軸が0.7mの楕円形のプランである。出土遺物は

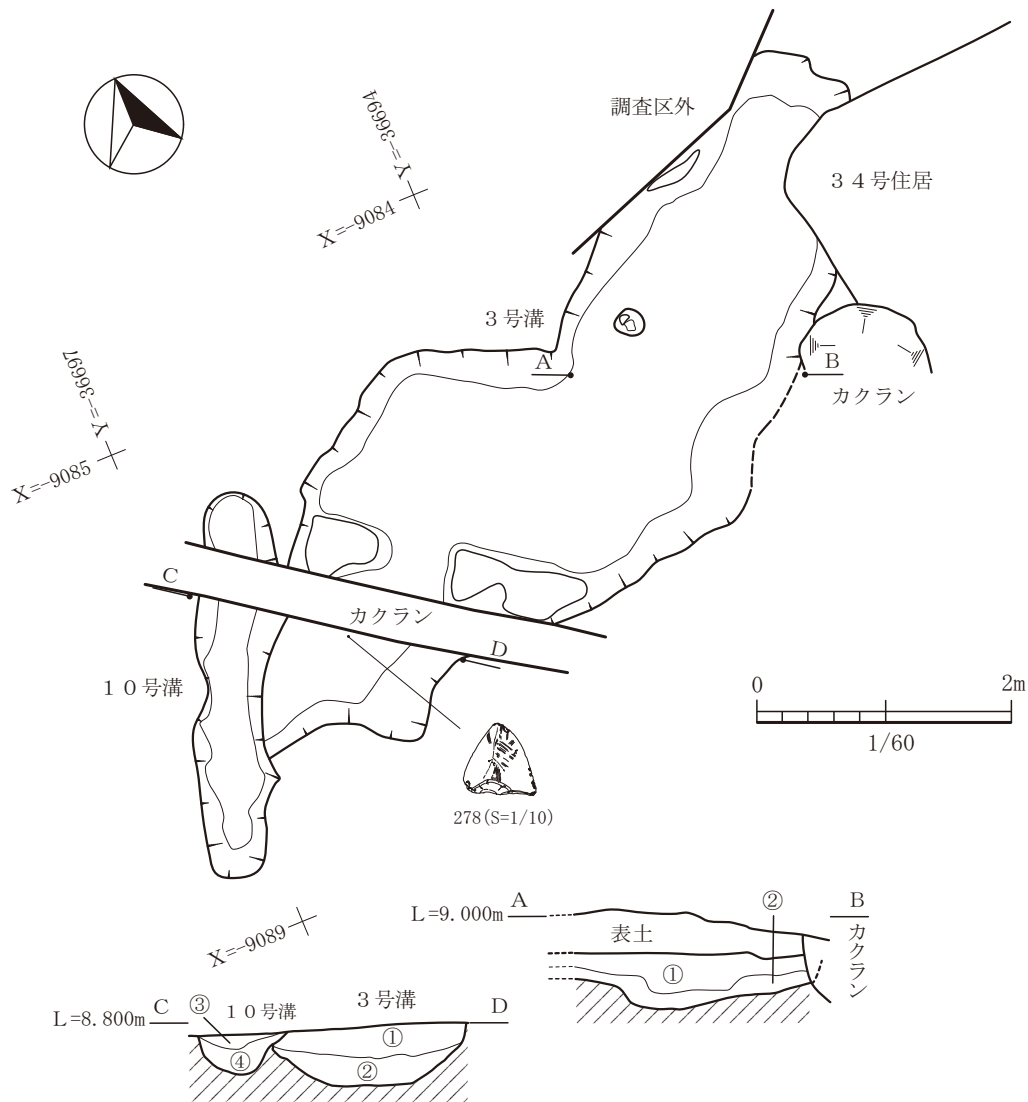
弥生土器の破片のみで実測可能な遺物はない。詳細な時期は不明。

#### 62号土坑

62号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構で、長軸1.7m、短軸0.8mの長方形プランである。検出面から床面までの深さは8cmほどしかなく残りが悪い。出土遺物も弥生土器の破片が出土しているが詳細な時期は不明である。

#### 63号土坑

63号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構である。主軸はN33°Eで、長軸が1.5m、短軸が0.9mの楕円形プランである。南側に窪みがあ



3号溝遺構埋土

- ①黒褐色(7.5YR3/2)シルト。直径2cm未満の炭化物を少量含む。焼土粒、礫を少量含む。砂を含む。
- ②暗褐色(7.5YR3/4)シルト。にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土を多量に含む。

10号溝遺構埋土

- ③暗褐色(7.5YR3/3)粘質土。焼土粒を少量含む。
- ④暗褐色(7.5YR3/4)粘質土。焼土粒を少量含む。1cm程度の小礫を少量含む。

図-193 3号溝平面図及び断面図 (縮尺1/60)

り、北側はテラス状の形状を呈している。出土遺物は弥生土器の碎片であり詳細な時期は不明である。

64号土坑

64号土坑は、平坦地区の8区の東側の甕棺墓の墓域で85号土坑と切り合って検出された遺構である。85号土坑は古代の遺構である。埋土がブロック状に混濁しているので、短期間に故意に埋めた可能性が高い。主軸は、N16°Eで、墓域にある甕棺墓の主軸方向と同じである。長軸が1.0m、短軸が

0.6mの楕円形プランである。東側に浅い窪みがあり、西側には平坦な床が作られている。出土遺物はない。主軸や平面形状から弥生時代の遺構としているが、後世の遺構である可能性もある。弥生時代であれば、故意に埋めているので土坑墓の可能性が高いと思われる。

1号溝

1号溝は、平坦地区の2区で10号住居と11号住居と切り合って検出され、これらの住居跡より新

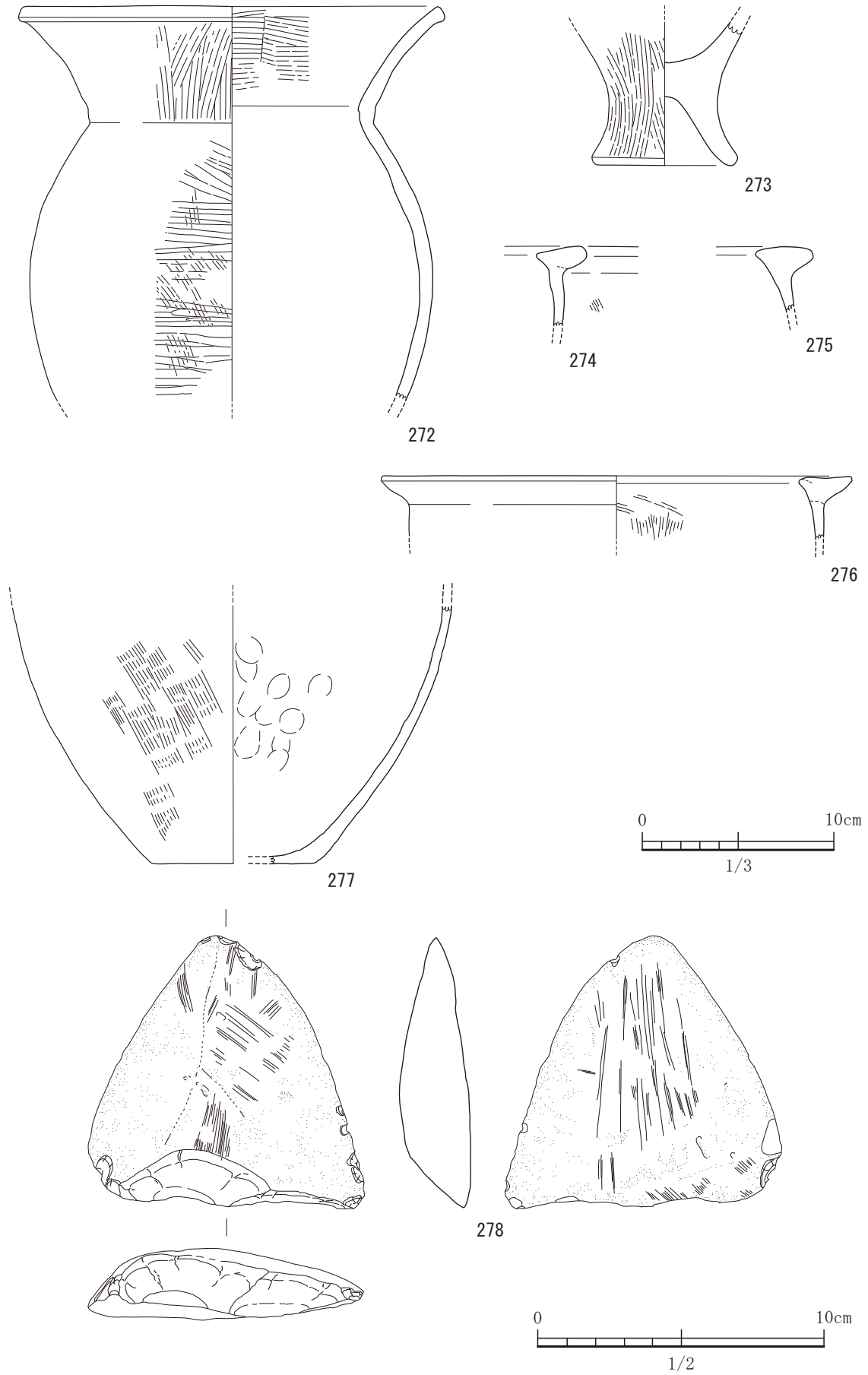


图-194 3号溝出土遺物実測図 1 (S=1/3, 278はS=1/2)

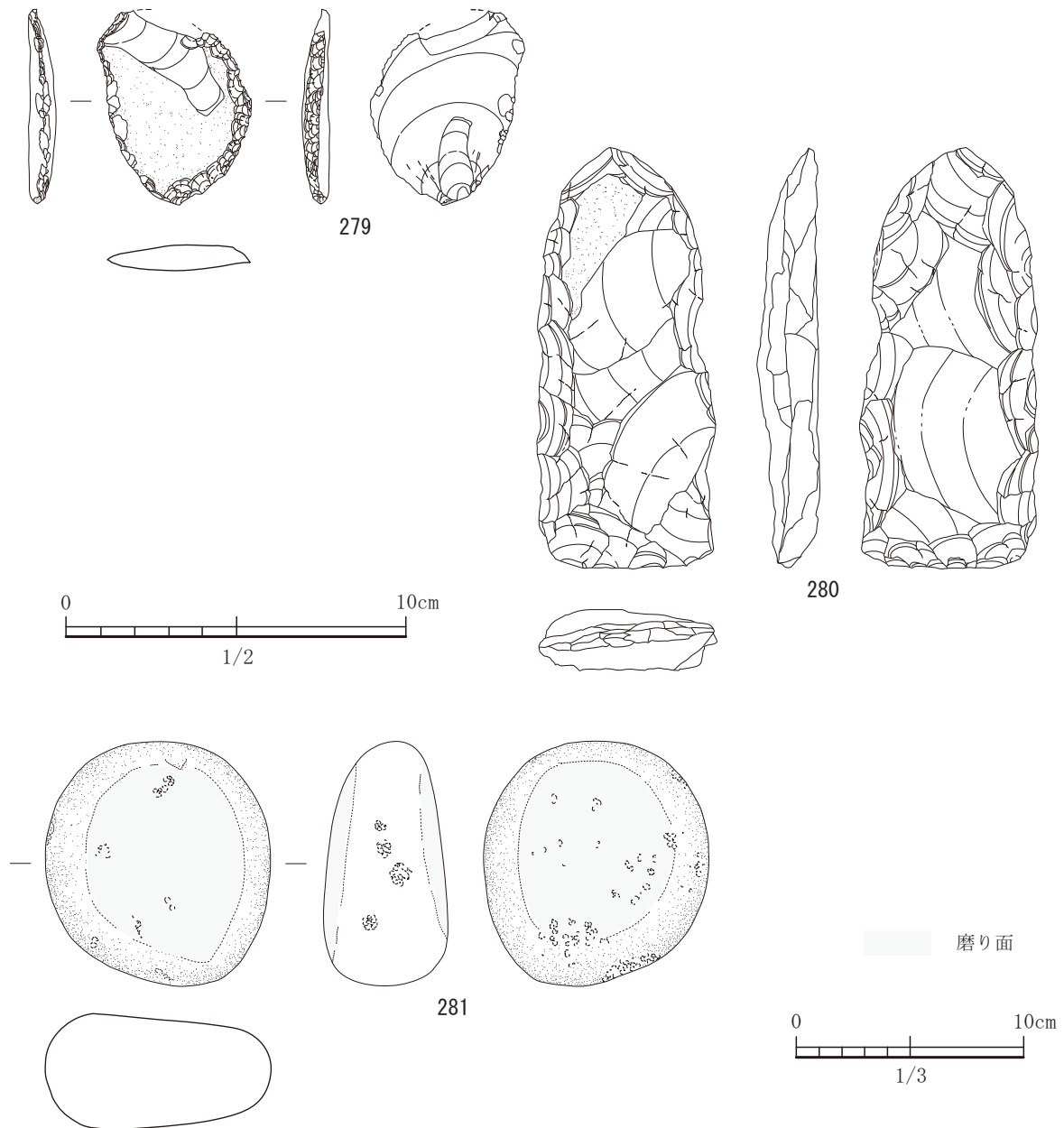


図-195 3号溝出土遺物実測図 2 (S=1/2, 281はS=1/3)

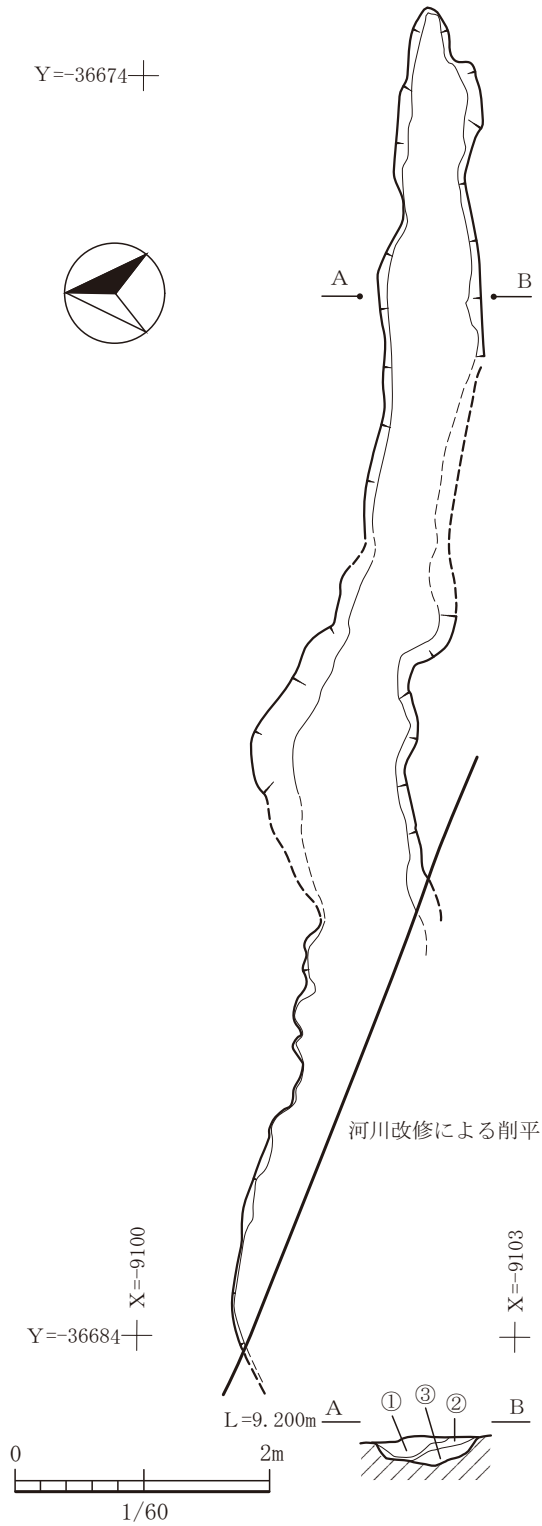
しい遺構である。調査の時点で、幅が35cm～55cmで、長さが約3mの細長い平面形状で溝遺構とした。東側に向かって浅くなる傾向がある。最も深いところで20cmほどである。南東から北西にむかって溝が延びているが、中央付近からゆるやかに西側に屈曲する。用途的にどのような使われ方をしたかは不明である。出土遺物は少なく、実測可能な遺物は、甕形土器の口縁部の3点である。266から268まで、甕形土器の口縁部である。口縁部は平縁であり、内側に

突起をもち、266は小さい。時期的には、弥生中期後半から後期初頭期の範疇である。

#### 2号溝

2号溝は、平坦地区の6区で、5号住居と切り合って検出された遺構で、5号住居よりは新しい。東側は住宅地への仮設道路の敷設により調査ができなかった部分である。調査段階では平面形状と隣の調査区へ延びるような状況であったため、溝遺構としたが、隣の調査区である2区では延長部は検出





- ① 黒褐色(10YR3/2)粘質土。焼土と炭化物の小粒子を含む。直径5mmの小礫を含む。
- ② 暗褐色(10YR3/4)粘質土。黄褐色の粘土ブロックを多量に含む。小礫を少量含む。
- ③ 黒褐色(10YR3/1)粘質土。焼土と炭化物の小粒子を多量に含む。黄褐色の粘土ブロックを含む。下層には少量の礫を含む。

図-196 4号溝平面図及び断面図 (縮尺1/60)

されなかったため、6区で止まっており、埋土の堆積状況から溝というよりも土坑と言った方が適切のようである。主軸はN78°Wであり、短軸方向は約1.1mで、長軸方向は不明であるが、少なくとも3m未満である。西側の立ち上がりはしっかりしており、埋土も本遺構を平らに埋積するような堆積状況である。床面の北側には小規模の凹地が設けられている。出土遺物は、実測可能な土器が3点出土した。269は、口縁部は平縁であるが、内側には明瞭な突起はつかない。270は、器種は不明であるが、凸ぎみの底部である。復元底径は7.6cmを測る。271は、甕形土器の脚部であり、短い。弥生中期後半から後期初頭の範疇である。

### 3号溝

3号溝は、平坦地区の6区と8区で10号溝と34号住居と切り合って検出された遺構である。10号溝は古代の遺構で、34号住居は古墳時代前期の住居跡である。両遺構によって切られている。本遺構に南側には東西方向にカクランがあり削平されていた。北西側は、仮設道路の敷設の関係で一部調査ができず、一部プランが不明である。主軸はN62°E方向であり、長軸方向は7m以上の長さがあり、埋土に砂質土が多く入り、水によって運ばれてきた痕跡がある。立ち上がりは比較的緩やかで溝状の形状を呈する。ただし、常時水が流れているような状況ではない。カクランが位置する北側には、両岸にテラス状の平坦部を設けてあった。平面形状も蛇行してS字の形を呈している。テラス状の平坦部や中央部の屈曲等から1条の溝ではなく複数の土坑が切り合っている複合体かもしれない。調査段階では、埋土の区別が非常に難しく、平面プランでの切り合いを検出できなかった。出土遺物は、実測可能な土器が6点、石器が4点である。272は、壺形土器である。口縁部はやや外反しながら立ち上がる。器壁はやや厚い。外面と内面の口縁部はハケ目調整で胴部では外面にハケ目のあとミガキが施されている。273から276は、甕形土器である。273は、台付甕の脚部で、全体的に被熱をうけ赤色化している。274から276は、甕形土器の口縁部であり、平縁である。内側に小さい突起をもつ。275は、平縁の口縁部ではあるがやや膨らみをもつ。時期的には、弥生中期後半から後期初頭期の範疇である。277は、甕形土器か壺形土器の底部である。外面はハケ目調整

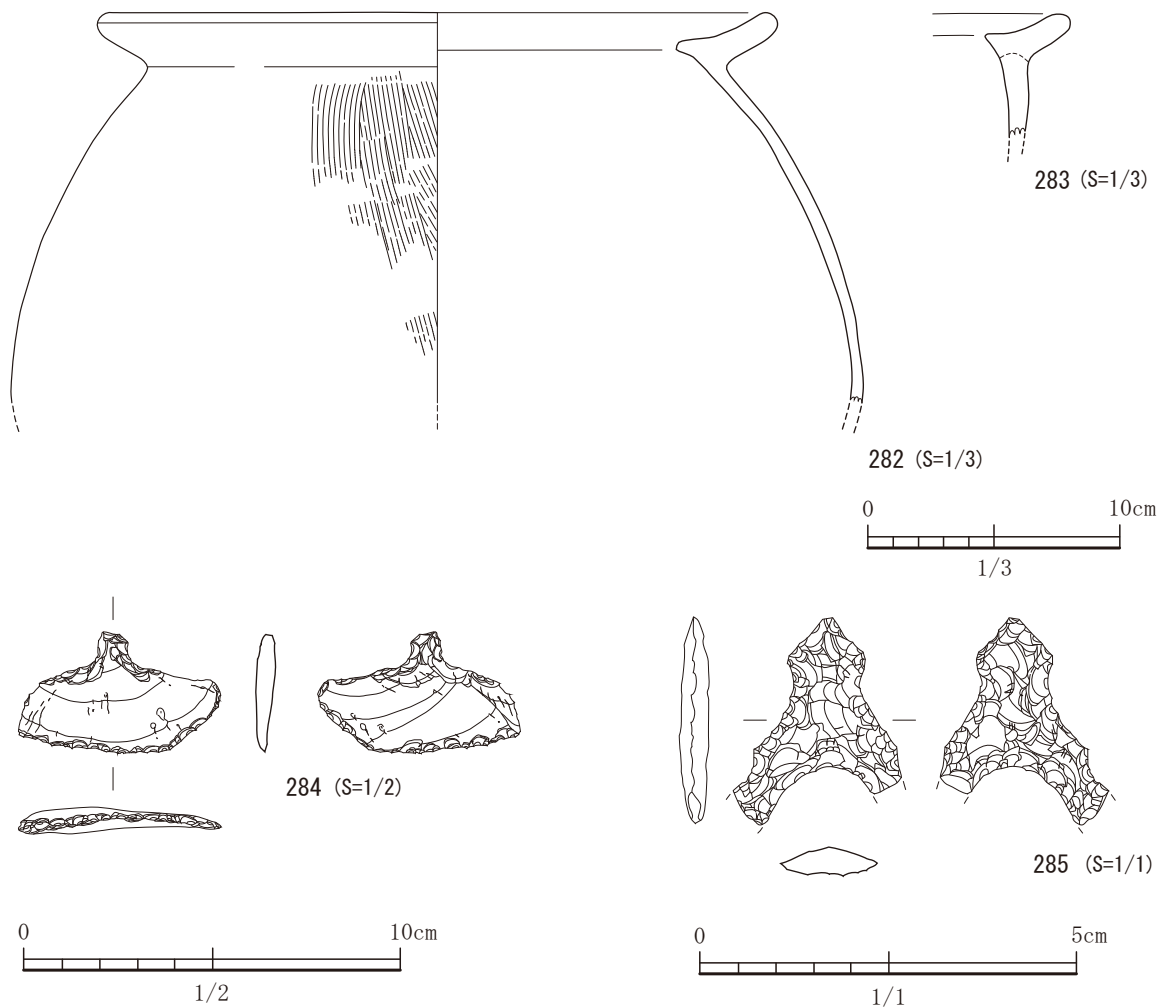


図-197 4号溝出土遺物実測図

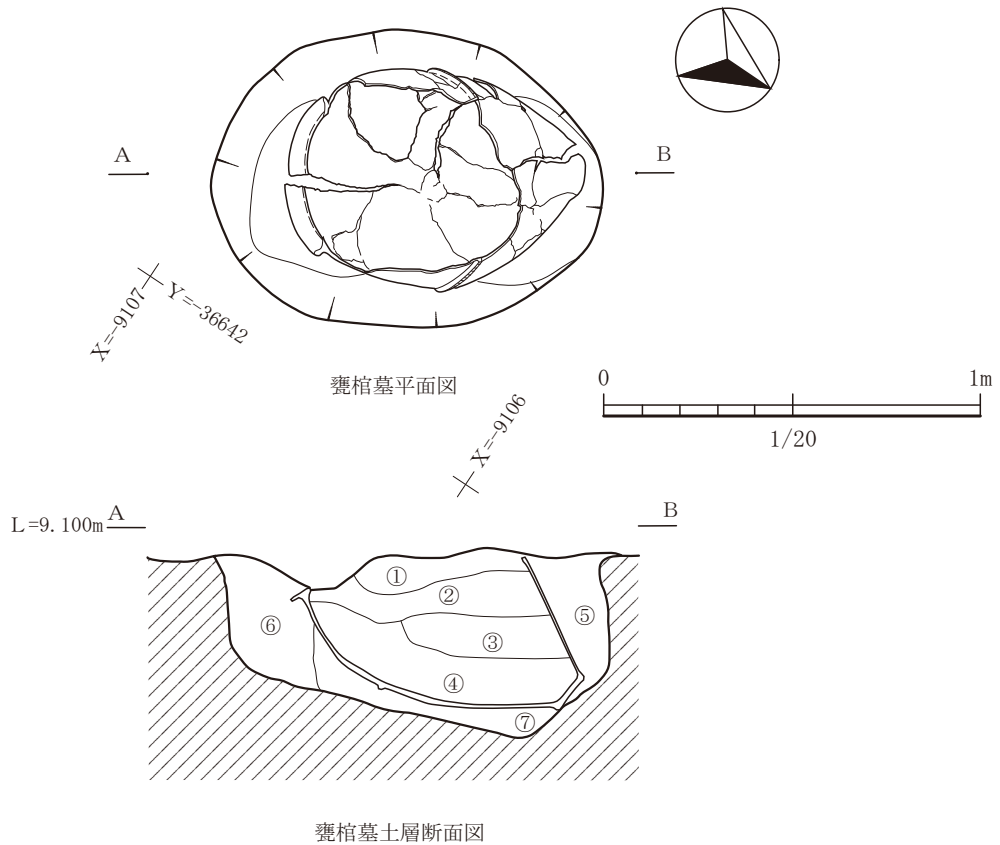
で、内面には指頭圧痕が残る。278は、輝石安山岩製の石製品である。三角形を呈しており先端部は鋭くとなっている。擦痕が2面に見られる。279はサヌカイト製のスクレイパーである。一部欠損している。また礫皮面が見られる。280は、変ハンレイ岩製の打製石斧である。281は、輝石安山岩製の磨石である。表面と裏面に磨り面が見られる。一部に敲打痕も見られる。

**4号溝**

4号溝は、平坦地区の8区で、遺構が集中する中央部で検出された遺構である。20号住居、22号住居、37号土坑、60号土坑より新しく、15号住居より古い。主軸方向はN87°Wの方向で、東ほど先細りしていく。主軸方向に11m検出することができたが、南側は木葉川の河川工事のため壊されて

いた。地形測量結果からわかるように、弥生時代には、西側に若干傾斜している。標高の低い西側に向かって（現在の木葉川の流路方向）伸びている。木葉川は、後世でこの台地を横断するように掘削して付け替えている。掘削する際に、4号溝がある凹地または谷地形を掘削して川を築いたのではないかと思われる。埋土は南側から流れ込んでいるようで、弥生時代は遺構が集中する東側の平坦部でも南側が標高的に高かったようである。最下層には焼土や炭化物を多量に含むが、溝中で火を使った痕跡は認められなかった。

出土遺物は、土器が2点、石器が2点出土している。282と283は甕形土器の胴部から口縁部までの部分である。口縁部の形状は平縁であるが、中央に窪みを持たせている。282は胴部がかなり膨らむよ



- ①黒褐色(10YR3/1)シルト。1 cm 程度の礫を含む。
- ②黒褐色(10YR3/1)シルト。礫が多量に含む。
- ③黒色(10YR3/2)シルト。
- ④黒褐色(10YR3/2)シルト。
- ⑤灰黄褐色(10YR4/2)粘質土。
- ⑥暗褐色(7.5YR3/4)粘質土。礫を少量含み、焼土粒を微量含む。
- ⑦黒褐色(10YR2/3)粘質土。0.1 ~ 1 cm 程度の礫を含む。

図-198 1号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

うである。284は、安山岩製の石匙で、完形である。表面に素材の剥離面が残る。最上位層である図-196の①の層から出土している。縄文時代の産物であろう。285は、打製石鏃である。黒色の黒曜石で、腰岳産であろうと考えられる。脚部は両方とも欠損している。表面も裏面にも素材面を中央部付近に残す。

### 1号甕棺墓

1号甕棺墓は、平坦地区の2区で単独で検出されている。墓坑は、長軸1.07m、短軸0.78mのきれいな楕円形プランである。長軸方向はN29°Wの方向である。墓坑の深さは検出面から最深部まで49cmであった。竪穴部では主軸方向に約14°の角度でほぼ平らな状態で掘りこまれていた。横穴部はさほど明瞭ではなく、約3cmの奥行きしかない。また、竪穴

部において明瞭な前庭は認められず、鉛直方向に掘りこまれていた。甕棺の埋置方向は、N32°Wで、埋置角度は、約37°であった。剥平が著しく、下甕のみの検出である。上甕があったか不明である。下甕の口縁部は南東側を向く。骨粉や副葬品は出土していない。

下甕と思われる286は、「く」の字状に外反した口縁部であり、口唇部は丸みを持たせて仕上げている。最大胴部のやや下側に刻み目突帯が1条施してある。復元口径37.8cm、器高74.9cm、復元底径13.2cm、最大胴径53.7cmを測る。外面では、底部はナデ調整、胴部は突帯より下半分はハケ目調整、上半分はハケ目のちミガキ調整、口縁部はナデ調整である。内面は剥落は激しく調整は不明である。胴部の上部と下部に黒斑が認められる。

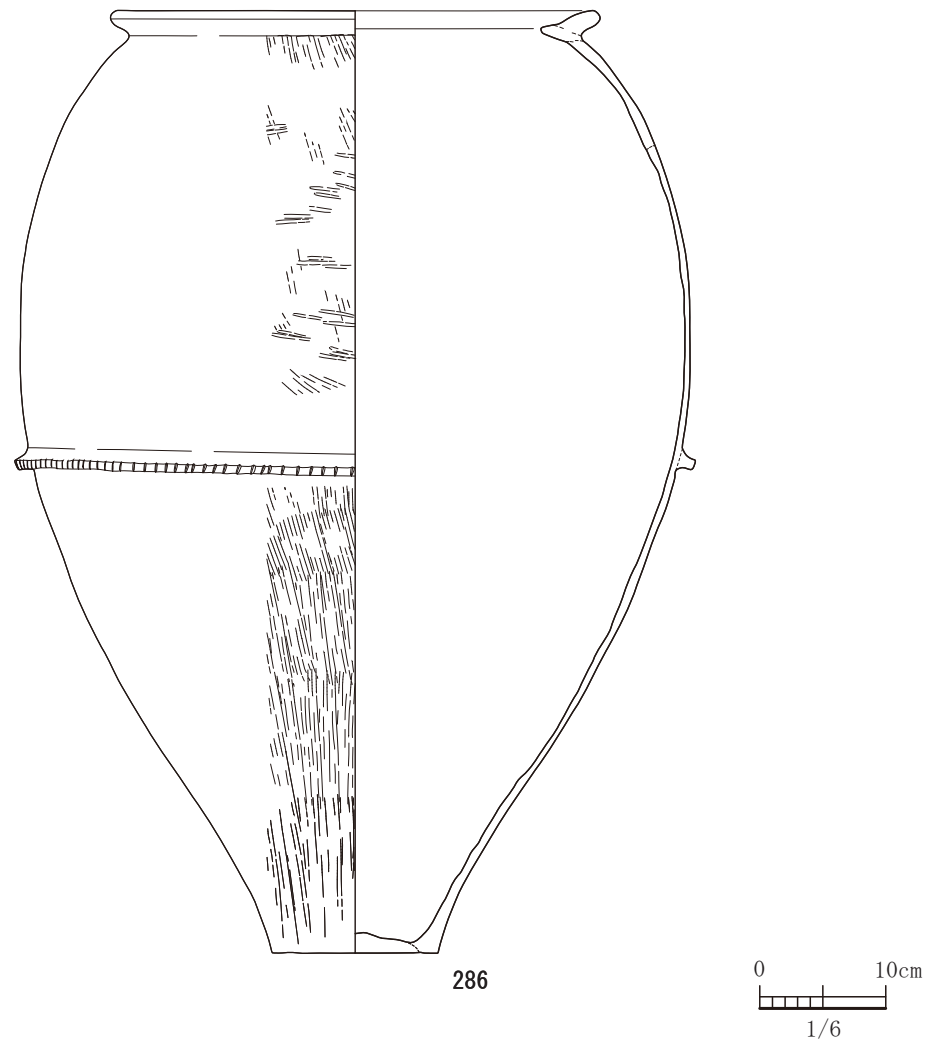


図-199 1号甕棺墓出土遺物実測図 (S=1/6)

## 2号甕棺墓

2号甕棺墓は、平坦地区の2区で単独で検出されている。墓坑の竪穴部は、長軸方向をN39°Eにとり、主軸1.09m、短軸0.95mの楕円形プランである。竪穴部の南西側に横穴が設けてある。竪穴の検出面から最も深いところで0.19mである。横穴部の主軸は、N26°Eにとり、斜めに掘りこんでいる。墓坑の検出面からの深さは、最深部で0.47mである。墓坑の南東部は平坦な形状を呈する前墓が設けられている。竪穴部の前庭は約13°の角度で掘りこまれて構築されている。横穴部に関しては約47°の角度で掘りこまれ、奥行きは最大20.0cmある。甕棺の断面形状と比較してもわかるように、ほぼ甕棺の最大胴径の大きさに掘りこまれているようである。合わせ口になっていて、上甕は土圧によって崩壊し下甕の

中に崩落していた。継ぎ目には目張り用の粘土等は確認できなかった。下甕の口縁部は北東側を向く。下甕からは副葬品や骨粉等は出土しなかった。

上甕である287は、口縁部は平縁で、「く」の字状で内側に小さい突起を作りだしている。最大胴部の少し底部側に断面が三角形を呈する突帯が1条めぐる。口径28.0cm、器高33.2cm、底径8.6cmである。外面は、頸部はハケ目のちヨコナデである。胴部は表面が磨滅しており調整は不明。胴部下半分から底部にかけ黒斑がある。底部は平底である。

下甕の288は、台付甕で脚部を持つ甕形土器である。口縁部は平縁であり、内側に突起を作り出している。胴部はあまり膨らみを持たせず長胴である。頸部には先が丸くなっている突帯が1条めぐっている。全体的に歪んでおり、脚部は中心からずれる。

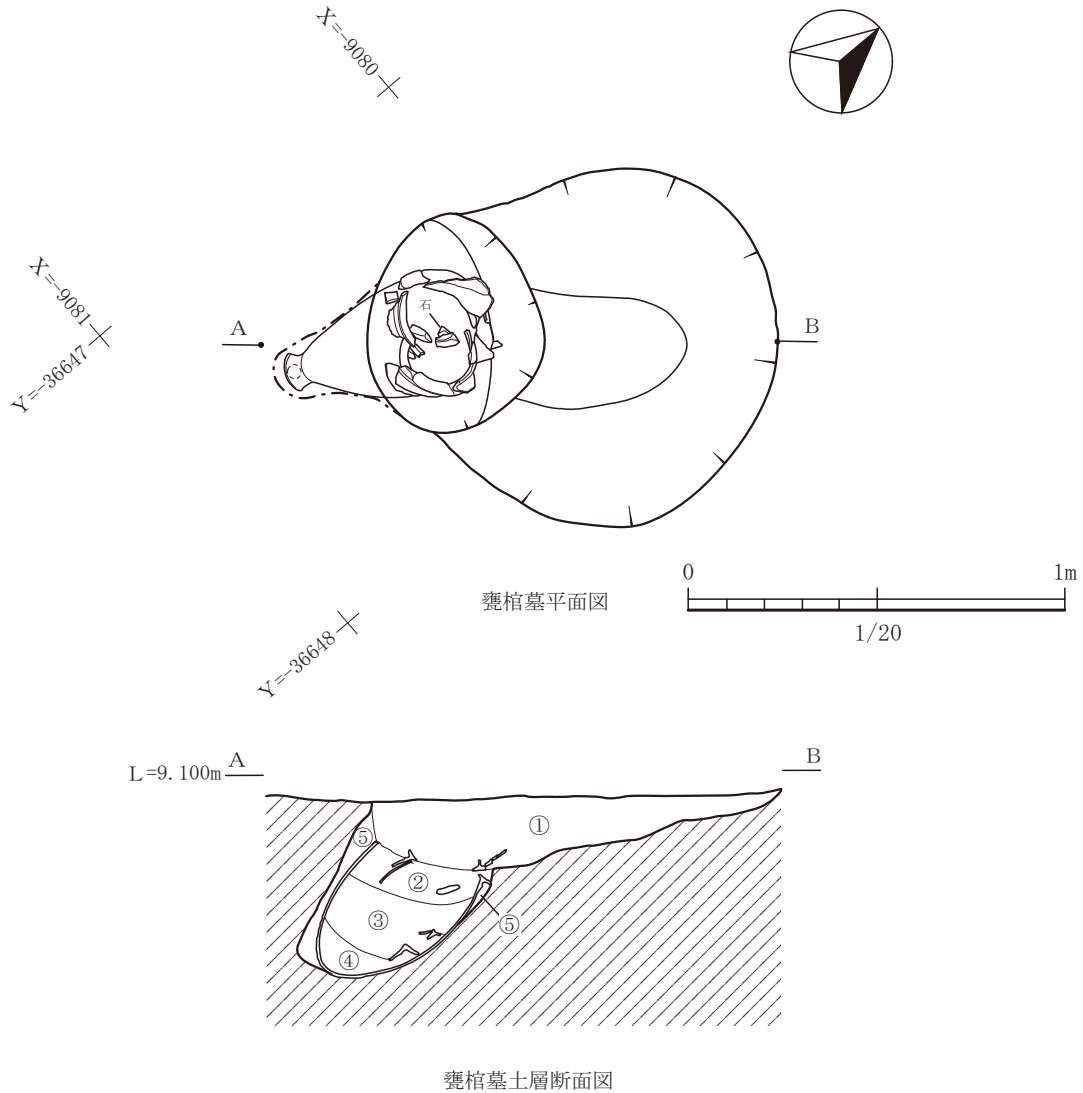


図-200 2号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

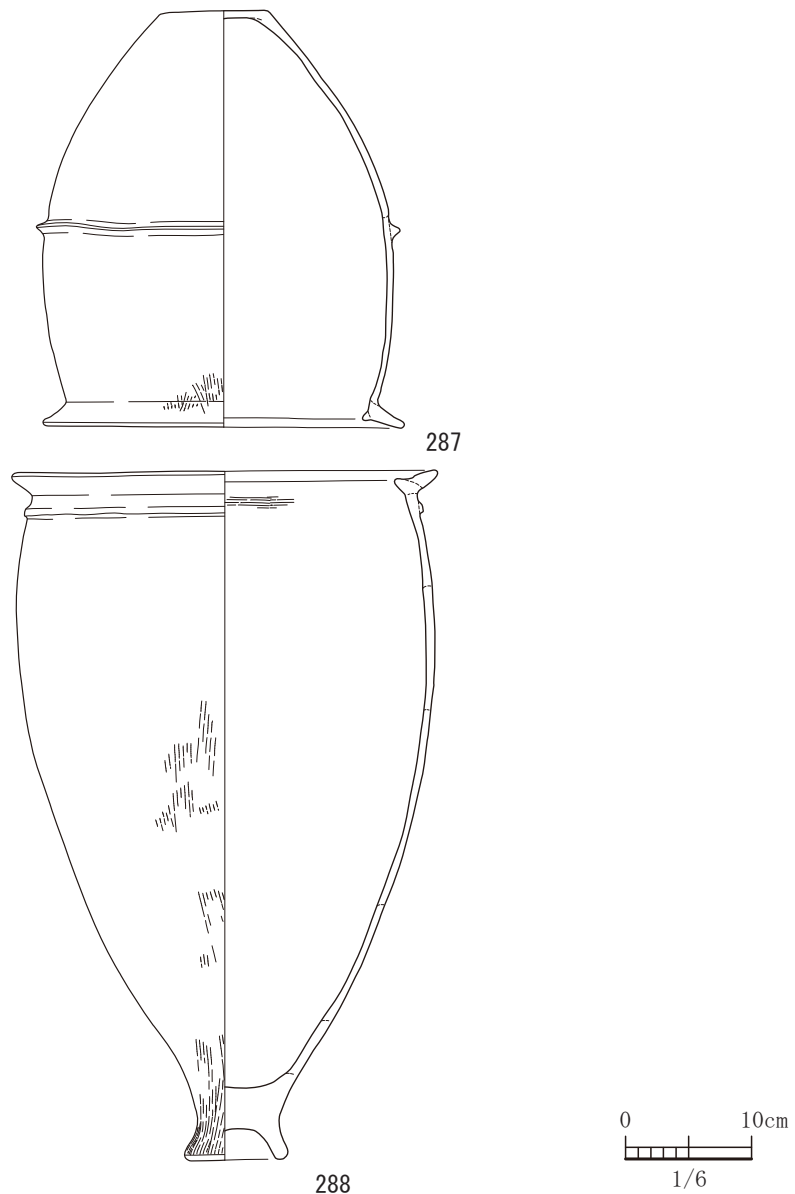
脚部から胴部の下部にかけ明赤褐色を呈する被熱痕が見られる。外面にはススが口縁部や最大胴部周辺に見られる。また内面には黒斑がある。全体的に磨滅が激しい。甕棺として甕が作られたにしては、ススや二次焼成による被熱痕、表面の磨滅の程度から不可解な点がある。甕棺としての転用がなされた可能性がある。底部はナデ調整、胴部はハケ目調整であるが磨滅が激しく一部残存するのみ。口縁部はヨ

コナデである。内面はナデ調整であるが、磨滅が激しく不明瞭である。

### 3号甕棺墓

3号甕棺墓は、平坦地区の2区で13号住居と切り合って検出された遺構である。13号住居は、弥生時代後期前半期の住居跡で後世のものである。13号住居は3号甕棺墓の上に作られていた。墓坑の長軸方向は、N88°Wでほぼ東西である。平面形



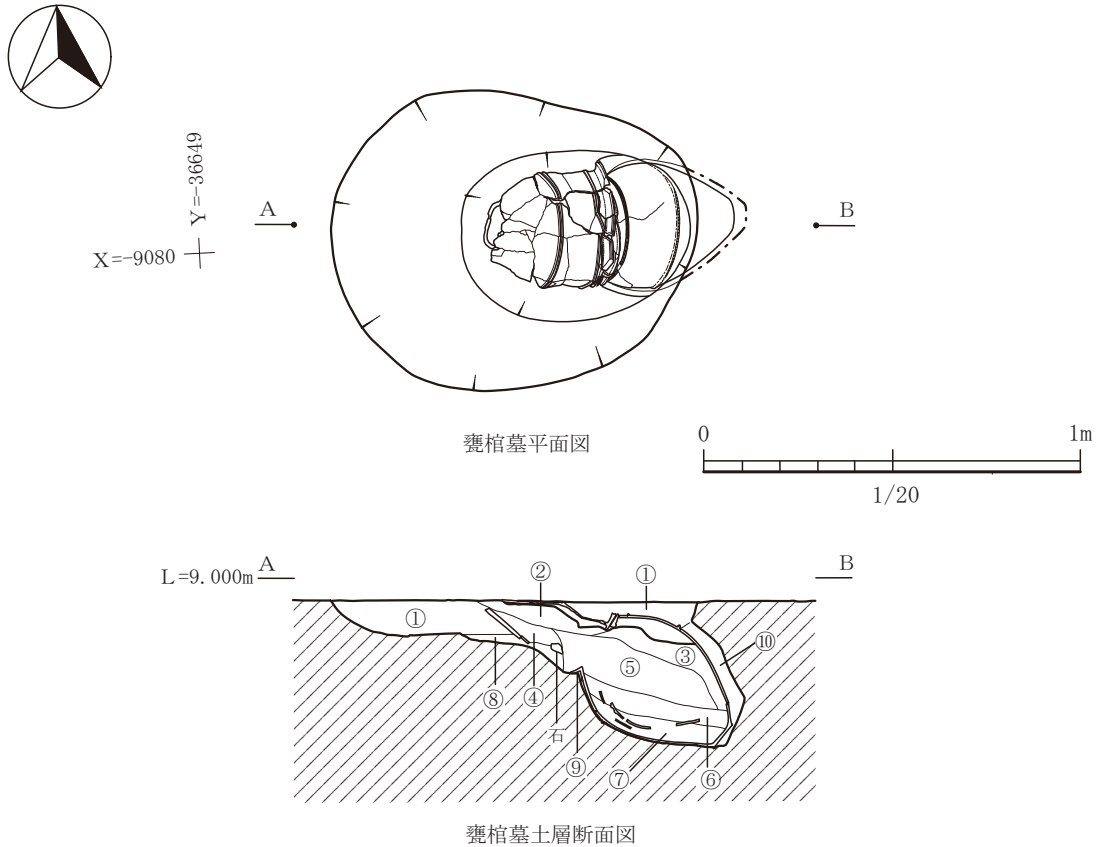


図一201 2号甕棺墓出土遺物実測図 (すべてS=1/6)

状では、楕円形の竪穴の東側に横穴を取り付けた形をしている。竪穴の長軸0.97m、短軸0.79mである。竪穴部は、検出面からの深さは0.09mで平坦な形状をしており、西側は前庭となっている。横穴部は、主軸を竪穴と方向はN88°Wとし同じである。横穴の奥行きは最大で、約15cmである。下甕の器壁が掘方である地山にぴったりくっついており、下甕に合わせて掘りこまれていた。甕棺の埋置角度は、約52°であった。下甕の口縁部と上甕の口縁部がぴったりくっついた状態で出土した。いわゆる合口甕棺である。目張りの粘土は認められなかった。出土時、

土圧によって上甕が壊れ崩落して下甕の中にその破片が入っていた。甕を埋積した埋土堆積状況から、崩落したあと上の土が流れ込んできた様子がわかった。下甕の口縁部は西を向く。埋土を回収し選別・水洗を行ったが、副葬品や骨粉等は出土しなかった。

上甕である289は、底部は剥平によって欠損している。口縁部の断面形状がT字状になっており、口縁端部が鋤先状を呈している。また頸部直下に台形状の突帯をめぐらし、胴部屈曲部には、M字状の突帯をめぐらしている。頸部から胴部にかけて、膨らみを持たずほぼ平坦になって、突帯を境に屈曲して底



- ①暗褐色(10YR3/4)粘質土。1 cm 程度の橙色のブロックを全体に多量に含み、焼土粒・炭化物を少量含む。
- ②暗褐色(10YR3/3)粘質土。炭・焼土粒を少量含む。
- ③黄褐色(10YR5/8)粘質土。
- ④暗褐色(10YR3/3)粘質土。炭・焼土粒・黄色の粒を少量含む。
- ⑤黒褐色(10YR3/2)粘質土。黄色のブロック(5 mm 程度)を含む。焼土粒を少量含む。マンガン粒を全体に含む。
- ⑥暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土。炭化物を少量含む。黄色のブロック(5 mm 程度)を含む。小礫を少量含む。黄色の粒を全体に少量含む。
- ⑦暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)粘質土。炭化物を少量含む。ブロック状に黄色の粘性の強い粘質土を全体に含む。
- ⑧暗褐色(10YR3/4)粘質土。3 cm 程度の礫を全体に多量に含む。橙色、黄色のブロックを全体に含む。焼土粒を少量含む。
- ⑨黒褐色(10YR2/3)粘質土。
- ⑩黒褐色(10YR2/3)粘質土。

図-202 3号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

部にむかって直線的にすぼまっていく。外面にミガキが施され、内面はナデ調整ある。胴部外面に黒斑がある。復元口径は28.9cmである。

下甕である290は、平底の甕形土器で口縁部は平縁であるが、「く」の字状になり、内側に小さい突起を作り出している。頸部直下と最大胴部に断面が

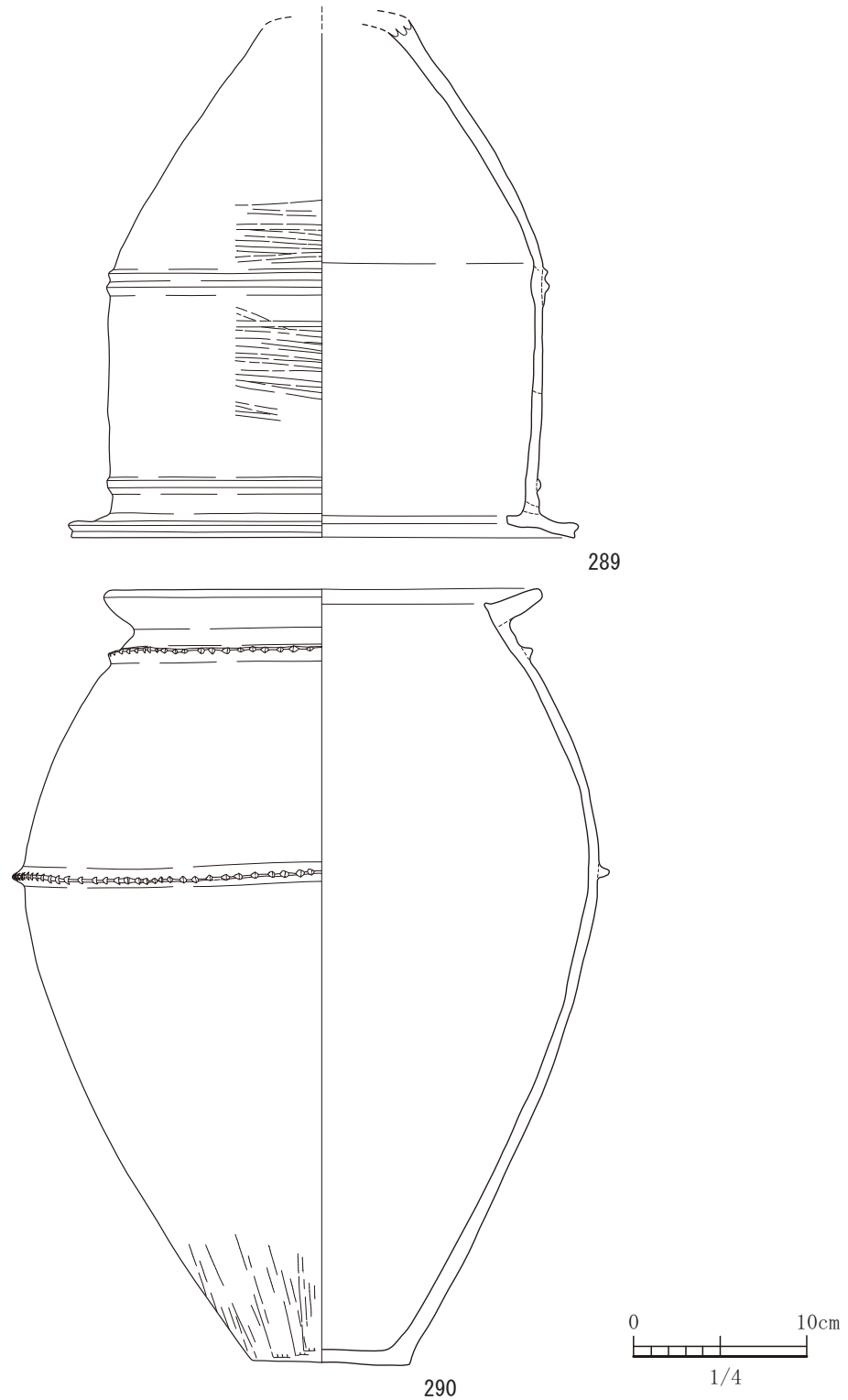


図-203 3号甕棺墓出土遺物実測図 (すべてS=1/4)

三角形の刻み目突帯をめぐらしている。内外面ともに磨減が激しく調整が不明瞭である。外面の底の部分にハケ目痕が一部残っているような状況である。

上甕のプロポーシオンとは異なり胴部に膨らみを持たせている。口径は24.7cmである。

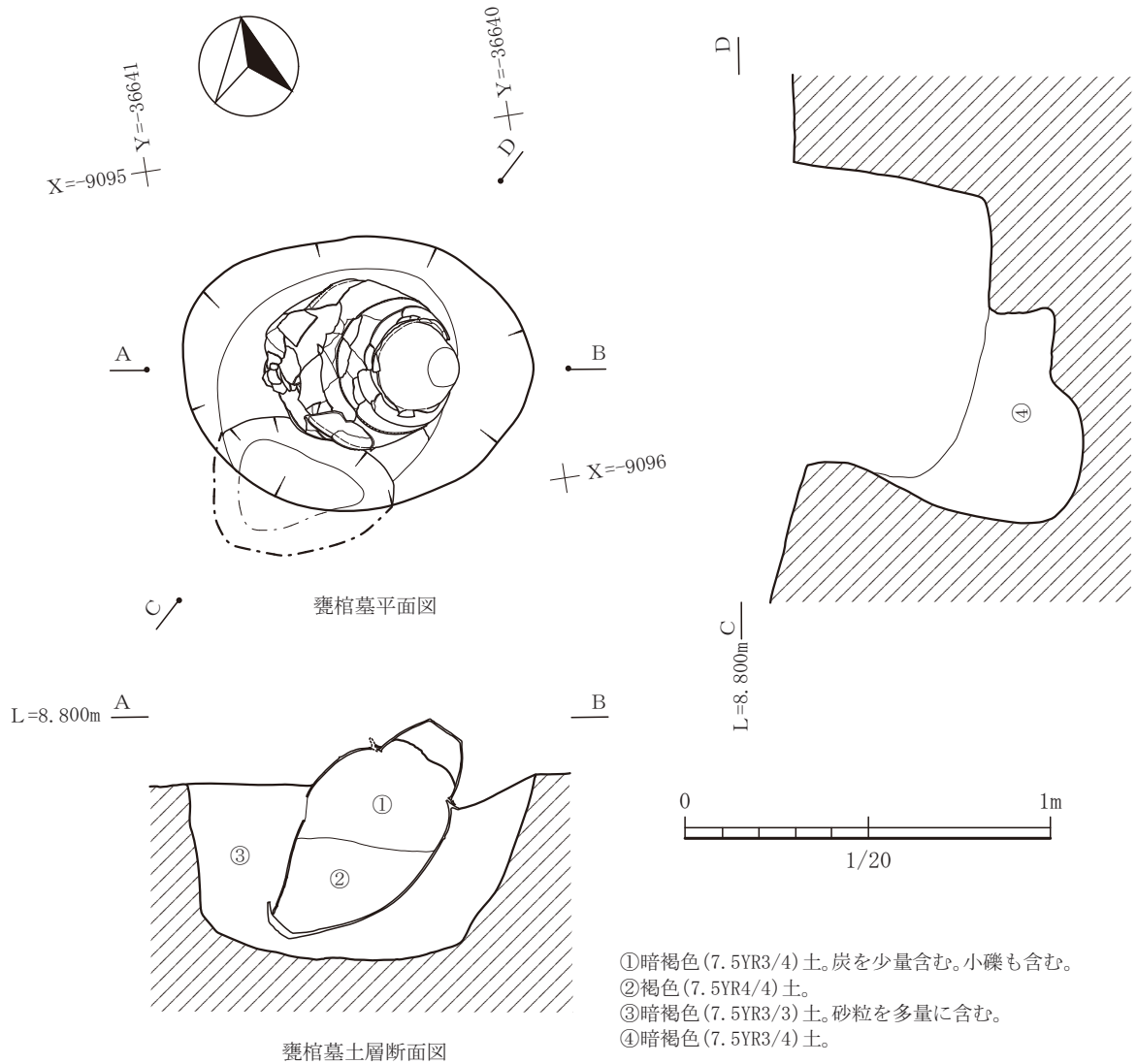


図-204 4号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

#### 4号甕棺墓

4号甕棺墓は、平坦地区の2区で単独で検出されている。墓坑の竪穴部の長軸方向はN81°Wの方向で、長軸0.95m、短軸0.74mの楕円形プランである。通常であれば、埋置方向に横穴が掘られるのであるが、この甕棺墓に限っては、53°南に振って作っている。よって下甕の底部が納まる方向とは異なる。横穴を設けず埋設したようである。埋土の③は甕棺埋設地の埋めた土である。埋置方向は主軸方向であり、埋置角度は、約41°である。上甕と下甕の口縁部がくっついた状態で検出された。目張りの粘土は認められなかった。また前庭も認められなかった。下甕の口縁部は南東を向く。甕内部から、副葬品や

骨粉などは出土していない。

上甕にあたる291は、ほぼ完形の鉢形土器である。口縁部は平縁である。口径は27.0cmである。外面胴部はナデ調整、口縁部はヨコナデ調整、内面はハケ目調整で、底部周辺に指頭圧痕が残っている。外面には黒斑がある。

下甕の292は、平底の甕形土器で、口縁部は「く」字状であり、内側に突起を作り出している。胴部の肩の部分と最大胴部に刻み目突帯をめぐらす。口径は32.3cmである上甕と下甕の口縁部がぎりぎりかかる程度である。胴部下半分はハケ目調整で上半分はミガキを施してある。内面は、ナデ調整である。底部付近に黒斑が見受けられる。

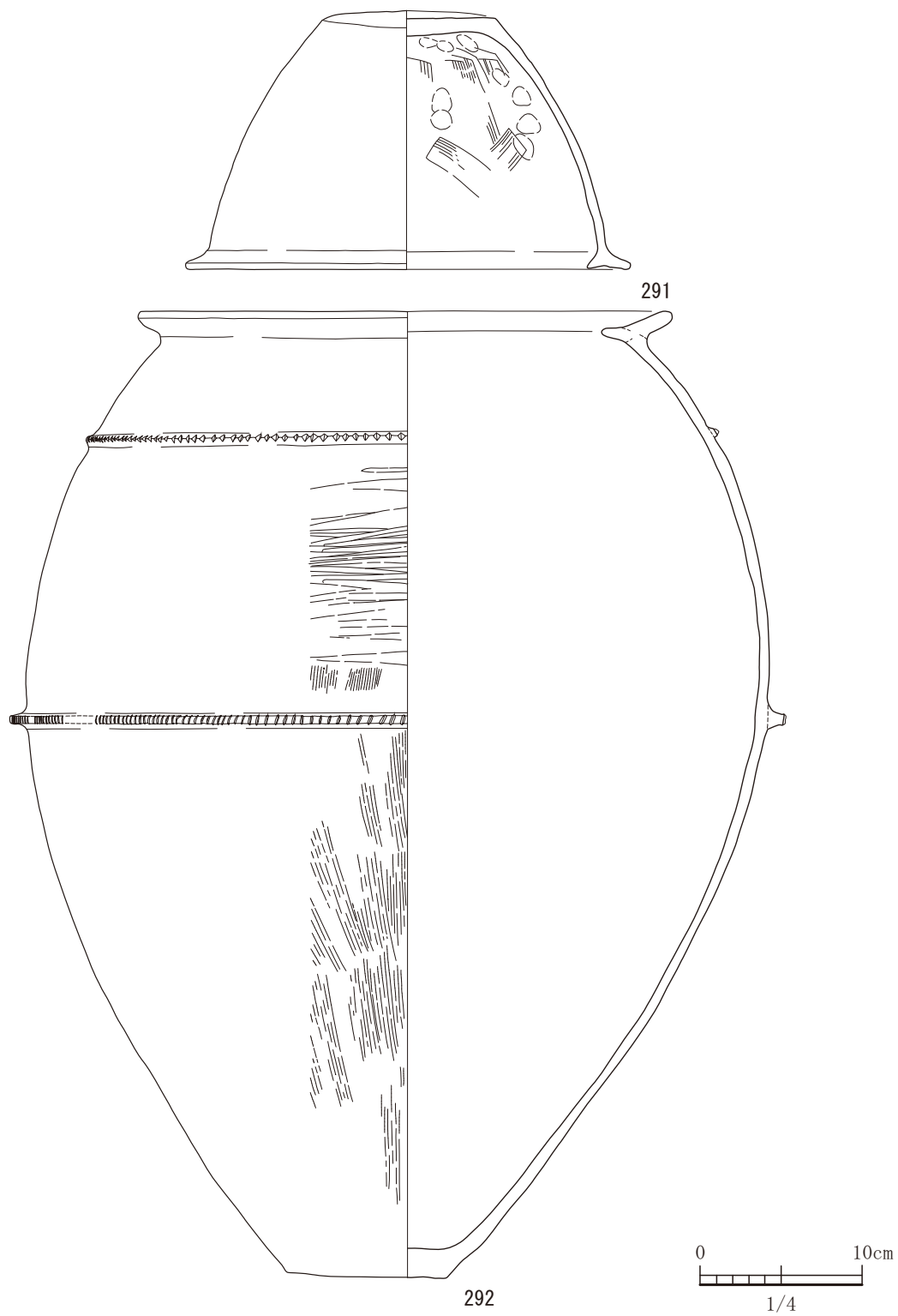


図-205 4号甕棺墓出土遺物実測図 (すべてS=1/4)



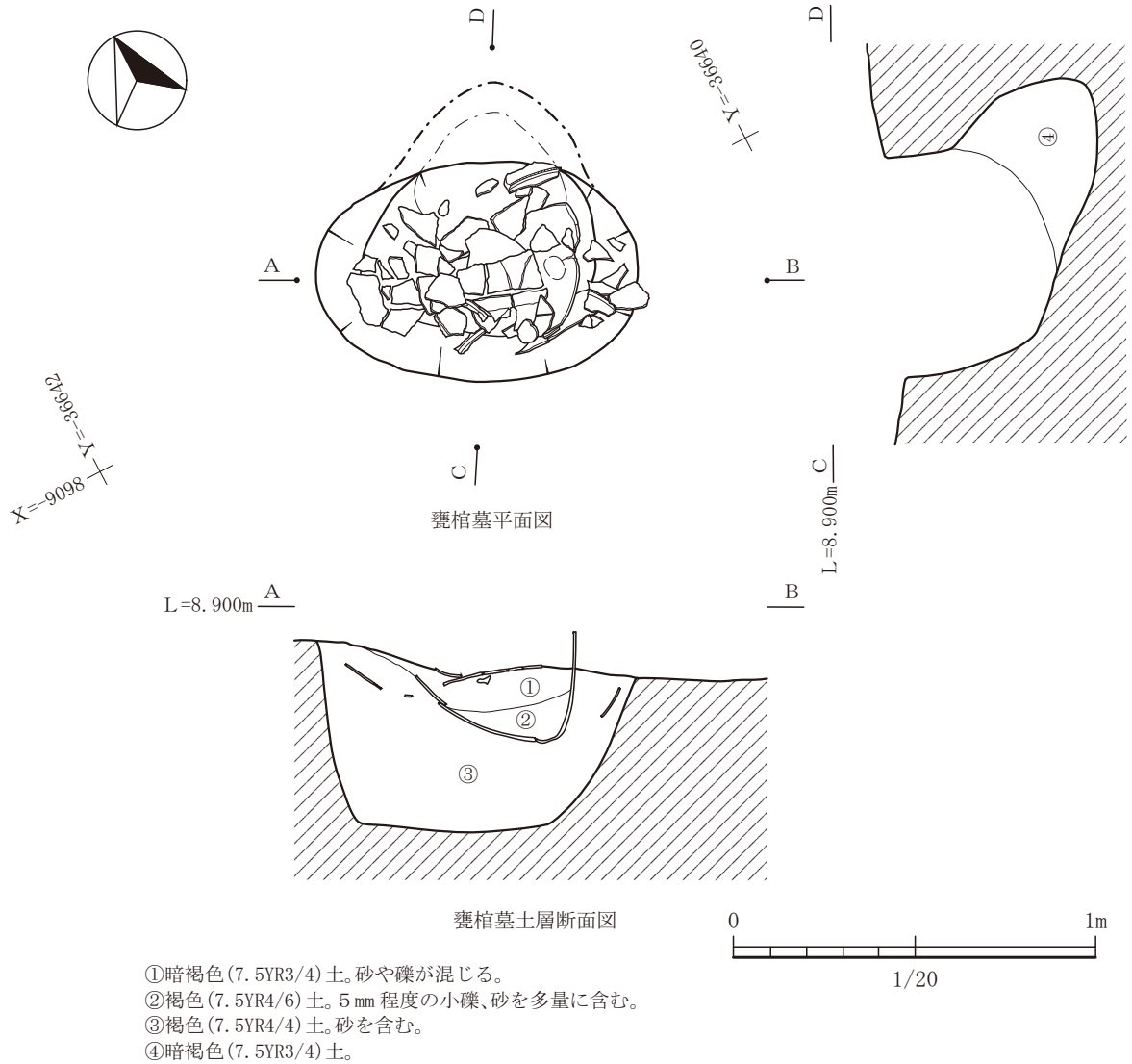


図-206 5号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

### 5号甕棺墓

5号甕棺墓は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構である。墓坑の竪穴部の長軸の方向は、N63°Wで、長軸0.89m、短軸0.60mの平面形状が楕円形プランである。竪穴の検出面から床面まで53cmを測る。床面は平坦な形状を呈しており、前庭は認められない。横穴は北東壁側に取り付けてある。横穴部の主軸はN32°Eである。横穴部は約20°の角度で掘りこまれている。また奥行きは、最大で22cmである。甕棺が出土したのは1点のみである。竪穴部の上部は、剥平され残存していなかった。上甕があったか不明である。尚、出土した甕から上甕の破片等はまとまって出土しなかった。埋土においては、埋土の③において、甕の外側に胴部の破片が認めら

れたこと、また甕の底部と胴部出土状況から軸方向が90°異なることから後世に埋めかえられた可能性がある。竪穴の床面と甕の底部の間が約23cmほど空いているのも埋め戻したと考えたと理解できる。埋置角度は、約61°である。甕の口縁部は北西を向くと思われる。骨粉や副葬品は出土していない。

出土した甕形土器の293は、平底の底部であり、最大胴部に断面が三角形の刻み目突帯文を1条めぐらす。また、口縁部は平縁であり、「く」の字状を呈しており、内側には突起を作り上げている。胴部の膨らみは弱く長胴である。口径は32.6cmである。突帯文の上の胴部に明瞭な赤色顔料痕が残っていた。甕を据えた後に赤色顔料をふりかけたような状況である。ただし、埋土中からは赤色顔料は検出されて

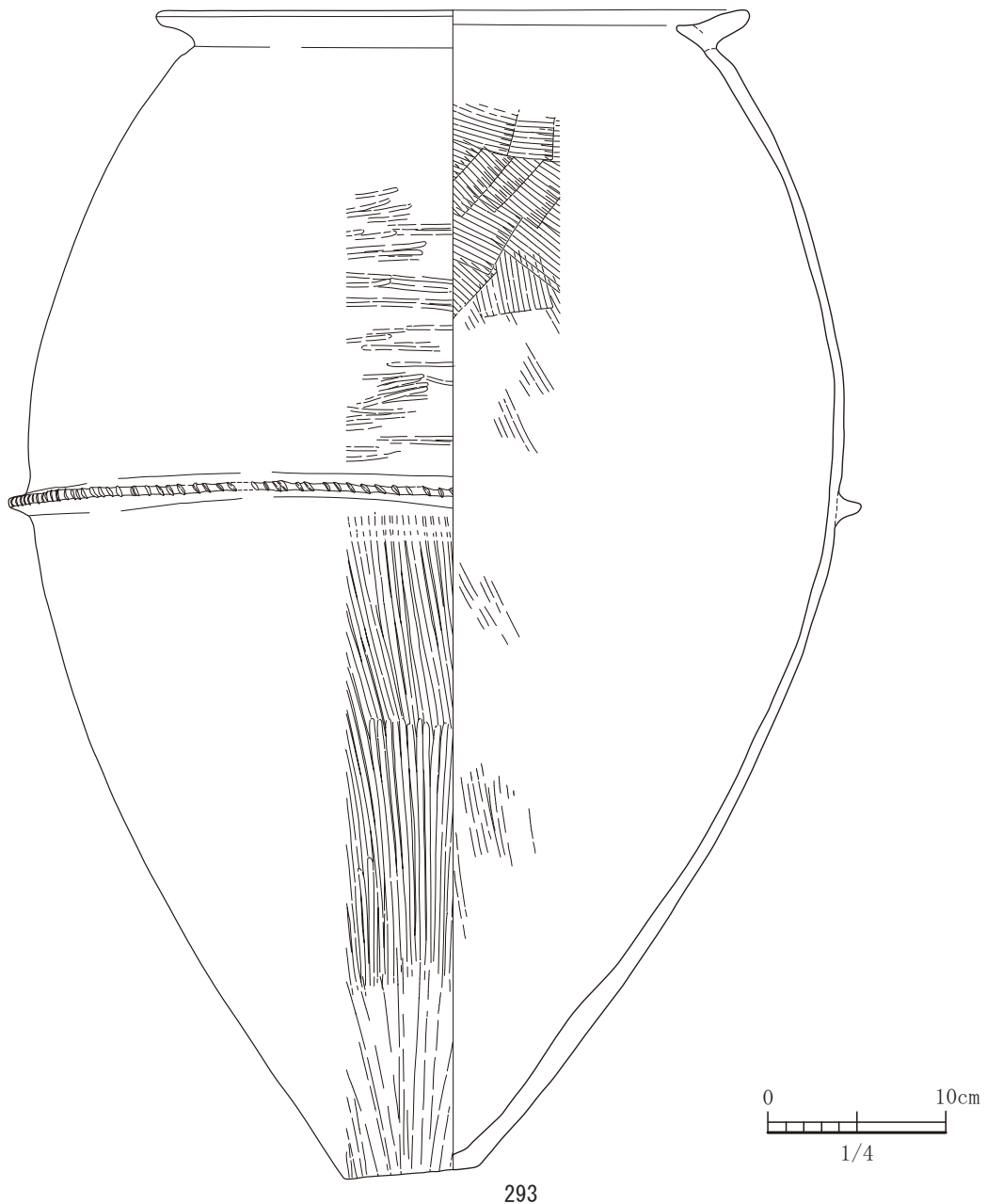


図-207 5号甕棺墓出土遺物実測図 (S=1/4)

はいない。調整では、外面で底部がナデ、胴部下  
 半分でミガキ、上半分でミガキ後ナデ調整である。内  
 面では、底部でナデ、胴部でハケ目後ナデ調整を施  
 している。口縁部は内外面ともヨコナデ調整である。  
 胴部下半分に黒斑が認められる。

**6号甕棺墓**

6号甕棺墓は、平坦地区の7区で10号甕棺墓と  
 切り合って検出された遺構で、10号甕棺墓より  
 新しい。墓坑は、長軸方向N59°Wで、長軸1.19m、

短軸0.69mの隅丸の長方形プランである。墓坑は縦  
 穴部のみで横穴部を持たない。縦穴部は、甕棺の口  
 縁部側に平坦な形状をもつ前庭を有する。甕棺は合  
 口になっており、上甕と下甕の口縁部がぴったり  
 くっついて出土した。上甕の底部付近は剥平を受  
 け欠損している。下甕は墓坑の掘方に張り付くよう  
 に埋設されていた。また、下甕の上に置くように石  
 が出土している。埋土①からは、粘土のブロックは  
 検出されたものの、粘土による目張りは認められな

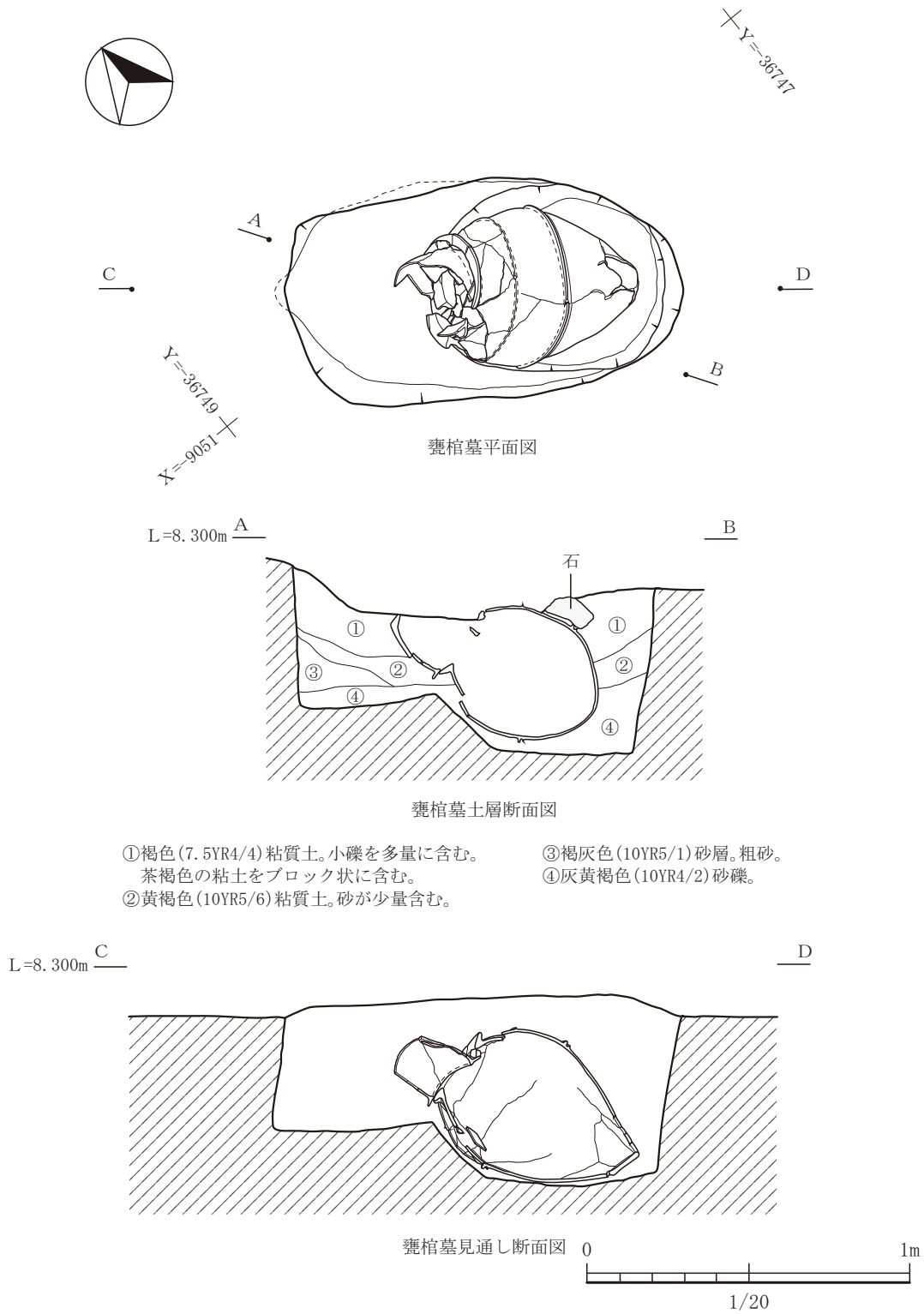


図-208 6号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

かった。甕棺の埋置方向は、北西方向のN52°Wで墓坑の長軸方向とほぼ一致する。埋置角度は約36°である。甕の中の埋土を選別・洗浄したが副葬品や骨粉は出土しなかった。

上甕の294は、口縁部は平縁で内側に小さい突起

を作りだす。底部は平底であり、外面の上部はハケ目、下部は工具によるナデ調整である。内面は工具によるナデ調整である。内外面とも黒斑がある。口径は24.8cmである。下甕の295は、口縁部は「く」の字状でやや外反する。肩と最大胴部に突帯文がめ

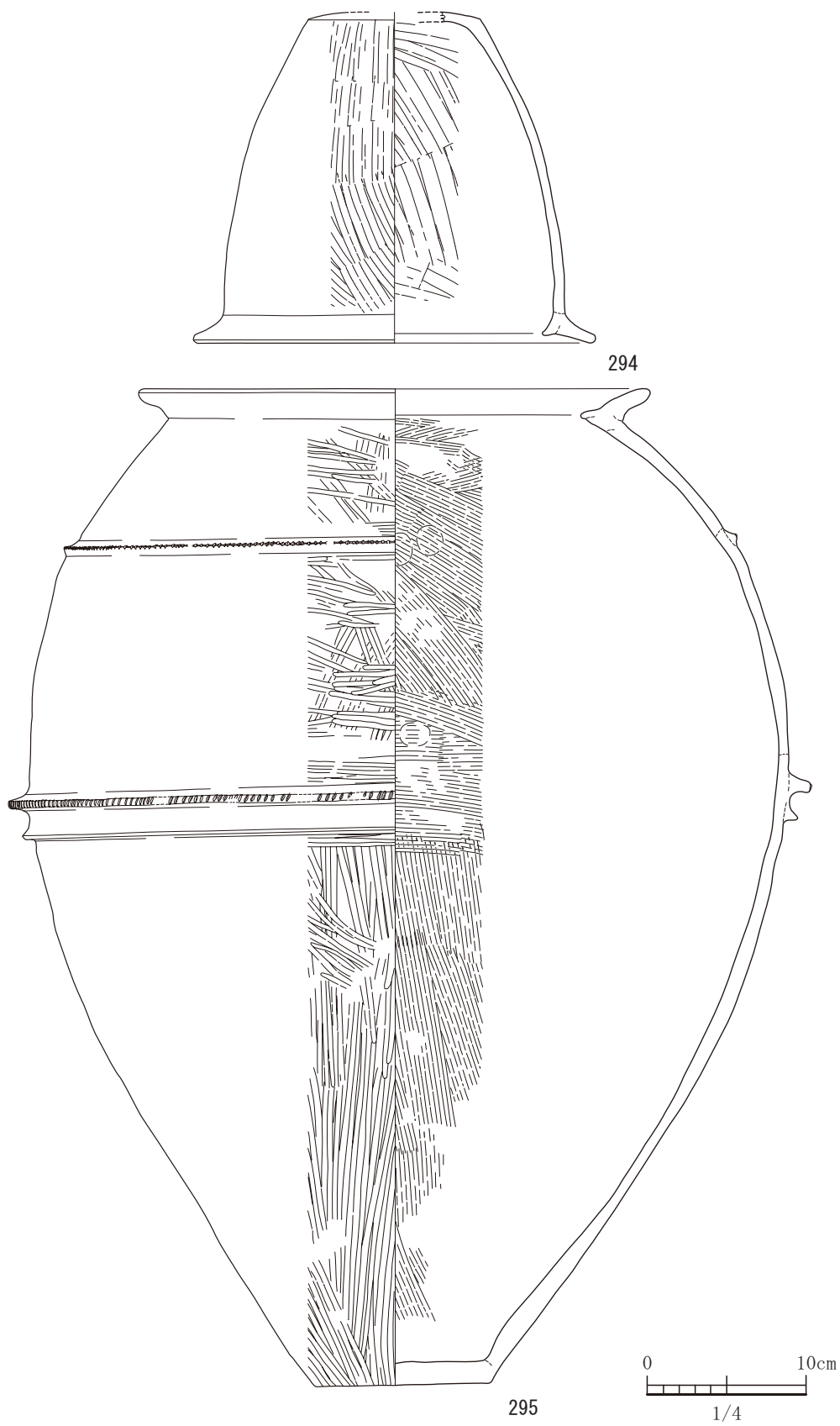


図-209 6号甕棺墓出土遺物実測図 (すべてS=1/4)

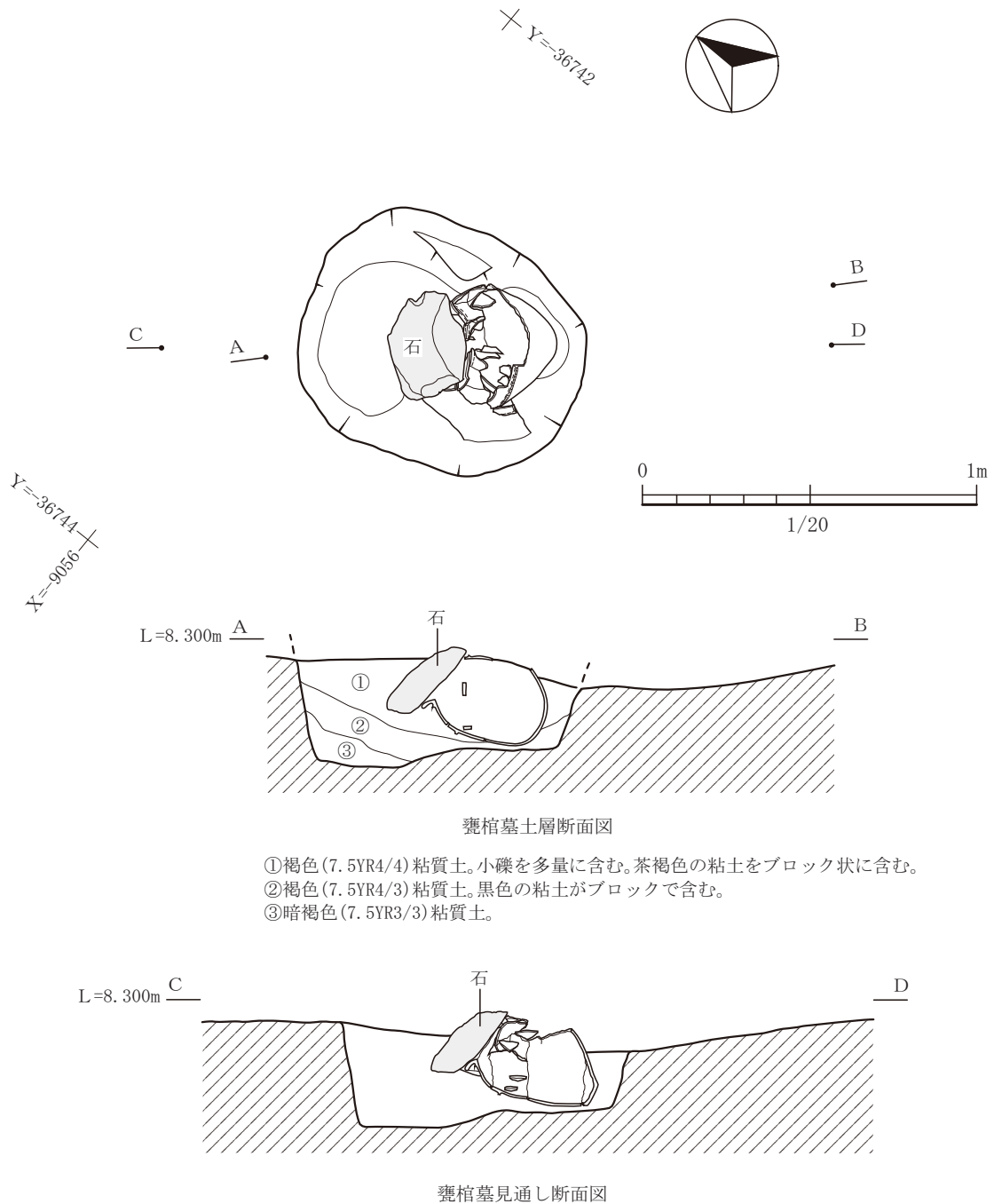


図-210 7号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

ぐっている。最大胴部の突帯文は、刻み目突帯と断面が三角形の突帯をセットでめぐらしている。合計3条をめぐらす。外面はミガキ調整で、内面はハケ目調整である。外面は、下部ほど縦方向で上部になるにつれ横方向のミガキやハケ目調整へ移り変わる。肩から口縁部にかけて赤色顔料痕が見受けられる。ただし上甕には認められない。外面には部分的に胴部

から口縁部にかけて黒斑が認められる。口径は31.9cmである。

#### 7号甕棺墓

7号甕棺墓は、平坦地区の7区で単独で検出された遺構である。墓坑は、長軸方向はN10°Wで、主軸0.85m、短軸0.71mの平面形状では隅丸方形のプランである。墓坑の構造では、横穴部を伴わず、



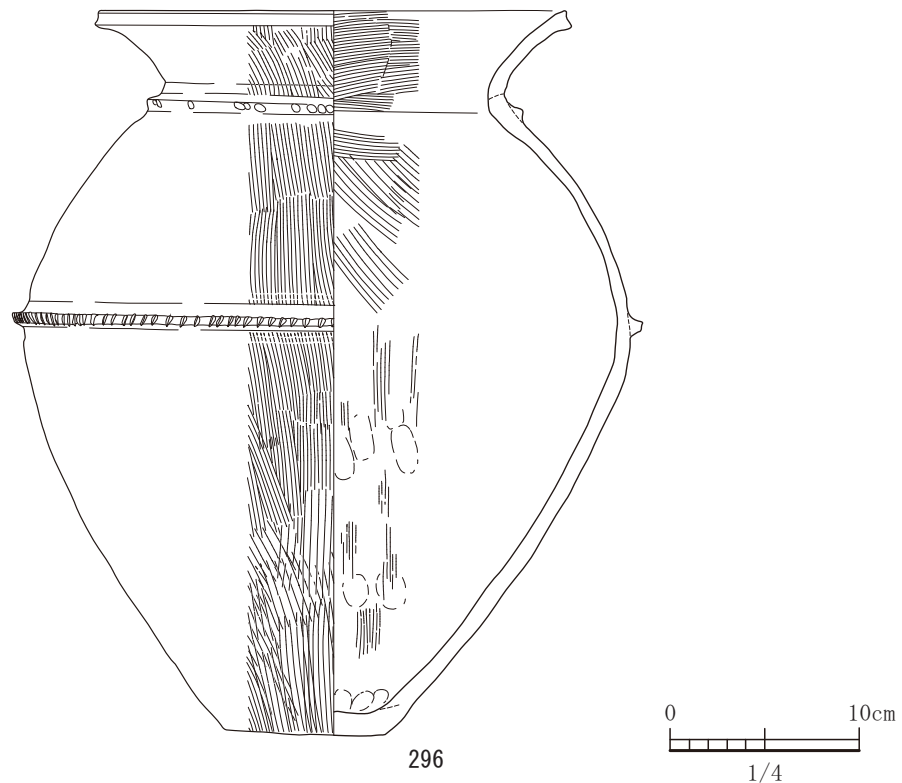


図-211 7号甕棺墓出土遺物実測図 (S=1/4)

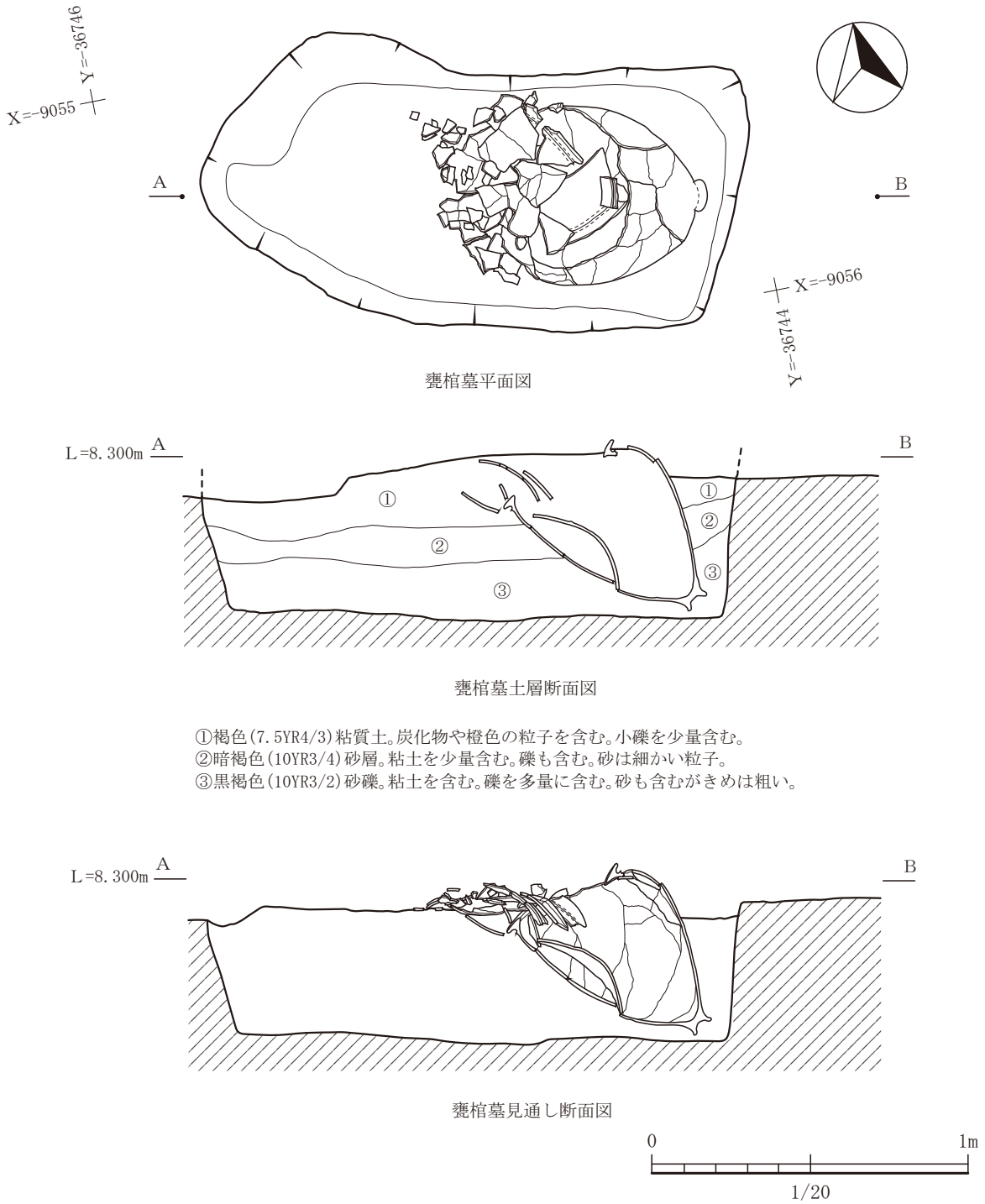
堅穴部のみで構成されている。堅穴部は、断面で見ると、北東側に窪みを形成し、いかにも横穴を形成してあるかのように見えるが、直上に北東側の壁は立ち上がり横穴部は検出されなかった。甕棺が据えてあったのは他の甕棺墓では前庭にあたる部分である。しかも、窪みの方に口縁部を向けている。口縁の方向は北西側である。この甕棺墓が他の甕棺墓と埋葬法で異なるのが、合口ではないことにある。上甕の代わりに、石蓋を用いている。石蓋による封閉は本遺跡ではこの7号甕棺墓のみである。石蓋は横幅25cm、甕の口径が24.5cmあるので、同じ径である。また、甕ではなく壺を使用している。壺形土器の法量は、頸部の内径で16.3cm、最大胴径が31.5cm、器高が38.4cmほどしかなく小児（乳児）用であると考えられる。壺形土器の埋置方向は、N40°Wの方向で、埋置角度は、約29°である。

甕棺として使用した壺形土器の296は、口縁部は「く」の字状の形状を呈し、やや外反する。口縁端部は、中央を窪ませ鋤先状に作り上げようとしている。頸部と最大胴部の位置に刻み目突帯文をめぐるせている。頸部の突帯文は断面が三角形で、最大胴

部のものは断面形状は台形である。上辺に刻み目を施している。底部は平底である。調整では、底部外面は工具ナデを施し、胴部から口縁部までの外面は縦方向のハケ目調整である。内面では、口縁部から胴部の最大胴部まではハケ目調整であるが、下半分は縦方向のハケ目調整の後ナデ調整を施している。胴部の下半分で指頭圧痕が見受けられる。外面底部には、黒斑が認められる。

#### 8号甕棺墓

8号甕棺墓は、平坦地区の7区で11号甕棺墓と切り合って検出されており、11号甕棺墓よりは新しい遺構である。8号甕棺墓は合口甕棺であるが、上甕は本来の姿は留めていなかった。粉々に壊れている状況で検出した。上甕の底部付近は、剥平を受け欠損していた。墓坑は、長軸方向がN72°Wで、長軸1.68m、短軸0.85mの長方形プランである。墓坑は、堅穴のみであり、横穴は伴わない。堅穴の壁も急であり鉛直方向にあまり角度を持たせず掘りこんでいる。この墓坑には前庭を持たず、墓坑の底である床面は平坦な形状をしている。墓坑を埋積した埋土の堆積状況をもみても墓の構築するために掘り上



- ①褐色(7.5YR4/3)粘質土。炭化物や橙色の粒子を含む。小礫を少量含む。
- ②暗褐色(10YR3/4)砂層。粘土を少量含む。礫も含む。砂は細かい粒子。
- ③黒褐色(10YR3/2)砂礫。粘土を含む。礫を多量に含む。砂も含むがきめは粗い。

図-212 8号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺1/20)

げたものを、上から順に埋めもどしている様子がうかがえる。上甕と下甕の口縁部は埋設されたときにはくっついていただと思われるが、上甕が粉々になっているため、合わさっていたか確認できない。また、目張りするような粘土の痕跡もなかった。甕棺内部については、下甕の埋土内に上甕の破片が落ち込ん

でいた。土圧による崩落が見られた。また、埋土を選別・水洗したが装飾品等は出土しなかった。

上甕の297は、底部は剥平を受けていたため、どのような形状であったかは不明である。口縁部は「く」の字状の形状を呈し、内側には小さい突起を作り上げている。胴部は膨らみを持たず底部にむかっ

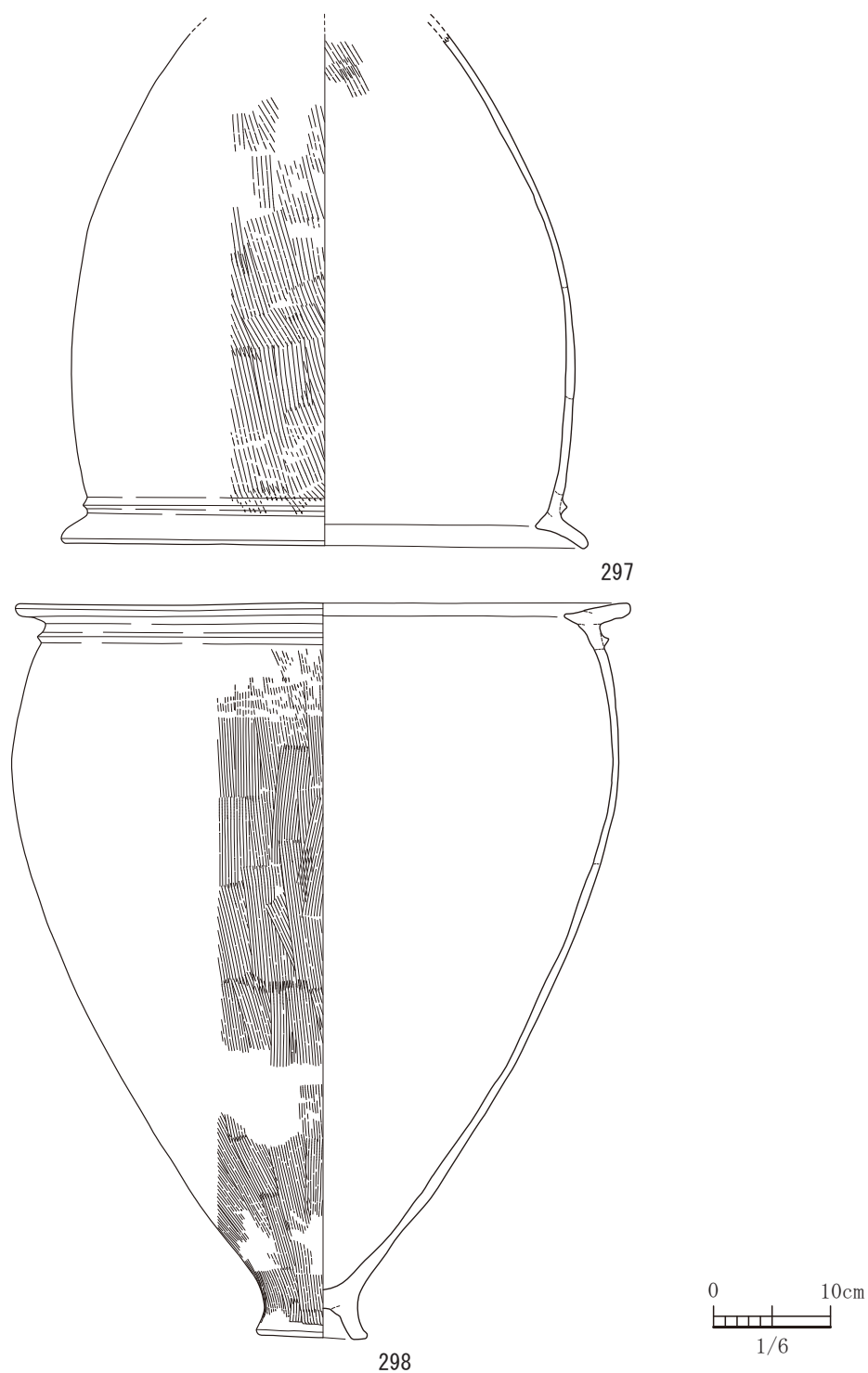


図-213 8号甕棺墓出土遺物実測図 (すべてS=1/6)

てすぼむような形状である。頸部直下に断面が三角形の突帯をめぐらしている。口縁部には赤色顔料痕が確認できた。外面は、口縁部がヨコナデで、胴部は左上がりのハケ目調整である。内面は、ナデ調整である。胴部外面の中央部に黒斑が見られる。口径は44.2cmを測る。下甕の298は、台付甕であり、遺

物包含層（2b層）から出土した破片と接合できている。剥平を受けたのは古墳時代までのようである。口縁部は平縁であり内側に突起を作り上げている。頸部直下に断面が三角形を呈する突帯を1条めぐらせている。最大胴径は中位よりやや上にあり下の方は絞られている。脚部は短い。外面は縦方向の



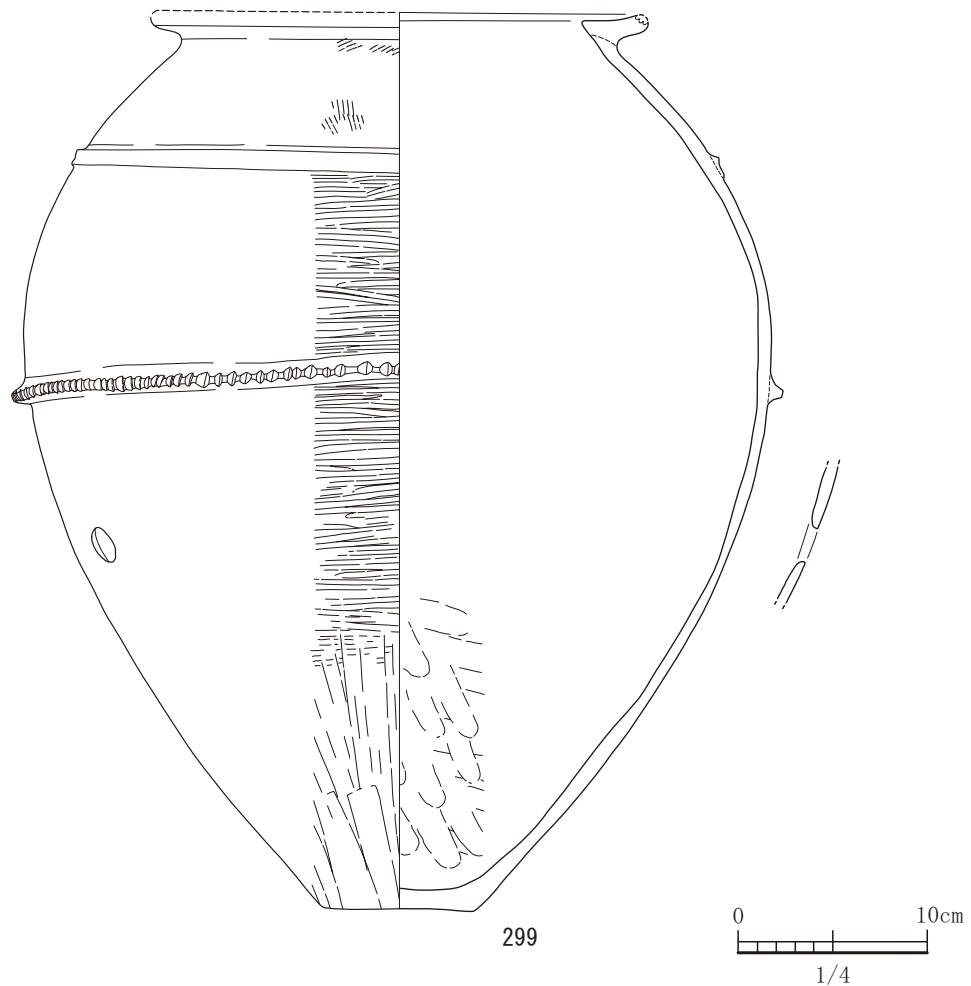


図-215 9号甕棺墓出土遺物実測図 (S=1/4)

のかは削平を受けているので不明である。甕棺の埋置方向は、N65°Wである。口縁部は北西方向に向けられている。埋置角度は、約35°である。甕内部の埋土からは副葬品等は出土しなかった。

出土した甕形土器の299は、口縁部は、「く」の字状の形状を呈し、内側には突起を作りだしている。肩と最大胴部に突帯をめぐらしている。肩の突帯は、断面が三角形を呈するもので、最大胴部のものは、断面では台形を呈して、上辺に刻み目を施している。底部は平底になっている。胴部には穿孔を施している。底部から胴部の下部では工具によるナデ調整、胴部ではミガキ調整、口縁部では内外面ともヨコナデである。内面では、ナデ調整である。胴部外面には赤色顔料痕が残る。復元口径は26.4cmである。

#### 10号甕棺墓

10号甕棺墓は、平坦地区の7区で6号甕棺墓と切り合って検出されたもので、本甕棺墓が古い。

10号甕棺墓の甕棺本体は壊されていないので意図的に平行して埋葬した可能性があるようである。墓坑は、長軸方向はN64°Wであり、長軸2.02m、短軸1.25mの平面形状では楕円形を呈するプランである。本遺跡では最も規模が大きい墓坑である。

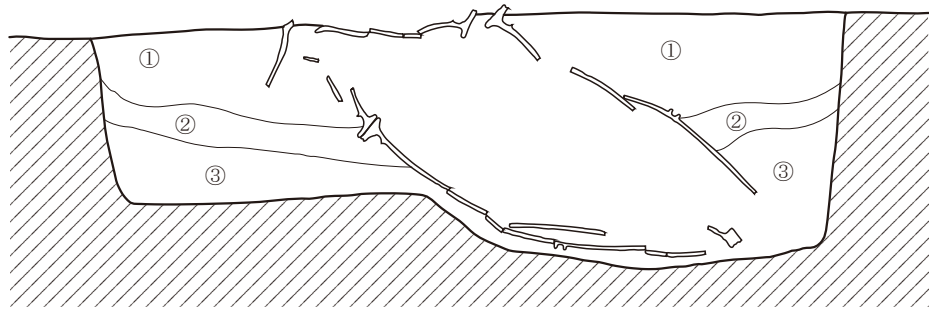
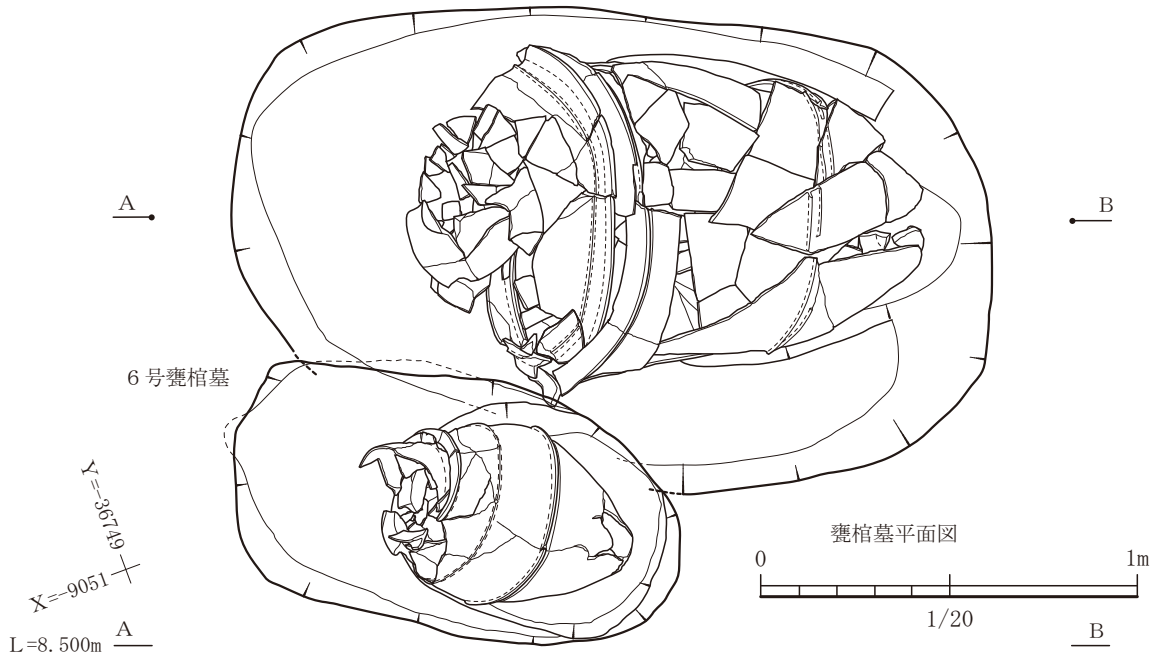
墓坑は竪穴からなり、横穴は伴わない。墓坑の断面形状は2段になっており、口縁部側は一段高くなっており前庭を設けてある。前庭と竪穴の最深部の比高差は約20cmである。埋置方向はN68°Wで、埋置角度は約27°である。甕棺は合口甕棺であり、上甕と下甕の口縁部は一部でぴったりとくっついた状態で検出されている。しかし口縁部周辺から目張り用の粘土は見つからなかった。埋土の①と②から粘土のブロックが出土しているので、もともとは目張りがなされていたかもしれないが、量的に少なすぎるのではないと思われる。出土状況からは目張り用としてべったり粘土を塗って目張りしたの





X=-9053 + Y=-36746

10号甕棺墓



- ①褐色(7.5YR4/3)粘質土。砂、小礫を多量に含む。暗褐色の粘土をブロックで含む。橙色の粒子を多量に含む。
- ②にぶい黄褐色(10YR5/4)砂礫。きめの粗い砂と小礫を多量に含む。粘土を少量含む。
- ③褐灰色(10YR4/1)砂。きめの細かい砂と、粗い砂を含む。白色の小粒子が目立つ。

L=8.500m A

B

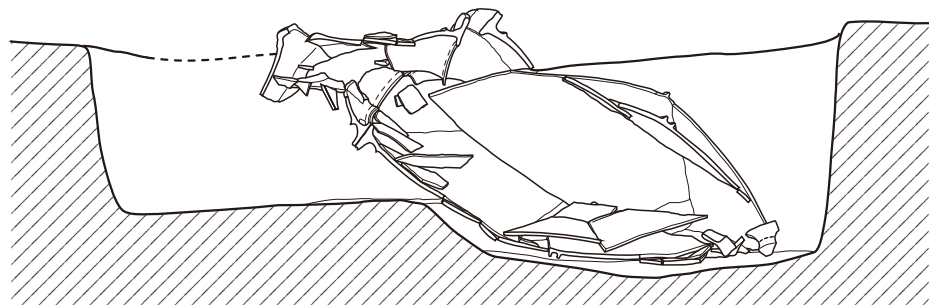


図-216 10号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

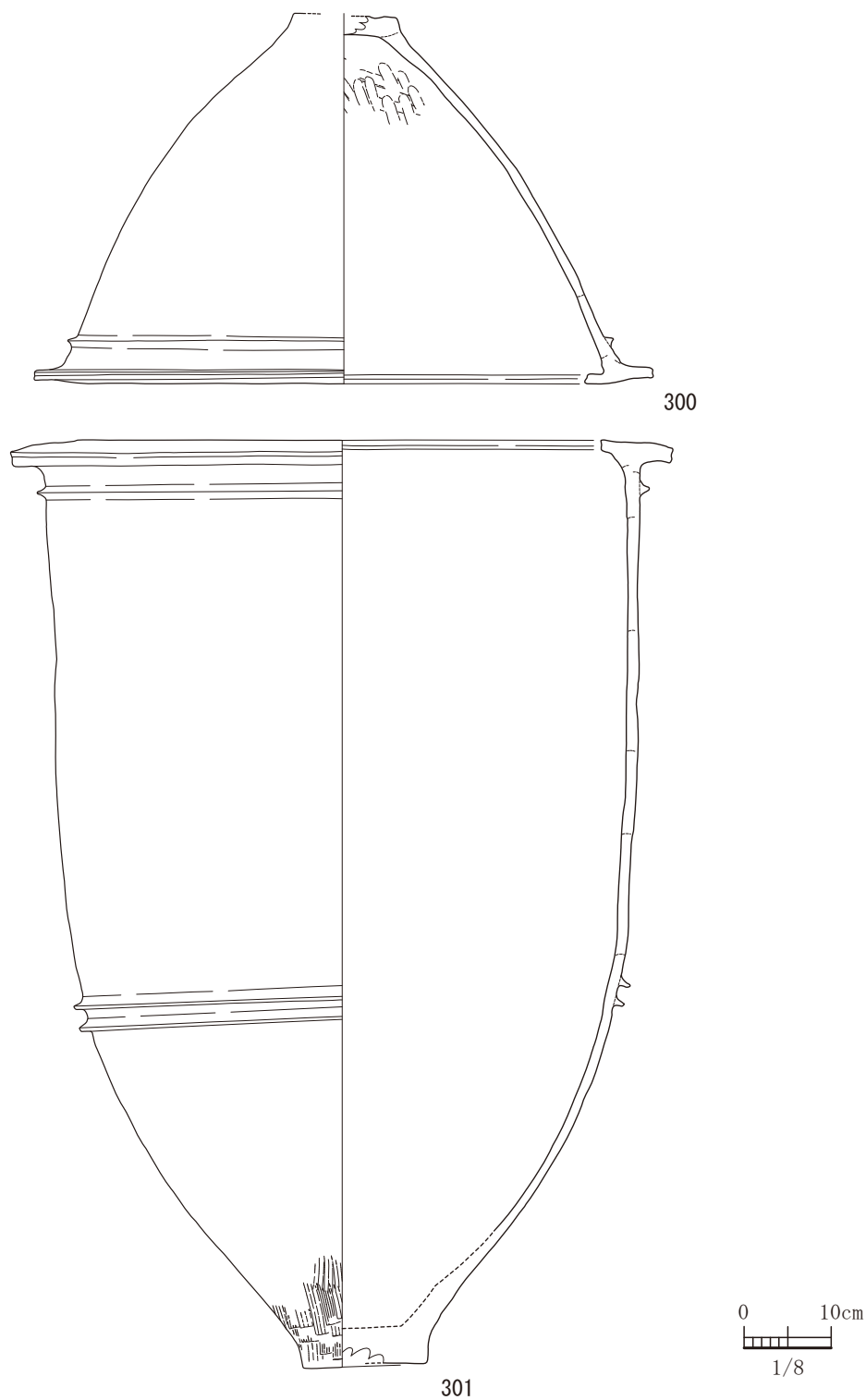
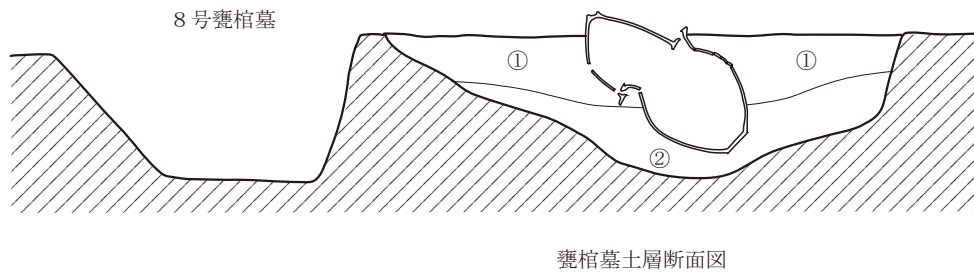
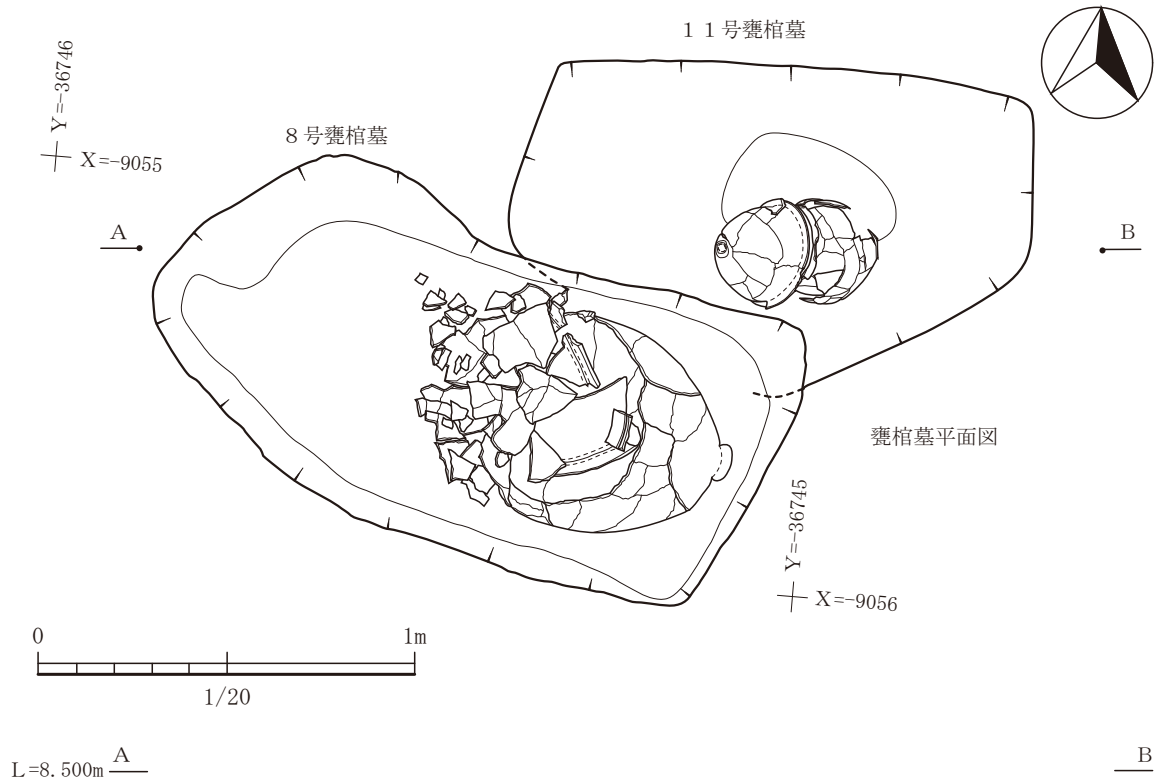


図-217 10号甕棺墓出土遺物実測図 (すべてS=1/8)

ではないと考えている。また甕棺の全体的な出土状況としては、土圧によりつぶれた状態で出土している。さほど剥平を受けていない様子であった。検出

した時、胴部外面にススが付着していた。甕棺内部の埋土からは副葬品は出土しなかったが、骨粉が検出された。



- ①黒褐色(7.5YR3/2)粘質土。橙色の小粒子を含む。砂礫を少量含む。
- ②暗褐色(7.5YR3/4)粘質土。炭化物の小粒子を少量含む。小礫をブロック状に含む。

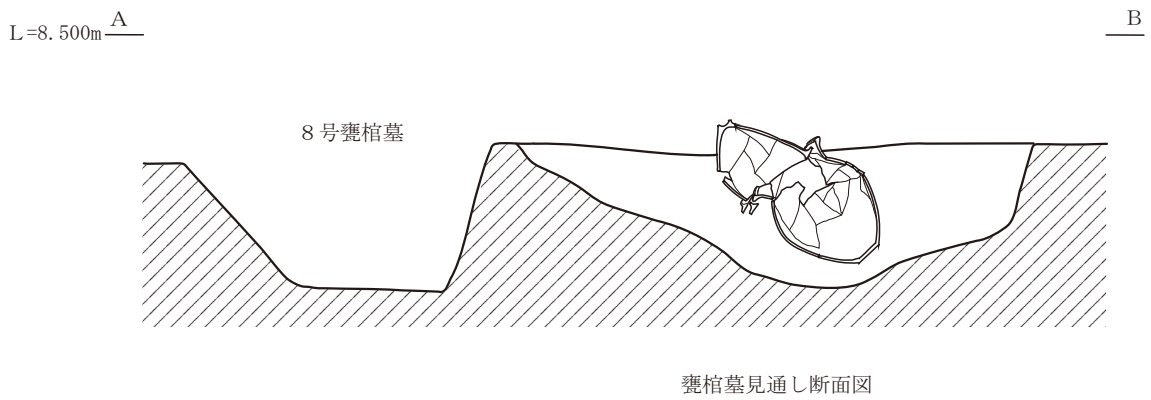
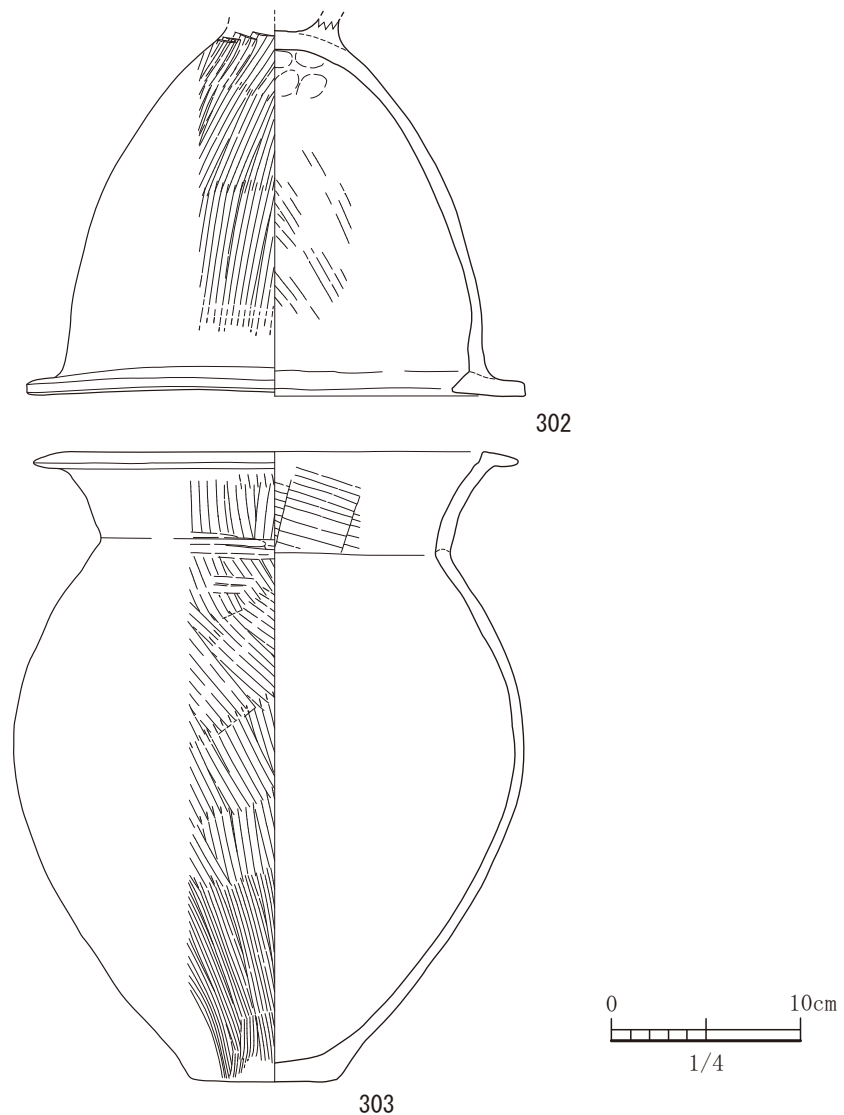


図-218 11号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)



図一219 11号甕棺墓出土遺物実測図 (すべてS=1/4)

上甕である300は、平底の鉢形土器である。口縁部は「T」の字状の断面形状を呈しており、口縁端部は鋤先状に作り出している。口縁部は平縁であるが、端部に向かってやや垂れさがっている。底部の一部で欠損しているがほぼ完形である。頸部直下に断面形状が三角形の突帯文が一周めぐる。調整では、口縁部周辺で内外面ともにヨコナデで、胴部から底部にナデ調整である。内面はナデ調整で底部付近に指頭圧痕が見受けられる。底部に黒斑がある。下甕の301は、口縁部の断面形状は、「T」字状を呈し、上甕同様、口縁端部にむかってやや垂れさがる傾向にある。口縁端部は鋤先状に成形してある。胴部は膨らむことなく、長胴となって最大胴径は頸部直下である。突帯文は、頸部直下に1条、胴部がすばまるとこ

ろに2条あるが、これは「M」字を意識したものと思われる。内外面ともにナデ調整であるが底部外面付近にハケ目調整が残っている。内外面ともに黒斑が認められる。

#### 11号甕棺墓

11号甕棺墓は、平坦地区の7区で8号甕棺墓と切り合って検出されたもので、8号甕棺墓よりは古い。合口甕棺墓である。墓坑は、長軸方向は東西を向き、長軸1.35mである。南側壁は、8号甕棺墓によって壊されているため形状や短軸の長さ等は不明であるが、少なくとも0.84mはありそうである。平面形状はややいびつな長方形プランである。墓坑の床面はフラットではなく、甕棺を据えてある部分が最も深く、周囲に向かって浅くなっていく。東側の壁は急崖状で、西側

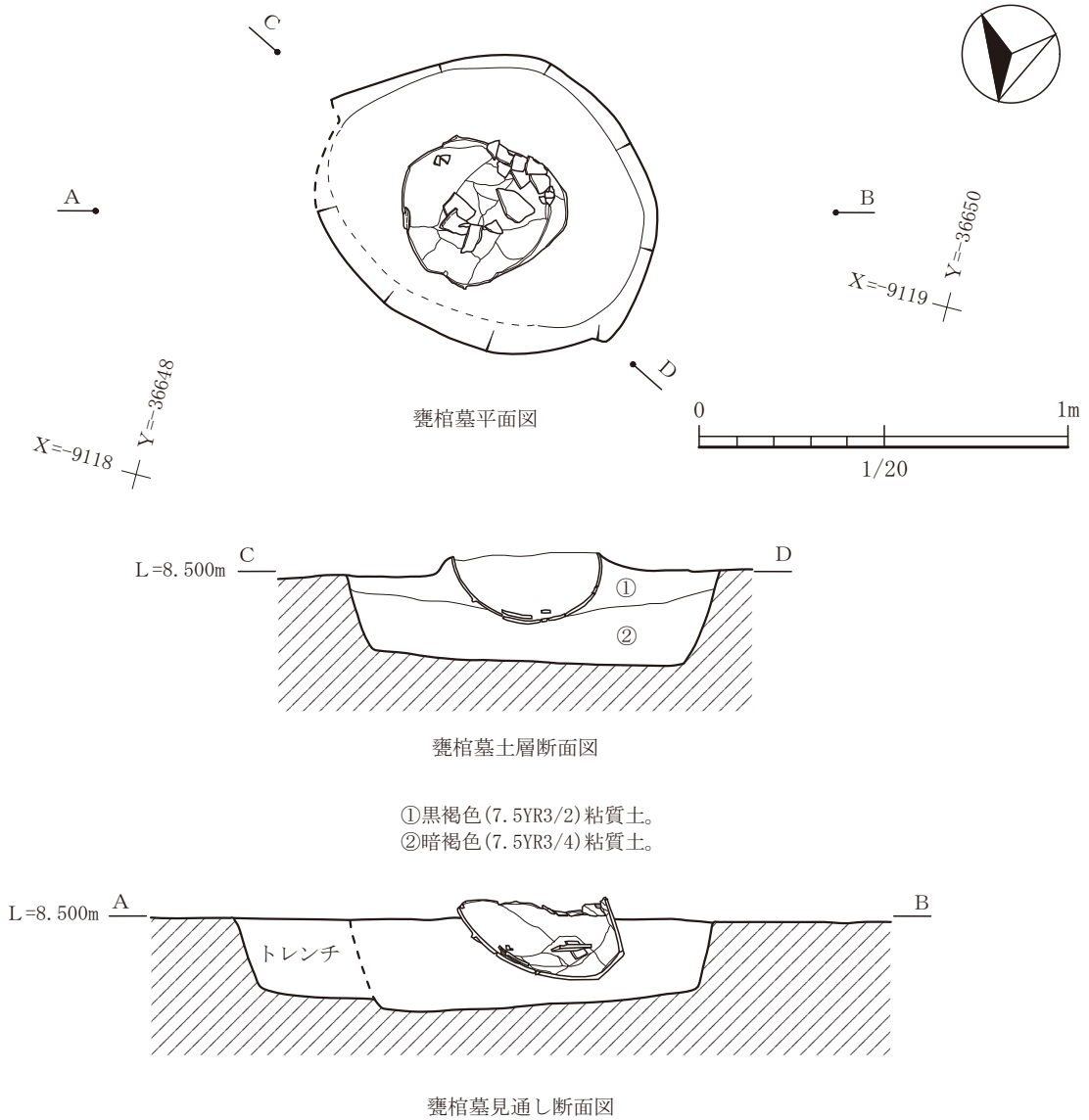


図-220 12号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

は緩やかな傾斜をもつ。墓坑は、竪穴部のみで構成され横穴部を伴わない。また、明瞭な前庭としては認められないが、やや西側に平坦な部分を作り上げようとしている。甕棺の埋置方向は、N87°Wで、埋置角度は約43°である。出土状況では、土圧によってつぶれ、口縁部が下にずれて検出された。

上甕の302は、台付甕であり、口縁部は平縁であり、端部は平坦化している。口縁部の内外面ともにヨコナデで、外面の胴部はハケ目、底部及び脚部はナデ調整である。内面はハケ目後ナデ調整である。頸部直下に黒斑がある。口径は、26.0cmである。下甕の303は、平底の壺形土器である。口縁部

は平縁であるが、口唇部は垂れさがる断面形状である。内側には明瞭な突起をもたない。外面胴部の下半分はハケ目調整、上半分はハケ目のち工具によるナデ調整である。口縁部の外面はヨコナデ調整である。内面は口縁部から頸部は工具によるナデ調整で、胴部はナデ調整である。口縁部から胴部にかけて赤色(7.5R4/8)の赤色顔料痕が残る。上甕の口縁部にはその痕跡がないにも関わらず、下甕の口縁部から胴部にかけてその痕跡を残す。6号甕棺墓も同様であったが、下甕の口縁部から胴部に顔料痕が残っていた。遺体を下甕に収めた状態で顔料をふりかけ、上甕をかぶせたのではないかと推察する。この



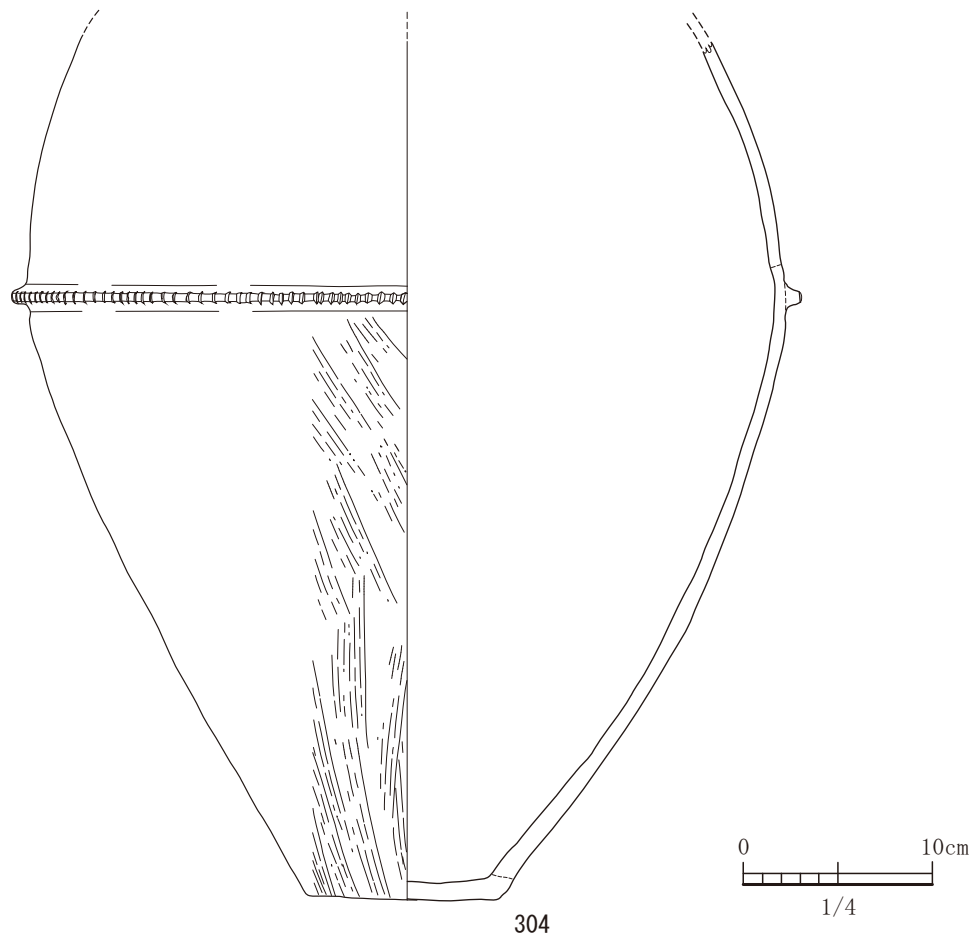


図-221 12号甕棺墓出土遺物実測図 (S=1/4)

間、祭祀的な行為が行われた可能性がある。底部付近に黒斑が認められる。口径は、25.7cmである。

### 12号甕棺墓

12号甕棺墓は、平坦地区の8区で単独で検出されたものである。墓坑の長軸方向は、N60°Wであり、検出面での長さは長軸0.95m、短軸0.78mである。平面形状では、卵型の楕円形を呈する。検出面から墓坑床面までの深さは0.26mであり、非常に残りが悪い。後世に剥平を受け遺構の上半分は破壊されている状況での検出であった。遺物包含層から出土した破片とは接合することはできなかった。現代に近い段階での剥平であろう。遺構の東側にトレンチを入れたため壁を壊してしまったが、図-220には図面上復元して破線で表している。墓坑は竪穴部のみで構成され、横穴部は伴わない。床面は平坦な形状となっており、窪み等は検出されなかった。また、この竪穴部には、前庭の一段高くなった部分はなかった。甕棺は、②の土を入れて貼り床状に床を

つくって屍床部を作り出している。床面の掘方に直接甕棺を埋置していないのは屍床部を作っているためかもしれない。同じような埋葬法を取っているのは、14号甕棺墓である。甕の中の埋土からは、土圧によって崩落した破片が含まれていた。しかし、検出された甕に接合できたものもあればできないものもあった。できなかったものは、あくまでも接点がないだけで、検出された甕のものか上甕のものであるか不明である。合口甕棺であったのか、石蓋をかぶせた甕棺であったのかは、現状の出土状況からは決定づけることはできない。甕棺の埋置方向は、N78°Eであり、埋置角度は約45°であった。甕内部の埋土からは副葬品や骨粉などは検出されなかった。下甕の口縁部は東北東の方角に向いている。

出土した304は、平底の甕形土器であると考えられる。胴部の肩から上は、剥平を受け欠損している。最大胴部に断面形状が台形の刻み目突帯文が1条めぐり。刻み目突帯文を境に胴部の上半分では、磨滅

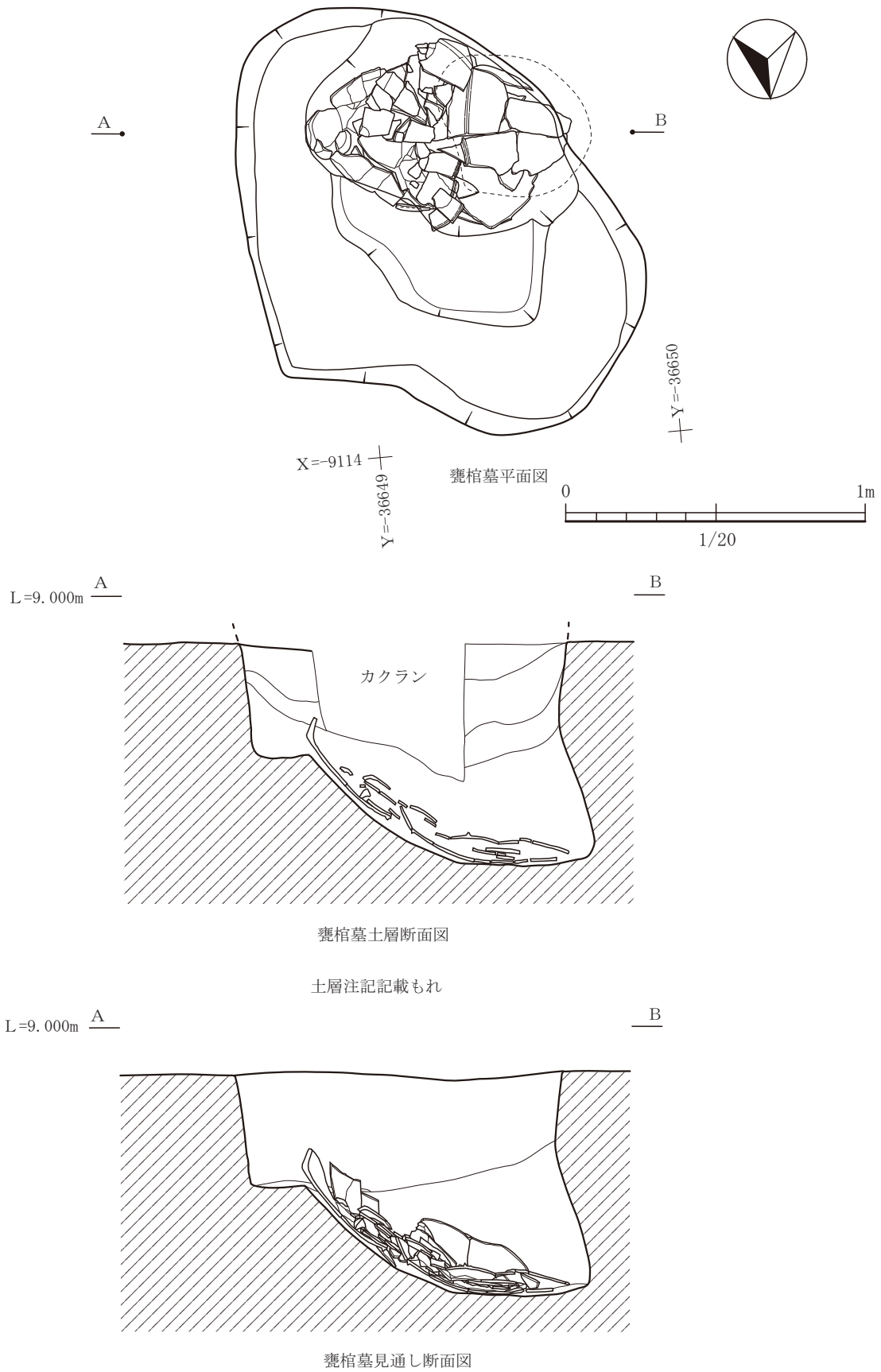


図-222 13号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

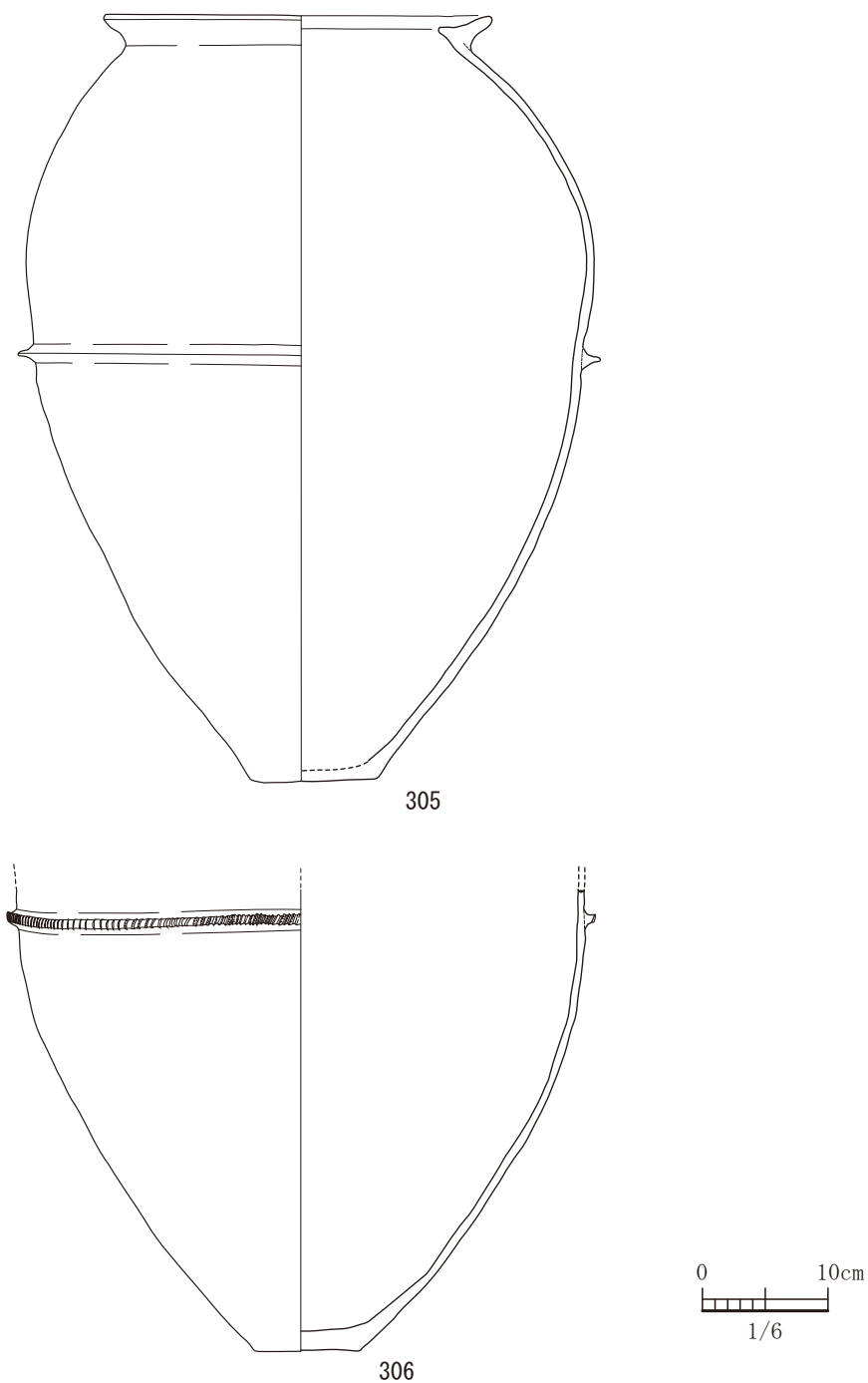


図-223 13号甕棺墓出土遺物実測図 (すべてS=1/6)

のため調整は不明である。下半分は、磨滅しているが僅かにハケ目調整が確認できる。外面の底部は、ナデ調整である。内面は、磨滅しているが、ナデ調整であることは確認できた。残存高は45.5cmで、復元胴部最大径は40.0cmである。やや小ぶりなところをみると小児用であろうか。

### 13号甕棺墓

13号甕棺墓は、平坦地区の8区で単独で検出されたものである。墓坑の長軸1.23m、短軸0.88mの平面形状で北東側がいびつであるが全体的には楕円形のプランである。長軸方向は、N36°Wである。中央部にカケランがあり埋土の一部が無くなっていたが、甕棺には影響がなかった。図-222の図

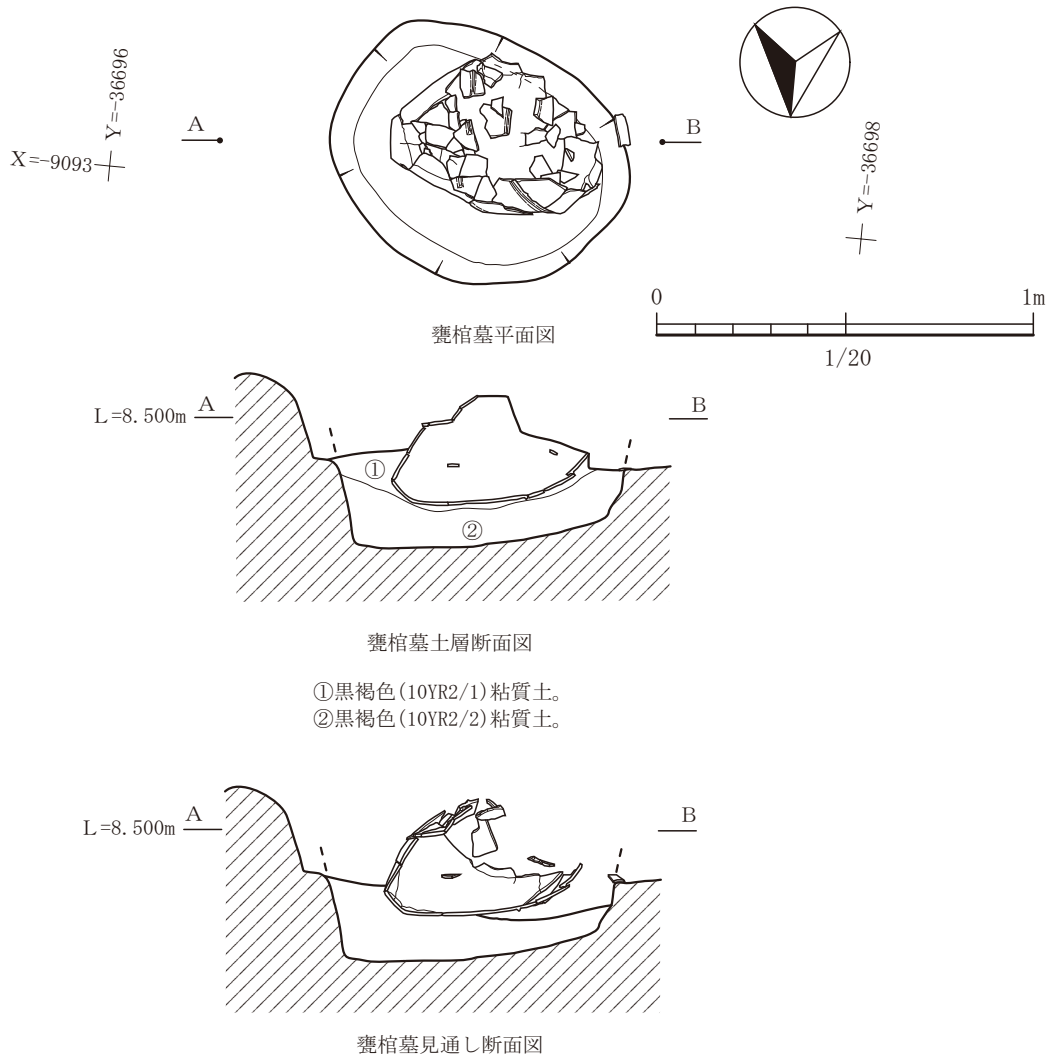


図-224 14号甕棺墓平面図及び断面図 (縮尺 1/20)

版中に土層注記がないのは、調査段階で土層を図面に記入するのを忘れていたため不明となっていました。墓坑は、竪穴部と横穴部をもち、上甕側にテラス状の前庭を持っている。墓坑の北側から東側に横穴をとり取り囲むように作りだされている。竪穴部は鉛直方向に掘り込んでいて、前庭までの深さは、0.38mである。竪穴の最深部までの深さは0.74mである。甕棺は土圧によって完全につぶれて出土した。埋土は甕棺がつぶれ中央部が沈み込むような堆積の仕方をしている。横穴部の軸方向は、N48°Eであり、奥行きが0.12mである。埋置されている甕棺はつぶれた状態で出土しているため、埋置傾斜の角度は不明である。埋置方向は、N85°Eである。横穴部の軸と約37°南側に振っているようである。甕棺

内部の埋土や遺構埋土からは副葬品や骨粉等は検出されなかった。

上甕の306は、平底の甕形土器である。胴部に1条の断面形状が台形の刻み目突帯文が施されている。上甕は突帯文より上部は欠落した状態で検出され、底部が上で突帯文が下にして検出されているため間違いなく上甕である。胴部から口縁部にかけての破片も出土していない。埋葬する際、上甕の口縁部から胴部まで打ち搔いて、下甕を覆うことができるようにしてかぶせている。内外面ともにナデ調整で、胴部外面全体に黒斑が認められる。残存する胴径は45.2cmである。下甕である305は、口縁部の断面形では「く」の字状の形状を呈しており、内側に突起状に作り出している。最大胴部は上部にあり、

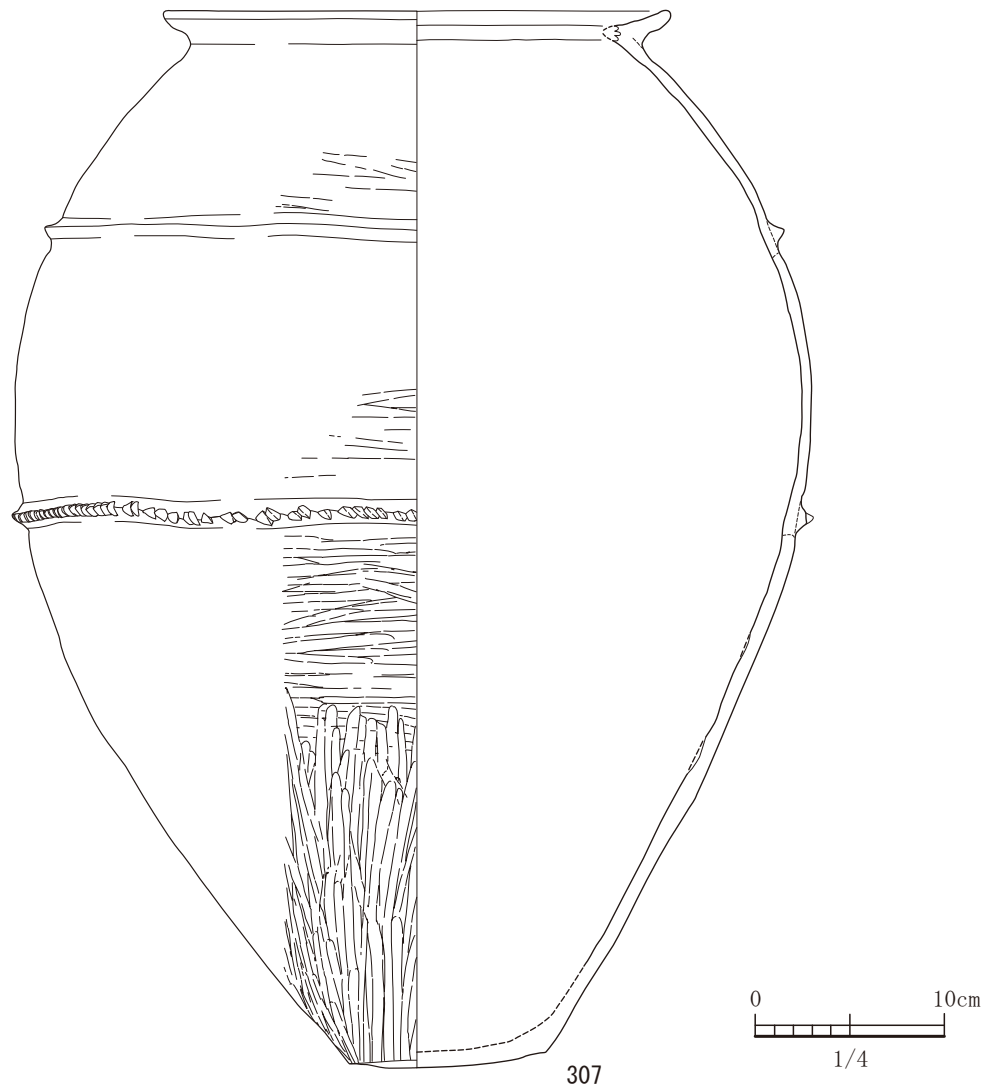


図-225 14号甕棺墓出土遺物実測図 1 (S=1/4)

最大胴部からやや下の方に断面形状が三角形の突帯がめぐっている。外面は、磨滅が激しく調整は不明である。内面は、全体的に磨滅しているが、ナデ調整であることは確認できた。胴部外面全体に黒斑が見受けられる。口径は30.2cmで最大胴径45.1cmである。上甕と下甕の胴部径を比較してもほぼ同じである。下甕の形の部分で接して被せてあったと考えられる。本遺跡において甕形土器の胴部から上を打ち掻いて、上甕としたものはこの13号甕棺のみである。

#### 14号甕棺墓

14号甕棺墓は、平坦地区の8区で単独で検出されたもので、遺構配置から考えると他の甕棺墓と異とする。本遺跡では、平坦地区が位置する舌状の台

地の中央に居住域、周囲に貯蔵域、そしてその周辺に墓域があるという配置である。この甕棺墓のみがその傾向から逸脱する。集落の中心が調査区より北側にあつて、14号甕棺墓が南側の墓域にかかっているとすると理解できる。しかし、南側は木葉川の付け替えにより完全に集落自体壊されているので、その状況はわからない。墓坑は、長軸0.79m、短軸0.64mの平面形状が楕円形のプランである。長軸方向はN70°Wに向く。墓坑は竪穴部のみであり横穴部を伴わない。12号甕棺墓と同じように、竪穴の掘方に直接埋置するのではなく、床に土を入れ床(貼り床)を作って屍床部になっている。埋土②は甕棺の器壁に沿うように形成されているので、明らか



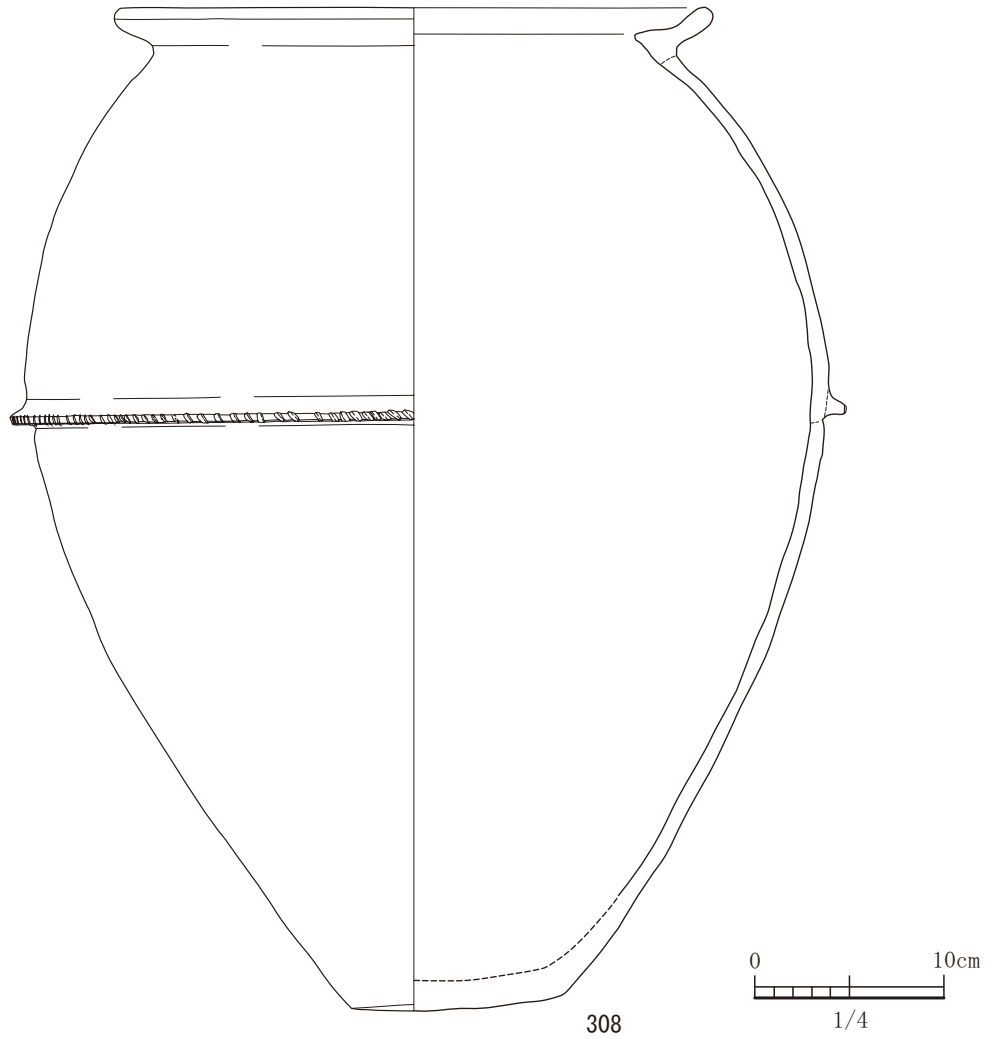


図-226 14号甕棺墓出土遺物実測図 2 (S=1/4)

に意識して構築されているようだ。遺構プランを検出した当初は、遺構配置から甕棺墓があるような場所ではなかったため、土坑墓として埋土を掘削していた。ところが、掘削中に出土遺物の量が増え始め、やや大きめの甕形土器であることが判明し甕棺墓としての調査に移った経緯がある。よって下甕が検出された時点から記録を残した。上甕は一括して土器片を取り上げている。出土状況としては土圧によってつぶれた状態であった。検出されたとき甕棺は、埋置方向はN86°Eで、下甕の口縁部は西側を向く。埋置角度は約31°であった。本遺構の西側は後世の剥平のため欠損しているが、下甕と上甕の大きさから竪穴部に前庭がないと甕棺が収まらない。おそらく前庭があったものと考えられる。

出土した307は、下甕である。平底の甕形土器で

ある。口縁部は「く」の字状の断面形状を呈し、内側の突起は欠損している。胴部の肩の部分に断面形状が三角形の突帯文がめぐり、最大胴部の直下にも断面形状が三角形で刻み目を施す突帯文をめぐらしている。外面底部はナデ調整で、胴部はヘラミガキ調整である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、内面は胴部から底部にかけナデ調整である。外面で、刻み目突帯文から口縁部にかけて赤色顔料痕が見られる。他の甕棺墓と同じく下甕のみの塗布である。黒斑は肩のみ見られる。308は上甕である。口縁部の断面形状は、「く」の字状であるが口唇部がややしゃくりあげるように上方に立つ傾向にある。最大胴部に1条の突帯文をめぐらしている。断面形状は台形である。内外面とも磨滅のため調整が不明瞭である。外面の口縁部と胴部の一部に黒斑が見られる。



### (3) 古墳時代

#### 1) はじめに

古墳時代の遺構として、竪穴住居が21軒、土坑が7基、溝が1条検出された。遺構は舌状地の平坦地区に限られ、あまり切り合うことなく検出されている。弥生時代中期における集落の構造で顕著であった、住居域・貯蔵域、墓域の区画分けはなされていない。弥生時代とは異なり住居跡に隣接して土坑が配置されている。竪穴住居では、プランが隅丸方形と方形に分類でき、主軸方向で大きく分けて2方向に分類できるようである。古墳前期の竪穴住居は北西から北にとり、古墳中期は北東にとる傾向にあることがわかる。上屋に関しては、1本柱、2本柱、4本柱とばらつきがある。付帯設備に関しては、炉がつくものとカマドがつくものに分けることができる。時期的には、住居跡では、16軒が古墳前期、2軒が古墳中期、2軒が古墳後期である。2軒は詳細時期は不明である。土坑については、4基が古墳前期で、残り3基は詳細時期は不明である。溝は1条であったが、古墳前期のものであった。このように、ほとんどの遺構が古墳前期の所産であるが、遺構配置の状況から遺構が北側に集まる傾向にあり古墳前期の集落の中心はもっと北にあったのではないかと推察される。

#### 2) 各遺構・遺物について

##### 23号住居

23号住居は、平坦地区の1区の西側で単独で検出された住居跡である。この住居跡の埋土は混濁したようにたいへん乱れた土であった。この遺構は44号住居と73号土坑と切り合っていた。これらの遺構は古代のものであり出土遺物からも切り合っていることはわかったが、どうしてもプランが確定できなかった。本遺跡では最も検出しにくい遺構であった。北西側は調査区外で不明である。埋土の残りは12cm程度であった。よって主軸方向をつかむことができず、暫定的に土層ベルトを設定して埋土掘削にあたった経緯があり、軸に沿って断面図を作製できなかった。最終的に掘方でプランの確定に至ったが、その結果、主軸はほぼ北を向いていた。南北が5.0m、東西が5.5mであった。平面形状では、ほぼ正方形といってもいい隅丸方形のプランであろう。柱穴としては、4基検出しているが、整然と並ぶような配列ではない。柱穴の深さや配列からこの4基しかなかった。柱穴

の深さは非常に浅く、17～21cmの深さである。柱を埋め込んできちんと固定するのではなく、柱自体が動かないようにするためのものであればこの深さでも十分であったのではなかろうか。炉は住居跡の中心から東方向にずれたところに構築されていた。炉の底には焼土がまとまって検出されている。また、炉の西側には焼土塊が認められた。炉内から掻き出したものであろう。焼土の中から5～6cm程度の焼けた角礫も認められ炉として機能していた時、炉で使用していたものであろう。付帯設備として貯蔵穴は認められなかった。また、ベッド状遺構も敷設されていなかった。

出土遺物は、遺構埋土の残りが悪い割には、豊富である。実測可能な遺物だけでも、土器が29点、石器が1点であった。309は、台付き坏である。底部は肉厚となる310から319までは外面がハケ目調整で内面がケズリ調整の土師器の甕である。310は重心は中位で胴部に膨らみをもつ。口縁部は外反する。311は、重心が低位に下がり下膨れの長胴で、口縁部がやや外反する。312は、球胴形で口縁部は上方へ延びる。内面にタタキが残る。313は、球胴形で、底部の器壁が薄くなる。314は、外面で斜め方向のハケ目から横方向のハケ目調整である。口縁部は上方へ延び水平に近い面を持つ。底部は欠損している。315は、口縁部はやや内湾し、ややなで肩の胴部である。316は重心は中位で、胴部に膨らみをもつ。317は、口縁部はやや内湾し、端部がやや内傾する。318は胴部はなで肩で、口縁部はやや外反さみである。319は口縁部はやや外反さみで口縁端部が内傾する。320は小形の甕である。口縁部は大きく外反し、胴部はなで肩である。321は、甕の胴部上半部から口縁部である。口縁部はやや外反し、胴部の器壁より肉厚である。322から325までは壺である。322は壺で基部のくびれはやや弱く、口縁部は外反する。やや肩が張る胴部をもつ。胴部は外面がハケ目調整で、内面はヘラケズリを施す。底部に見られる孔は内側から力が加わって割れたようになっており打ち搔いた穿孔ではなく欠損と思われる。323は、壺で基部のくびれはやや弱く、やや長く開く口縁部をもつ。324は短頸であり、口縁部は直立する。外面と口縁部の内面に赤色顔料痕が残る。325は、口縁部は欠損しているが、壺と思われ基部は強くくびれる。肩部に2条の波状文をめぐらす。326は、甌である。尖底部には穿孔が施されている。全体的には、内面がヘラケズリで外面がハケ目

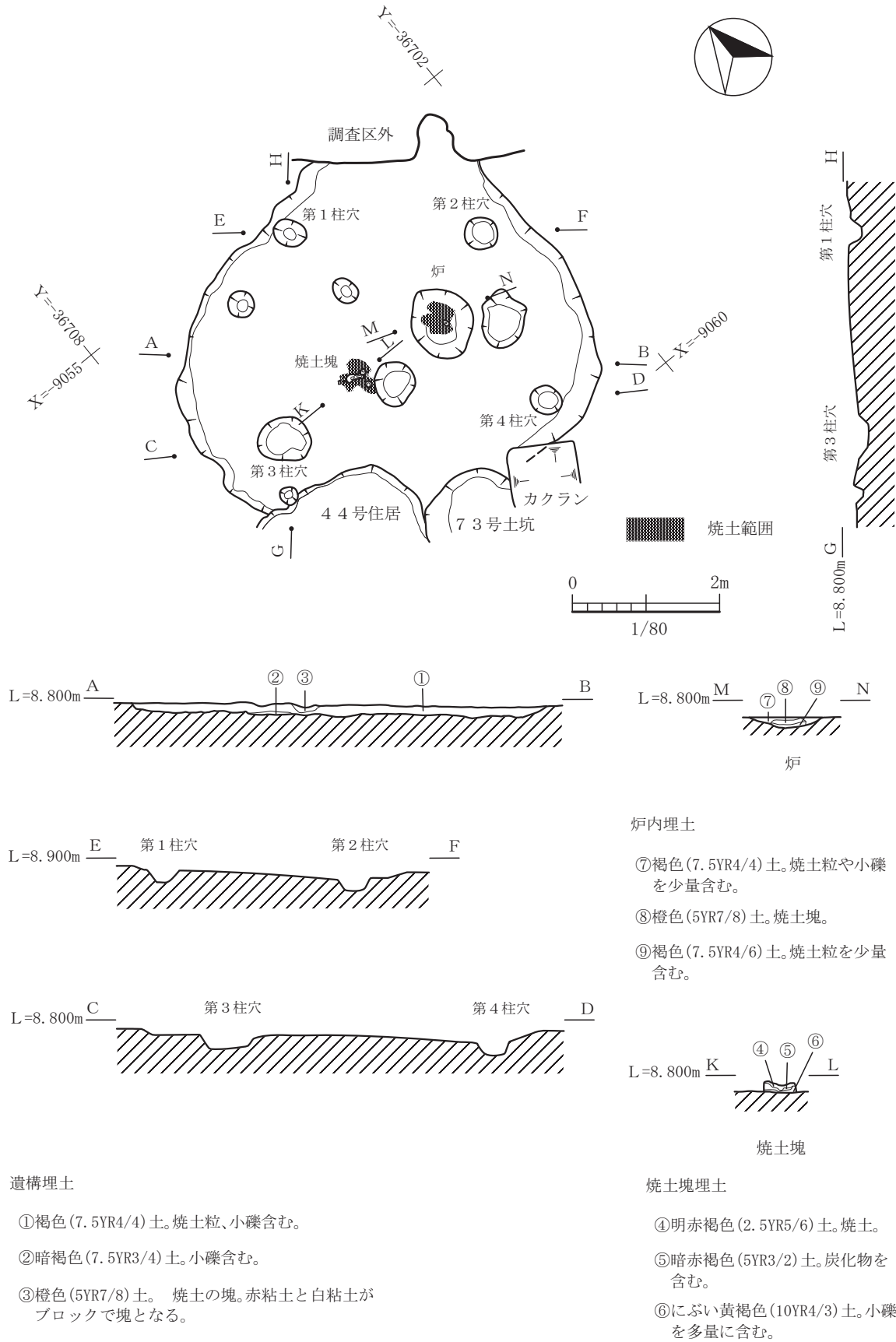


図-228 23号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

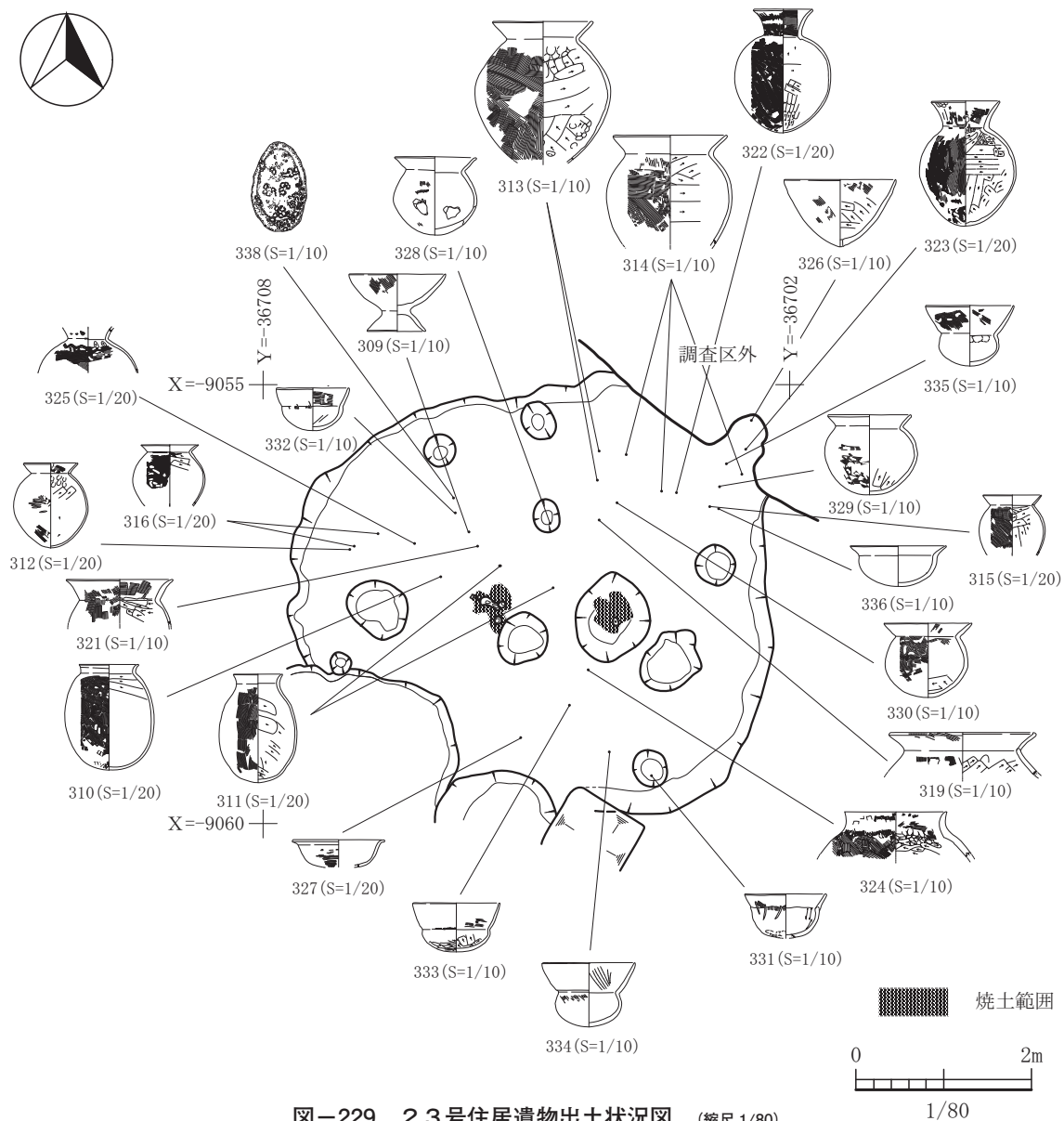


図-229 23号住居遺物出土状況図 (縮尺 1/80)

のちナデ調整である。327は土師器の鉢である。外面にハケ目痕が残る。328から330までは小形の甕である。328は外面がハケ目のちナデ調整。内面がナデ調整である。2箇所穿孔を施す。329と330は、内面がヘラケズリで外面がハケ目調整である。口縁部は真っすぐ上方へ延びる。331から335まで小形丸底壺である。口縁部が体部を凌いで外方に延びるものである。334と335は頸部のくびれが顕著である。336は小形「く」字口縁鉢である。頸部のくびれはほとんどなく「く」の字状に折れ曲がる。337は、手捏ね土器である。338は、軽石製の石製品で、用途は不明である。23号住居は、古墳時代前期の遺構である。

#### 24号住居

24号住居は、平坦地区の1区で単独で検出され

た遺構である。北側はカクランによって完全に削平されていた。検出面は、床面とほぼ同じ高さであって、埋土の残りが非常に悪かった遺構である。よって、廃絶された後残存していたかもしれない遺物類は後世の剥平のため消失してしまっているものと考えられる。上屋を支える柱は1本である。柱穴の深さは約37cmであった。また、炉は柱穴の南側に位置し、深さが約10cmの掘り込みをもつ。炉の内外の床面には炭化物が認められ、その上に焼土がのるように検出された。炉周辺の遺構埋土中にも住居跡の堅穴を埋積した際のまきあげによる炭化物や焼土の混入が南側ほど多く見られる。硬化面は、柱穴を取り囲むかのように主に東側半部で検出されたが、西側は剥平によって欠落しているため確認できなかった



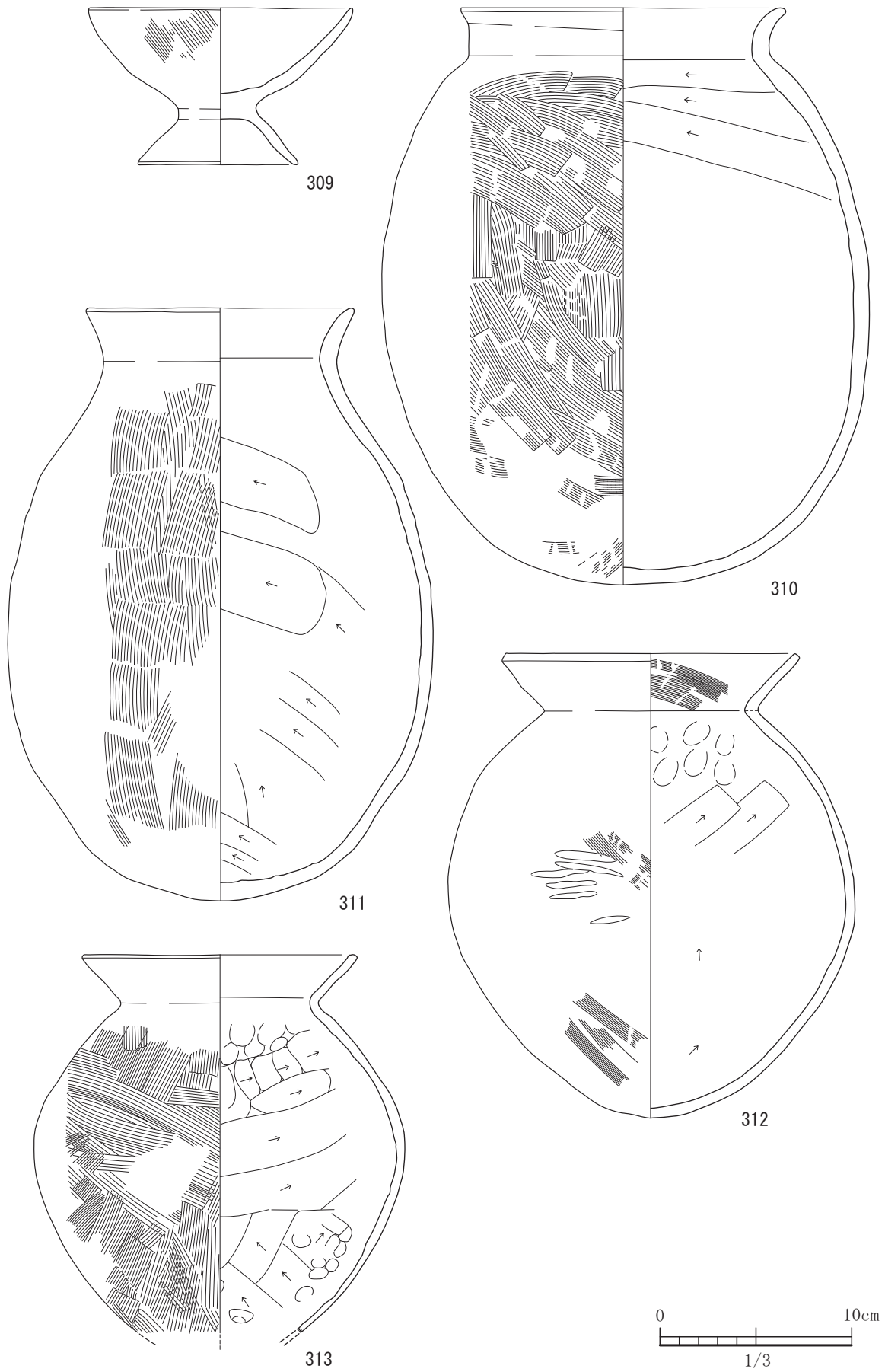


図-230 23号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

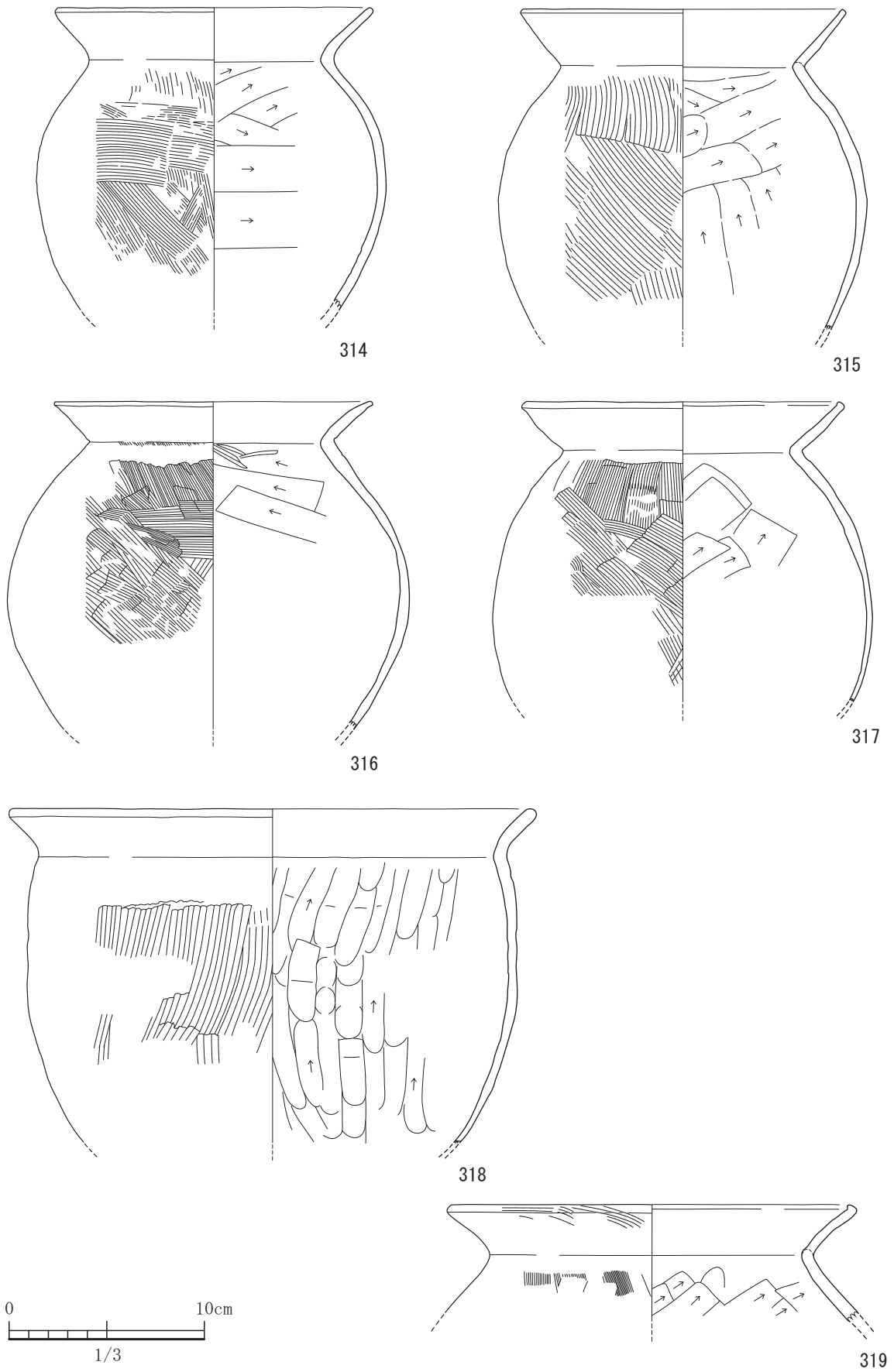


図-231 23号住居出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

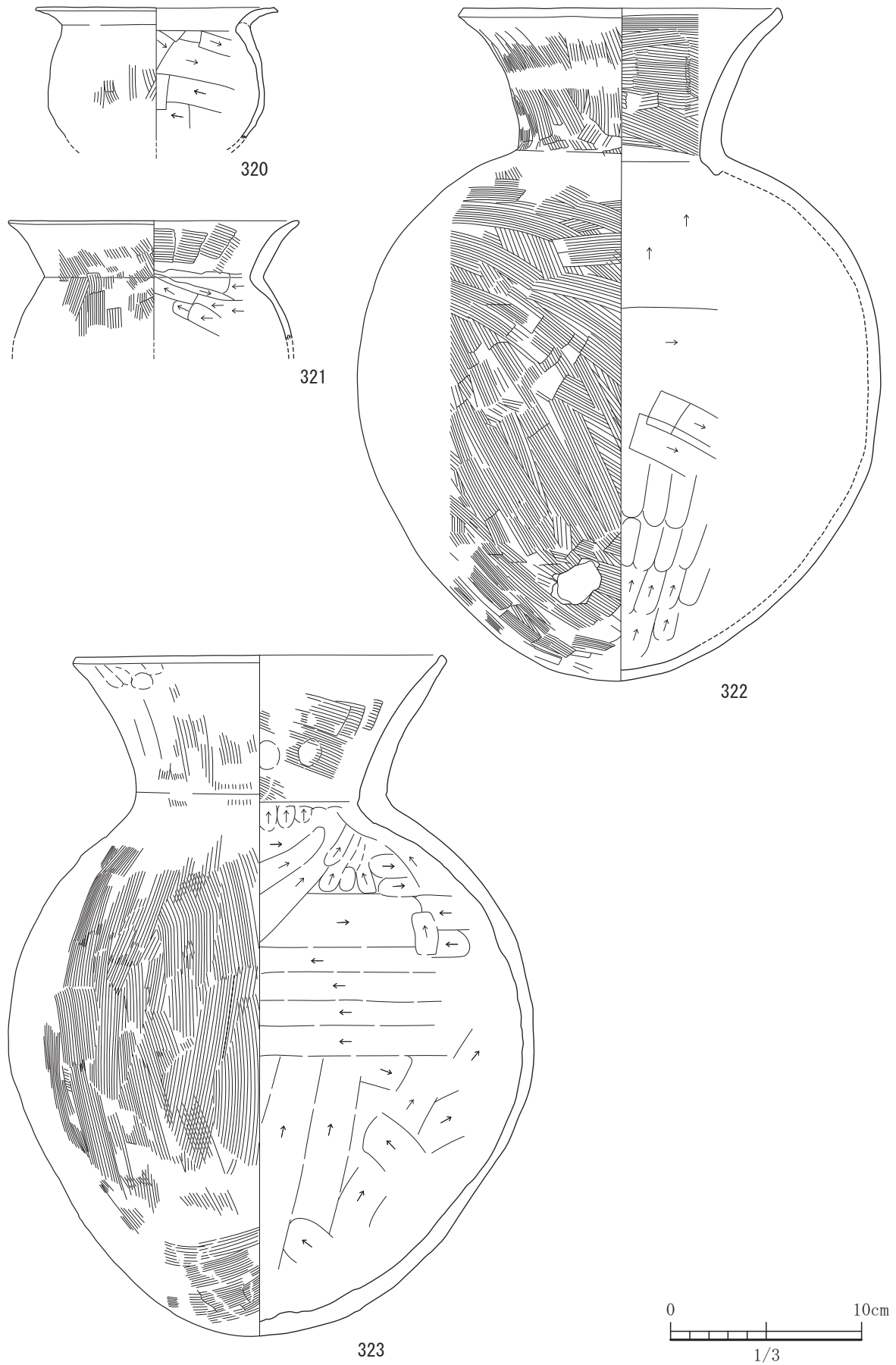


図-232 23号住居出土遺物実測図 3 (すべてS=1/3)

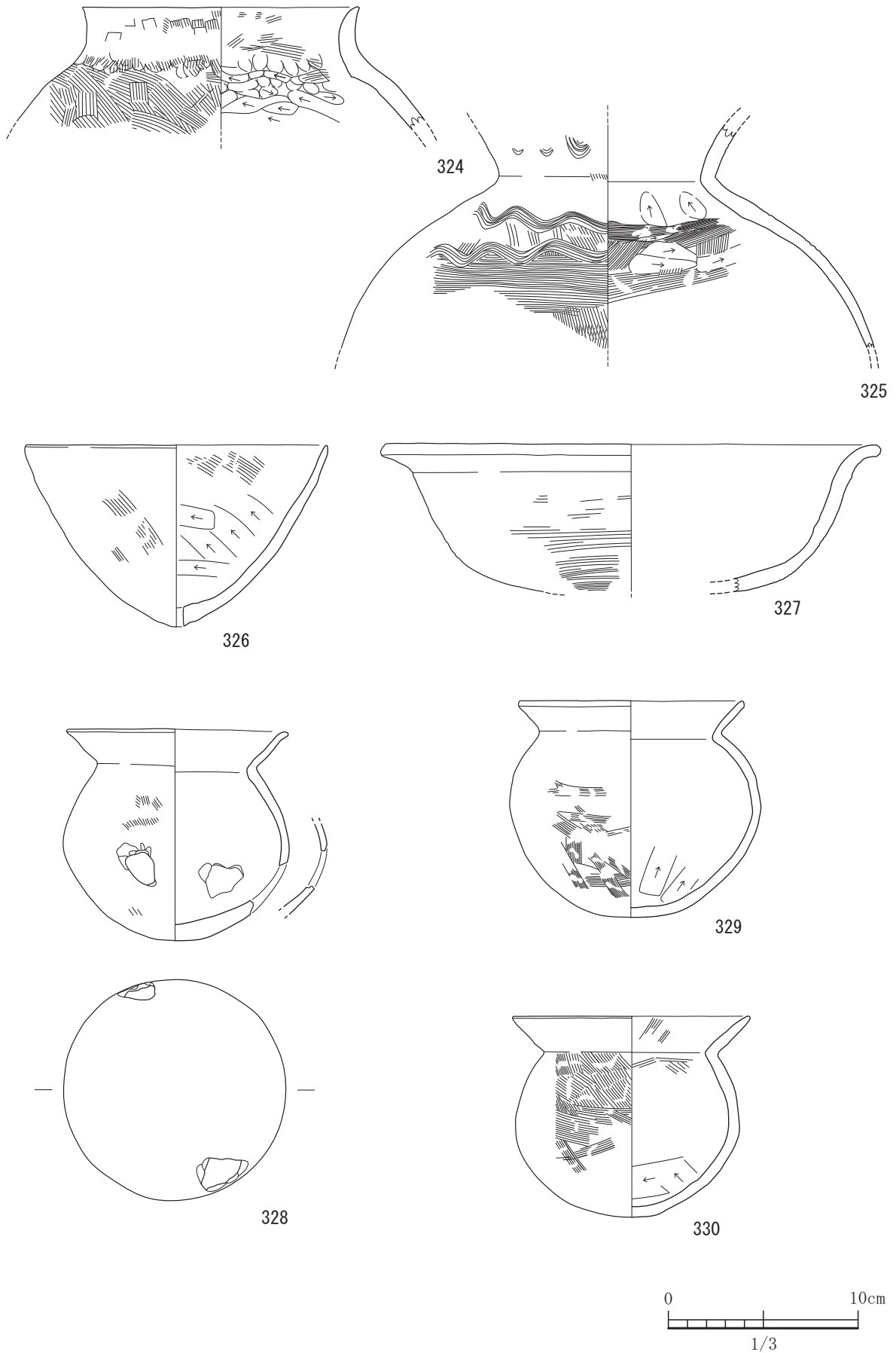


図-233 23号住居出土遺物実測図 4 (すべてS=1/3)

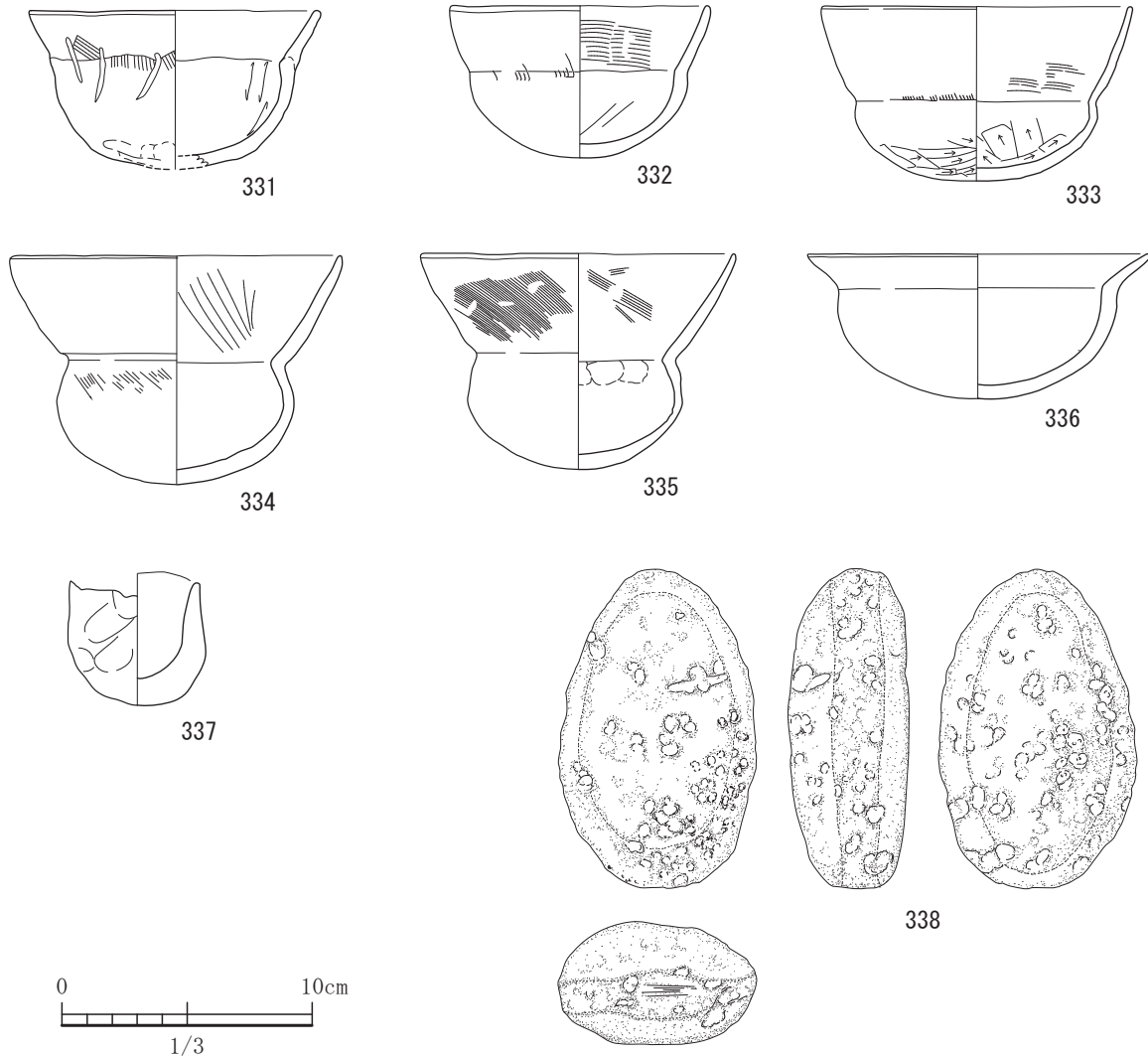


図-234 23号住居出土遺物実測図 5 (すべてS=1/3)

がおそらく西側にも硬化面が延びていたのではないかと推察される。出土遺物は土師器片が確認されたが、実測可能な遺物は339の1点のみであった。339は、小形丸底壺である。外面底部付近はヘラケズリを施し、頸部付近はハケ目調整で、内面はナデ調整である。口縁部は短く、底部はやや平底状をなし、きれいな丸底ではない。古墳時代前期の所産と考えられる。

#### 25号住居

25号住居は、平坦地区の1区で27号住居と切り合って検出された遺構で、本遺構が古い。住居跡の長軸はN50°Eの方向にあり、長軸4.00m、短軸3.36mの長方形プランである。上屋を支える柱は2本である。柱を埋め込んだ柱穴は、住居跡の軸からやや傾いて配列されている。第2柱穴は第1柱穴と比べると約15cm深く39cmである。炉は柱穴を結ぶ線より

やや北西側に配置されている。炉の形状は東側がテラス状をしている。炉の中には焼土粒を多量に確認できた。また、床面には、炉の南側で炭化物が散ったように広がっていた。炉の灰を掻きだしたものではないだろうか。床面から、柱に使用したとは思えない用途不明のピットが南隅のコーナーと北西壁付近で検出されている。埋土は約22cmと本遺跡では残りが良い方である。故に、遺物もやや多めに出土している。出土遺物は、住居跡の中央部を中心に、実測可能な土器で10点、石器で4点出土している。古墳前期の所産である。340と341は高坏である。340は、坏部上半と下半の境の稜は明瞭であり段状を呈しており、上半はやや外反する。341は、上半と下半の境の稜は明瞭であるが、上半は直線的に上方へ延びる。342と343は甕である。胴部は球胴であり、なで肩ぎみであ



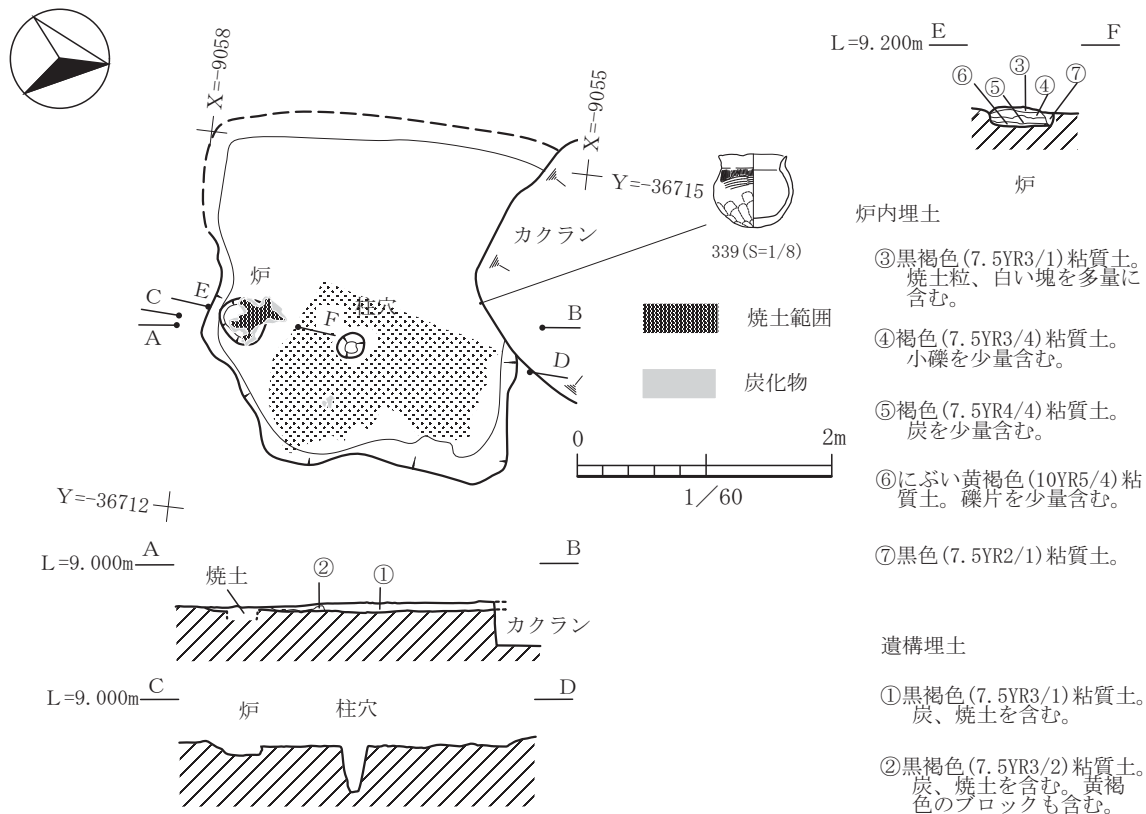


図-235 24号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

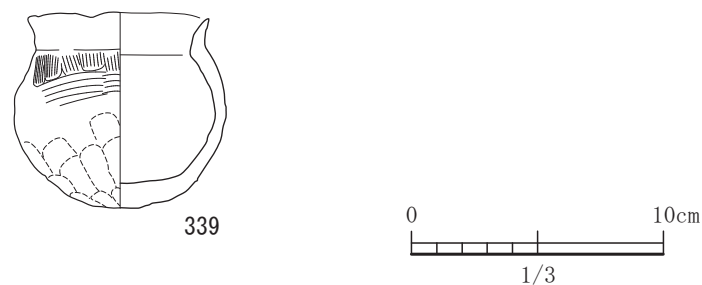


図-236 24号住居出土遺物実測図 (S=1/3)

る。器壁が薄い。343は口縁部が若干内傾ぎみである。344は複合口縁壺である。胴部以下欠損している。畿内系のものであろう。二次口縁は直立し、やや外反ぎみである。一次口縁と頸部の境界、頸部と胴部の境界が明瞭で角張っている。345は、有孔鉢である。穿孔は見込み部の一番底の部分に内面側から空けている。内外面ともナデ調整であるが粗い。口縁部周辺には指頭圧痕が残る。346と347は小形丸底壺である。346は、体部がつぶれた扁球形であり、口縁部は直線的に延びている。347は、扁球形であり、やや内湾ぎみである。348は、扁球形であり頸部のしまりが弱い。胴部から口縁部にかけて断面形状が「く」の字状を呈しており、小形「く」字口縁鉢である。349は、庄内

式系小形器台であろう。脚部は裾広がりで僅かに裾が外反ぎみである。350は、打製石鏃である。腰岳産の漆黒色黒曜石である。表面も裏面にも素材面を中央部付近に残す。351は、ヒン岩製の磨製石斧である。352は砂製の磨石で1/2の残存である。353は、角閃石安山岩製の敲石であり、敲打痕が明瞭である。

### 26号住居

26号住居は、平坦地区の1区で単独で検出された遺構である。長軸6.95m。短軸6.34mのいびつな楕円形を呈するプランの古墳前期の竪穴住居跡である。長軸の軸方向は、N11°Eである。上屋を支える柱は2本と考えられ、その柱穴は、整然と並ばず短軸方向から約19°振って配置される。炉は第2柱穴に

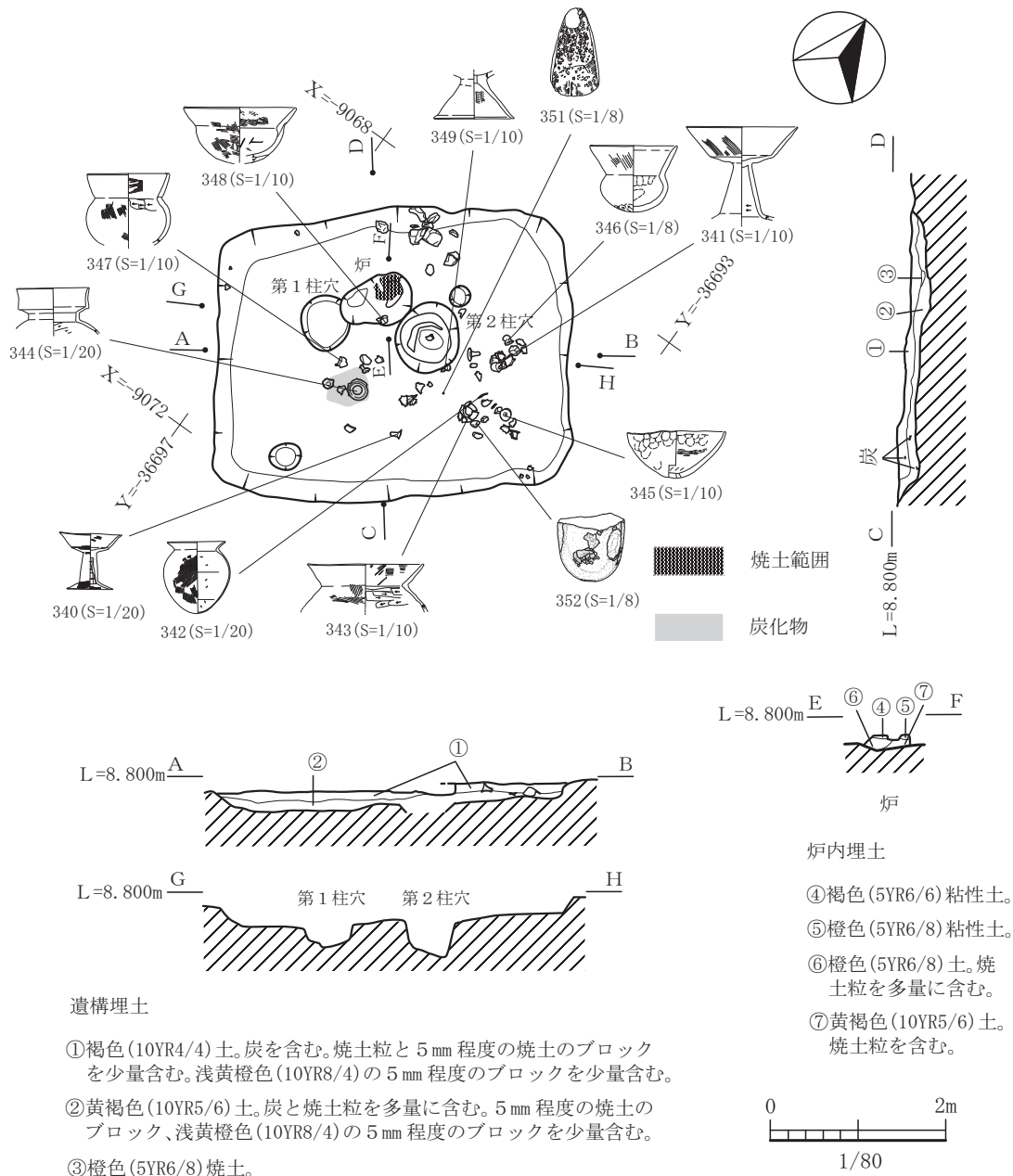


図-237 25号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

近い位置に設けられている。炉には、3箇所耳状のテラスが付設されている。用途は不明である。26号住居の特徴として床を貼り床にしているところにある。貼り床の埋土の層厚は、約8cmである。この貼り床を剥いだところ、第1柱穴の東側から新たな炉が検出された。炉は作り替えられているようである。旧炉であったものは埋めてそのまま床としていた。床面の硬化の度合いは弱く硬化面を形成するに至っていなかった。その他付帯設備は認められなかった。

出土遺物は、実測が可能な土器が13点、石器が3点であった。354と355は高坏である。354は、坏

部は屈曲して直線的に上半は立ち上がる。また脚部は、「ハ」の字状に広がり裾部が短く緩やかに広がる。355は、脚部が欠損している。坏部の屈曲は緩やかで上半は外反する。356と357は甕である。内面にケズリを施し、外面はハケ目調整である。356は、平底であり重心は上半にありやや肩が張っている。358は壺である。やや肩が張っており、口縁部は外反する。359は甕である。360と361は壺である。口縁部はほぼ直線的にのびる。362は胴部以下欠損している。甕か壺であろうが、口縁部は直上し口縁端部付近で少し外反する。363はそろばん玉形の土錘である。孔径は

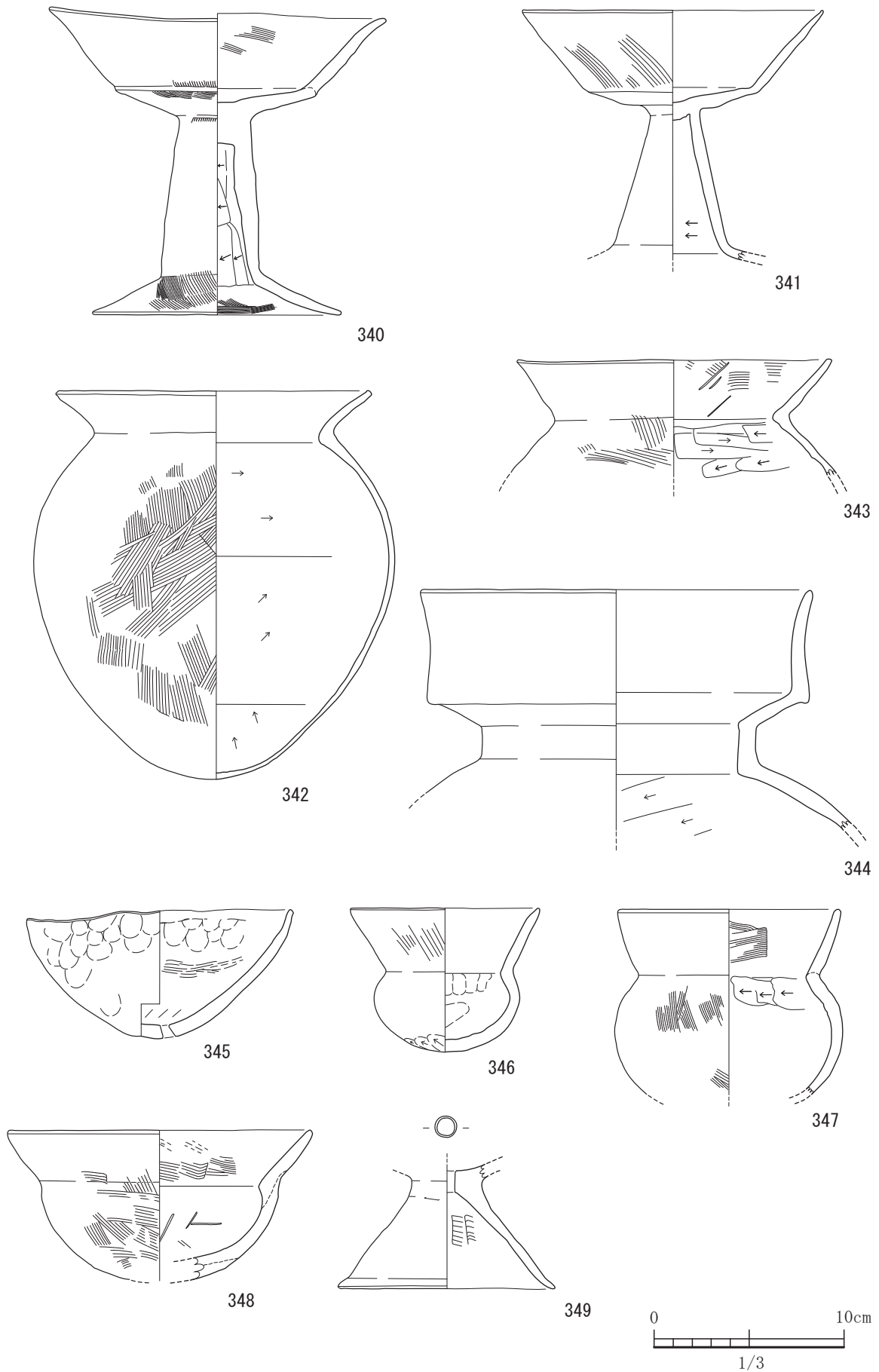


図-238 25号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

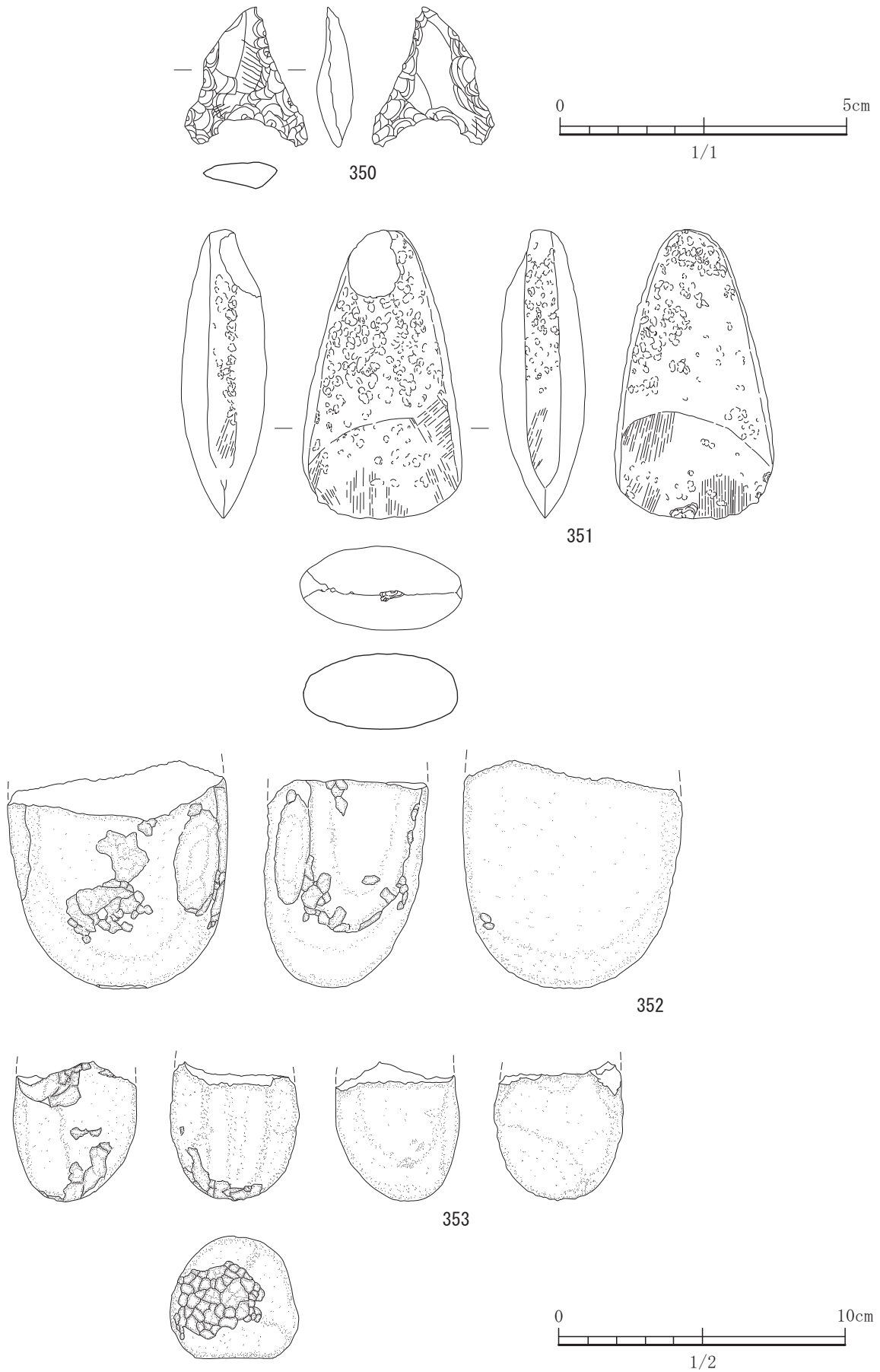
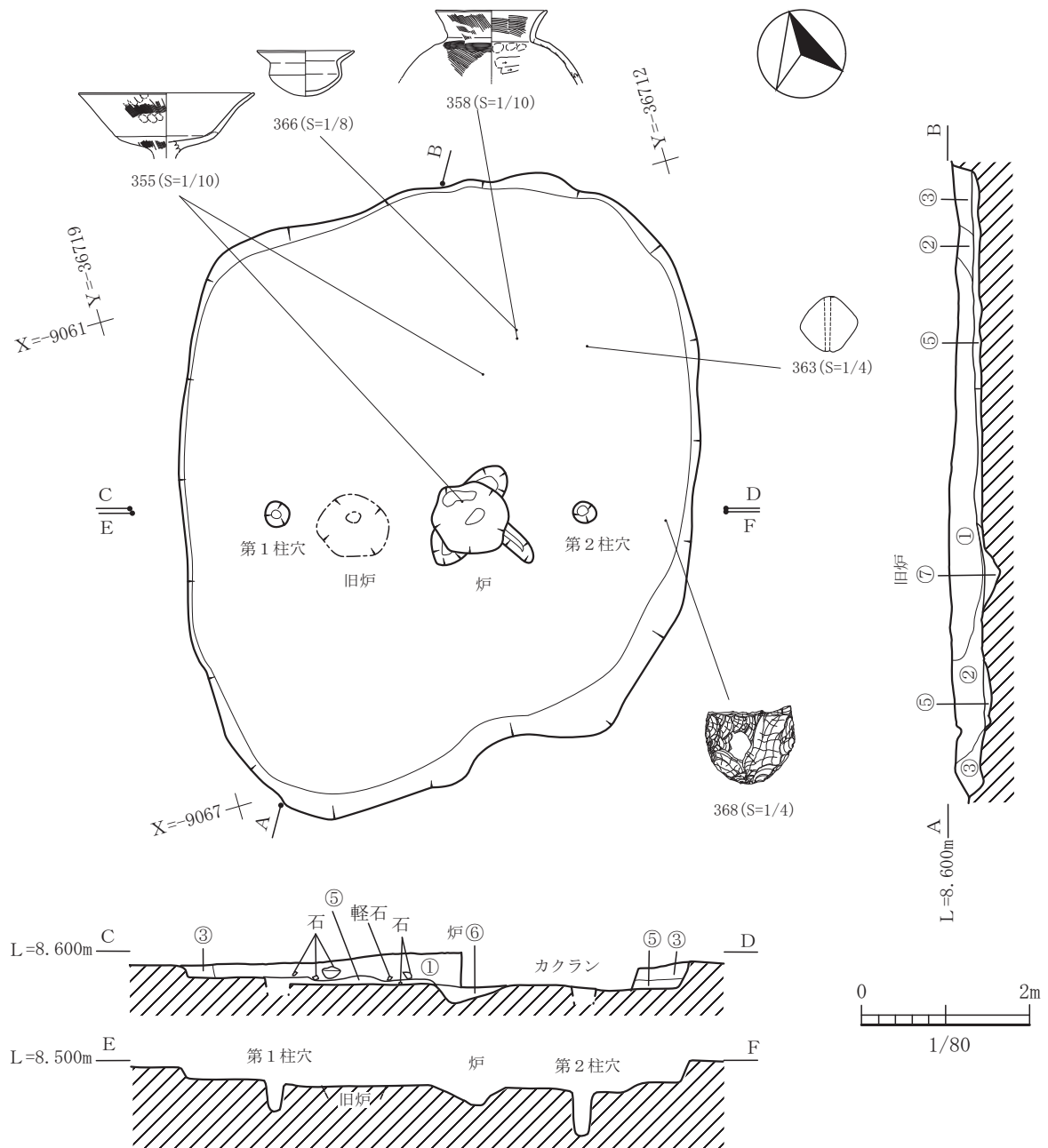


図-239 25号住居出土遺物実測図 2 (S=1/2, 350はS=1/1)



遺構埋土

- ① 黒褐色 (5YR3/1) 土。長さ 5 cm 以上の角礫含む。長さ 1 cm 程度の炭化物が点在。褐色の安山岩の風化したブロック (直径 5 mm) を含む。
- ② 黒褐色 (10YR3/2) 土。褐色の安山岩の風化したブロック (直径 5 mm) を含む。長さ 1 cm 程度の炭化物が点在。
- ③ 暗褐色 (10YR3/3) 土。長さ 5 cm 未満の亜円礫を含む。褐色の安山岩の風化したブロック (直径 5 mm) を含む。長さ 1 cm 程度の炭化物が点在。
- ④ 暗褐色 (10YR3/4) 土。直径 1 cm 程度の円礫を含む。黄灰褐色の粘土分多量に含む。

貼り床埋土

- ⑤ 暗褐色 (10YR3/4) 土。長さ 1 cm の炭化物を含む。

炉内埋土

- ⑥ 黒褐色 (10YR2/2) 土。長さ 1 cm 程度の炭化物を含む。褐色の安山岩の風化したブロック (直径 5 mm 未満) を含む。

旧炉内埋土

- ⑦ 黒褐色 (10YR2/2) 土。炭化物を含む。

図-240 26号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)



3.0～3.5mmである。364は小形丸底壺で、体部はつぶれた扁球形で、口縁部はやや内湾ぎみである。365は小形「く」字口縁鉢である。366は、小形「く」字口縁鉢であり体部はつぶれて扁球形であり、口縁部は大きく開いている。頸部がやや長い。367は打製石鏃で、平面形は五角形の凹基無茎鏃である。脚部の張り出しは短い。貼り床中から出土。368は刃部のみであり欠損している。流れ込みであろう。安山岩製である。369は軽石製の円盤状石器で用途は不明。

### 27号住居

27号住居は、平坦地区の1区で単独で検出された遺構である。長軸6.43m、短軸5.62mの長方形プランの竪穴住居跡である。長軸方向は、N3°Eでほぼ北を向いている。上屋を支える柱は、4本であると推定される。柱を埋めた柱穴は、4基ともほぼ同じ深さであり、約50cmであった。他にも一部を除いて遺構に伴うピットが6基検出されている。西側のピットは西側壁に整然と配列されているため、出入り口に使用したものかもしれない。ともに同じ深さをもっており約20cmであった。本住居跡の床面の特徴としては、炉の周りは方形状に少し窪んだ部分を形成し、周囲を一段上げたベッド状になっている点にある。そのつくりは貼り床によって形成されていた。貼り床はかなり厚く約15cmにも及ぶ。炉は、中央の方形状に窪んだ凹地のほぼ中央に設置されており、直径約55cmのほぼ円形を呈し、貼り床を深さ20cm掘り込んで構築されていた。付帯設備としては、住居跡の南側壁に接するように貯蔵穴と考えられる土坑状の施設が認められる。ただし、丸底壺が出土しており、単なる貯蔵穴ではなさそうである。別の用途があったかもしれない。また床面の壁側には側壁溝が一周めぐっている。土留めのための板材を入れる溝だと考えられる。板材の痕跡は検出できなかった。床面には、しっかりと硬化面が中央部に見られた。出土遺物は、貼り床の直上、貯蔵穴から出土している。遺物は、実測可能なもので、土器が16点、石器が6点出土している。古墳時代中期の様相を呈する。370は、南西部のピット内から口縁部から胴部の一部が破片として出土している。口縁部は緩やかに外反しており内側に突起を作りだしている。頸部には刻み目の突帯を施している。外面はミガキ調整である。東海系の弥生後期の壺かも知れない。371から373までは高坏である。371と372は坏部の上半と下半を分ける屈曲がきつく、373は

やや緩やかである。371の脚部は、頂部凸面付加法によりつけられている。374から378までは甕である。基本的に外面は上方へのハケ目調整、内面は右上がりのケズリを施してある。ミガキは施していない。口縁部は374から376まで外反し、377と378は直線的である。379は、台付きの小形丸底壺であり、体部は扁球形であり、脚部は「ハ」字状であり裾部で外に広がる。380から384は、小形丸底壺である。380は体部は球胴でハケ目調整である。381は体部から口縁部に屈曲させるだけでなく段をつけ頸部を作りだしている。382は、体部は扁球形で頸部のしまりは弱く、口縁部は直線的で長い。383は、扁球形の体部で内外面とも丁寧なミガキに似たナデ調整を施してあり細密である。全体的に赤色顔料痕が残る。384は、球胴形であり、頸部のしまりは弱く、口縁部は直線的に上方へ延びる。外面に赤色顔料痕が残る。385は、小形の鉢である。ほぼ完形である。頸部はほとんどつくりず、頸部が若干折れて外側へ直線的のびて口縁部を作り上げている。外面は基本的に縦方向のハケ目調整で、内面が右上がりのケズリを施す。全体的に黒斑が見られる。386は、ホルンフェルス製の磨製石鏃である。凹基無茎鏃で平面形状は三角形を呈する。387は、変ハンレイ岩製の打製石斧である。住居跡の中央の凹地の床面（貼り床）上から出土する。流れ込みかは不明。388は、輝石安山岩製の敲石である。先端部に明瞭な敲打痕がある。389は、輝石安山岩製の砥石である。明瞭な使用面は1面である。390は、サヌカイト製のスクレイパーで、遺構埋土①から出土している。391は、輝緑凝灰岩製のスクレーパーであり、遺構埋土①から出土している。390と391は流れ込みと思われる。

### 28号住居

28号住居は、平坦地区の2区で6号住居と切り合って検出された遺構である。6号住居とは遺構埋土を区別できず新旧誤って調査を行った遺構である。28号住居の床面が6号住居の床面より高い位置にあったため掘削して削平してしまった。全体的な形状から復元を行っているが、北側のコーナー部の詳細は不明である。尚、掘削時に埋土の上から薄く剥ぎながら掘削をしたが、28号住居の硬化面をつかむことができなかった。また、住居跡の南側コーナーはカクランのため削平され不明である。プランが2.96m×3.33mのほぼ方形の形状を呈する竪穴住居である。

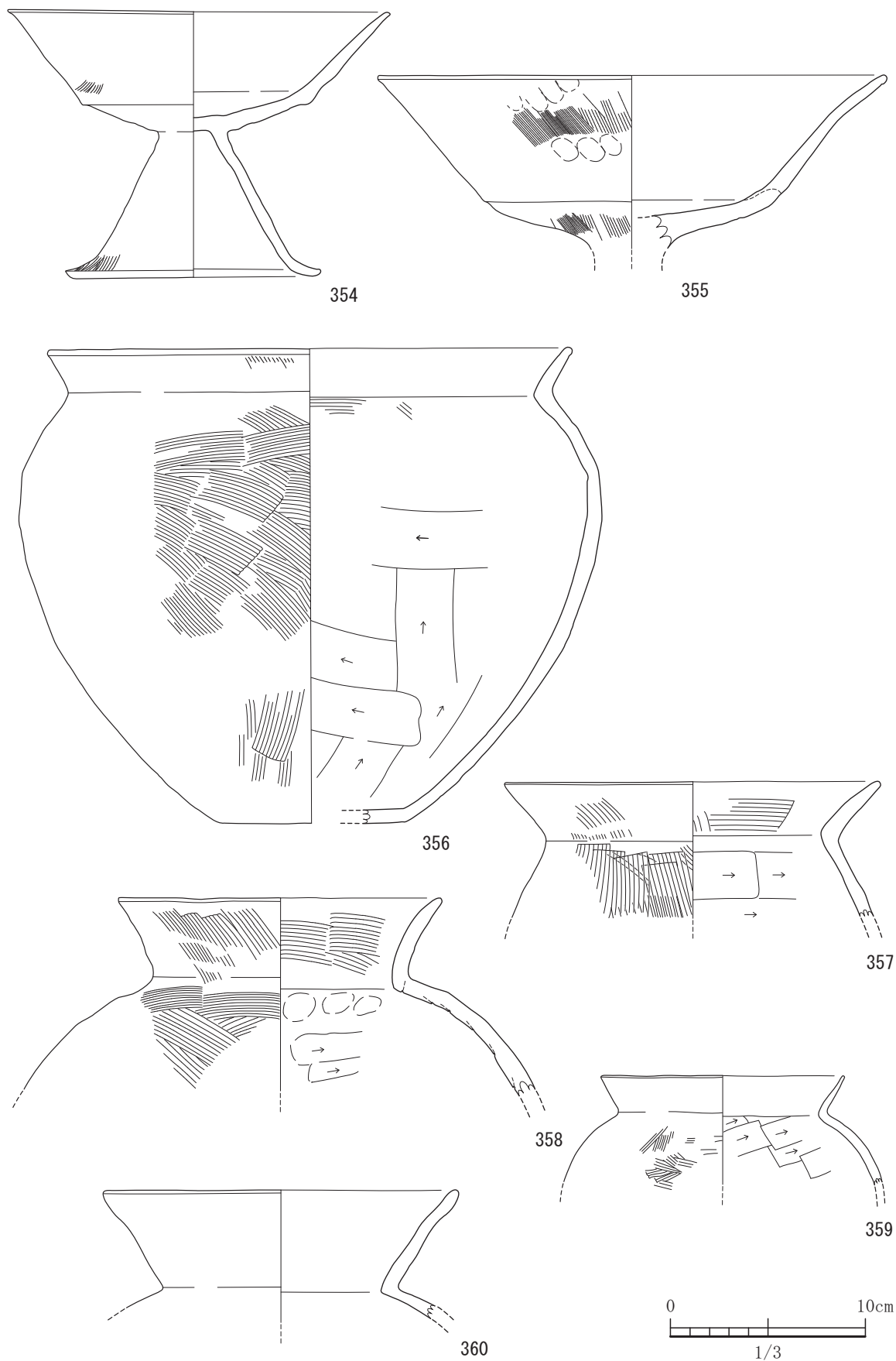


図-241 26号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

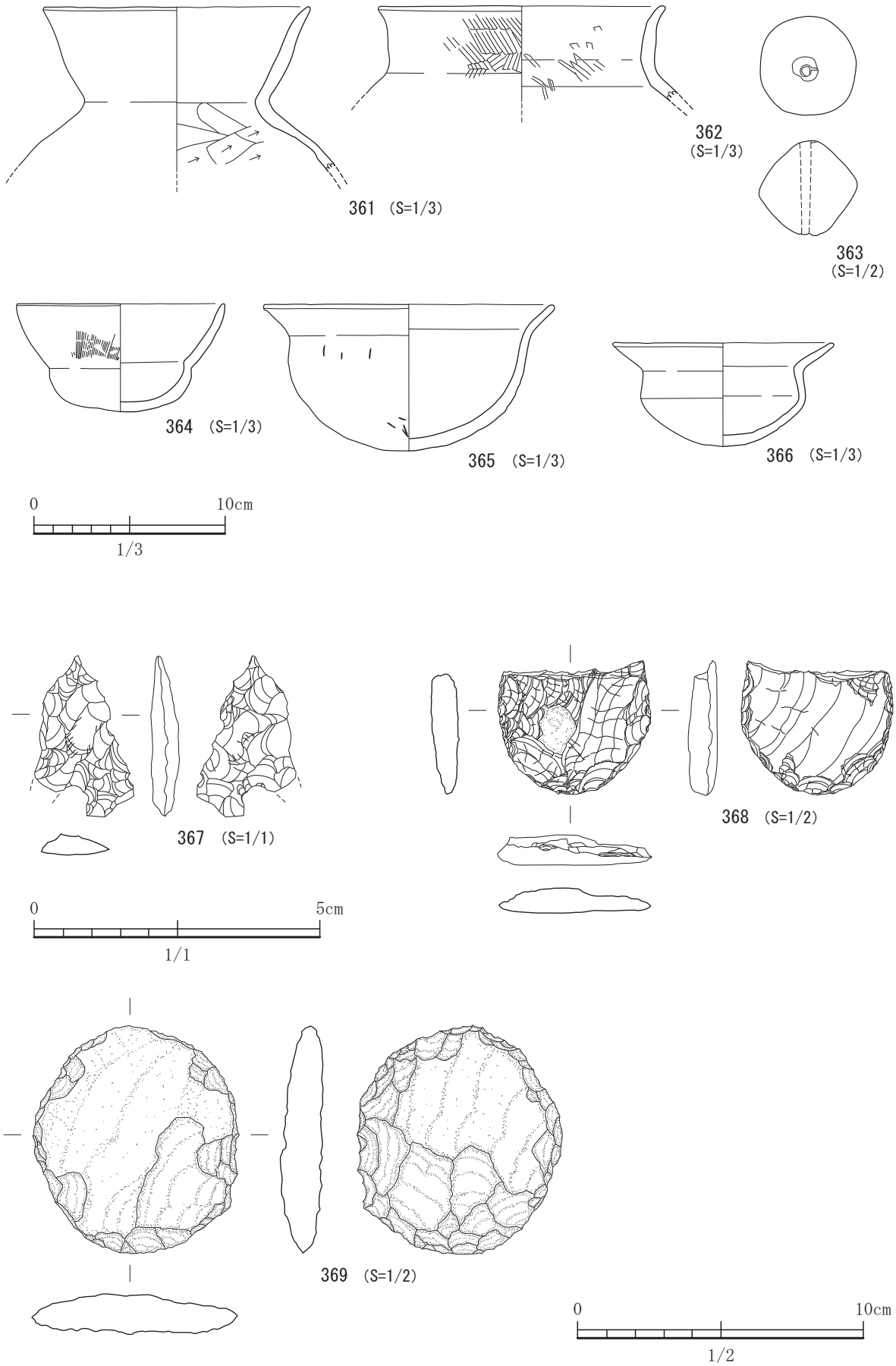


图-242 26号住居出土遺物実測图 2

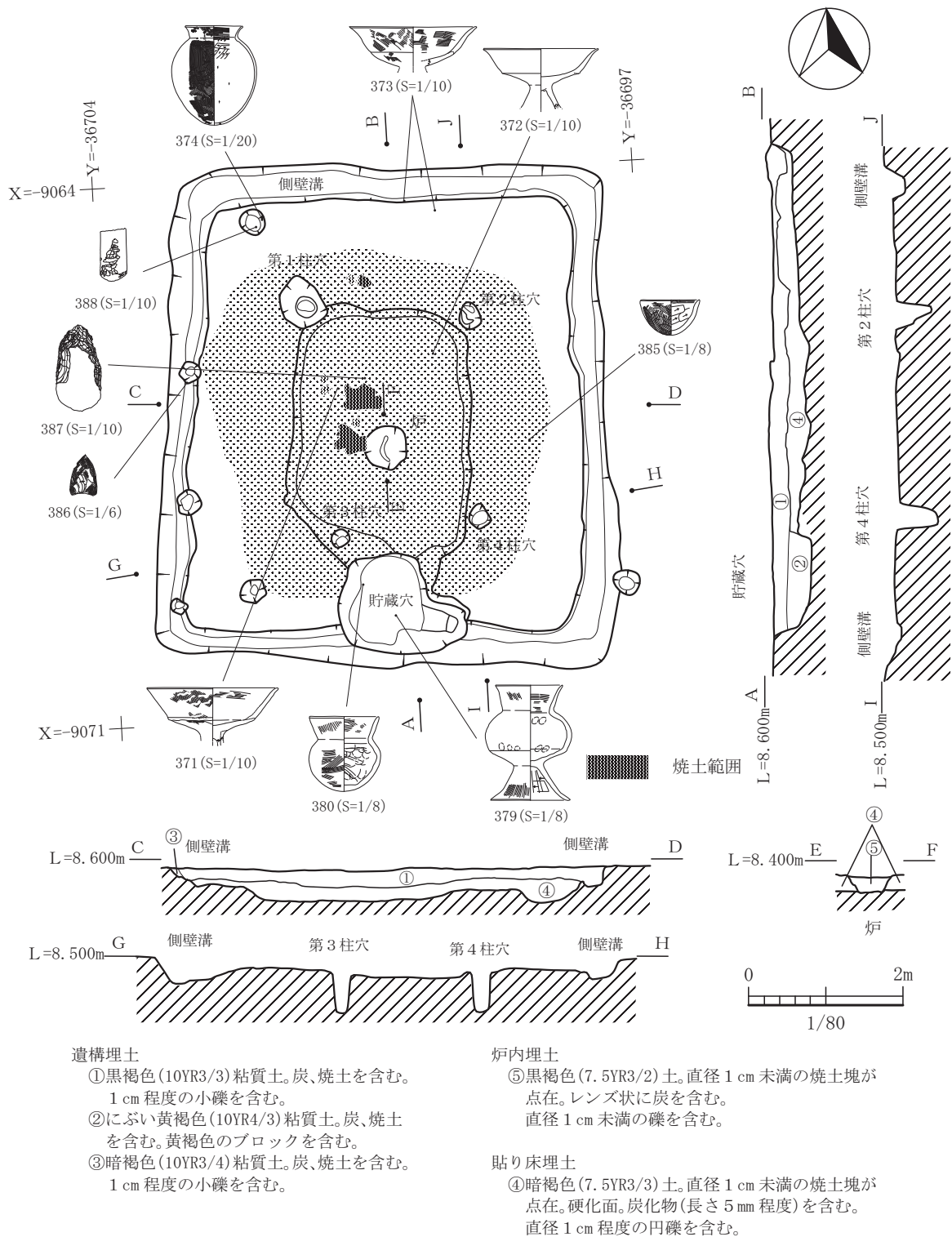


図-243 27号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

竪穴を埋積した埋土は約8cmの残存であり、廃絶時にあったであろう遺物類は剥平のためほとんど残存していなかった。土師器片ばかりで接合できるものがなかった。支柱穴らしいピットは検出されていないが、その中でも配置やピットの深さから東西軸方向に

配置する2基を柱穴とし、2本柱であると考えている。G-H間のピットが支柱穴であるかもしれない。この住居跡からは、炉が検出されていない。壁周辺にも焼土や炭化物が集中する箇所も認められず、カマドがあった痕跡も確認できなかった。しかしながら埋土

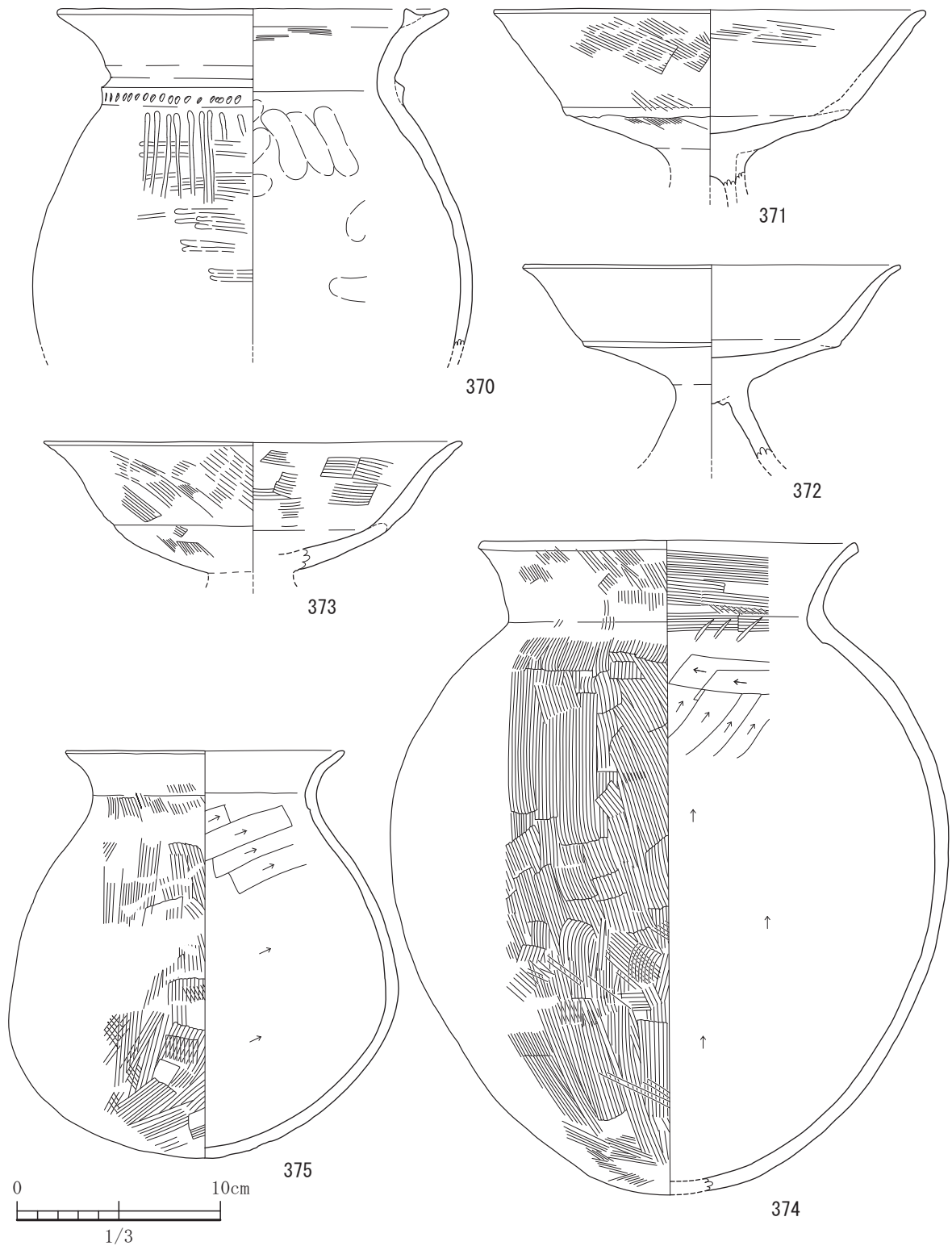


図-244 27号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

中に焼土や炭を含むことから、火を使用する施設はあったと考えているが、詳細は不明である。明瞭な硬化面は西側の床面に見られた。出土遺物は、実測可能なもので2点のみである。392は、甑の上半部と思

われる。2条の沈線をめぐらしている。外面はハケ目のちナデ調整。内面は縦方向にケズリを施す。古墳時代中期の所産と思われるが詳細は不明。393は、用途は不明である。



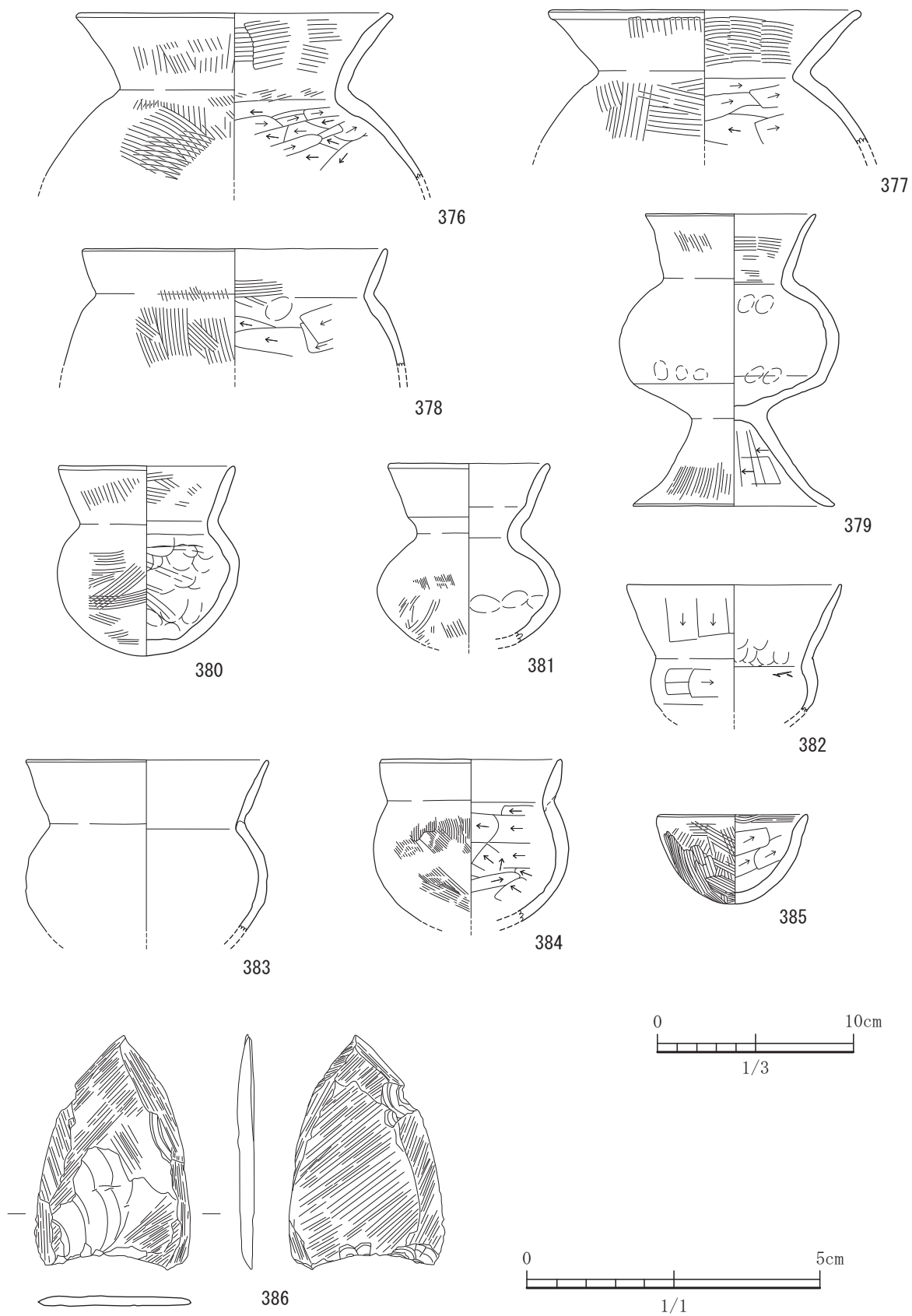


图-245 27号住居出土遺物実測図 2 (S=1/3, 386はS=1/1)

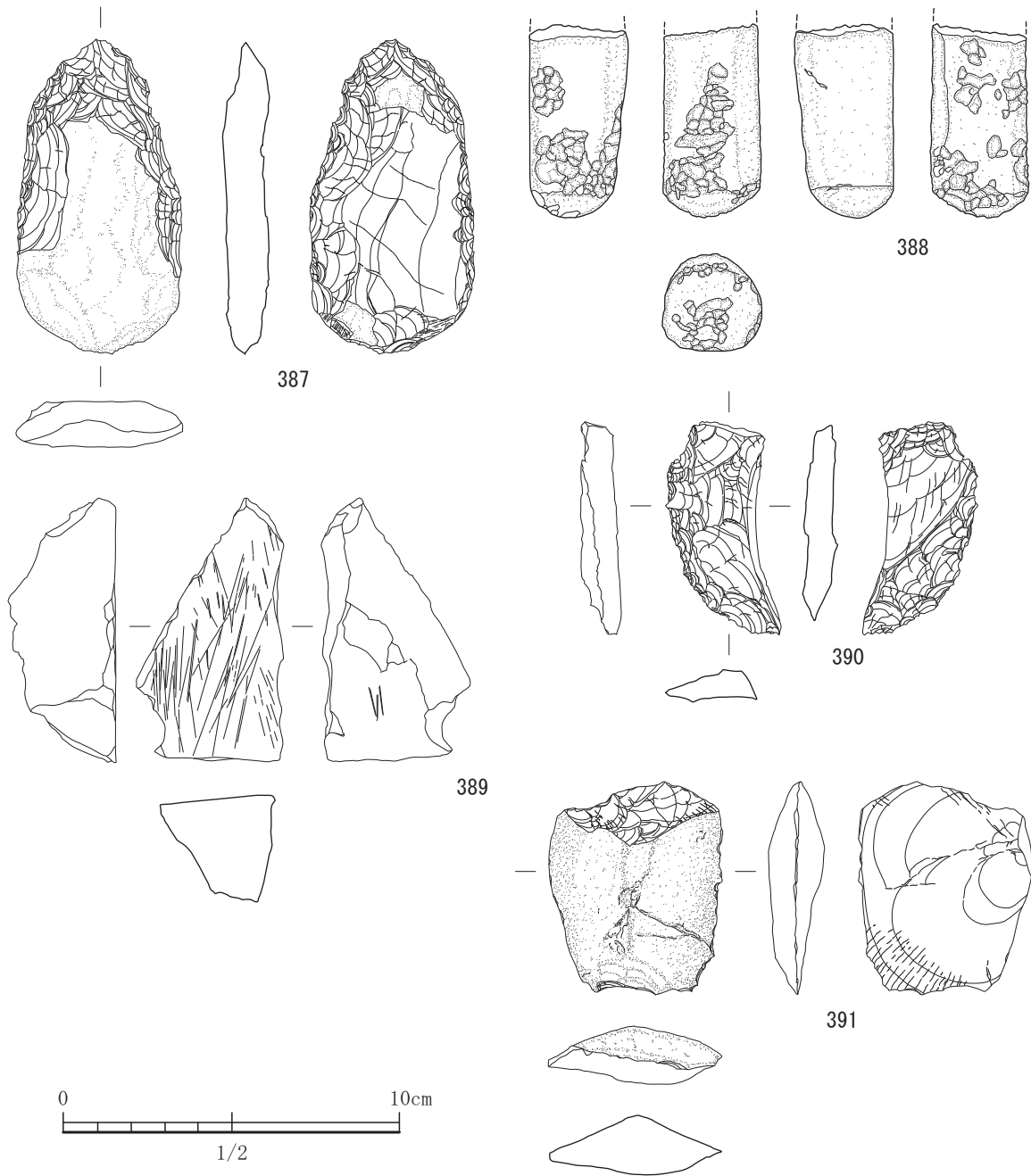


図-246 27号住居出土遺物実測図 3 (すべてS=1/2)

### 29号住居

29号住居は、平坦地区の2区で単独で検出された竪穴住居である。平面プランは、4.7m×4.8mのほぼ正方形の形状を呈する。南北軸は、N11°Eの方向にある。古墳前期の竪穴住居跡は主軸をやや北西側にとる傾向があるが、それとは全く違った方向である北北東方面に軸を設定している。この軸からも古墳時代の他の住居跡とも性格を異にするようである。東側の壁や南西側コーナーで若干いびつな形状をとっ

ているが、それ以外はきれいな形状を呈する。このいびつな部分は廃絶後であろうが、土壁部の崩落と考えられる。床面から柱穴が4基検出されている。これらが主柱穴であるので、上屋を支える柱は4本と考えられる。柱間の距離は東西方向が2.0m、南北間は2.2mで、住居跡の平面プランの軸方向の比率に合わせたように配置してある。また、柱穴の深さも、若干の差はあるものの約30cm程度である。火を使用する施設として、本住居跡ではカマドの跡ではないか

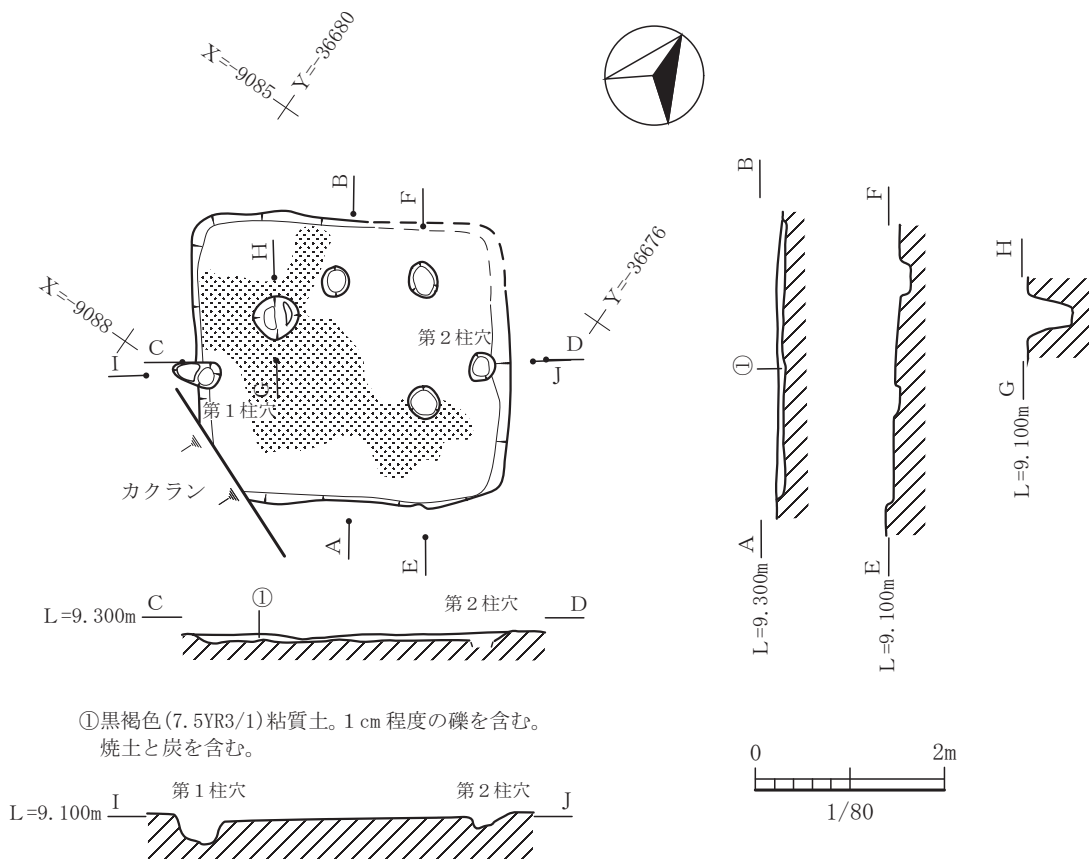


図-247 28号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

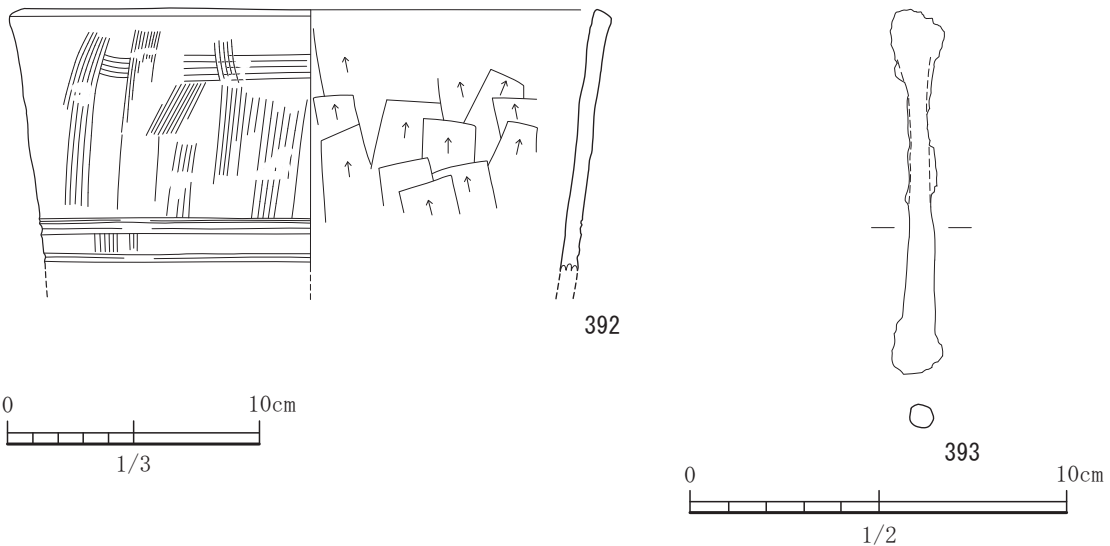


図-248 28号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 393はS=1/2)

と思われる施設が認められた。北側壁の中央部に南北約69cm、東西約63cmの平面形状でやや楕円形を呈し、深さ約9cmの掘り込みをもつ凹状の窪みが検出されている。この埋土中から明赤褐色の焼土のかたまりが検出された。遺構検出面から床面までの深さは約11cmで、埋土の残りが悪い。そのためカマドの煙道

やカマドを構築した粘土や袖石等は剥平のため完全に消失してしまっている。カマドの火床部に焼土のかたまりが確認された面であろうから、煙道は検出面より上であると考えられる。このカマドの埋土の中には、安山岩の平石が検出されており、この平石によって袖を形成していたのかもしれない。埋土中からは他に

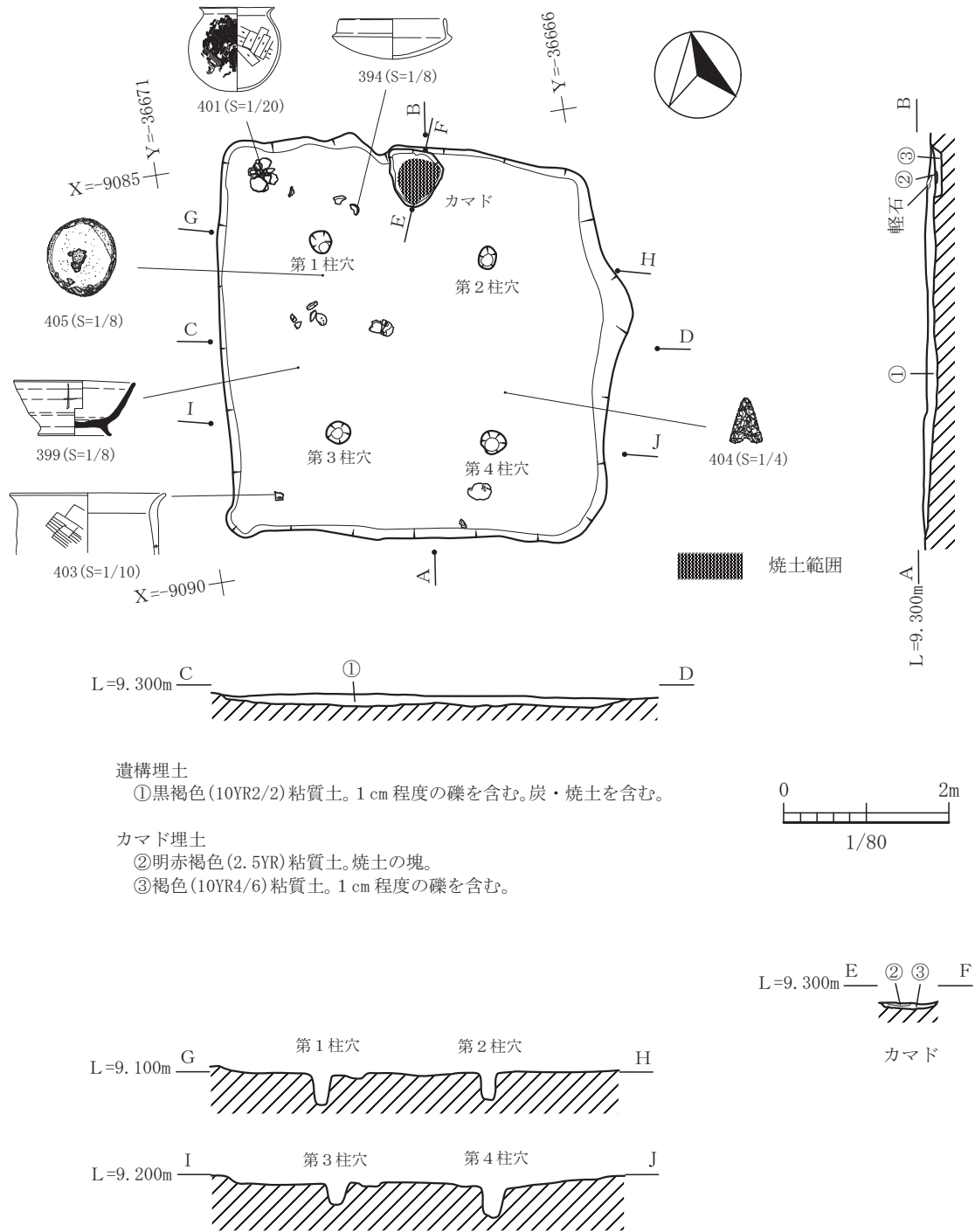


図-249 29号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

つかっていない。埋土中から軽石が2点出土している。特に加工された痕跡はなかった。この軽石もカマドの部材として使用されたものか、それとも他の用途に使われていたものかは不明である。燃焼痕はなかった。床面には明瞭な硬化面は検出されていない。出土した遺物はほとんど破片で出土している。特にカマドがある北側に集中して出土した。

出土遺物は、実測可能な土器が10点、石器が2点であった。古墳時代後期の所産と考えられる。394と395は土師器の坏身である。394は立ち上がりはやや高く内傾する。器高はやや高い。395は、土師器の坏で立ち上がりは低く、受け部は小さく形骸化している。その受け部に弱い沈線がめぐっている。器高はやや低い。396は須恵器の坏身である。立ち上がりが長

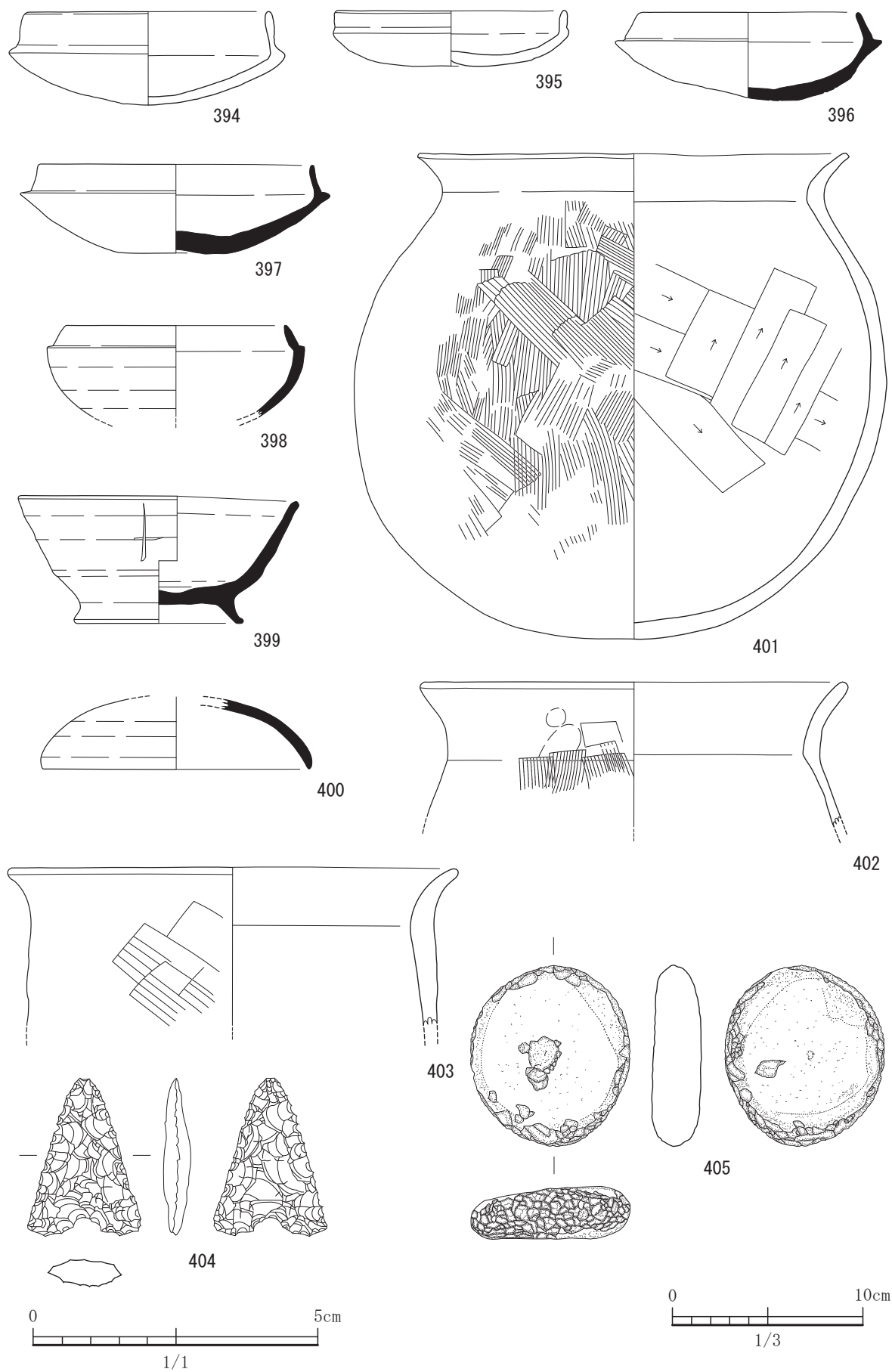


図-250 29号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 404はS=1/1)



く、内傾している。器高はやや高い。397は、須恵器の坏身で立ち上がりは内傾している。398は、須恵器の坏身であり、器高は高い。立ち上がりは内傾しており、受け部はやや小さい。399は、椀である。底部から体部への屈曲は緩やかで口縁部にむかって直線的にのびる。高台は先細りし先端で外へ開く。外面に十字形の線刻が施されている。400は、須恵器の蓋である。外面はヘラケズリのちナデ調整を施し、内面は、丁寧なナデ調整である。体部の屈曲はなくゆるやかに丸みを帯び口縁部となる。401から403は、土師器の甕である。401は、胴部は球胴形であり頸部でゆるやかに曲がりやや外反しながら口縁部を作り出す。外面は他方向のハケ目調整である。内面はケズリを施す。外面にススが残る。402は、甕の胴部から口縁部である。ややなで肩である。404は、打製石鏃で、床面に張り付くように出土した。チャート製の平面形状が三角形の凹基無茎鏃である。完形である。405は、輝石安山岩製の磨石である。側面に敲打痕も見られる。

### 30号住居

30号住居は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構である。3.94m×3.86mのほぼ正方形プランであり、南北軸は真北を向く。住居跡の堅穴内の床面からは支柱穴らしいものは検出されなかった。中央よりやや南側にピットがあるが約10cmの深さである。柱を自立させるのは困難である。このピットは柱を埋め込むのではなく柱を支えるだけの機能であったかもしれない。堅穴のコーナーに整然と配置されるピットが確認できた。上屋の構造物を支えるためのものであろうと考えられる。炉は、住居跡の床のほぼ中央部に位置し、南北に長い楕円形を呈している。深さは約5cmである。炉の中央には明赤褐色の焼土がまとまって認められた。この炉の南東側には、直径約30cmの円形の安山岩製の台石が床面直上に張り付くように出土している。床面に見られる硬化面は、中央の炉を中心に、南西から北東へ帯状に認められた。床には貼り床を施してなく、方形に掘られた堅穴の掘方をそのまま床にしている。検出面から床面までの深さは約25cmあり、埋土の残りの良い住居跡であったが、土器の破片が多く、出土した遺物も少ない。遺物を実測するのに反転復元しなければならない程度のものである。遺物は中央の炉の周辺から集中して出土する傾向にあった。

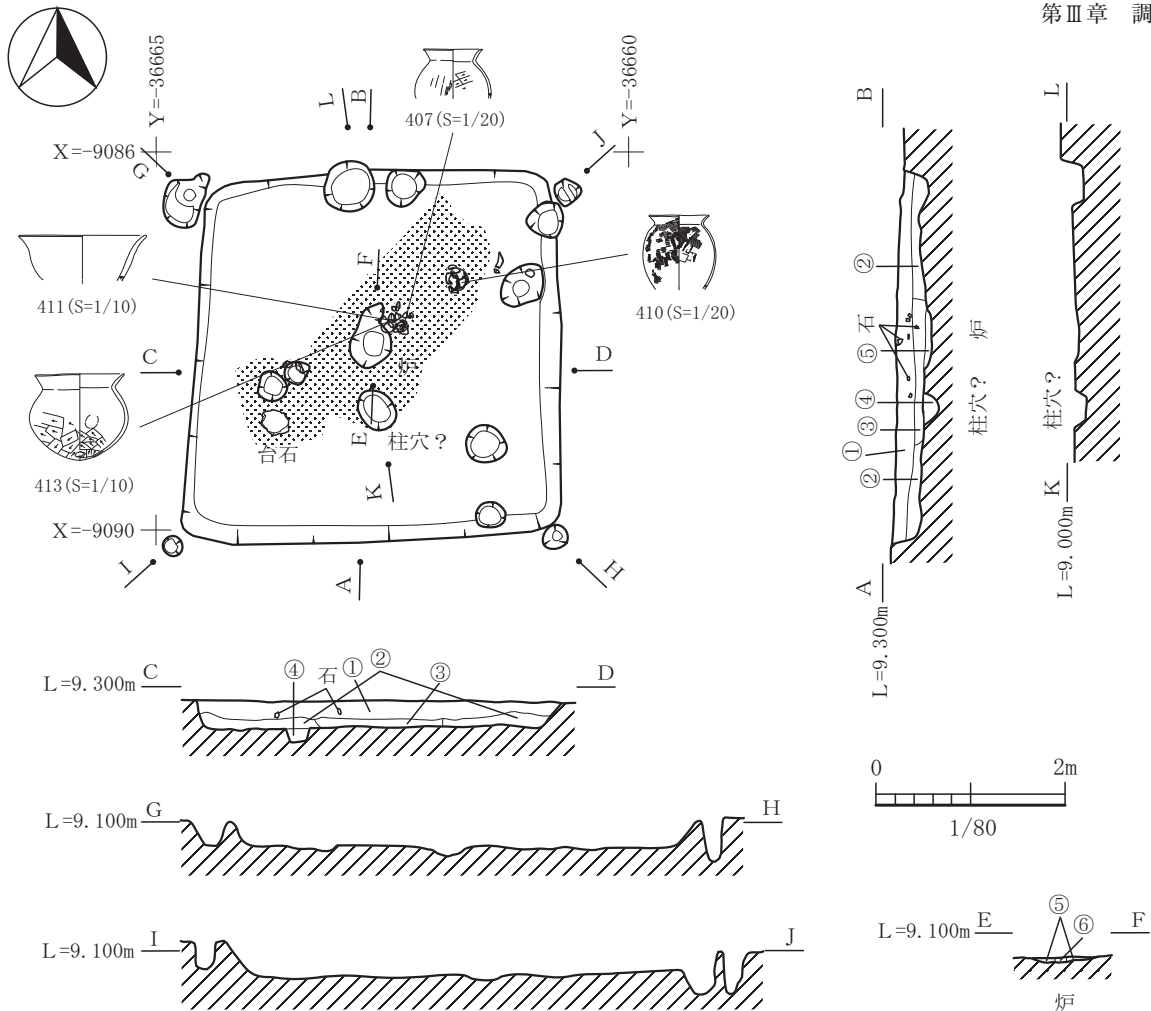
出土遺物は、実測可能な土器が8点である。古墳

前期の所産であろう。406は土師器の坏である。丸底で口縁端部が短く外反する。内外面ともにケズリを施す。407から410まで甕である。407は、外面がハケ目のちナデ調整で、内面はヘラケズリを施す。口縁部は外反する。408は、口縁部がやや内湾みである。重心が上位にある。409は、口縁部は直線的に外傾する。口縁端部を少し内傾させている。410は、口縁部は外反しており、内面は左上がりのハケ目調整で、外面にはハケ目調整であるが、右上がりのタタキが一部見られる。胴部にはススが附着しており、胴部下半には被熱を受けた時に生じる赤色化が見られる。411は鉢形の土器であろう。412は、鉢である。内外面ともケズリ調整である。413は、小形丸底壺であり、体部は球形であり口縁部は短く直線的である。穿孔がある。

### 31号住居

31号住居は、平坦地区の2区の北側で単独で検出された遺構である。住居跡の北側は調査区外であり南側半分のみでの検出である。住居跡の堅穴内にもL字形のカクランによって削平されている。堅穴の東西方向が約5.9mの隅丸方形プランの堅穴住居と思われる。住居跡の西側ほど剥平を受けて埋土の残りが悪い。西側で約10cm、東側で約27cmの残存である。東側の埋土の残りがよかったにも関わらず、出土遺物の量は非常に少なかった。柱穴は2基検出されている。西側の第1柱穴が約56cmで、東側の第2柱穴で49cmであった。柱穴埋土からは柱痕は検出されなかった。柱穴の中心を結ぶ線に直交する線を想定し主軸とした場合、N8°Eを指すこととなる。古墳時代の住居跡としては、平面形状、炉の存在、柱穴の深さ等を考えると違和感がある。炉は第1柱穴と第2柱穴を結ぶ線より北側に位置している。約18cmの掘り込みを持ち、平面形状がほぼ円形を呈する。直径約75cmを測りやや大型の炉となっている。床面は、東にやや傾斜する傾向にあり、東側壁周辺が最も低くなる。壁近くで、炭や焼土を特に多く含む部分が認められたが、これは住居の廃絶後炉から流出したものが最も低い東側壁周辺に集中したものであろう。床面には明瞭な硬化面を認めることはできなかった。

出土遺物は、土師器片と弥生土器が混在して出土した。埋土の薄い直上は包含層の2b層であり土師器片が入り込んだ可能性も否定できず、時代的に新しい古墳時代としているが、弥生時代中期後半期の堅穴住居かもしれない。実測可能な遺物は414の甕の1



遺構埋土

- ①にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土。1～10mm程度の小礫を多量に含む。焼土粒を少量含む。1～10mm程度の炭化物を少量含む。
- ②明黄褐色(10YR6/6)粘質土。1～10mm程度の小礫を多量に含む。焼土粒を少量含む。1～10mm程度の炭化物を少量含む。
- ③暗褐色(7.5YR3/3)粘質土。1～5mm程度の小礫を含む。焼土粒を多量に含む。炭化物を少量含む。
- ④暗褐色(10YR3/3)粘質土。橙色土をブロック状に含み、焼土粒を少量含む。

炉内埋土

- ⑤明褐色(7.5YR5/8)土。暗褐色(7.5YR3/3)粘質土をブロック状に含む。炭を少量含む。
- ⑥明赤褐色(10YR5/8)土。焼土。

図-251 30号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

点のみである。出土した地点が埋土の最も薄い場所で、上位から入りこんだ可能性も十分考えられる。内面はナデ調整であるが磨滅が激しく詳細は不明。外面はハケ目のちナデ調整である。口縁部は外反というよりは真横の口縁部を直線的にのばし平縁のごとく作りだしているようである。

32号住居

32号住居は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構である。南北方向5.6m、東西方向4.9mの平面形状がほぼ方形を呈したプランの竪穴住居である。南北方向の軸の方向は、N22°Eである。検出面から

床面までの深さは約25cmあり、埋土の残りは良い方である。柱穴は3基である。北側に位置する第1柱穴と南側に位置する第2柱穴及び第3柱穴であるが、南側は2基が軸と一致するように配置されている。南側は、付け替えか共用していると考えられるが、付け替えてどちらかを使わなければ、硬化面が埋められた柱穴埋土中に形成されるが、その痕跡はなかった。2本共用しているのであれば位置的に第3柱穴が主柱穴である可能性が大である。また遺構中央部にピットが認められるが、本住居跡に伴うものである可能性がある。伴うものであれば支柱穴であろうか。第1・

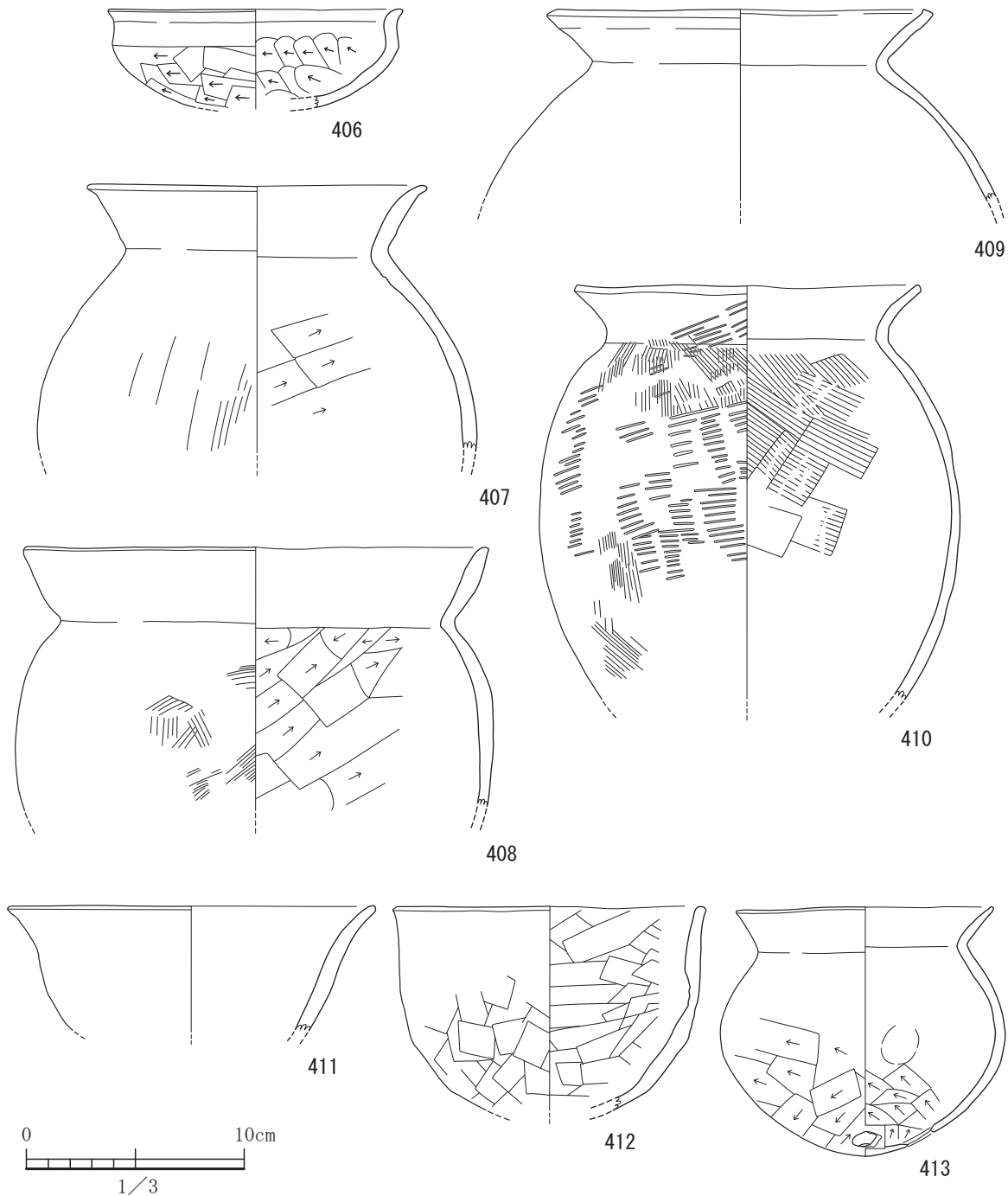


図-252 30号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

第2・第3柱穴で約30cmの深さをもつが中央のピットは約20cmである。竪穴のほぼ中央部に炉と思われる凹地が認められた。この凹地からは焼土は認められなかったが、炉の北側でまとまって認められた。炉から掻きだしたものであろう。床面には全面的にしっかりと硬化面が形成されていた。竪穴住居の西側壁と南側壁に沿って側壁溝が設けられている。西側壁では溝が途中で切れている。溝の下端の幅は、最

も狭い箇所では4cm、最も広い箇所では16cmほどある。この側壁溝は西側にはめぐらない。出土遺物は、住居跡の南側半分に集中するように出土した。坏がまとまって出土した遺構である。

出土遺物は、実測可能な土器が24点、石器が2点であった。古墳時代中期の所産ではなからうか。415から430までは、土師器の坏である。415は、口縁部は直線的に広がり、外面はハケ目調整である。416は、

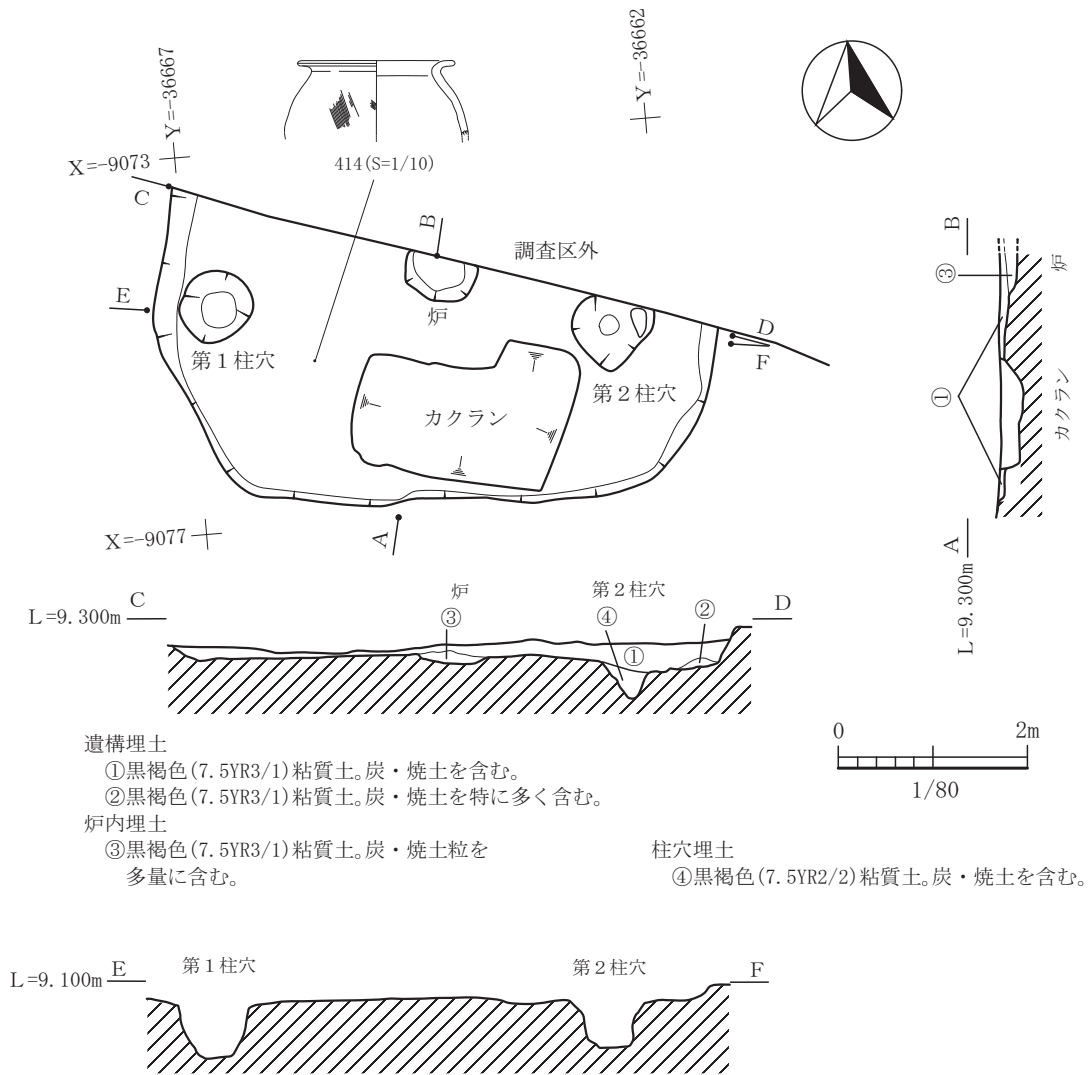


図-253 31号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

口縁部はやや内湾ぎみである。417は、口縁部は直線的で内面に赤色顔料痕が残る。418は、体部に弱い稜をもつ。419は、口縁部は直立し、外面はハケ目調整である。420と421は、口縁部は直線的である。422は、口縁部が直立する。423は、口縁部が直線的に広がる。424は、口縁部が直立する。425は、口縁端部で小さく外反する。底部がやや平底ぎみである。426は、口縁端部で小さく外反する。外面に黒斑がある。427は、口縁部はやや内湾する。内外面ともにケズリのちナデ調整である。内外面にはススが付着している。428は、口縁端部が外反する。429は、口縁部が直立する。430は、口縁部が内湾する。431は高坏の坏部で脚部は欠損している。坏部は屈曲してやや外反ぎみである。外面にはハケ目のちナデ調整を施す。432から434までは甕である。432は、胴部の外面がハケ目調整で、内面はケズリを施している。外面にはススが

付着し、底部に近いところには被熱による赤色化が見られる。重心は下位にあり下ぶくれである。433は、口縁部は外反し、胴部はやや扁球形である。外面にはタキが残り、内面はヘラケズリである。外面にはススが付着していた。434は、口縁部は外反し、ややなで肩である。外面は粗いハケ目調整である。内面は横方向のケズリを施しナデ消している。外面には赤色顔料痕が残る。435は小形丸底壺で口縁部は短く、頸部はくびれとは言えないような弱い屈曲がある。丁寧なナデ調整である。口縁部の一部に赤色顔料痕が見られた。436は小形の丸底壺である。体部は扁球形で器壁は厚い。437は長頸壺で口縁端部でやや短く外反する。439は、緑泥片岩製の断面がノミ状を呈する磨製石斧である。上層である埋土①から出土している。440は、輝石安山岩製の磨石で、ほぼ全面に磨り痕があり、一部に赤色顔料痕が認められた。赤色顔

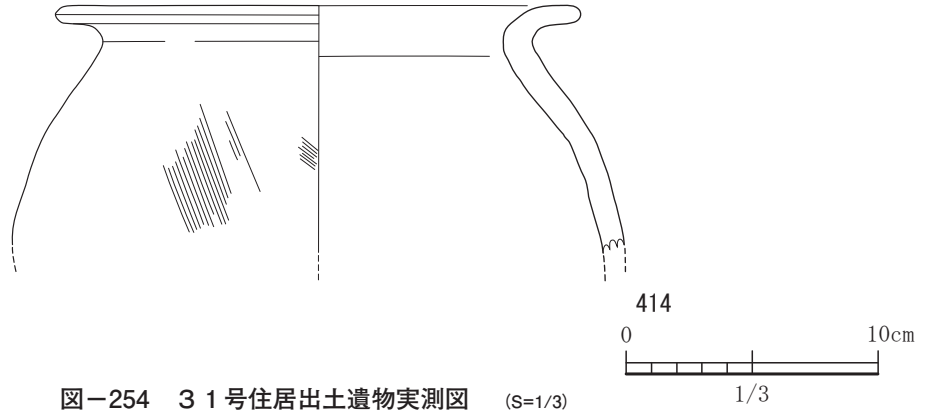


図-254 31号住居出土遺物実測図 (S=1/3)

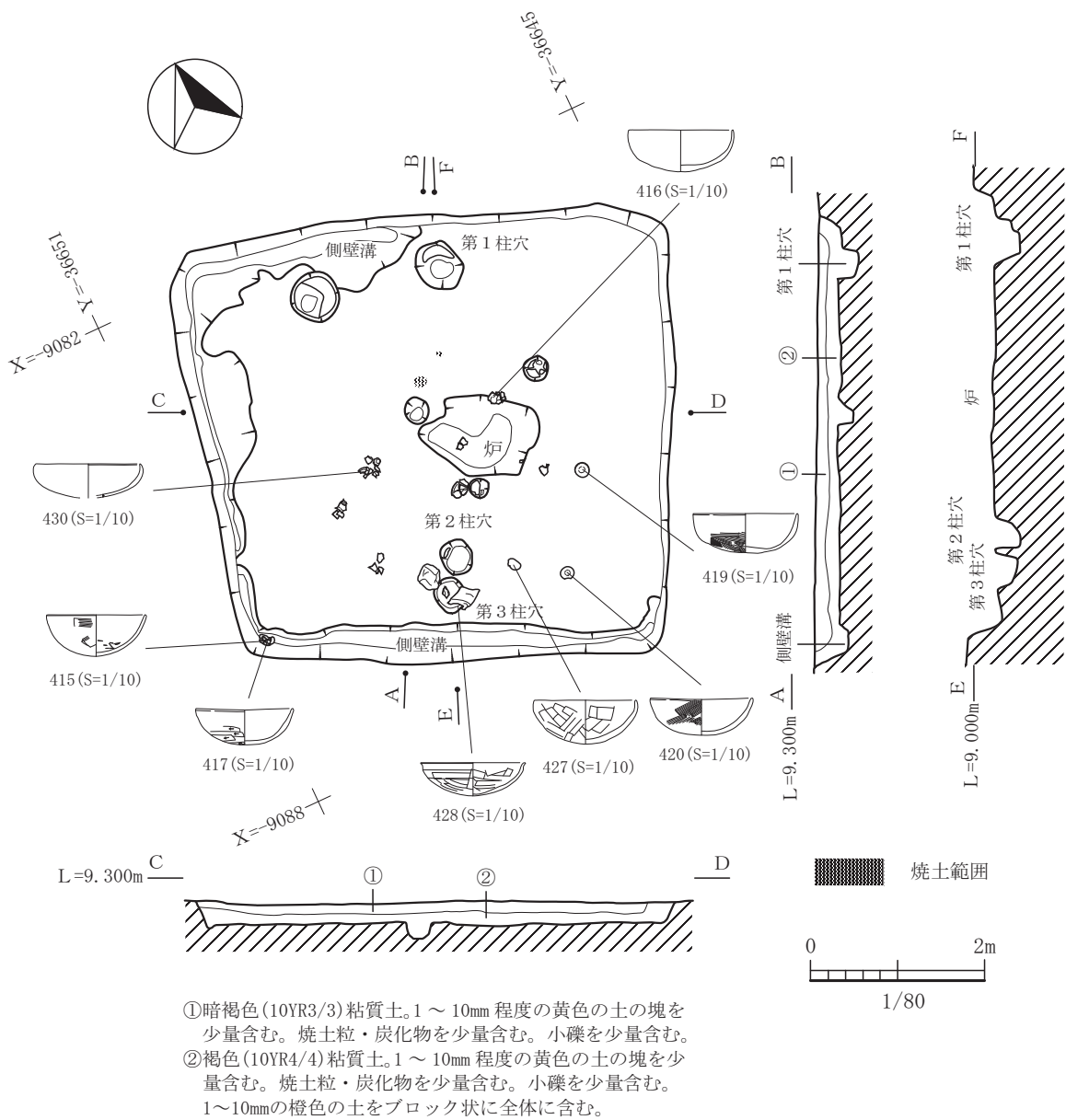


図-255 32号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)



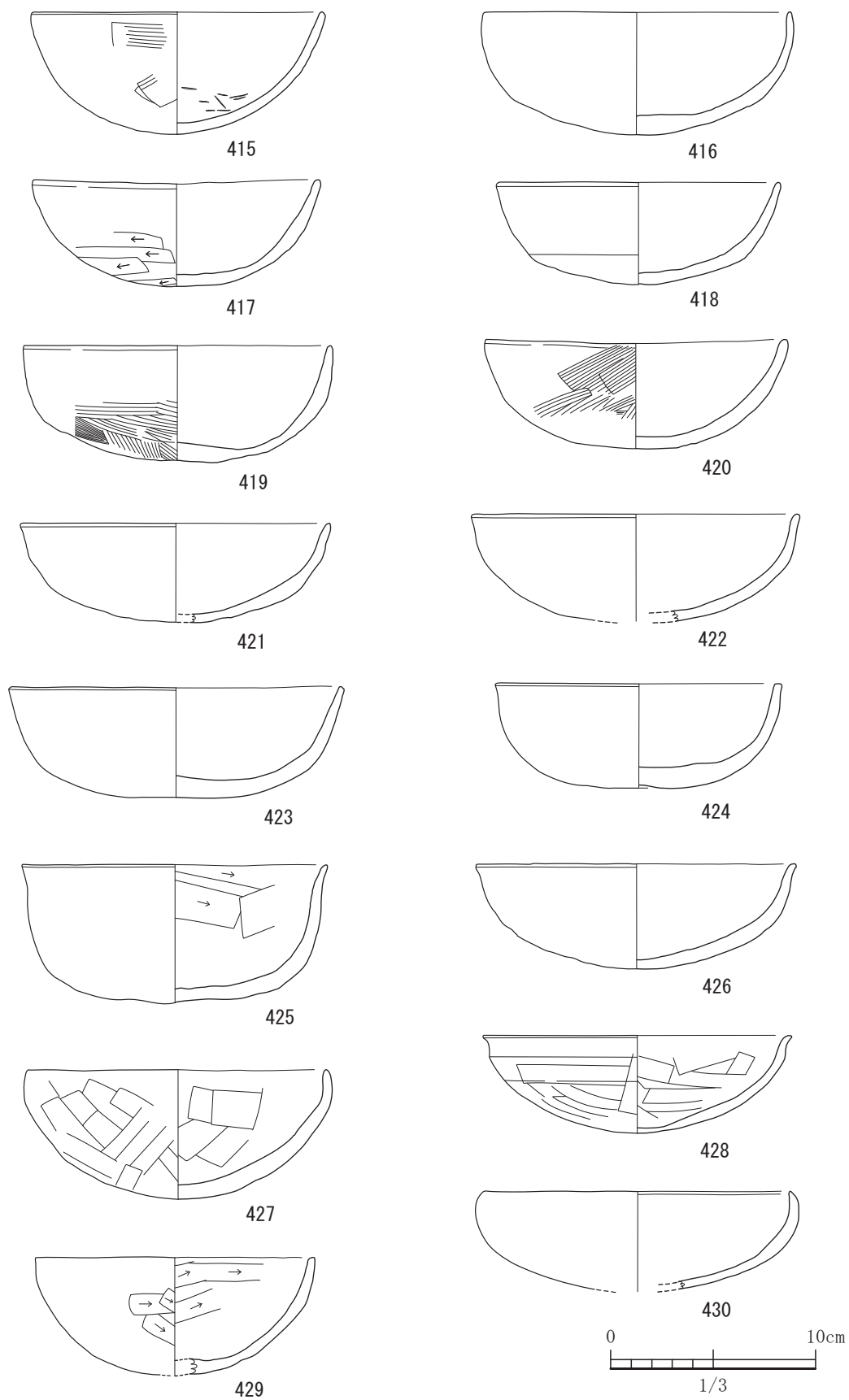


図-256 3 2号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

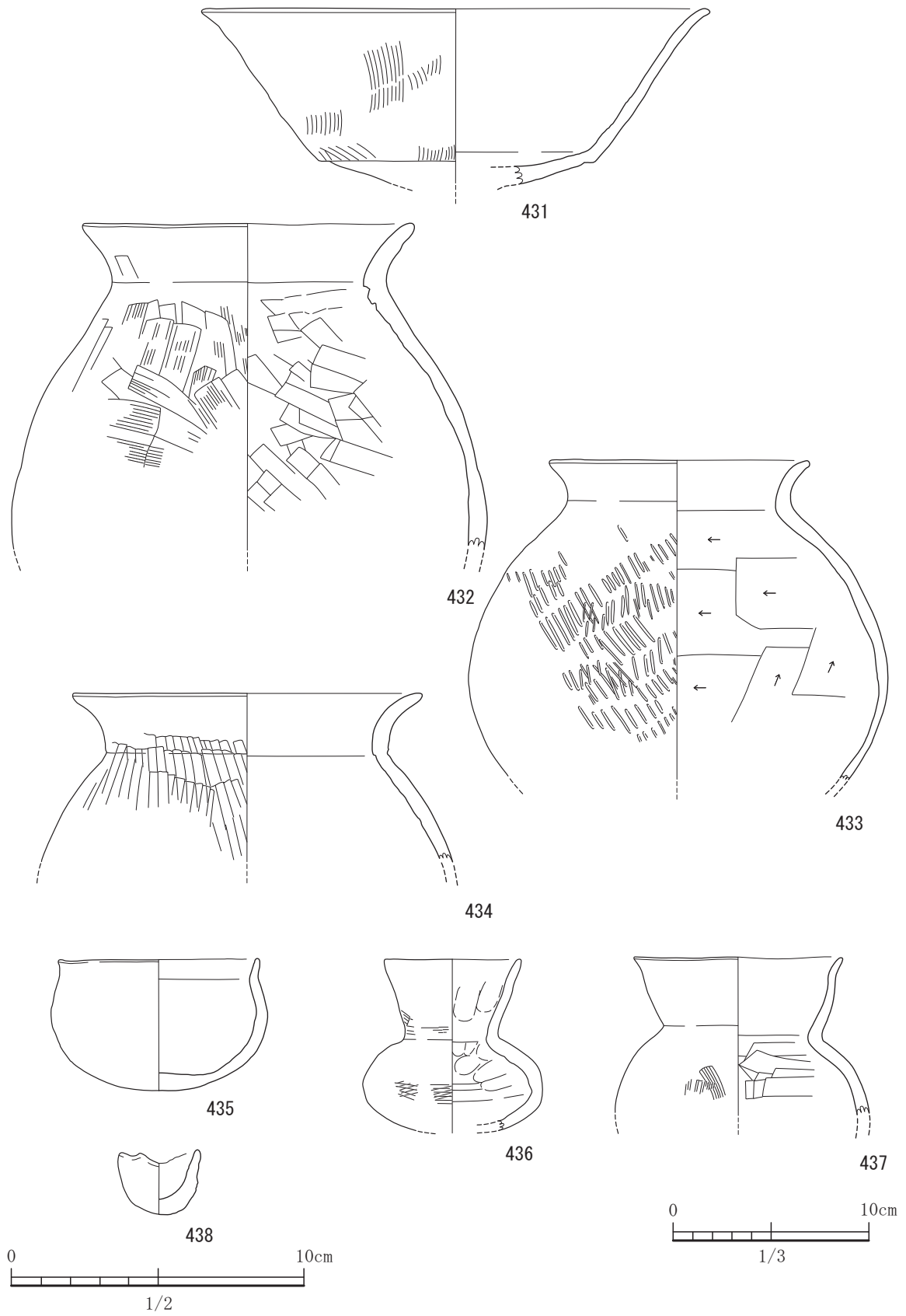


図-257 32号住居出土遺物実測図 2 (S=1/3, 438はS=1/2)

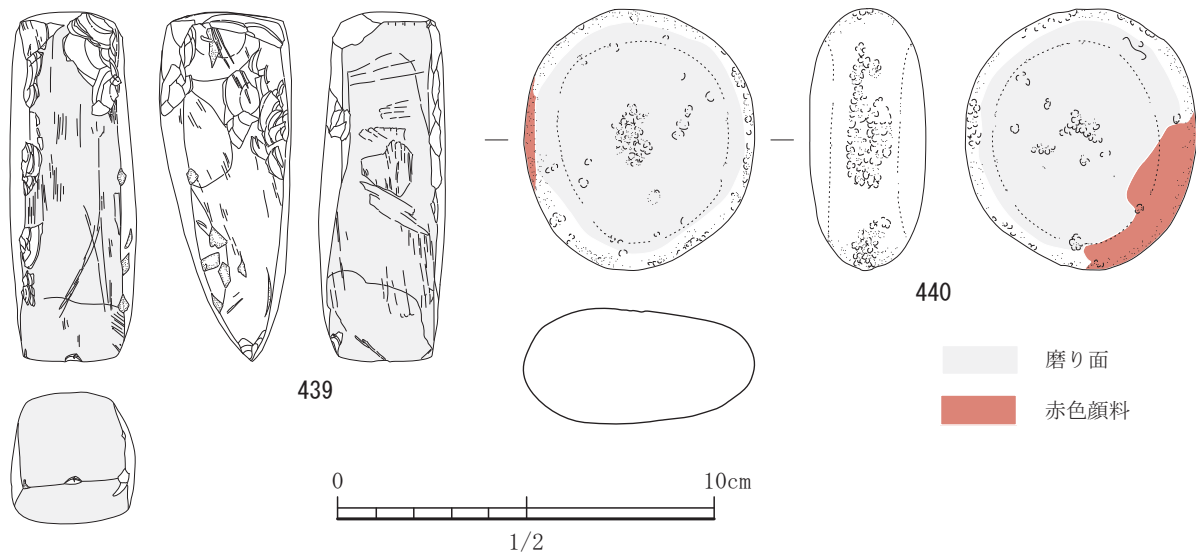


図-258 32号住居出土遺物実測図 3 (すべてS=1/2)

料の製作に使われたものであろうか。

### 33号住居

33号住居は、平坦地区の6区で単独で検出された竪穴住居跡である。南北軸（短軸）は、約5.4m、東西軸（長軸）は、約6.2mである。南北軸の方向は、N16°Wである。平面形状は、長方形プランである。6区は、現在の住宅地へつながる里道部分であり、その仮設道路設置のため、本住居跡の北西コーナー部は調査できなかった。検出面から床面までの深さは、約35cmあり、埋土の残りも良かった。そのため比較的遺物の残りも良い。炉は住居跡のほぼ中央部に配置され、約10cm掘り込まれており、平面形状では楕円形を呈する。炉内の埋土から明暗褐色の焼土と炭が検出され明らかに燃焼させた痕跡が見受けられた。この住居跡には、付帯設備として4箇所中央部より一段高くなったベッド状遺構が確認できた。また、貯蔵穴を2基検出しており、第1柱穴南側の南壁に接する場所と東壁に隣接する場所にそれぞれ認められた。両貯蔵穴から多くの出土遺物があった。床の硬化面は、中央の炉を中心に、ベッドから中央の平坦部まで東西方向に横広く認められた。柱穴以外にピットが6基検出されたが、用途は不明である。特に対をなしたり、整然と並ぶような配置の仕方ではないようである。

出土遺物は、土器が16点、石器が5点、鉄器が1点出土した。441と442は、高坏である。441は、坏部には上半と下半に分かれており稜が見ら

れる。上半はやや外反する。442は、坏部の体部はやや丸みを帯びそうである。443から447は甕である。443は、器壁はやや薄く、口縁部はやや内湾ぎみで、口縁端部が小さく内傾する。胴部にはスガ残り、被熱による赤色化が見られる。煮炊き用であろう。444は、口縁部は直線的で端部を水平に整えている。445は、胴部はなで肩球胴形である。口縁端部の中央を沈線状にやや窪ませている。446は、重心が上方にあり、口縁部は直線的にのび、端部は水平に作り上げている。447は、頸部から口縁部にかけて大きく外反している。448は、長頸壺である。口縁端部をすぼませている。451は、小形丸底壺でややくびれが弱く口縁部は短い。452は小形丸底壺で、口縁部は直線的でやや長くなる。頸部から胴部に赤色顔料痕が見られる。453は頸部のしまりは弱く、直線的に上方へ延びる。454は、器台の脚部であり「ハ」字であるがあまり開かない。456は土製の勾玉である。457から460は、打製石斧である。458にはえぐりがある。石材は木葉山を産地とする片岩であろう。460は蛇紋岩製である。461は、敲石で全体的に油脂性成分のものが付着していた。462は、刀子であり、埋土②から出土した。33号住居は古墳時代前期の所産であろう。

### 34号住居

34号住居は、平坦地区の6区で単独で検出された竪穴住居跡である。南北方向（長軸）が5.3m、東西方向（短軸）が4.9mのややいびつな方形のプランである。長軸の方向は、N30°Wであり、隣接する

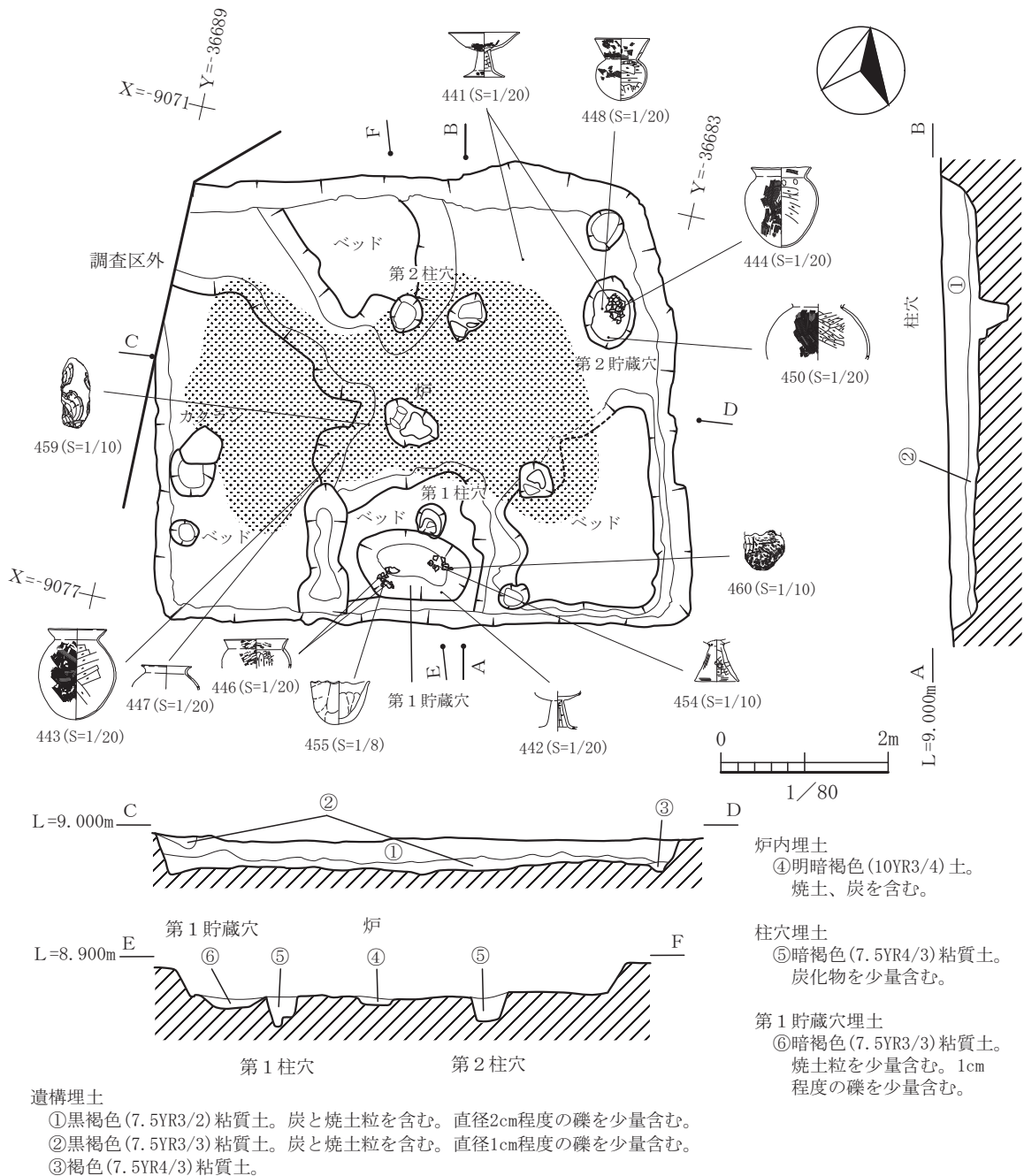


図-259 33号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

35号住居とほぼ軸を同じくする。南側は矢板施工のため未調査となった。また、西側壁はカクランによって削平されている。柱穴は4基検出されており、4本柱の上屋が想定される。柱穴の深さにはバラつきがあるものの25cm程度である。炉は竪穴の中央よりやや南側に位置する。炉の掘り込みは約14cmで床面は平坦な形状を呈する。炉内に砂を入れた痕跡が見られる。焼土は炉の北側と第1貯蔵穴周辺で検出されている。掻き出したような検出状況であった。貯蔵穴は竪穴内から2基検出されている。第1貯蔵穴は東壁

に位置し、深さは約18cmで、床面は平坦である。第2貯蔵穴は南壁に接して位置し、床面は平坦であるが、北側に2基の浅い凹地状の施設を伴う。床面では、ベッド状遺構が3箇所認められる。北西側のベッドの面積は約0.77㎡、南東側のベッドが約0.89㎡で小規模のものであった。南側のベッドの面積は削平されているため不明であるが、南東側のものと規模を同じくするものではなかろうか。ベッド状遺構からの遺物の出土は少ない。床面には、炉の周りを中心に顕著な硬化面が形成され東西の人の動きが多いことがわか

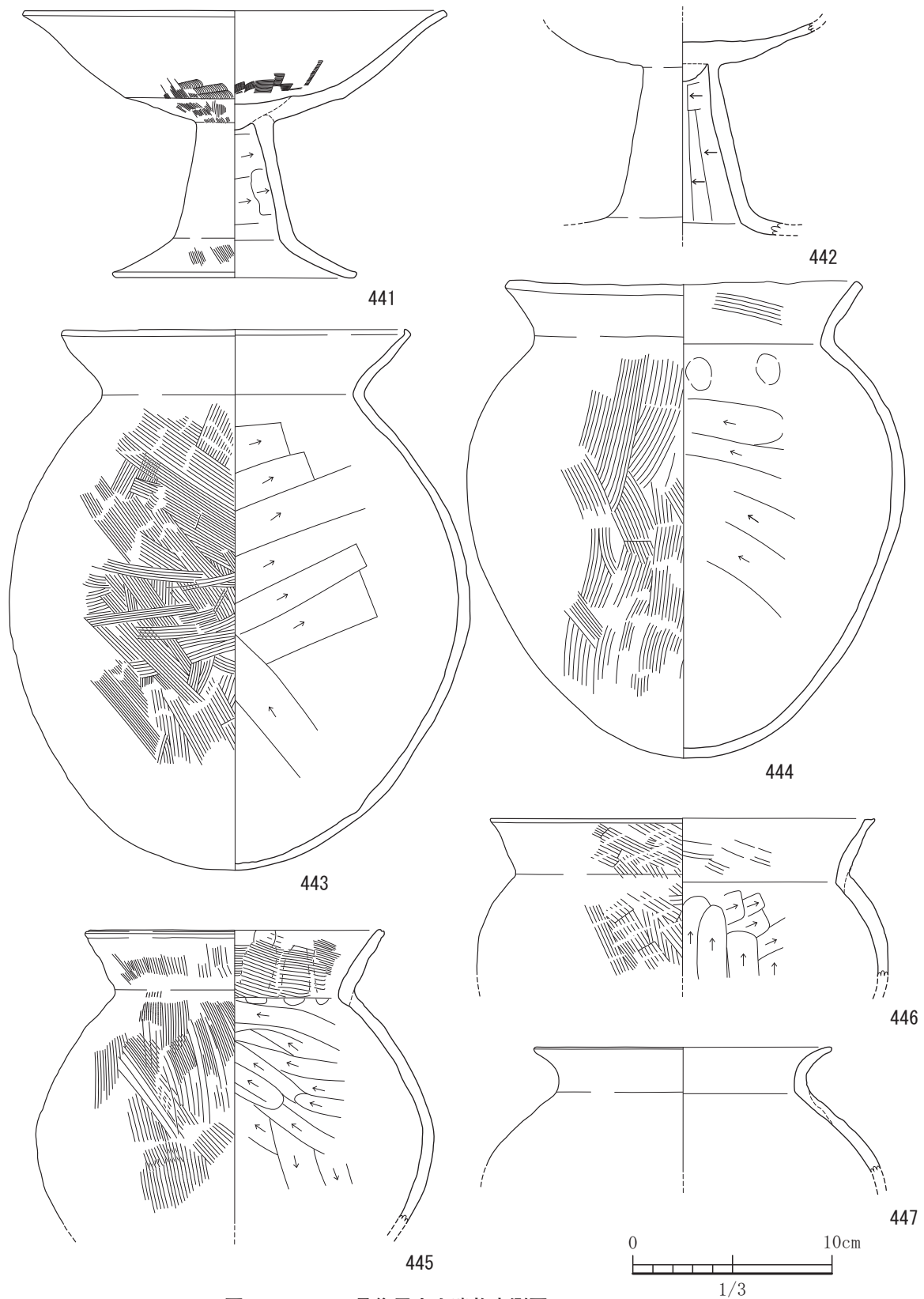


図-260 33号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

る。埋土は約14cmの厚さであったが、東側が薄くなる傾向にある。埋土が厚くなる西側において遺物の出土が多くなる。

出土遺物は、実測可能なもので土器が14点、石器が2点である。463から465までは坏である。463は、口縁部は内湾する。外面にケズリを施してある。外



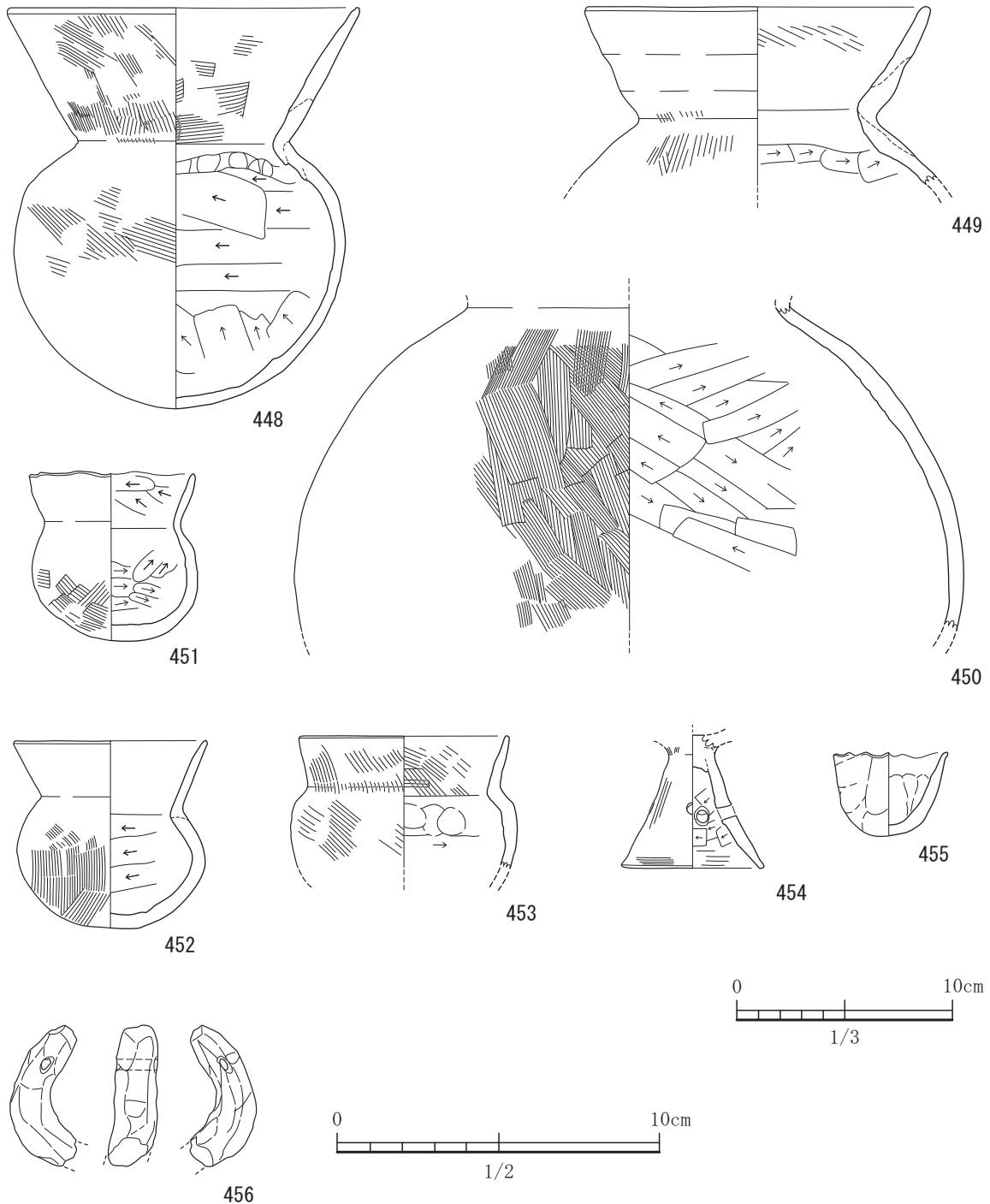


図-261 33号住居出土遺物実測図 2 (S=1/3, 456はS=1/2)

面の口縁端部に近い部分ではハケ目調整も残る。464は、口縁部が上方へ直立する。口縁部はケズリのちなデ調整である。465は体部から口縁部にかけて直線的にのびる。466は高坏の坏部である。体部は丸みを帯びて、口縁部でやや屈曲させ上方へ立ち上げている。467は、口縁部をやや内湾させ、口縁端部を水平に整えている。胴部では外面にタテハケ目からヨコハケ目を施す。内面は図上左上がりである。器壁はや

や厚い。468は、長胴形の甕である。在来系であろう。469は、ほぼ完形の壺である。第1貯蔵穴から出土している。内面にはやや図上右上がりのケズリを施している。470は、平底の壺であろうか。外面はヘラナデ、内面は図上右上がりのケズリを施す。471は、「く」字口縁鉢である。頸部のしまりはほとんどない。口縁端部には沈線状に凹地を作りあげる。472と473は小形丸底壺である。ミガキが施されている。472は球胴形

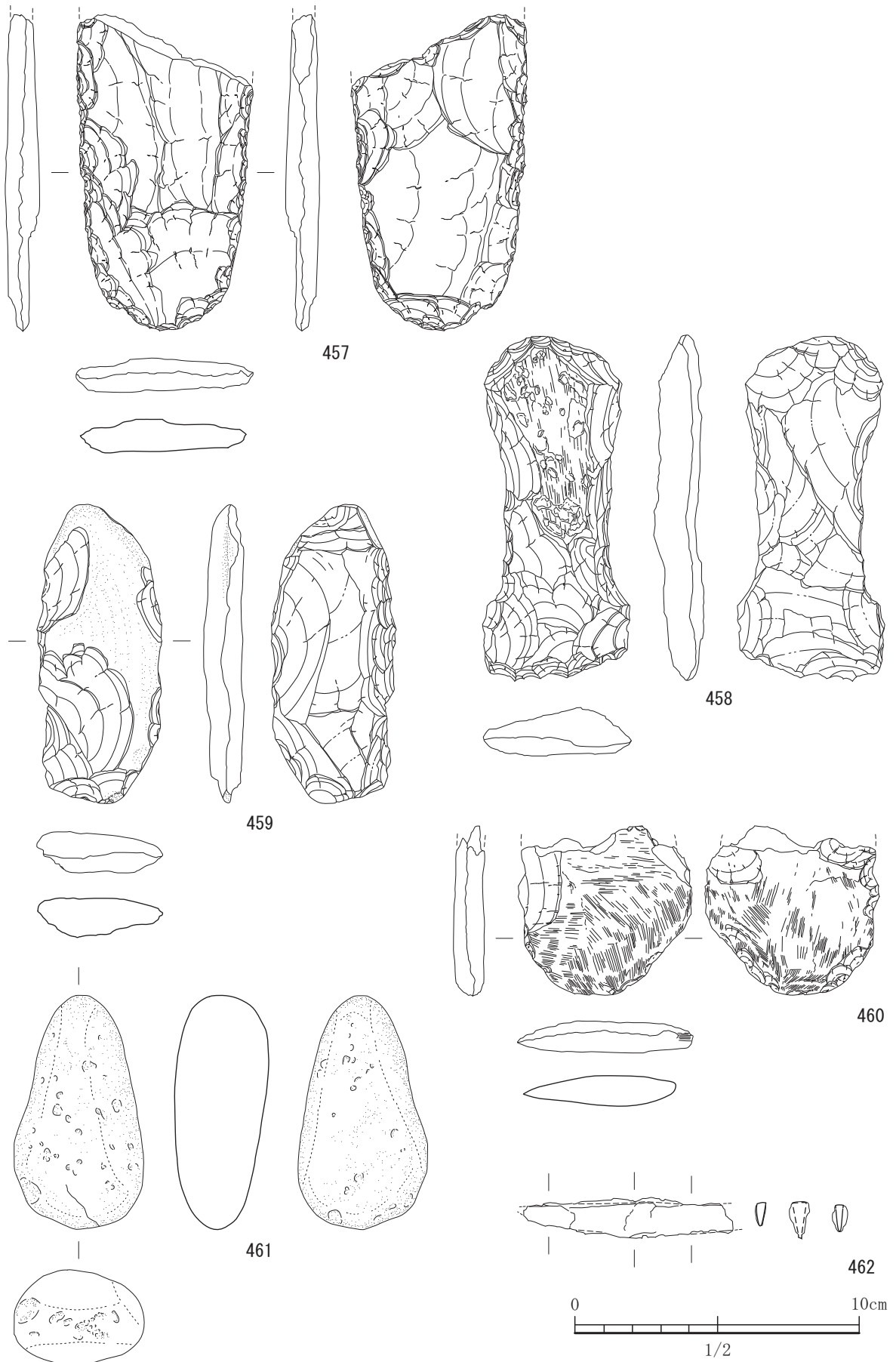


図-262 33号住居出土遺物実測図 3 (すべてS=1/2)

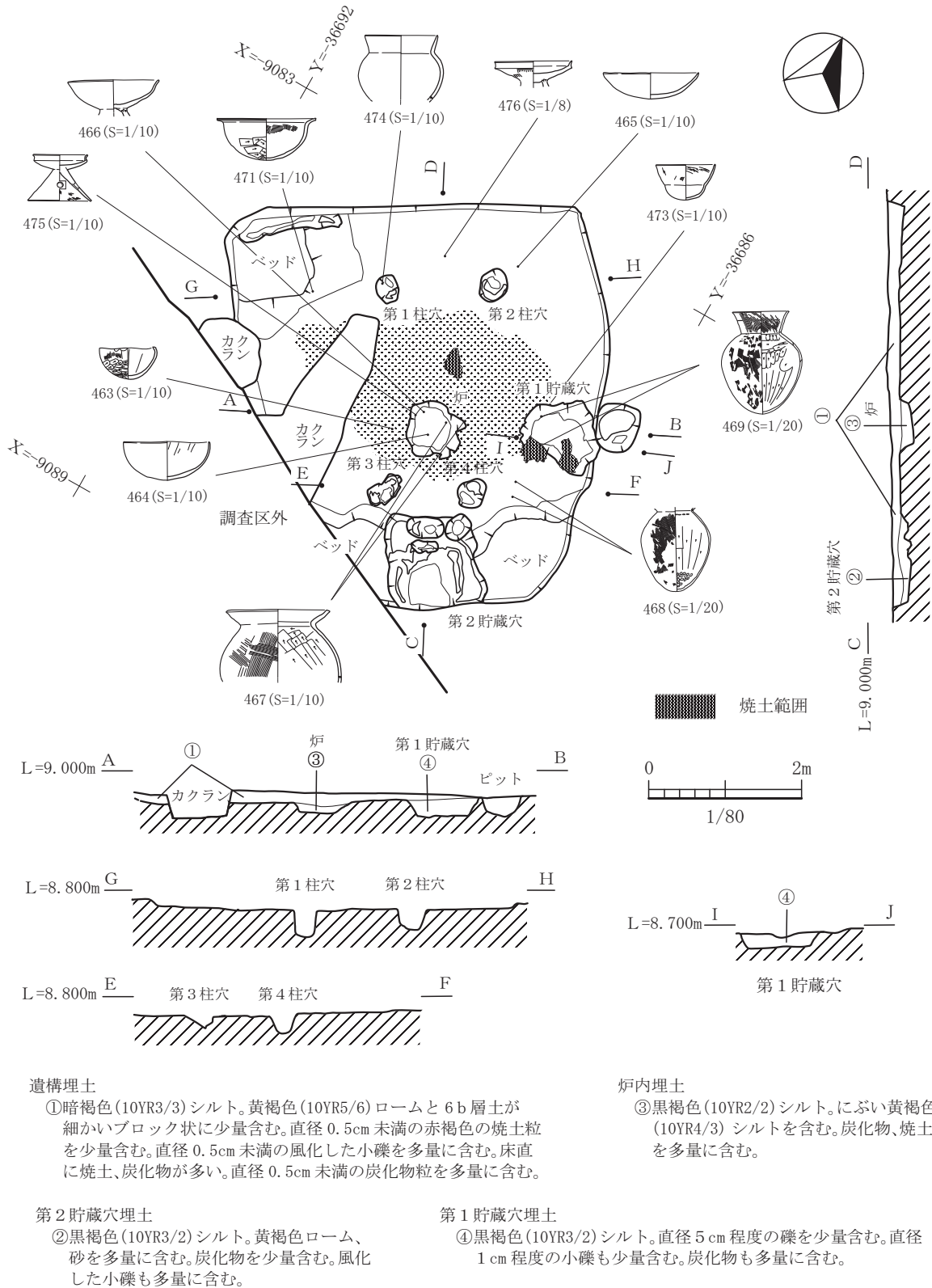


図-263 34号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

で口縁部の幅が広い。473は扁球形である。475と476は、庄内式系小形器台である。受け部立ち上がり短く外反する。477は、漆黒色黒曜石製の打製石鏃である。

ある。平面形状が五角形の凹基無茎鏃である。表面も裏面にも素材面を残す。478は、敲石である。本遺構は古墳時代前期の所産と考えられる。

### 35号住居

35号住居は、平坦地区の6区で単独で検出された竪穴住居跡である。長軸は南北方向にあり5.9m、短軸が5.2mの長方形プランである。長軸の方向は、N39°Wの方向を向く。南東コーナーは未調査である。検出面から床面までの深さは約10～20cmである。柱穴は4基検出され、4本柱の上屋を想定している。北側2本がやや深めで約50cm、南側2本が約30cmであった。炉は中央から西にややずれたところに設けてある。炉内から多量の焼土と炭化物が認められた。また、炉から掻き出したと思われる焼土塊や炭化物が炉の北側で床の上でまとまって検出された。焼土塊は厚さ18cmを測る。貯蔵穴は、第3柱穴と第4柱穴の間で、第3柱穴寄りで見出された。平面形状では楕円形を呈し、北はテラス状、南は凹地状の形状をしている。凹地の深さは、床面から約22cmある。貯蔵穴の凹地からは小形の甕が出土している。床面の様子としては、硬化面は形成されていなかった。

出土遺物は、実測可能な遺物で、土器が11点、石器が7点である。479は完形の坏であり、口縁部は直線的のび、口縁端部はすぼむようにつくり上げている。480と481は甕である。内面はケズリ、外面はハケ目調整である。口縁部がやや長めである。482は、短頸壺である。483と484は壺形土器で、器壁の厚さ、調整法及びプロポジションの同一性から同一個体であろうと考えられる。弥生時代の所産と考えられる。なぜ床面から出土したかは不明。485は、複合口縁壺である。頸部の屈曲がやや角張りをみせている。山陰系ではなく伝統的第V様式系ではないだろうか。頸部に逆「く」字状の沈線文様が施されている。486と487は、小形の甕である。球胴であり、ややなで肩ぎみである。486の口縁端部はややすぼまる。488は、小形「く」字口縁鉢である。口縁部はやや外に開きぎみである。489は、庄内式系小形器台であるが、受け部の立ち上がり小さく直上する。古墳時代前期初頭のものであろう。流れ込みであろう。490は打製石斧で埋土②からの出土である。491と492は、蛇紋岩製の磨製石斧である。493は、磨製石斧である。492と同様、側縁は直線状で、最大幅は刃部に近いところにある。494は、輝石安山岩製の磨石であり、側面と下面に磨り痕が見られる。495は、花崗岩製の砥石である。使用面は2面である。496は石匙である。床面が縄文の包含層と合致してしまい縄文の遺物が

紛れ込んだ可能性が高い。490・491・492・493・496はその紛れ込みであろう。本遺構は古墳時代前期の所産と考えている。

### 36号住居

36号住居は、平坦地区の7区で39号住居と切り合って検出された竪穴住居跡である。西側と南側の壁の一部カクランによって欠損している。南北軸（短軸）が4.2m、東西軸（長軸）が5.1mの方形プランである。南北軸は、N6°Wの方向を向く。柱穴は4基検出された。南北間が1.1m、東西間が2.2mであり、東西間は南北間の2倍となっている。柱穴の深さも40～50cmを測る。柱穴埋土中からは柱痕は認められなかった。36号住居の竪穴を埋積した埋土中からは、炭化物や焼土がどちらかと言うと少ない方である。最も残存が良かった部分は中央部で約25cm、もっとも残存が悪い西側で約5cmである。本遺構は、遺構埋土が比較的良かったにも関わらず、出土遺物は非常に少ない。廃絶時に、持ち去ったのであろう。本遺構からは、炉と貯蔵穴が検出されなかった。また床面にはベッド状遺構も見当たらず、全体的に平坦である。付帯設備もなく、照明代わりにするものが認められない。全く生活感がない遺構である。住まいとしての住居ではなく、別の用途で使用されていたのではないか。

出土遺物は、実測可能な遺物は497の1点のみである。497は、小形「く」字口縁鉢である。破片での出土であり反転復元している。外面は左上がりのハケ目調整で、内面はナデ調整である。外面には、赤色顔料痕が見られる。古墳時代前期の所産と考えられる。

### 37号住居

37号住居は、平坦地区の7区で5号溝と切り合って検出された竪穴住居跡である。本住居跡が新しい遺構である。南北軸が3.9m、東西軸が3.7mのほぼ正方形プランである。南北軸は、N38°Eの角度で東側に振っている。古墳時代前期の竪穴住居としてはやや軸が他のものとは異なる。柱穴は4基検出されており、柱間は南北間で約1.4m、東西間で約2.1mであり、東西間が長い。付帯設備として、炉の位置も住居の竪穴の中央に位置するのではなく、南側の第3柱穴と第4柱穴の間に位置する。炉の最深部までの深さは約20cmあり、西側がテラス状の形状を呈する。炭化物は含むものの全体的には少ない。焼土は第3柱穴の東側でまとまって検出され、炉から掻

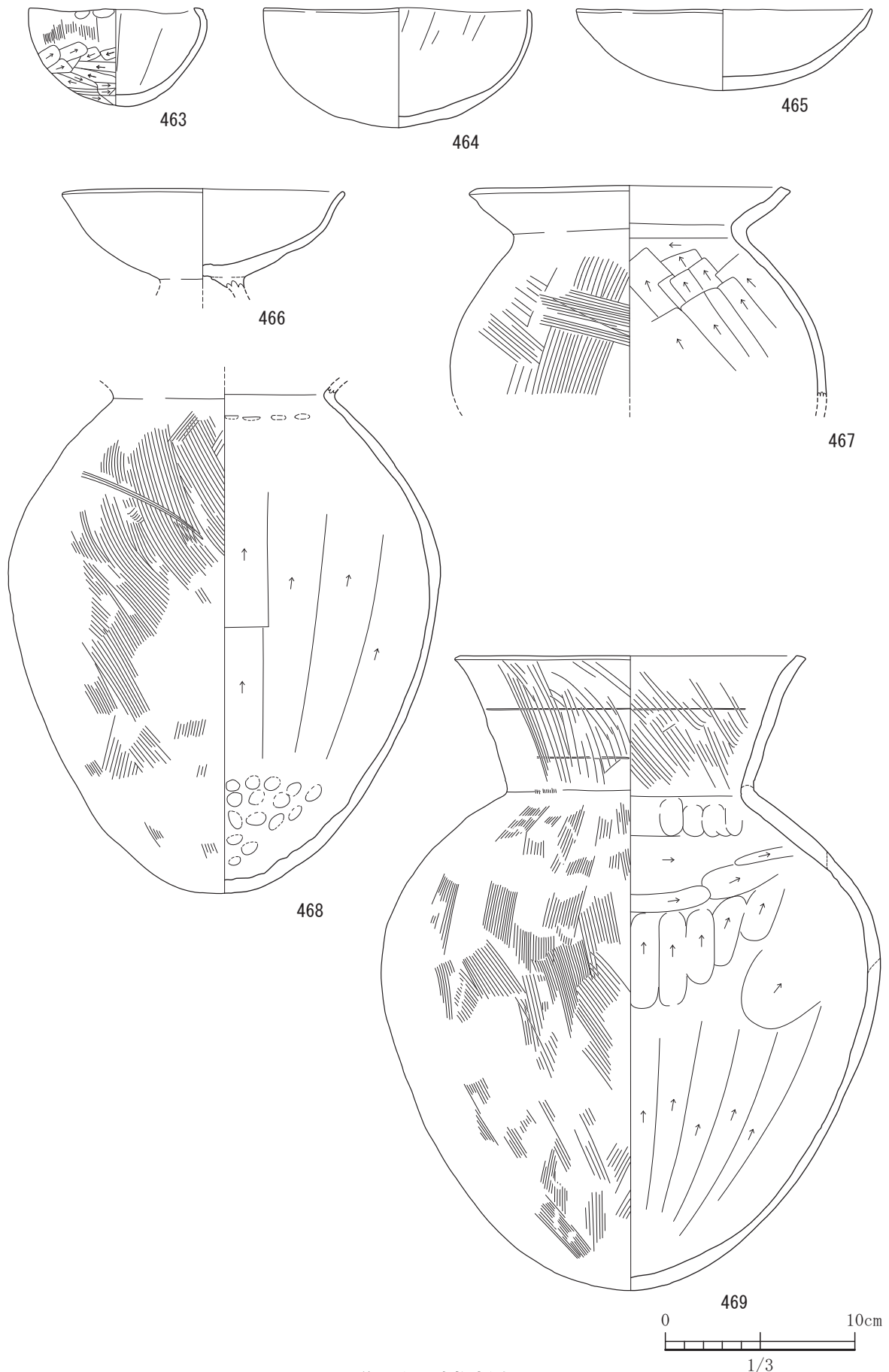


図-264 34号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)



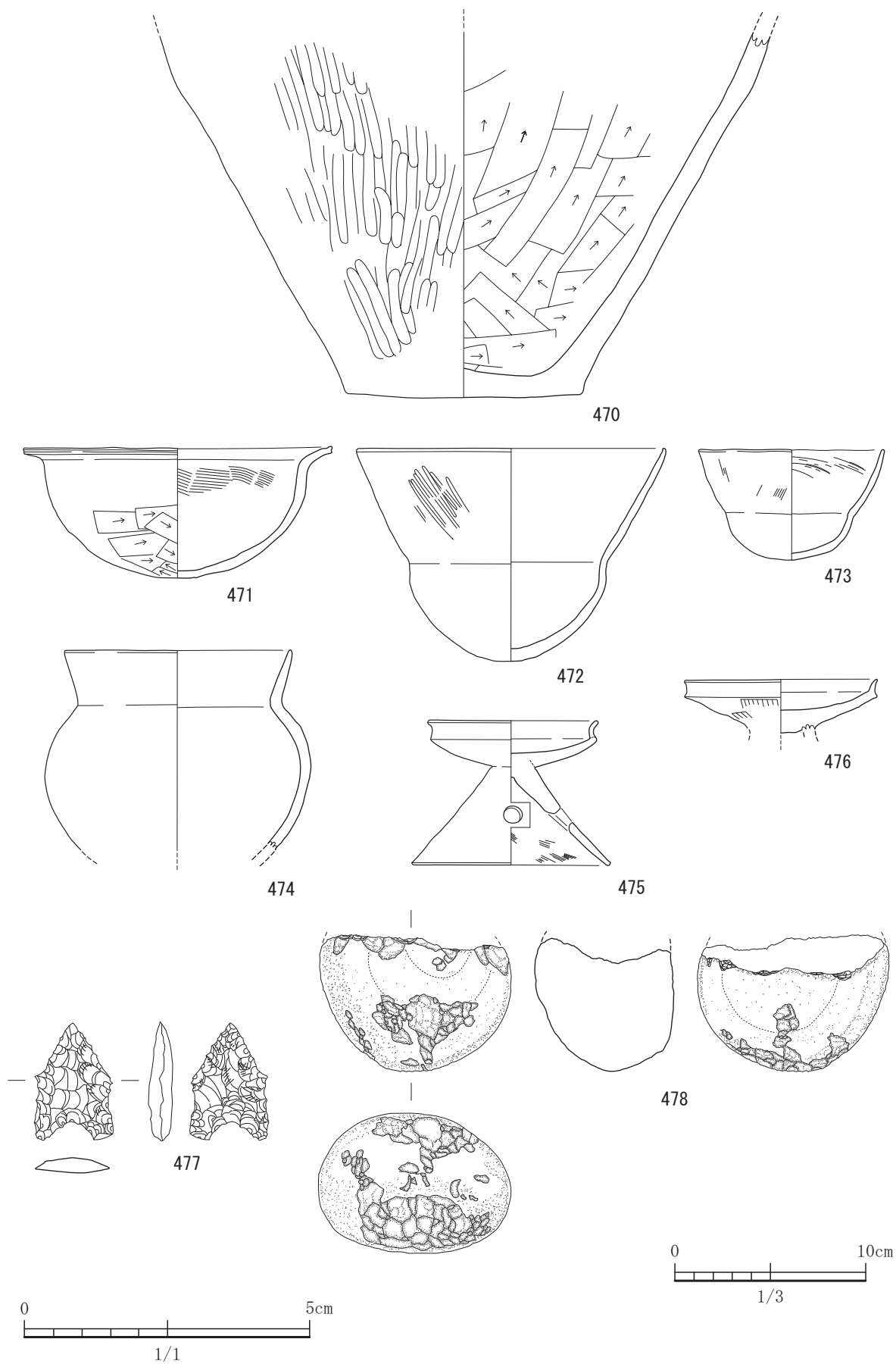


图-265 34号住居出土遺物実測图 2 (S=1/3, 477はS=1/1)

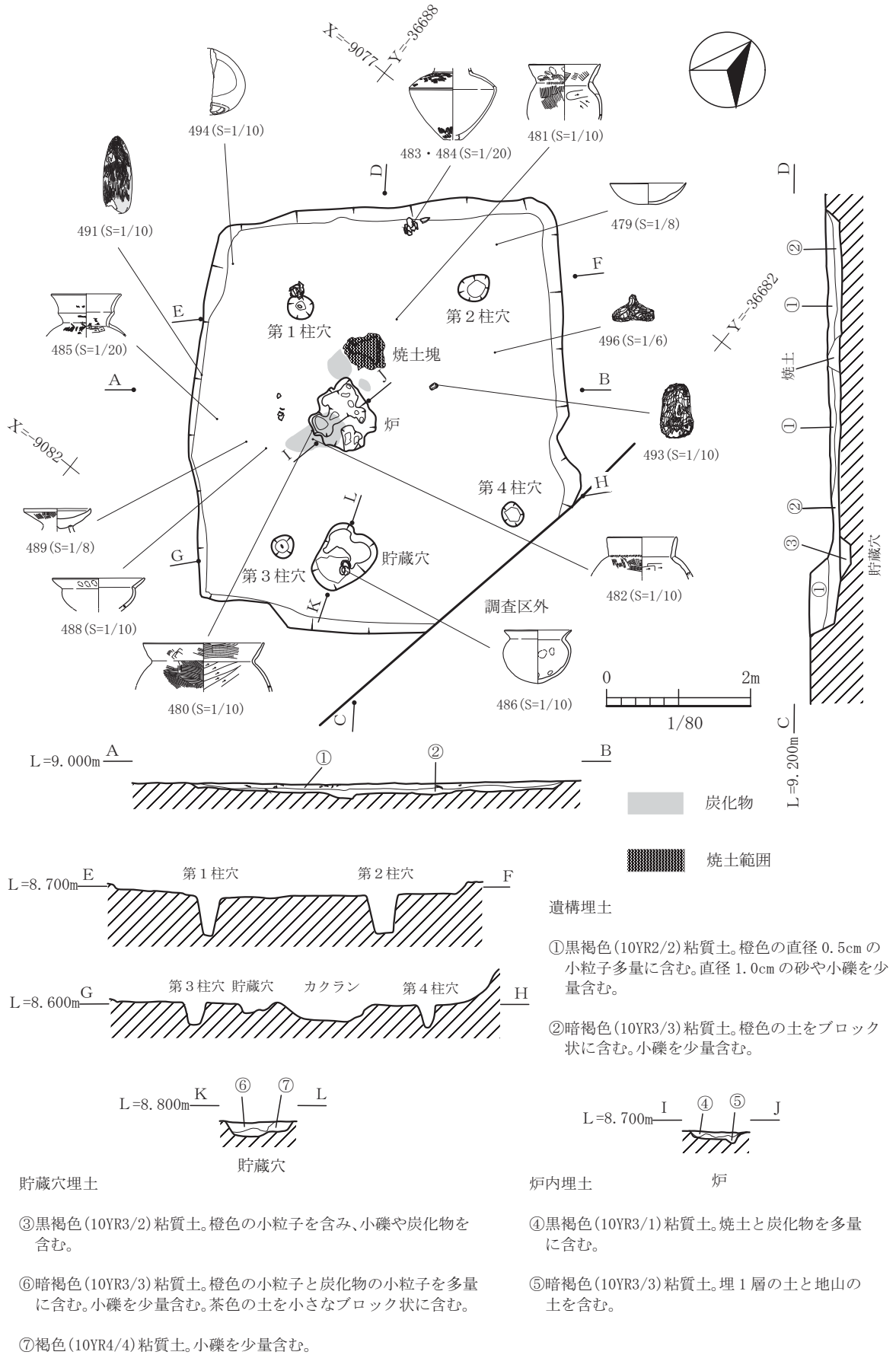


図-266 35号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

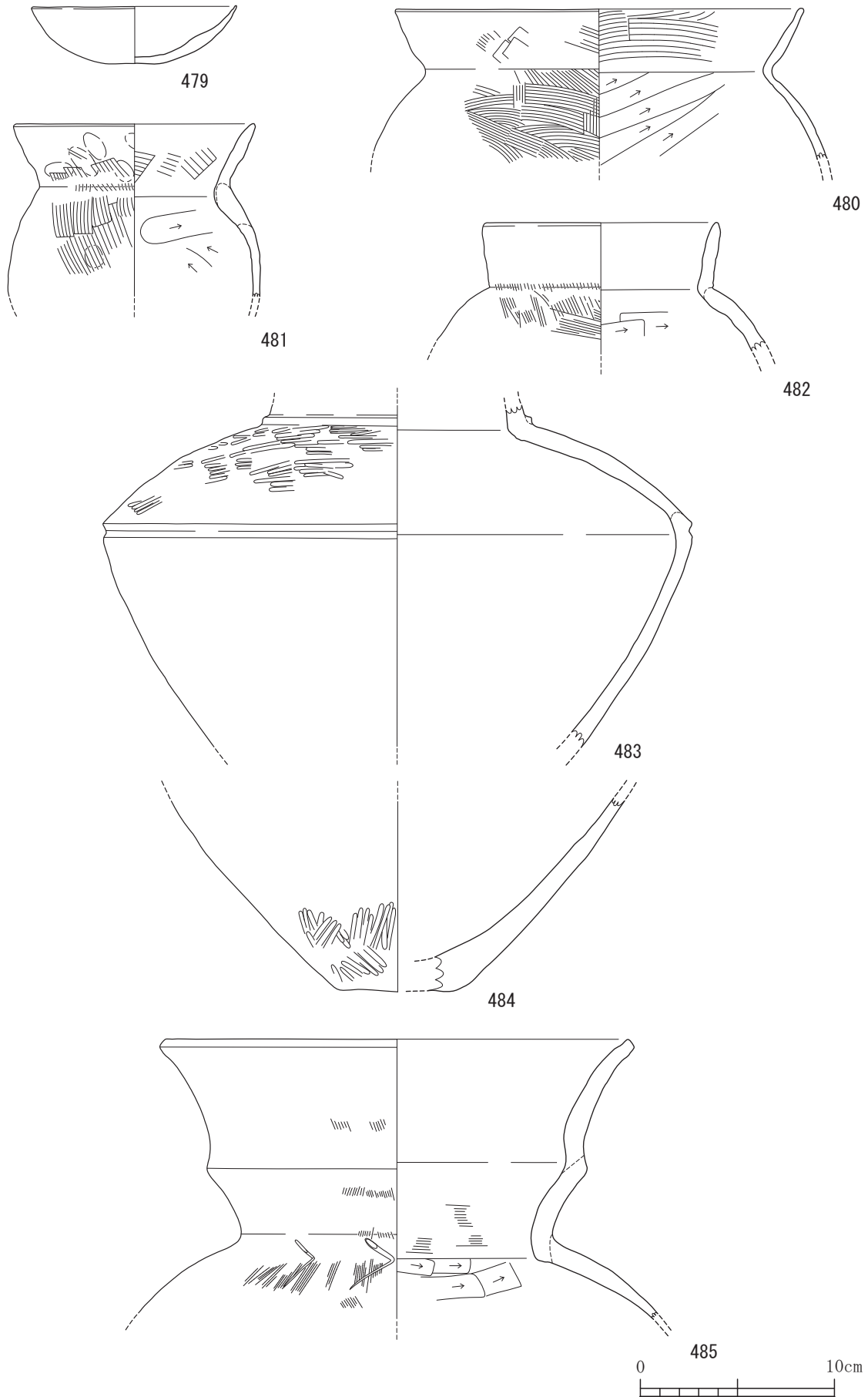


図-267 35号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3) 1/3

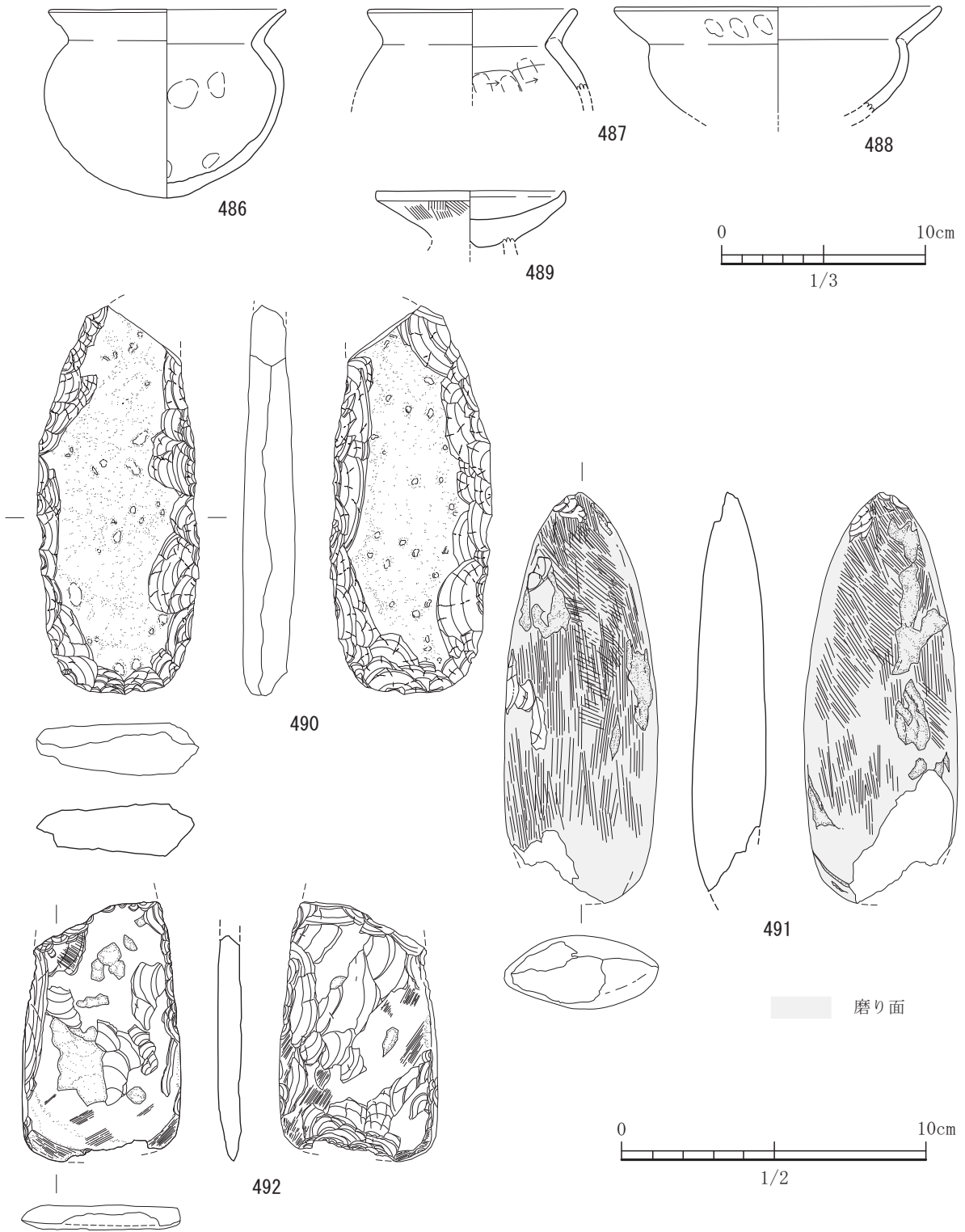


図-268 35号住居出土遺物実測図 2 (S=1/3, 490,491,492はS=1/2)

きだしたものであろう。本遺構の床面には、ベッド状遺構が2基設けてある。貼り床状ではなく地山の削り出しである。北側のベッドは面積は約1.71㎡、南側で1.56㎡ありほぼ同規模のものである。床には明瞭な硬化面は見られなかった。

出土遺物は、実測可能な遺物で土器が5点、石器が2点出土した。498は、坏の上半と下半は明瞭ではないが分かれる。上半部は、やや外反する。下半部がやや小さい。脚部から坏部にかけて外面でヨコミガキが見られる。499は坏部上半と下半の境が明瞭であ

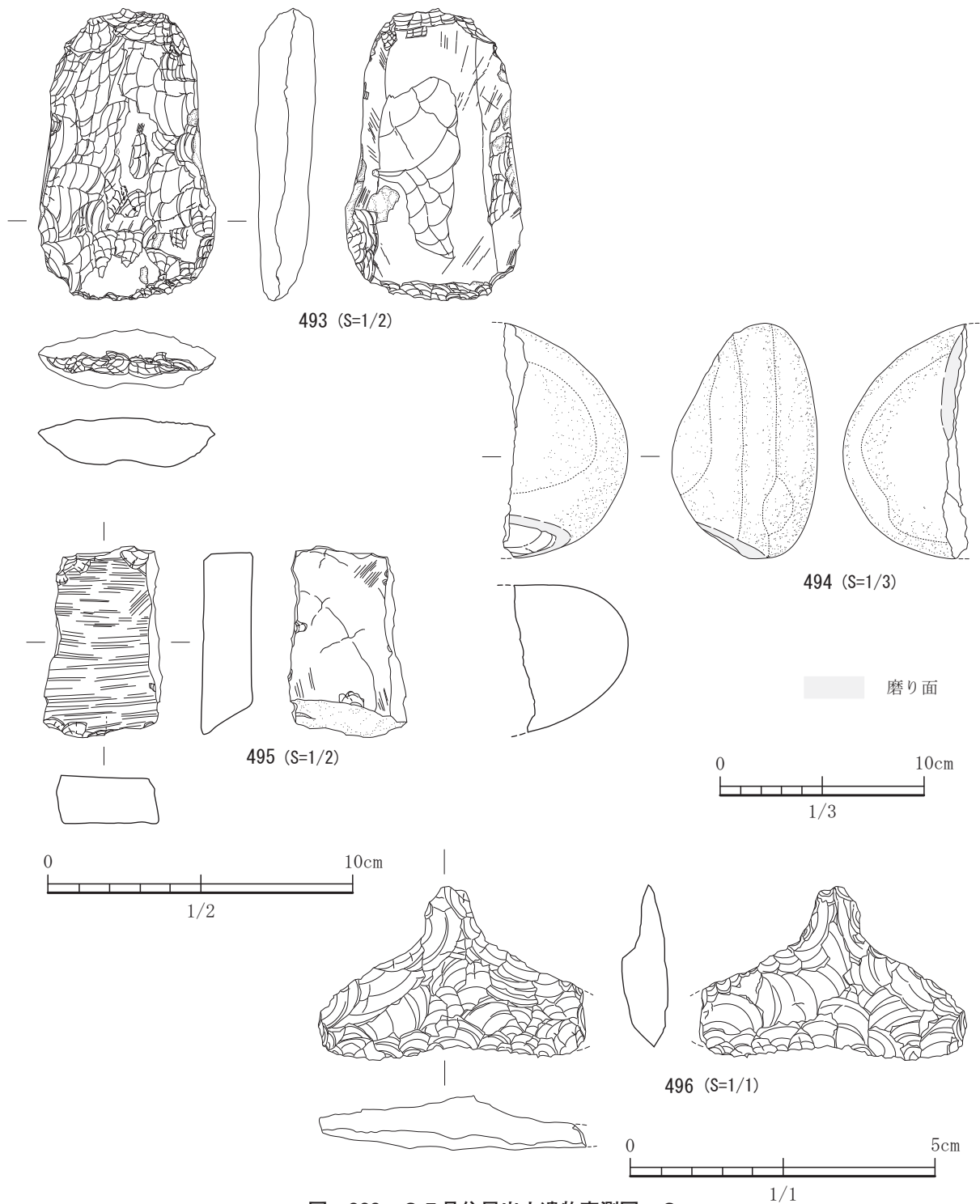


図-269 35号住居出土遺物実測図 3

り段状を呈する。500は、器壁が薄く胴部の肩の部分にヨコハケ目を施す。口縁端部面は水平である。501は、小形の甕で口縁部が外反する。内面には図上右下がりのケズリを施す。502は、鉢である。口縁部は「く」字状で、図上右方向のケズリを施す。外面は左斜め方向のハケ目調整である。外面は口縁部から体部、内面は口縁部に赤色顔料痕が見られる。埋土①

からの出土である。504は、緑泥石岩製の勾玉である。北側のコーナー壁で出土した。503は変ハンレイ岩製の打製石斧である。欠損している。つぶれ痕や擦痕も見られる。埋土①の上層からの出土である。比重が重い石器で最上層からの出土であることから流れ込みであるかもしれない。本遺構は古墳時代前期の所産と考えられる。



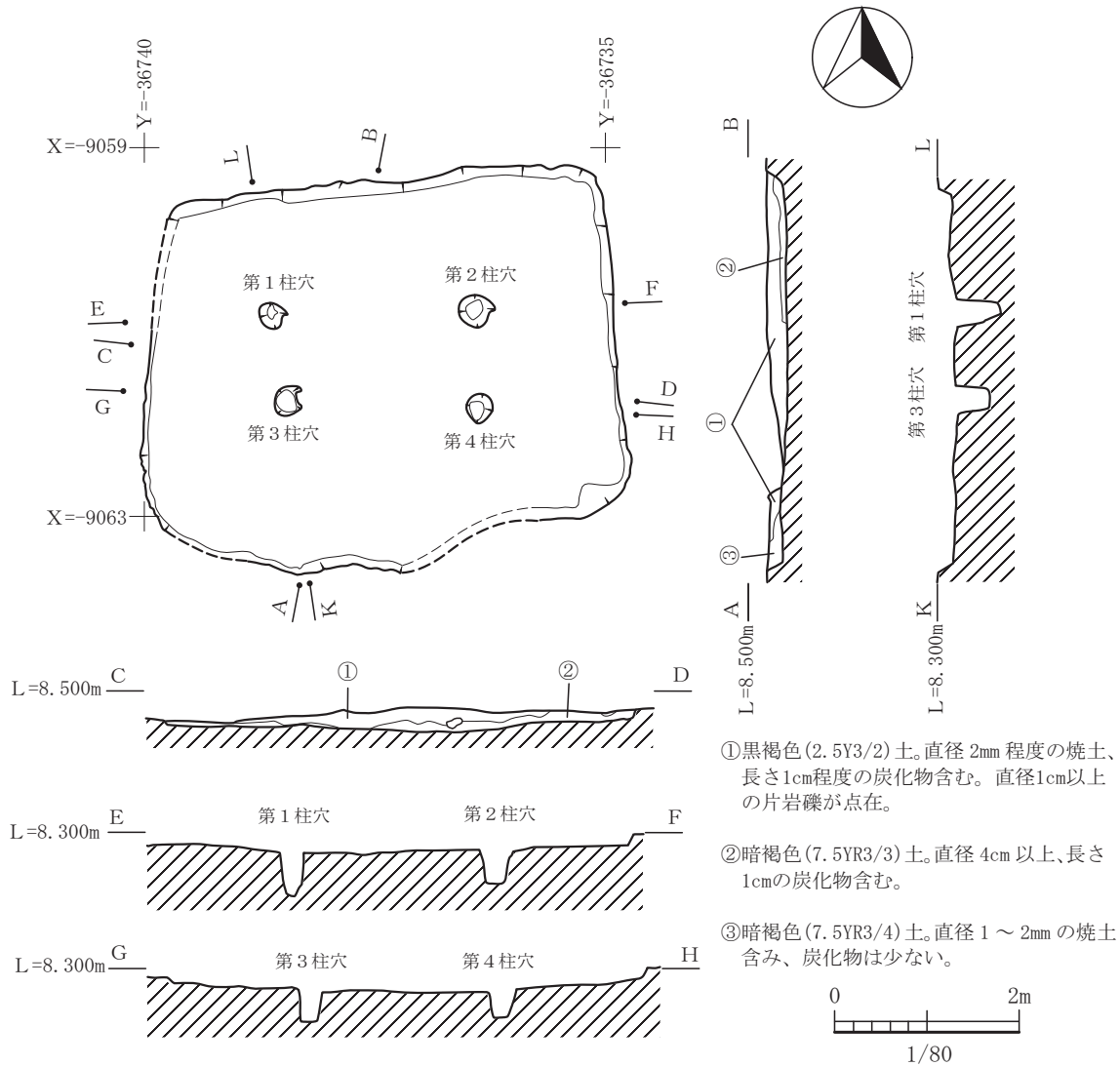


図-270 36号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

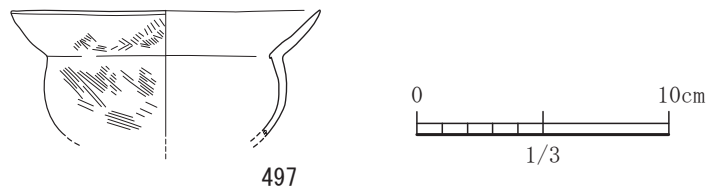


図-271 36号住居出土遺物実測図 (S=1/3)

### 38号住居

38号住居は、平坦地区の7区で単独で検出された竪穴住居跡で、長軸5.0m、短軸3.7mの長方形プランで、長軸方向はN14°Wを向く。南北に長い住居跡である。柱穴は南北軸に沿うように2基検出された。これに柱を立て上屋は2本柱の構造となっていると考えられる。柱痕は他の住居と同様検出できなかった。付帯設備としては、炉が住居跡の竪穴のほぼ中央に

位置し、長軸の長さが1.3mあり規模は大きい。掘り込みもやや深く約21cmを測る。炉の埋土中からは、炭化物や焼土粒が多量に検出されているので、炉として使用していたのは明らかである。また貯蔵穴は南壁に接するように敷設してある。3層構造で階段状になっており、西に向かって低くなる形状を呈している。出土遺物は特になかった。床面においては、ベッド状遺構は検出されず、地山を直接床とする平坦な形状

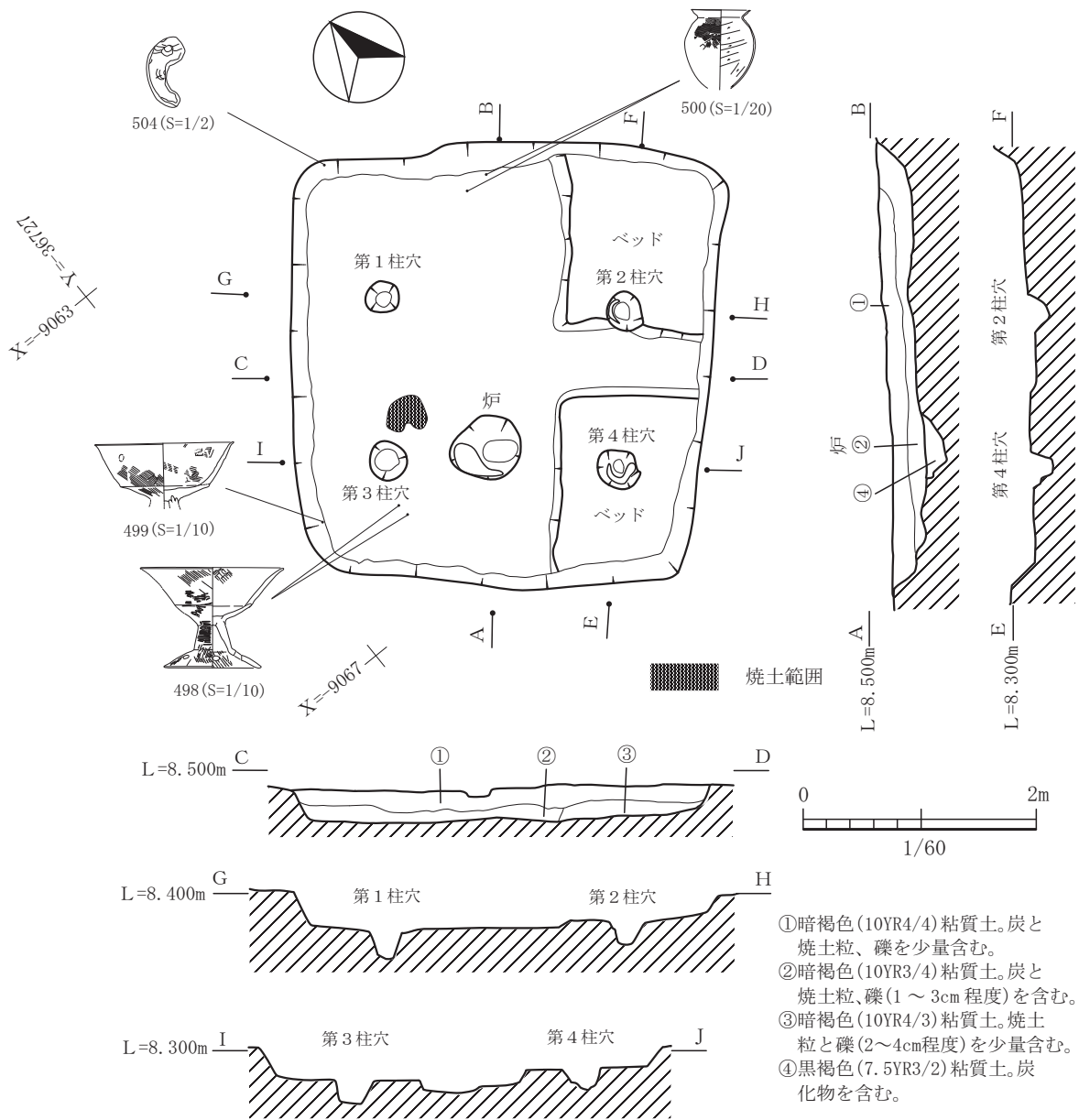


図-272 37号住居平面図及び断面図 (縮尺1/60)

であった。床面に形成される硬化面は、北側半部のみに見られた。硬化面自体はさほど硬化していなかった。

出土遺物は埋土の残りは良かった割りには多くはなく、実測可能な土器で8点、石器で2点である。505は土師器の坏である。器壁はやや厚く、平底で碗形である。調整は内外面ともヘラケズリに似た板ナデを施す。506は、器台の脚部である。外面はハケ目のちヨコナデ調整、内面はハケ目のちナデ調整で一部ケズリが残っている。裾部で僅かに外に広がる。507は、頸部と一次口縁の屈曲、頸部と胴部の屈曲が緩やか

になりスムーズである。口縁部には内外面にハケ目からヨコナデが施されておりやや回転的である。外面には指をあてた凹凸が比較的明瞭にあらわれている。山陰系複合口縁壺と思われる。508は、頸部と一次口縁、頸部と胴部の屈曲がややきつくなっているものの緩やかであろう。また、507同様、ヨコナデを施す。山陰系複合口縁壺の範疇ではなかろうか。509は、鉢である。口縁部は内湾する。内外面とも基本的にケズリのちハケ目調整である。510と511は、小形丸底壺である。510は、扁球形でやや下ぶくれの体部で、最大胴径と口径がほぼ同じである。511は、扁球形で丁寧な

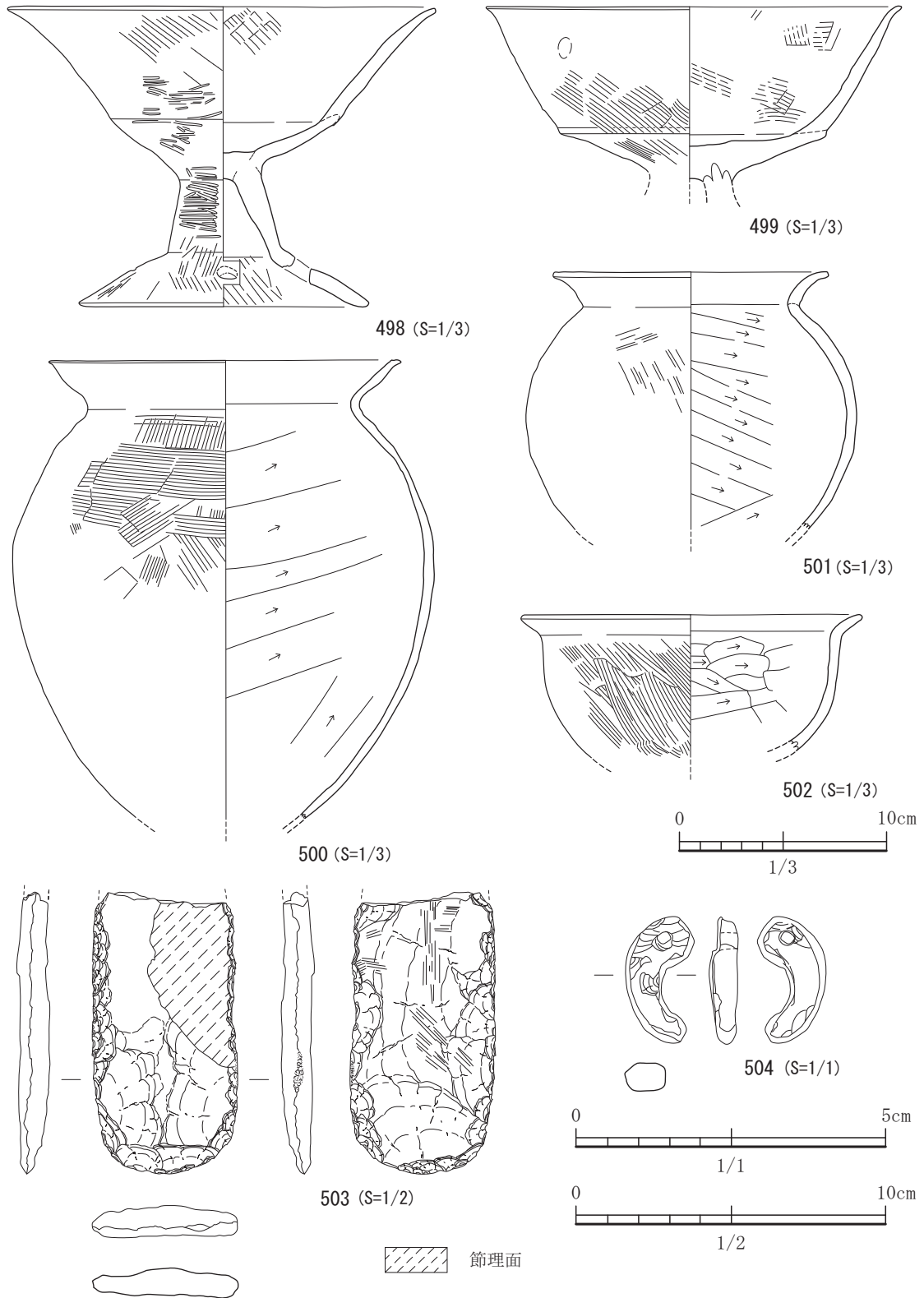
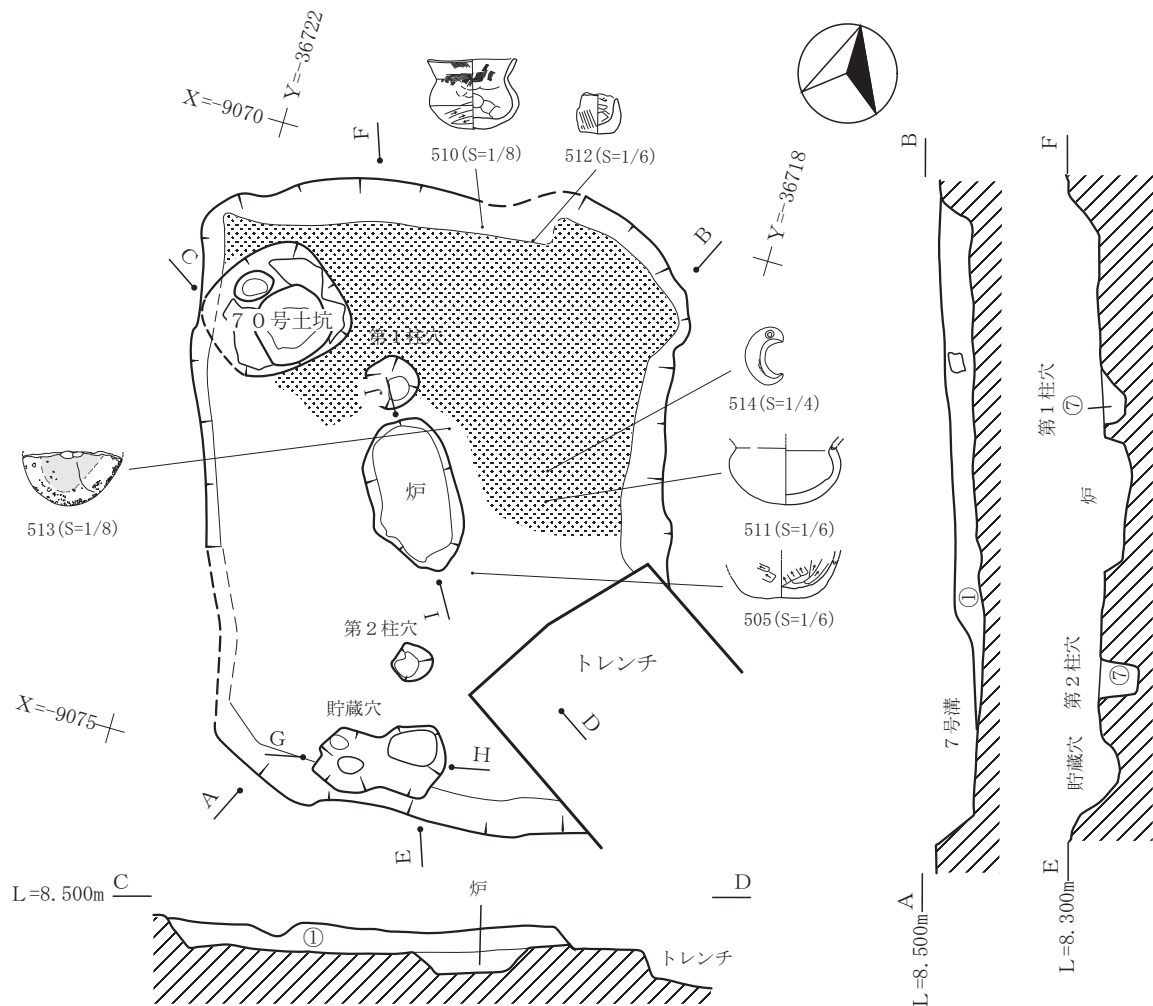


図-273 37号住居出土遺物実測図

ナデ調整を施す。512は手捏ね土器でほぼ完形である。513は、敲石で側面に敲打痕が明瞭に見られる。石材は金峰山系の輝石安山岩である。上面と下面には

磨り痕が見られる。床直上から出土する。514は、緑泥石岩製の勾玉である。床面直上からの出土である。38号住居は、古墳前期の所産の遺構である。

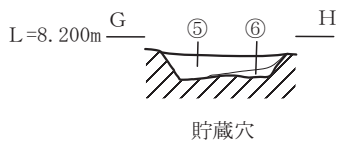


遺構埋土

①黒褐色(10YR2/3)粘質土。炭化物や焼土粒子を多量に含む。黒色の小ブロック粘土を含む。小礫を少量含む。

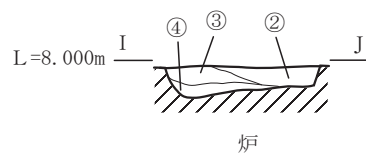
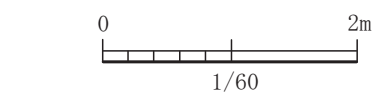
柱穴埋土

⑦黒褐色(10YR1/3)粘質土。橙の小粒子と炭化物を少量含む。暗褐色の小粘土ブロックを含む。



貯蔵穴埋土

⑤黒褐色(10YR2/2)粘質土。白い小礫を含む。橙色の小粒子を少量含む。  
⑥暗褐色(10YR3/3)粘質土。黒色の粘土がブロック状に含む。



炉内埋土

②暗褐色(10YR3/4)土。焼土、炭化物を多量に含む。白色の粘土ブロックを含む。  
③黒褐色(10YR3/2)土。炭化物の混入は少なく、焼土の粒子は多量に含む。  
④にぶい黄褐色(10YR5/3)土。礫が多量に含む。炭化物を含む。黒色粘土をブロック状に含む。

図-274 38号住居平面図及び断面図 (縮尺1/60)

39号住居

39号住居は、平坦地区の7区で、36号住居と66号土坑と切り合って検出された竪穴住居跡である。

66号土坑よりは新しく、36号住居よりは古い遺構である。36号住居の床面とほぼ同じ高さであったため、本住居跡の床面も一部残存することができた。長

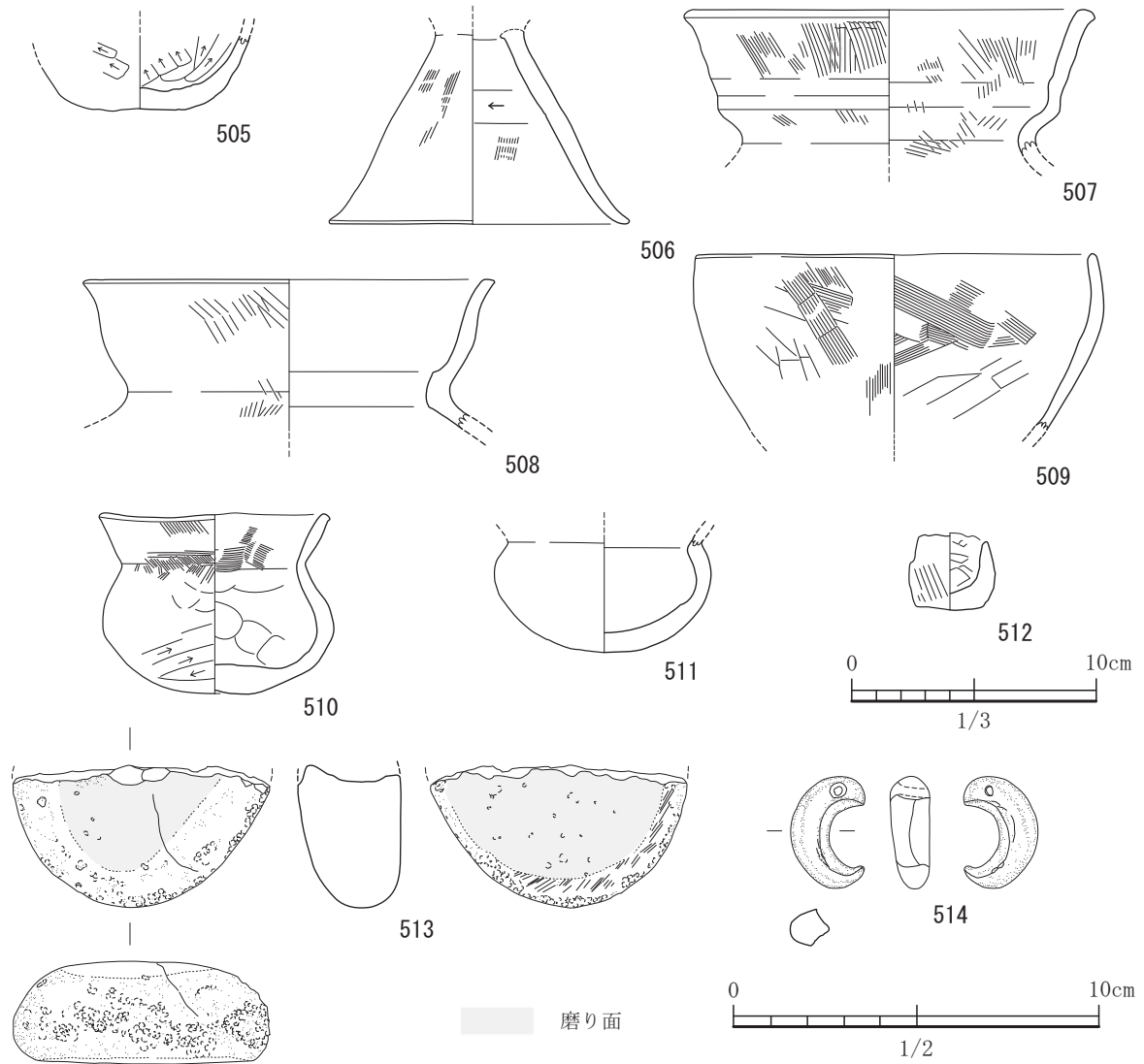


図-275 38号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 514はS=1/2)

軸は6.1m、短軸が5.2mの長方形プランである。長軸方向はほぼ真北方向を向く。柱穴は住居のプランの各辺に沿って4基検出されており、柱穴間は縦横比が約10：9の比率で、ほぼ住居のプランと一致する。柱痕は検出されなかった。炉は住居の堅穴のほぼ中央に位置し、掘り込みは約5cmで浅い。貯蔵穴は確認できなかった。堅穴の西側の両コーナーにはL字形のベッド状遺構が検出された。床を貼っているのではなく地山ケズリ出しである。高まりも低く3～5cm程度のものである。大きさは北東コーナーのもので2.55㎡、南東コーナーで2.61㎡でほぼ同規模のものである。堅穴の壁には側壁溝が設けてあった。ただし西壁はあまり顕著ではない。出土遺物は少なく、実測可能な土器が4点である。ほとんど土師器片であった。515は、甕である。胴部の肩の部分にヨコハケ目を施し、器壁

はやや薄い。また倒卵形でやや尖底である。口縁部はやや内湾さみで口縁端部で小さく内傾させ端部を平坦化している。布留式系の甕である。516は、長胴の甕で、外面にはタタキが残る。内面は図上左上がりのケズリである。口縁部はすぼまり、十分整形されているとは言えず波打つ。粗雑である。517は、山陰系の複合口縁壺である。胴部と頸部、頸部と第1口縁との境がなめらかである。胴部には肩付近にヨコハケ目を施す。518は、鉢である。「く」字口縁鉢の頸部のしまりがほとんどなく、若干折れるものの全体的には直線的に体部から口縁部に伸ばしている。古墳前期の所産で、本遺跡のものではやや古てのものであろう。

#### 40号住居

40号住居は、平坦地区の7区で単独で検出された堅穴住居跡である。南側が調査区外である。本遺



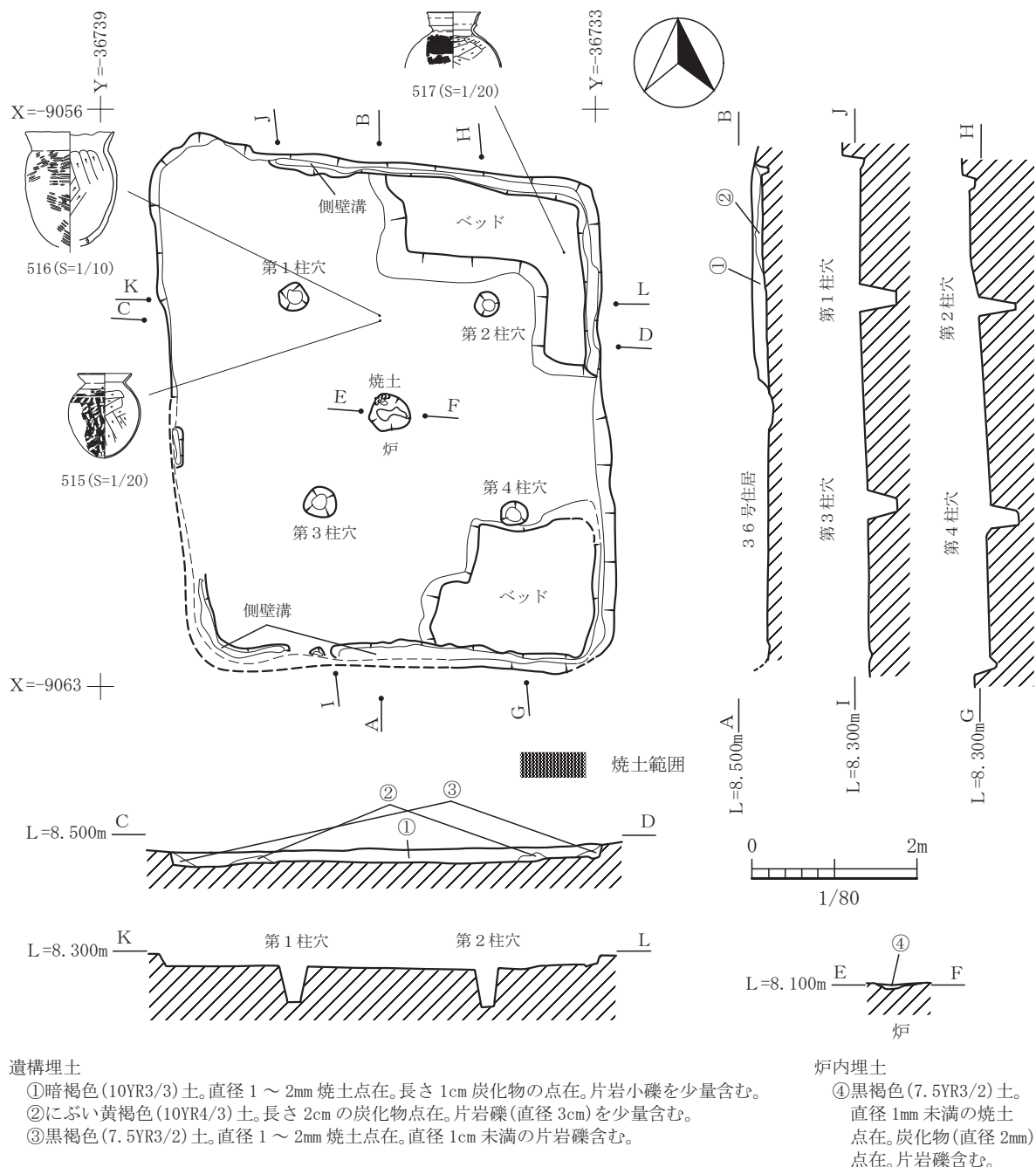


図-276 39号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

構は既存の木葉川の河川工事の際、削平や剥平を受けており、埋土の残存も非常に悪く遺物の出土がほとんどない遺構であった。検出面から床面までの深さは約7cmであり、南側ほど残りが悪かった。南北軸は、N35°Eである。東西軸は約4.9m、南北軸は北壁から炉の中心までの長さは2.7mで炉が竪穴の中心であると仮定して単純に2倍すると5.4mとなる。縦横比が約10:9である。39号住居と同じ比率となる。柱穴の深さは約30cmを測る。炉の東側に位置するピットは深さが約15cmほどであり主柱穴にはなりえないと考

えている。炉は北半分の平面形状から竪穴のはほぼ中央に位置していると考えられる。平面形状は東西方向に引き伸ばされたように楕円形を呈する。深さは約16cmを測り、床面は平坦な形状を呈する。比較的燃焼物は少ない。貯蔵穴は深さが約20cmあり遺物の出土もなかった。本遺跡では東側に貯蔵穴があった場合、南側にも貯蔵穴を設ける傾向にあり、削平により南側は欠損しているが、あった可能性がある。上屋は炉を挟んで2本の柱を持つものであったのではないかと推定される。

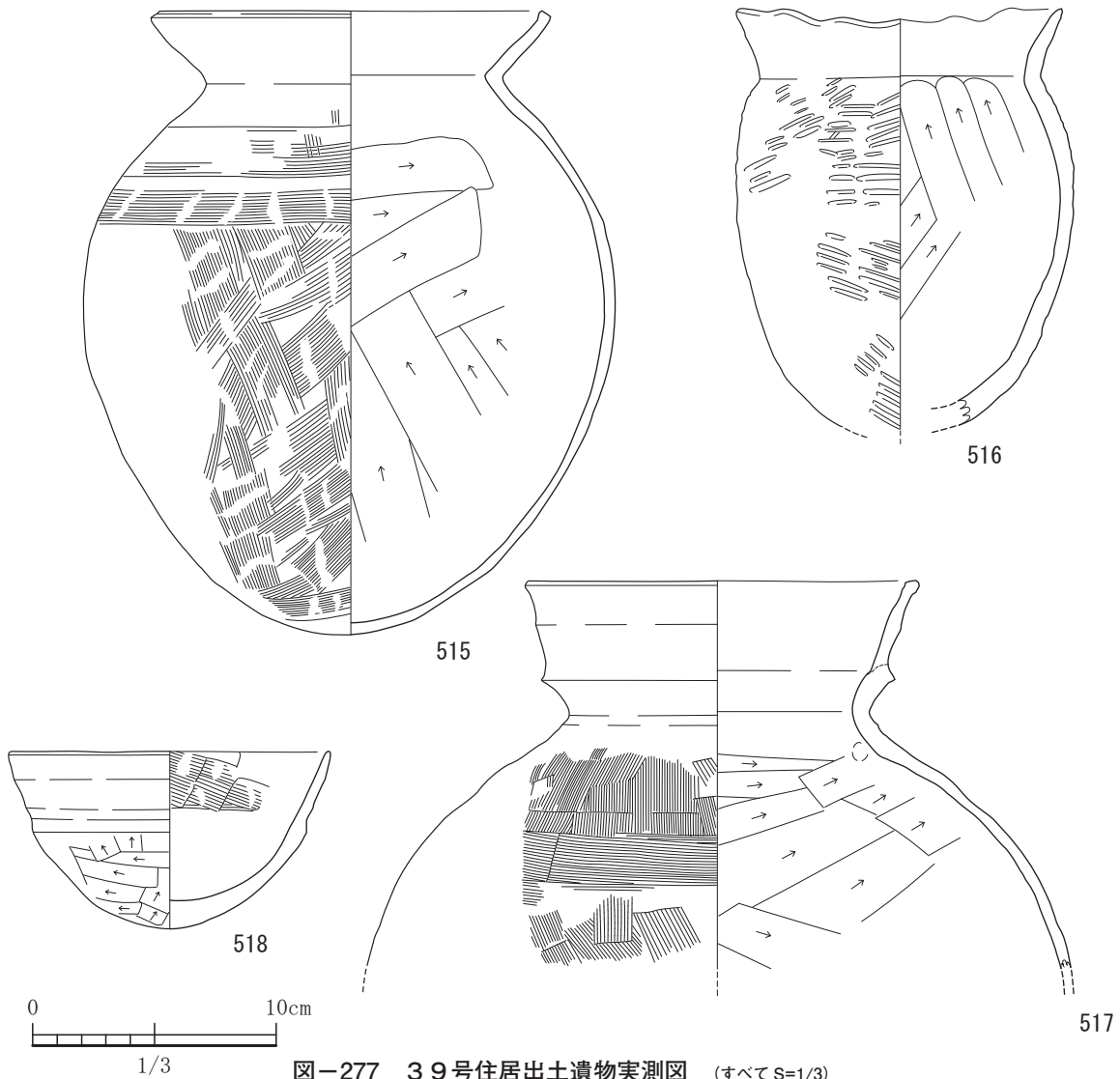


図-277 39号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

出土した519は、胴部から口縁部にかけての破片で反転復元もできなかった。鉢であろうと考えられる。丁寧なヨコナデを施す。詳細時期は不明。

#### 41号住居

41号住居は、平坦地区の8区で49号住居や50号住居と切り合って検出された竪穴住居跡で、後世の住居跡によって壊されており全貌はわからない。南北軸は3.1mを測る。東西軸は破壊されており不明である。南北軸はほぼ真北を向いており、軸方向からすると古墳前期のものと一致する。柱穴は2基検出されているが、第1柱穴はカクランによって南側の上端の一部が壊されている。尚、東側の柱穴は調査期間の制約もあり調査できなかった。第1柱穴の深さは33cmで、第2柱穴が27cmであった。柱痕は他の住居跡と同様検出できなかった。埋土が非常に混濁して乱れており腐植土がないので土色の手がかりでは不

可能である。他の付帯設備については検出されなかった。床面に残る硬化面も残存していなかった。

出土遺物は、実測可能な土器が9点出土しているが、いずれも床に直接のって出土したものではなく、埋土中から破片で出土したものである。床にはほとんど張り付いていなかった。520は、高坏の脚部である。脚柱状部は太く比較的短い。やや中ぶくらみ傾向にある。赤色顔料痕が見受けられる。脚裾部への屈曲はきつくなっている。521は、畿内伝統的の第V様式の系統をひく高坏である。坏部下半部と上半部がわかれており明確に段状を呈している。柱状部は中実である。本遺跡の古墳前期の遺構では古てのものである。522は、甕である。器壁が非常に薄い。口縁部はやや外反しており、口縁端部はすぼまっている。胴部はなで肩であり、外面にはタタキ仕上げが施されている。内面は図上、左上がりのハ

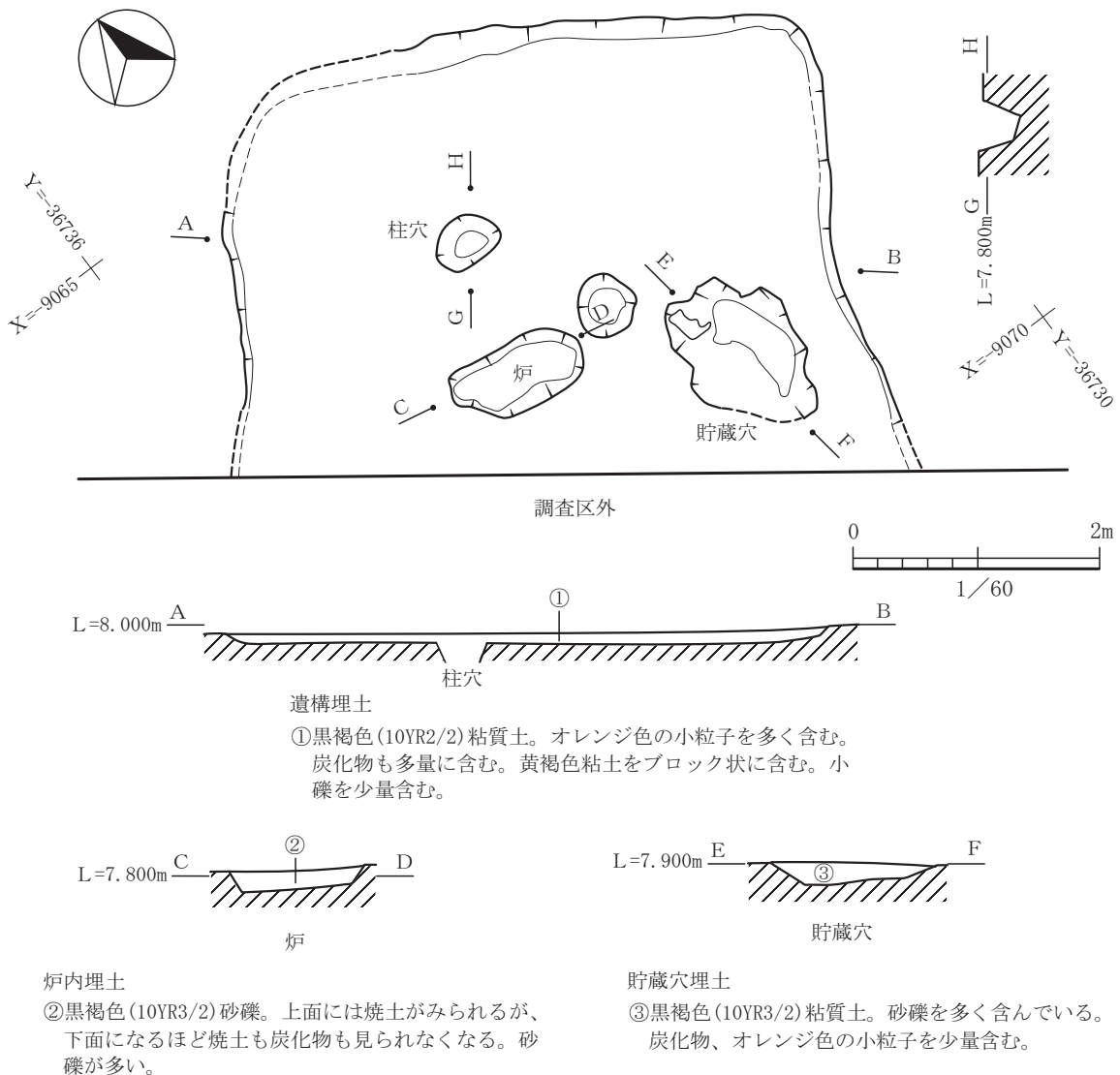


図-278 40号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

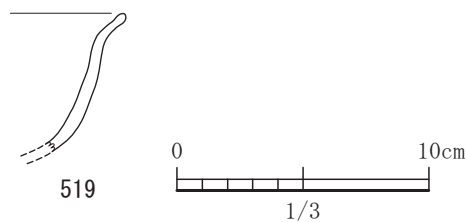


図-279 40号住居出土遺物実測図 (S=1/3)

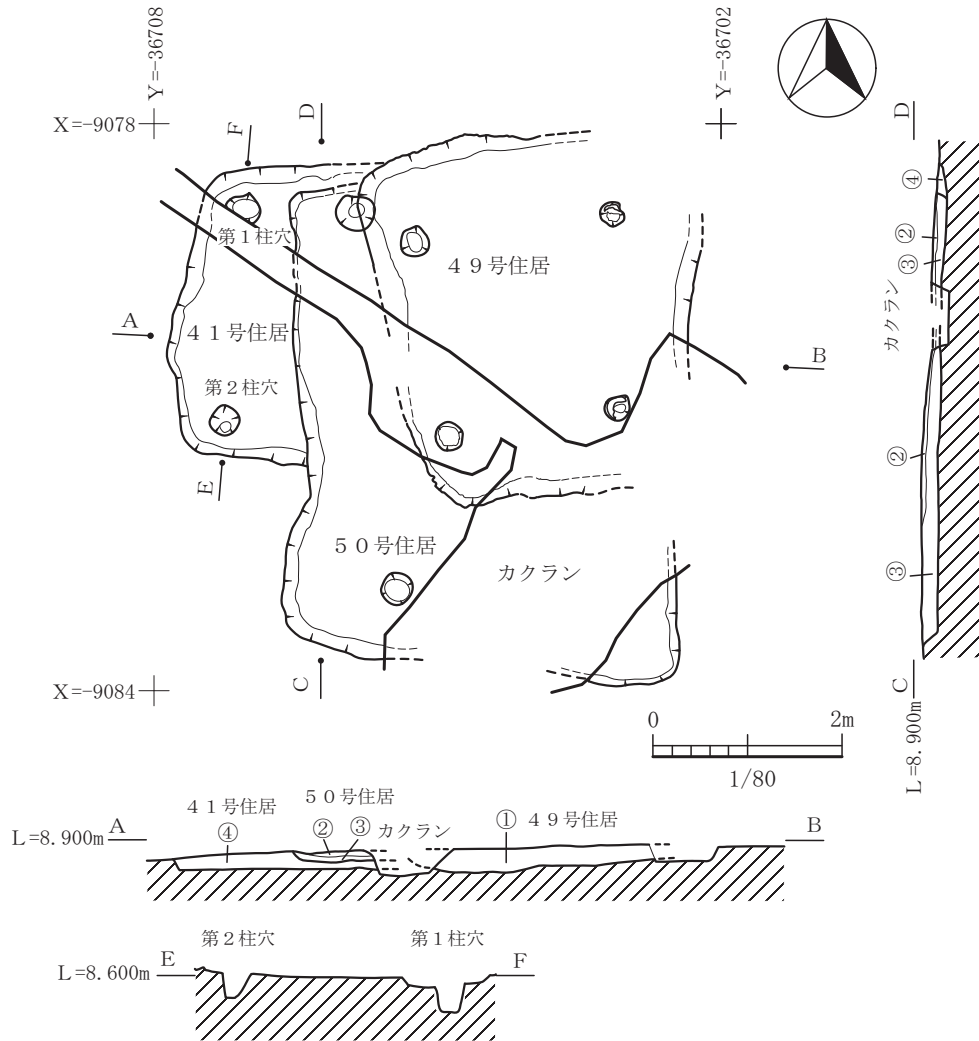
ケ目調整である。524は、甕の頸部から口縁部であるが、口縁部は直線的で端部は平坦に仕上げている。525は、甕の胴部であるが、外面にはタタキのちナデ調整でタタキが残っている。526は、壺の口縁部である。直線的に立ち上がり、端部は平坦に仕上げ小さく内傾させる。527と528は、加飾複合口縁壺である。527は、頸部と胴部の境界に刻み目の突帯文を施す。528は、二次口縁部に浮文を施している。41

号住居は古墳時代前期の所産と考えられる。

#### 42号住居

42号住居は、平坦地区の8区で単独で検出された竪穴住居跡である。南北軸が3.5m、東西軸は4.1mである。縦横比は東西に長く10:9の比率である。南北軸の方向は、N4°Eである。本住居跡からは、柱穴は検出されなかった。竪穴の外を探したがピットらしい遺構は存在しなかった。検出面から床面までの深さは、約20cmと比較的残りが良い方であったが遺物はほとんど残存しておらず、住居の廃絶時に持ち出したのだろうか。破片のみである。炉は竪穴の中央からやや南西に振ったところに配置されている。床には明瞭な硬化面は検出されなかった。

出土遺物は、床面に張り付くように実測可能な土器が2点出土し、埋土中から石器が2点出土してい



49号住居遺構埋土

① 黒褐色(7.5YR3/2)粘質土。炭化物粒と焼土粒を多量に含む。

50号住居遺構埋土

② 暗赤褐色(7.5YR4/3)土。焼きしまり、部分的に小ブロック状の塊がみられる。炭化物粒が少量混入。

③ 暗褐色(7.5YR3/3)粘質土。炭化物粒と焼土を少量含む。

41号住居遺構埋土

④ 暗褐色(7.5YR3/4)粘質土。炭化物粒と焼土を少量含む。

図-280 41号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

る。529は、坏である。内外面ともナデ調整で、底部には木の葉圧痕が見られる。530は、胴部は球形の甕である。胴部外面の肩には凹線が3条巡らされている。調整ではタテハケ目のちヨコハケメを施す。器壁は薄い。531は打製石鏃で、漆黒色の黒曜石製の平面形状が三角形の凹基無茎鏃である。532は、珪化岩の剥片石器である。自然面を残している。本遺構は古墳時代前期の所産であろう。

43号住居

43号住居は、平坦地区の2区で単独で検出さ

れた竪穴住居跡である。南北軸は4.5m、東西軸は4.7mのほぼ正方形プランである。南北軸の方向は、N12°Wの方向を向く。北壁には、カマドで使用していたと思われる平面形状が楕円形を呈する掘り込みが認められた。約3cm掘られていて燃焼によって形成された赤褐色の焼土と炭が多量に含まれていた。この部分が火床部と思われる。尚、カマドの構築物は検出されなかった。通常であれば袖石が掘り込みの周りに巡らされその上に粘土で積み上げられており遺構埋土中からも粘土塊等の残骸が出土するものであ

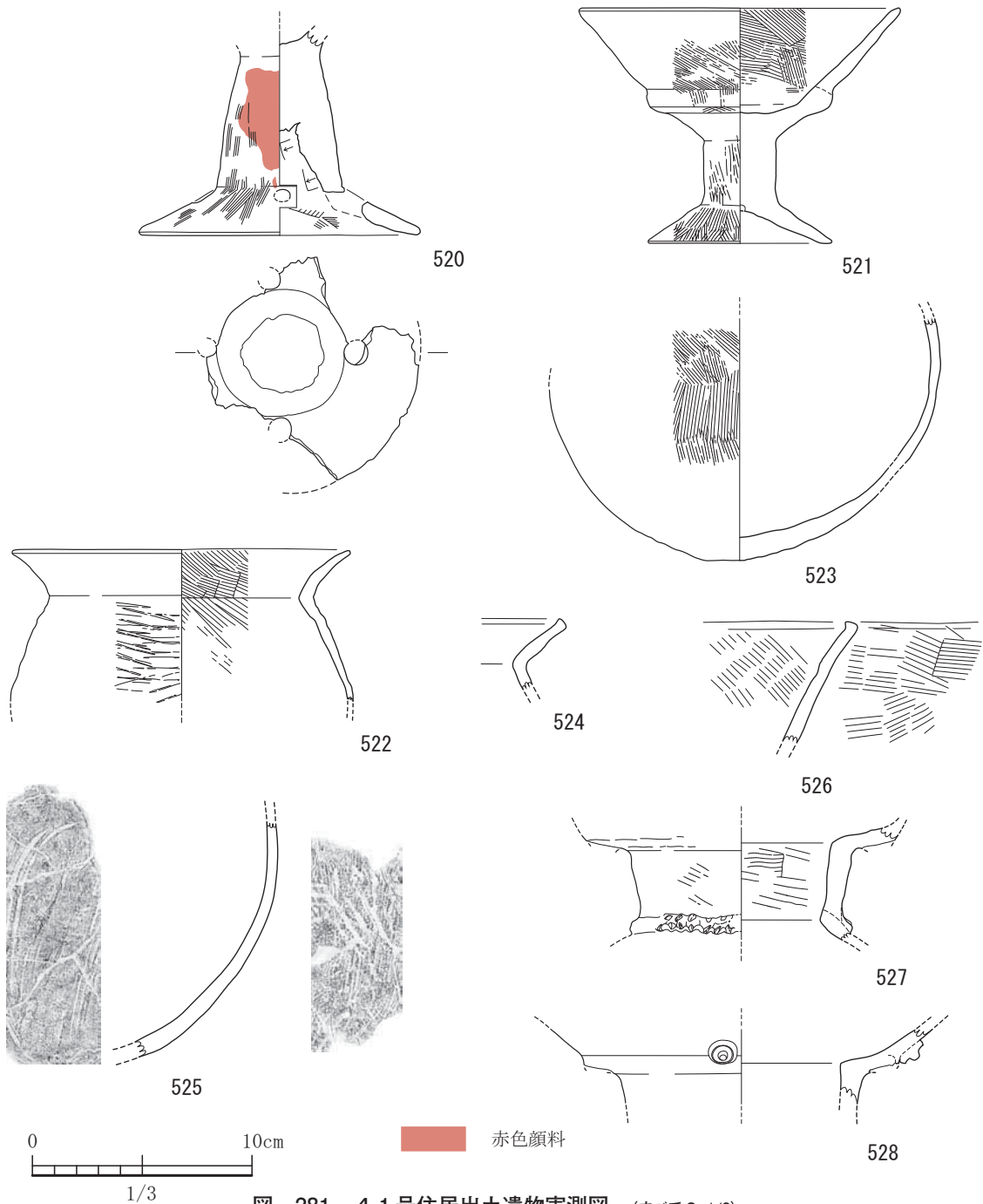


図-281 41号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

るが、全く出土しなかった。埋土の残りが悪いのも原因ではあろうが、それにしてもその痕跡がない。炉の北側には円状に張り出した部分があるが、煙道の一部ではないだろうか。床面からは4基の柱穴が検出された。支柱穴であろう。上屋は4本柱の構造が想定される。柱間は南北間で2.6m、東西間で2.2mを測る。柱痕は検出されていない。床面に形成される硬化面は東側半分に認められる。

出土遺物は、残存する埋土が少なかったため

あろうか、非常に少なく実測可能な土器が3点である。533は、土師器の坏身である。受け部が非常に小さい。外面には回転ヘラケズリを施している。534は、須恵器の坏身である。受け部の立ち上がりはやや長い。平底であり、回転ヘラケズリを施している。535は、須恵器の蓋である。天井部は丸みを帯びている。外面は回転ヘラケズリで内面は回転ナデを施す。43号住居は古墳時代後期で6世紀後半期の所産と考えられる。



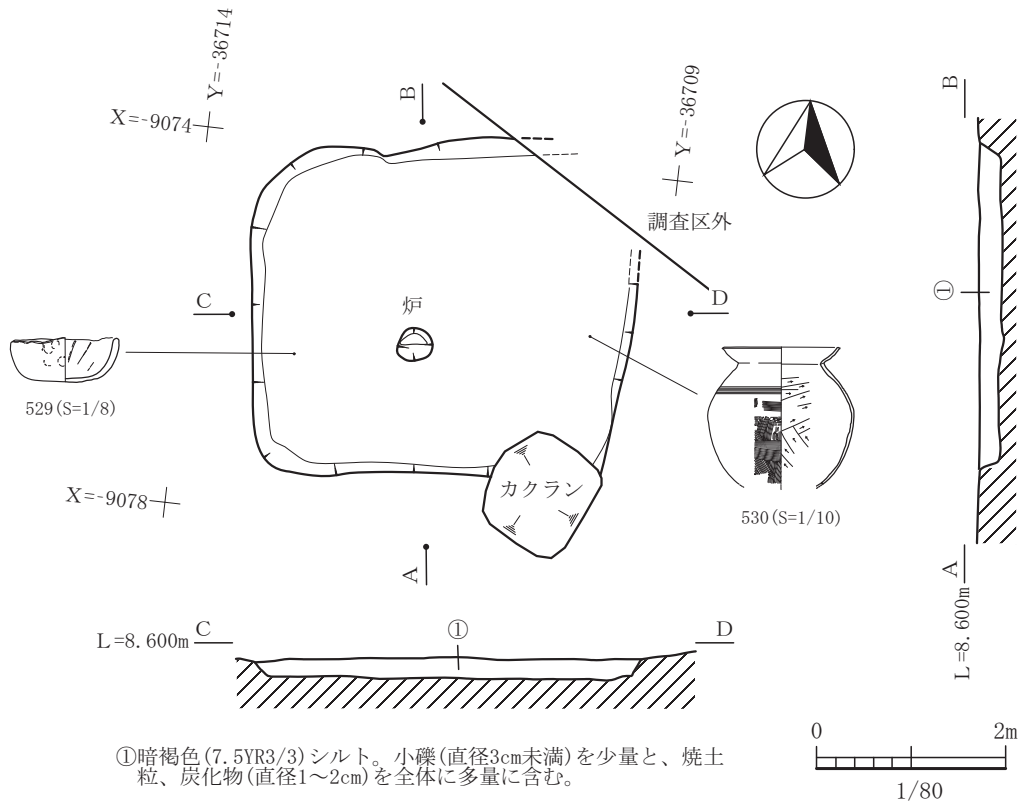


図-282 42号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

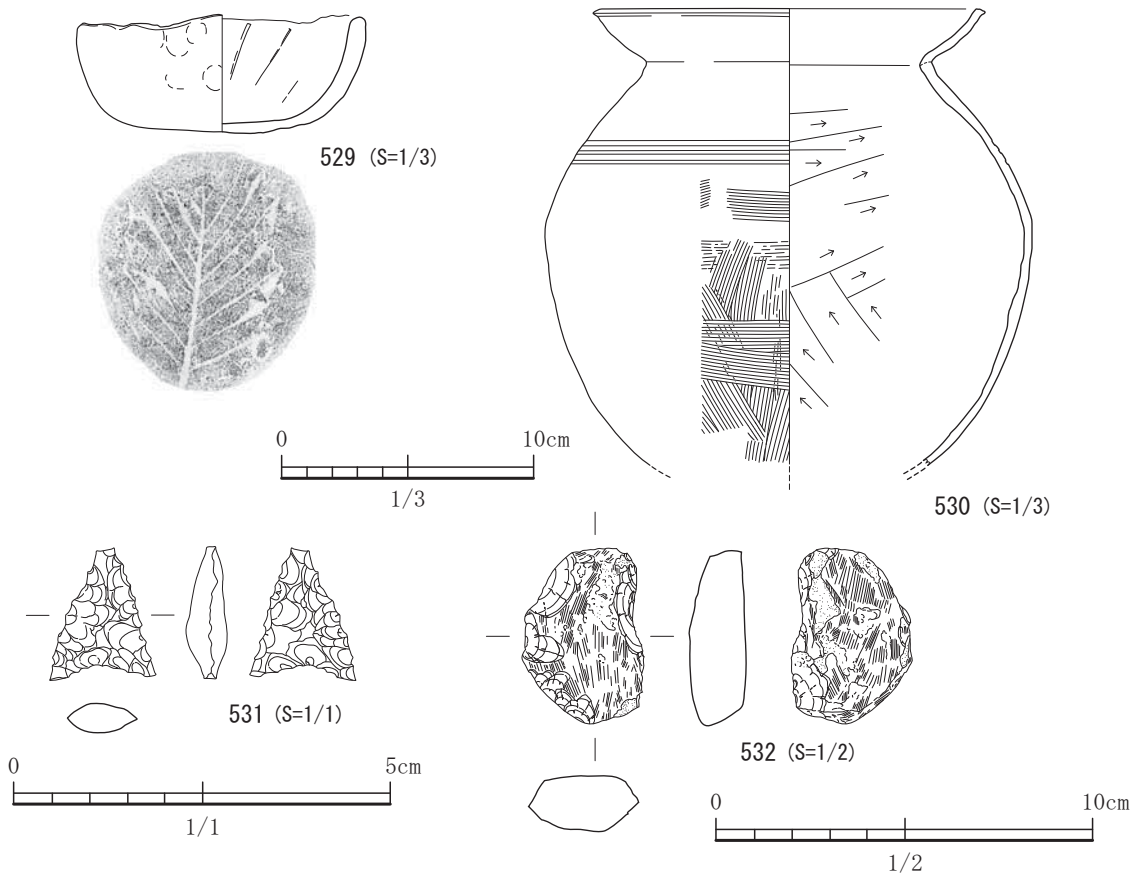


図-283 42号住居出土遺物実測図

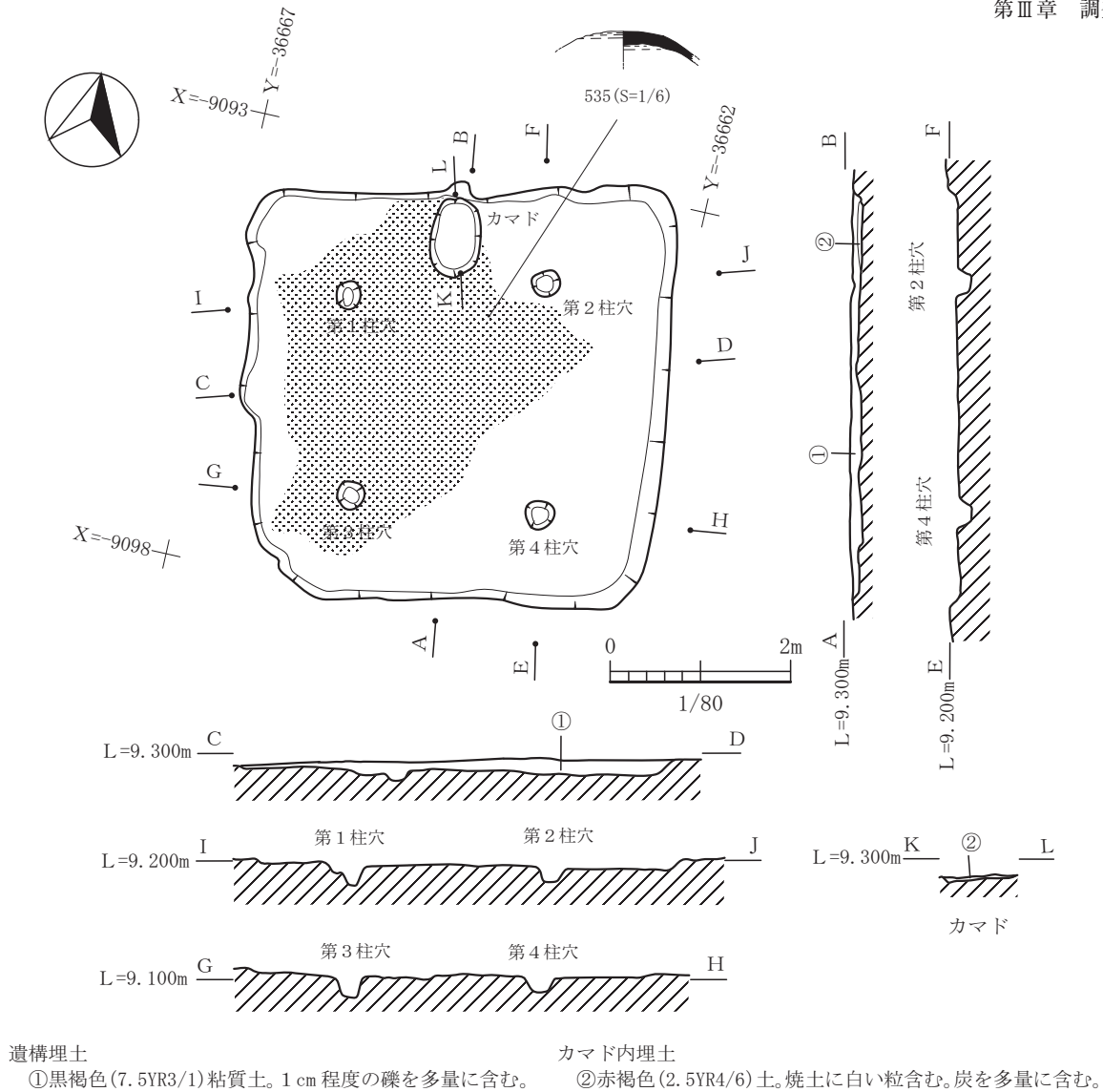


図-284 43号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

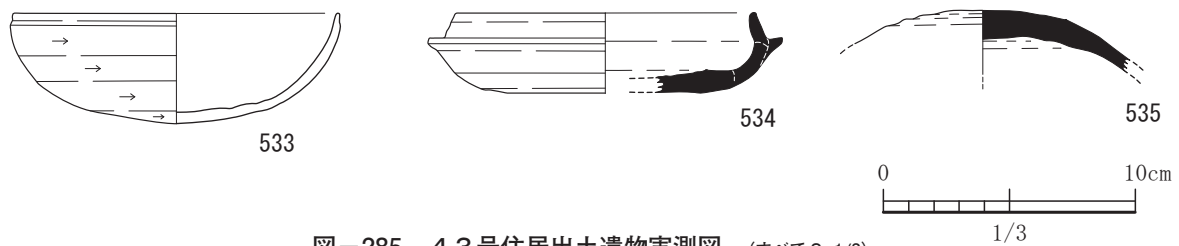
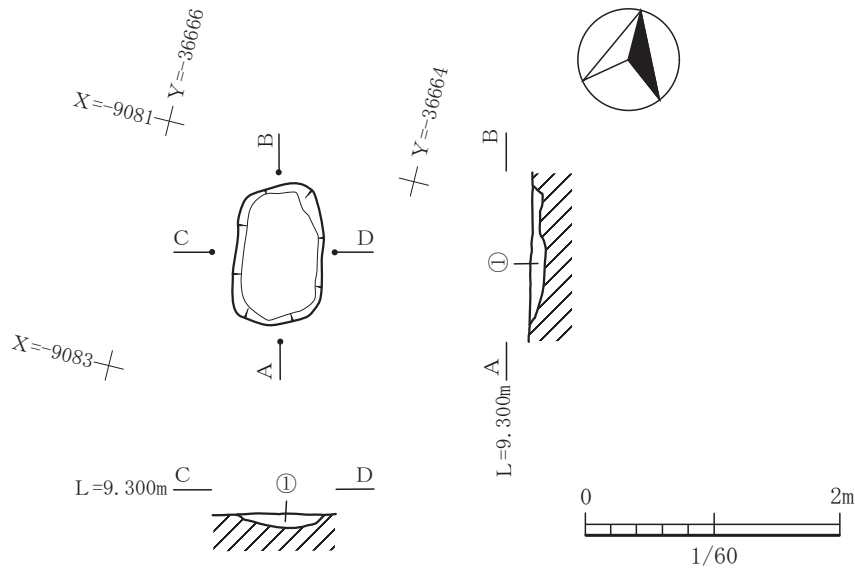


図-285 43号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

65号土坑

65号土坑は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構である。長軸1.1m、短軸0.7mの平面形状で楕円形を呈するプランである。長軸の方向は、N13°Wの方位をさす。床面では、北側がややテラス状の形状を呈するがほぼ平坦とみてよい程度のものである。出土遺物は、土師器の破片がほとんどである。

実測可能な土器としては、536の1点のみである。破片で出土しており、反転復元している。頸部と胴部の境界には小さく突帯を巡らしている。頸部のしまりはない。内外面に赤色顔料痕が見られるものの磨滅しており、かなり剥がれ落ちている。流れ込みの可能性が高い。詳細な時期は不明である。とりあえず弥生終末から古墳前期の遺構に位置づけておく。



①暗褐色(10YR3/3)粘質土。焼土粒、炭化物をわずかに含む。黄色土の粒を全体に含む。

図-286 65号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

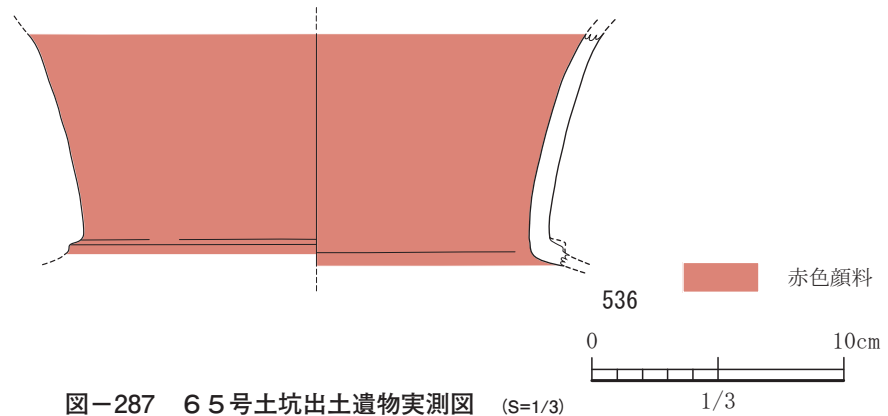


図-287 65号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

### 66号土坑

66号土坑は、平坦地区の7区で、39号住居と切り合って検出された遺構である。長軸は約1.9mを測る。平面形状は、台形状であり北東に向かって広がっていく。また長軸の方向は、N37°Eの方向に向く。床面の形状は北東側がテラス状になっている。埋土は2層あり、南西側のやや低まった部分を埋めるものと全体を埋めるものに区分できた。39号住居が古墳前期の遺構であり、これによって切られているためこれより古いことが言える。土器破片が見られたため古墳時代に位置づけているが、弥生時代の遺構かもしれない。

出土遺物は、破片のみで、実測可能な土器は3点のみである。537は、高坏の脚部であり磨滅している。内外面に部分的に赤色顔料痕が残っている。流れ込

みと思われる。538と539は、甕形土器の胴部から口縁部にかけての破片であった。口縁部は「く」字に屈曲し外反する。胴部は膨らみを持たないようである。539には、ミガキ痕が残る。

### 67号土坑

67号土坑は、平坦地区の1区で単独で検出された遺構である。いびつな形状をしており、平面形状では菱形の形状を呈し、東側のコーナーがやや張り出している。断面形状では緩やかに中央部に向かって傾斜する凸レンズ状の形状である。北東-南西の軸が3.1m、北西-南東の軸が3.0mである。北東-南西の軸の方角は、N24°Eの方向である。南側にはややテラス状の部分があった。本遺構からの出土遺物は多量で、土器溜めのような出土状況であった。完形もしくは完形に近いものが出土している。実測可

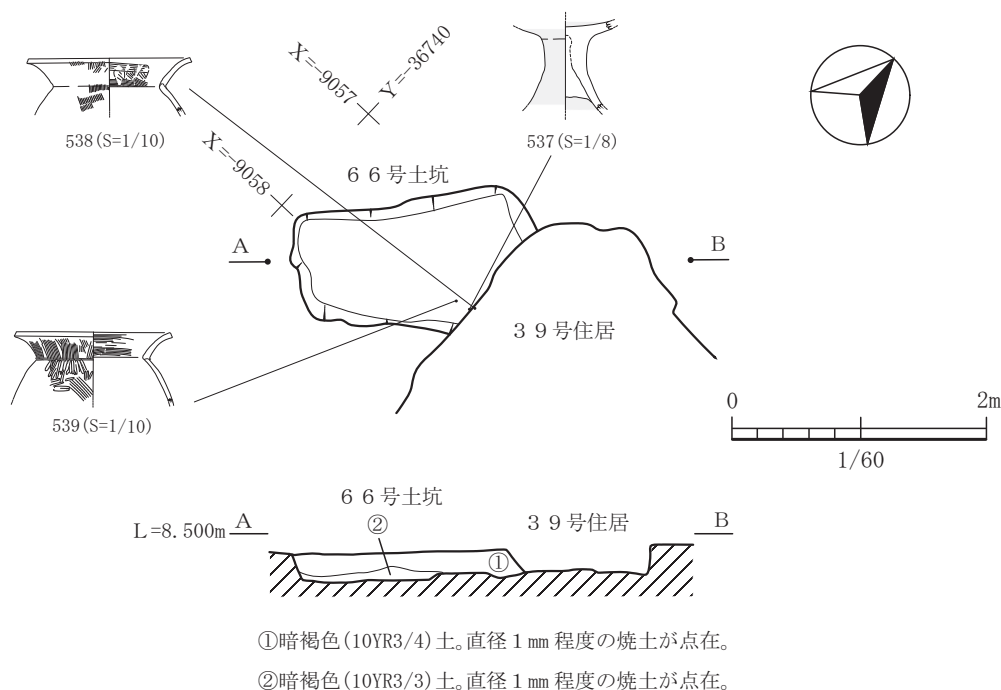


図-288 66号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

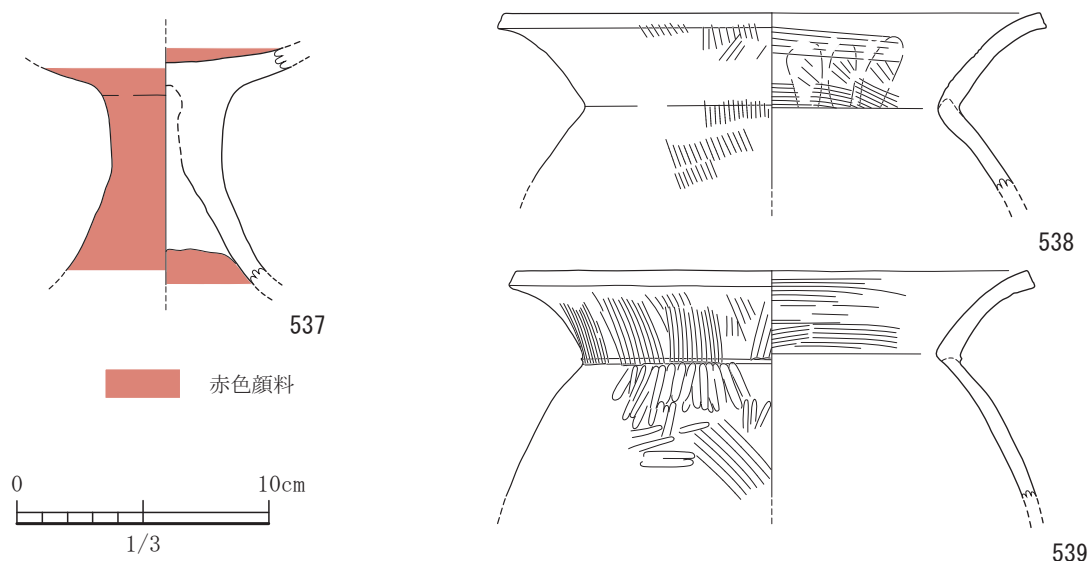


図-289 66号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

能な土器で44点、鉄器が1点である。540は、壺形土器である。外面にはハケ目後ミガキ調整を施してあり、外面と内面は頸部周辺まで赤色顔料を塗布してある。541は、台付坏で、口縁部は上方へ延び、脚部の裾部は大きく広がる。542は見込み部の中央には柱状の突起がある。用途不明である。543は、布留式の甕で卵型の胴部で器壁が非常に薄い。胴部の外面の肩付近にヨコハケ目を波状に施している。またその上部には沈線を胴部の周りに1/4程度巡らせている。

口縁部は直線的で端部に沈線を施している。完形である。544は、内面が図上右上がりのケズリで、口縁部は直線的で端部に沈線状に凹ませて整形している。545は、やや長胴で在来系であろう。546は、ハケ目の単位が細かい。547は、内面で図上右上がりのケズリを施す。548と549の口縁端部は平坦に整えている。550と551は口縁部がやや内湾みである。551は端部で内側につまみ出している。552は、胴部が球胴形であり、口縁部の幅がやや広く、端部は沈線状

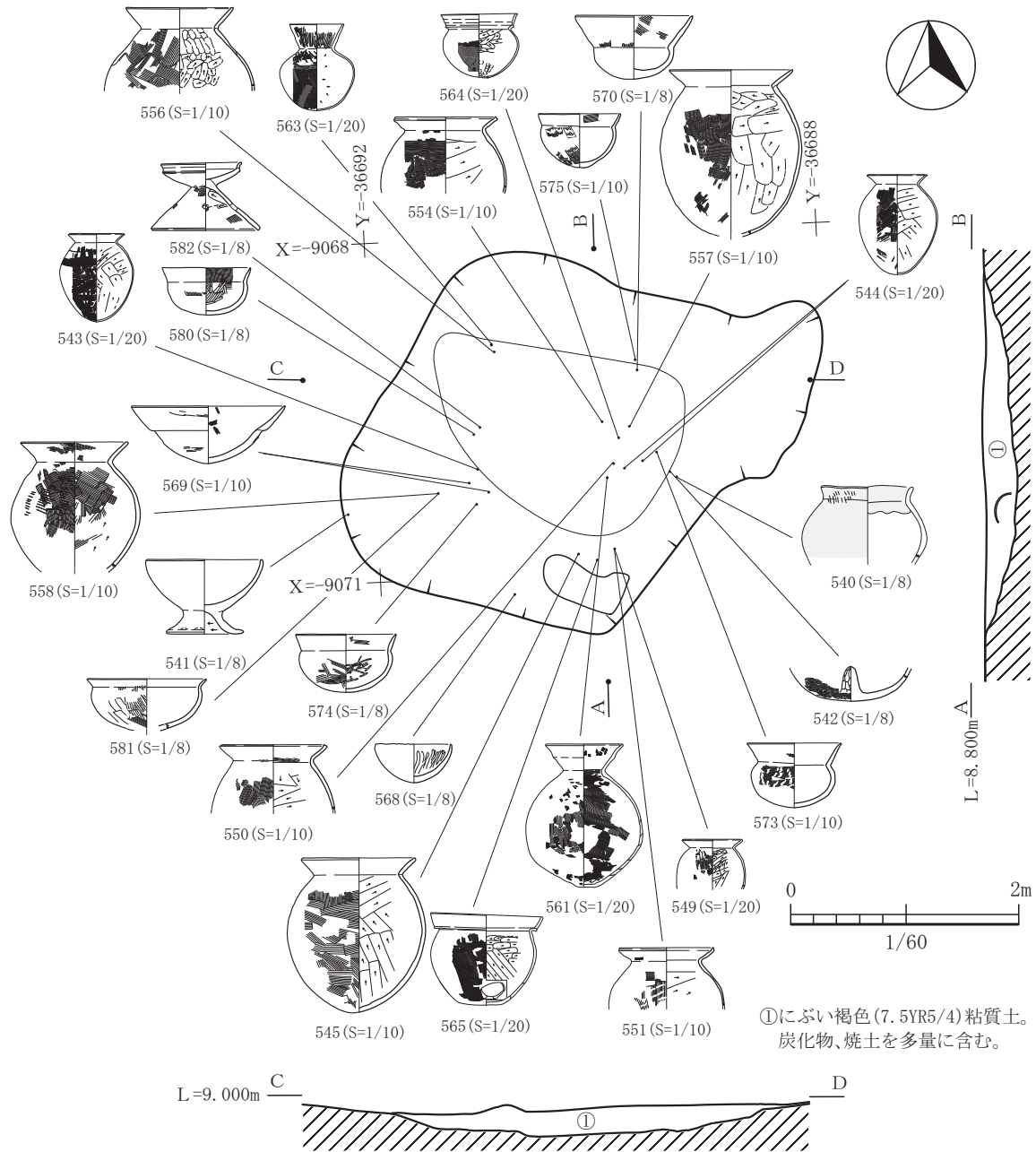


図-290 67号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

に凹ませている。553は、器壁が薄く、内面には図上やや右上がりのケズリを施している。端部は中央を凹ます。554は布留式の甕であり、外面でタテハケ目からヨコハケ目の調整を施す。555は、在来系であろう。なで肩で下ぶくれである。肩の部分に2条の沈線を施しその間に沈線による波状文を施している。556は、口縁端部を水平に面取りをしている。肩には沈線による波状文を施す。頸部がややしまる。557は口縁端部を窄ませる。558は、内面にハケ目状工具によるケズリを施し、外面は左上がりのタタキのち左上がりのハ

ケ目を施す。ややなで肩で口縁部の幅がやや広くなる。559の口縁部は外反する。口縁端部は窄まる。560は壺で、外面に左上がりのタタキのちハケ目調整を施す。内面は右上がりのケズリである。口縁端部は沈線をめぐらす。561は、複合口縁壺である。頸部と胴部、頸部と第1口縁との境には少し屈曲する傾向が見られ、胴部はやや下ぶくれである。胴部の肩付近に赤色顔料痕が残る。562は、おそらく複合口縁壺の胴部から底部と思われる。底部は平底である。胴部外面には右上がりのタタキが見られ、胴部は下ぶくれ



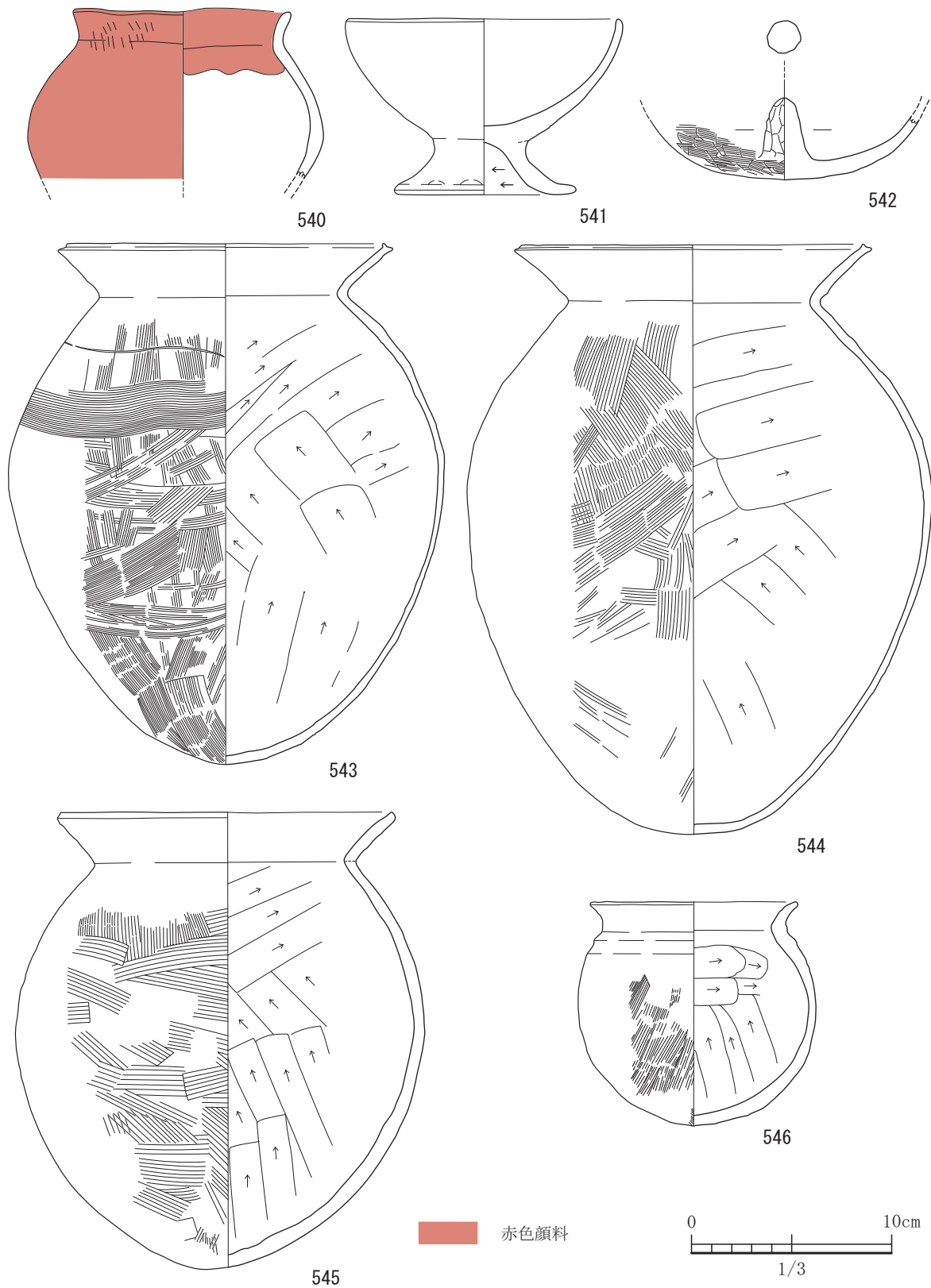


図-291 67号土坑出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

の形状を呈する。563は、長頸壺である。口縁部は逆「ハ」字の単純口縁であり端部は窄まる。口縁部には縦方向のミガキが施されている。胴部の肩から下に

はタテハケ目のちヨコハケ目を施し、全面ミガキを施さない。564は、山陰系の複合口縁甕である。口縁部は回転ヨコナデで、外方に斜めに延びる。口縁部に

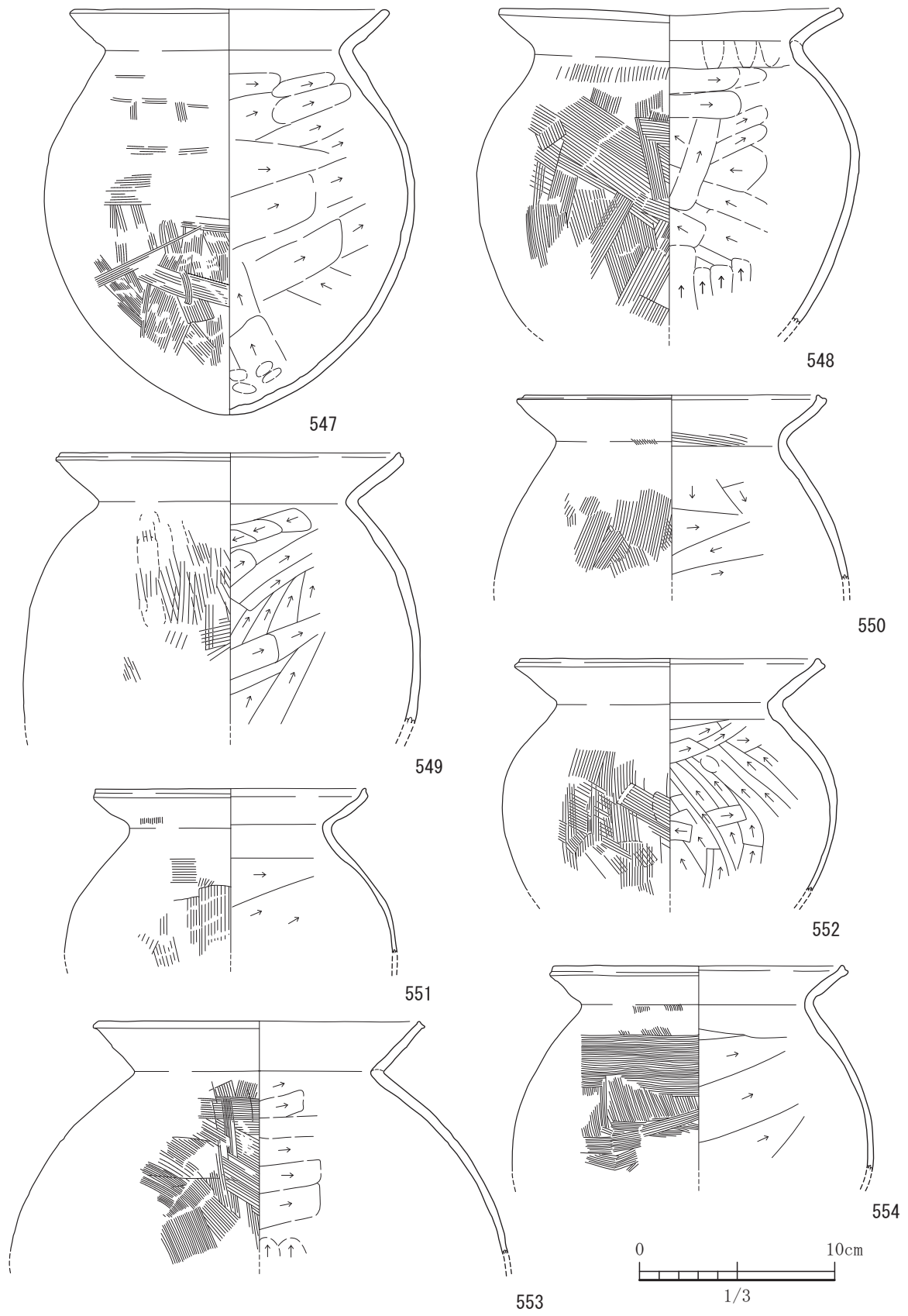


図-292 67号土坑出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

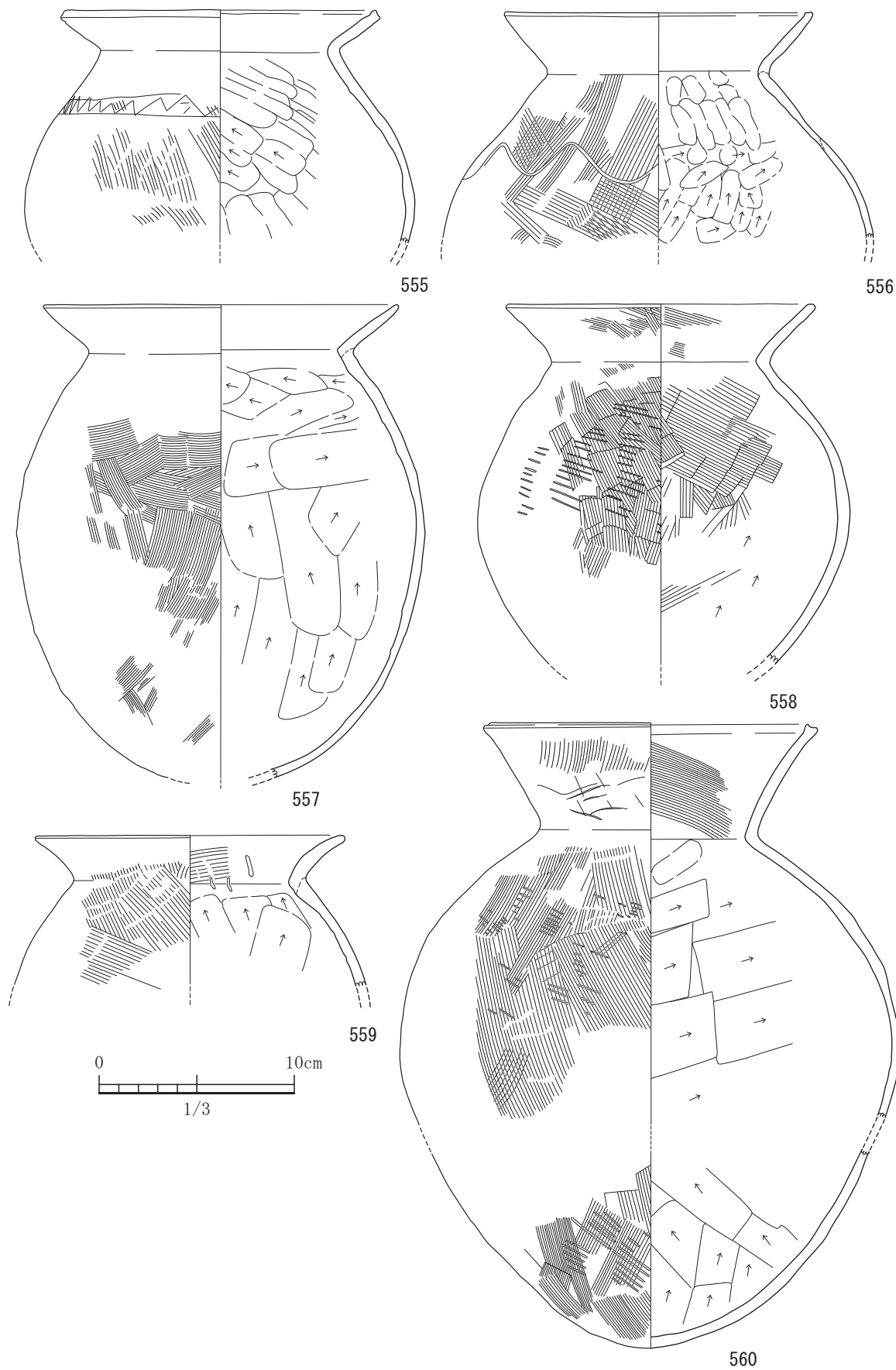


図-293 67号土坑出土遺物実測図 3 (すべてS=1/3)

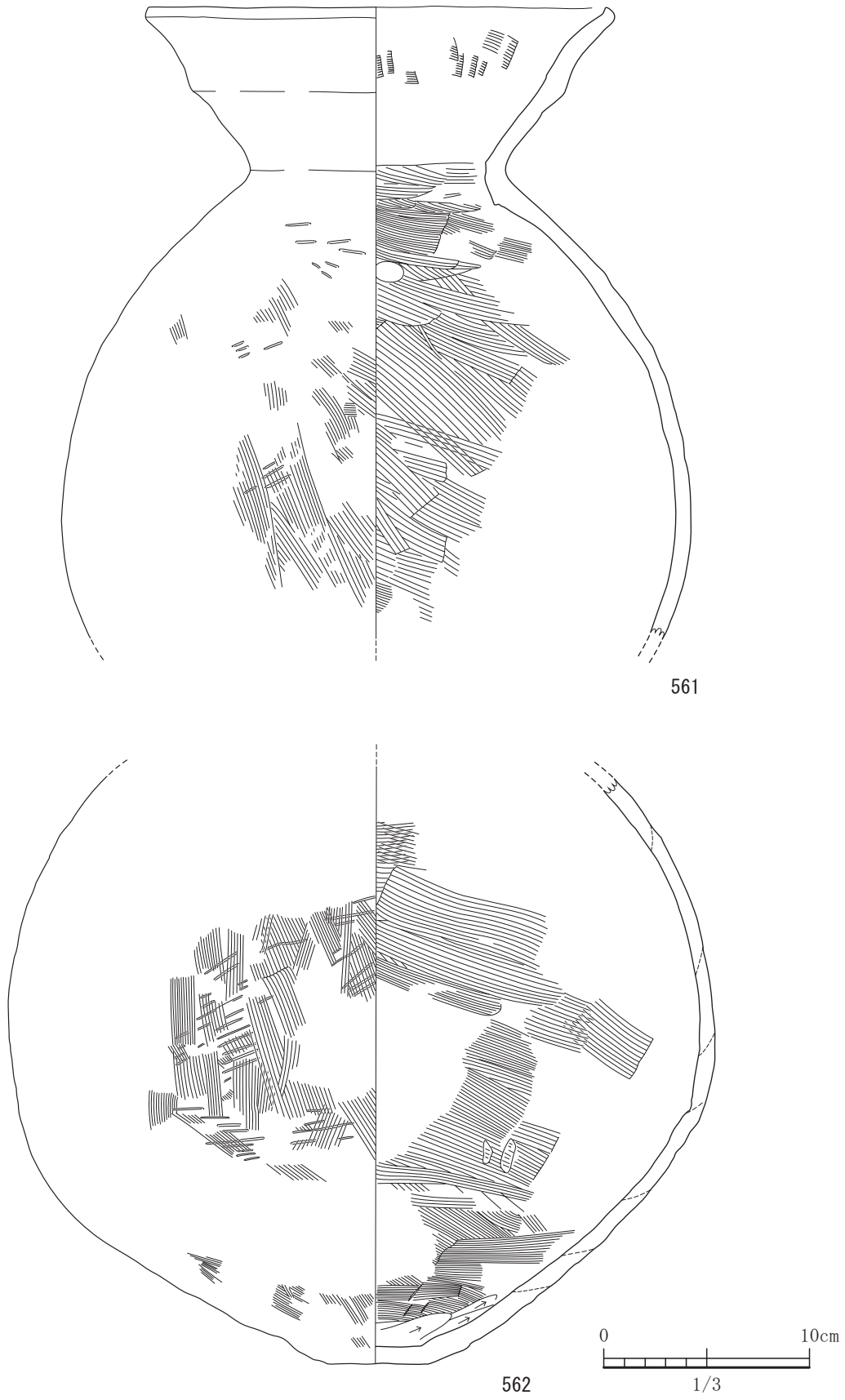


図-294 67号土坑出土遺物実測図 4 (すべてS=1/3)

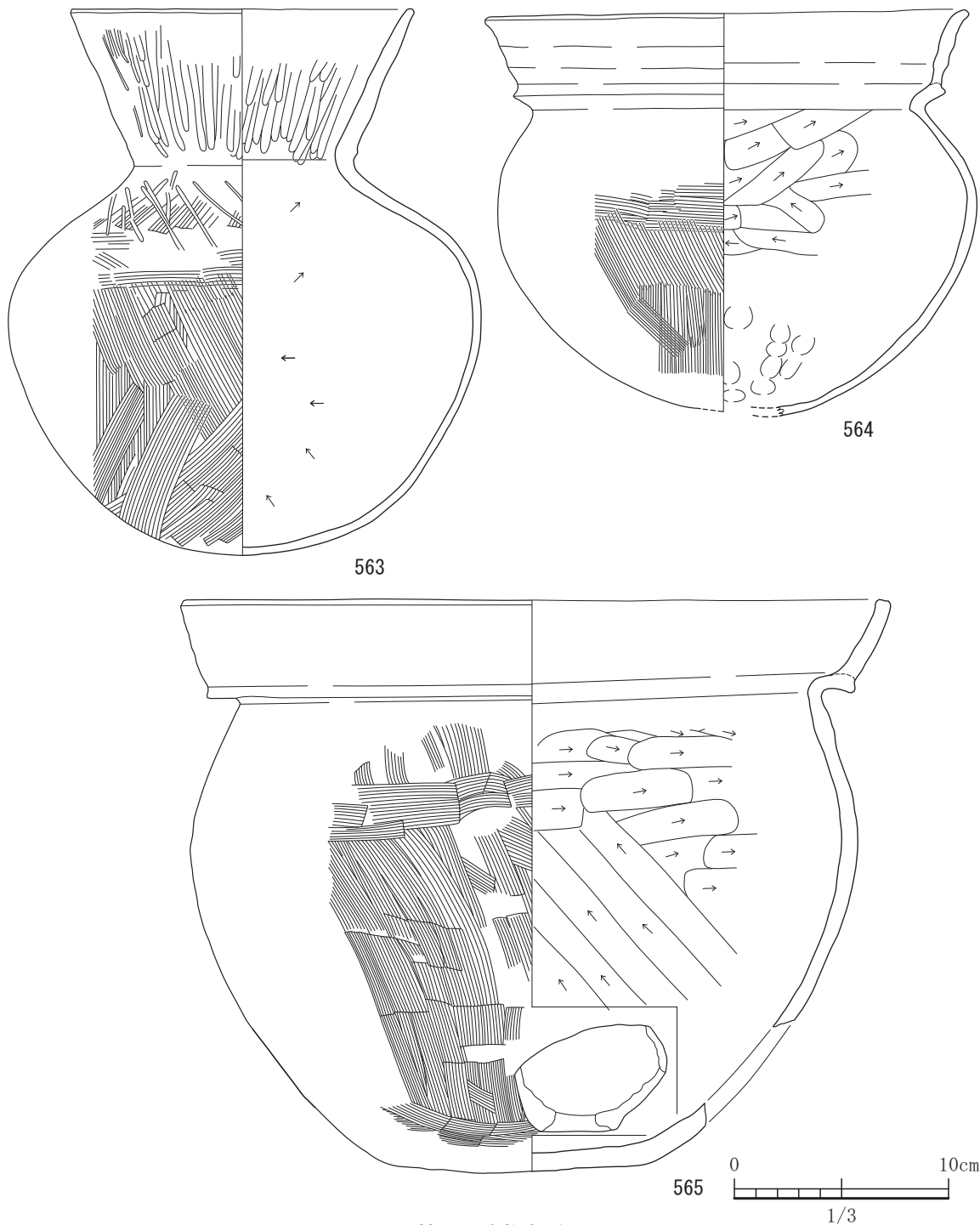


図-295 67号土坑出土遺物実測図 5 (すべてS=1/3)

は指をあてた凹凸が見られる。端部はやや短く外反させる。胴部の外面には縦方向のハケ目から横方向のハケ目調整を施す。565は、山陰系の複合口縁甕である。口縁部はやや内湾ぎみで端部に沈線状に窪ませている。口縁部には回転ヨコナデを施している。胴部外面には、縦方向のハケ目のち横方向のハケ目調整を施す。胴部の下部に穿孔を施し、部分的に赤色

顔料痕が見られる。566は、山陰系複合口縁壺である。頸部と第1口縁、頸部と胴部の境がなめらかで、口縁部は直立する。口縁部には指をあててできた凹凸が見られ、回転ヨコナデを施している。胴部外面には左上がりタタキが見られ肩の部分には2条の沈線と波状文が見られる。567は、山陰系の複合口縁壺である。口縁部のつくりがなめらかであり、口縁部には回転ヨ



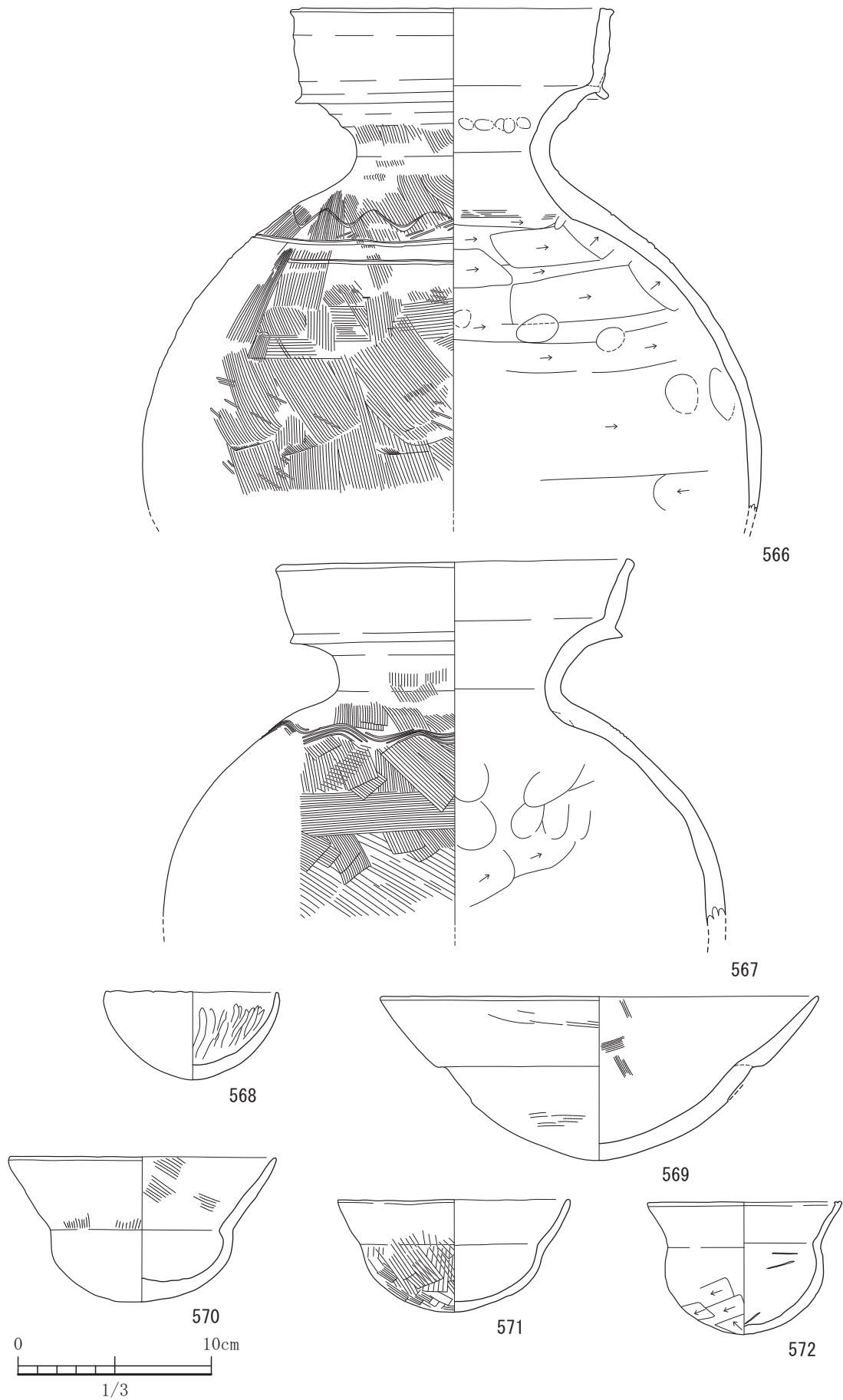


図-296 67号土坑出土遺物実測図 6 (すべてS=1/3)

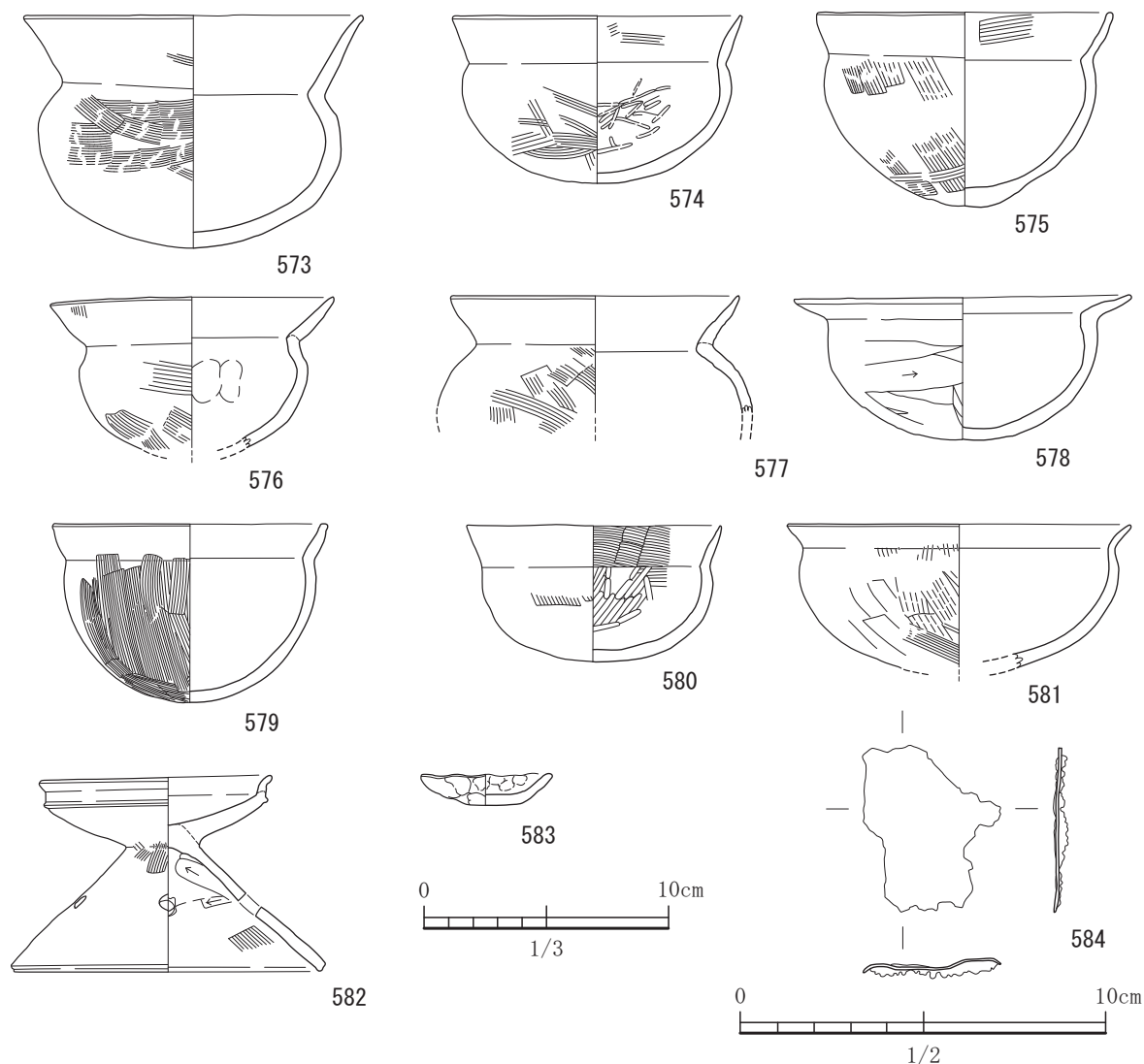


図-297 67号土坑出土遺物実測図 7 (S=1/3, 584はS=1/2)

コナデを施す。肩の部分には、4条の波状沈線文を巡らしている。568は、鉢である。内面には縦方向のミガキが施され、外面は丁寧なナデ調整である。569は鉢である。微妙に「く」字口縁を作り上げようとしている。570から576まで、小形丸底壺である。570は頸部のしまりは弱く口縁部の幅が広い。571は、外面に赤色顔料が一部残る。572は、内外面ともケズリ調整を施す。573は、頸部のしまりが見られる。574は、体部外面はハケ目調整で、内面にヨコミガキを施す。575は、体部の外面はハケ目調整、内面はナデ調整である。頸部のしまりは弱い。口縁部はやや内湾する。576は、口縁部に丁寧なヨコナデを施す。頸部はしまりがややある。577は、小形の甕である。頸部はやや外反ぎみに立ち上がり口縁端部近くで小さく内傾させる。端部はすぼませる。578から581まで小形

丸底鉢である。頸部にくびれがほとんどなく斜め上方に口縁部が延びていく。578の外面はケズリのちナデ調整である。579は口縁端部を水平に整え、580と581はすぼませる。582は、庄内式系小形器台である。受け部は小さく外反させる。脚部は「ハ」字状に広げ、裾部の端部には沈線状に沈ませ整形している。穿孔は4箇所に施す。583は、手捏ねである。坏形である。584は、鉄製品であるが、用途は不明である。厚さが非常に薄い。この67号土坑は、古墳時代前期中葉から後葉にかけてのの遺構であろう。

#### 68号土坑

68号土坑は、平坦地区の2区で86号土坑と切り合って検出された遺構である。本遺構は北側はカクランによって削平されており、南側は86号土坑によって削平を受け完全に壊されている。平面形状

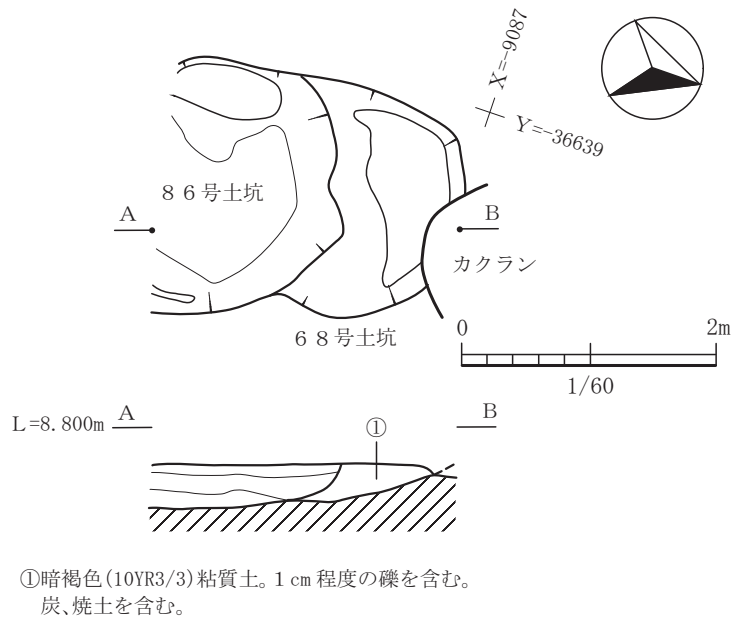


図-298 68号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

は削平を受けており詳細は不明である。東西軸方向は、1.8mを測る。残存する形状からは、おそらく南北に長い楕円形プランであったのではないかと推定される。北側にはテラス状のやや平坦な形状を呈する部分が見られる。本遺構は、1.71㎡という非常に狭い範囲から比較的出土遺物は多かった。検出面から床面までの深さは約30cmを測り、埋土の残存が良かったためであろう。断面形状も南北間で、凸レンズ状をなし、67号土坑と形状的には似ており、土器溜め的な遺構ではないかと考えている。

出土遺物は、実測可能な土器で18点、石器で2点である。尚、遺物を68号土坑埋土中から出土として取り上げたが、本土坑は86号土坑と切り合っており埋土の区別が難しいこともあり、86号土坑の遺物が混入したものもあった。585と586は坏である。口縁端部は窄ませており、外面がケズリのちナデ調整、内面はナデ調整を施している。内外面に赤色顔料が塗布されている。586は、口縁部やや直立ぎみである。外面はケズリ調整であり、上半部はその後ナデている。内面はハケ目のちナデ調整を施す。外面底部付近にX字状にヘラで線刻されている。内外面ともにススと被熱による赤色化が見られる。587は、台付坏である。内外面ともにハケ目のちナデ調整である。脚部は裾広がりであり、穿孔を3箇所施してある。588から592まで甕である。588は器壁は比較的薄く、口縁部はやや外反ぎみである。端部は平坦に整形してある。内面にはケズリが施してあるが、その単位はよく

わからない。外面もハケ目のちナデ調整であるのは部分的にわかる程度で、磨滅が激しく全体的にはよくわからない。内外面にススが付着していた。589も器壁はやや薄く、内面には図上で左上がりのケズリ調整を施す。口縁部はハケ目調整の後ナデ調整であり直線的に伸び端部が窄まる。590は、内面が図上で左上がりのケズリ調整で口縁部内外面と胴部外面はナデ調整である。口縁部は、直線的に伸び端部は窄まる。591は、口縁部は外反し丸くおさめている。器壁はやや厚く、胴部の内面には図上で右方向のケズリを施している。外面はハケ目のちナデ調整を施す。口縁部はヨコナデである。また外面にはススが付着している。592も器壁が肉厚であり、口縁部は外反する。口縁端部は丸く収めている。内面にはケズリを施しているが多方向のようである。口縁部から頸部にかけてヨコナデを施している。外面にはススが付着している。593から596まで壺である。593は、口縁部は直線的に斜めに伸びる単純口縁であり、端部には沈線状に凹ませて整形している。胴部には、外面に左上がりのタタキの痕跡が見られ、その後やや左上がりのハケ目調整を施している。内面は図上で右上がりのケズリ調整を施す。胴部には黒斑が見られ、赤色顔料が塗布されている。胴部の肩の部分には波状文を一周めぐらしている。594は、口縁部は外反している。口縁端部は、平坦に面取りをしている。調整では、胴部内面には図上で左上がりのケズリを施し、外面はハケ目調整の後、肩付近に波状の沈線をめぐらしている。全

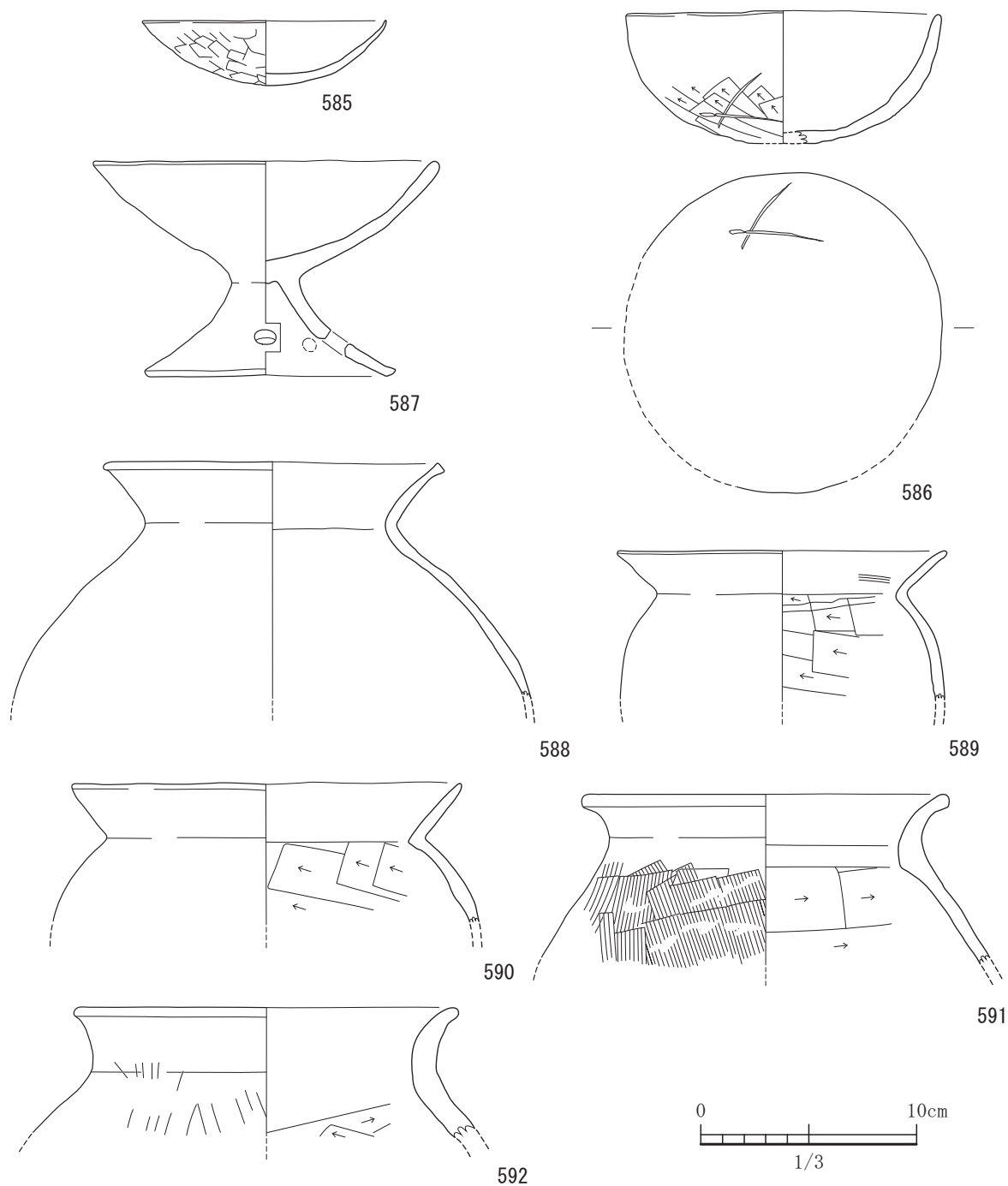


図-299 68号土坑出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

体的に黒斑がある。595は、器壁は肉厚である。口縁部は直線的に斜めに延び、端部は水平になるように面取りを施している。胴部では、内面が図上で右上がりのケズリを施している。外面はハケ目のちナデであろうが磨滅が激しくよくわからない。頸部のしまりはきつい。596は、頸部から口縁部の一部で反転復元したものである。口縁部は直線的に延び、端部は中

央を凹ませ作りあげている。ヨコナデを内外面とも施している。また赤色顔料が内外面に見られる。597は、複合口縁壺である。胴部と頸部、頸部と第1口縁との屈曲はきつく、第2口縁は直立する。頸部には鋸歯状の突帯を設けている。598も複合口縁壺である。第1口縁から頸部にかけては緩やかにカーブするようである。丁寧なヨコナデを施す。599は、丸底鉢である。

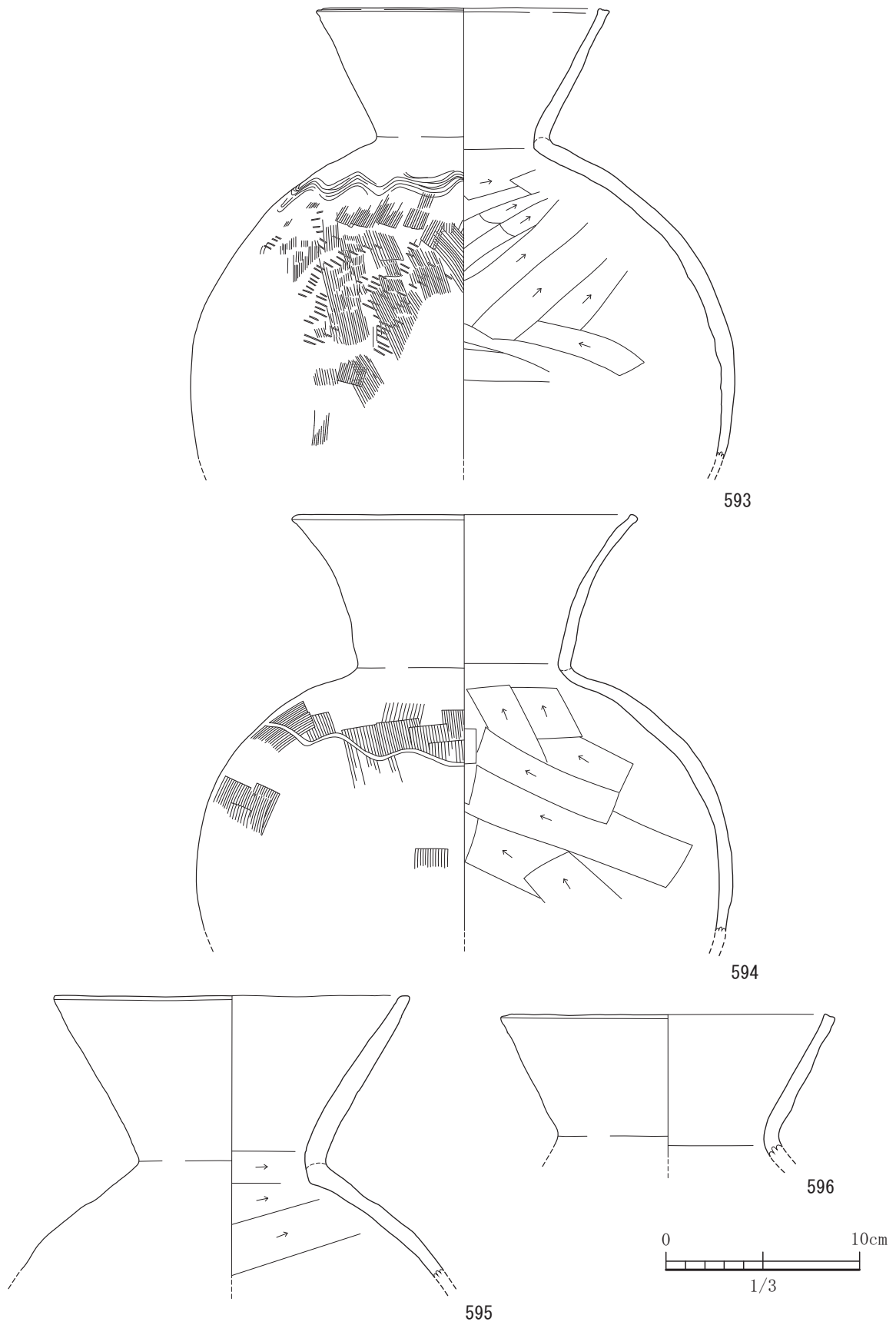


図-300 68号土坑出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)



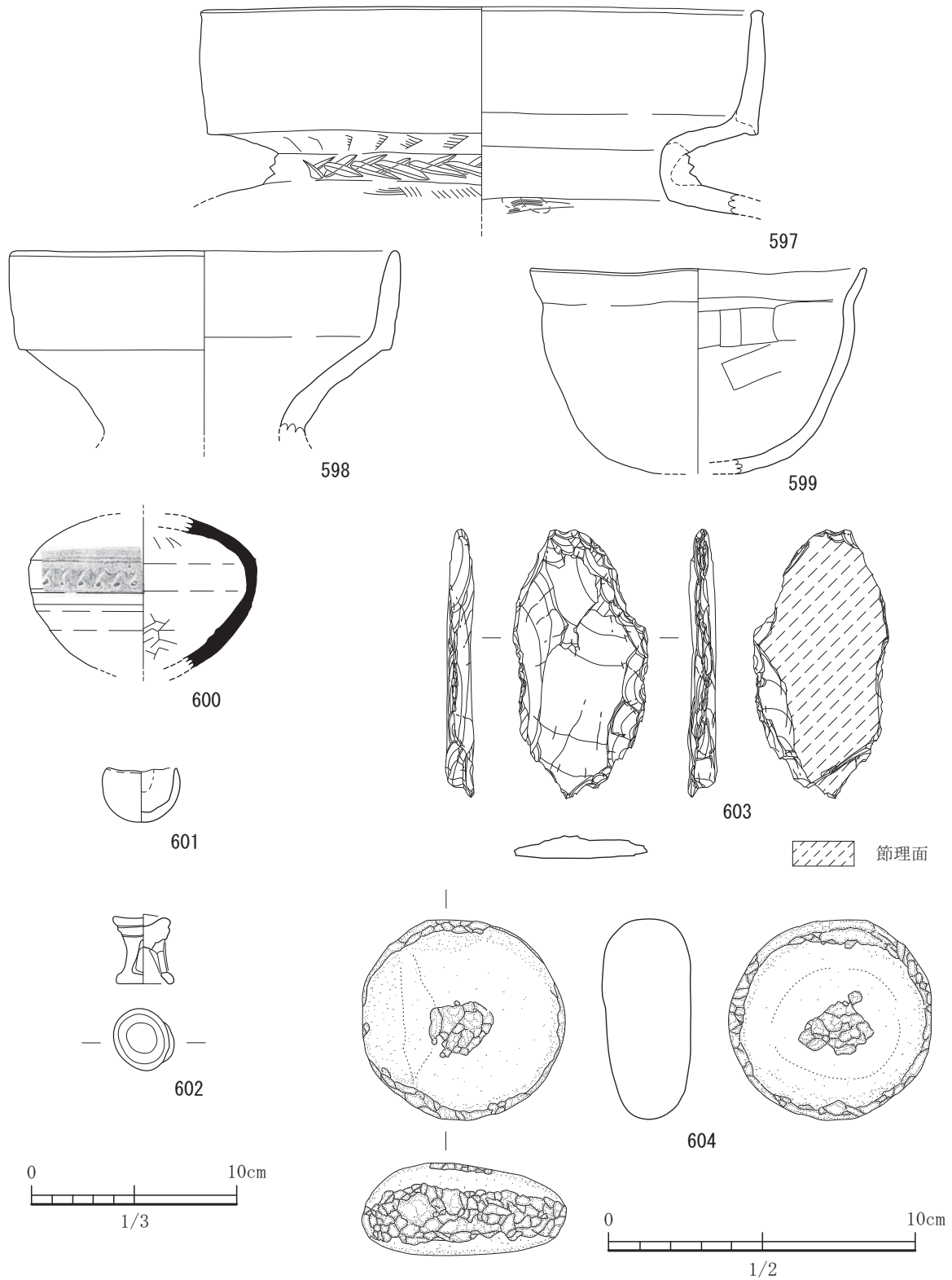


図-301 68号土坑出土遺物実測図 3 (S=1/3, 603,604は S=1/2)

頸部のしまりは弱い。600は、須恵器の<sup>はぞう</sup>腿である。胴部には櫛描波状文を施す。胴部の破片であり反転復元している。86号土坑のものであろうと考えられる。

602は手捏ねであり、器台を模して作ったものである。脚部には4箇所にかしを設けているようである。603は、緑泥片岩製の打製石斧である。節理面を残し

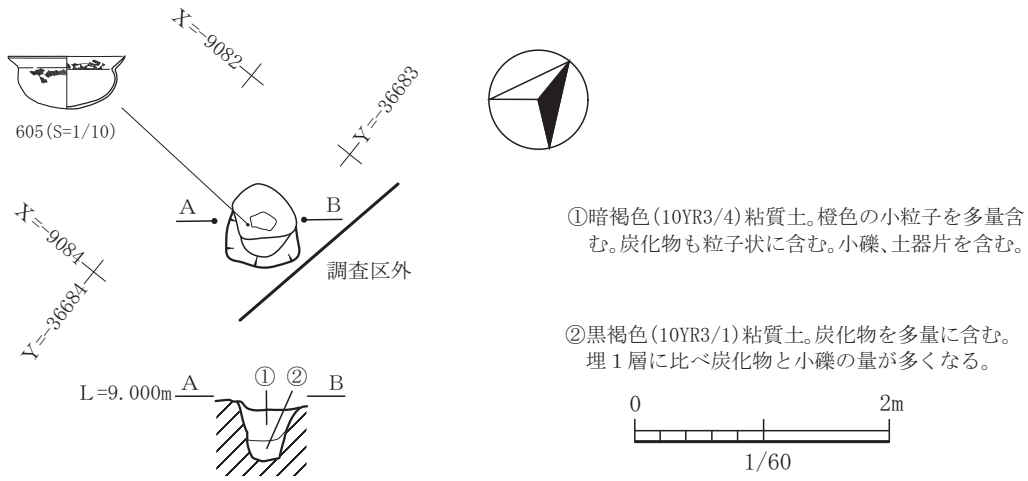


図-302 69号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

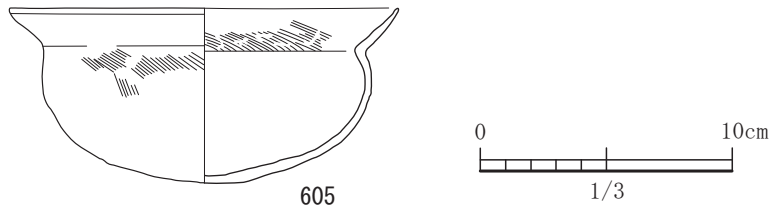


図-303 69号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

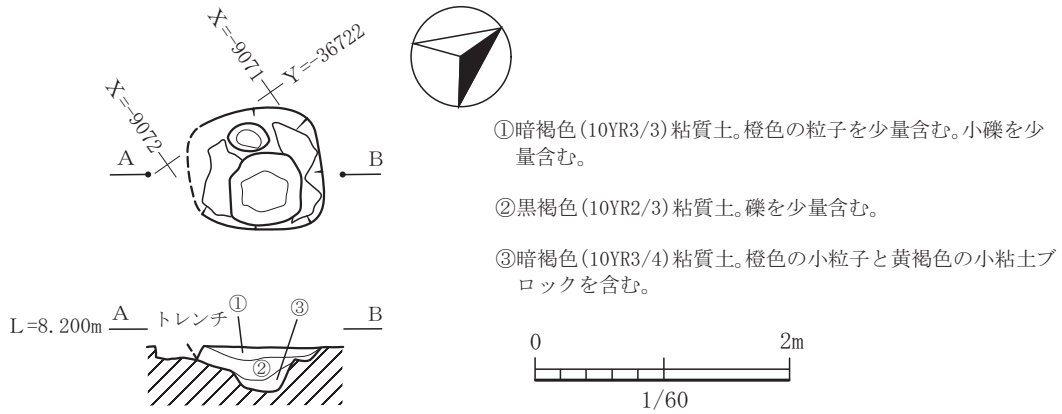


図-304 70号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

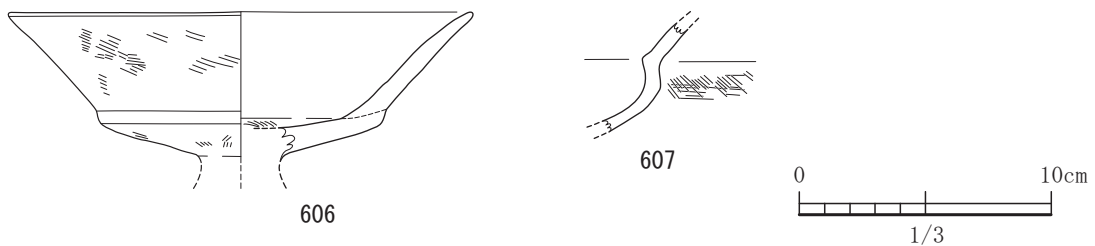


図-305 70号土坑出土遺物実測図 (すべて S=1/3)

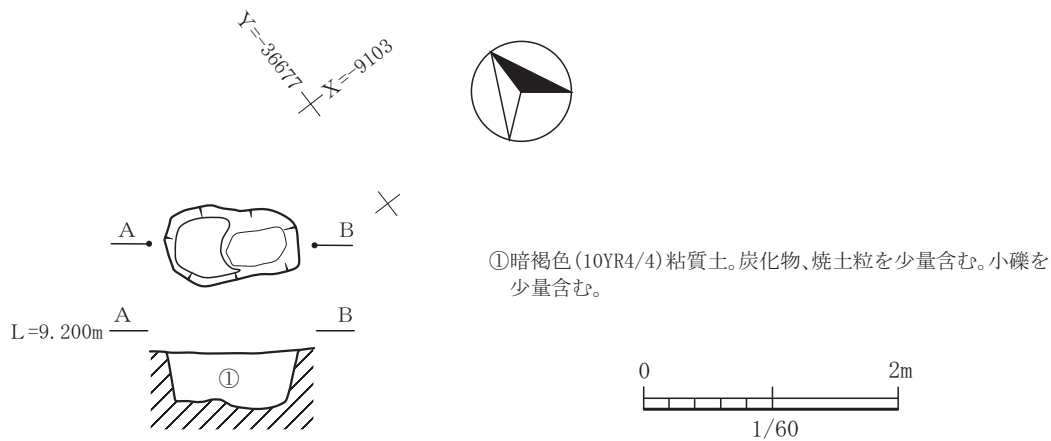


図-306 71号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

ている。床に張り付くように出土したものでなく、流れ込みによるものであろう。604は、輝石安山岩製の敲石である。側面にはしっかりとした敲打痕が見られる。この68号土坑は古墳時代前期の所産と考えられる。

#### 69号土坑

69号土坑は、平坦地区の6区で35号住居と切り合って検出された遺構である。35号住居を切っている。平面形状が直径約60cmであり、南東部にテラス状の平坦部が見られる。断面形状では、ピット状であり、検出面から底の床面までの深さは約50cmを測る。出土遺物は実測可能な土器は、605の1点のみである。605は、「く」字口縁鉢である。器壁は非常に薄く、体部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲し、頸部のしまりは弱い。口縁部はやや内湾さみであり、端部が窄まる。全体的にハケ目調整である。古墳時代前期後葉であろう。

#### 70号土坑

70号土坑は、平坦地区の7区で38号住居と切り合って検出された遺構である。70号土坑が新しい。平面形状の1辺が約90cm隅丸方形のプランである。中央にピット状の窪みを有し、両側には平坦な袖をもっている。埋土は3層に分かれるが、焼土や炭化物は認められなかった。

実測可能な土器が2点出土している。606は、高坏で脚部は欠損している。坏部は上半と下半が分かれており、屈曲部には段を有している。口縁部はやや外反さみで端部はすぼまっている。内外面ともハケ目のちナデ調整である。607は小形丸底壺であり、胴部から口縁部の一部である。外面には左上がりのハケ目

のあとヨコナデを施す。内面はヨコナデである。70号土坑は、古墳時代前期の範疇であろう。

#### 71号土坑

71号土坑は、平面形状は北西側がやや膨らむいびつな楕円形プランである。長軸は約1.1mを測り、N51°Wの方位を向く。北西側に一段高くなったテラス状の平坦面があり、南東側に凹地が作られている。検出面から凹地の床面まで0.47mを測り埋土の残りの良い。しかし、遺物は土師器片が出土しているが作られた時期は不明である。また用途も不明である。

#### 5号溝

5号溝は、平坦地区の7区で37号住居と切り合って検出された遺構である。37号住居が新しい。溝が延びていく方向である主軸は、N46°Eの方向であり、南側が完全に立ち上がって終息しているが、北東側はまだ延びていく様相を呈している。しかしながら、北側は、後世の剥平により完全に消失しており詳細は不明である。溝の南側には突出した部分があり最も深くなっていた。水が流れていた痕跡は見受けられなかった。

出土遺物は実測可能な土器が4点出土した。全て甕であり、反転復元している。608は、卵形で底部がやや平底さみである。口縁部は直線的に延び、端部付近で少し内傾させる。端部は、沈線状の凹みを作りあげている。胴部外面の肩付近には、タタキが残っており、その後ハケ目調整を行っているが、縦方向から横方向と仕上げている。609も608とほぼ同様な調整であるが、胴部が球形となっている。底部は欠損しているため詳細は不明である。外面には全体的にススが付着している。被熱による赤色化が見られ

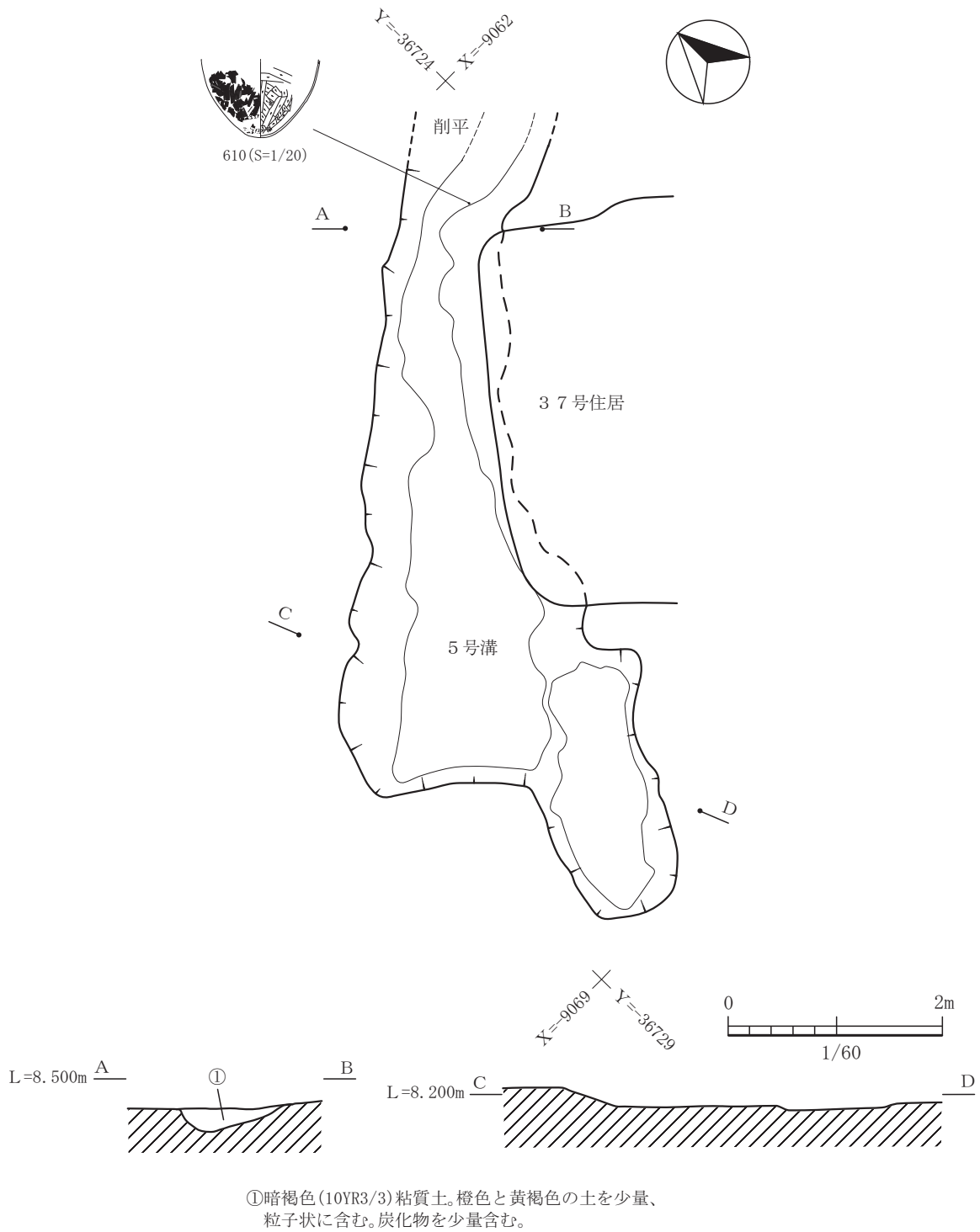


図-307 5号溝平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

る。610は、甕の胴部から底部である。内面にはケズリが施されており、図上で左上がりから右上がりとなる。外面は基本的に上方向のハケ目調整である。ハケ目が細かい。611は、甕の胴部から底部である。底部は尖底となっている。器壁は薄い。外面には右上

がりのタタキが認められ、左上がりのハケ目調整で仕上げてある。内面には左上がりのハケ目調整である。この5号溝は、北の崎遺跡では古い時期の遺構で、古墳時代前期の前葉から中葉付近の時期であろう。

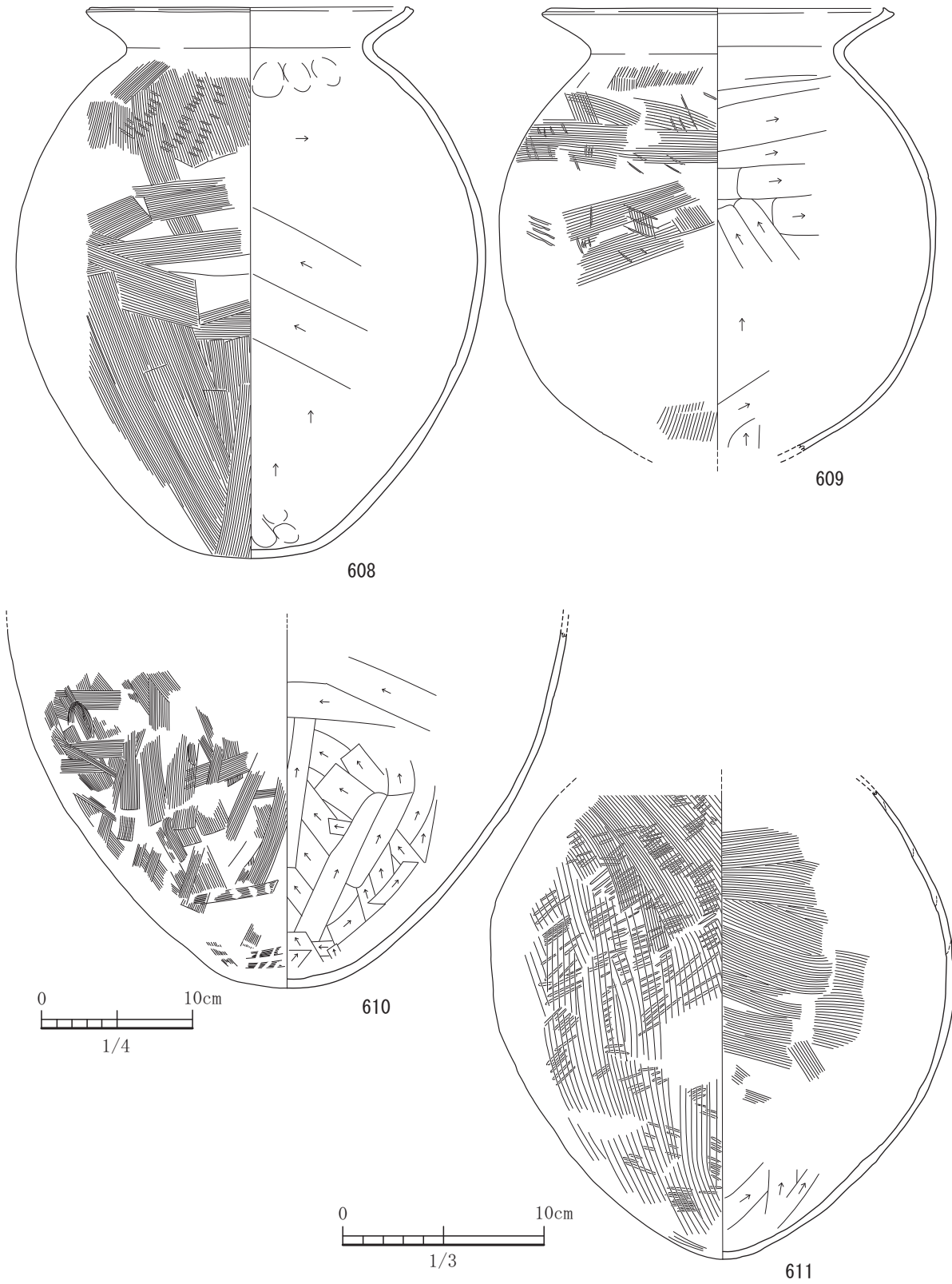


図-308 5号溝出土遺物実測図 (S=1/3, 610はS=1/4)



#### (4) 古代・中世

##### 1) はじめに

北の崎遺跡では、奈良時代から鎌倉時代まで、断片的ではあるが、生活が営まれてきた。その後は生活の痕跡が見当たらない。そこで、今回は中世の遺構が数的に限られていることから、本来であれば分けてまとめる必要があるが、一連の流れとしてまとめて記載することとした。

奈良・平安時代である古代の遺構は、竪穴住居跡が7軒、土坑が14基、溝が5条であった。また鎌倉時代では土坑が2基、溝が1条であった。掘立柱建物跡は検出されていない。古代では、遺構配置からみて北の崎遺跡が所在する平坦地区の西側半分に集中しており、集落の周辺部にあたるのではないかと考えられる。中心は南に位置しているのではないだろうか。この時期の集落の繁栄と衰退は、郡寺である稲佐廃寺との関連があるのかもしれないと考えている。古代の遺構の軸方向にはおおよそその傾向が見られる。竪穴住居では北東に軸をとるものと、北西に軸をとるものの2通りである。また土坑については、大方、北東方向である。溝についてはブレはあるものの北東から南西に延びているようである。また、鎌倉時代においては、平坦地区の舌状台地東側の崖周辺部に限られていた。そこには長大な溝が崖に沿うように構築されていた。今回はこの遺構のみでは、どのような性格のものであるか判断がつかなかった。用途については今後の周辺の調査を待つこととする。遺構数が少ないので軸方向の傾向はつかめなかった。

##### 2) 各遺構・遺物について

###### 44号住居

44号住居は、平坦地区の1区で73号土坑と切り合って検出された竪穴住居跡である。この遺構は遺物包含層掘削時から遺物の出土が多い方で、その散布状況から包含層中で大まかなプランを引ける遺構であった。埋土と遺物包含層は、区別が全くつかないように両者が酷似している。よって古代の包含層である2a層を掘削完了した時点では検出面と床面が高度差があまりないような状況になった遺構である。古代の生活面は遺構検出面より相当高い位置にあることが予想できた遺構でもあった。この住

居跡で埋土とは、遺物の散布状況が密になった時点から床面までのものを言う。その厚さは約10cmである。長軸は南北方向にとり3.4mを測る。また短軸は3.0mを測る。長軸の方位は、N5°Wでありほぼ北を向く。南東側は切り合っている73号土坑に削平され、北西は現代の井戸によって壊されている。残存する形状から欠損部の形状を復元した場合、竪穴住居内の面積は約8.97㎡であった。住居跡の竪穴の中からは3基のピットが検出されたが、その中で柱穴となりうるものは1基のみで、他の2基は非常に浅いものと小規模のものである。柱穴になりうるピットの深さは床面からの深さが22cmであった。支柱穴を中央よりやや北側に位置するものを設定している。この住居跡からは、カマドや炉は検出されなかった。しかし、住居跡の竪穴のやや中央付近からまとまった焼土が検出されている。カマドから掻きだした焼土ではないかと考えられる。埋土においては、検出面から床面までの深さが約10cmであり残りが悪い方であったが、多量の出土遺物があった。この44号住居からは、明瞭な硬化面は検出されなかった。

出土遺物は、住居跡の北側半分からおびただしい量が出土し、完形のものも多く住居を突然廃絶したような状況であった。実測可能なもので土器が42点と鉄器が1点である。土師器には赤色顔料の痕跡が部分的に見られる。626を除く612から630までは、底部が回転ヘラ切り離し後ナデ調整で、体部外面から内面にかけ回転ナデを施してある。体部から口縁部にかけ直線的に立ち上がるか、やや外反ぎみである。613は体部下位にヘラケズリを施し丸みを出している。615も体部下位にヘラケズリを施す。617は回転ナデのち回転ヘラミガキを施す。618から623までは体部下位にヘラケズリが施されている。625は外面に部分的ではあるが回転ヘラミガキを施す。627から630までも体部下位にヘラケズリを施し丸みを作り上げている。630は内面にミガキ痕が残る。631は須恵器の坏である。器面がにぶい褐色を呈しており荒尾産ではないかと考えられる。体部下位にヘラケズリを施している。632は土師器の椀で高台の端部を外につまみ出している。633も荒尾産の椀ではなからうか。高台はやや短い。634から636まで土師器の蓋である。扁平な擬宝珠形のつまみがつく。端部は小さく下に折れる。小さい段をつける特徴がある。体部の屈曲はさほどきつくない。637から644まで須恵器の蓋で





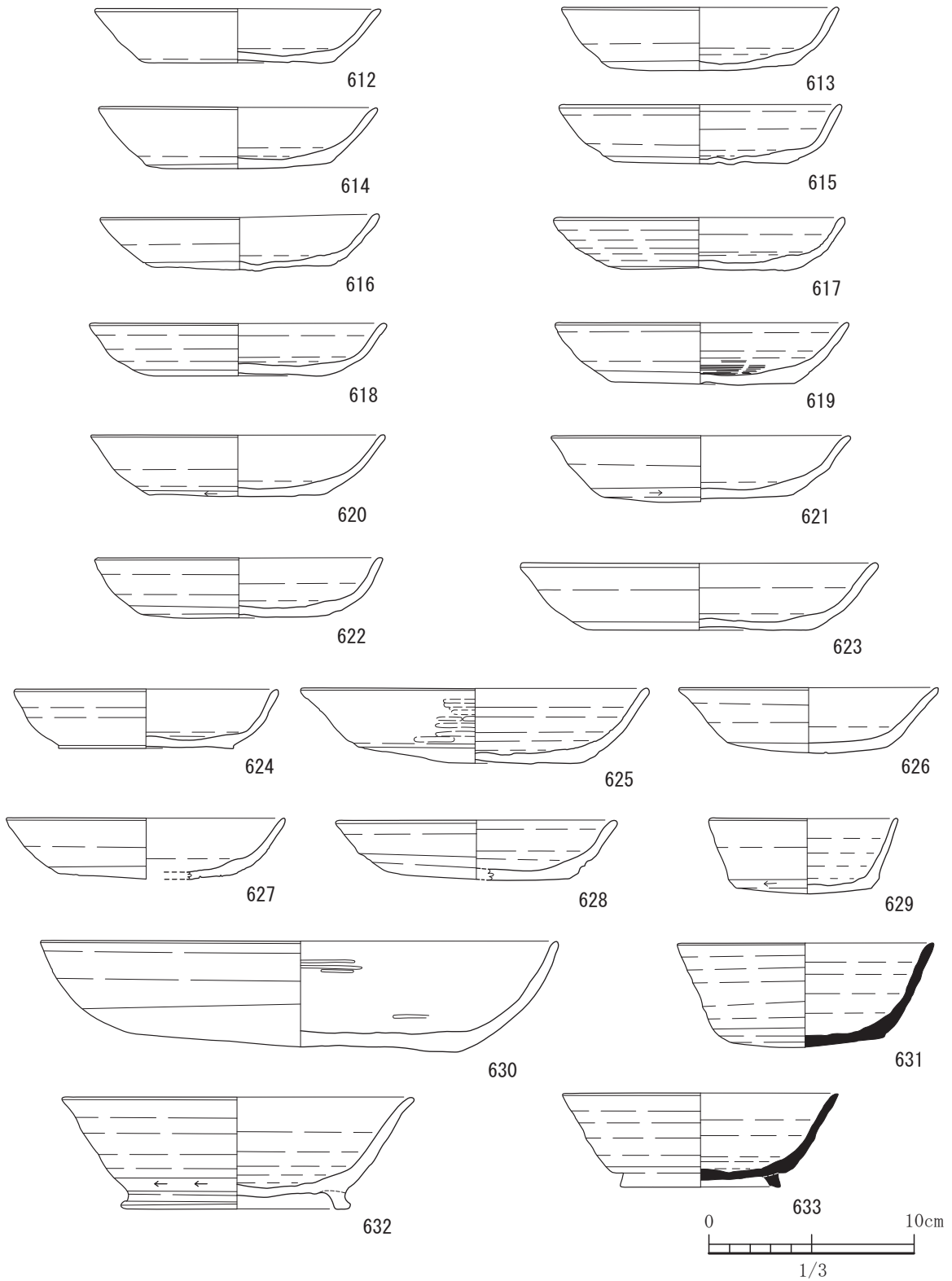


図-312 44号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

ある。637はつまみが扁平であり、端部は外側に小さく折れる。638は、器高が低く、扁平なつまみであり、体部には小さい段を付けている。端部は下へ小さく

つまみ出す。639も器高は低く、扁平なつまみを持ち、端部で小さく下につまみ出す。640は、擬宝珠形の花つまみで端部で小さく下につまみ出す。641は扁平な

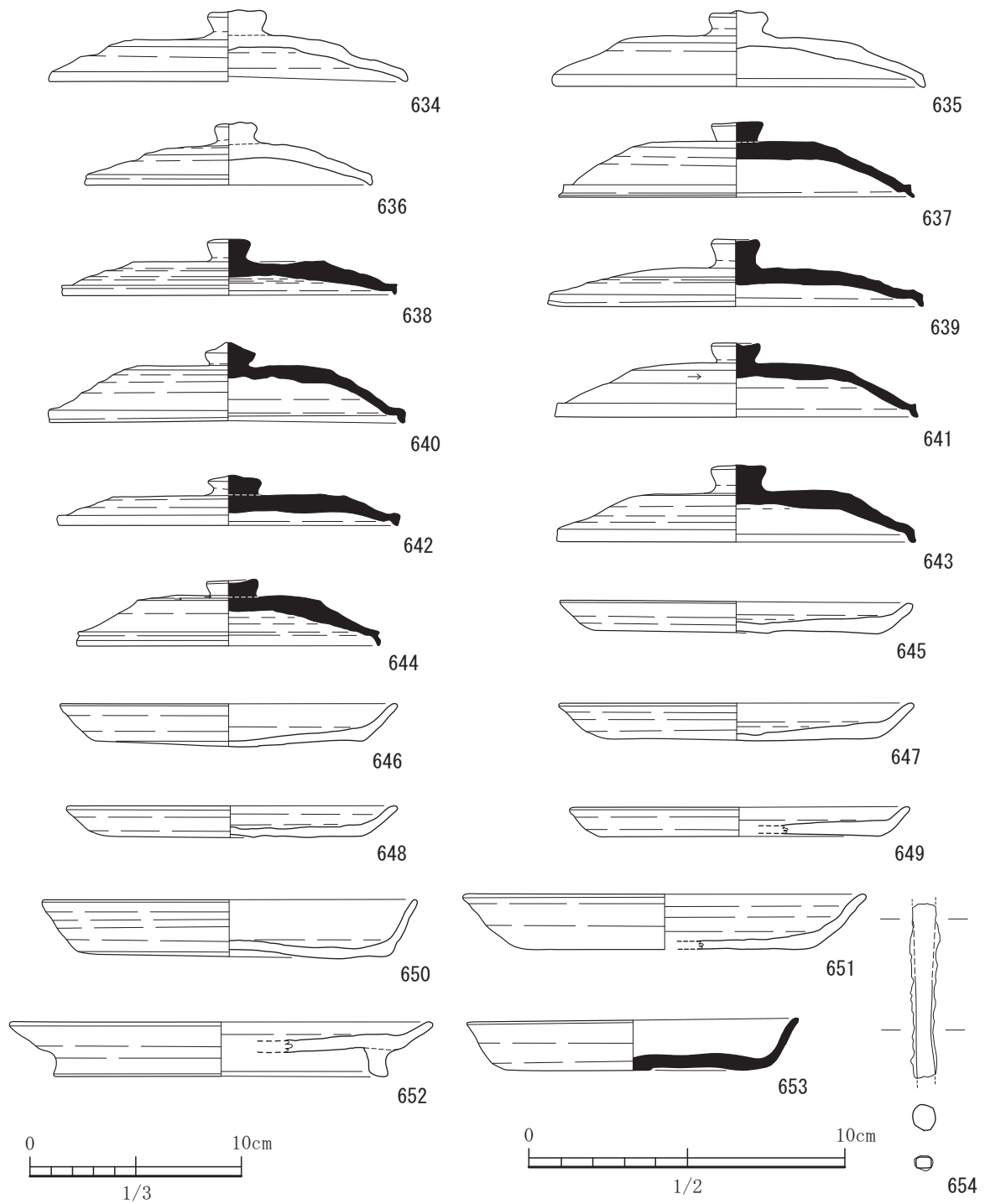


図-313 44号住居出土遺物実測図 2 (S=1/3, 654はS=1/2)

つまみを持ち、端部で小さく下につまみ出す。642は、器高は低く扁平である。擬宝珠形につまみをもち端部は小さく下につまみ出す。643は擬宝珠形につまみをもち端部で小さく下につまみ出す。644は、扁平なつまみであり、天井部から体部にかけてややはっきりした屈曲が見られる。端部は下に小さくつまみ出す

が、沈線状の凹みを作りあげている。645から651まで土師器の盤である。回転ヘラ離し後ナデ調整を施している。また、赤色顔料が部分的に残存しており、内外面に塗布されていたのではないだろうか。回転ナデ成形である。体部から口縁部にかけて外に開いて直線的である。650はやや上方ぎみである。652は土



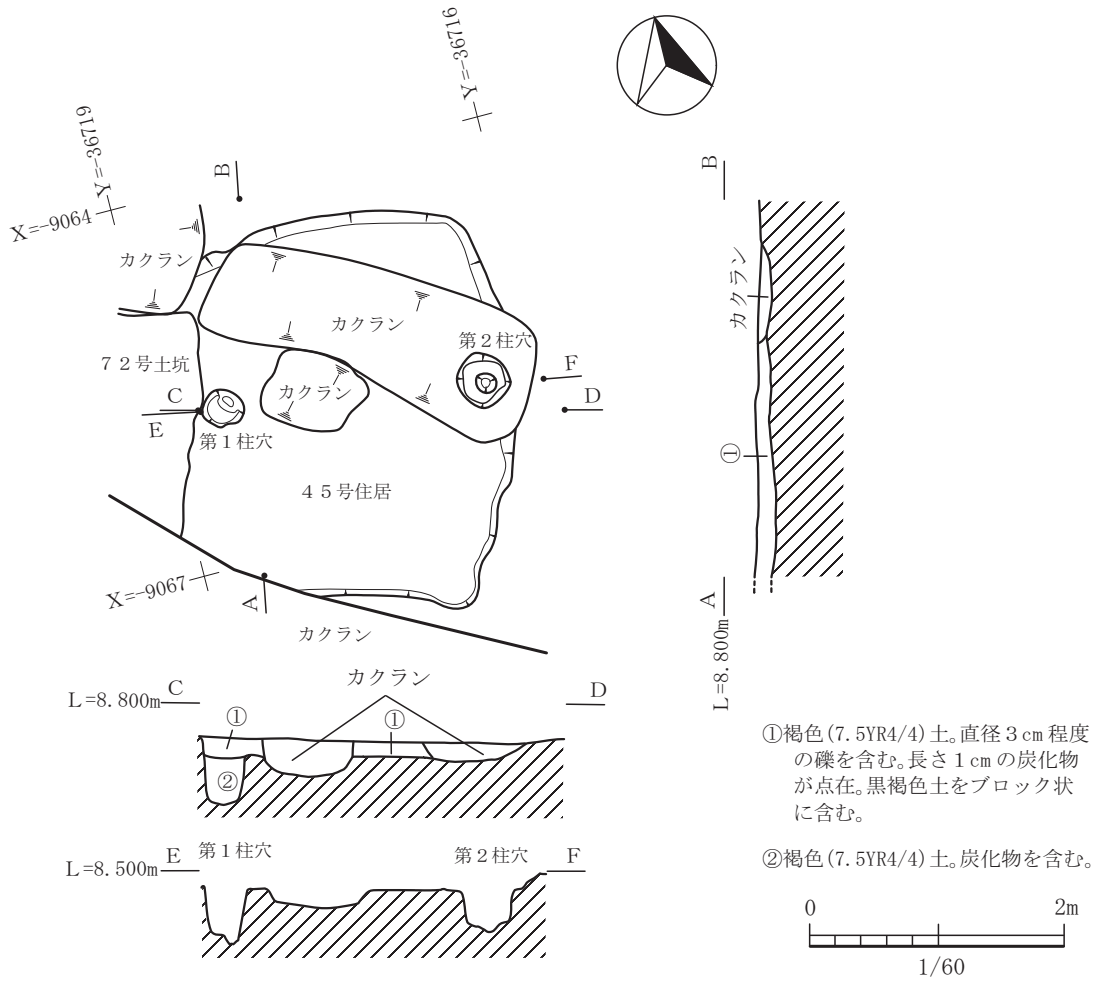


図-314 45号住居平面図及び断面図 (縮尺1/60)

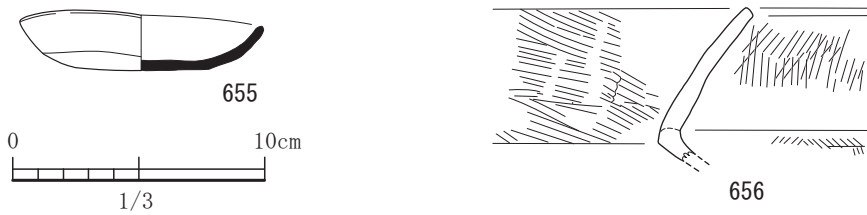


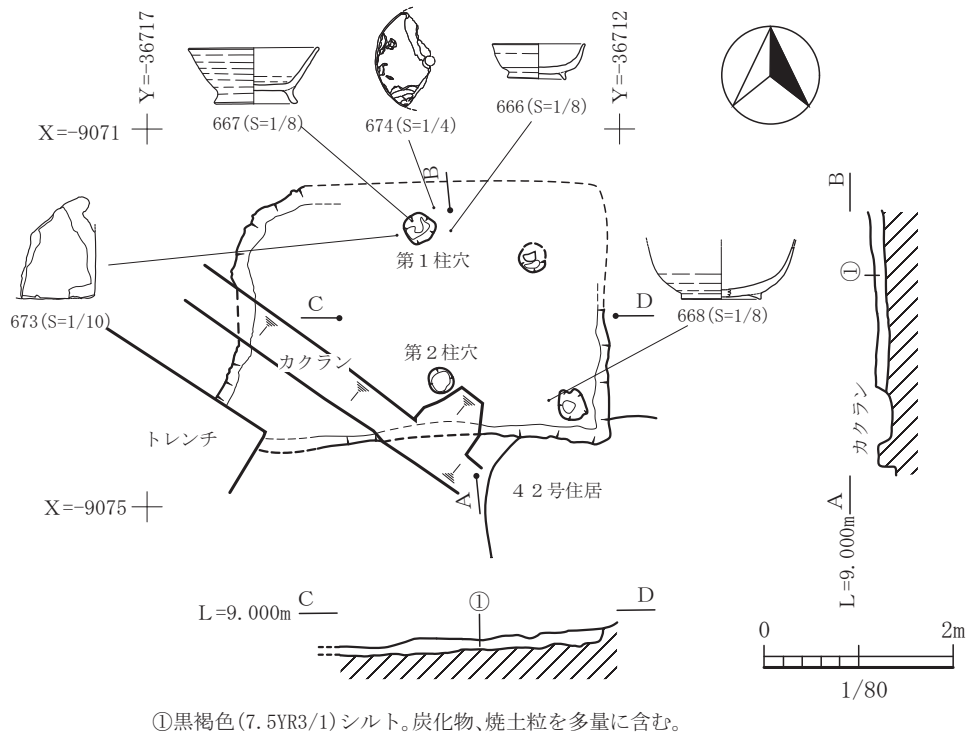
図-315 45号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

師器の台付盤である。盤の底部の平坦部に高台を取り付ける。口縁端部は平坦である。653は須恵器の盤である。やや上げ底ぎみになり体部から口縁部は直線的にあまり外に開かず上方へ延びる。654は鉄鏃である。有茎鏃の一部である。本遺構は、8世紀後半の所産と考えられる。

#### 45号住居

45号住居は、平坦地区の1区で72号土坑と切り合って検出された竪穴住居である。時期的に72

号土坑が新しい。本住居跡は、竪穴のほぼ中央部と北側半部がカクランによって削平されており付帯設備等の有無は不明である。また、72号土坑によって西側壁も壊されており不明である。南北軸方向の長さが約3.0mであり、1辺が約3.0mの方形のプランであると推定される。ただ残存する部分からややいびつな形状を呈することが予想される。柱穴は2基検出されており、この2基が主柱穴で、上屋は2本柱の構造であろう。床も貼り床は見出されなく、



①黒褐色(7.5YR3/1)シルト。炭化物、焼土粒を多量に含む。

図-316 46号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

地山を削りだして直接床にしている。ただし、硬化面は検出できなかった。床がやや砂で形成されていたため硬化しきれなかったのかもしれない。カマドの部材の痕跡は全くなく、埋土中にも焼土や炭化物が顕著に認められないところから、カマドがなかった可能性が高い。

出土遺物は少なく、実測可能な土器が2点のみである。655は須恵器の坏である。器高はやや低く底部から体部にかけて丸みを帯びる。底部は回転ヘラ切り離した後ナデ調整で、他は回転ナデである。底部には板状圧痕が見られる。ややいびつな形状を呈しているのではっきりは分からないが7世紀後半期であろうか。656は古墳時代前期の土師器の甕の口縁部の破片であり流れ込みであろう。

#### 46号住居

46号住居は、平坦地区の7区から8区にかけて6号溝と切り合って検出された竪穴住居である。46号住居が新しい。住居跡の北側は矢板設置のため未調査域となった部分である。また南側にはカクランによる削平を受けている。本遺跡では、この時代の竪穴住居は南北に長くなる傾向を示す中、東西に長い竪穴住居である。南北軸方向が2.7m、東西軸方向が4.0mの長方形プランである。南北軸は

ほぼ真北を向く。ピットは竪穴住居内から4基検出された。第1柱穴と第2柱穴が主柱穴と考えられる。カマドの痕跡は残っていなかった。埋土中には多量の焼土と炭化物を含んでいるので、おそらく火を伴う施設があったのは間違いなからう。カマド構築用の袖石や粘土等が全く埋土中からも検出されていないことから移動式のカマドも考慮に入れる必要があらう。床面には硬化面は検出されなかった。

出土遺物は、実測可能な土器が16点、瓦が1点、石器が1点である。657と658は土師器の坏である。底部は回転ヘラ切り離した後ナデ調整で、他は回転ナデである。659は土師器の坏であり、底部に回転ヘラミガキが見られる。663と664は土師器の坏で底部は回転ヘラ切り離した後ナデ調整、以外は回転ナデである。見込み部に油煙が見られる。灯明皿として使用していたのであろう。665は底部は回転ヘラ切り離した後ナデ調整、他は回転ナデである。油煙が内面を見込み部から部分的に体部に見られる。体部の部分は灯芯の部分である。灯明皿として使用していたと思われる。666は土師器の椀で口縁部がやや外反する。見込み部に油煙が見られる。667は、土師器の椀である。高台が肉厚でやや長い。668は土師器の椀で、三角形の短い高台がつく。669と670は土師

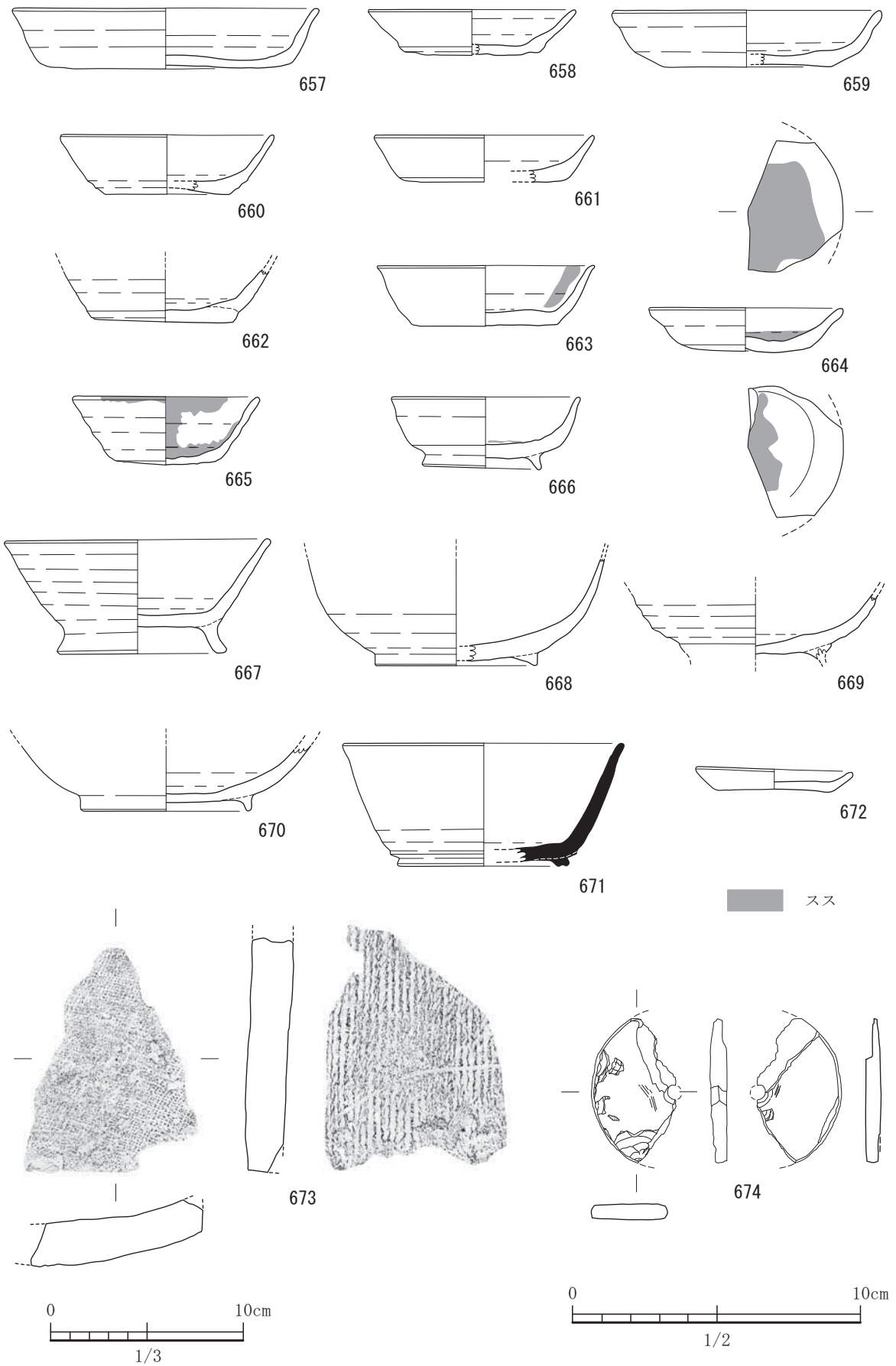


図-317 46号住居出土遺物実測図 (S=1/3, 674はS=1/2)

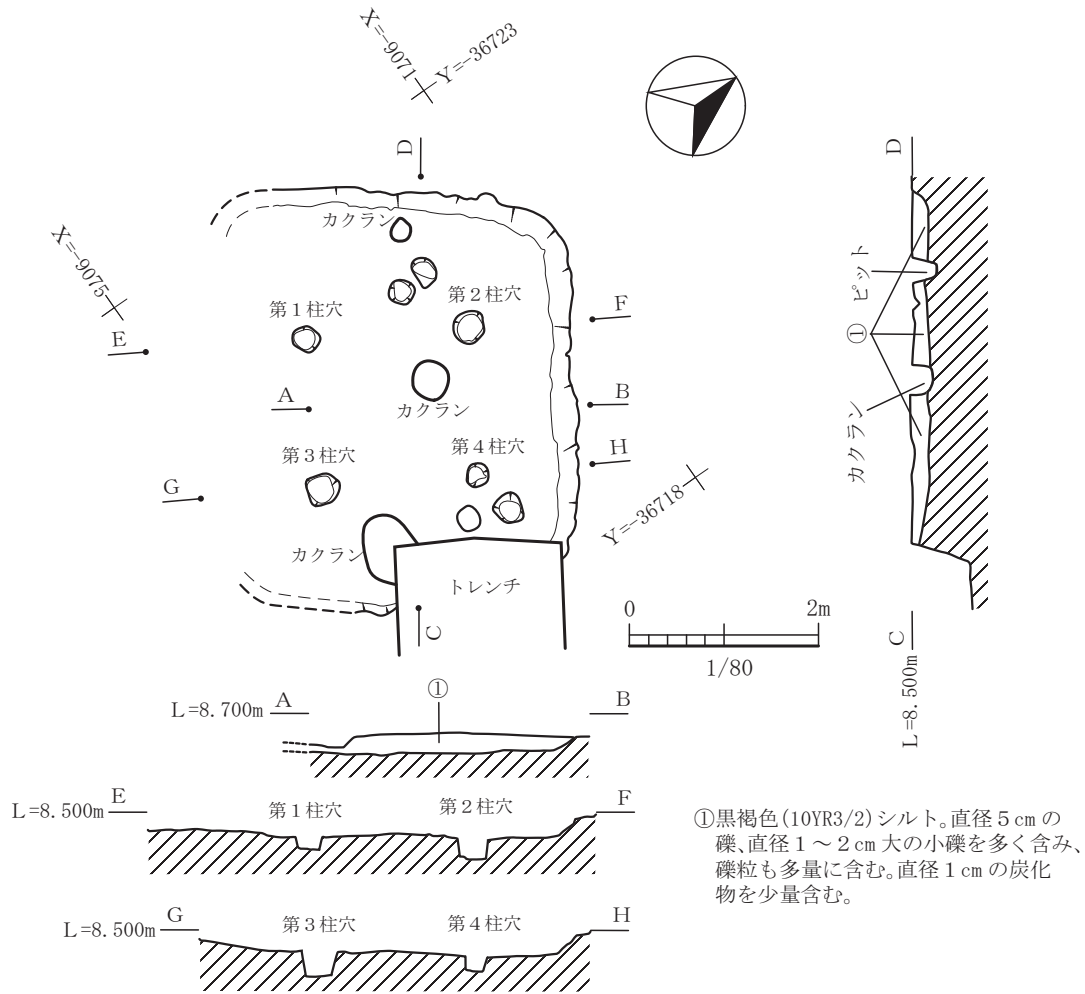


図-318 47号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

器の椀であり、底部は回転ヘラ切り離し後ナデ調整、その他は回転ナデ調整である。671は須恵器の椀である。底部は回転ヘラ切り離し後ナデ調整、その他は回転ナデ調整である。高台は短い。672は、埋土の上層から出土している土師器の皿である。底部が糸切り離し後ナデ調整で中世の所産であろう。後世の層から紛れこんだのかもしれない。673は凹面が布目痕、凸面が縄目痕の平瓦である。破片であり転用目的だったのかもしれない。674は、蛇紋岩製の紡錘車である。孔径は0.80cmを測る。本遺構は8世紀後半の所産と考えられる。

#### 47号住居

47号住居は、平坦地区の7区で7号溝と切り合って検出された竪穴住居である。47号住居が新しい。住居跡の南側半分は、後世の剥平を受け埋土は無くなってしまっていた。残存する部分で、北

西-南東の軸方向で4.5mを測り、N35°Eに北東-南西軸が方位をとる。本遺跡における古代の住居跡の中では特異的な軸を持つものである。以下述べる柱穴の位置関係と竪穴の残存するプランを鑑み総合的に考えると、北西-南東に長い長方形プランと推察される。柱穴は第1柱穴から第4柱穴の4基を検出している。他3基ピットを検出しているが1基は後世のものである。用途は不明である。4基の柱穴は深さの面で不揃いであるが、軸方向に対して大きくずれることなく4基が規格性をもって配置されているため柱穴であると考えている。44号住居から46号住居と同じようにカマドが存在しなかったと考えられる。埋土中の炭化物や焼土の量は少ない方であった。本住居跡は、南側で大きく削平を受けているためにわからないだけで、南側壁にあったのかもしれない。しかしながら、埋土中にカマドを構築

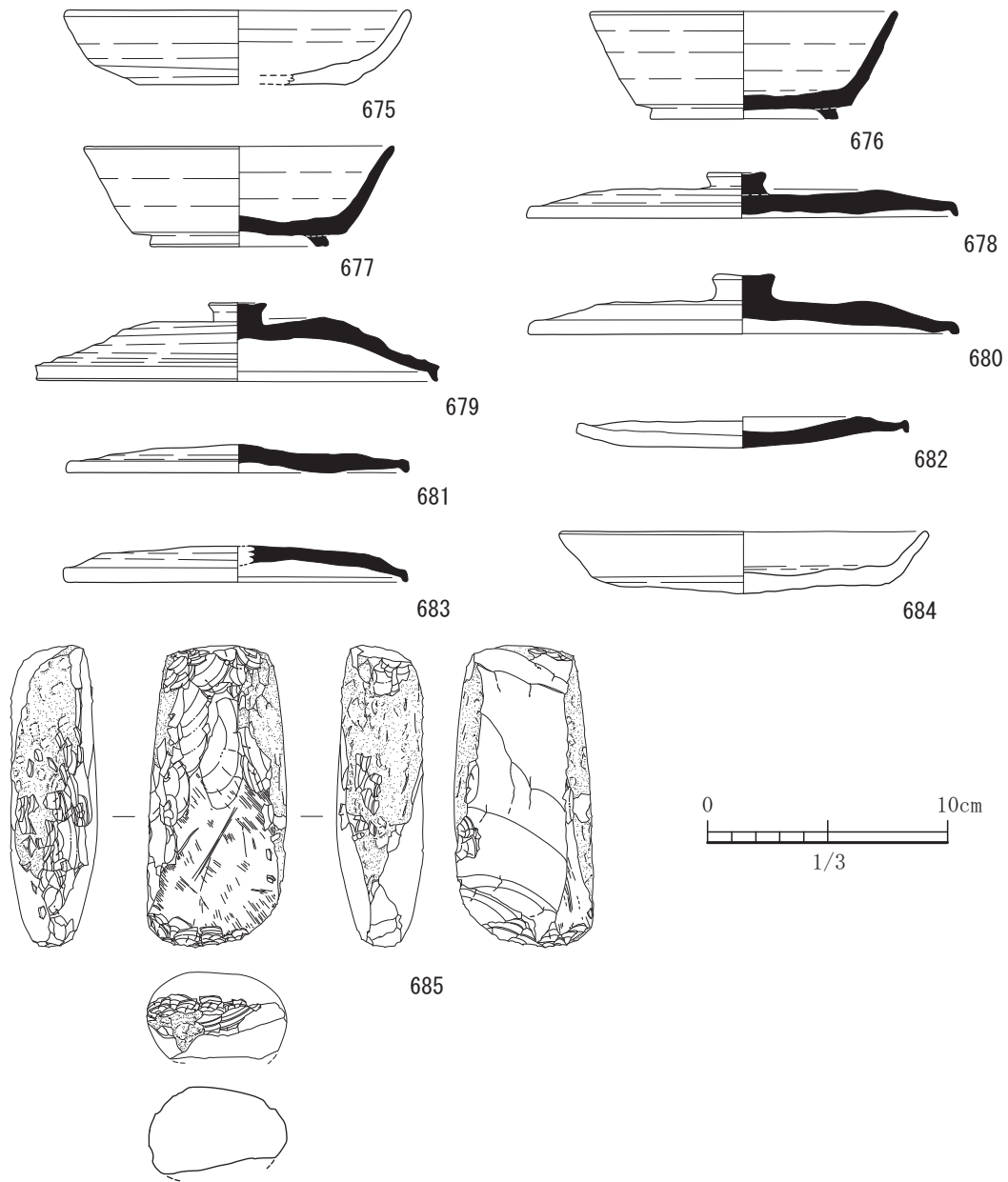


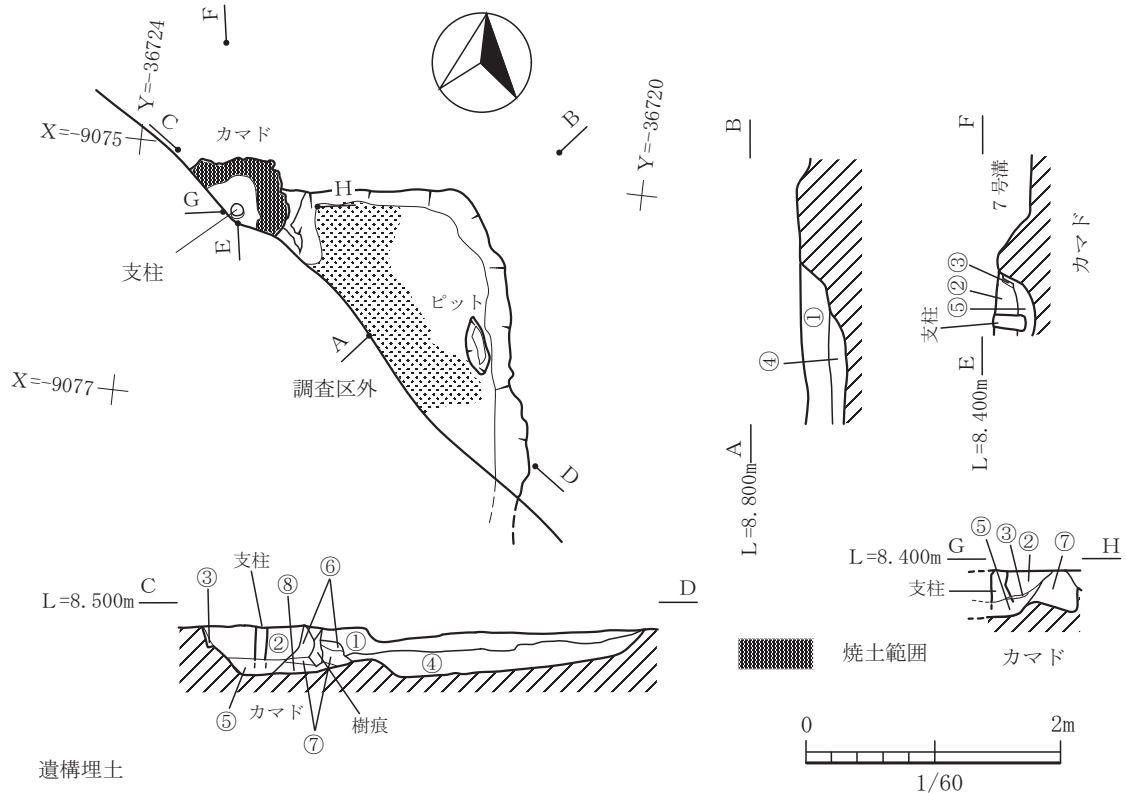
図-319 47号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

するための粘土や袖石等が一切ないのはたいへん不可解である。その点移動式カマドも想定しなければならないようである。残存していた埋土は結構厚く20cmを測った。

出土遺物は、実測可能な土器は10点、石器が1点である。675は、底部が回転ヘラ切り離し後ナデ調整で、その他は回転ナデである。体部の下部には、ヘラケズリによって丸みを作りだしている。676と677は、須恵器の碗である。両方とも底部はヘラ切り離し後未調整で、その他は回転ナデ調整である。高台は底部と体部の屈曲部より内側に貼り付けてあ

る。高台は低い。678から683まで須恵器の蓋である。678は、扁平な体部に扁平なつまみがつけてあり、端部は小さく下につまみだしてある。完形である。679は、やや器高が高くなり、体部で屈曲しながら膨らみをつくりだしている。端部は小さく下につまみ出しているが、端部は凹線状になっている。完形である。680は扁平な体部で扁平なつまみをつける。端部は、小さく下につまみ出す。681から683までつまみがない扁平な須恵器の蓋である。681と682はほぼ完形である。684は、土師器の盤である。底部は回転ヘラ切り離し後ナデ、その他は回転ナデで





遺構埋土

① 黒褐色(10YR2/3)シルト。炭化物粒と橙色の焼土粒を多量に含む。黄褐色のきめ細やかな砂を少量含む。

カマド内埋土

- ② 褐色(7.5YR4/3)シルト。黒褐色(10YR2/2)シルト。赤褐色焼土粒(直径0.5cm)、炭化物(直径1cm未満)を多量に含む。
- ③ 赤褐色(5YR4/8)焼土塊。

貼り床埋土

④ 褐色(7.5YR4/3)シルト。黒褐色(10YR2/2)シルト。明黄褐色(2.5YR6/6)のブロック(直径0.5~1cm)を多量に含む。炭化物粒、焼土粒、礫粒を多量に含む。上面は硬化面である。

カマド構築埋土

- ⑤ 褐色(7.5YR4/6)シルト。
- ⑥ 暗褐色(10YR3/3)シルト。黒褐色(10YR3/1)シルト。橙色、赤褐色焼土粒をかなり多量に含む(直径1~2cm)。炭化物(直径3cm未満)を多量に含む。
- ⑦ 暗褐色(10YR3/3)シルト。明黄褐色の軽石ブロック(直径0.5cm未満)を少量含む。
- ⑧ 暗褐色(10YR3/3)シルト。黄褐色ブロックを少量含む。

図-320 48号住居平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

ある。土器形式から判断すると8世紀後半期の所産と考えられる。685は、ホルンフェルス製の磨製石斧である。流れ込みであろう。

48号住居

48号住居は、平坦地区の7区で7号溝と切り合って検出された竪穴住居跡である。新旧関係では48号住居が新しい。本住居跡は、遺構のほとんどが調査区外である。北東のコーナー周辺のみである。竪穴のプランは不明である。付帯設備では、唯一カマドが残存していた。柱穴の配置は不明である。ただし、東壁に隣接して平面形状が楕円形を呈する

ピットが1基検出された。このピット周辺では硬化面が認められないことからこのピットを使用していたことが予想される。深さは12cmで底は平坦である。掘り方の形状や穴の深さから主柱ではないであろう。床面は、竪穴の掘り方に土を入れ床を構築した貼り床になっていた。貼り床の厚さは約15cmを測る。カマドは、北壁に張り出すように敷設されていた。カマドの残存する部分からの推定値は東西(横幅)が約75cm、南北(奥行)は約65cmはがあると想定される。カマドの袖の部分は基部の部分で3枚の構築埋土が検出されており土を積み重ねてカマドの袖を作り上

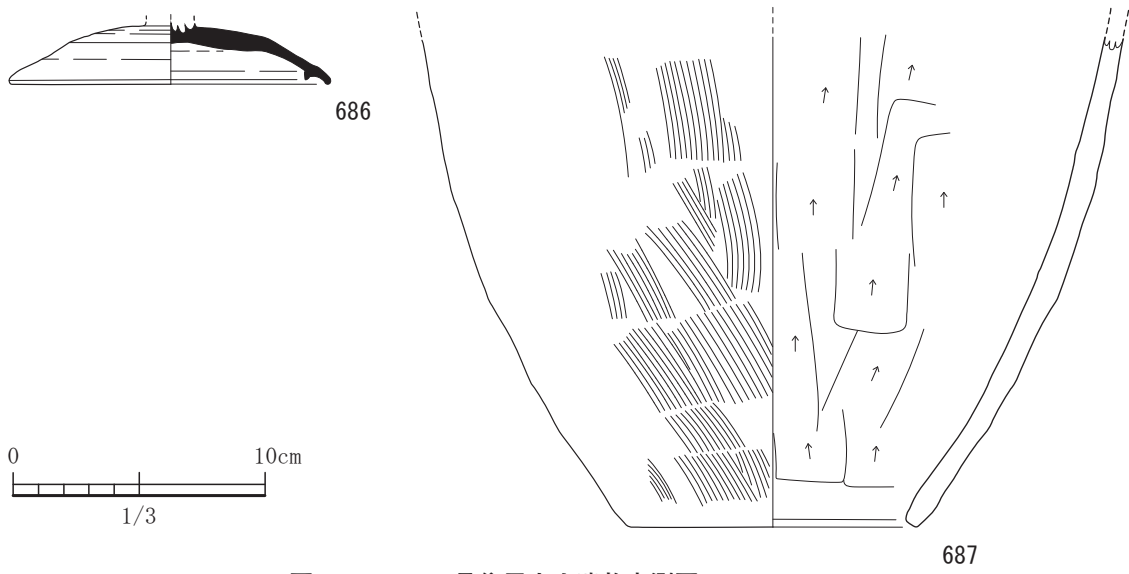


図-321 48号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

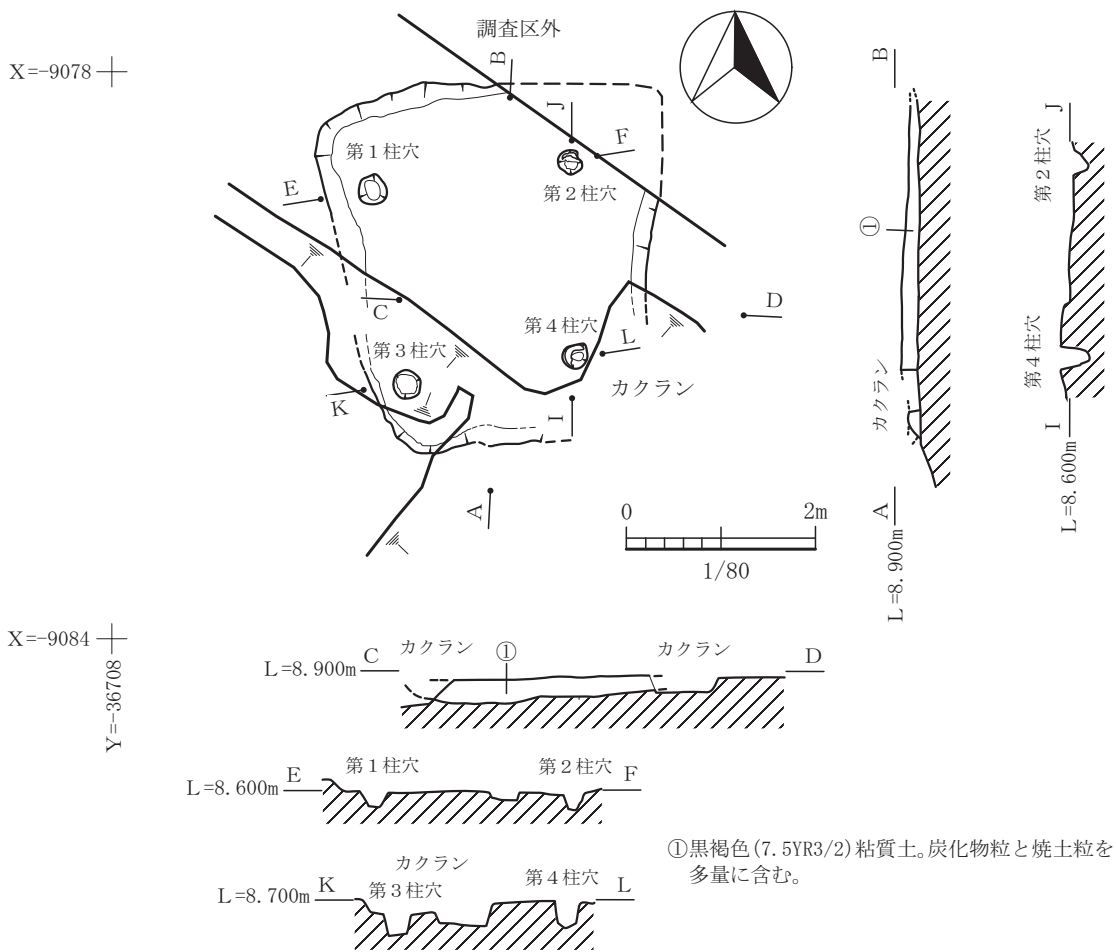


図-322 49号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

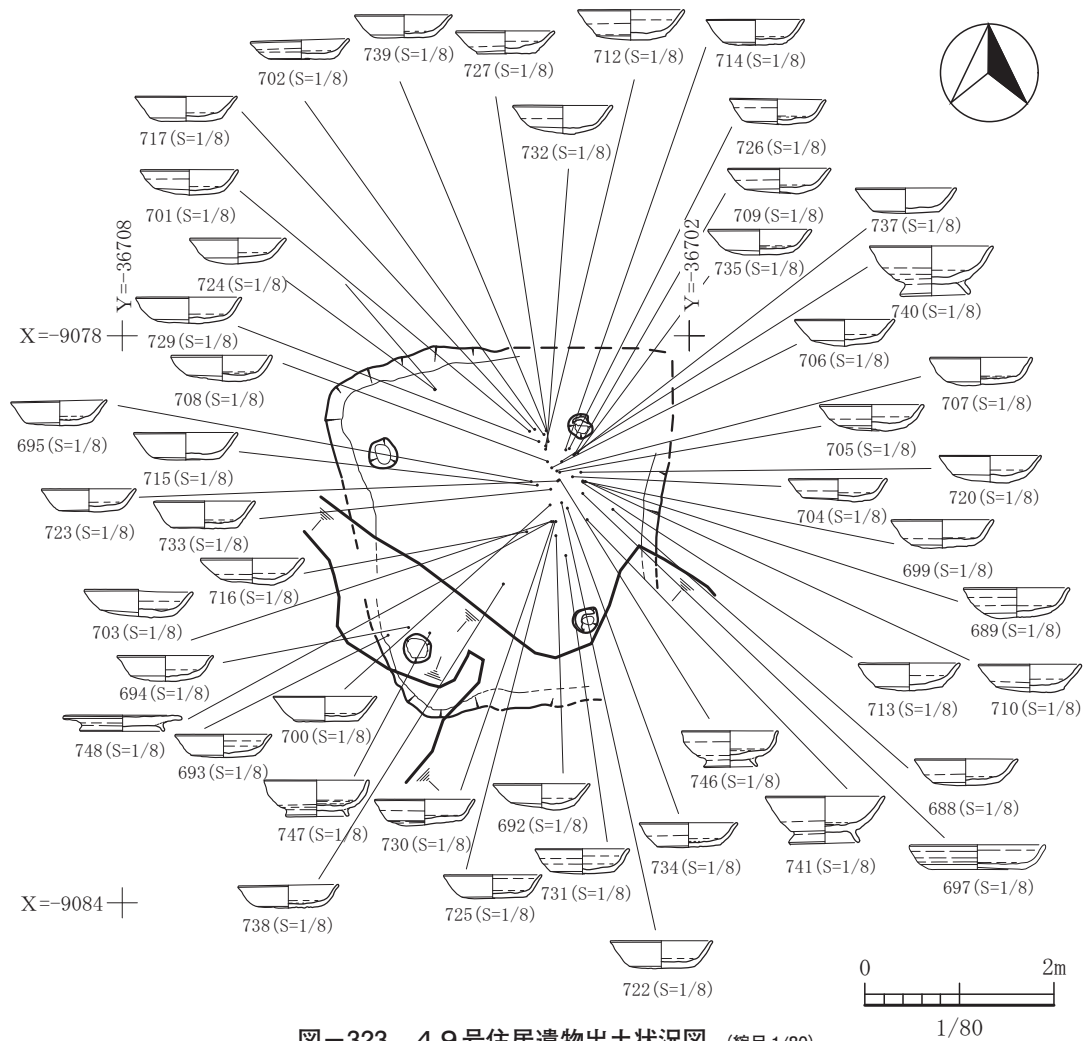


図-323 49号住居遺物出土状況図 (縮尺 1/80)

げているようである。貼り床を張った後カマドを構築したようである。カマドの火床部の中央には安山岩の平石を使用した支柱が埋土中に突き刺さっていた。火床部には焼土が認められ赤色化していた。煙道は検出されなかった。検出面より高い位置にあったようである。カマドの上部の構造物は壊されて残存していなかった。床面には明瞭な硬化面が検出され、カマド周辺ではかなり硬化していた。出土遺物は非常に少なく、実測可能な土器が2点のみである。686は須恵器の蓋である。つまみが付いていたと思われる。口縁部には小さな返りがつく。天井部は回転ヘラケズリである。7世紀後半期と思われる。687は甌である。カマドの火床部を埋積した埋土から出土している。底部はすっぽりと空けてある。外面にススが付着している。

#### 49号住居

49号住居は、平坦地区の8区で50号住居、

83号土坑、84号土坑と切り合って検出された竪穴住居である。切り合っているいずれの遺構より新しい時期のものである。本住居跡の北東側のコーナー付近は未調査域であり南側は大きくカクランによって削平されており、詳細なプランや付帯設備等で不明な点が多い。残存する限られた情報の中で判断すると、柱穴は4基あるようである。柱間は2.2m×2.2mのようである。床は貼り床を施すこともなく地山を削り出して床としている。床面には硬化面も検出されなかった。埋土中には炭化物や焼土を多量に含んでいることから、燃焼施設はあったものと推察しているが、カマドの痕跡はない。竪穴の壁には張り出したような施設は検出されなかった。削平された南側にカマドを敷設しない限り、その痕跡を何か残すはずであるが、全くないことからカマドは移動式のを想定した方が良いようである。本住居跡の最大の特徴は、灯明皿として使用したと考

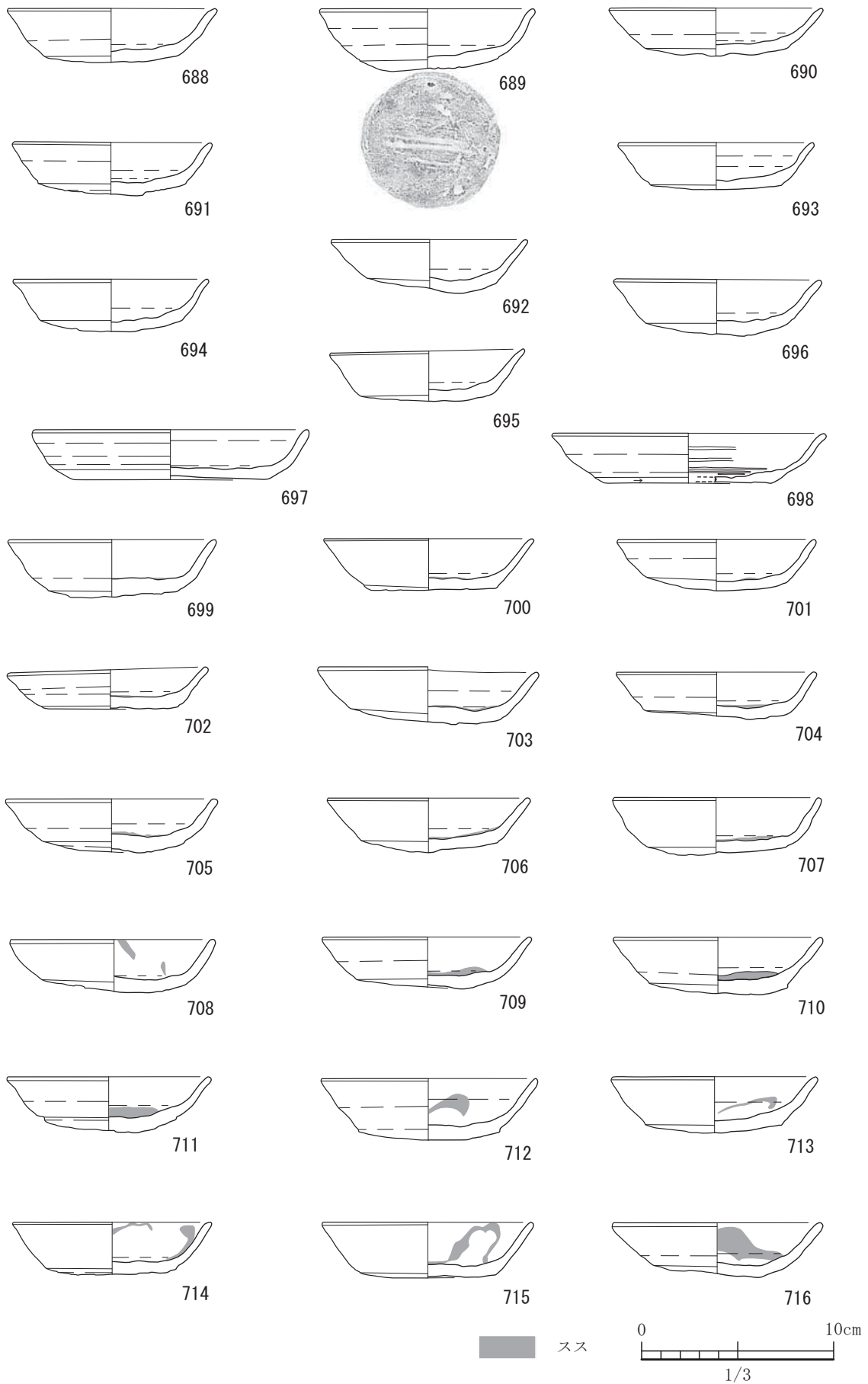


図-324 49号住居出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

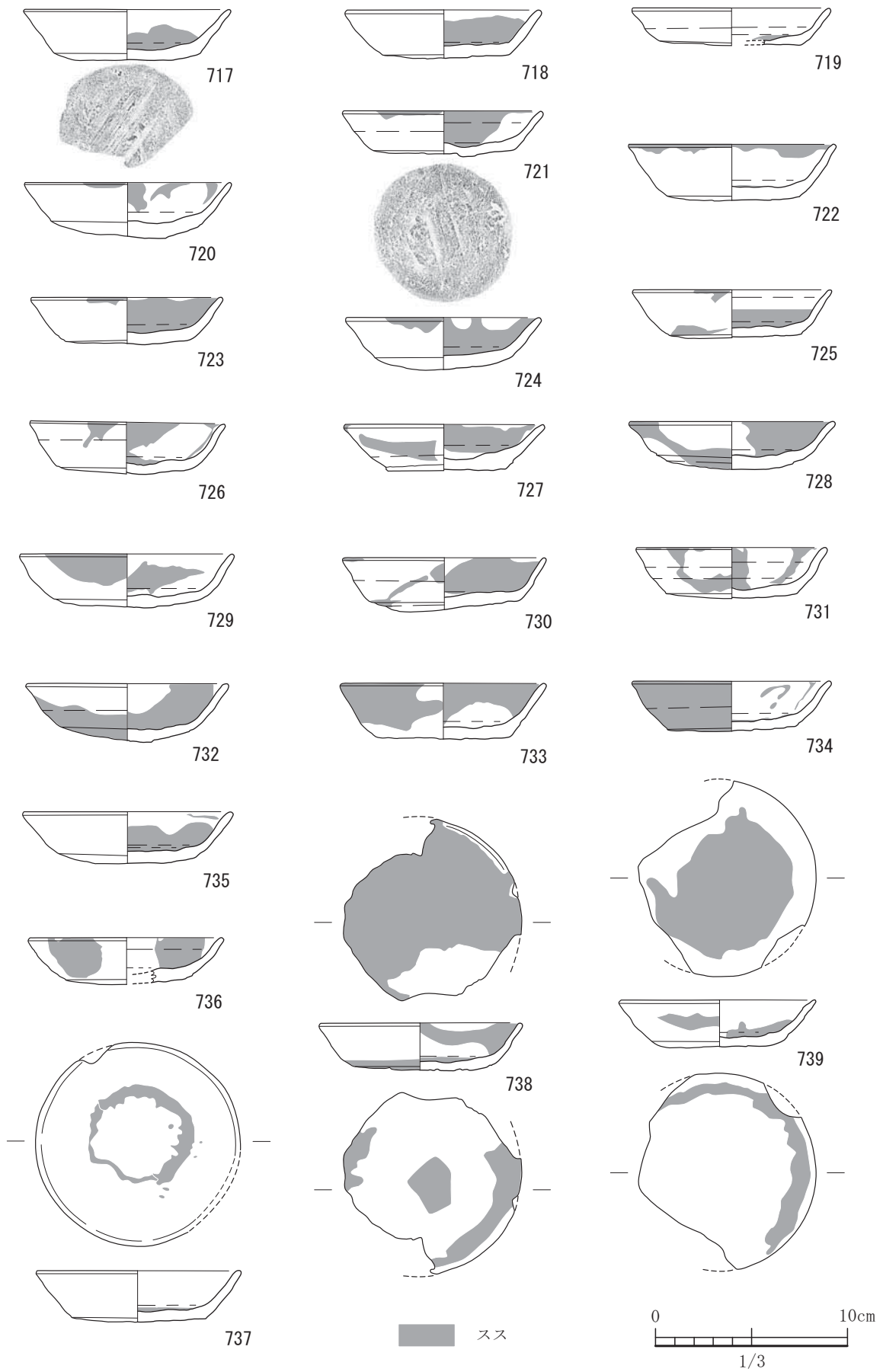


図-325 49号住居出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)



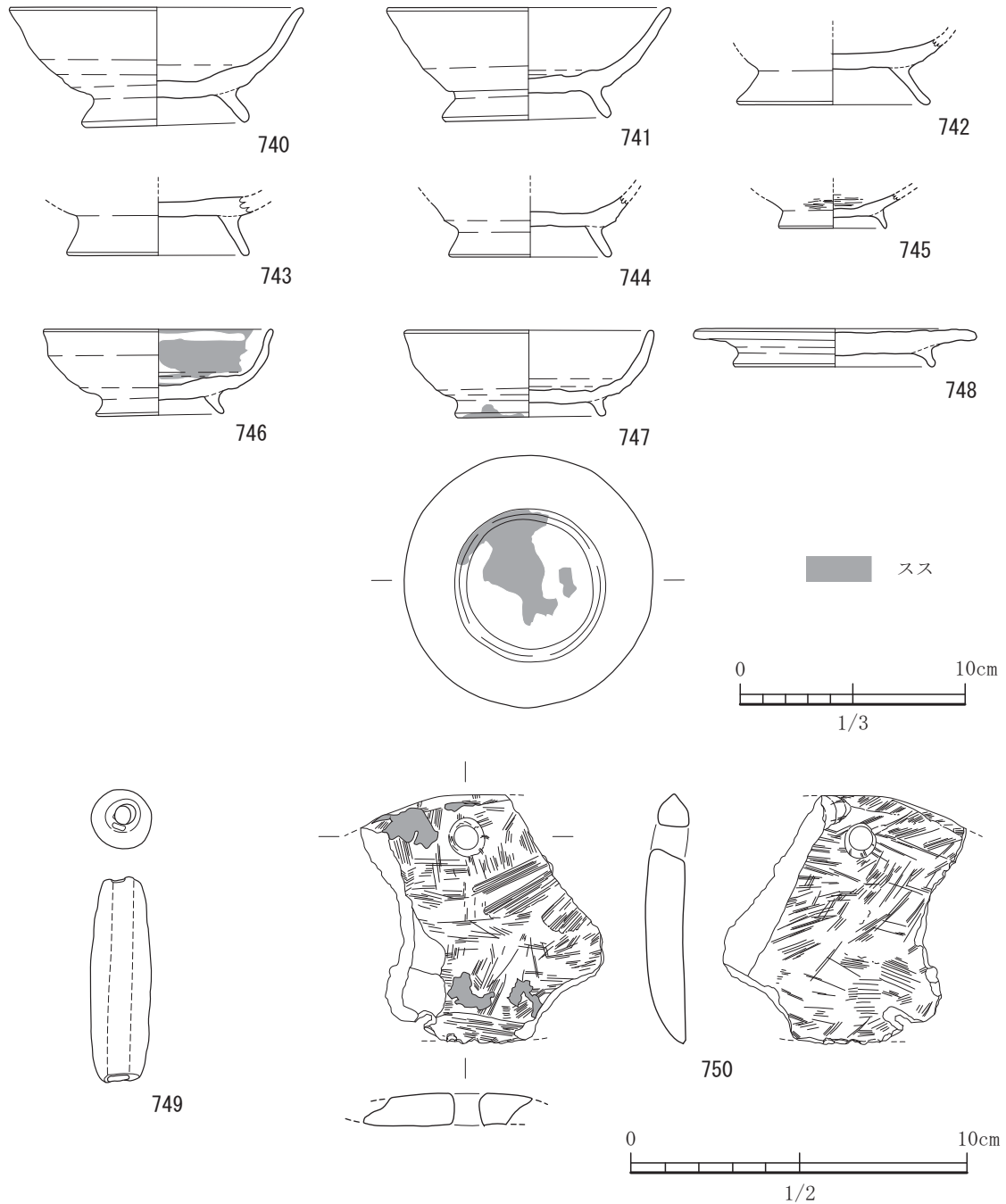
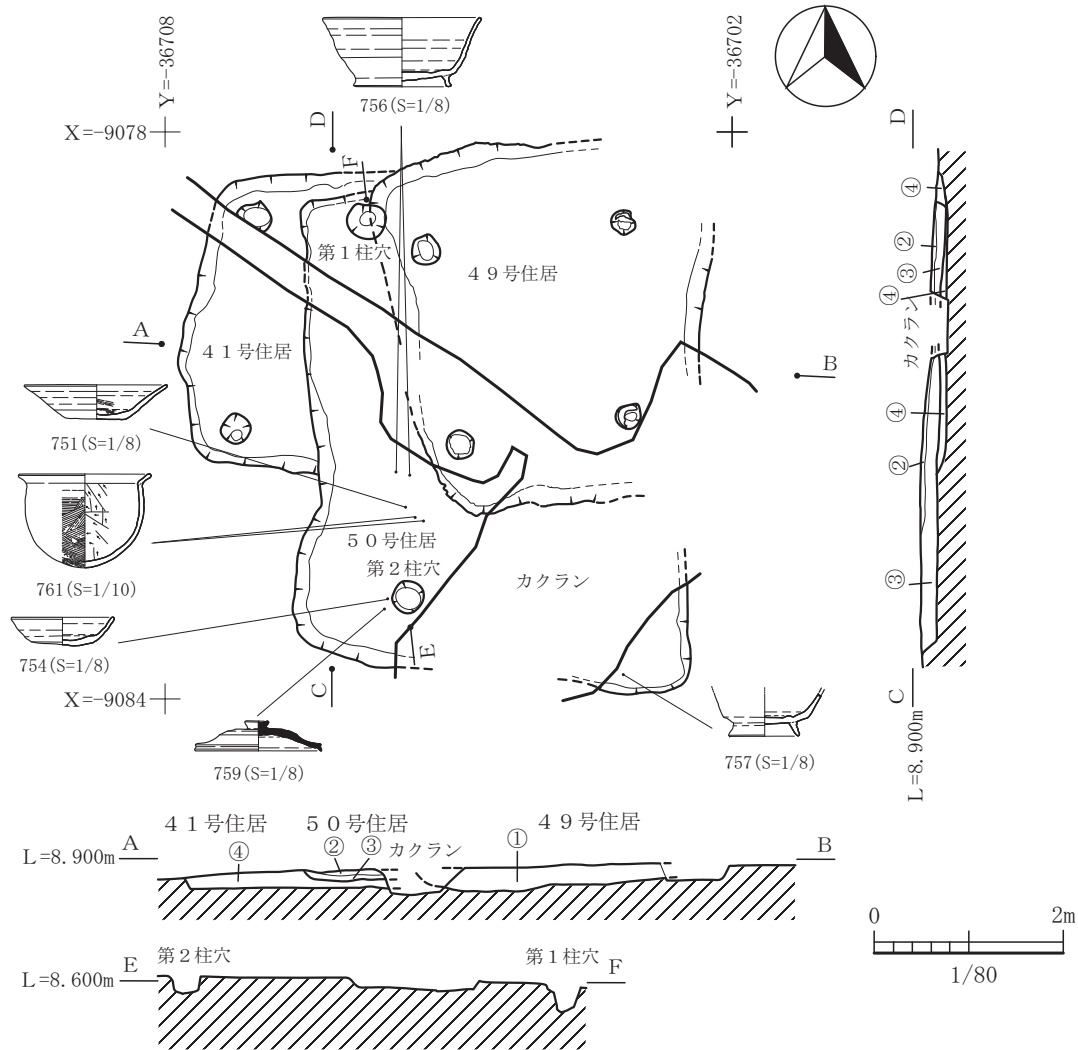


図-326 49号住居出土遺物実測図 3 (S=1/3, 749,750はS=1/2)

えられる坏が多量に出土したことである。61点の坏等の土師器の土器が出土しているのは、残存する箇所からのみであり、カクラン等の削平がなければおびただしい量になっていたものと考えられる。特に、密集して出土したのが、第2柱穴から第4柱穴の間であった。出土したときの状況はほとんどが見込み部を上にして検出されている。底部を上にして出土したのは少なかった。ある程度並べて置いて

あったような産状であった。出土した土器61点中18点は油煙が付着しておらず、他のものは全て油煙が付着していた。灯明油製作に使用した工房であったか、灯明油を管理するような施設であった可能性があると思われる。土器に付着した油煙のつき方によって6タイプに分類した。タイプ別の分類は総括でまとめているので参照していただきたい。688から739まで坏である。底部は回転ヘラ切り離し後ナデ



- 49号住居遺構埋土  
 ① 黒褐色(7.5YR3/2)粘質土。炭化物粒と焼土粒を多量に含む。
- 50号住居遺構埋土  
 ② 暗赤褐色(7.5YR4/3)土。焼きしまったブロック状の塊がみられる。炭化物粒が少量混入。  
 ③ 暗褐色(7.5YR3/3)粘質土。炭化物粒と焼土を少量含む。

図-327 50号住居平面図及び断面図 (縮尺1/80)

調整で、その他は基本的に回転ナデである。一部見込み部において不定方向のナデが見られるものがある。689は底部に板状圧痕が残る。697は内外面に赤色顔料痕が残る。698は内面に回転ヘラミガキが施されている。717と721には、明瞭な板状圧痕が見られる。740から747まで椀である。740と741は、坏部の下半が丸くなり、高台が大きい。坏部の器高はやや低くなり扁平である。大きな特徴として内外面とも灰白色を呈し、白っぽい。742は、高台がさらに細くなり大きく外に開く。743も高台が大きい。744は、

高台が高く、色調が灰白色で白っぽい。745は、黒色土器B類である。内外面に黒色研磨が施されている。高台は小さく端部がすぼむ。746も体部に下半に丸みがあり、高台は小さく端部ですぼむ。747は、体部に丸みが見られる。748は台付盤である。高台は端部がやや丸まっており短く外に開き貼り付ける。盤は、底部で回転ヘラ切り離し後ナデ調整、他は回転ナデを施す。749は土錘である。ほぼ完形で床面から出土した。色調は灰白色でやや白っぽい。750は、滑石製の製品であるが、用途は不明。穿孔が1

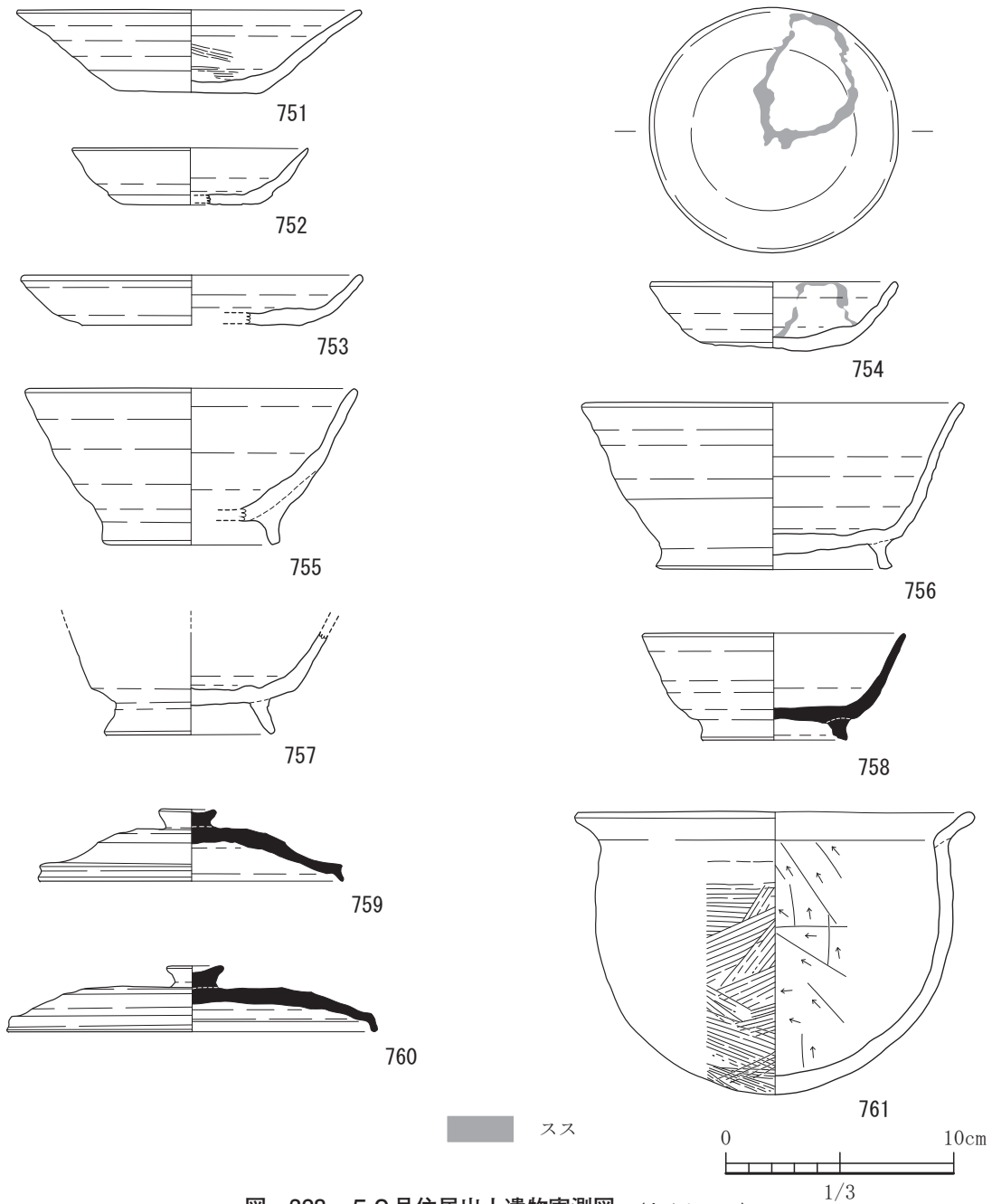


図-328 50号住居出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

箇所施され、刃部を作りだしている。表面にはスス（油煙？）が付着しており、灯明油製作に使う道具であったのかもしれない。10世紀前半の所産と考えている。

**50号住居**

50号住居は、平坦地区の8区で49号住居と83号土坑と切り合っている竪穴住居跡である。切り合っている遺構の両者より古い。南北軸方向が4.9m、東西軸方向が4.2mの南北に長い長方形プラ

ンである。南北方向の軸は、ほぼ真北を向く。柱穴は2基検出した。東側にも柱穴が存在するものと思われるが、調査期間の制約があり、本遺構の埋土掘削に残された時間は2日間しかなく検出まで至らなかった。第1柱穴が深さが20cmで、第2柱穴が25cmであった。今回平坦地区で検出した竪穴住居では最も大きいものである。約20.9㎡の面積がある。壁で残存しているのは西壁のみであり、カマドがあったか不明である。ただし、遺構埋土中には焼土や

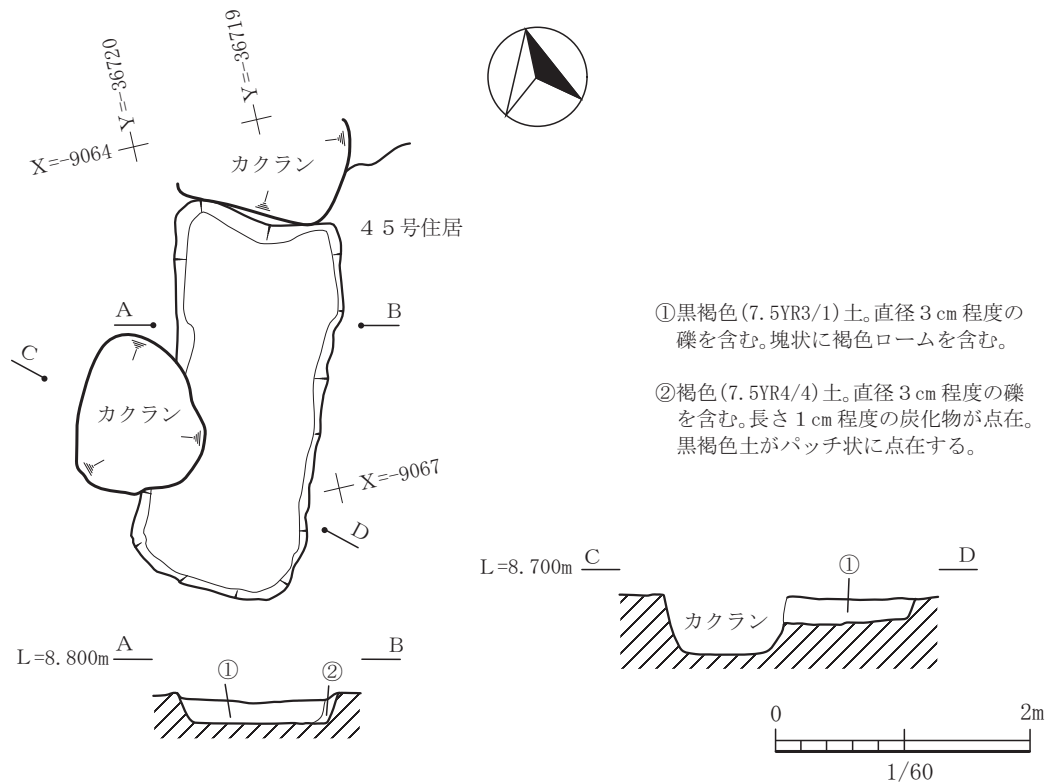


図-329 72号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

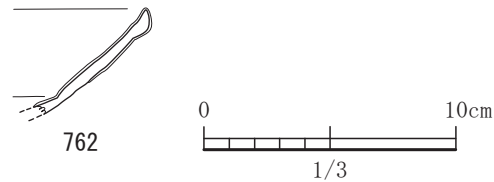


図-330 72号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

炭化物が少なく、燃焼施設があったような土質ではない。残存する部分からの推測になるがカマドはなかったのではないだろうか。床面は41号住居部分は住居内埋土を床とし単独部分は地山を削り出し床面としている。出土遺物は、実測可能な土器が11点であった。751は土師器の坏である。内面に回転ヘラミガキが施されている。体部は、直線的に長く延びる。内外面に赤色顔料痕が見られる。752は体部下部にヘラケズリが部分的に見られる。753は内外面に赤色顔料痕がある。754は土師器の坏で、内面に油煙が認められる。灯明皿として使用されたようである。完形である。755は土師器の碗である。器高は高く、高台はやや下方向につける。756は土師器の碗で、底部と体部の境より内側に高台をつける。

体部下端でヘラケズリを施すが、丸みを出すためではない。757の高台は底部と体部の境界より内側につけ、やや長い。758は須恵器の碗である。体部は直線的である。高台は四角形であるが内側を凹ませて、やや短めである。759は須恵器の蓋である。扁平なつまみをつけ口縁端部では下に小さくつまみ出す。760は扁平な体部で扁平なつまみをつける。天井部では回転ヘラケズリを広い範囲に施す。8世紀後半期の所産と考えられる。

### 72号土坑

72号土坑は、平坦地区の1区で45号住居と切り合っけ検出された遺構であり、45号住居より新しい。長軸3.0m、短軸1.2mの長方形プランである。長軸方向は、N22°Eの方角を向いている。西側は

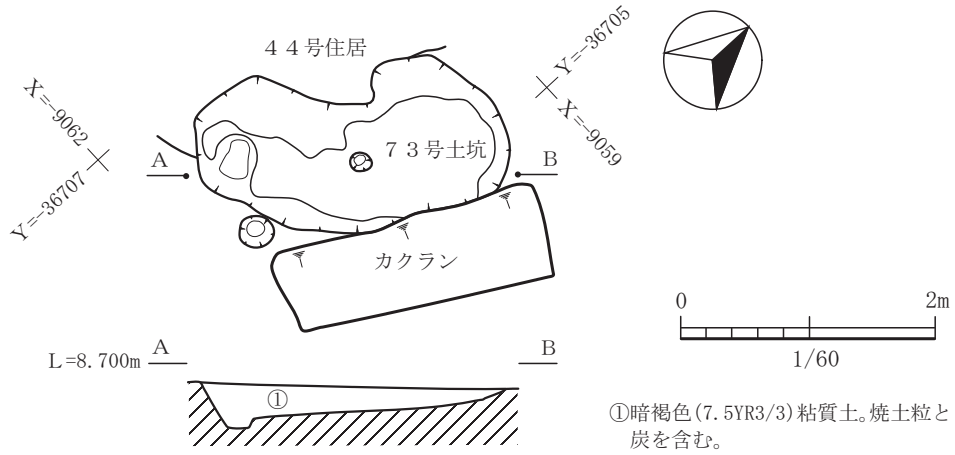


図-331 73号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

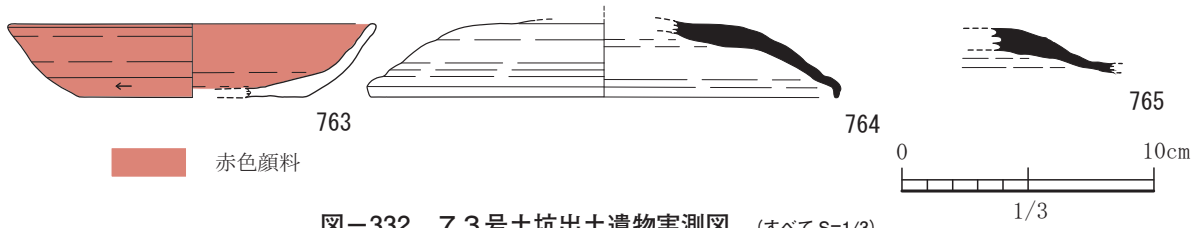


図-332 73号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

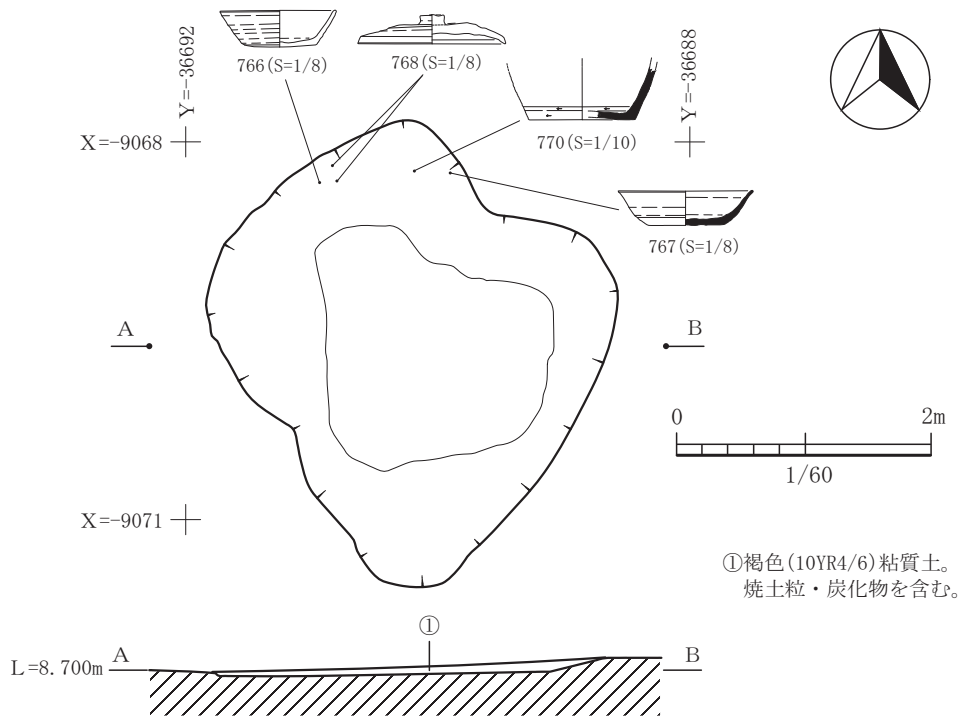


図-333 74号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)



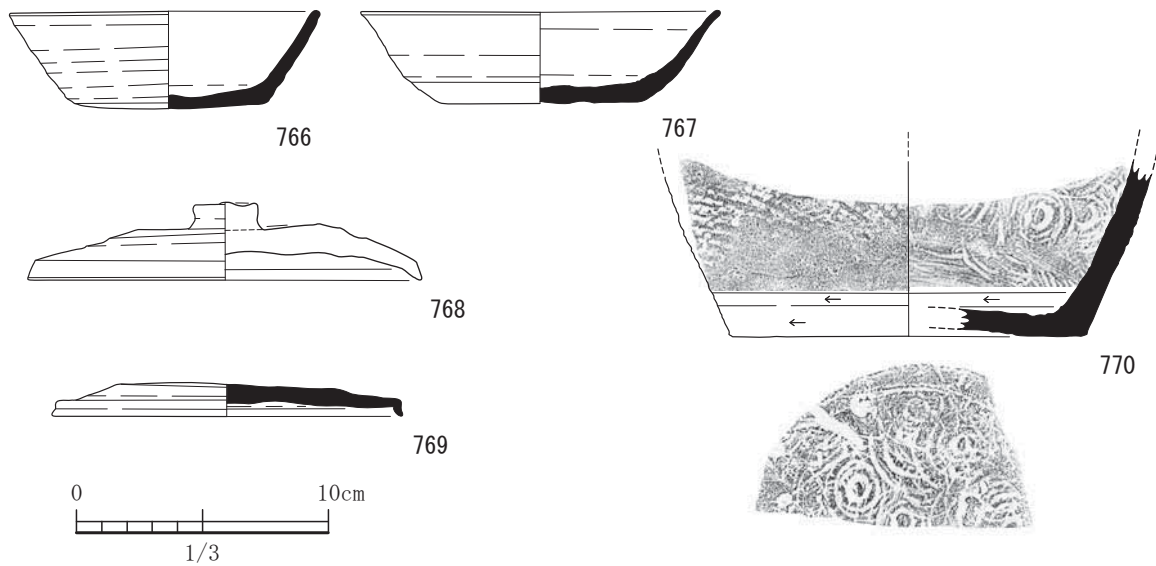
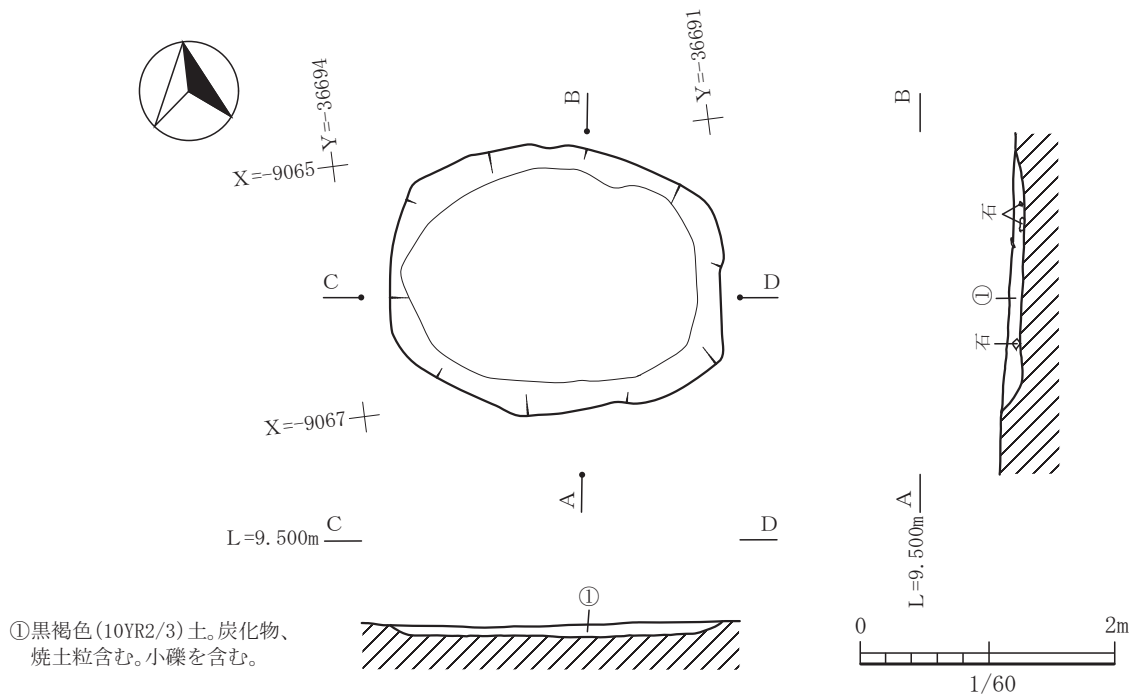


図-334 74号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)



①黒褐色(10YR2/3)土。炭化物、  
焼土粒含む。小礫を含む。

図-335 75号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

一部カクランによって壊されている。埋土は約20cm残存していた。しかしながら出土遺物はほとんどなく、実測可能な土器は762の1点のみである。白磁の椀である。小さなやや扁平な玉縁口縁である。見込み部に沈線を施してある。詳細な時期は不明である。

### 73号土坑

73号土坑は、平坦地区の1区で44号住居と切り合って検出された遺構である。この遺構が44号

住居を切っており新しい。長軸2.5m、短軸1.3mの平面形状が楕円形プランである。北東側に張り出し部をもちややいびつである。長軸の方向は、N49°Wの方角を向く。長軸の北西側に円形の凹地をもち、そこから南西にむかって緩やかに傾斜して立ち上がっていく。中央に小さなピットが見られるが、この遺構に伴うものなのか解らなかった。後世の所産かもしれない。出土遺物は少なく、実測可能な土器

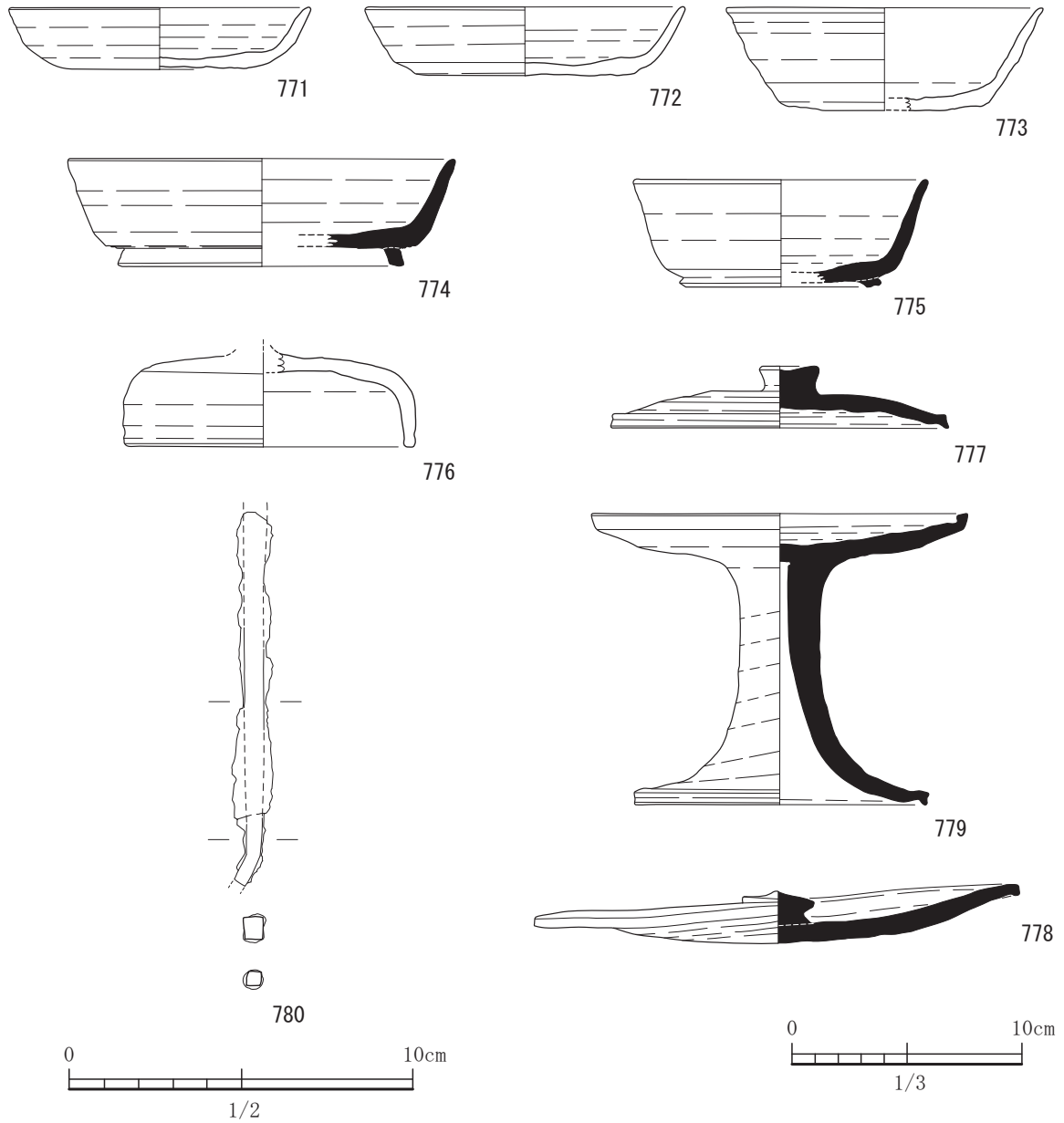


図-336 75号土坑出土遺物実測図 (S=1/3, 780はS=1/2)

が3点のみである。763は全面赤色顔料が塗布されている土師器の坏である。底部は回転ヘラ切り離した後ナデ調整で、その他は回転ナデである。体部下部にはヘラケズリを施し丸みを出している。764は須恵器の蓋である。残存する天井部の形状からおそらくつまみがあったものと思われる。口縁端部は下に小さくつまみ出す。8世紀後半の所産であろうか。

**74号土坑**

74号土坑は、平坦地区の1区で単独で検出された遺構である。平面形状はややいびつで中央にくびれをもつ隅丸方形の形状を呈する。北西-南東軸で

3.0m、北東-南西軸でやはり3.0mであった。検出面から床面まで非常に浅く約5~6cmの埋土の残りしかなかった。出土遺物は、実測可能な土器が5点であった。766は須恵器の坏である。底部は回転ヘラ切り離した後未調整、体部は回転ナデ、見込み部はナデ調整である。体部は直線的に立ち上がる。767は須恵器の坏で底部が回転ヘラ切り離した後未調整その他は回転ナデであるが、体部下部にヘラケズリを施している。口縁部でやや外反きみで、端部は窄まる。768は土師器の蓋である。天井部は回転ヘラ切り離した後未調整でやや雑である。擬宝珠形につまみ

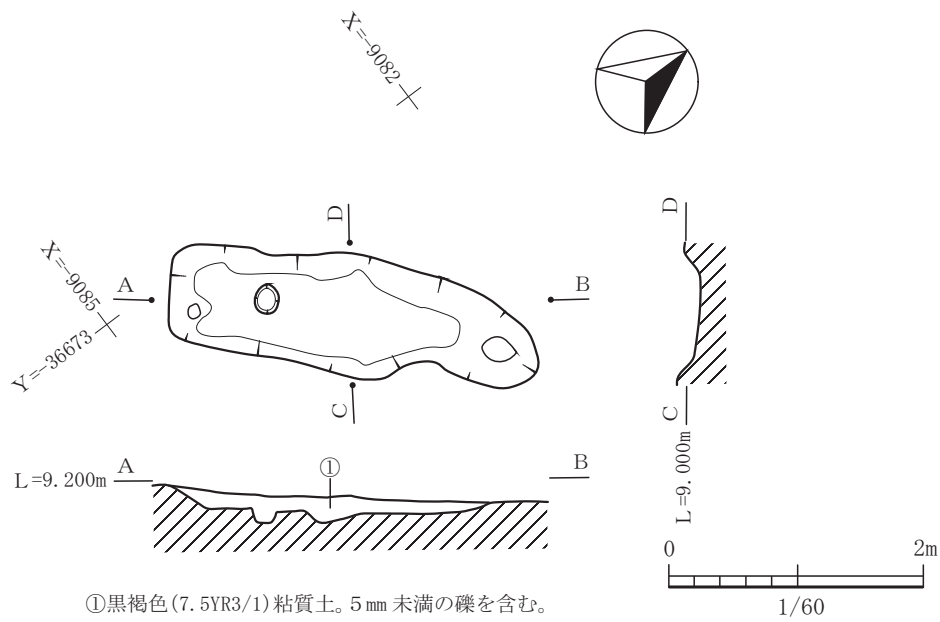


図-337 76号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

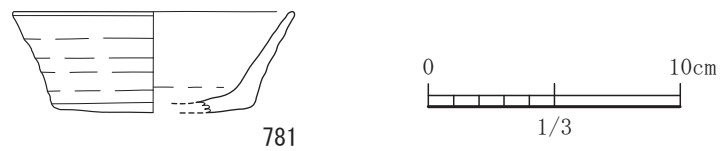


図-338 76号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

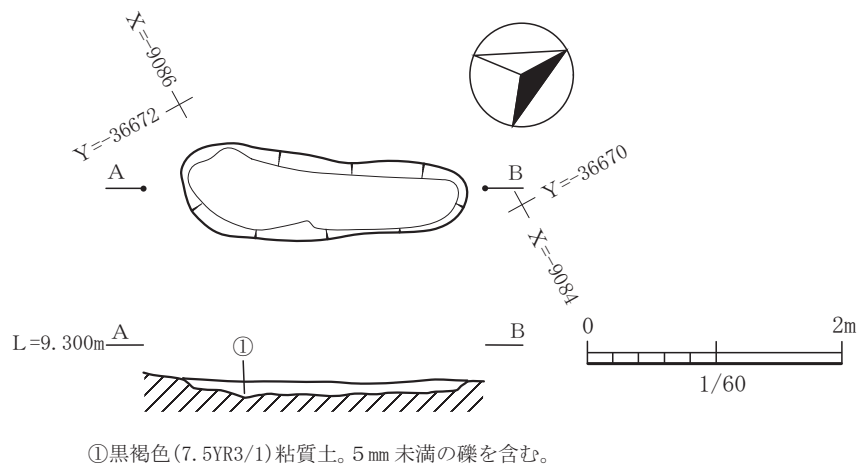


図-339 77号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

をもち、口縁端部で明瞭につまみ出さない。769はつまみのない扁平な蓋である。口縁端部で下に小さくつまみ出す。770は壺の底部であろう。内面に同心円状の当て具痕が残る。外面は格子目のタタキである。8世紀後半期の所産であろう。

### 75号土坑

75号土坑は、平坦地区の1区で単独で検出された遺構である。長軸が2.6m、短軸が2.1mの東西に長い楕円形のプランである。長軸の方向は、N83°Wの方位を向く。検出面から床面までの深さは約10cmを測る。埋土の残りは悪い方であったが、実測可

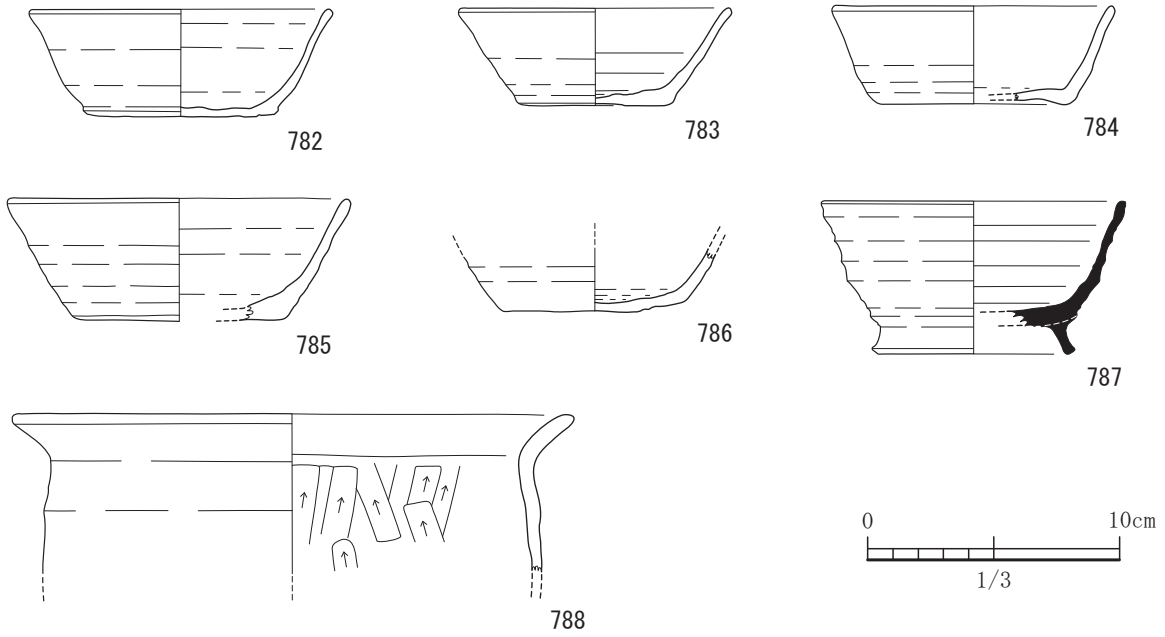


図-340 77号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

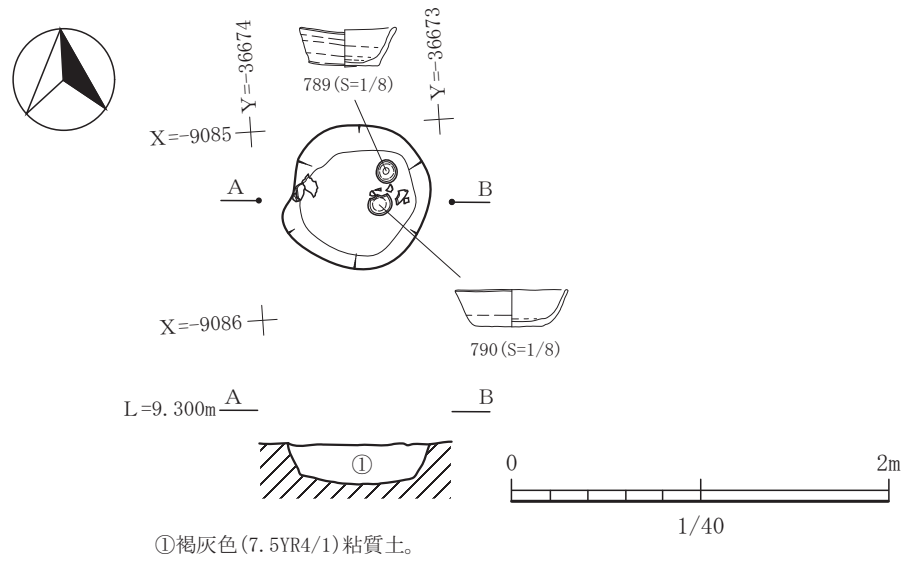


図-341 78号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/40)

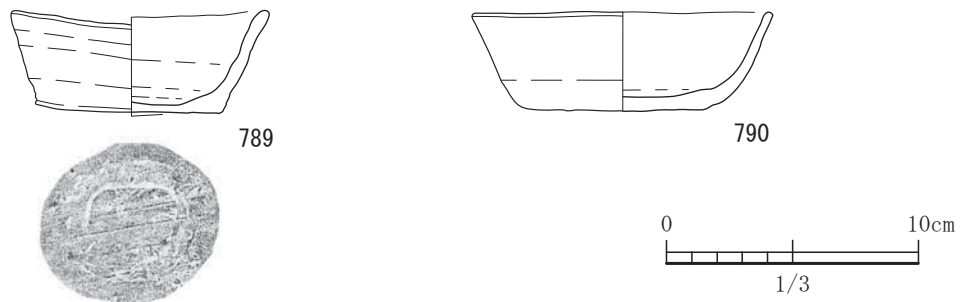
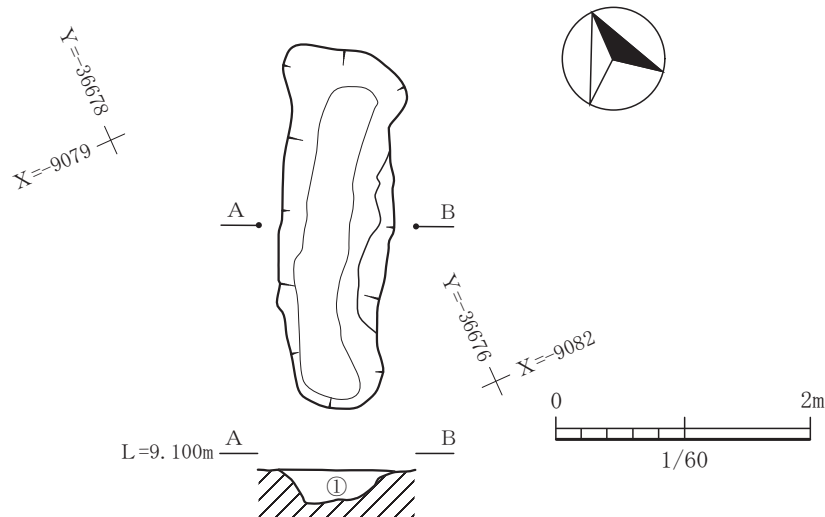


図-342 78号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)



①黒褐色(7.5YR2/2)土。黄色粒・橙色粒・白色粒を含む。

図-343 79号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

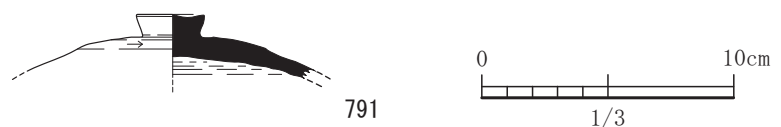


図-344 79号土坑出土遺物実測図 (s=1/3)

能な土器が9点と鉄製品が1点出土した。771から773までは土師器の坏で、底部は回転ヘラ切り離した後ナデ調整でその他は回転ナデ調整である。772は、体部の下部には回転ヘラケズリを施し、丸みを作りだしている。773は、体部下位にはヘラケズリを施し、底部と体部の境は角張る。774と775は、須恵器の椀である。底部は回転ヘラ切り離した後ナデ調整で、その他は回転ナデである。775は、底部と体部の境界にヘラケズリを施しやや丸みを作りだしている。高台は扁平で低い。776は土師器の蓋である。天井部は回転ヘラ切り離した後ナデ調整である。体部外面はヘラケズリ後ナデ調整であり、内面は回転ナデ調整である。つまみは欠損して不明。777は、須恵器の蓋である。扁平な体部で扁平なつまみを持つ。端部は小さく外側につまみ出す。778は、須恵器の蓋である。変形して歪な形状を呈する。擬宝珠形つまみをもち体部は扁平で端部は若干下につまみ出す。779は、高盤である。脚の裾端部は小さく下につまみ出す。脚部内面に絞り痕が見られる。780は、鉄鏃である。基部先端部及び鏃先端部は欠損している。

断面は四角形を呈する。75号土坑は8世紀後半期の遺構と考えられる。

#### 76号土坑

76号土坑は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構である。長軸3.0m、短軸1.0mの平面形状が東西に長い三角形プランである。長軸方向は、N49°Eの方位である。東側が微妙にテラス状となっており、床面はやや凹凸がある形状を呈する。1基ピットが掘られているが、用途は不明である。出土遺物で、実測可能な土器は、781の1点のみで、土師器の坏である。反転復元している。底部は、ヘラ切り離した後ナデ調整で、それ以外は回転ナデである。底部と体部の境界は角張り、体部はほぼ直線的に延びる。小型化しやや器高が高くなる。

#### 77号土坑

77号土坑は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構である。長軸が2.3m、短軸が0.7mの隅丸の長方形プランである。床面は平坦である。周辺にある76号土坑、79号土坑とほぼ同じ軸方向である。検出面から床面までの深さは約10cmあまりで埋



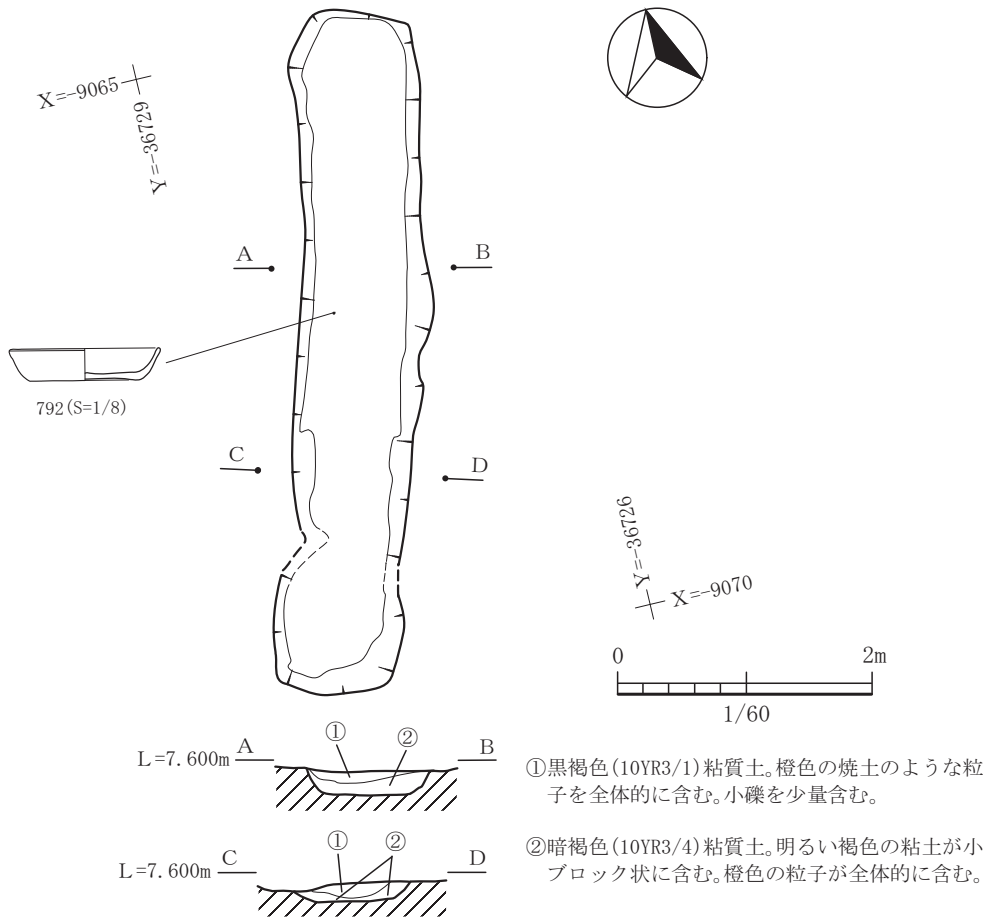


図-345 80号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

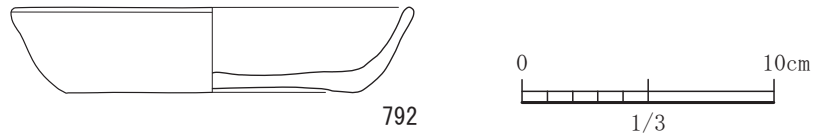


図-346 80号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

土の残りは良くなかったが、土坑の中では遺物の残りは良かった。実測可能な土器が7点出土している。782から786まで土師器の坏である。基本的に底部が回転ヘラ切り離し後ナデ調整、その他は回転ナデである。782は器壁が薄く口縁端部に近いところでやや外反させている。783はやや小型化し底径と比して器高がやや高い。784は体部下部の外面にススが付着している。785は内外面にススが付着している。786は外面底部に墨書の痕跡があるが不明瞭で积読できるような残存度ではない。787は須恵器の碗である。底部から体部にかけ丸みを帯び、高台はやや高い。788は土師器の甕である。胴部内面は上方へ

のヘラケズリのちナデ調整で、それ以外は回転ナデのちナデ調整である。全体的にススが付着した痕跡がある。77号土坑は、9世紀中葉から後葉の所産であると考えられる。

#### 78号土坑

78号土坑は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構で、直径約0.8mの円形プランである。検出面から床面までの深さは約20cmを測る。土師器片と須恵器片が出土している。実測可能な土器は2点である。789と790は土師器の坏である。789は底部が回転ヘラ切り離し後ナデ調整である。板目痕が見られる。その他は回転ナデである。全体的に歪みが

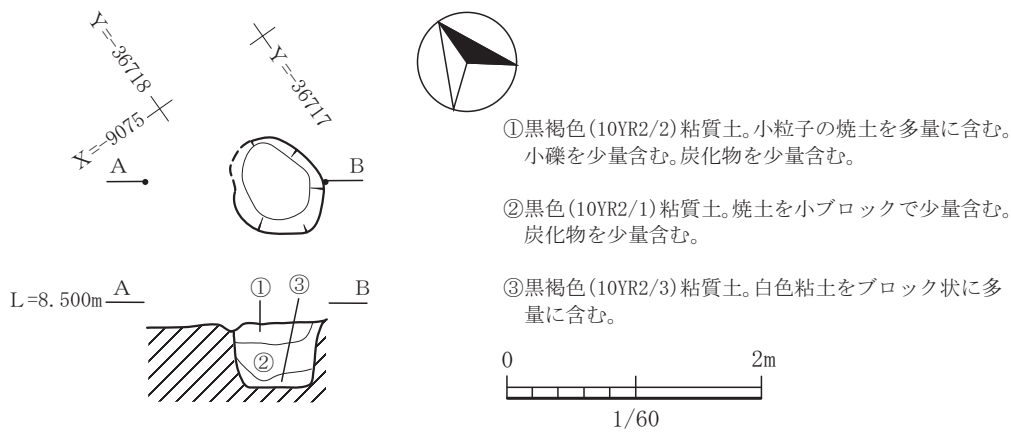


図-347 81号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

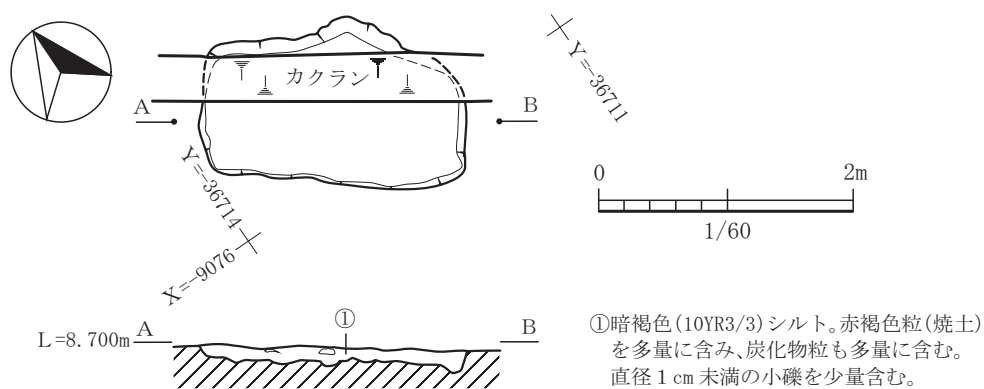


図-348 82号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

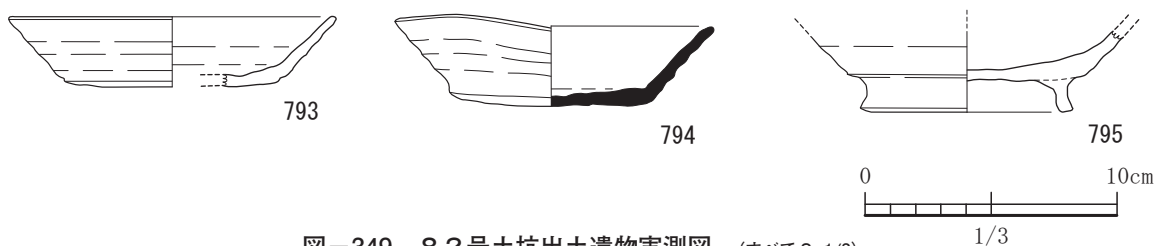


図-349 82号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

ひどくいびつである。底部と体部は屈曲がきつく角張っている。体部は直線的である。やや小型化している。790はヘラ切り離し後ナデ調整でその他は回転ナデ。底部と体部の境界は丸みを帯びている。9世紀の所産であろう。

### 79号土坑

79号土坑は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構である。長軸が2.9m、短軸が0.9mの隅丸の長方形プランであり、長軸の方向は、N25°Eの方位を向く。周囲にある76号土坑や77号土坑とほぼ同じ軸方向である。床面はほぼ平坦な形状である。

東壁にはテラス状の平坦部が作り出されている。出土遺物は土師器片と須恵器片で少ない。実測可能な土器は791のみである。反転復元している。底部から体部の一部の残存である。扁平なつまみがつき、天井部はゆるやかに口縁部にむけ傾斜する。天井部は回転ヘラケズリが施され、体部内面は回転ナデ調整が施されている。残存する部分から断定はできないものの8世紀の後半期ぐらいであろうか。

### 80号土坑

80号土坑は、平坦地区の7区で単独で検出された遺構である。長軸5.5m、短軸1.0mの南北に長

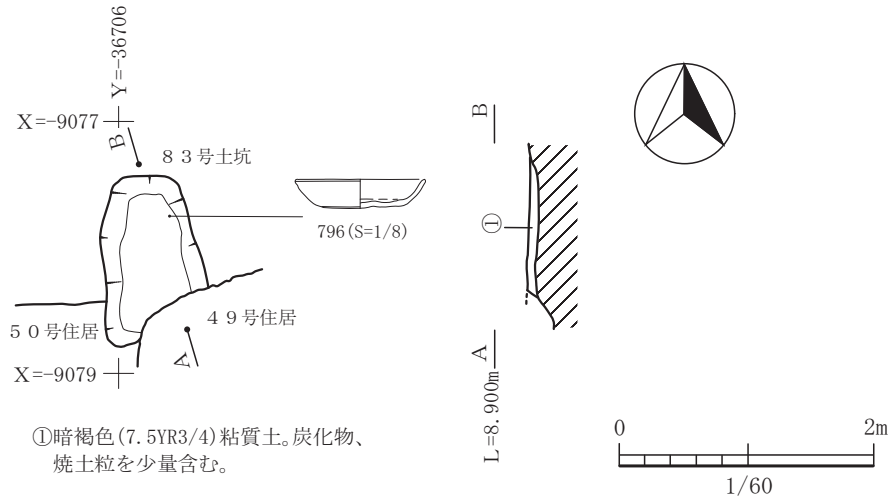


図-350 83号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)



図-351 83号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

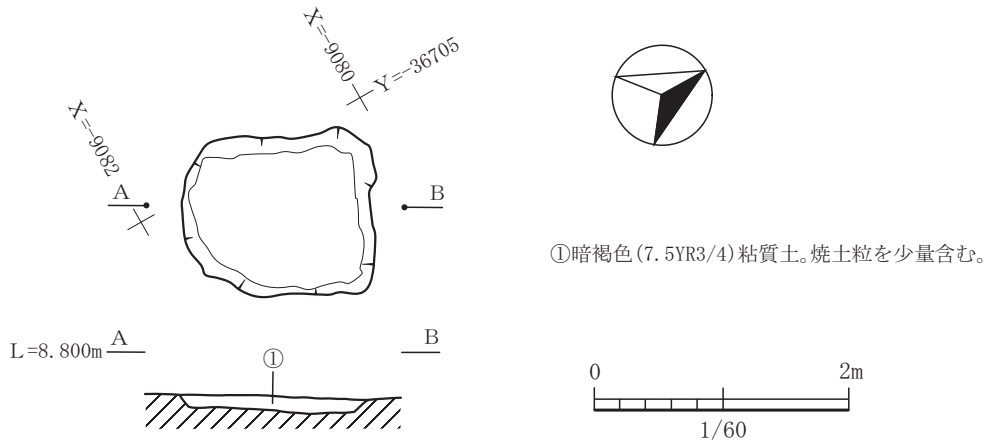


図-352 84号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

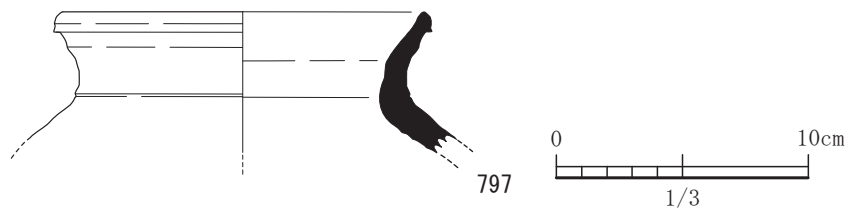


図-353 84号土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

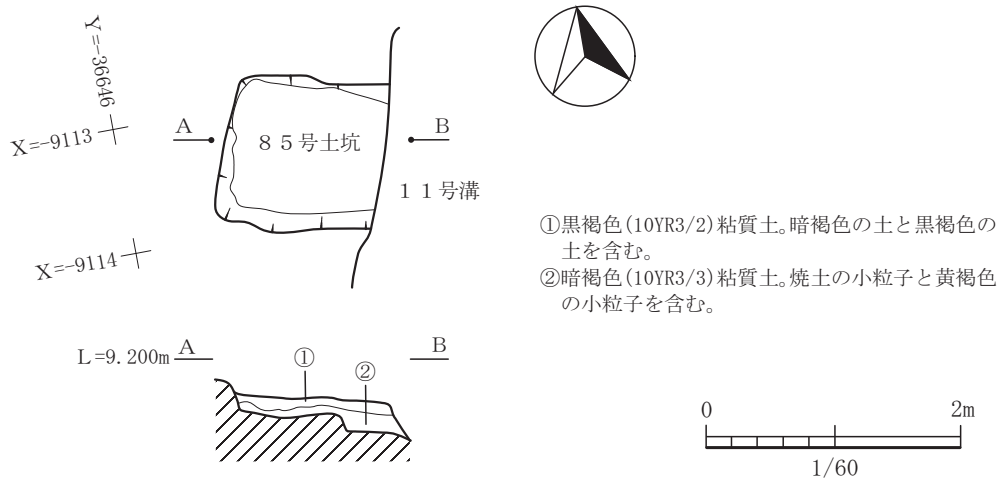


図-354 85号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

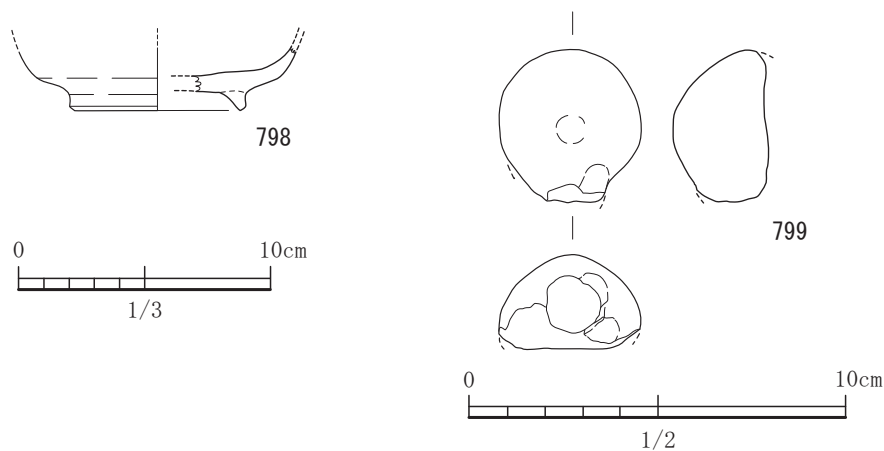


図-355 85号土坑出土遺物実測図 (S=1/3, 799はS=1/2)

い長方形プランの遺構である。南北の壁がななめにゆるやかに立ち上がるのではなく、しっかりとした立ち上がりをしていたため調査段階では土坑とした。南北の延長線上には本遺構の続きとなるものがない。埋土中の堆積の状況も流水の影響で作られるラミナ構造も認められず、ブロック状に混濁した状態で一気に埋積されたような状況であった。本遺構も出土遺物が少なく土師器片が中心である。実測可能な遺物は792の土器1点である。土師器の坏である。1/2程度の残存である。反転復元している。底部はヘラ切り離した後ナデ調整である。その他は回転ナデであり、見込み部にはその後不定方向のナデ調整を施してある。8世紀代の所産であろう。詳細な時期の特定はできない。

#### 81号土坑

81号土坑は、平坦地区の7区で単独で検出された遺構である。長軸が0.87m、短軸が0.70mの

楕円形プランの遺構である。断面形状では方形を呈する竪穴である。検出面から床面までの深さは約0.52mを測り埋土の残りは良い。最上層である埋土①に焼土が多量に含まれており火を使った痕跡が認められる。出土遺物は少なく土師器片のみである。実測不可能である。

#### 82号土坑

82号土坑は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構である。長軸が2.1m、短軸が1.1mの長方形プランであり、北東側の壁は平面形状で三角形の張り出しが認められる。床面には凹凸が認められるが全体的には平坦な形状である。北半部はカクランによって壊されている。埋土中には、多量の炭化物粒や焼土粒を含んでいるが、この土坑が火を伴うような施設であったかは不明である。焼土塊は認められない。出土遺物は、実測可能な遺物が3点である。793は、底部は回転ヘラ切り離した後ナデ調整で、他

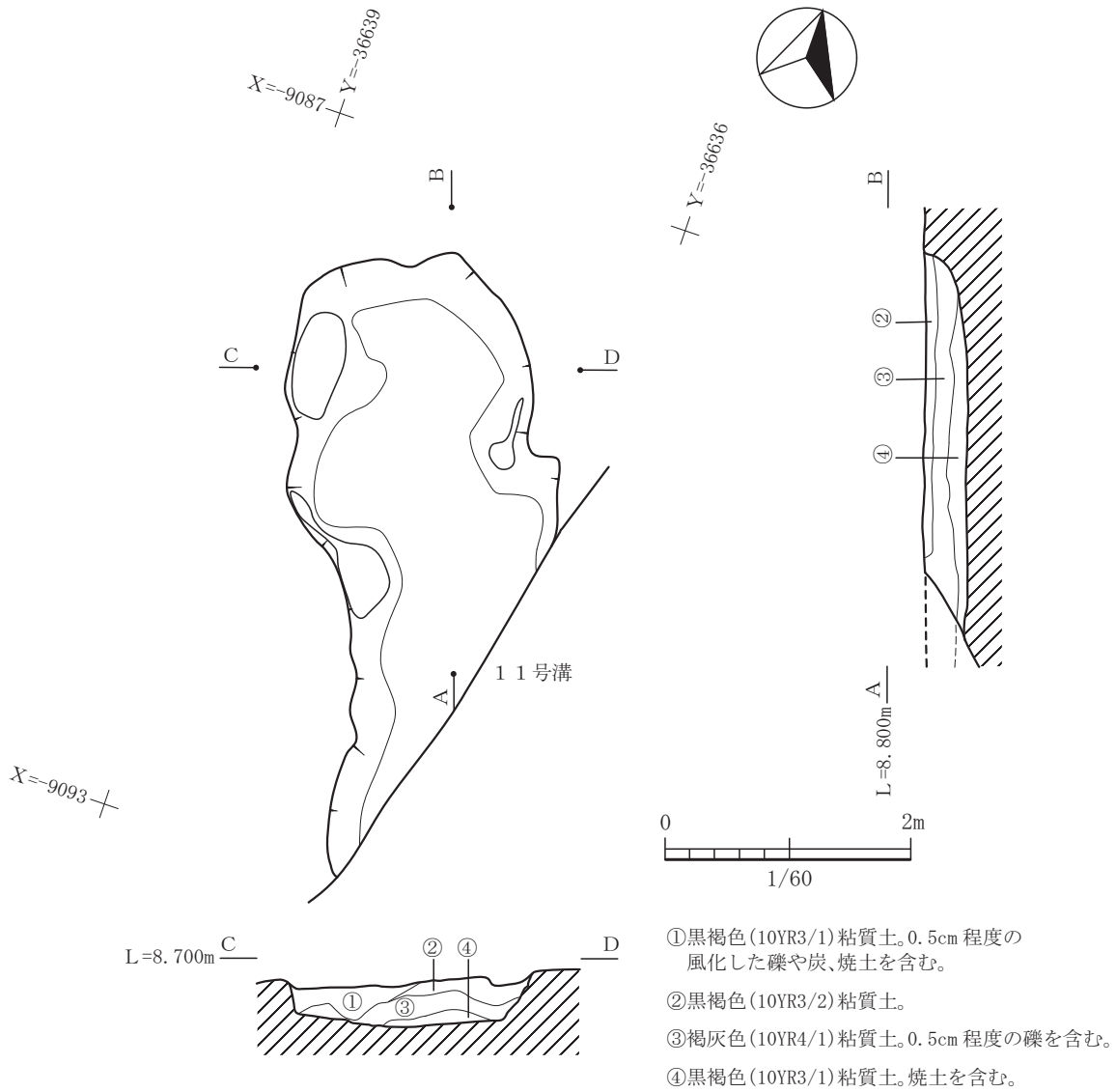


図-356 86号土坑平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

は回転ナデ調整である。体部は直線的である。794は、底径は小さく、体部は直線的である。底部は回転ヘラ切り離し後ナデ調整で、その他は回転ナデである。795は、土師器の椀である。高台の断面形状は四角形でやや高くなる。底部と体部の境界は屈曲しており丸くはない。底部は回転ヘラ切り離し後ナデ調整で、その他は回転ナデである。9世紀代の所産であろう。

**83号土坑**

83号土坑は、平坦地区の8区で49号住居及び50号住居と切り合って検出された遺構である。8世紀後半期の50号住居より新しく、10世紀前半期の49号住居よりは古い時期の土坑である。平面形状は台形を呈しており南北に長

い。長軸は1.3mである。長軸の方向は、ほぼ北を向く。本土坑の南側は49号住居によって壊されている。埋土は約8cm程度の残りである。出土遺物は少なく実測可能な遺物は、796の1点のみである。底部が回転ヘラ切り離し後ナデ調整でその他は回転ナデである。全体的に赤色顔料痕が残る。底部から体部の境はやや丸みを帯びる。9世紀代であろう。

**84号土坑**

84号土坑は、平坦地区の8区で49号住居と切り合って検出した遺構である。49号住居の床面から検出されている。49号住居よりは古い。南北軸方向が約1.5m、東西軸方向が約1.3mの長方形プランで、南北軸方向は、N30°Eである。形状的には、南側のコーナーが丸まる傾向にある。埋土中に



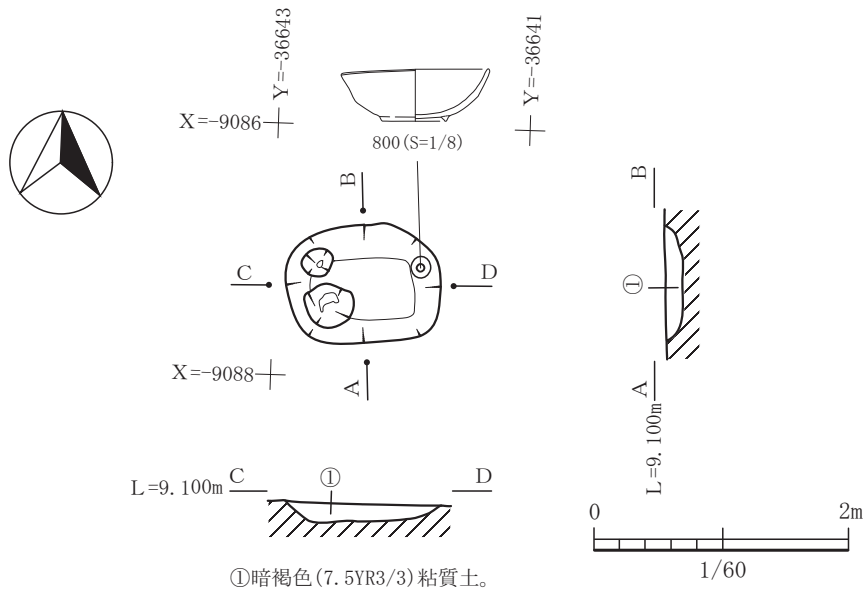


図-357 87号土坑平面図及び断面図 (縮尺1/60)

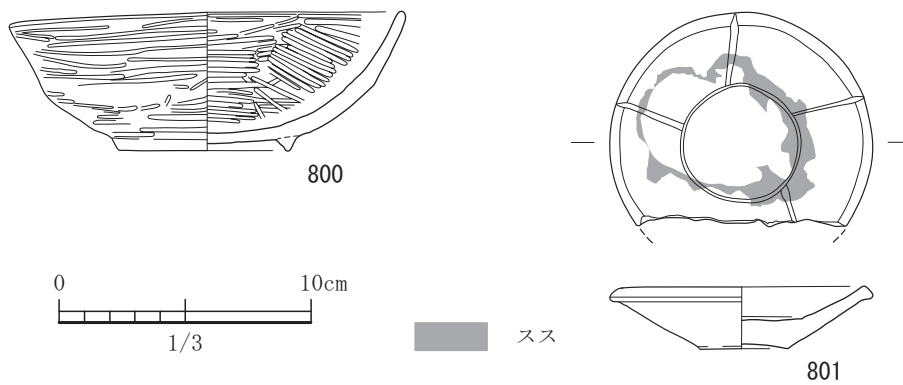


図-358 87号土坑出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

は、焼土を伴うものの少量であり火を使った痕跡は示さない。床面は平坦で凹凸はない。出土遺物は少なく実測可能な遺物は797の1点のみである。須恵器の壺である。頸部以下の器壁は肉厚である。口縁端部は小さく下につまみ出して屈曲させている。胴部の一部しか残存していなかったが、外面では平行タタキ、内面で同心円状の当て具痕が見られる。8世紀代の所産であろう。

#### 85号土坑

85号土坑は、平坦地区の8区で11号溝と切り合って検出された遺構である。11号溝よりは古い。

南北方向の軸は約1.3m、残存する東西軸方向が約1.8mである。東側は11号溝によって削平されているため詳細なことはわからないが残存する部分か

ら判断すると、東西に長い長方形の土坑であったろうと予想される。東西軸はN75°Wである。古代の遺構でこの軸方向と同じくするのは82号土坑である。出土遺物は798の土師器の椀と799の土製品のみである。高台の断面形状は四角形である。底部と体部の境界には顕著な丸みは見られない。799は用途不明である。もとは球状で、把手のような突起物があったようである。詳細な時期は不明。

#### 86号土坑

86号土坑は、東西軸方向は約2.0m、南北軸方向の残存する部分で3.8mである。南側は11号溝によって削平されており不明。ただし11号溝をまたいで延びることにはないようである。長軸方向の方向は、N27°Wの方位である。南北に長い土坑である。

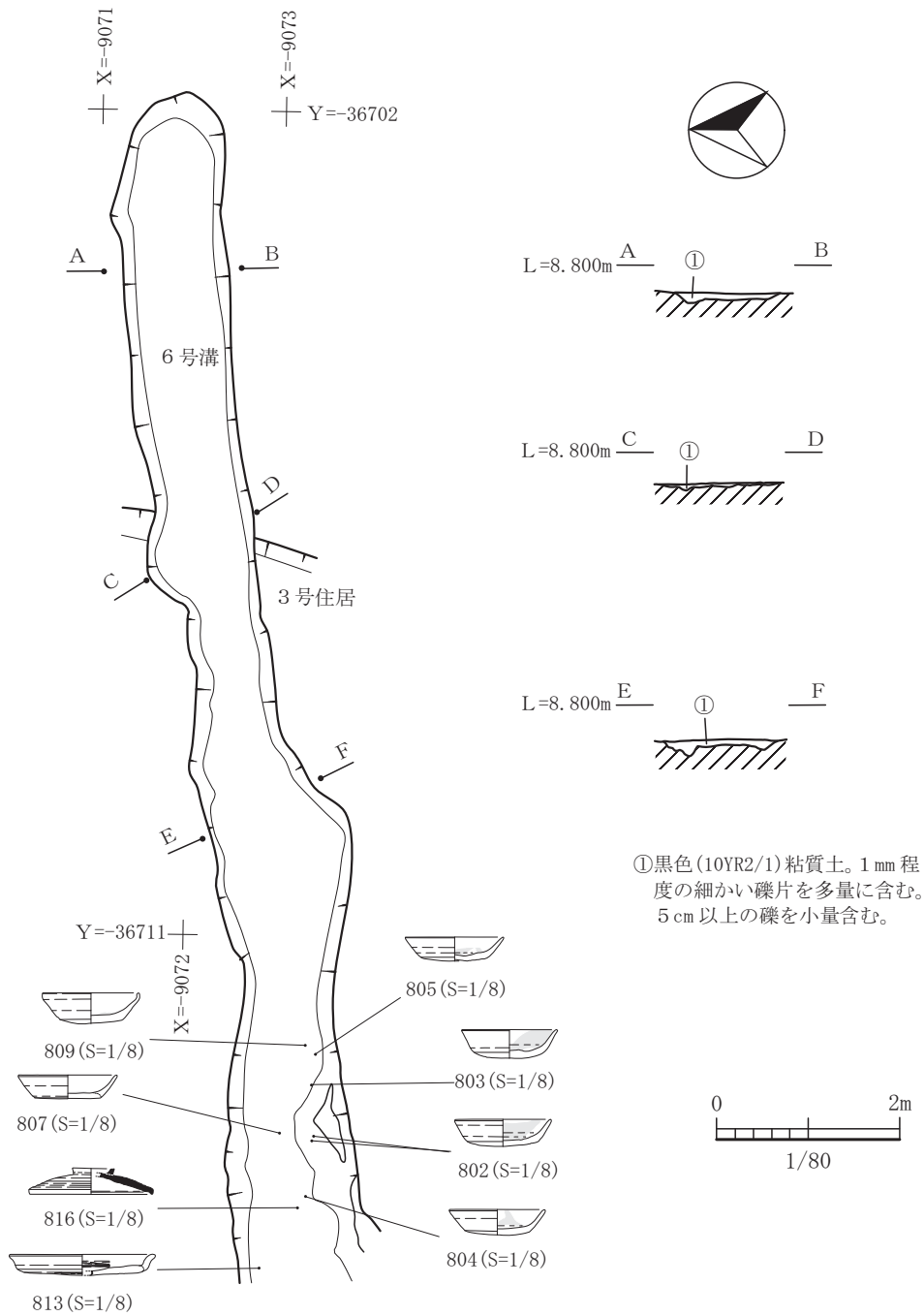


図-359 6号溝平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

長軸方向の長さは不明である。検出面から床面までの深さは約35cmであり、埋土の残りは非常に良い状態であった。埋土も4層あり、埋土の①と④に焼土が含まれているが微量であった。また、壁の立ち上がりはどの壁においても上方にしっかり立ち上がっている。出土遺物はほとんどなく、小さな土師器片のみであった。古代の遺構であるが、詳細な時期は不明である。

87号土坑

87号土坑は、平坦地区の2区で単独で検出された遺構である。長軸は1.24m、短軸は0.94mであり、長軸の軸方向は、N88° Eの方位ではほぼ東西である。平面形状はほぼ東西に長い長方形プランである。西側に小さい窪みが2基並んで床面から検出された。検出面から床面までの深さは、約14cmであった。床面は基本的に平坦な形状を呈する。出土遺物は、実測可能な遺物で2点のみである。800は完形で東壁

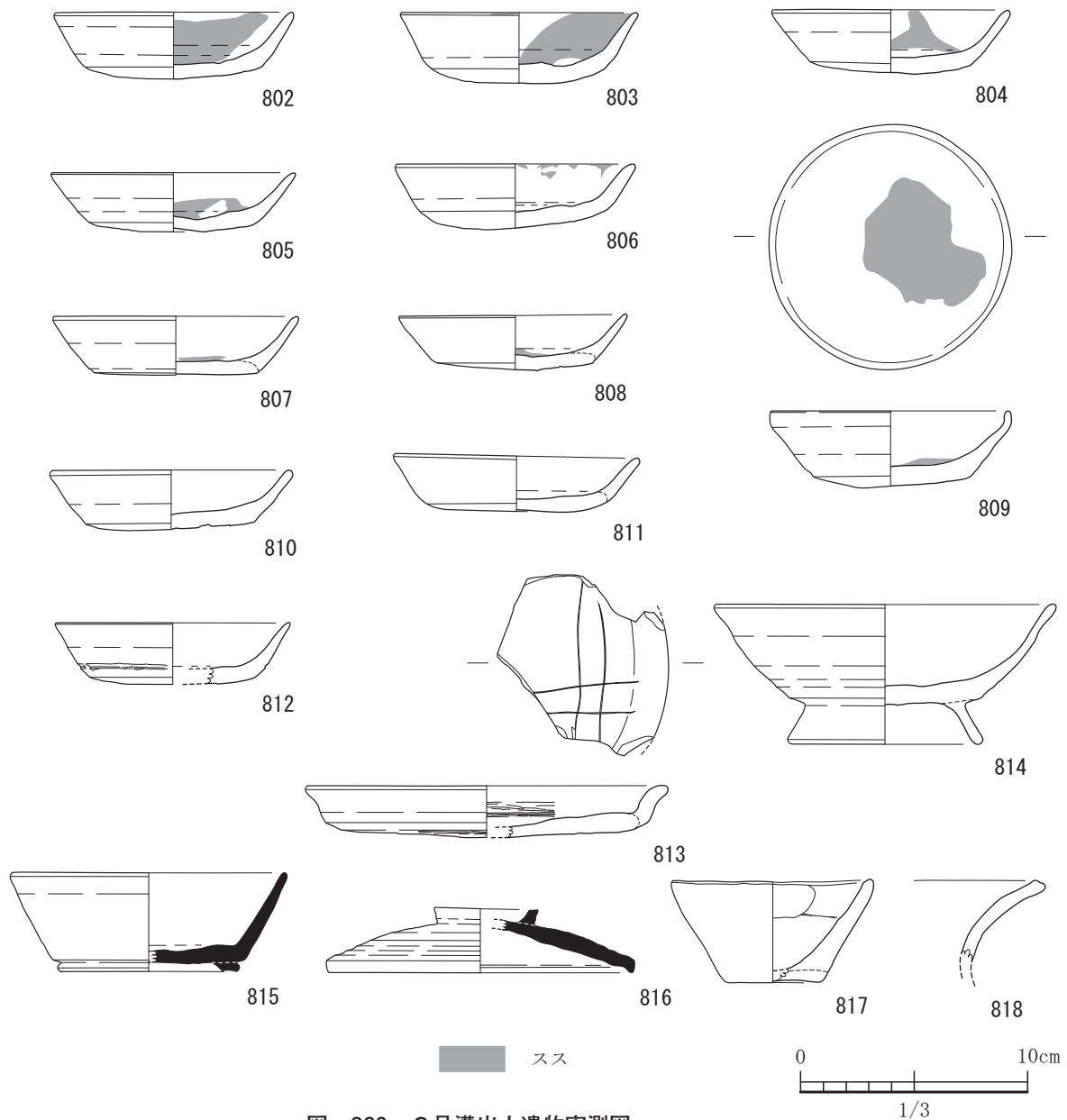


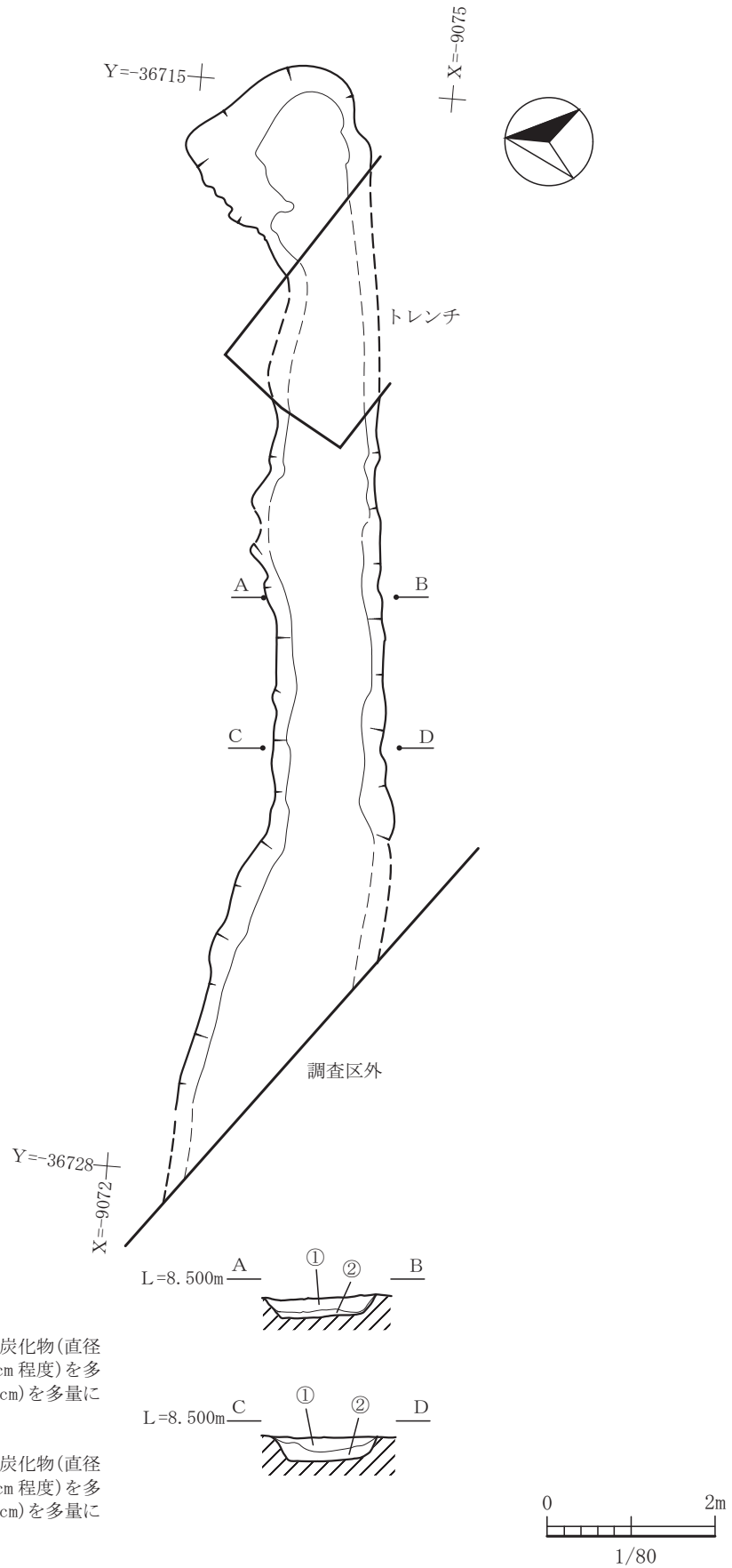
図-360 6号溝出土遺物実測図 (すべてS=1/3)

付近でそのまま置いたように出土している。瓦器質の碗である。底部から口縁部にかけて丸みがあり、回転ナデのちミガキが施されており、底部と体部の境界ではヘラケズリにより丸みを作り出しその後ミガキを施している。高台は、断面形状が三角形で小さく貼り付ける。801は、白磁の皿である。内面において底部と体部の境界に一周沈線が施してあり、体部においては放射状に縦に4本の沈線が見られる。底部の器壁は厚く、口縁部では端部は平坦に作り上げられ、下に少しつまみ出している。胎土は灰白色を呈しており内面には、油煙が見込み部に見られ灯明

皿として使用されていたようである。中世の所産である。

#### 6号溝

6号溝は、平坦地区の1区から7区の調査区をまたぐように延びている溝である。1区では46号住居と7区では47号住居と切り合っている。46号住居より古い遺構である。ただし、本溝は東西両方向から延びてきて46号住居で切り合っており、検出した時点では軸方向や埋土に顕著な差が見られないことから同一遺構であるとしたが、平面図においてE-F間付近で若干東西に延びていた溝が屈曲し



①黒褐色(10YR2/2)シルト。炭化物(直径1cm未満)、焼土(直径5cm程度)を多量に含む。礫(直径1~5cm)を多量に含む。

②暗褐色(10YR3/3)シルト。炭化物(直径1cm未満)、焼土(直径5cm程度)を多量に含む。礫(直径1~5cm)を多量に含む。

図-361 7号溝平面図及び断面図 (縮尺 1/80)

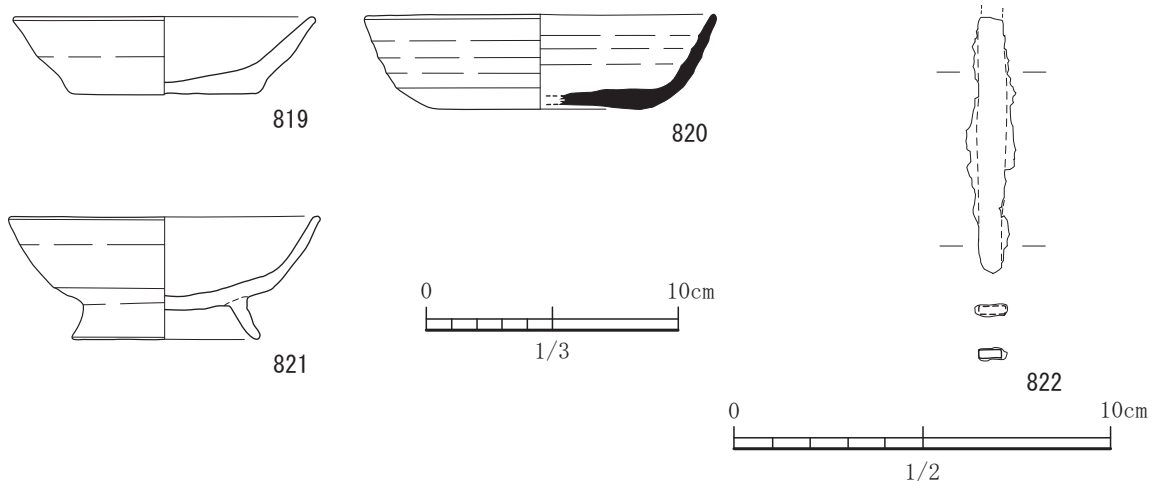


図-362 7号溝出土遺物実測図 (S=1/3, 822はS=1/2)

東北東に延びている。ここで溝同士が切り合っていた可能性がある。調査段階ではその差は捉えることができなかった。全体的な溝の延びる方向はN83°Eであるが、E-F間付近で僅かな屈曲があることを前述しているが、その角度は約4°の屈折角である。残存する部分の長軸方向の長さは12.9m、短軸方向の長さが1.14mである。検出面から溝の底までの深さは6~7cm程度で非常に浅い。埋土の残りは非常に悪かったが、実測可能な土器は比較的多く出土した。802から812までは土師器の坏である。総体的に底部では回転ヘラ切り離し後ナデ調整、その他は回転ナデ調整である。また体部はほぼ直線的に延びている。802から809まで油煙が認められる。802、804及び811には底部に板状圧痕が見られる。813は杯である。底部は回転ヘラ切り離し後ナデ調整である。外面底部と見込み部に回転ヘラミガキが施されている。見込み部に線刻が施されている。ニードル状の細い工具によって直交するように引かれているようである。また、内外面に赤色顔料痕が部分的に認められる。蓋である可能性もある。814は、土師器の椀である。埋土の上層からの出土である。底部は、ヘラ切り離し後ナデ調整でそれ以外は回転ナデ調整である。底部と体部の境界は丸みを帯びている。高台は直線的で細く長い。形態から後世のものと思われ、紛れこんだ可能性も否定できない。815は、底部は回転ヘラ切り離し後ナデ調整。その他は回転ナデ。体部は直線的。高台は断面形状は四角形で扁平である。816は、須恵器の蓋である。輪状のつまみをつけており、体部は口縁端部に向かって直線的で器高

は低い。端部は下へ少しつまみ出している。外面には自然釉がかかっている。817は、土師器の鉢である。器壁は厚い。底部から体部下半はナデ調整で、口縁部付近はヨコナデである。流れ込みか。818は、土師器の壺の口縁部である。器面は磨滅しており調整がわからない。端部には沈線状に溝を作り出している。古墳時代の所産で流れ込みであろう。6号溝は、かなり流れ込みや上位の層からの入り込み（もしくは切り合い）があっているが、基本的に8世紀後半期の範疇と考えられる。

#### 7号溝

7号溝は、平坦地区の7区で47号住居及び46号住居と切り合って検出された遺構である。これら住居よりは新しい遺構である。西側は現在の木葉川で削平を受け壊されている。47号住居や残存する長軸方向は12.5mである。溝の幅は約1.3mである。溝が延びる方向はほぼ東西であり、隣接する6号溝と軸方向はほぼ一致する。溝断面は逆台形の形状を呈して、底の部分は平坦な形状をしている。埋土中には、水が流れたようなラミナ構造は認められず、直径が5cm以下の円礫が多量に入ってやや混濁したような堆積状況である。自然に溝が埋積されたというより埋めもどされたような堆積状況であった。西側では末広になり、まだ終息せず延びていくような平面形状である。西側に行くにしたがって底が深くなっていく傾向があり、溝が利用されていた時期には、広く西側に広がっていたのかもしれない。埋土中には、多量に焼土や炭化物を含んでおり、焼土の大きさは5cm以内であるがやや固まって検出され



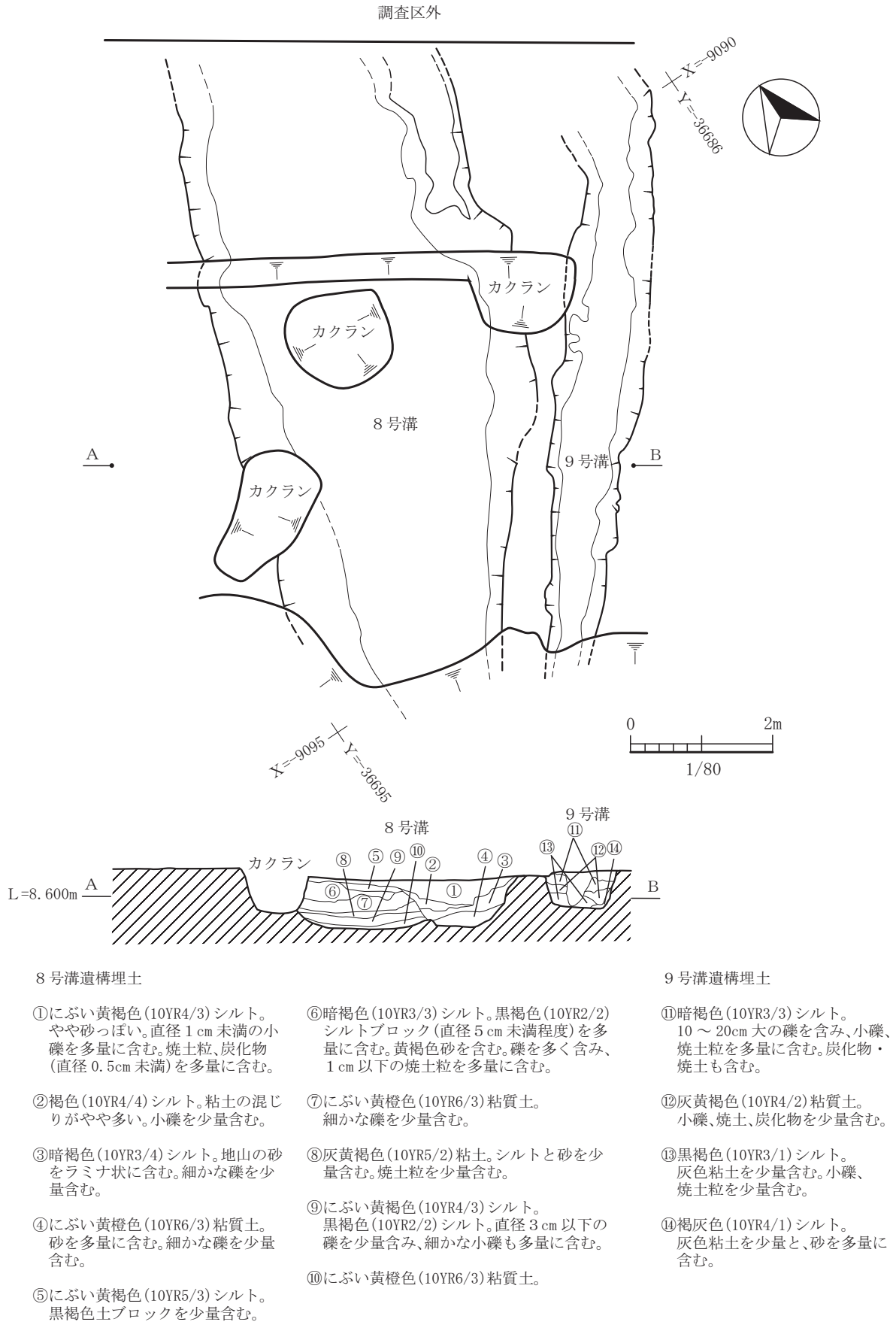


図-363 8号溝・9号溝平面図及び断面図 (縮尺1/80)

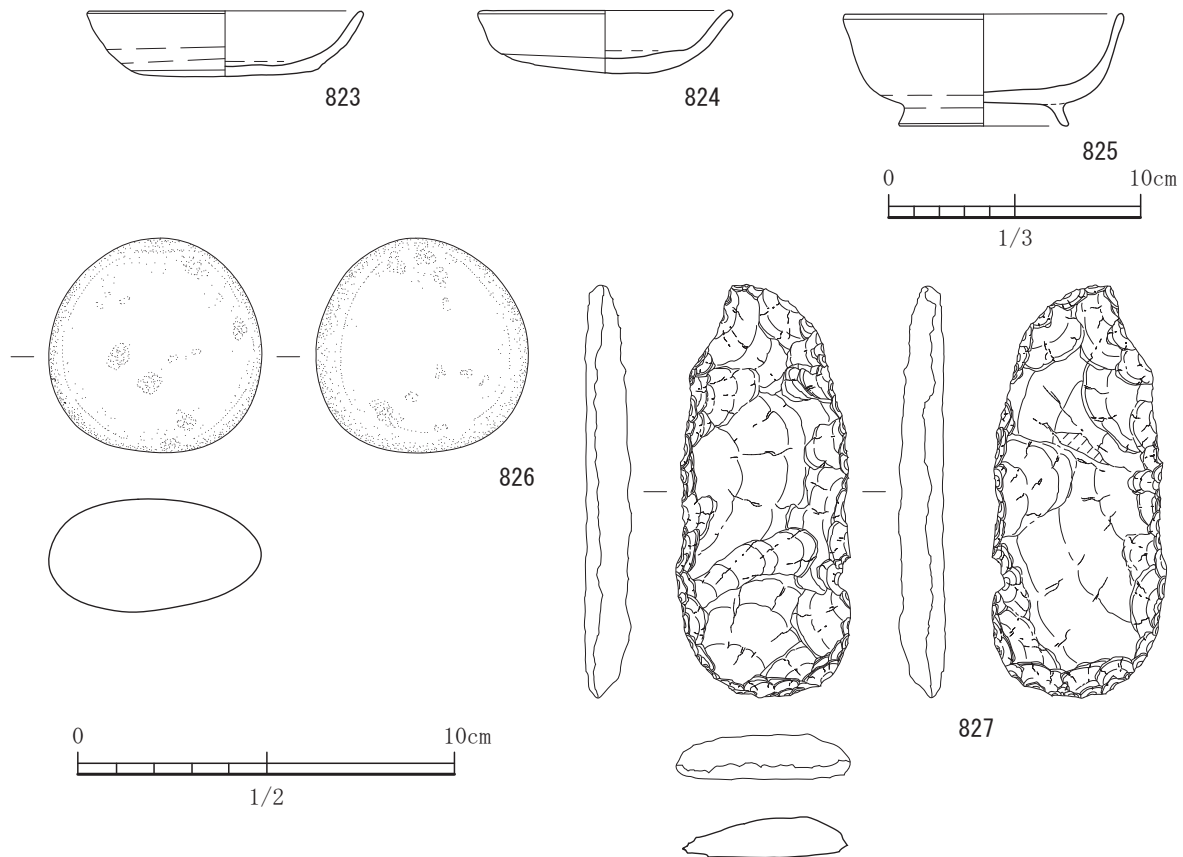


図-364 8号溝出土遺物実測図 (S=1/3, 826,827はS=1/2)

た。使用されていた時には、火を伴うような施設として利用されていたのではなかろうか。出土遺物は残存する埋土の割には少なかった。実測可能な土器は3点、鉄器が1点である。819は土師器の坏である。底部は丁寧なナデ調整を施し、他は回転ナデを施している。底部と体部は意識的に屈曲させている。口縁端部で窄まる。820は、須恵器の坏である。赤焼けしている。底部はヘラ切り離し後未調整でその他は回転ナデである。口縁部と体部の境で回転ヘラケズリを施してやや丸みを付けている。流れ込みかもしれない。821は、土師器の椀である。底部から口縁部にかけて丸みを帯び、高台は細く長い。底部と体部の境は丸みを作り出している。822は、鉄鏃と思われる。断面形状は方形である。基部のみである。有茎鏃で鏃端部は欠損している。7号溝は、10世紀前半期の所産と考えている。

### 8号溝

8号溝は、平坦地区の8区で単独で検出された遺構である。中央部はカクランによって上端が削平されている。南側は現在の木葉川によって削平を受け

完全に壊されて消失してしまっている。北側はゆるやかに傾斜しながら上がっていている。8区では検出された上端や下端が隣接する調査区である6区や2区では全く検出されなかった。古代では北側へ延びていたと思われるが後世に剥平を受け消失しているようである。残存する溝の長さは約8.4mで、幅が4.3mである。溝が延びる方向は、N21°Eの方位であり、東隣の9号溝とは平行して並ぶ。8号溝は、もともと検出した溝幅はあったものと思われるが、故意にいったん埋めもどされた後再度掘られた部分が認められた。もともとあった溝からは出土した土器はほとんどなかった。この埋めもどされた部分は、石器の出土等から前の時代の遺構の一部であるのかもしれない。埋土①と埋土⑤が別遺構の埋土境界とするならば、調査段階の掘削時には区別できなかった。出土した遺物は、実測可能な土器が3点、石器が2点である。823は、土師器の坏である。底部が回転ヘラ切り離し後ナデ調整、その他は回転ナデ調整である。824も土師器の坏で、底部が回転ヘラ切り離し後ナデ調整で、その他は回転ナデ調整で

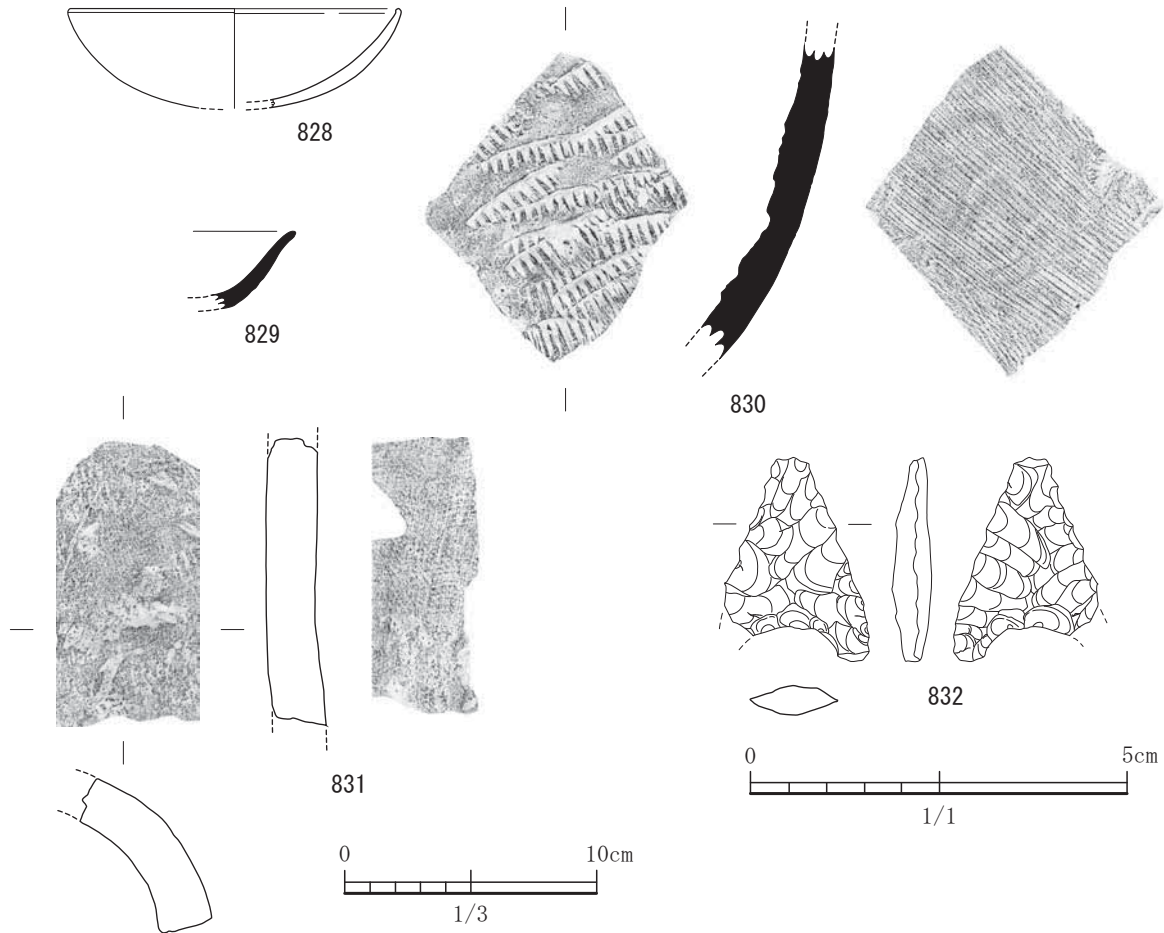


図-365 9号溝出土遺物実測図 (S=1/3, 832はS=1/1)

ある。底部と体部の境界はやや丸みを帯びる。825は、土師器の椀である。底部と体部の境界は丸みを帯びている。高台はやや細く底部のやや内側に取り付けてある。826は、磨石である。石材は輝石安山岩である。金峰山系の安山岩である。完形で敲打痕も認められる。827は、打製石斧である。石材は変ハンレイ岩である。ほぼ完形であり節理面が残る。刃部を各側面に作りあげている。おそらくこれら石器は流れ込み、もしくは8号溝以前の遺構埋土中からのものであろう。8号溝は、10世紀前半期ぐらいの時期であろうと考えている。

### 9号溝

9号溝は、8号溝とほぼ平行に延びる溝であり、南南西に向かって終息するような様相を呈する。また、北側においては国土座標-9090m付近で真北に向かって屈曲ぎみに延びていくような様相である。その後は剥平を受け不明である。この9号溝は、8号溝とは異なりほぼ真下に掘りこんで、底が平坦な

形状となっている。埋土も4層認められ、上位の層ほど焼土が多く含んでいる傾向を示す。残存する溝の長さは約7.1m、幅は約1.1mである。国土座標が-9090m付近より南側ではN40°Eの方向で直線的で、この-9090m付近で北へ向いて屈曲するが詳細な方向は不明である。出土遺物は残存する埋土の状況の割には少ない方である。828は、土師器の坏で、約1/4の残存度である。内外面ナデ調整で口縁端部で小さく上方へつまみ出している。おそらく古墳時代の所産であり流れ込みと考えられる。829は、須恵器の坏もしくは椀である。底部と体部の境界はやや丸みを持つようであるが詳細は不明。口縁端部付近でやや外反させている。焼成はやや不良である。830は、須恵器の甕か壺の胴部である。内面はタタキ調整で外面はハケ目調整である。831は、丸瓦の破片で凹面で布目痕、凸面で縄目痕が残る。布目瓦と称されるものである。他の用途に転用されたような痕跡はなかった。瓦は831の1点のみであった。

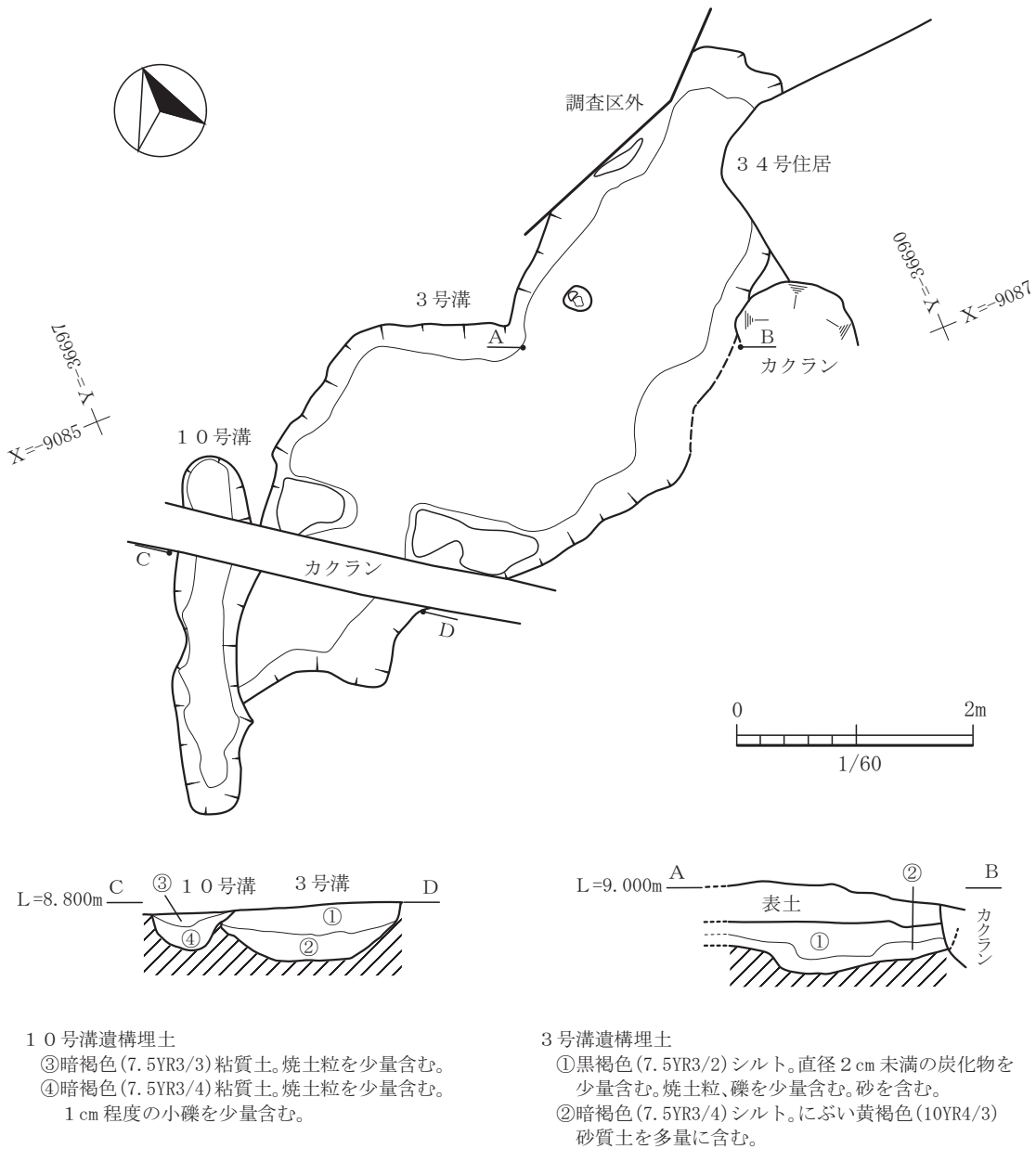


図-366 10号溝平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

9号溝の底に張り付くように出土した。832は打製石鏃で、石材は姫島産の黒曜石である。

埋土の⑫からの出土である。溝を埋積する時の流れ込みと考えられる。脚部は片方欠損している。9号溝は古代の所産であるが、詳細な時期は不明である。

### 10号溝

10号溝は、平坦地区の8区で弥生中期後半期の3号溝と切り合って検出された遺構である。10号溝は小規模のものであり、溝というより土坑といってもよい程度のものである。古代の土坑の軸方向とほぼ一致することから溝ではなく土坑である可能性

も否定できない。東西方向の壁の立ち上がりが急で、南北方向は緩やかであることから南北に伸びていくものと調査時に判断し溝としている。平面形状は南北方向に長い隅丸の長方形プランである。長軸は3.04m、短軸は0.64mであり、長軸方向の方位はN23°Eの方向である。出土遺物は磨滅した弥生土器と土師器片が出土している。弥生土器の磨滅は激しく動いているのは明らかで流れ込みと考えられる。古代の所産であろうが土師器片のみで、詳細な時期を決めることはできない。

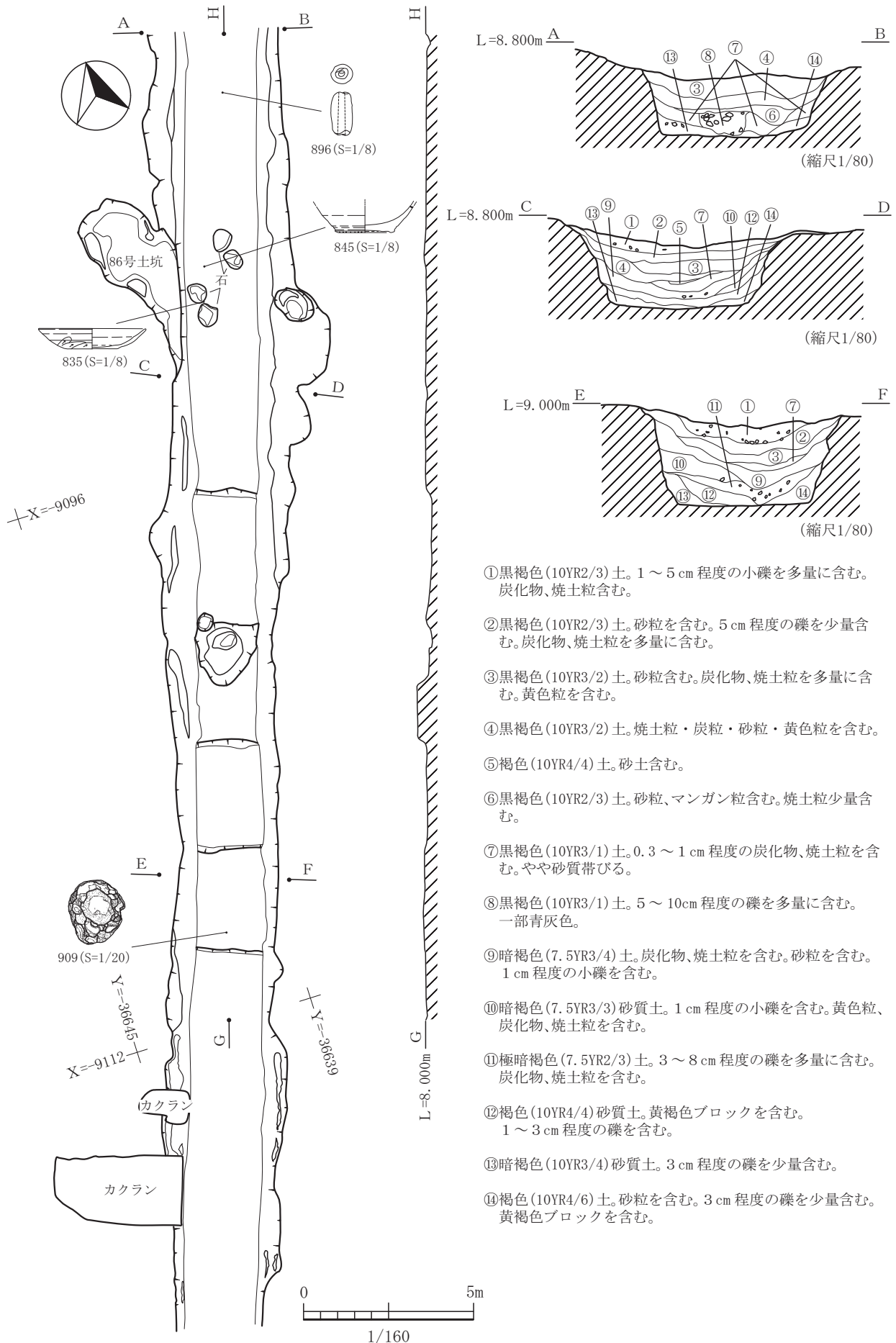


図-367 11号溝平面図及び断面図 (縮尺1/160)



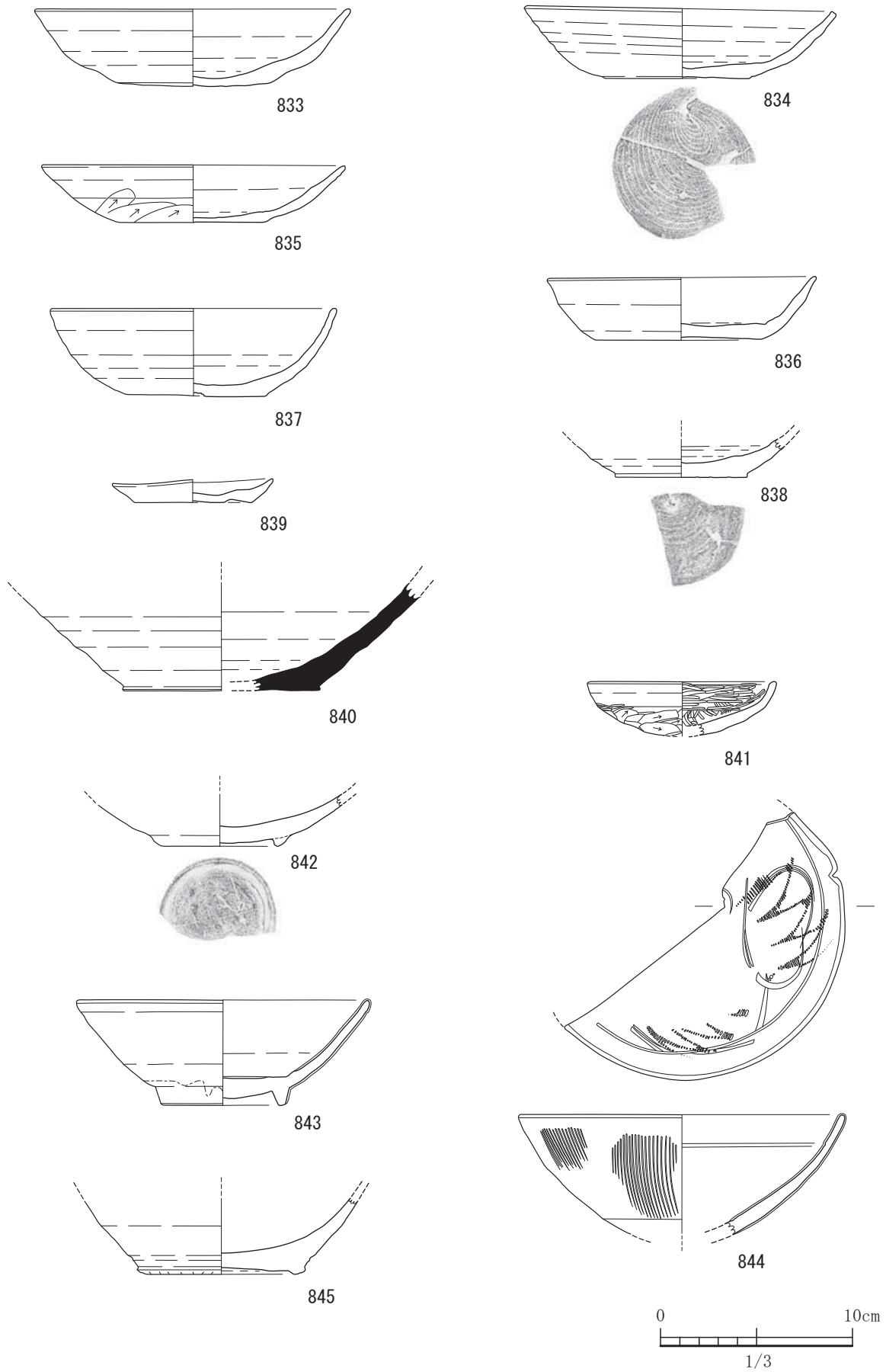


図-368 11号溝出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

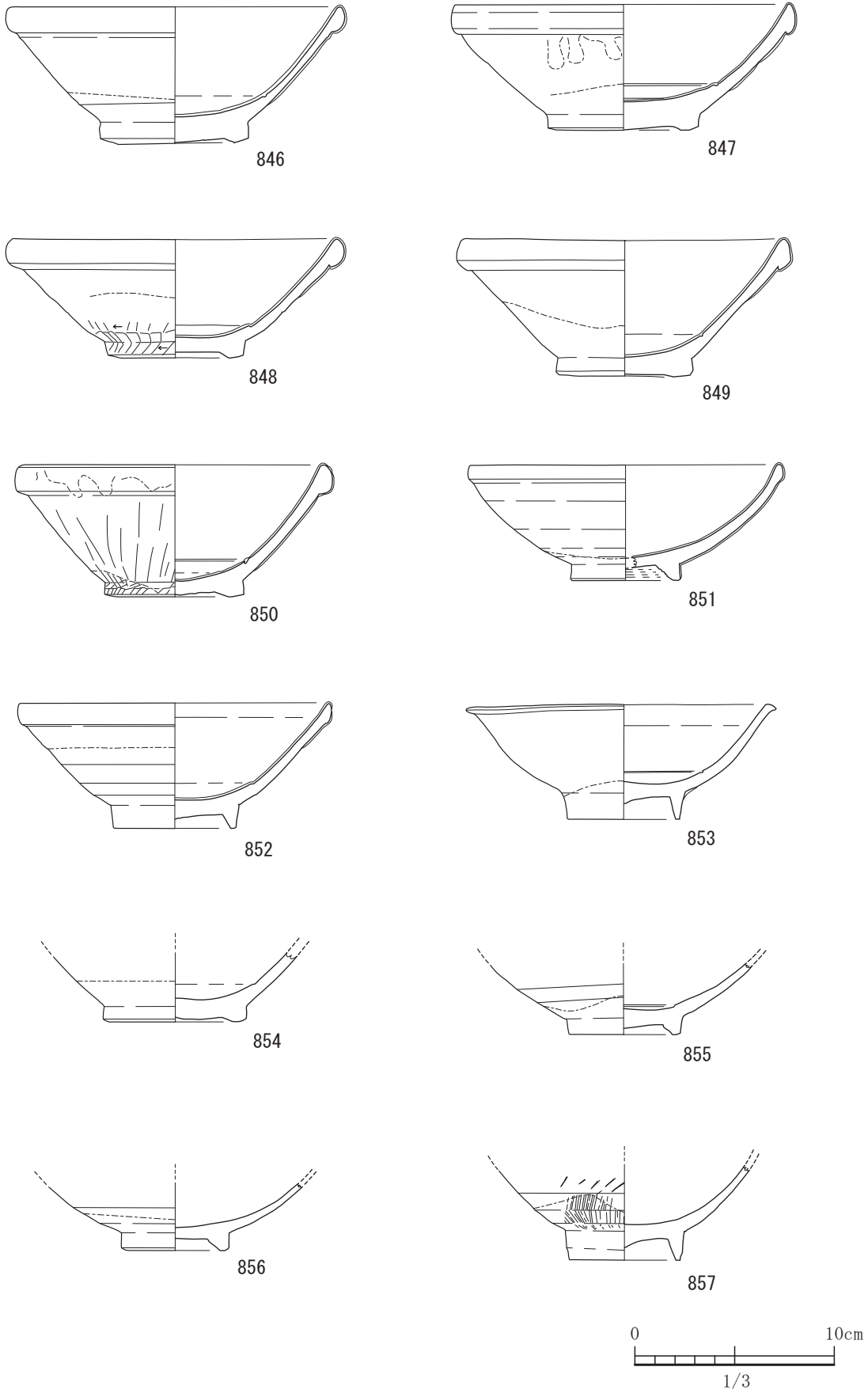


図-369 11号溝出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

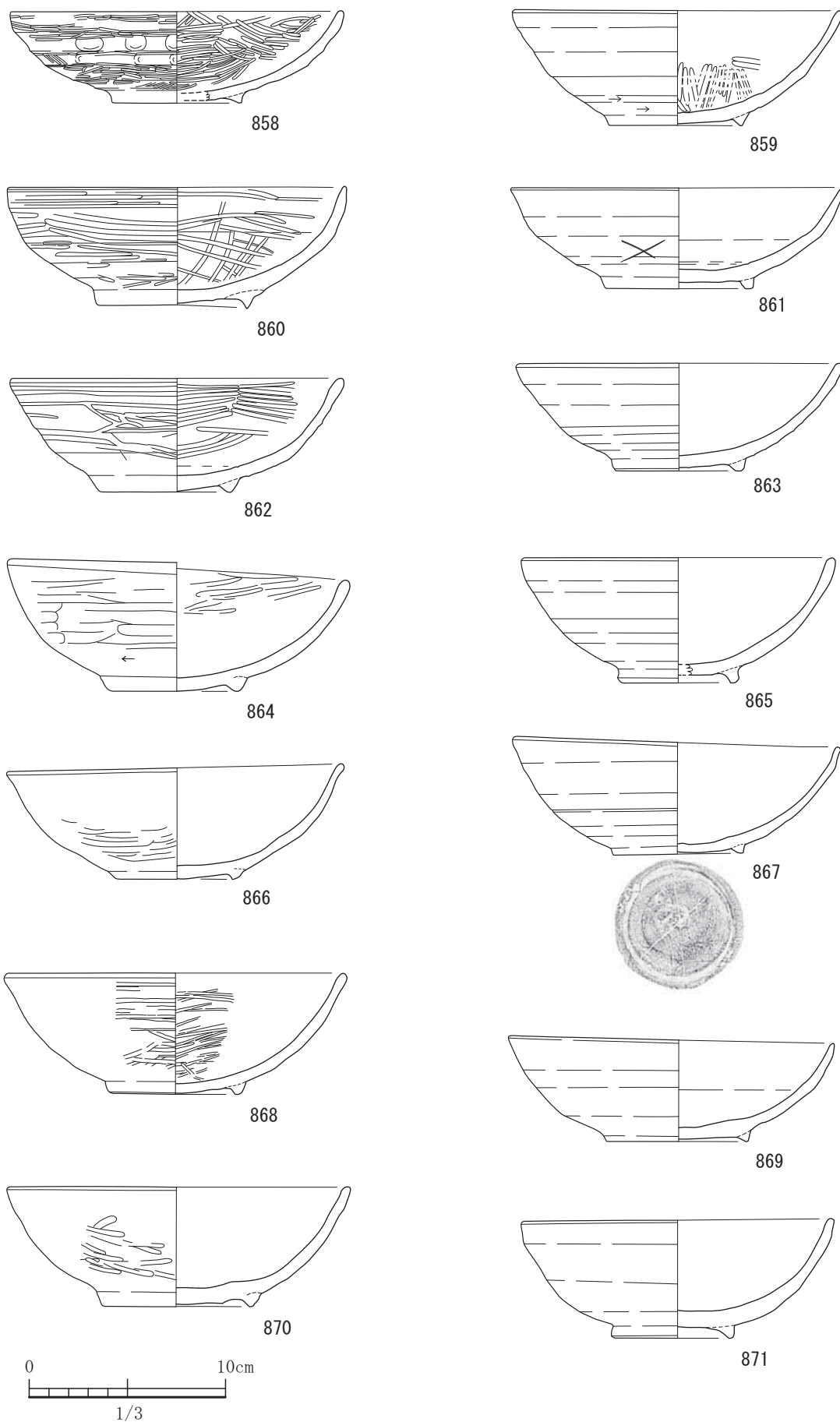


図-370 11号溝出土遺物実測図 3 (すべてS=1/3)

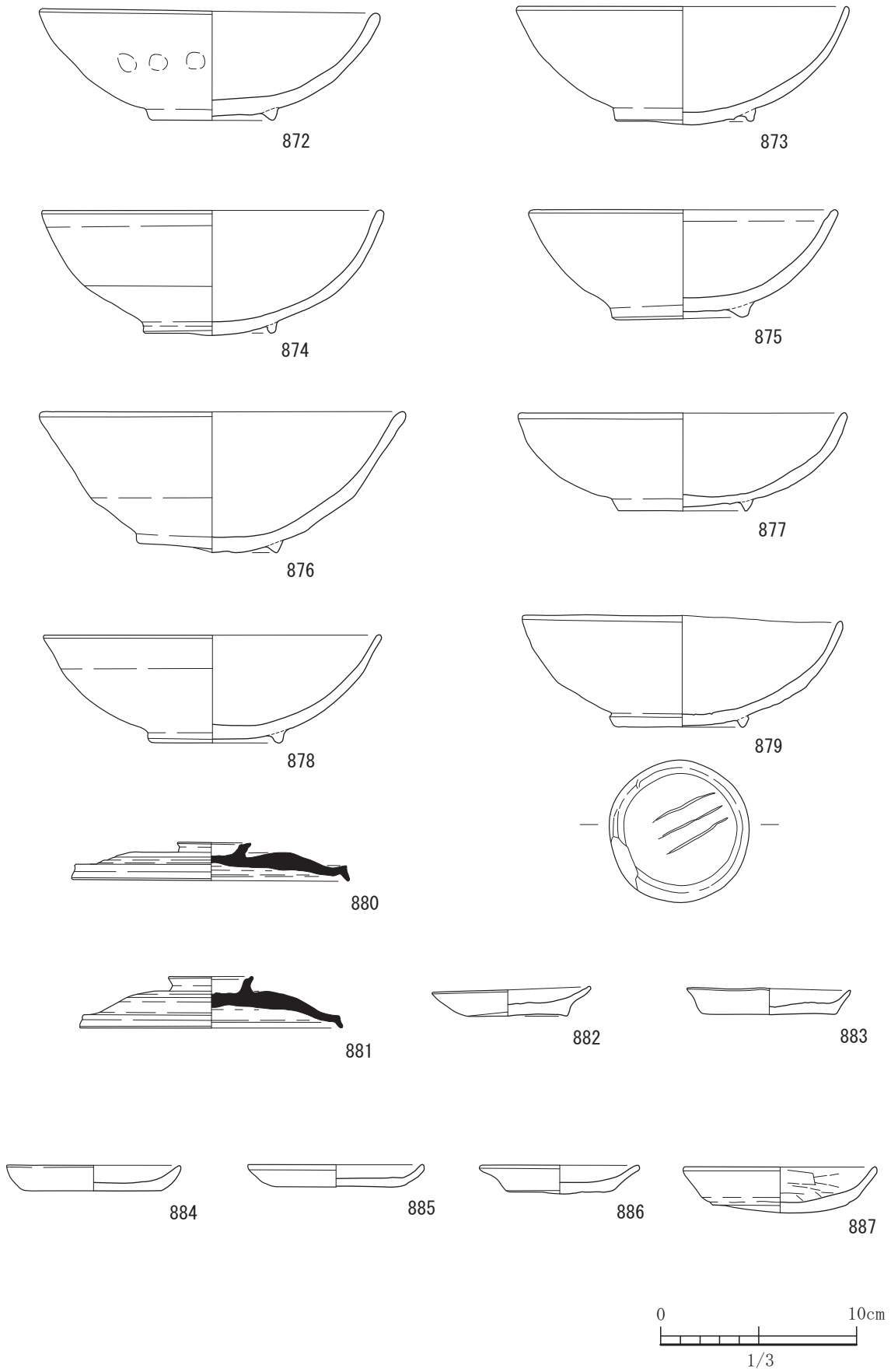


図-371 11号溝出土遺物実測図 4 (すべてS=1/3)

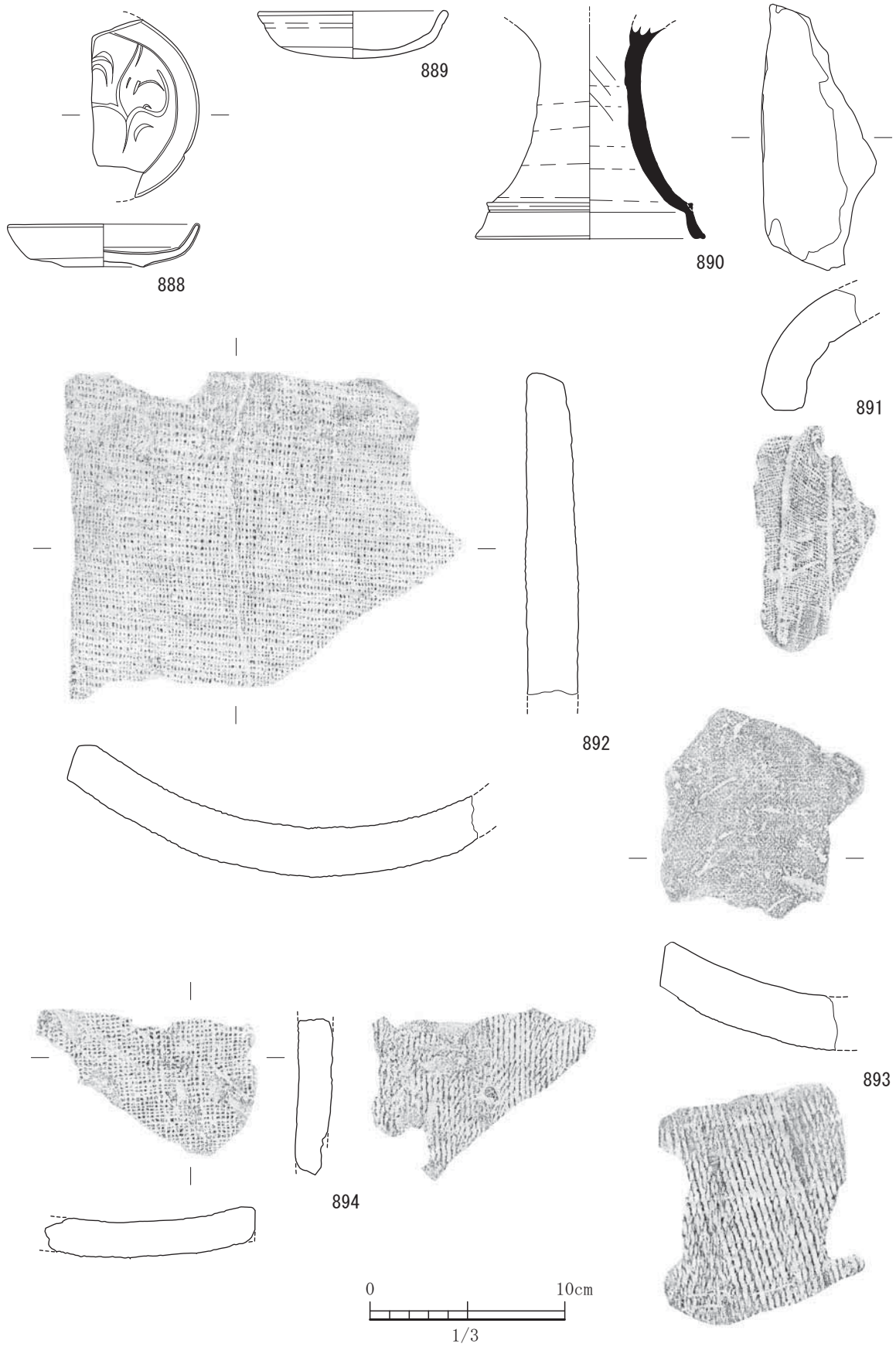


図-372 11号溝出土遺物実測図 5 (すべてS=1/3)



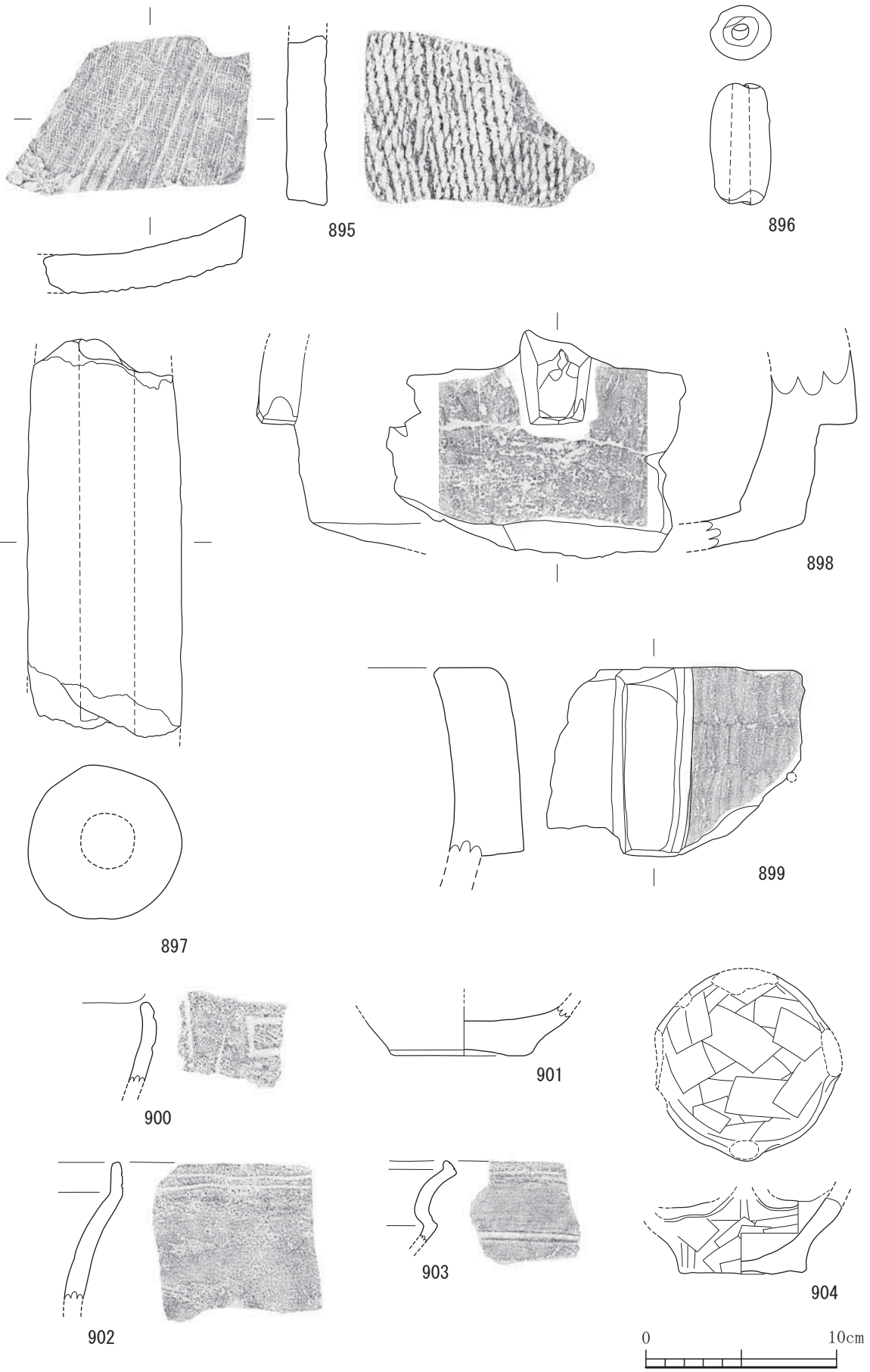


図-373 11号溝出土遺物実測図 6 (すべてS=1/3)

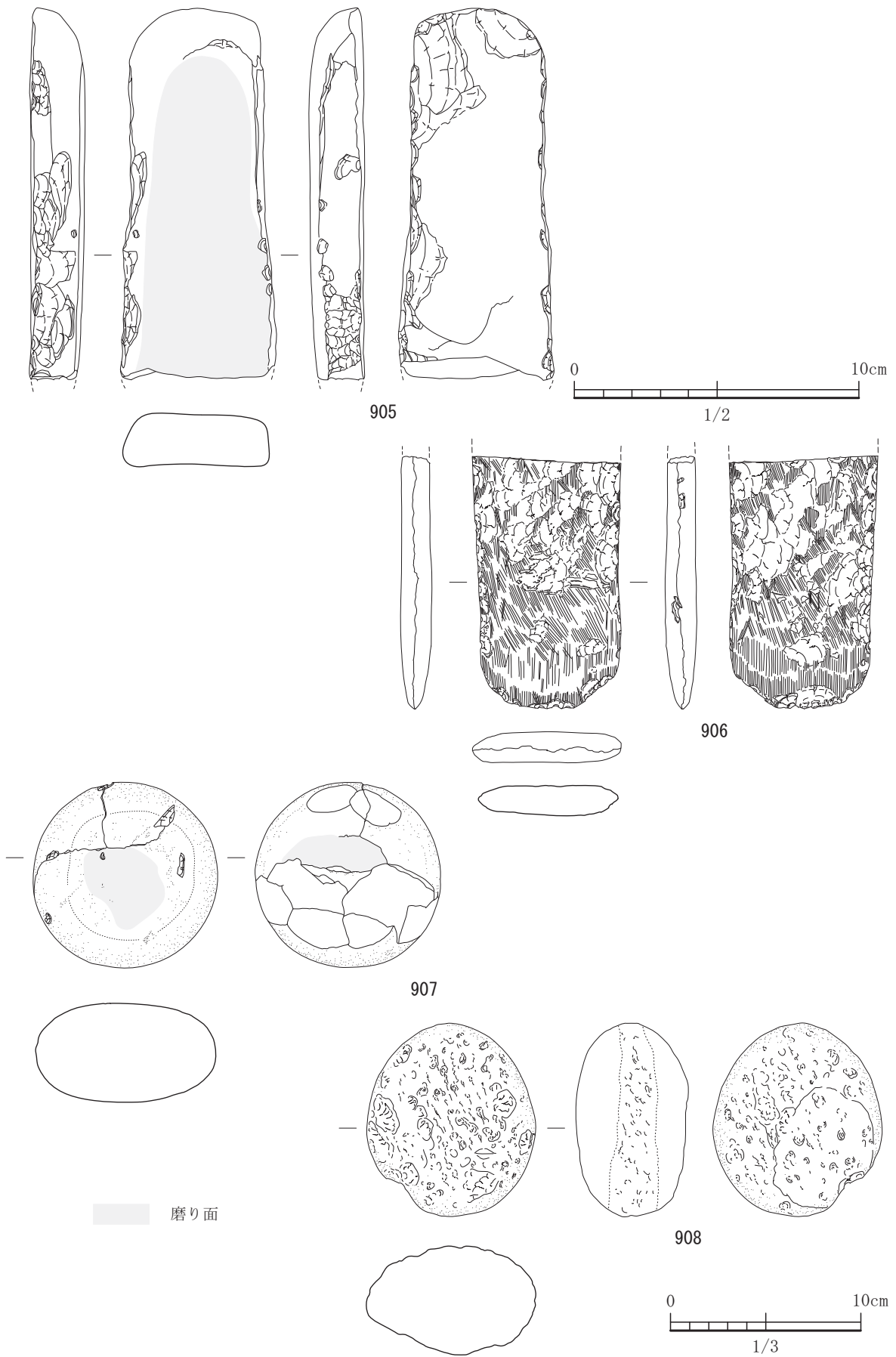


図-374 11号溝出土遺物実測図 7 (S=1/3, 905はS=1/2)

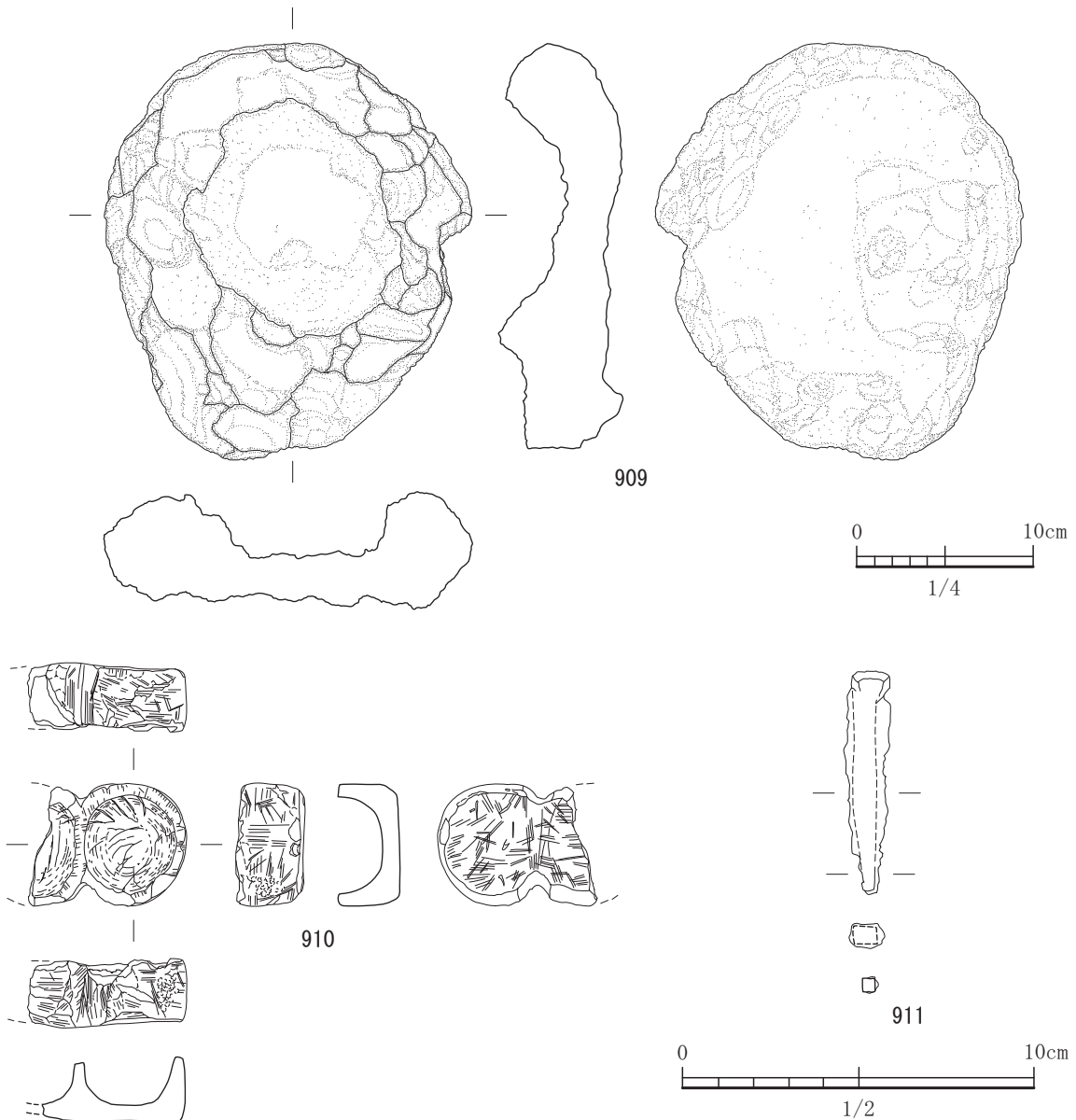


図-375 11号溝出土遺物実測図 8 (S=1/2, 909はS=1/4)

11号溝

11号溝は、平坦地区の2区と8区にまたがって検出された遺構である。85号土坑及び86号土坑と切り合っているが、これら土坑よりは新しい遺構である。残存する溝の長さは40.9m、溝の幅は3.0mである。この溝は、本遺跡が分布する舌状台地の東側の崖に平行して構築されている。崖に沿っているのであれば100mはありそうである。この台地の西側にはこのような溝は検出されておらずこの東側のみである。東側方向にあるのは、他の遺跡との関連性があるのかもしれない。11号溝の形成時期と周辺の遺跡との関連性を考察するにも今のところ合致するものがない状態である。今後の周辺の遺跡

の調査の成果が待たれる。さて、11号溝の構造であるが、断面形状ではU字状で検出面から溝の底までの深さは約2.9mにも及ぶ。一端溝に落ちれば簡単には這いあがれないような深さである。溝の底は完全に平坦な形状ではなく、意識的に段差を付けて構築している。しかし基本的に高低差はない。埋土の特徴であるが下層ほど礫を多く含み、中間層付近でやや水が流れた時に形成されるラミナ構造や水によって褐鉄鉱が抄出する際に附随して抄出するマンガンが認められ一時的ではあろうが水がたまった痕跡が残っている。流路方向は台地の落ちの方向である北向きである。この溝の構造物で特徴的であるのが11号溝の北側に見られる円礫である。円礫があ

る同水準の地層には含まれないものであり、他の場所から持ってこなければありえないものである。何かの施設を設けるため置いたものであろうが、周辺状況や出土遺物からは特定するまでには至らなかった。切り合っている86号土坑が真横にあることや2個の円礫がセットになって2対あることから上に載る構造物があった可能性が高いと考えられる。周辺から木質の部材等は出土していない。この遺構からの出土遺物は豊富である。埋土は上層(①②③)、中層(④⑤⑥⑦⑧⑨⑩)、下層(⑪⑫⑬)として暫定的に分けることとする。834、838は上層からの出土で底部に糸切り痕が見られる。835と836は下層からの出土で底部はヘラ切り離し後ナデ調整である。842にはヘラ記号を施してある。843は青磁碗である。844は、青磁碗で外面に櫛目文、内面に櫛点描文を施す。845は下層から出土し、越州窯青磁碗で削り出しの蛇の目高台である。平安時代末期であろう。847は上層からの出土の白磁碗である。玉縁直下から底部にかけ回転ヘラケズリ痕を残し器肉が厚く、高台内部のえぐりが小さい。11世紀後半から12世紀前半であろう。849は白磁の碗で高台の削り出しが小さい。851と852は下層からの出土である。11世紀後半から12世紀前半期であろう。853は白磁碗であり高台は高く直立する。口縁端部は水平にし外方に嘴状に反る。

858から879まで瓦器質碗である。上層から出土したものは858、859、860、862、865である。丁寧なミガキを施したものがほとんどである。下層より出土したものは、864、870、872のみであり、高台の断面形状が三角形を呈するものが多く、上層から出土した断面形状が三角形のものよりやや大きめであるという特徴を有する。他のものは全て中層である。861には体部下半に、867では底部に×状のヘラ記号が施されている。868には底部にヘラ記号を施す。871から879まで底部はヘラ切り離し後ナデ調整、その他は回転ナデ調整を施す。879は、底部に3本の平行に引かれたヘラ記号が認められる。880と881は下層から出土した須恵器の蓋である。天井部の回転ヘラケズリは丁寧で、他は回転ナデである。輪状つまみをもつ。口縁端部は小さく下につまみ出す。器高は低い。8世紀後半の所産であろうか。882から885まで土師器の皿で底部は回転ヘラ切り離しである。885の底部は板状圧痕が見受けられる。上層か

らの出土である。887は須恵器系土師皿である。底部は糸切り離しであり、板状圧痕が見られる。888は、青磁の皿である。内面の底部と体部との境界に沈線を施す。889は、瓦器質の皿である。底部は回転ヘラ切り離し後ナデ調整である。890は、須恵器の高坏である。下層より出土している。裾部で屈曲させ屈曲部には段を作りあげている。891から895まで瓦である。891は丸瓦で凹面に布目、892と895は平瓦で凹面が布目で凸面が縄目のタタキである。896は土錘である。孔の直径は1.0cmを測る。897は羽口であり、直径は8.1cmを測る。鍛冶用の鞆ではなかろうか。898と899は滑石製の石鍋である。把手はともに縦につく。898にはススが外面に付着している。899の外面には貫通していない孔が認められる。900から904まで縄文土器である。904は下層、それ以外は上層からの出土で流れ込みである。904は坏形土器で4箇所山形突起がつけられている。辛川式であろう。905と906は磨製石斧でともに中層からの出土である。流れ込みによるものである。907と908は磨り石である。これらも流れ込みであろう。909は軽石製の石鉢である。下層からの出土である。床面から張り付くように出土。910は中層からの出土した滑石製の連盃である。片側が欠損している。911は上層から出土した釘と思われる。断面形状は方形である。ほぼ完形である。釘頭の部分が確認できるが錆膨れが激しく詳細はよくわからない。11号溝は下層に8世紀後半の須恵器や縄文土器等を包含するが、圧倒的に白磁、青磁及び瓦器質土器の出土量が多い。一部の古い時代の遺物は溝が埋積されたときの流れ込みであると考えられ、下層の出土遺物の産出状況から11世紀後半から12世紀前半の間で11号溝は使用されながら徐々に埋積されていったのではないかと考えられる。

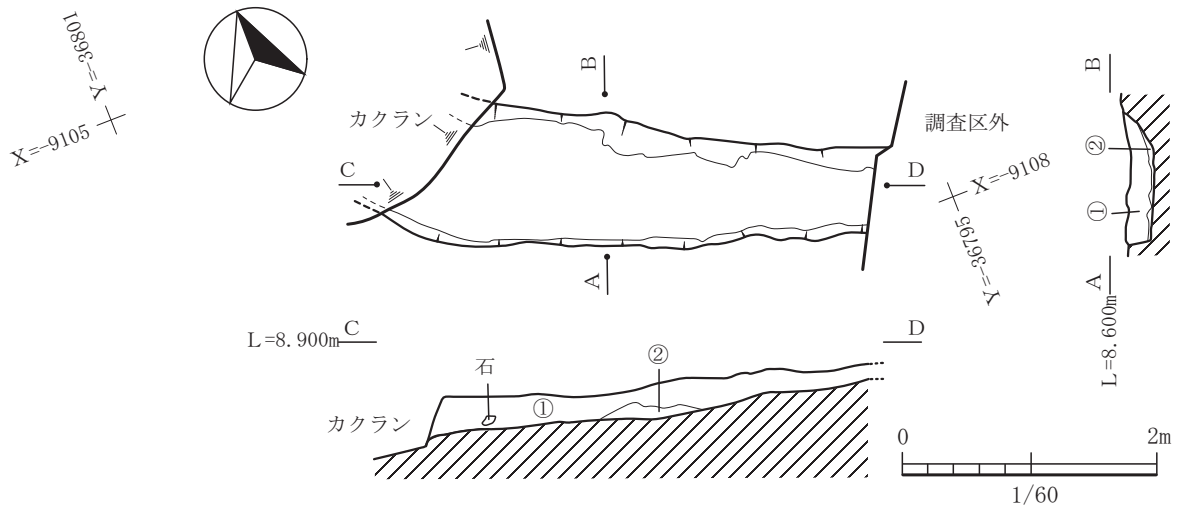
#### 平坦地区5区の概要

平坦地区の5区は、今まで述べてきた1、2、6、7、8区とは(現)木葉川を挟んで左岸側に所在する調査区である。本調査区は、湿地区の4区と隣接する調査区である。表土を掘削直後の露出する地層は、ほとんどの部分で2b層で、部分的に2a層が残存するような産出状況であった。包含層である2a層からはローリングを受け磨滅している須恵器や磁器が認められたが、接合でき実測ができるよう



図-376 北の崎遺跡平坦地区（5区）古代遺構配置図





- ①褐色(10YR4/6)粘質土。基本土層2 b層中に、基本土層(5層)の粘質土が、パッチ状に混在し、全体的には褐色を呈す。直径5mm程度の片岩の風化物がごく少量点在。1mm程度の焼土ブロックがごく少量点在。
- ②暗褐色(10YR3/3)粘質土。基本土層の6 b層に近い色を呈するが、粘質が弱い。黒みが強いのは、マンガンが沈着した為であり、水がややたまりやすい状態であったようである。

図-377 12号溝平面図及び断面図 (縮尺1/60)

なものが1点もなかった。相当遺物自体が動いているようである。2 b層からは土師器や弥生土器の破片が数点出土した。ともに接合さえできないローリングを受けたものであった。最終的に検出した遺構は、2条の溝のみであった。尚、時代は土師器や須恵器の細片のみの出土であったため詳細な時期決定はできなかった。古代であろうと考えられるが、細片が後世の流れ込みであることも考えられ、古代以降の遺構である可能性も否定できない。この調査区には、灰石(阿蘇溶結凝灰岩)の石切り場も検出された。調査区の北側237.5㎡は石が切り出されていた。この石切り場がいつまで稼働していたのか地域住民への聞き取り調査を行ったところ、近所にお住まいの渡辺氏によると昭和9年(1934年)まで石を切り出していたとのことである。

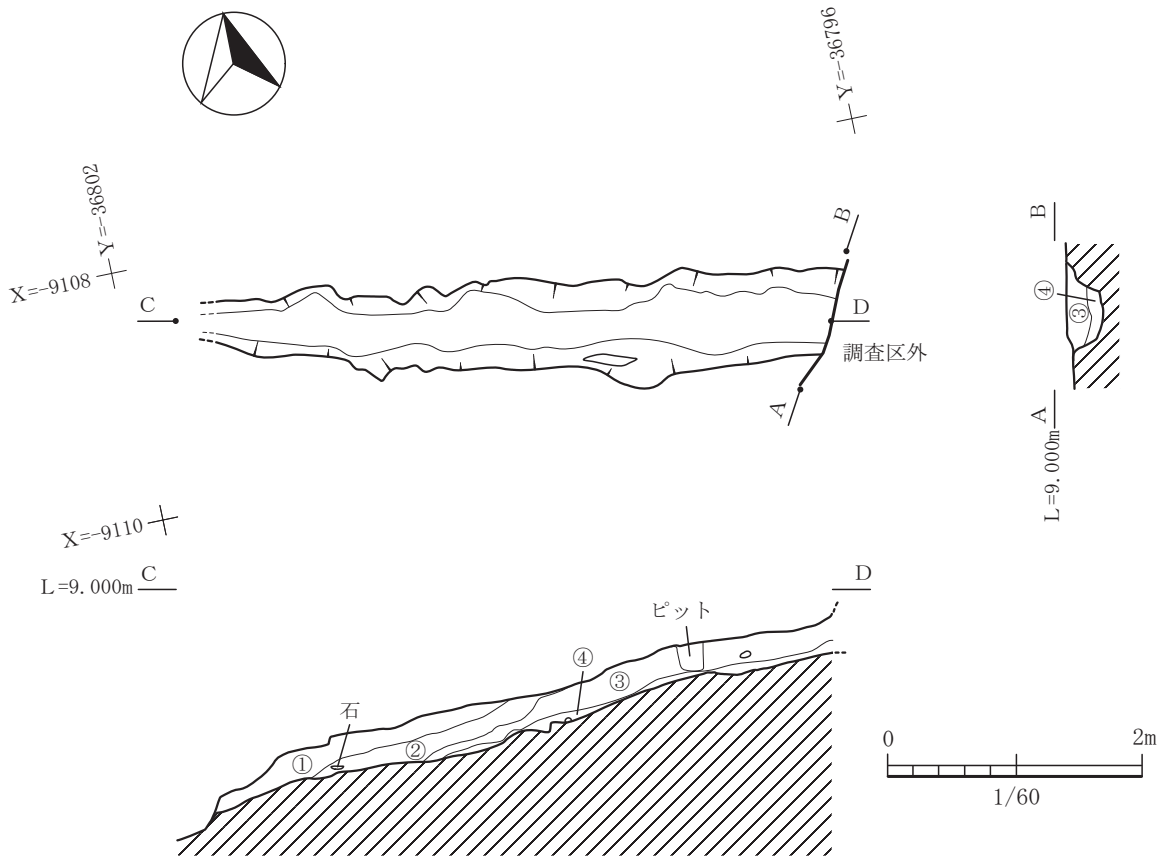
### 12号溝

12号溝は、平坦地区の5区で単独で検出された遺構である。残存する溝の長さは約3.75mで、東西に延びる遺構である。東側の幅は約0.67mで西側が約1.14mである。また、溝の流路方向はN64°Wである。西側に傾斜しており若干末広の形状をなす。西側の端部はカクランによって削平を受けている。その先には比高差約1.2mの台地の縁の崖となっており、その崖の壁が抉れている。この部分に溝が機能して

いた時期には流れていたようである。埋土は2層あり、下層である埋土②にはマンガンは認められ常時ではなかったにせよ水が流れていたものと考えられる。出土遺物はほとんどなく、土師器と須恵器の細片のみである。これらの遺物と溝を埋積した土の母材が2 b層であることから古代と考えているが、流れ込みの遺物と考えるならばもっと新しい時期のものとなる。詳細不明。

### 13号溝

13号溝は、同じく平坦地区の5区で単独で検出された遺構である。残存する溝の長さは5.03m、溝の幅は0.71mであり、12号溝と異なり先細りする。傾斜角度も8°であった12号溝と比べ15°の傾斜角度となりやや急傾斜となる。西側の溝端部は崖を下った平坦面に達している。埋土については、12号溝のようなマンガンが沈着する層も形成しておらず小さな円礫を比較的多く含むことから常時水が流れていたとは考えづらい。雨水の排水用として使用した溝ではなかろうか。埋土中から土師器片が出土しているが実測ができる程度には復元できない細片である。軸方向が12号溝と似ていることや土師器の細片が出ており、埋土が古代の遺物包含層である2 a層で構成されていることから古代から中世の遺構としているが、時代が若くなることも否定できない。



- ①暗褐色(7.5YR3/3)粘質土。
- ②黒褐色(7.5YR3/2)シルト。1 cm 未満の小礫を多量に含み、5 cm 未満の礫を少量含む。
- ③暗褐色(7.5YR3/3)シルト。1 cm 未満の小礫を少量含む。炭化物を少量含む。
- ④褐色(7.5YR4/4)粘質土。1～5 cm の礫を含む。

図-378 13号溝平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

(5) 三池往還

本遺跡には、県道302号線が平坦地区の南側を木葉川に沿うように延びている。今回の木葉川の拡幅工事を行い移設されるため、現道である県道302号線も発掘調査を行うこととなった。そこで県道302号線にとまなうアスファルトや路盤工事の碎石等を除去し表土を掘削したところ、県道302号線のセンターライン下付近から輝石安山岩や溶結凝灰岩の石によって構築された側溝が検出された。その側溝の石組みも北側の列は壊されてしまっていて半分近くしか残存していなかったが、南側の列は部分的に欠損していたものの多くは残存していた。道路の対面に石組みの側溝があったかは木葉川の河川工事で消失しているので不明である。側溝の幅は約30～35

cmであり、石組みに使用した石の大きさは、横が約60cm、奥行き約35cmまでの大きさのもので組まれていた。その大きさはまちまちである。当初は、金峰山系の輝石安山岩によりつくられていたが、その後の改修等で使用されたものの中には阿蘇溶結凝灰岩が使用されていた。また、道路はかなりきつくしまっており、土の中には石灰岩の小さい礫が敷かれていたようである。側溝内の遺物としては、時期が決定できる遺物として「日支事変救護記念」銘の湯呑と「歩十三記念 鈴木」銘の盃が出土している。よって1937年(昭和12年)まではこの位置に道路があったようである。この湯呑と盃については、附論において藤崎が論じているので詳細については参照いただきたい。



図-379 北の崎遺跡平坦地区近世以降の遺構配置図

(6) 平坦地区の遺物包含層から出土した遺物

平坦地区とは、調査1区・2区・5区・6区・7区・8区をさす。今回調査をするにあたり、調査に入る前には、2b層と3層で遺構検出することとしていた。しかしながら、表土を剥いだ段階で2a層の包含層を掘削し、2b層で遺構検出を試みるも全く遺構が検出できなかつた。そこで、3層で遺構検出することとなったが、その検出できなかつた理由も各層に含まれる遺物の個体数を見ると明らかである。

ただし、今回示した個体数とは、接合でき、実測が可能な状態に復元できた遺物の数のことをいう。

まず、第1包含層である2a層では、古代の遺物が79%をしめ、縄文、弥生、古墳、鎌倉時代の遺物が10点未満で少数ずつ含まれる。これらは、下位の層から、もしくは流れ込みによってもたらされたものが主であろうから、第1包含層は古代に形成されたものであろう。

一方、第2包含層であるが、特異的な出土の仕方を示す。もっとも数量が多いのは縄文土器の72点である。次いで弥生土器と古墳時代の土師器がほぼ同数の個体数である。古代になると出土数が減り、15点程度となる。縄文土器については、実測図を見て頂いてもわかるように、口縁部の一部でも実測・拓本作成が可能であれば1点と数えているので、多少過大評価にあたると思われる、縄文・弥生・古墳時代の遺物がほぼ拮抗して出土する傾向を示す。何故このような出土の仕方をするのか考察を加えておく。

まず、第2包含層（2b層）は、縄文時代から古墳時代までの人々が生活した痕跡を残した層である

ことは間違いのないであろう。一番最初に生活していた縄文後・晩期に生活痕跡を残し、弥生時代そして古墳時代とそれぞれの時代の土地利用がなされ古い時代の遺物や遺構をカクランしながら層が形成されたためにこのように混在しながら出土しているものである。そのためにそれぞれの破片が接近した位置にあり、接合できる遺物が多いのではないと思われる。当然ながら、弥生時代や古墳時代に一部2b層の削平を受けている可能性がある。

そこで、今回この調査報告では、包含層中からも、実測可能な遺物が多量に出土したために、その多くを掲載することとした。

なお、土器については、縄文時代では後・晩期、弥生時代では中期後半期、古墳時代では前期、古代では8世紀後半から10世紀前半までを中心に出土しているようである。ほぼ、遺構の時代と一致している。

土器の型式の分類は、第2分冊の総括に記しているので、そこを参考にしていただきたい。また、遺物の特徴や法量については、巻末の出土遺物観察表に全て記載しているので、参照していただきたい。

平坦地区第3包含層（3層）出土遺物

912は、縄文後期中葉の北久根山式で口縁部の施文帯には短斜線文の粘土紐が貼付されている。913から920まで縄文後期の辛川式である。913はおそらく波状口縁で貝殻による文様が施されている。914は口縁部に磨消縄文が施され山形突起の下に凹点文がある。916には斜線文が施されている。917は貝殻擬縄痕を施す。918、919及び920は同一個体と思

表一 2 平坦地区遺物包含層から出土した土器の個体数

時代 層位	縄文時代 (後期・晩期)	弥生時代 (中期後半)	古墳時代 (前期)	古代 (奈良・平安)	中世 (鎌倉)
平坦地区 第3包含層 (3層)	13	9	0	0	0
平坦地区 第2包含層 (2b層)	72	57	55	15	0
平坦地区 第1包含層 (2a層)	4	4	5	81	8

\* 数値は形状がわかる程度に接合できた個体数



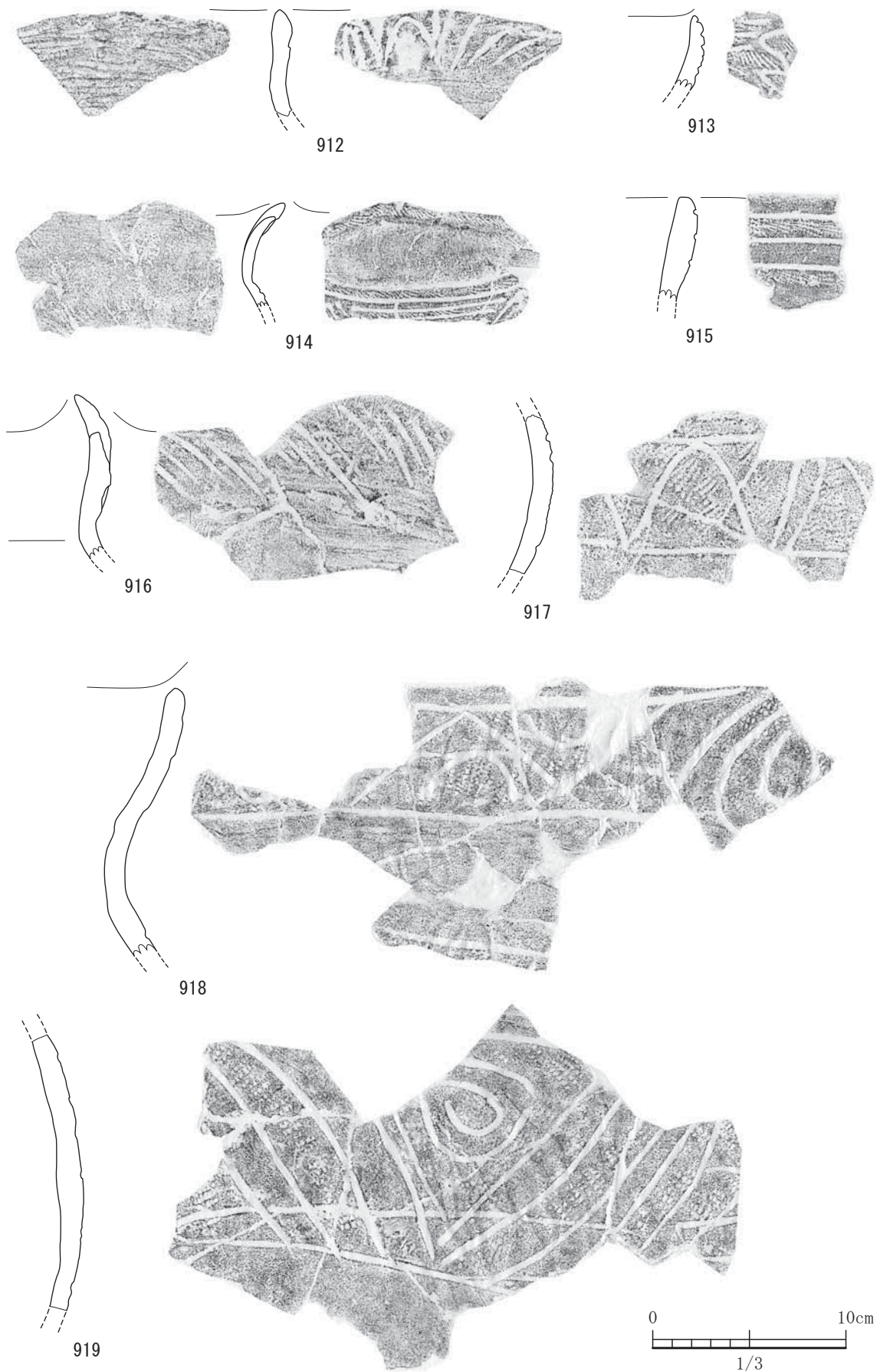


図-380 平坦地区第3包含層(3層)出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)



われるが接点はない。ともに貝殻擬縄痕が見られる。921は北久根山式の皿形土器の一部と思われる。口縁端部には貝殻擬縄文が見られる。922から924まで縄文晩期の土器である。922はミガキが粗く条痕が残る。屈折部が弱くなり角度も緩やかで口唇端部には平坦な面が残されている。天城式であろう。923は古閑式の椀形土器で手捏ね状でやや粗雑である。山形突起は2箇所に設けている。924は組織痕土器である。925から932までは弥生土器である。925は、丹塗り土器の高坏である。平縁であり端部はやや垂れ下がる。弥生中期後半期の須玖Ⅱ式である。926は丹塗り土器の高坏で平縁である。端部は丸くおさめている。927も丹塗り土器である。高坏の脚部である。928は壺形土器である。丹塗り土器で口縁部外面に暗文が施されている。929は壺形土器で口縁部外面に暗文が施されている。930は、壺形土器であろう。平縁であるが内側への細い突起にはなっていない。外面には暗文が見られる。端部は丸くおさめられている。931は壺形土器の胴部である。2条の突帯文をめぐらせ肩にある突帯文から鉤の手突帯文を施している。何箇所施したかは不明。弥生後期前半期の所産ではなかろうか。932は器台である。裾部の端部には沈線をめぐらしている。933はおそらく弥生後期前半期の器台の一部と思われる。貼り付け突帯を2条めぐらしている。934から957までは石器である。934は礫器である。礫皮面が残り全体的に被熱を受けて赤色化している。石材は金峰山系の輝石安山岩である。935は剥片石器である。石匙の形状を呈する。石材は西北九州産の漆黒色系の黒曜石である。936及び937は、スクレイパーである。石材は936が漆黒色系黒曜石である。937は無斑晶安山岩である。938から941までは打製石鏃である。938は平面形状が三角形の凹基無茎鏃であり、石材は、西北九州産の漆黒色黒曜石である。表面に大きく素材面を残している。939は、平面形状が三角形の凹基無茎鏃である。完形で、側縁部は微細な調整を施し鋸状となっている。石材は西北九州産の黒曜石である。940は、凹基無茎鏃で表裏両面に素材面を残し、つくりは粗い。石材は無斑晶安山岩である。サヌカイトに似ている。941は、平面形状が三角形の凹基無茎鏃である。片方の脚部が欠損している。表裏両面に大きく素材面を残し、つくりは粗い。942は剥片石器である。石材は西北九州産の漆黒色

黒曜石である。943は平面形状が三角形の磨製石鏃である。平基無茎鏃である。基端を欠損するがほぼ完形である。石材は緑泥片岩である。おそらく木葉山で産する緑泥片岩ではなかろうか。丁寧磨きが施されている。944は石材がサヌカイト製の剥片石器で主要剥離面が残る。打面に礫皮面が残る。945は石材が黒曜石の剥片石器である。946と947は二次加工剥片石器である。石材は946が無斑晶安山岩で、947はサヌカイトである。948から951までは打製石斧である。948の石材は緑泥片岩で木葉山産であろう。挟りがある。949は変ハンレイ岩製で節理面を残し、つぶれ痕がある。変ハンレイ岩は山鹿周辺に産するものであろう。950は、石材が泥質片岩であり、一部欠損している。951は、石材は結晶片岩である。結晶片岩も木葉山周辺で産するものである。952と953は石包丁である。両端は折れて欠損している。石材は安山岩であるが有色鉱物がよくわからず産地は不明。953は平面形状が三角形の古ての石包丁である。弥生前期のものか。石材は安山岩で産地は不明。刃部は丁寧に研磨されている。954は磨製石斧で刃部は磨滅している。石材は蛇紋岩製で和木町で産するものであろう。裏面ではほぼ全面に研磨痕が見られる。955と956は磨石である。955の石材は輝石安山岩製で金峰山系である。956は、敲打痕が見られる敲石としても使われていたようである。石材は金峰山系の輝石安山岩である。957は砥石である。石材はリソイダイト（俗に天草陶石）である。産地は八代か天草であろう。958は鉄鏃である。断面形状は四角形である。上層もしくは遺構から入り込んだものであろう。

#### 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物

959は縄文早期の押形文土器である。深鉢の口縁部に山形文を施してある。縄文早期の遺物はこの土器片1点のみである。南側の小高い丘周辺に遺構があるのではないだろうか。北の崎遺跡では遺構は検出されていない。960は縄文後期の深鉢で貝殻擬縄文を施してある。北久根山式ではないだろうか。961は縄文後期の辛川式の深鉢で口縁部にリボン状の突起を施し文様帯には刺突列点文と貝殻擬縄文が施されている。完形である。962から966までは縄文後期の辛川式の深鉢である。962と963は同じグリッドから出土しており同一個体と思われる。964

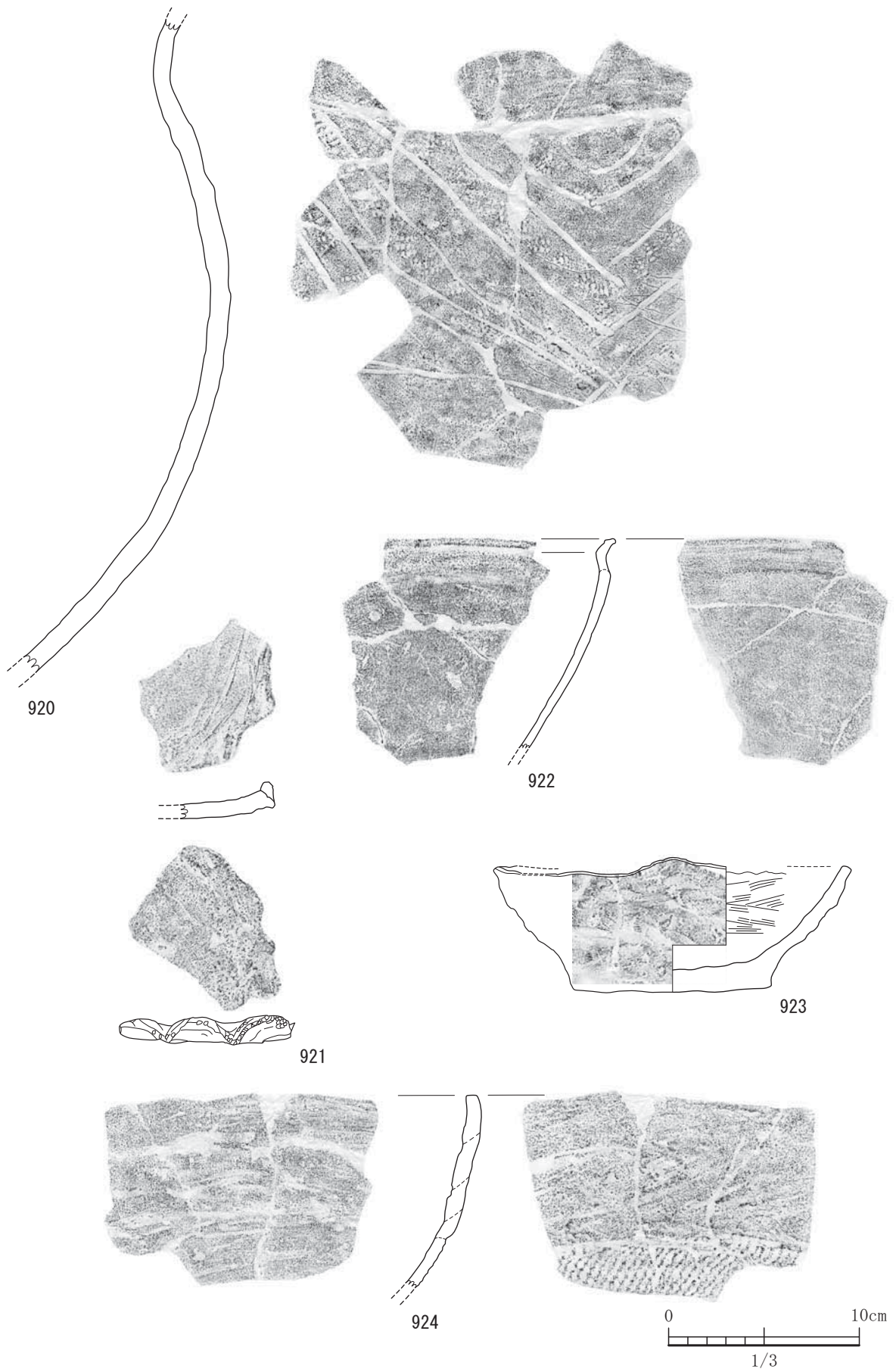


図-381 平坦地区第3包含層（3層）出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

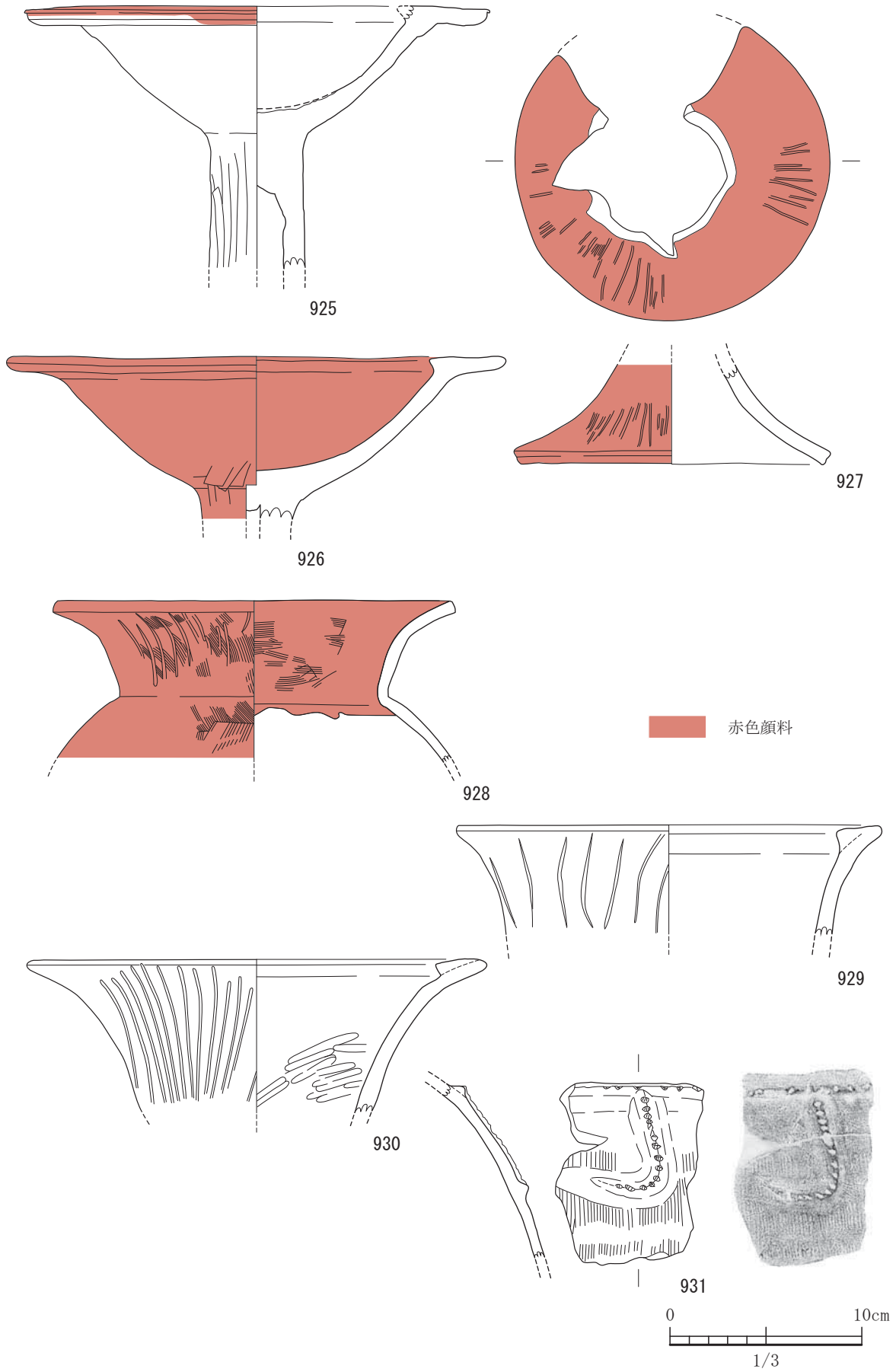


図-382 平坦地区第3包含層（3層）出土遺物実測図 3 (すべてS=1/3)

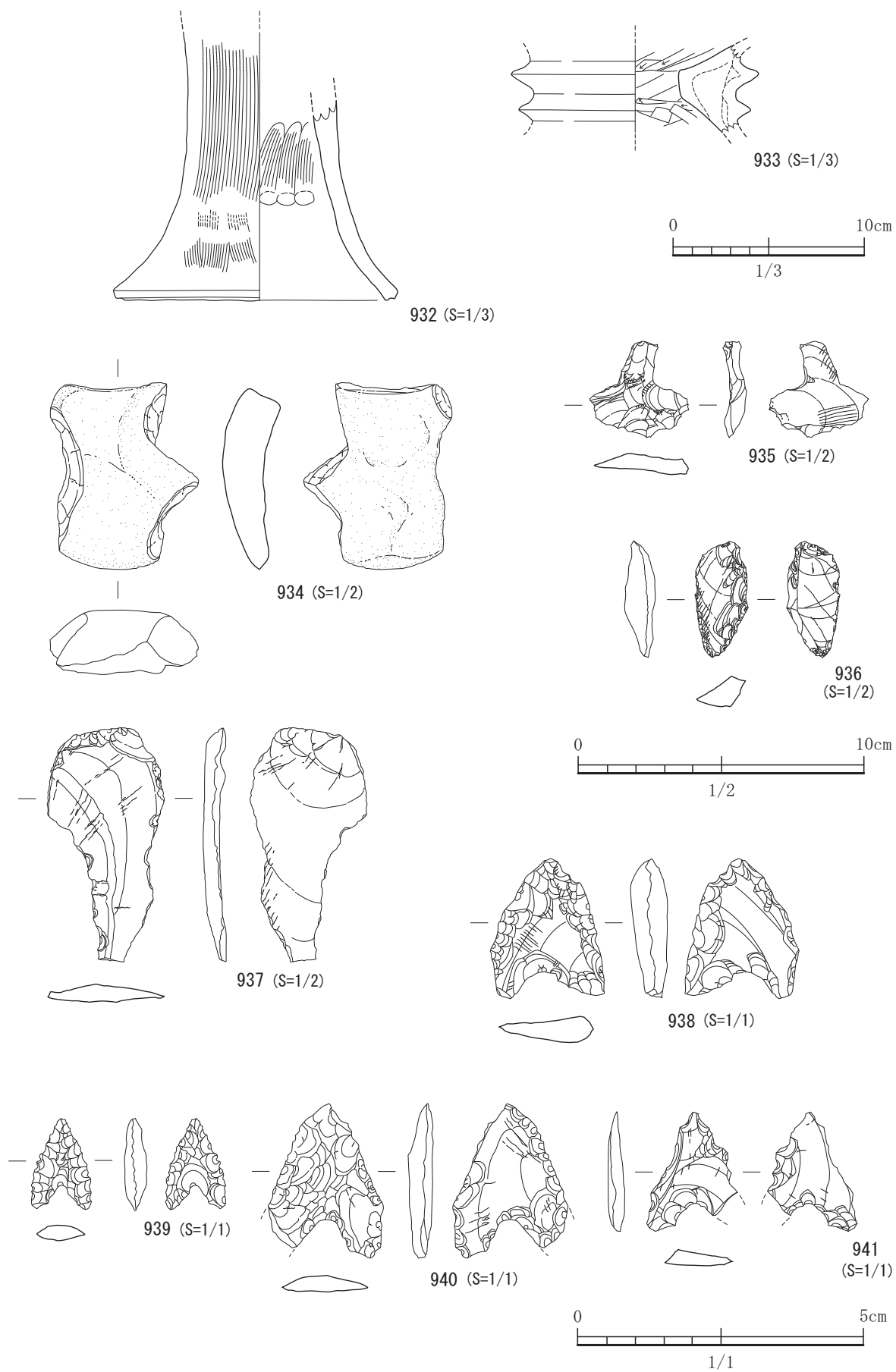


图-383 平坦地区第3包含層（3層）出土遺物実測图 4



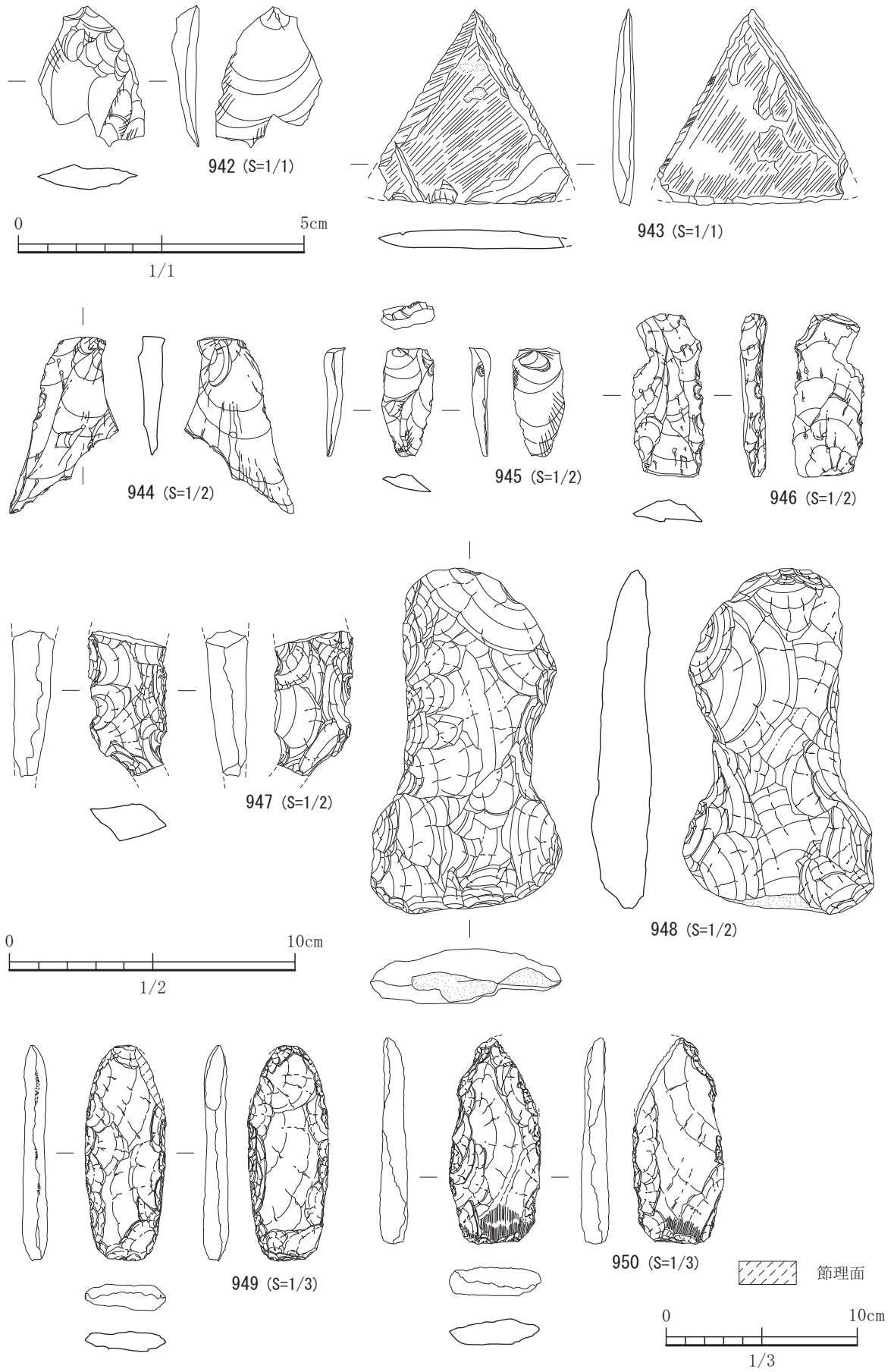


図-384 平坦地区第3包含層（3層）出土遺物実測図 5



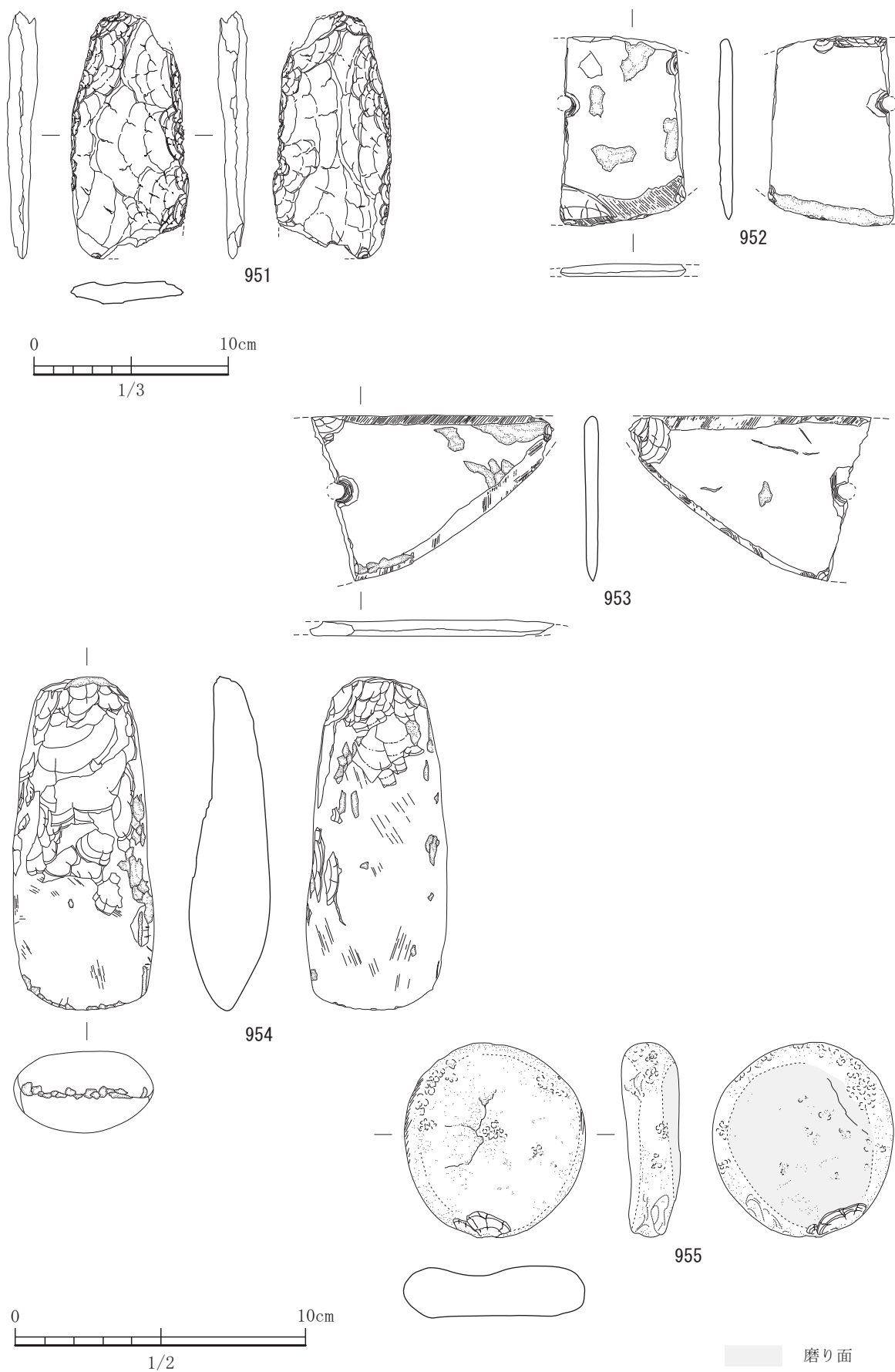


図-385 平坦地区第3包含層（3層）出土遺物実測図 6 (S=1/2, 951はS=1/3)

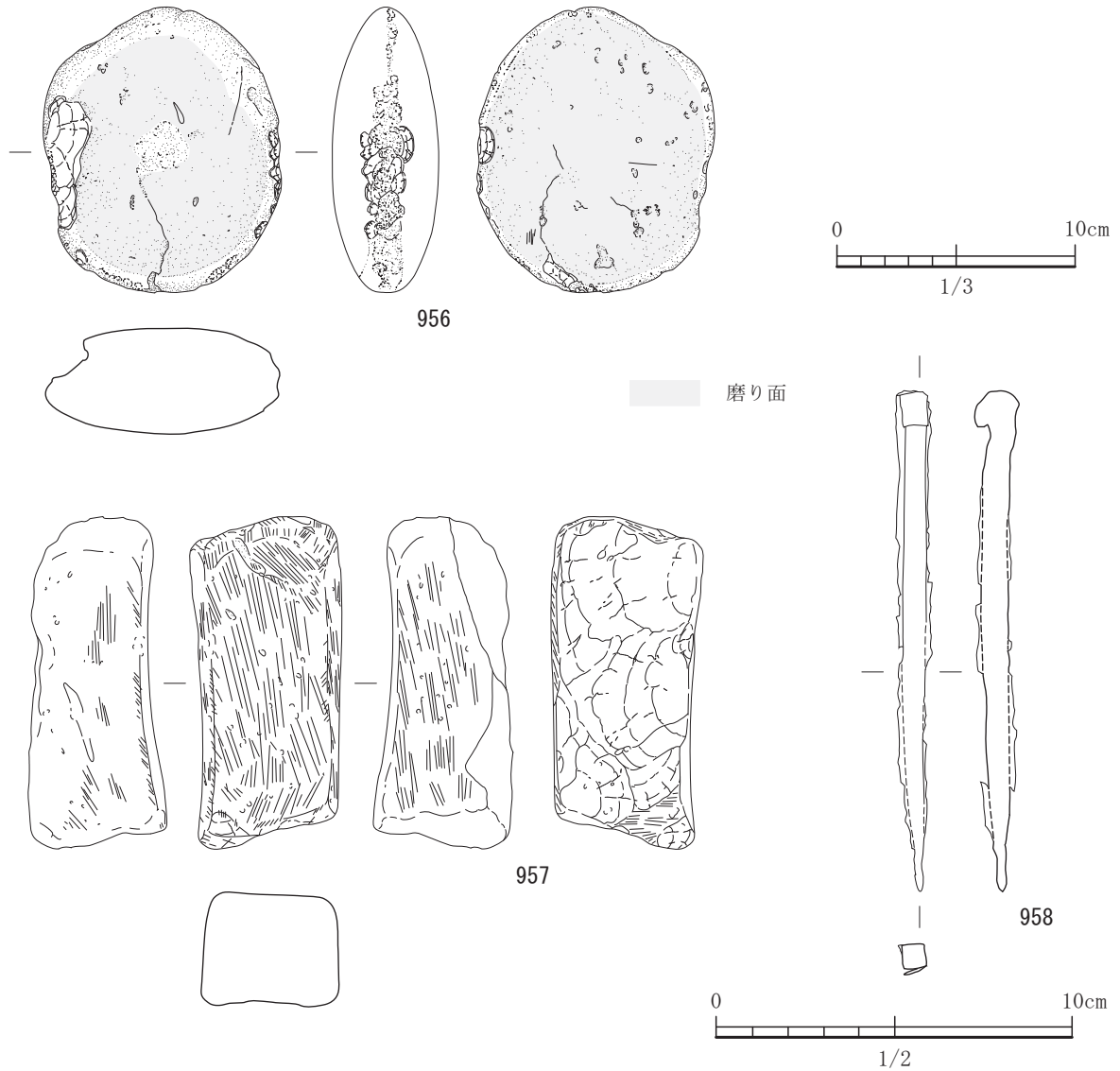


図-386 平坦地区第3包含層（3層）出土遺物実測図 7 (S=1/2, 956はS=1/3)

は2条凹線文の下に短斜線文が見られる。966は貝殻擬縄文が見られる。967から970までは縄文後期の御領式と思われる。967は口縁部の幅が短く1条の凹線をめぐらしている。頸部下位には界線も見られる。968は頸部から口縁部にかけての屈曲がきつい。969は、口縁部の文様帯には2条の凹線文が見られる。970は2条の凹線文がありその間には凹点文が施されている。971から988までは天城式の深鉢である。972は沈線文であり御領式と似ている。974は胴部に工具ナデが残る。975はやや波状口縁である。976は口縁部は上方に小さくつまみ出し1条の沈線をめぐらす。977から979は口縁部3条の沈線をめぐらす。978と979は頸部から口縁部にかけての屈曲が

ゆるやかである。980と981は頸部から口縁部への屈曲はややきつい。982の沈線は2条である。983は平行沈線文が4条で頸部から口縁部の屈曲がややきつい。984も平行沈線文が4条であるが頸部から口縁部の屈曲はゆるやか。985は凹線文に似た沈線が4条あり頸部から口縁部の屈曲はゆるやか。986は椀形土器であろう。

987は胴部と頸部の屈曲がゆるやかとなり胴部には条痕が残る。988は胴部と頸部の屈曲部に界線が見られる。989から992は、天城式と古閑式付近の深鉢であろう。991には外面に条痕が残る。992は頸部と口縁部の境界の屈曲がほとんどなくなり僅かに口縁部を内傾させる。993から1001までは縄文晩期の

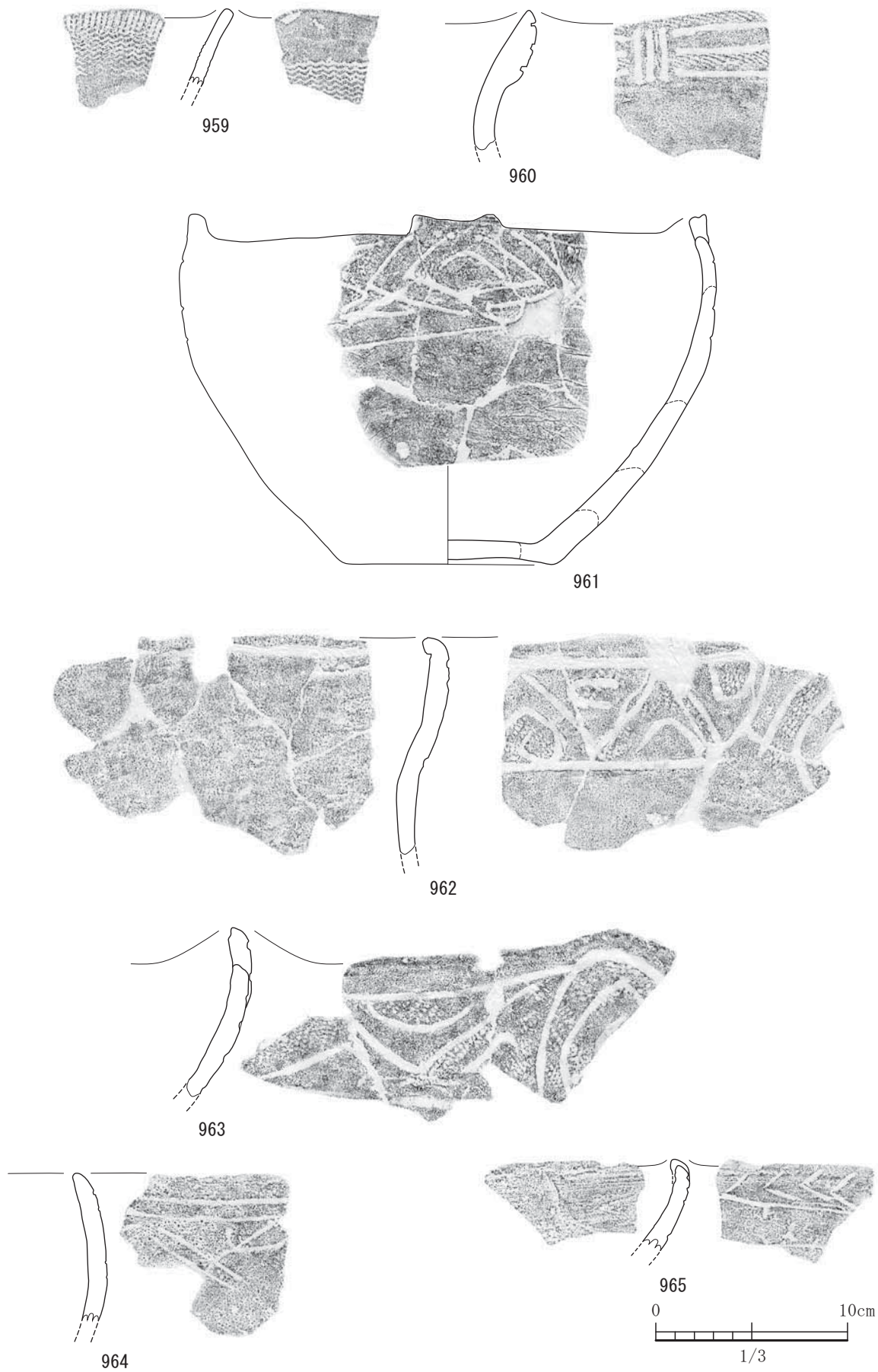


図-387 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 1（すべてS=1/3）

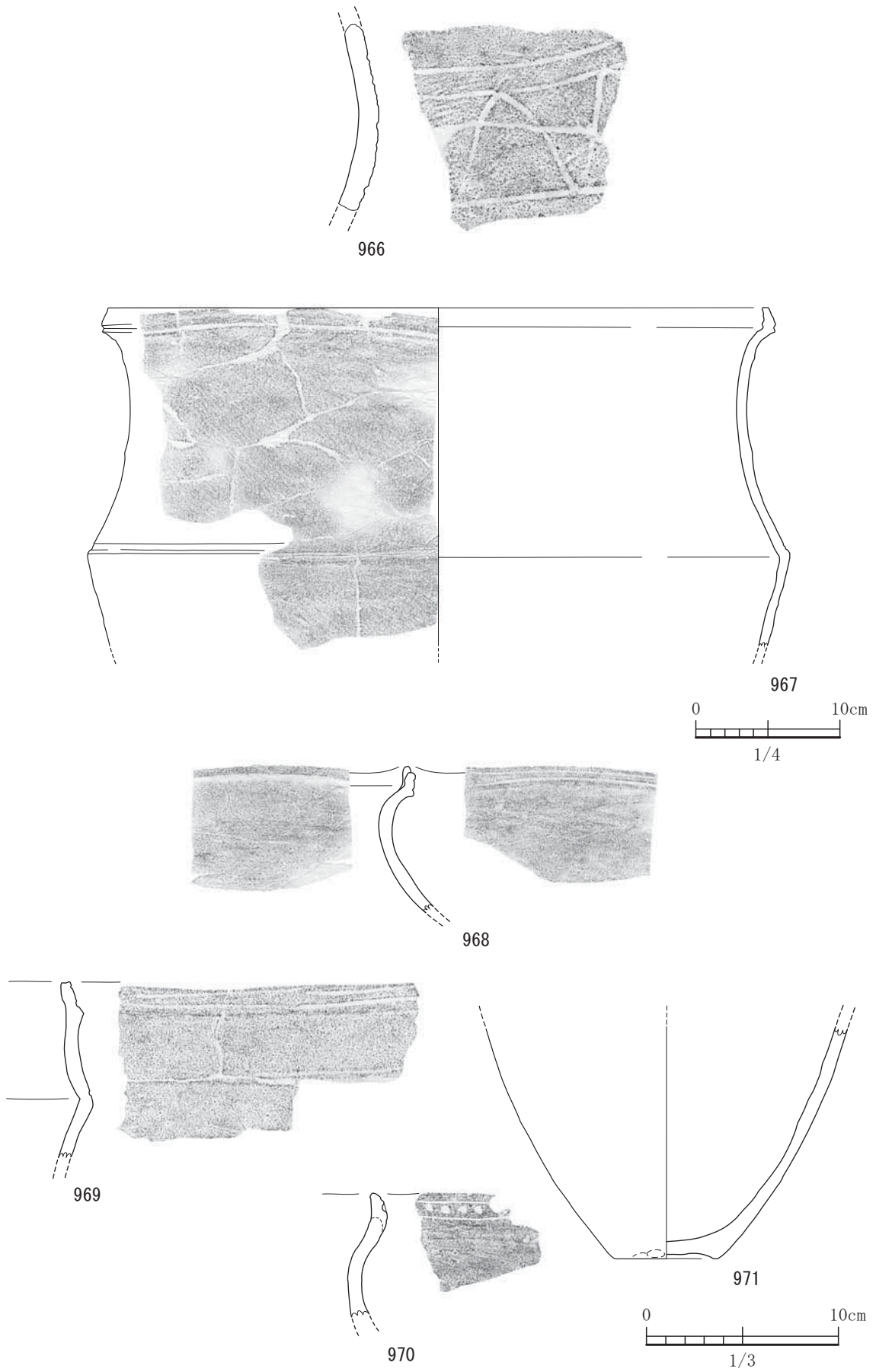


图-388 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測图 2 (S=1/3, 967はS=1/4)

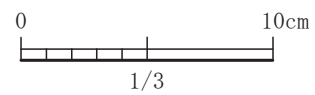
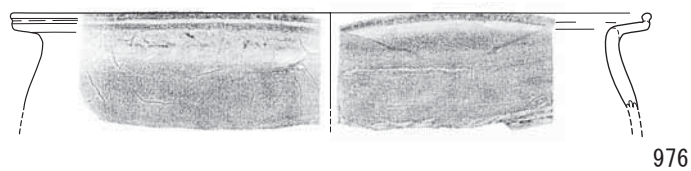
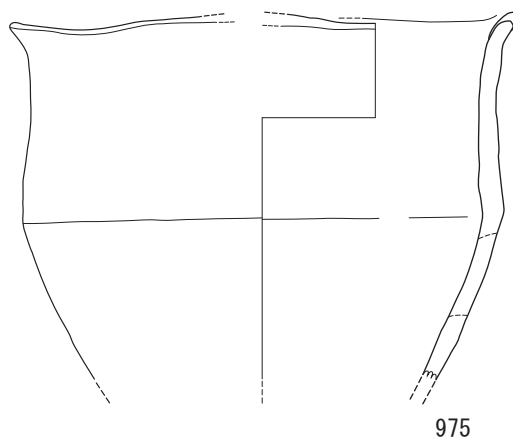
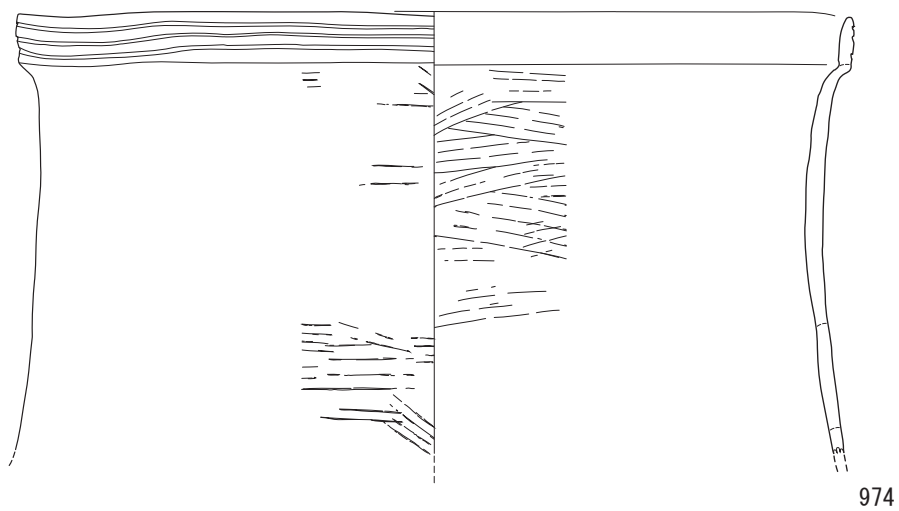


図-389 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 3 (S=1/3, 974はS=1/4)



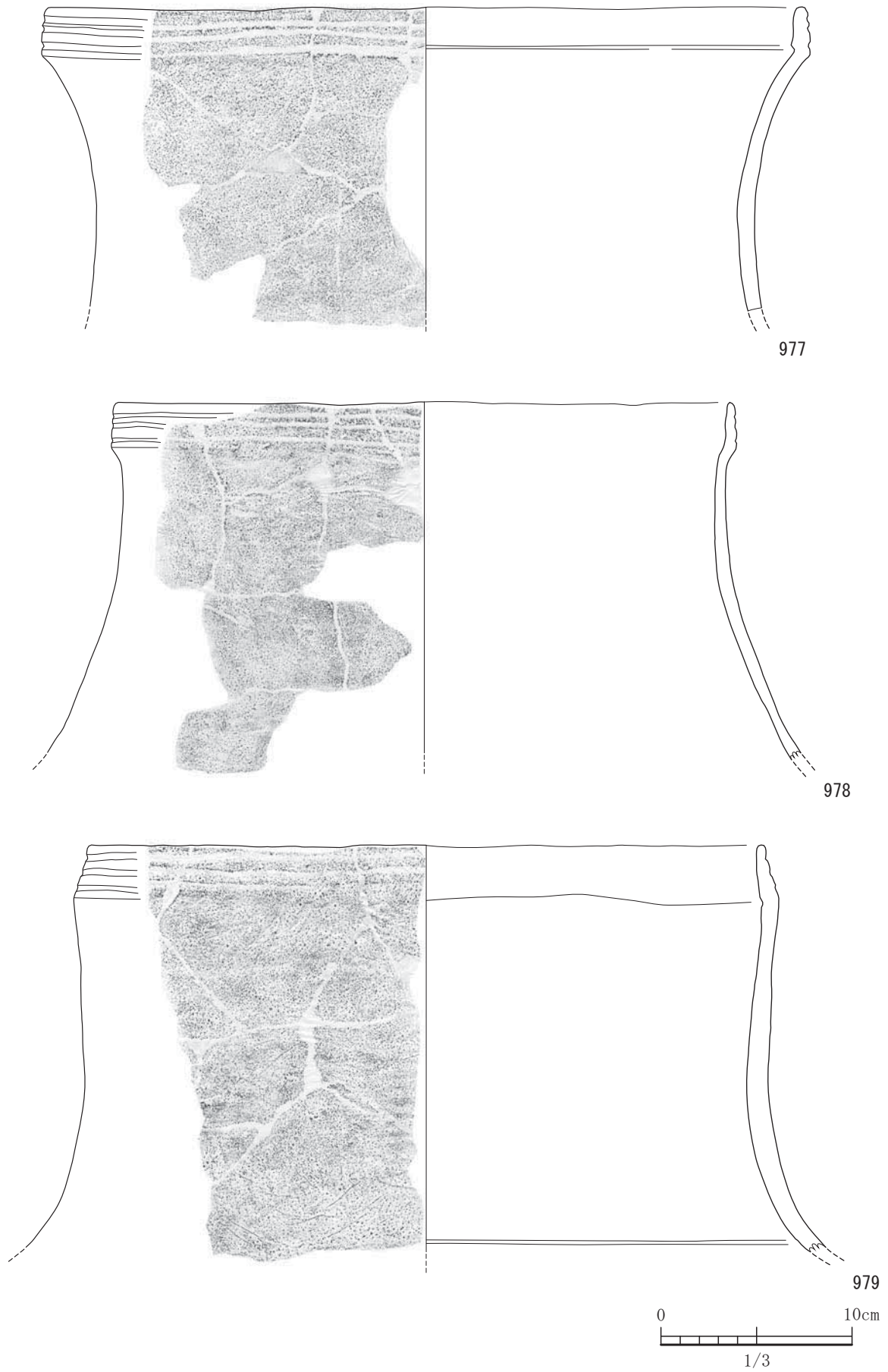


図-390 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 4（すべてS=1/3）

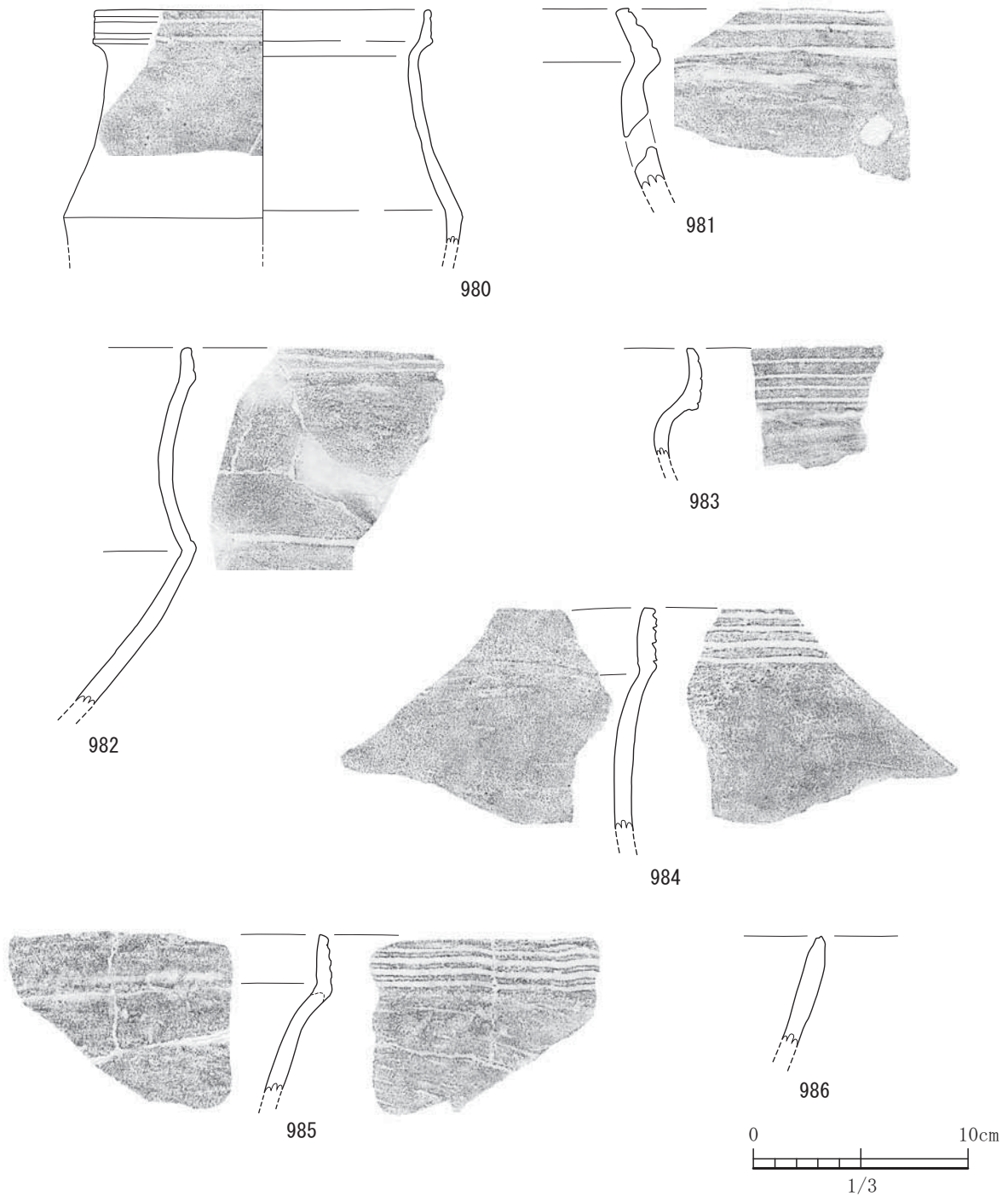


図-391 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 5（すべてS=1/3）

古閑式の深鉢である。993は、底部に段をつけて厚底となっている。胴部から口縁部まで屈曲部がなくなり口縁端部でやや内傾させている。外面には二次焼成の跡が見られススが附着している。反転復元している。994は精製土器の古閑式の深鉢である。平行ではない沈線が2条めぐっている。995は粗製の

古閑式の深鉢である。1条の沈線が口縁部にめぐっているがこれで胴部と口縁部を分けているのではないだろうか。胴部にあたるところには条痕が見られる。996は口縁部には沈線文がなく全体的に条痕が残る。998は2条の沈線を施すが平行ではない。外面には条痕が残る。999は胴部上半でやや膨らみを

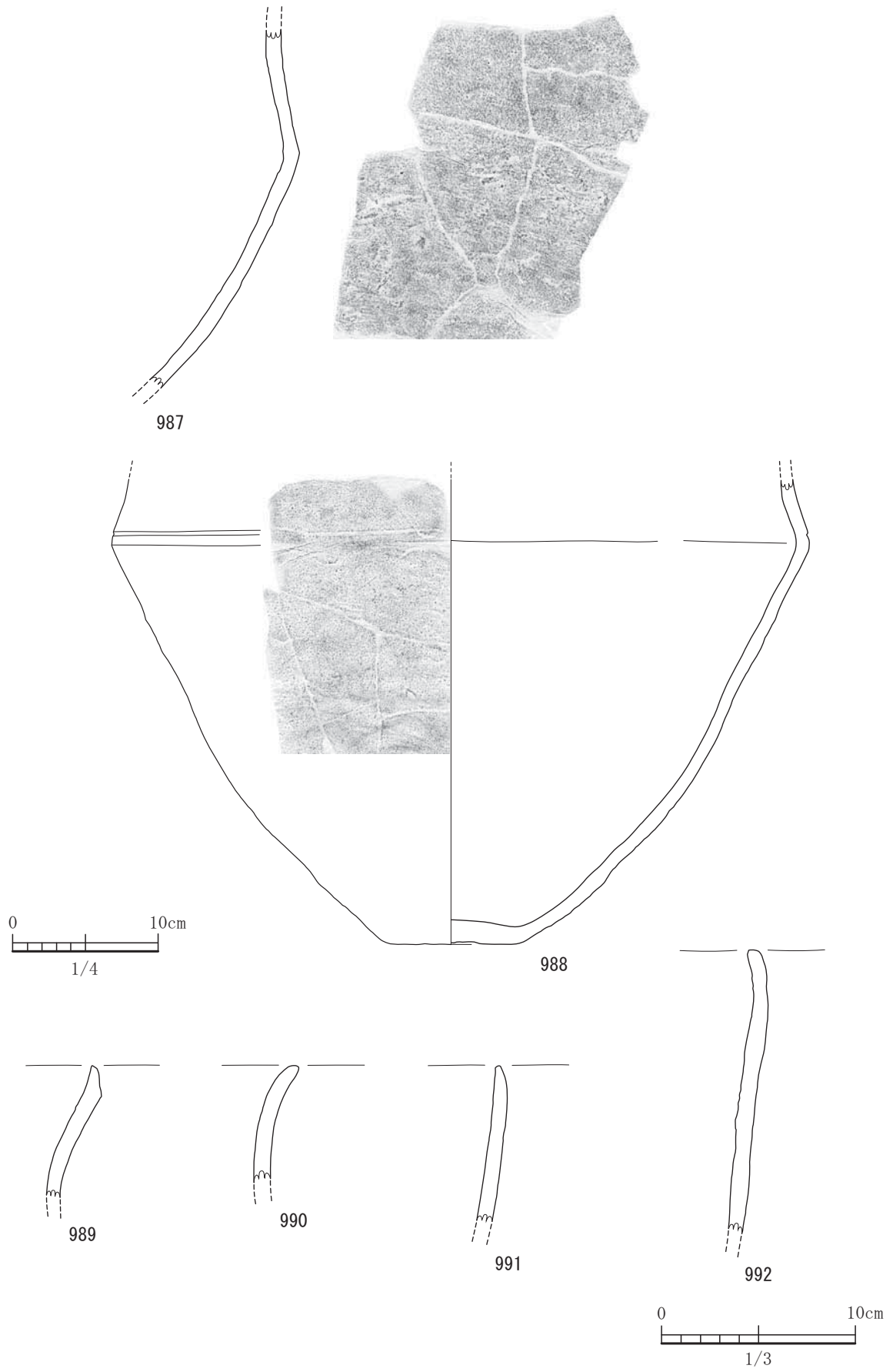


図-392 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 6 (S=1/3, 988はS=1/4)

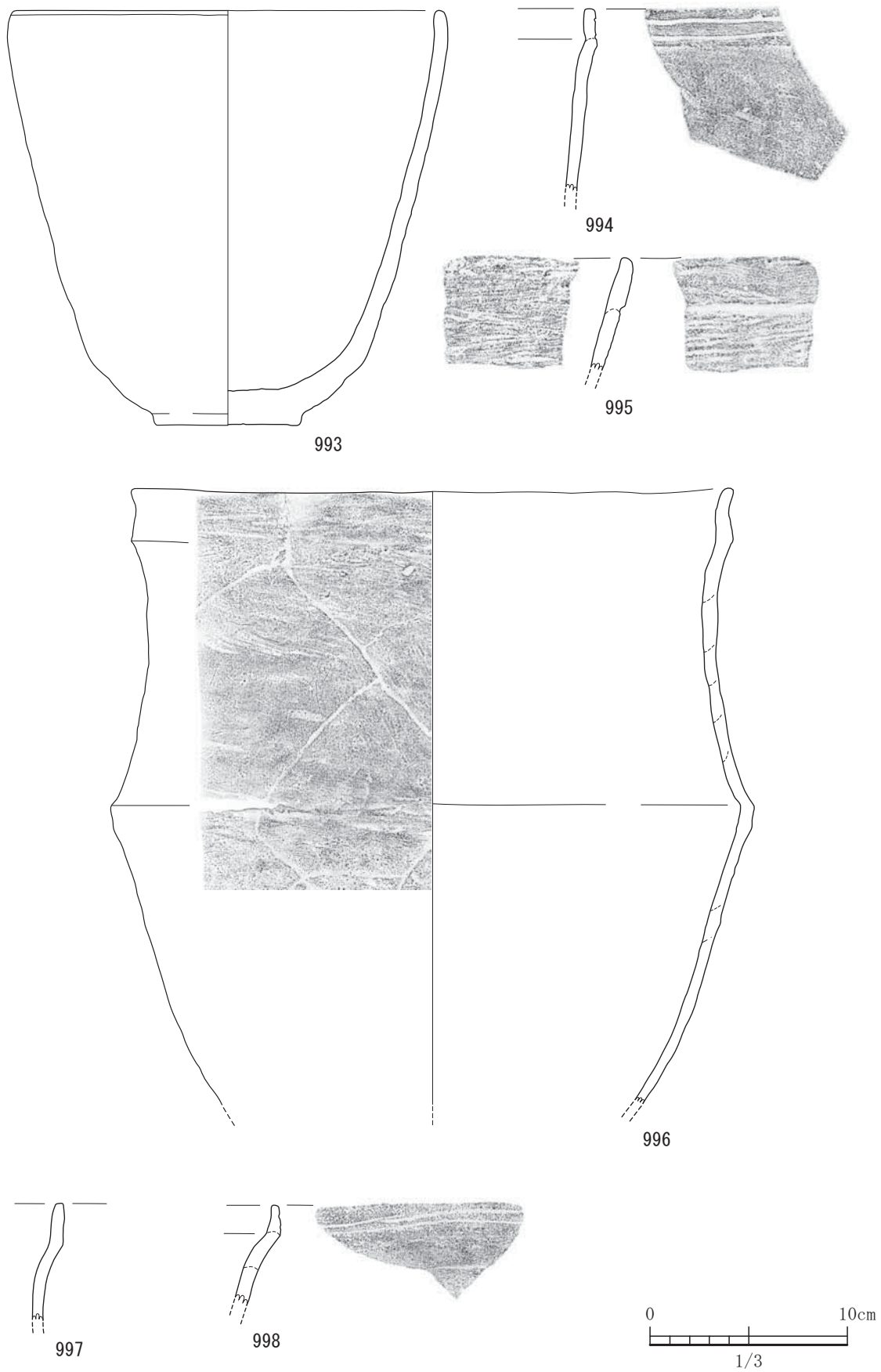


図-393 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 7（すべてS=1/3）

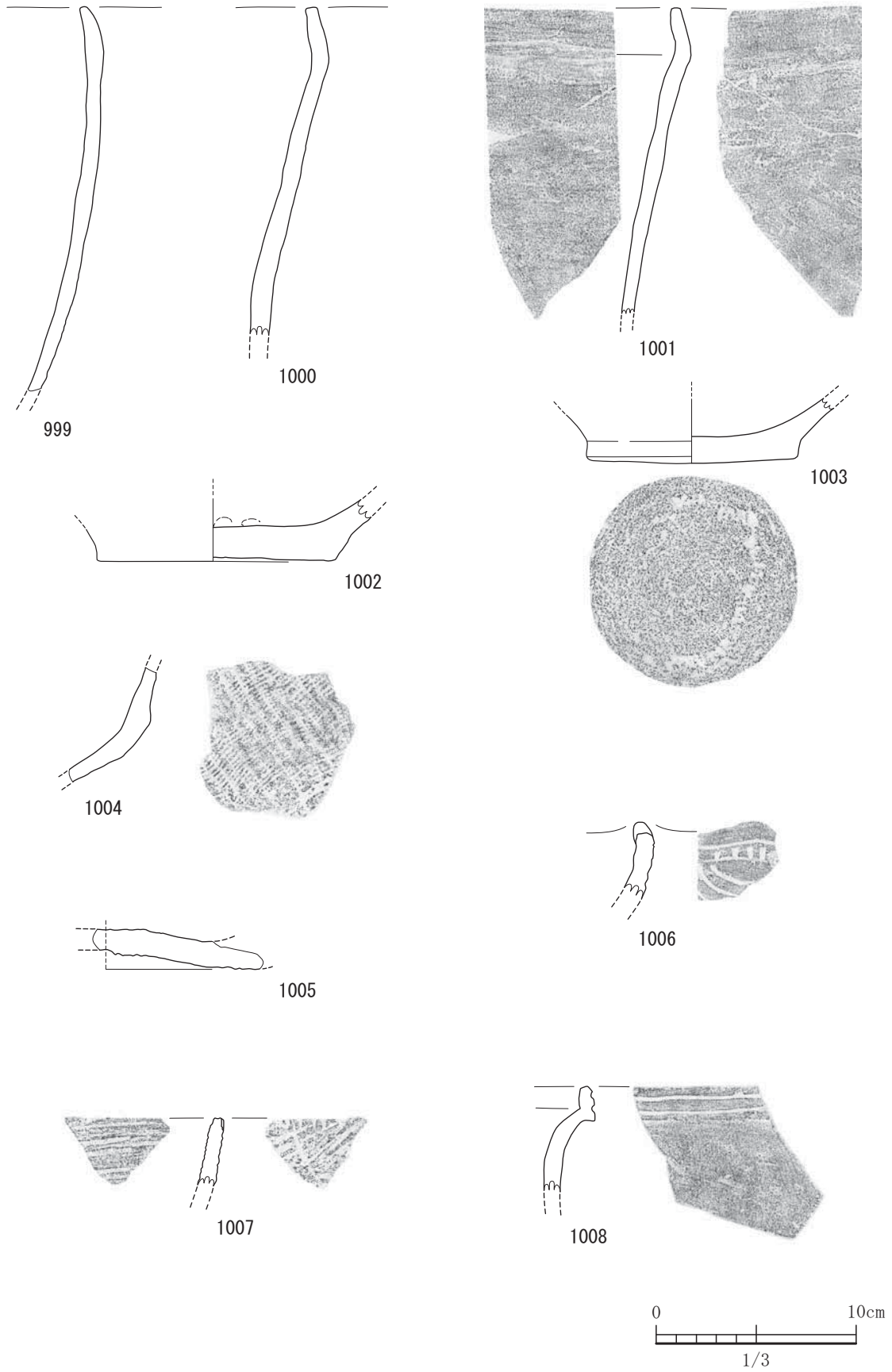


図-394 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 8（すべてS=1/3）



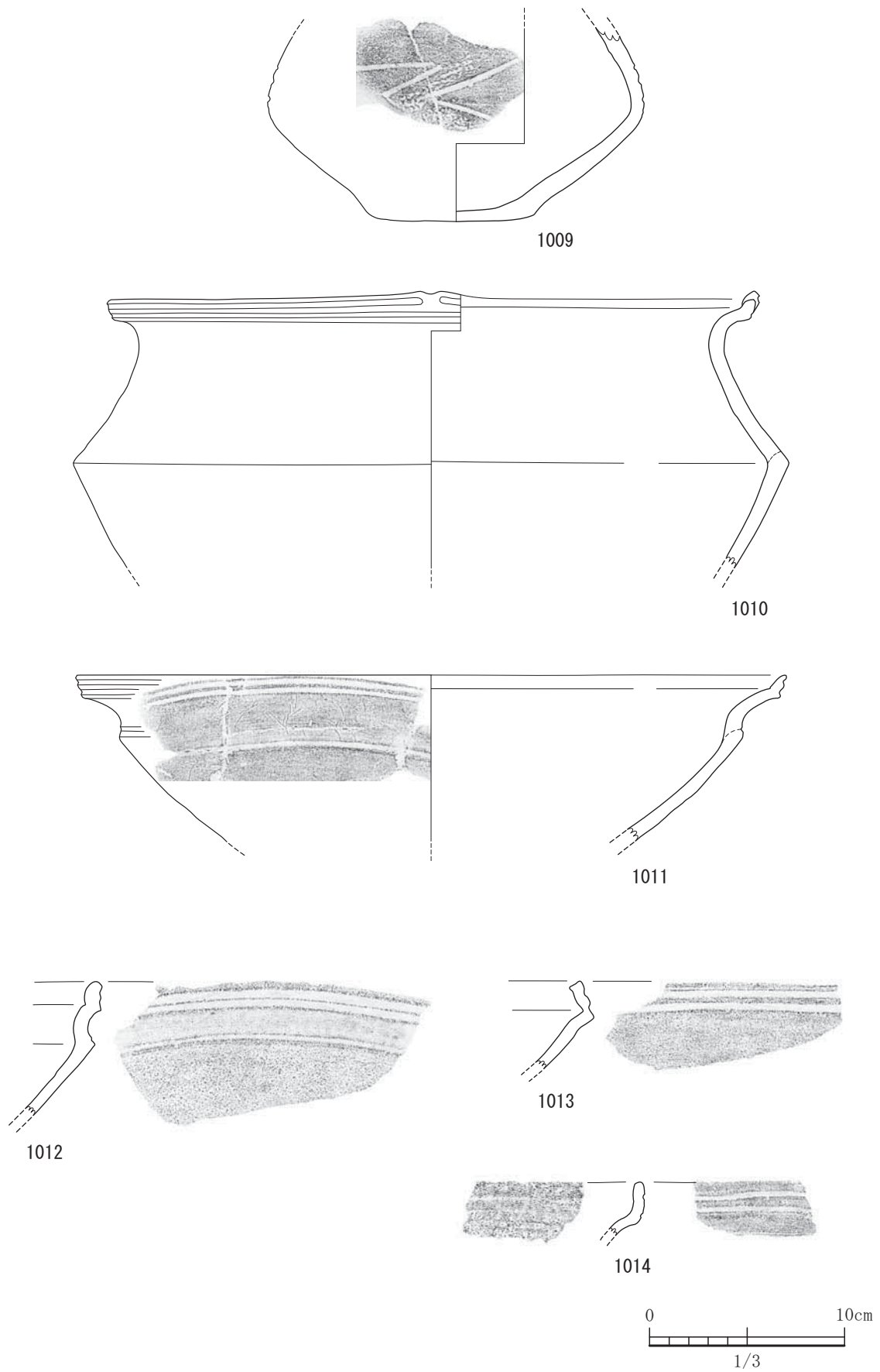


図-395 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 9（すべてS=1/3）

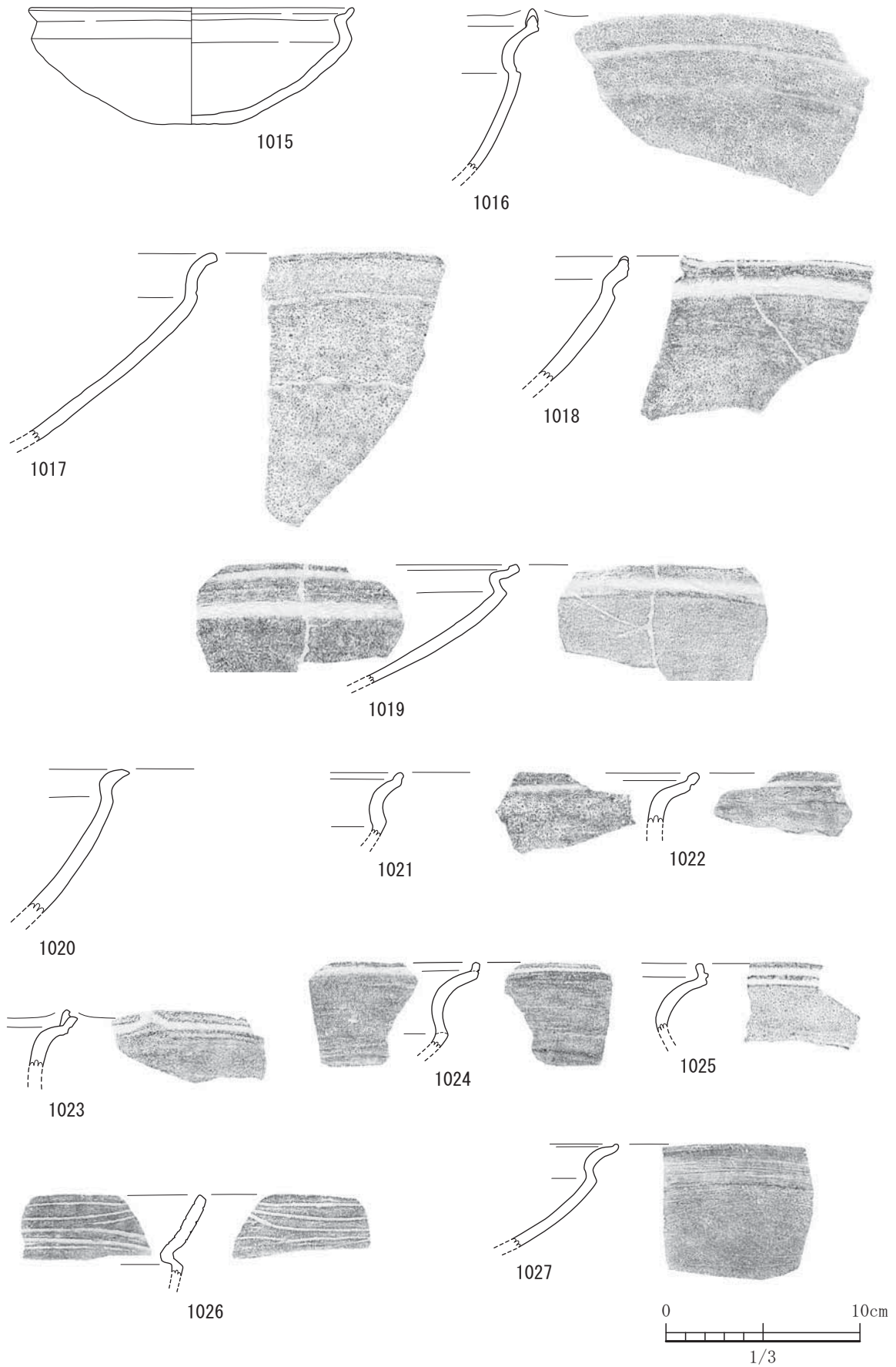


図-396 平坦地区2包含層(2b層)出土遺物実測図 10 (すべてS=1/3)

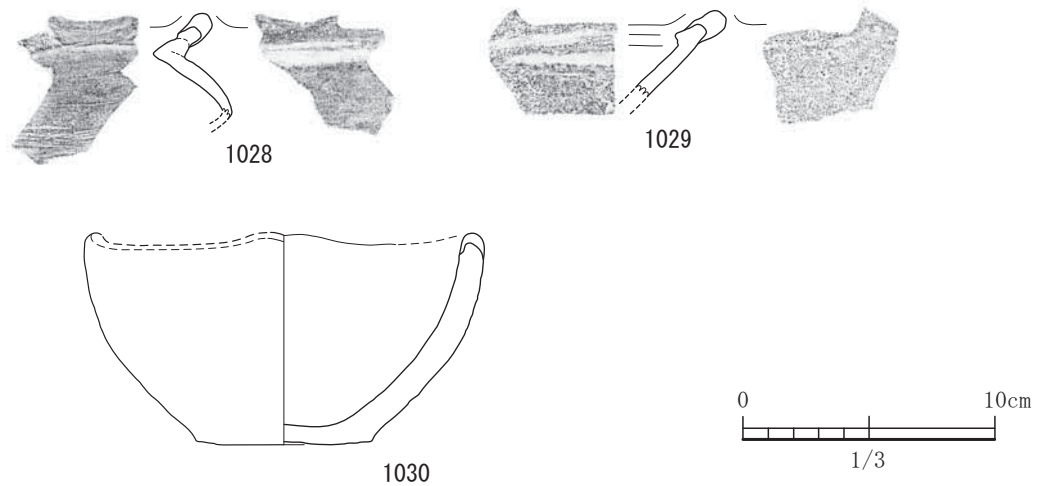


図-397 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 11（すべてS=1/3）

もち口縁部でやや内傾する。1000と1001は頸部から口縁部にかけての屈曲はゆるやかであり口縁部で内傾する。1003の底部には圧痕が残る。1004は組織痕土器の深鉢であろう。1005には網目痕が見られる。1006は口縁部に山形突起があり凹点文が沈線の間に見られる。縄文後期の土器であろう。1007は貝殻条痕が残る。1008は平行の2条の凹線文で口縁部と頸部の屈曲がきつい。縄文後期の御領式であろう。1009は縄文後期の辛川式の浅鉢である。磨消縄文が見られる。胴部には短斜線文を施す。1010は縄文後期の御領式の浅鉢である。頸部から口縁部への屈曲はきつく、口縁部の文様帯には2条の沈線文がめぐり、上の沈線が切れた部分の上に中央が凹んだ突起を作り上げている。1011と1012は御領式の浅鉢である。丁寧なミガキを施し、胴部と頸部の境には界線を施している。口縁部には2条の凹線文がめぐっている。1013は御領式の浅鉢であろう。押し引きによる沈線が2条めぐり屈曲部が角ばっている。1014も御領式と思われる。2条の凹線文をめぐらすか断面形状がやや丸みをおびている。1015は縄文晩期の天城式の浅鉢である。屈曲部の角張りが弱くなり角度もゆるやかとなる。口唇部が少しつまみ出して丸みを持たせている。1016は天城式であろう。胴部と頸部の境界には界線を施し、口縁部には沈線が1条めぐり中央が凹む山形突起が小さくつきその下に凹点文を施す。1017は胴部と頸部の境界に界線を施し、口縁部は外反する。1018は天城式の浅鉢で、口縁部の幅が小さくなりそこには1条の沈線をめぐらし沈

線が切れたところに山形突起を作り上げている。その下には凹点文が施されている。1019は口縁部がかなり小さい。1021から1024は、口縁部に1条の沈線を施し、沈線によって上へ押し上げ口縁部としている。口縁部の幅が非常に狭い。1025は天城式の浅鉢で口縁部には2条の沈線を施しその間は押し上げて突帯文のように作り上げている。1026は縄文晩期の古閑式の浅鉢であろう。平行ではない沈線が5条ほどある。1027は古閑式の浅鉢である。外面は丁寧なミガキを施し、口縁はつまみあげる程度の小さなものである。1028と1029は縄文晩期の黒川式浅鉢である。1028の口縁にはリボン状突起、1029には鱗状突起がつけられている。1030は坏形土器である。口縁部は波状口縁ぎみである。器壁が非常に厚い。体部外面下半には条痕が残る。縄文晩期の土器である。

1031から1037までは丹塗り土器の高坏である。1031から1033は平縁で端部が下がり気味である。赤色顔料が一部残存。1034は平縁で、口縁部の器壁が厚い。1035は口縁端部がやや垂れ下がる。端部は平らに整える。1036は水平な平縁の口縁部である。1037は口縁端部が欠損。やや下がり気味である。1038は坏形の丹塗り土器である。内外面にハケ目が残る。1039は、高坏の脚部である。裾端部は平坦ながら若干中央を凹ませる。内面には絞り痕がある。1040は高坏の脚部である。裾端部は鋤先状形状を呈する。1041も高坏の脚部である。外面にはヘラミガキが施されている。1042も高坏の脚部である。裾端部は下に小さく屈曲させている。1043は高

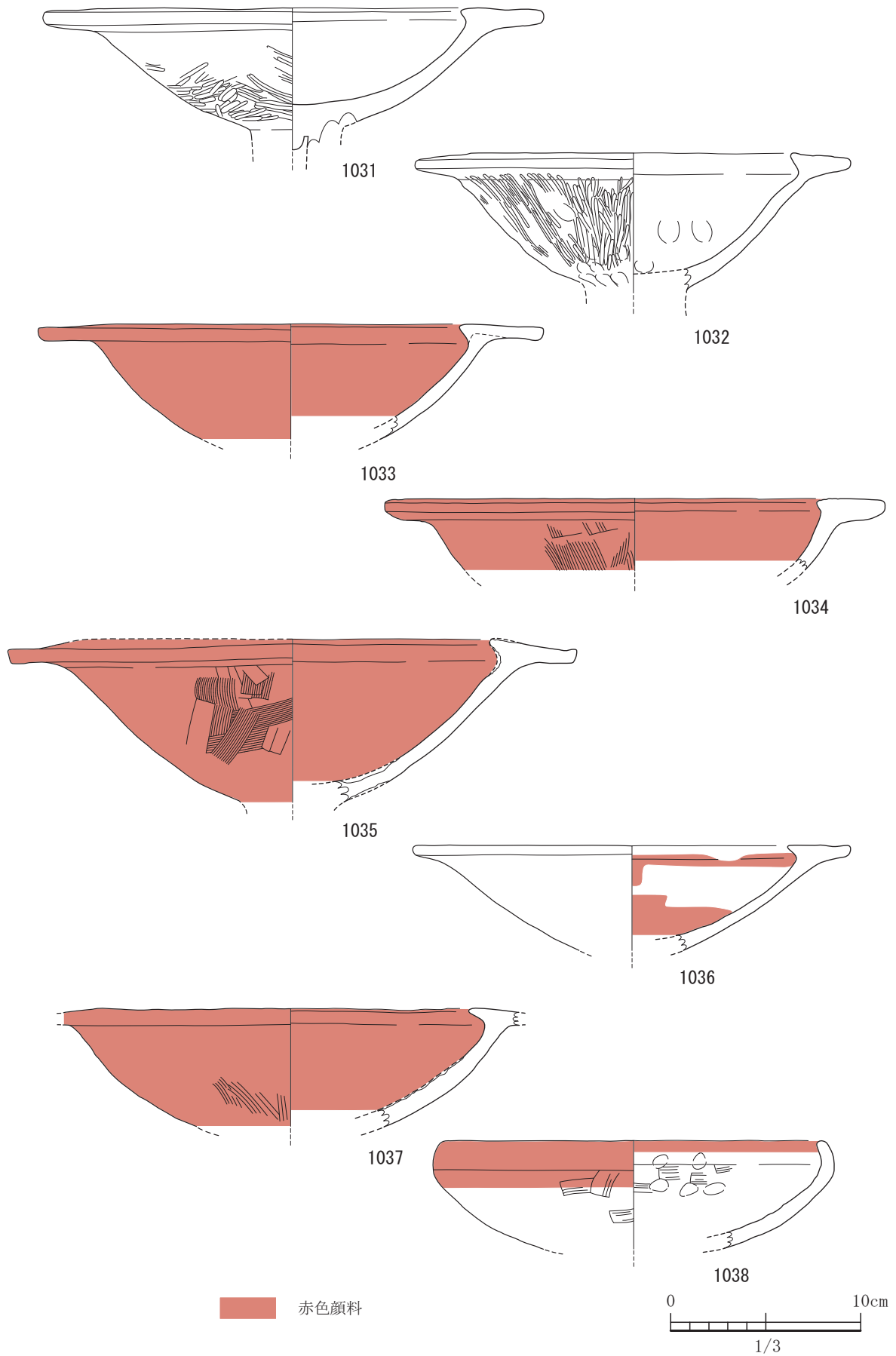


図-398 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 12（すべてS=1/3）

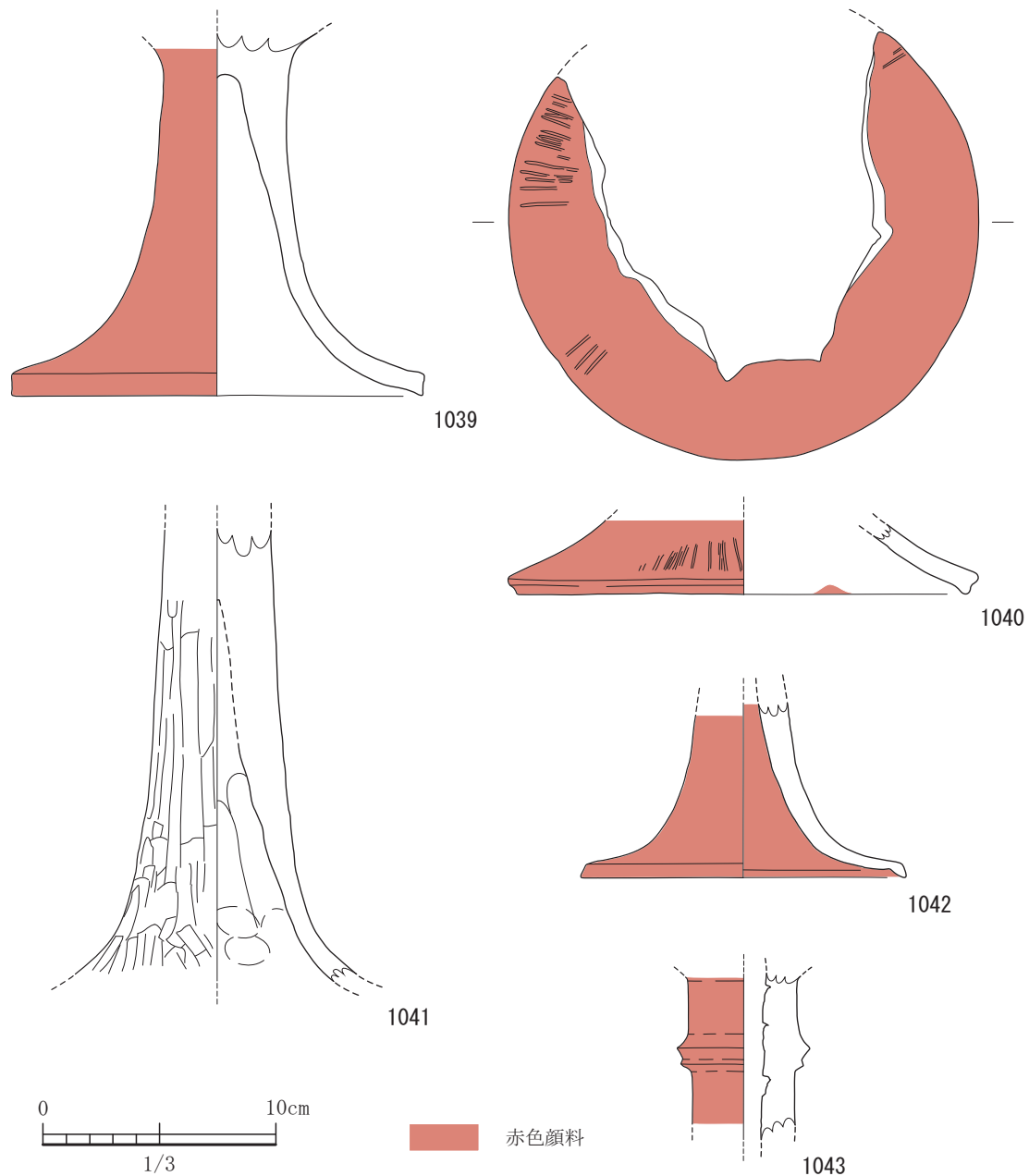


図-399 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 13 (すべてs=1/3)

坏の柱状部である。M字状の突帯をめぐらしている。1031から1033、1035、1037、1040、1043は須玖Ⅱ式であろう。1044は丹塗りの甕形土器である。口縁部は平縁であり端部が垂れ下がる。1045は平縁であり口縁端部は垂れ下がる。1044と1045は須玖Ⅱ式であり、残りの甕形土器は黒髪式であろう。1046は、断面形状が「く」で平縁ではあるが内側に突起を持つ。1047から1059までは甕形土器である。1047と1048は頸部の下に断面形状が三角形の突帯を1条

めぐらす。1049は胴部に沈線を1条めぐらす。1050は胴部に沈線を1条めぐらすが始点とずれて終わらせている。1051は口縁部が「く」の字であり内側の突起が小さい。外面の下半には被熱による赤色化が見られる。1052も胴部の外面に赤色化が見られる。1053は器壁が薄く器面にススが付着。1056は「く」の字の口縁である。1059は平縁であり残存する口縁部は1/4であったが2箇所穿孔が施されている。1060は壺形土器で口縁端部は刻み目を施し浮文が見



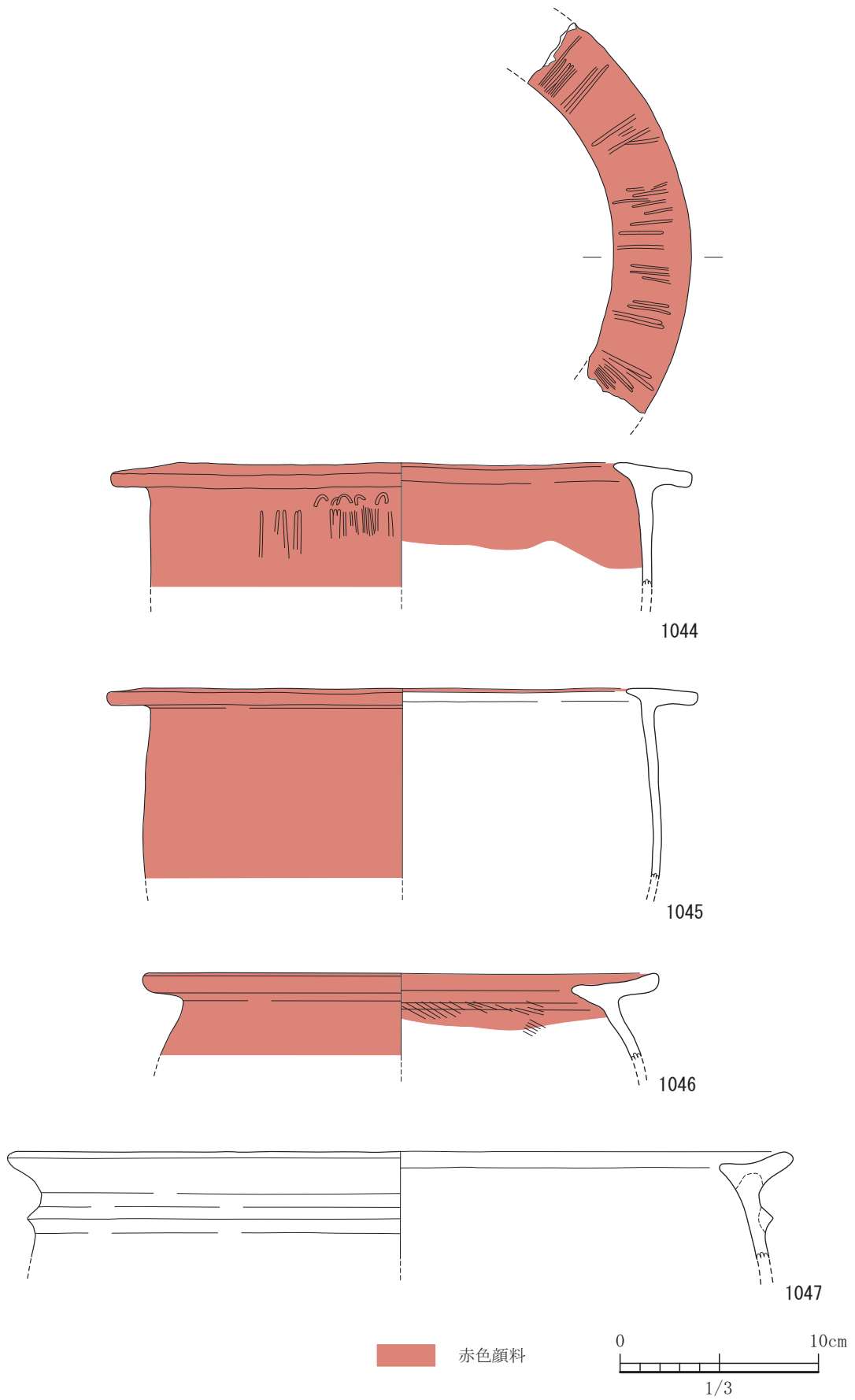


図-400 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 14（すべてS=1/3）

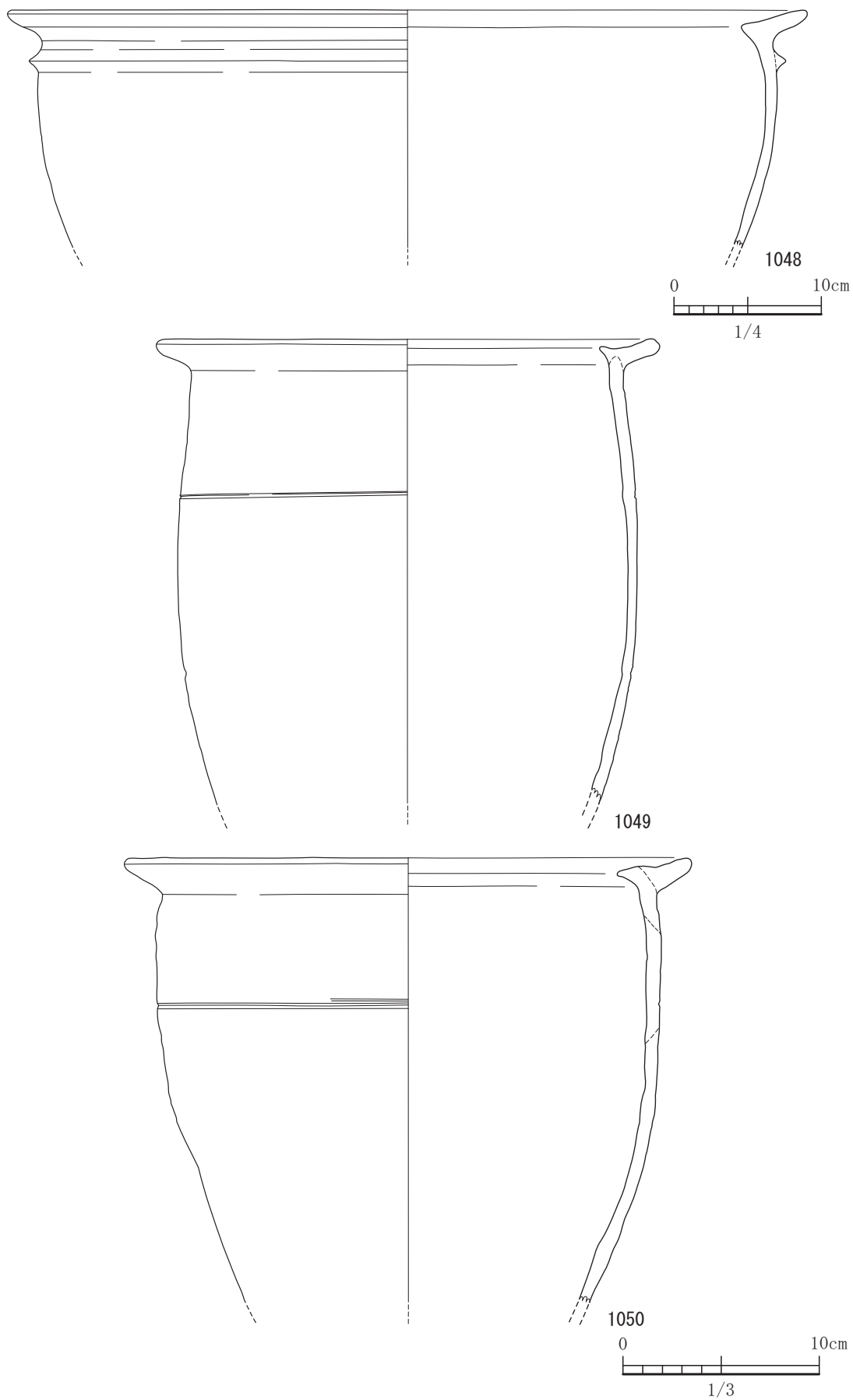
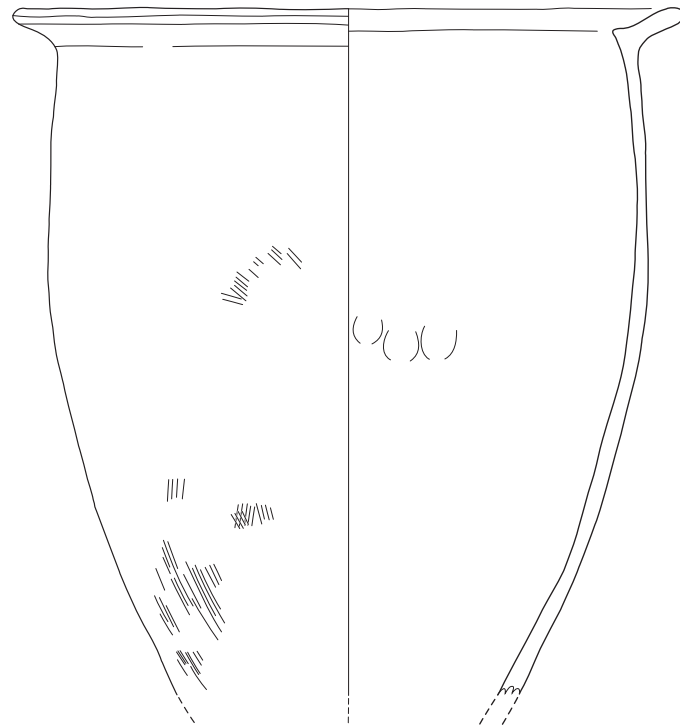
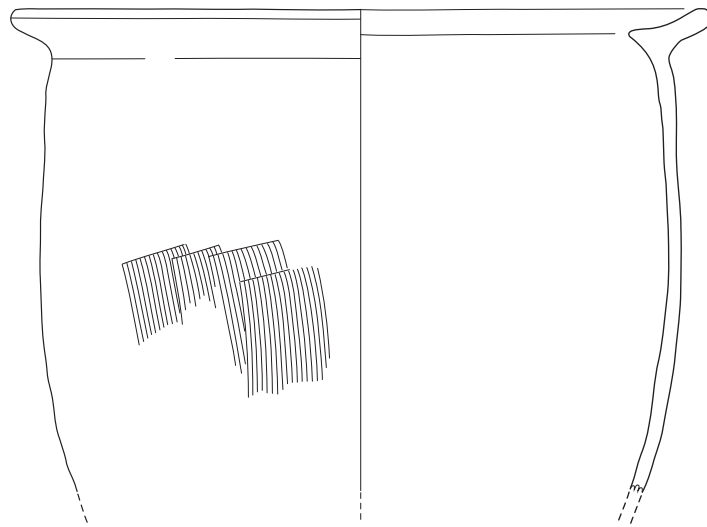


図-401 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 15 (S=1/3, 1048はS=1/4)



1051



1052

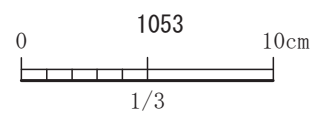
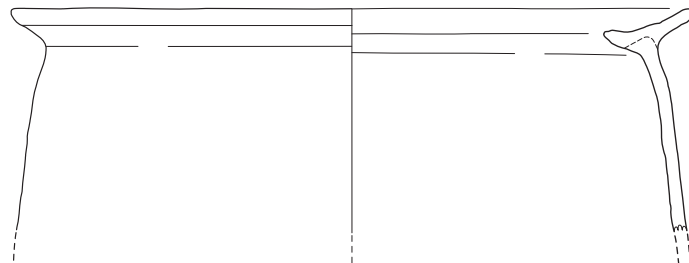
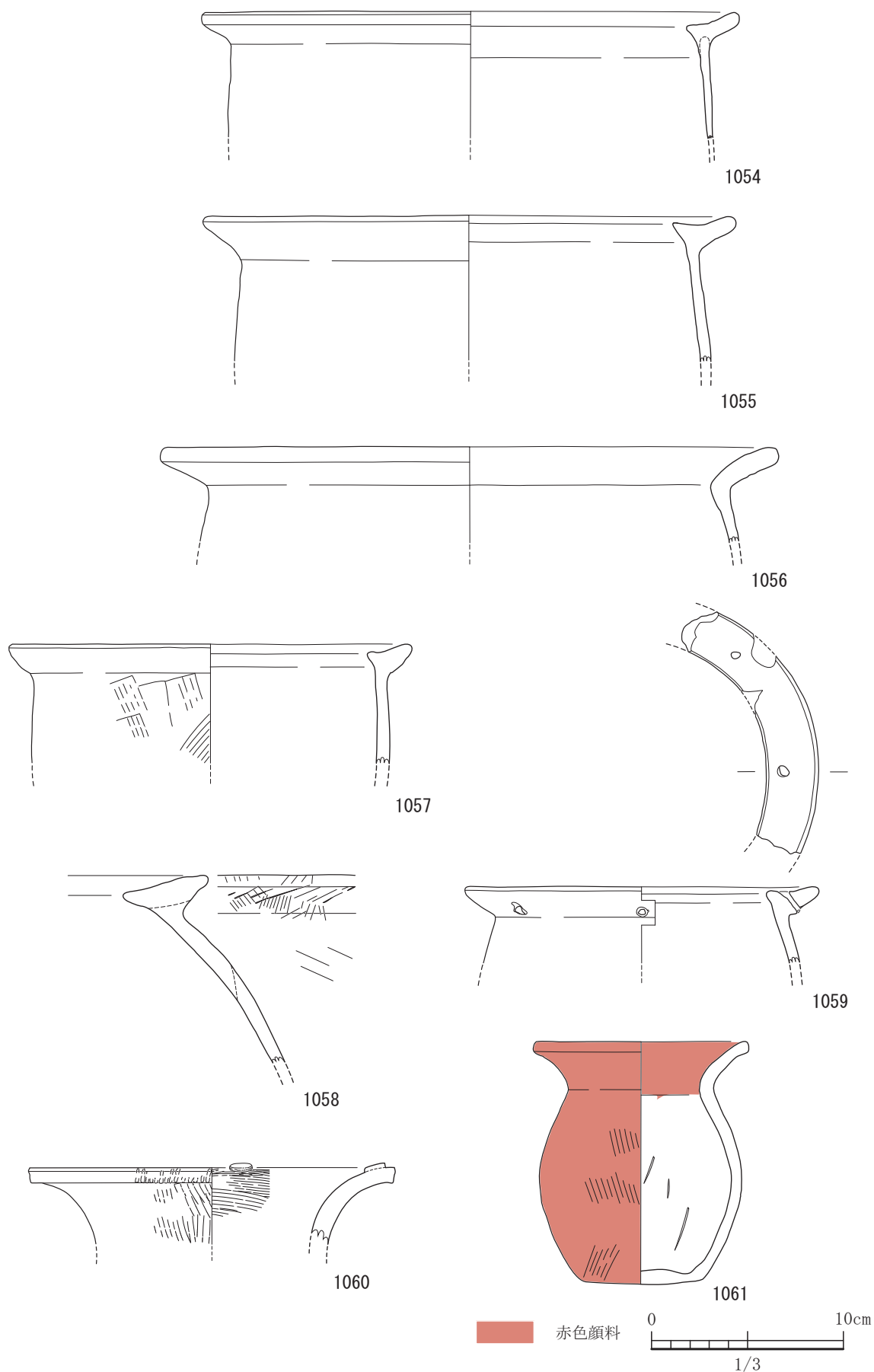


図-402 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 16（すべてS=1/3）



図一403 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 17（すべてS=1/3）

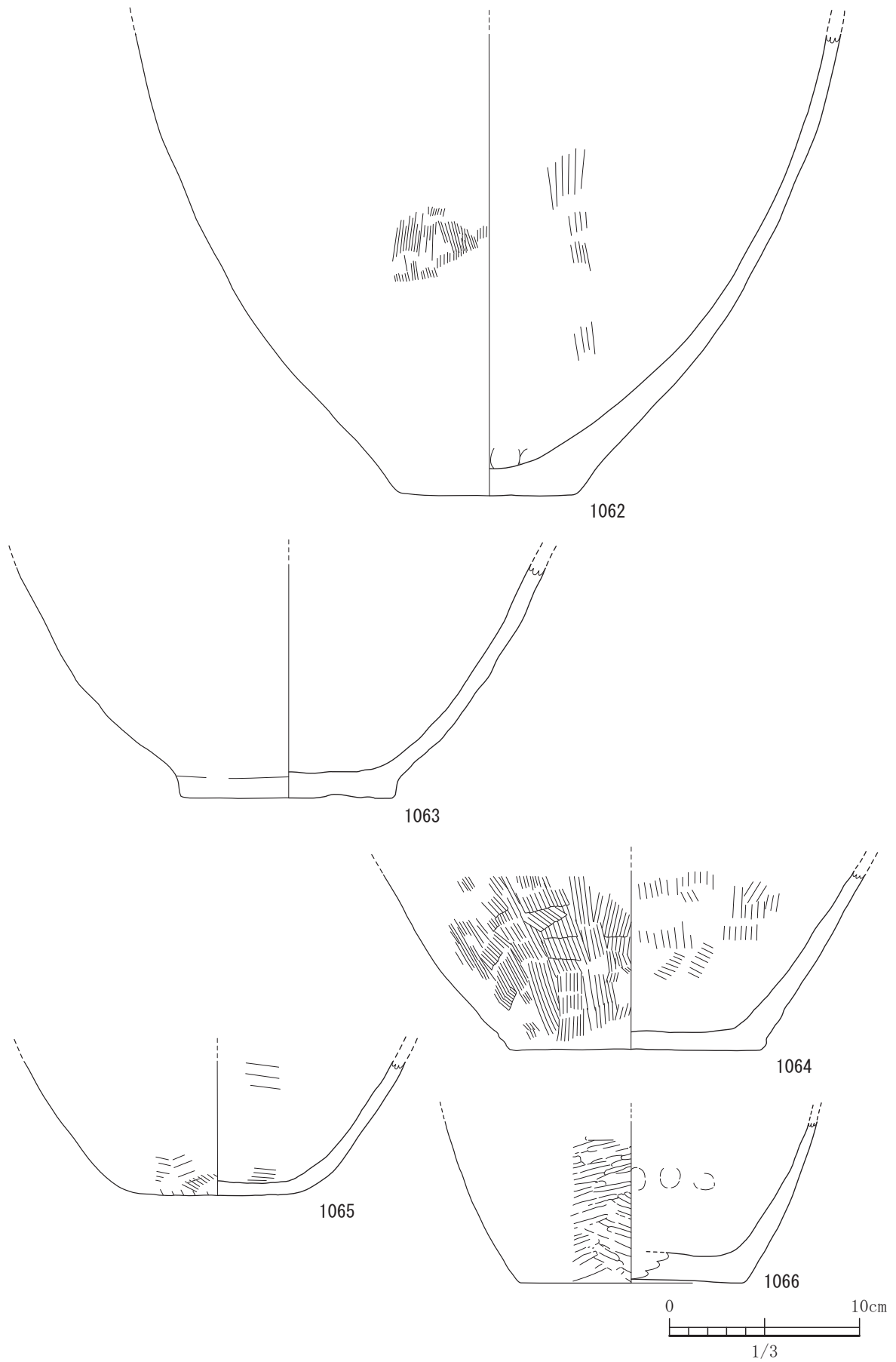


図-404 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 18 (すべてS=1/3)



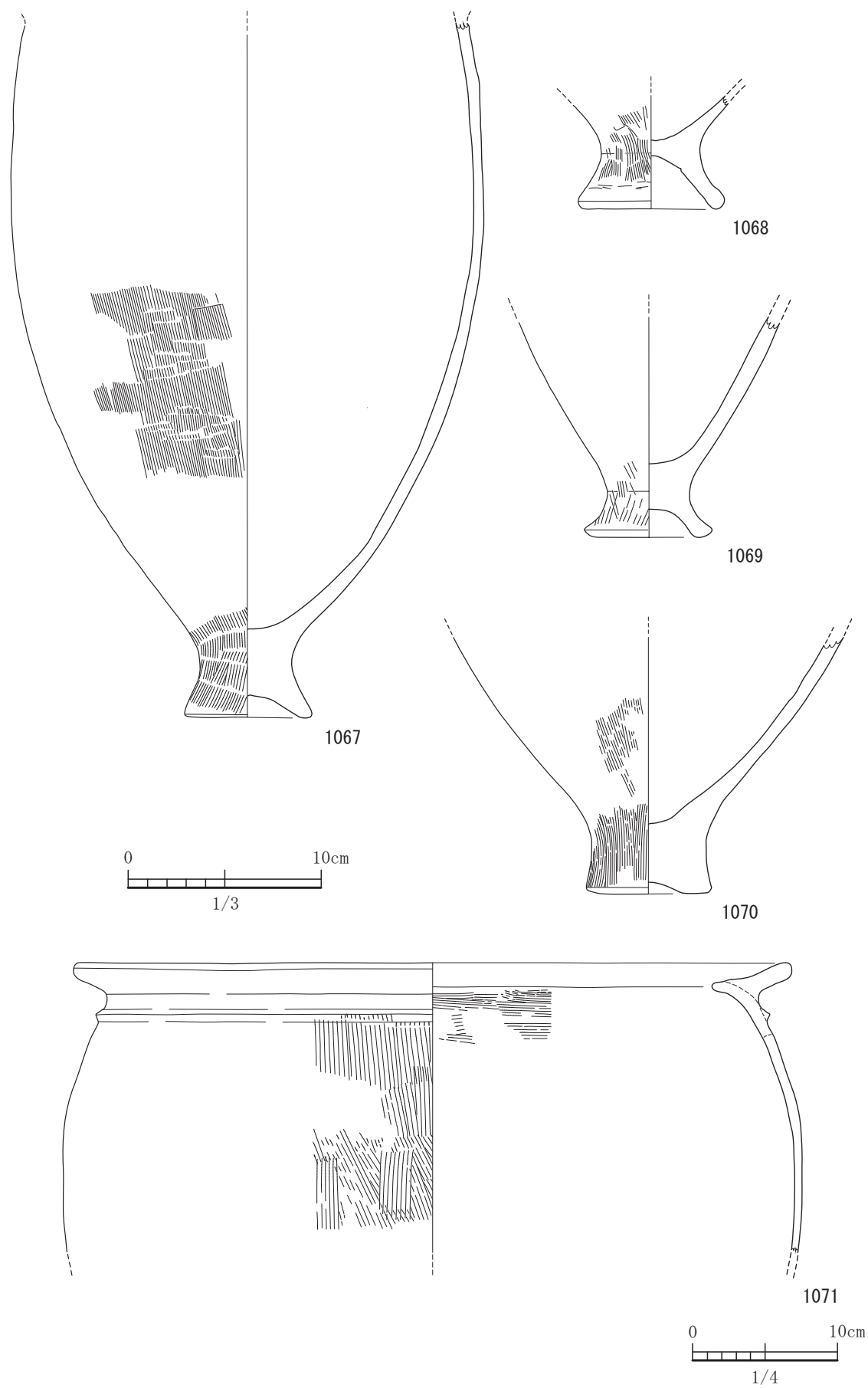


図-405 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 19 (S=1/3, 1071はS=1/4)

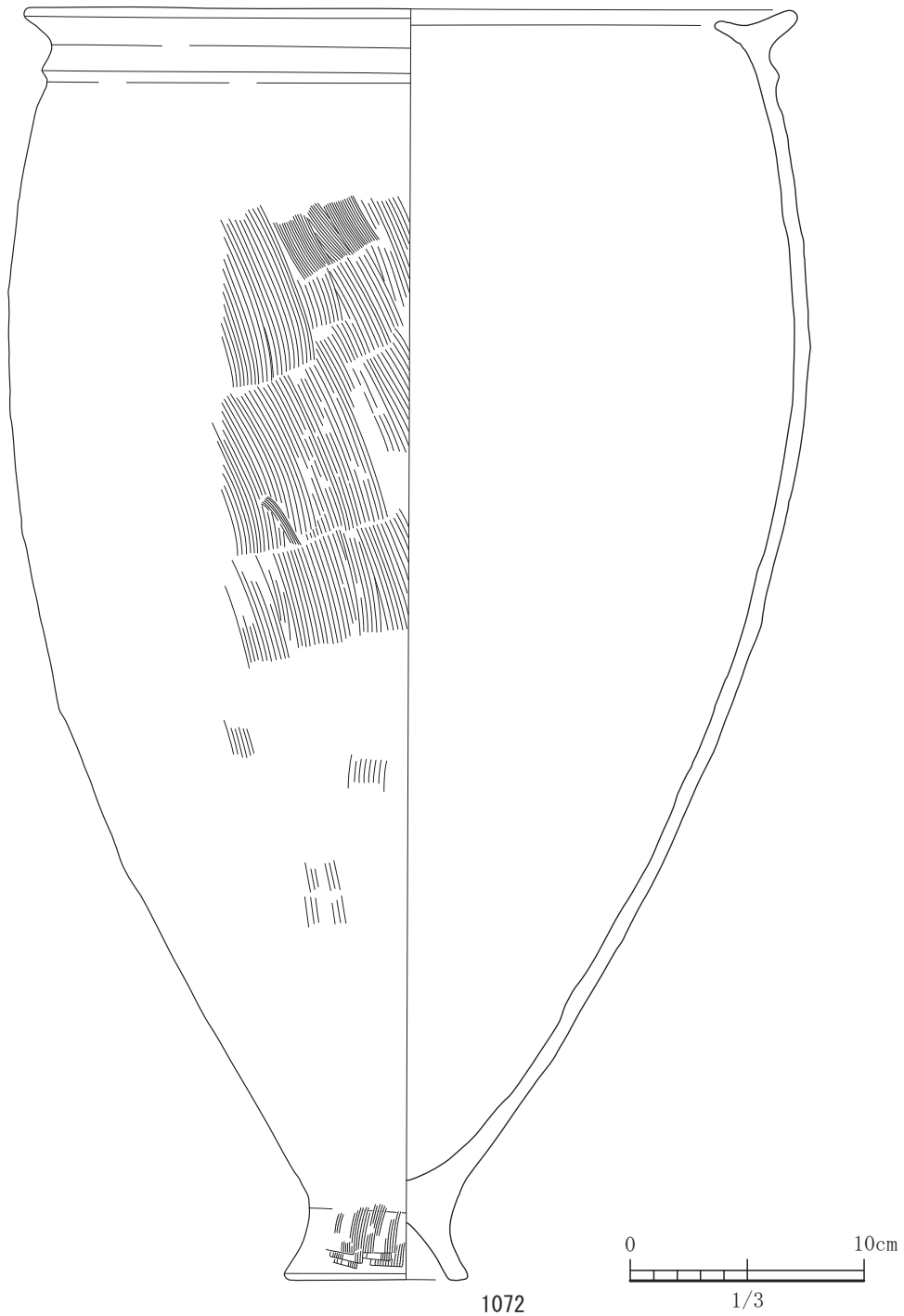


図-406 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 20 (S=1/3)

られる。1061は平底の小型の甕形土器である。丹塗りを施してある。1062から1066までは平底の壺形土器の底部から胴部であろう。1063の底部は段を付けている。外面は被熱を受け赤色化している。1066は外面にはヨコミガキが施されている。1067から1070は台付甕の胴部から脚部である。1067は脚部は小さ

く底部は全体的に肉厚となっている。1068は端部をやや丸める。1069は裾部がやや外に開く。1070は脚部の内面のえぐりが小さい。1071は甕形土器である。おそらく甕棺として使用されたもので後世に掘り返したものであろう。頸部下に断面形状が三角形の突帯を1条めぐらす。1072は台付甕である。外面には

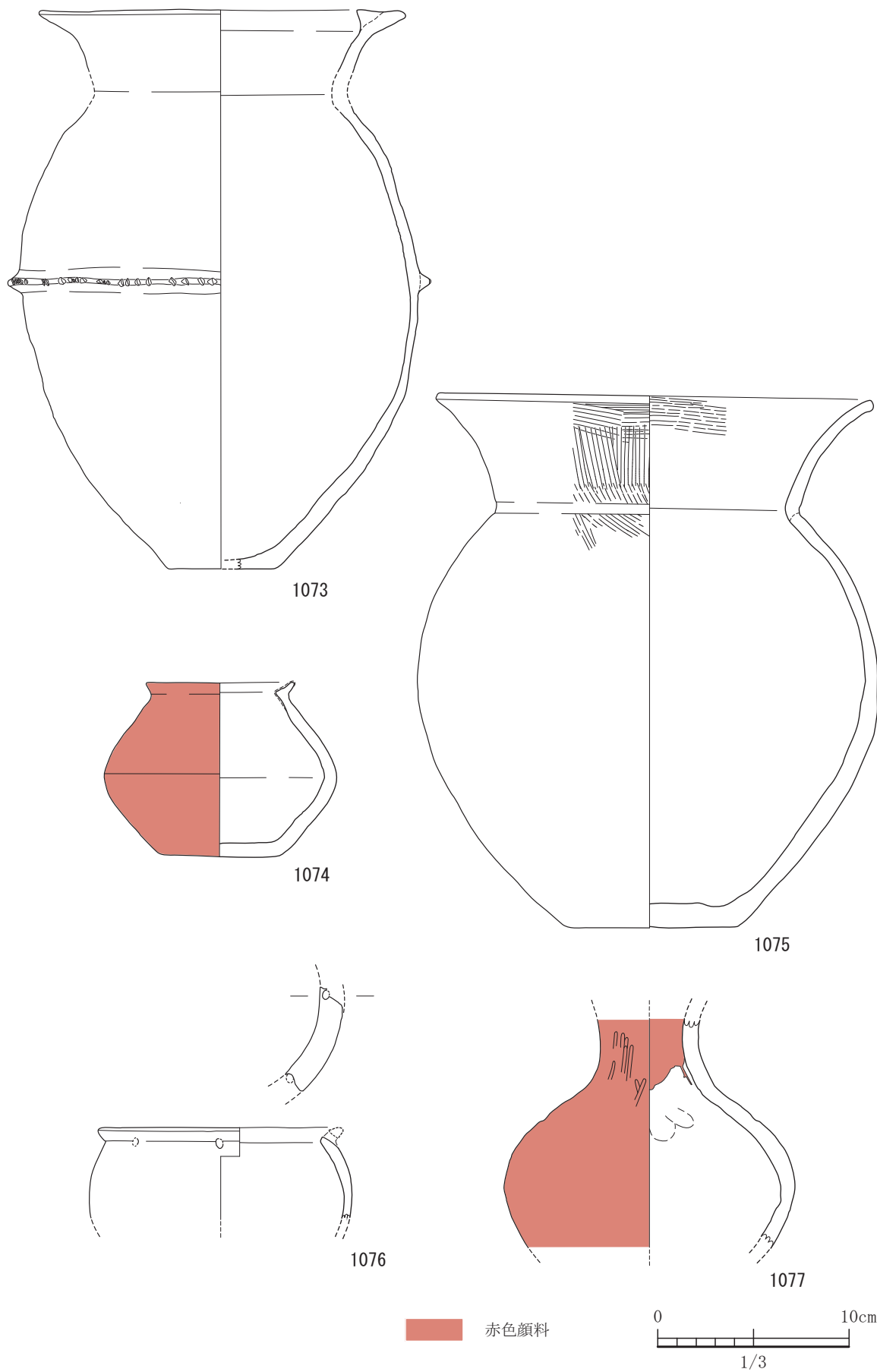


図-407 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 21 (すべてS=1/3)

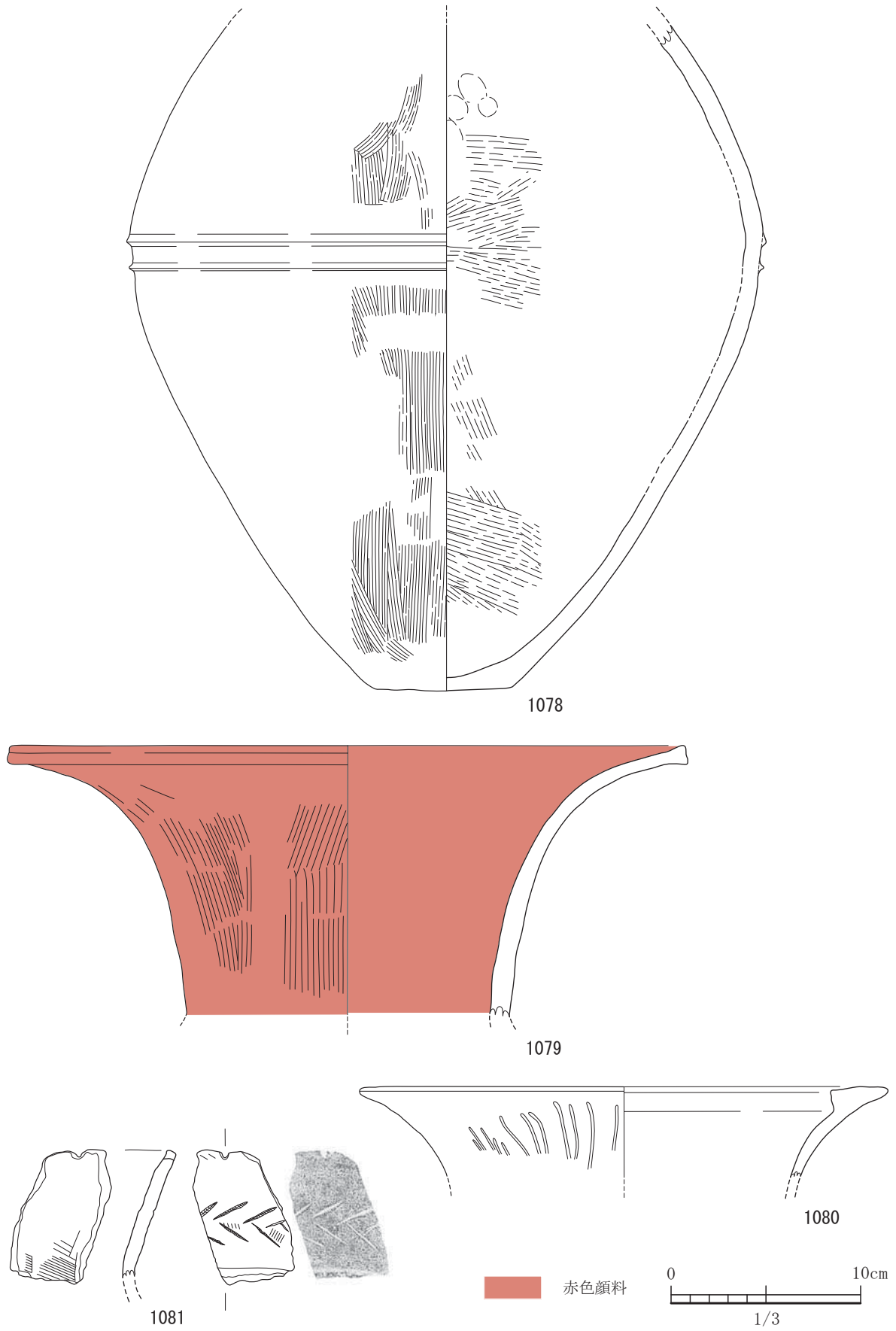


図-408 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 22 (すべてS=1/3)

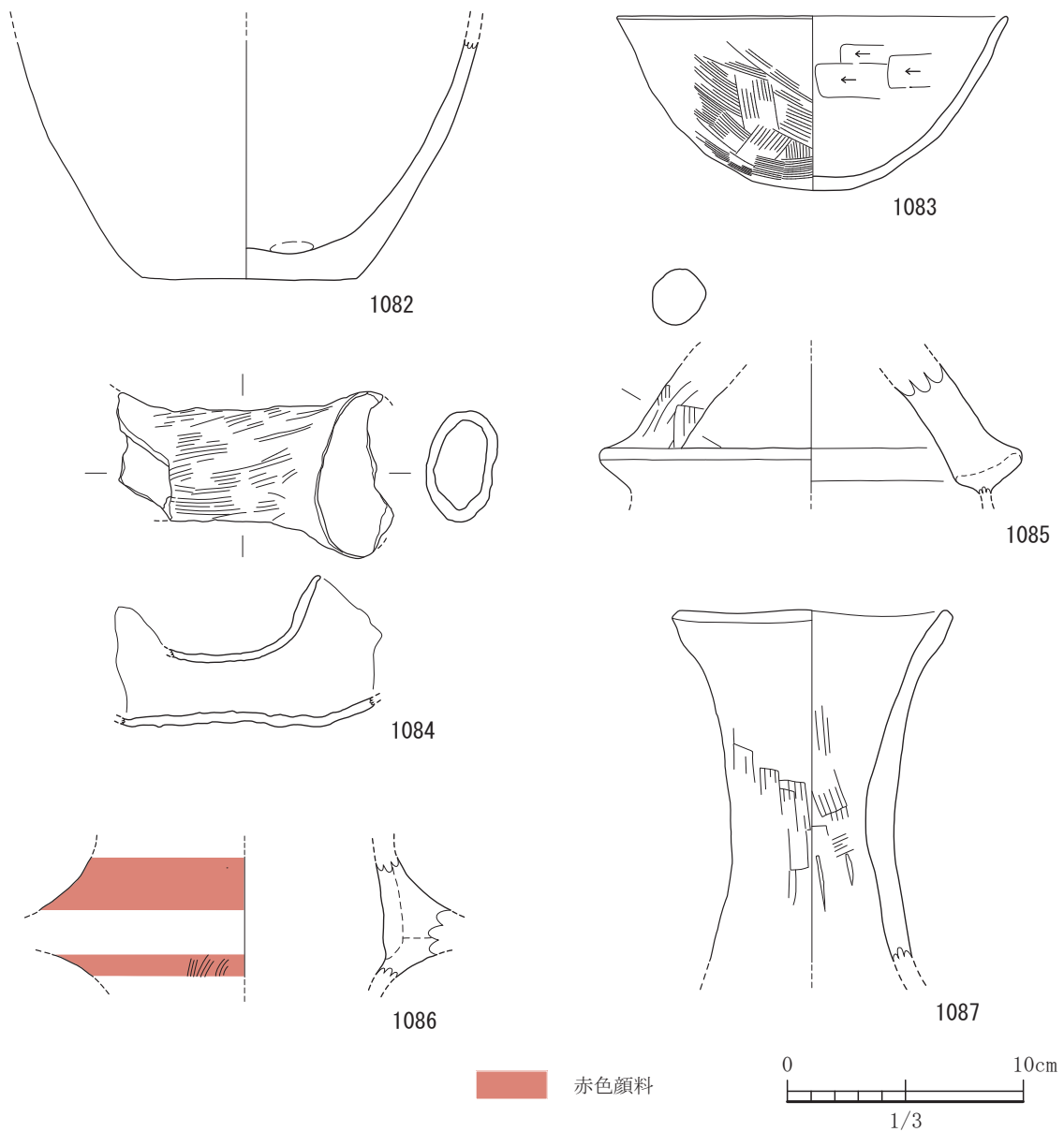


図-409 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 23 (すべてS=1/3)

ススが付着している。1073から1082までは壺形土器である。1073は口縁部は平縁であり、最大胴部に刻み目突帯文を施す。1074は広口壺である。口縁部の内面側がはく離している。丹塗り土器である。1075は頸部から口縁部にかけて外反しながらのびる。1076は広口壺である。口縁部は1/8の残存である。その中で穿孔が2箇所施されている。1077は丹塗りの長頸壺である。タテ方向の丁寧なヘラミガキが施されている。1079は丹塗りの壺形土器の口縁部である。端部は中央を沈線状に凹ませる。1081は櫛描文が施され古墳前期のものであろうか。1084は把手状

土器であり、用途は不明。注口かもしれない。1085は甕形土器の口縁部につけたバスケット型の把手であろう。甕形土器は黒髪式である。1086は須玖Ⅱ式の筒形器台の受け部であろう。突帯が付いているが欠損している。丹塗り土器である。1087は器台である。中央部は絞られている。1088から1150まで古墳時代の所産と思われる。1091は台付坏で外面に赤色顔料痕が見られる。脚部は直線的である、1092は台付鉢である。ほぼ完形である。1093は台付坏で脚部の裾部で大きく開く。1094は脚部は大きく開くが直線的。1095から1097まで高坏である。1095の坏部は



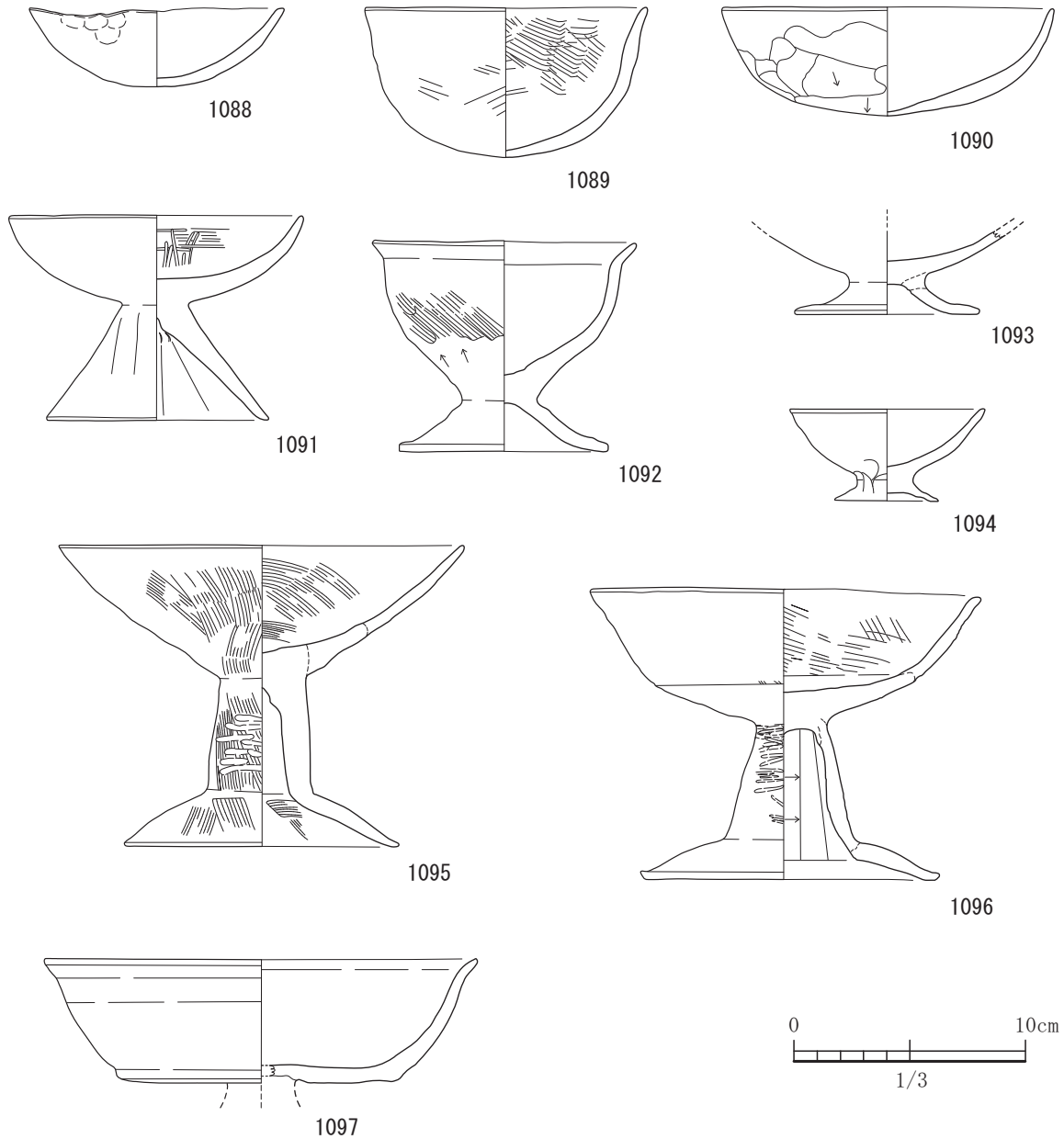


図-410 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 24 (すべてS=1/3)

ほぼ直線的である。脚部の柱状部は短くやや中太り。1096は坏部の上半と下半が分かれる。1097は底部近くで段を作りだし口縁端部で小さく外反する。1098から1109までは甕である。1098はやや下膨れで口縁部は外反し端部は小さくすぼむ。1099はやや長胴であり口縁部はやや外湾ぎみで外面の調整はタテハケ目から胴部の肩部でヨコハケ目を施す。1100は尖底であり器壁がやや薄い。外面ではタテハケ目からヨコハケ目である。布留式土器である。1101は器壁が非常に厚い。頸部から口縁部にかけて外反する。1102

は布留式土器であろう。タテハケ目のちヨコハケ目を施し口縁部がやや外湾している。端部は沈線状を呈している。1103は下ぶくれであり、外面には右上がりのタタキが見られる。1104は口縁部がやや外湾ぎみで端部は水平に整えられている。1105は口縁部がやや外反ぎみで端部はすぼむ。外面にはタタキが残っている。1106は口縁部が長くなっている。1107は内面はタテ方向のケズリで外面はタテ方向のハケ目調整である。1108は口縁部が長くなり内外面ともにハケ目調整である。1109は内面はヘラケズリのち



図-411 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 25 (すべてs=1/3)

ハケ目調整、外面がハケ目調整であるが口縁部にはその後丁寧なナデを施す。口縁端部は平坦を形作る。1110から1119までは壺である。1110は胴部内面はヘラケズリで外面はハケ目調整でタタキが残る。底部

には被熱による赤色化が見れ、ススが付着する。古墳中期の所産であろうか。1111は胴部が下膨れであり、底部が平底気味である。外面にはタタキが残っている。意識的にヨコハケ目を外面に施そうとして

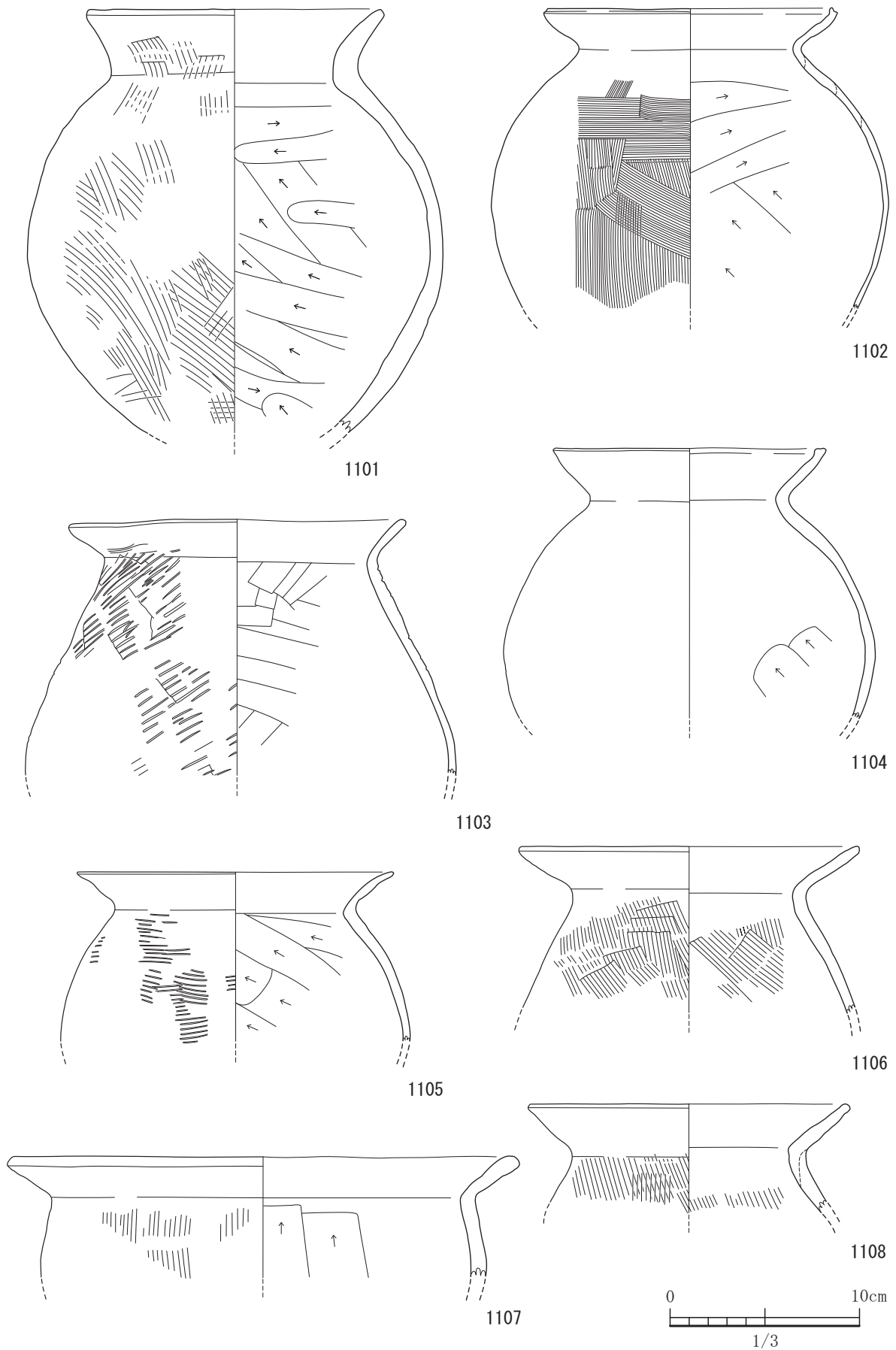


図-412 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 26 (すべてS=1/3)

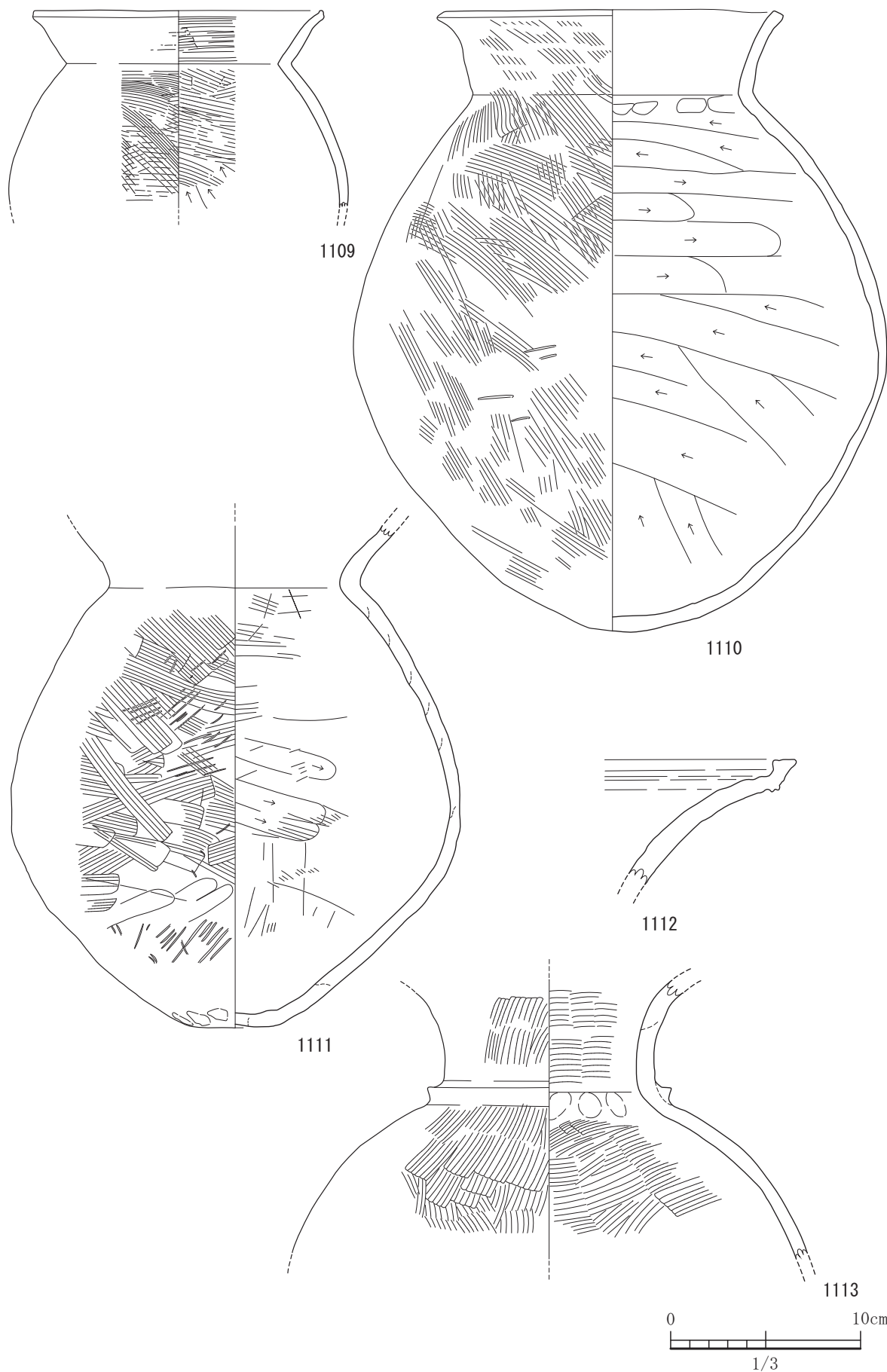


図-413 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 27 (すべてS=1/3)

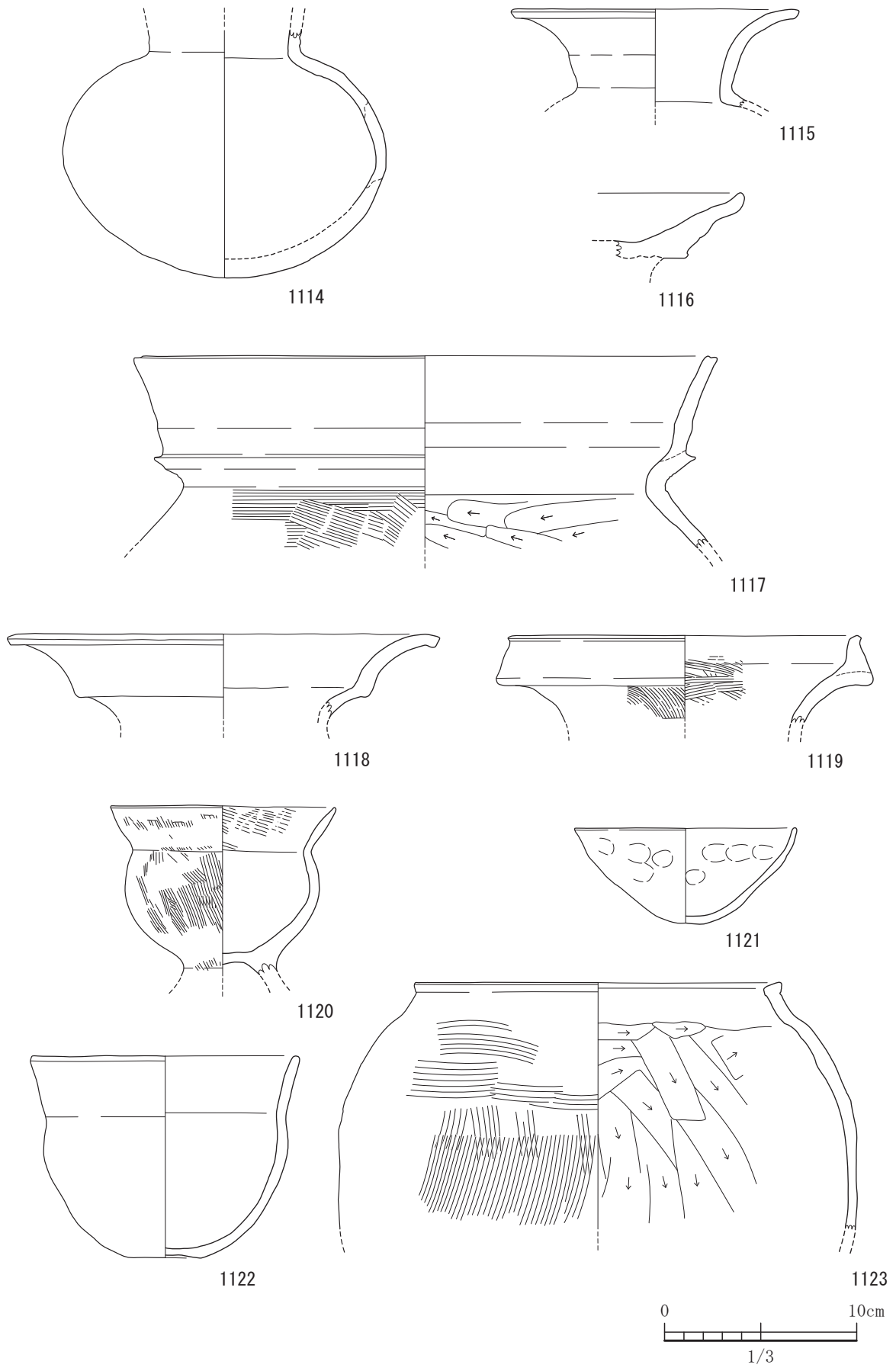


図-414 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 28 (すべてS=1/3)



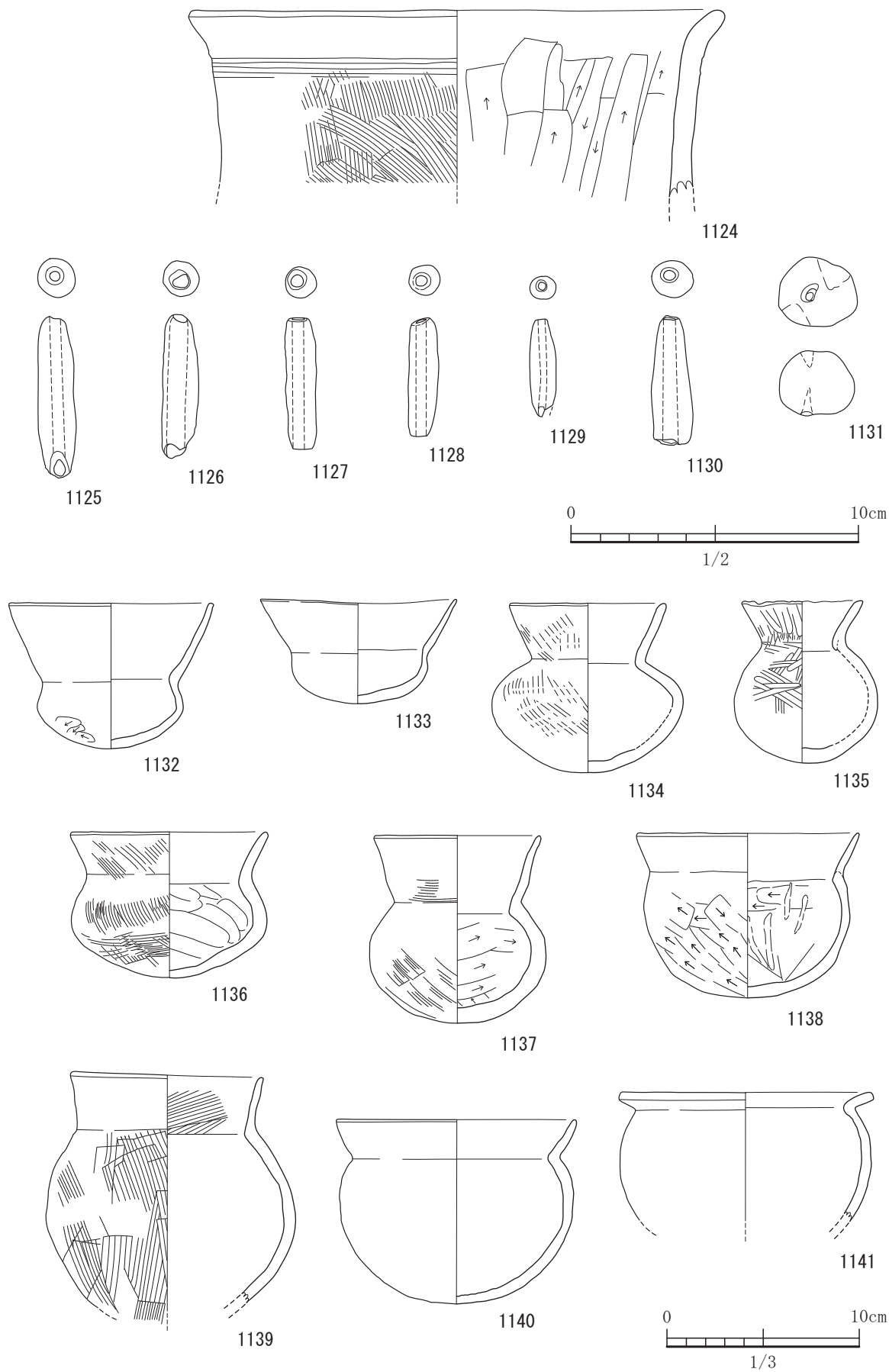


図-415 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 29 (S=1/3, 1125~1131はS=1/2)

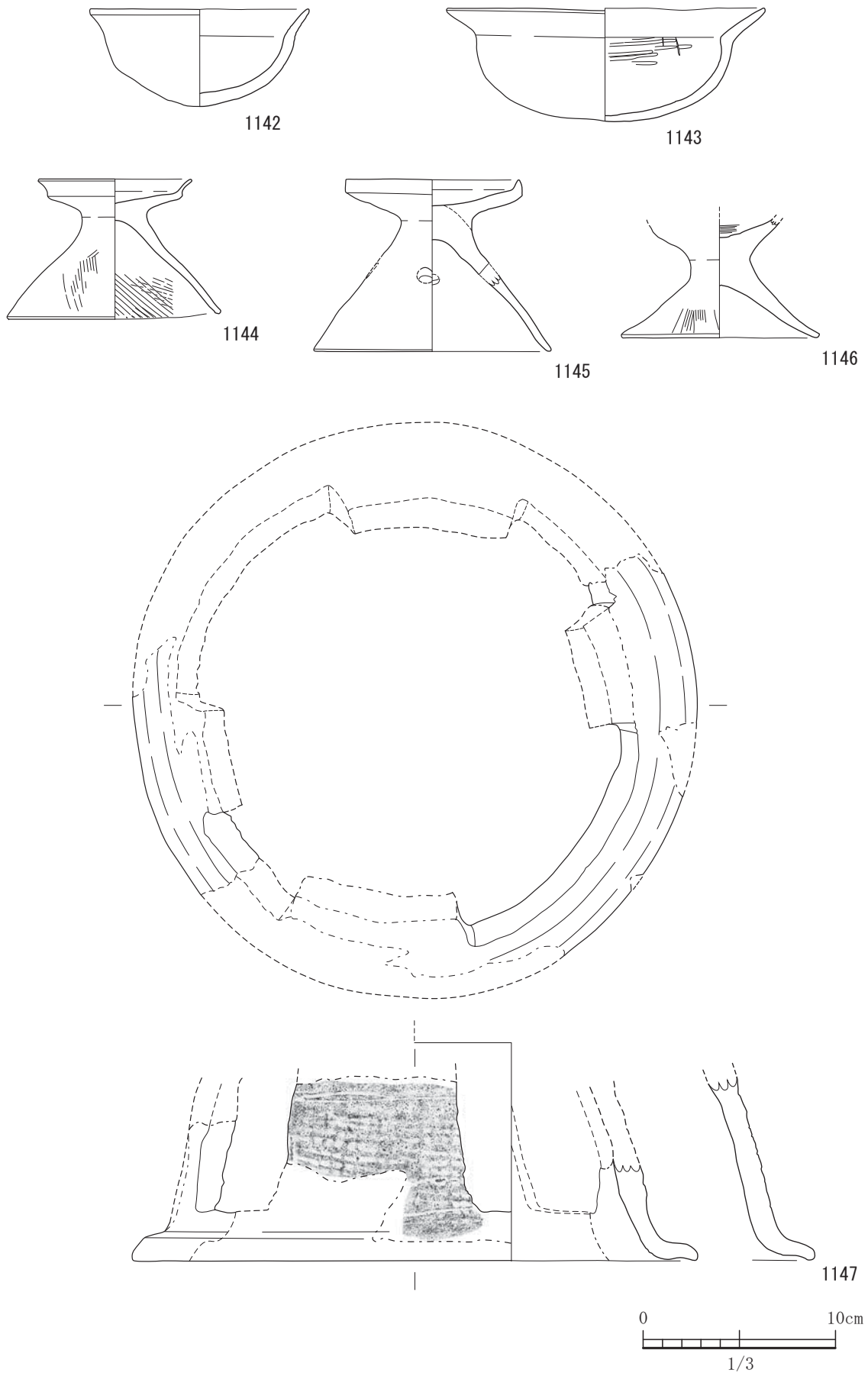


図-416 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 30 (すべてS=1/3)

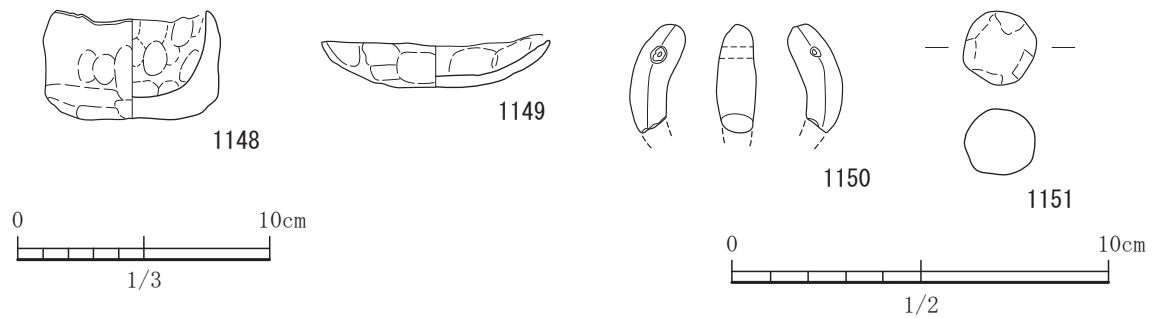


図-417 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 31 (S=1/2, 1148はS=1/3)

いるようである。1112は壺である。白色粘土であり胎土が在地のものとは異なる。口縁の端部は凹線を施し窪んでいる。1113は壺である。頸部と胴部の境界に断面形状が三角形の突帯をめぐらす。1114はおそらく長頸壺であろう。ヨコミガキで仕上げている。1115は壺の頸部から口縁部である。口縁部は大きく外反しヨコナデ調整である。1116は複合口縁壺の口縁部であろう。1117は山陰系の複合口縁壺の頸部から口縁部であろう。第1口縁から第2口縁にかけての屈曲部が突帯のように突き出て段を作り出している。第2口縁は直線的である。口縁部は丁寧なヨコナデを施す。1118も複合口縁壺である。第1口縁と第2口縁の屈曲は強く第2口縁は外反する。丁寧なヨコナデ調整である。1119も複合口縁壺の頸部から口縁部であろう。第2口縁の端部で小さく外反させる。1120は台付小形壺である。口縁部で中央がややふくらみ端部は小さくすぼむ。1121は鉢である。古墳前期の所産であろう。指頭圧痕が残る。1122は鉢で底部が平底を呈する。1123は鉢である。口縁端部は平坦に面取りを施す。内面はケズリ調整で外面はタテ方向のハケ目からヨコ方向のハケ目調整である。1124はおそらく甑の胴部から口縁部であろう。頸部は工具によるヨコナデによって仕上げている。調整は内面が図上右上がりのケズリ、外面がタテ方向のハケ目調整である。器壁は厚い。1125から1130は土錘である。刺し網用であろう。1131は土錘であろう。孔は貫通しておらず未完成のものである。両側から孔をあけている。1132から1140までは小形丸底壺である。1132は丁寧なヨコナデが施され、口縁部の幅が広い。胴部の器高より頸部が高い。古墳前期の所産である。1133は胴部がやや扁平である。頸部のくびれは弱く口縁部はやや長い。1134は、口径より胴

部径の方が大きい。古墳中期の所産であろう。1135も口径より胴部径の方が大きい。外面と口縁部内面はミガキ調整で仕上げている。口縁部の整形はやや雑であり波打つ。1136は口径と最大胴径がほぼ同じである。胴部は扁平である。1137は口径が最大胴径より小さい。胴部は球形である。1138は頸部のしまりは弱く、口縁部は直線的のび端部は小さくすぼむ。1139は口径が最大胴径より小さく口縁部は直立までいかないが上方へのびる。底部は打ち搔いている可能性がある。1140は口縁部がやや外湾して端部が小さくすぼむ。1141は小形の甕である。1142は小形丸底鉢であり、頸部のくびれはなく胴部からそのまま口縁部となるような形状である。1143は小形「く」字口縁鉢である。頸部を「く」字に屈曲させ口縁部としている。1144と1145は庄内系小形器台である。1146は庄内系小形器台の模倣品であろう。1147はすかしが4箇所施してある器台を想定している。接点のない2部位から復元したものである。すかしの大きさは大小あり交互に空けているものと推定している。1148と1149は手捏ねである。1150は土製の勾玉である。端部が欠損している。1151は土玉である。直径2.0cmを測る。1152から1166まで土師器の坏である。古代の所産のものである。1152から1159までの体部はほぼ直線的である。1160は扁平であり体部下部にヘラケズリを施し丸みを作り出す。1161は扁平である。1162は底部から口縁部にかけて丸みを作り出している。ヨコナデ調整である。端部で小さく外反させる。1163は底部外面に刻書がある。大師とも見えるが欠損していて釈読できない。1164から1166までは油煙が残っている。灯明皿として使用されたようである。1167と1168は須恵器の坏である。体部はほぼ直線的である。8世紀後半期である。

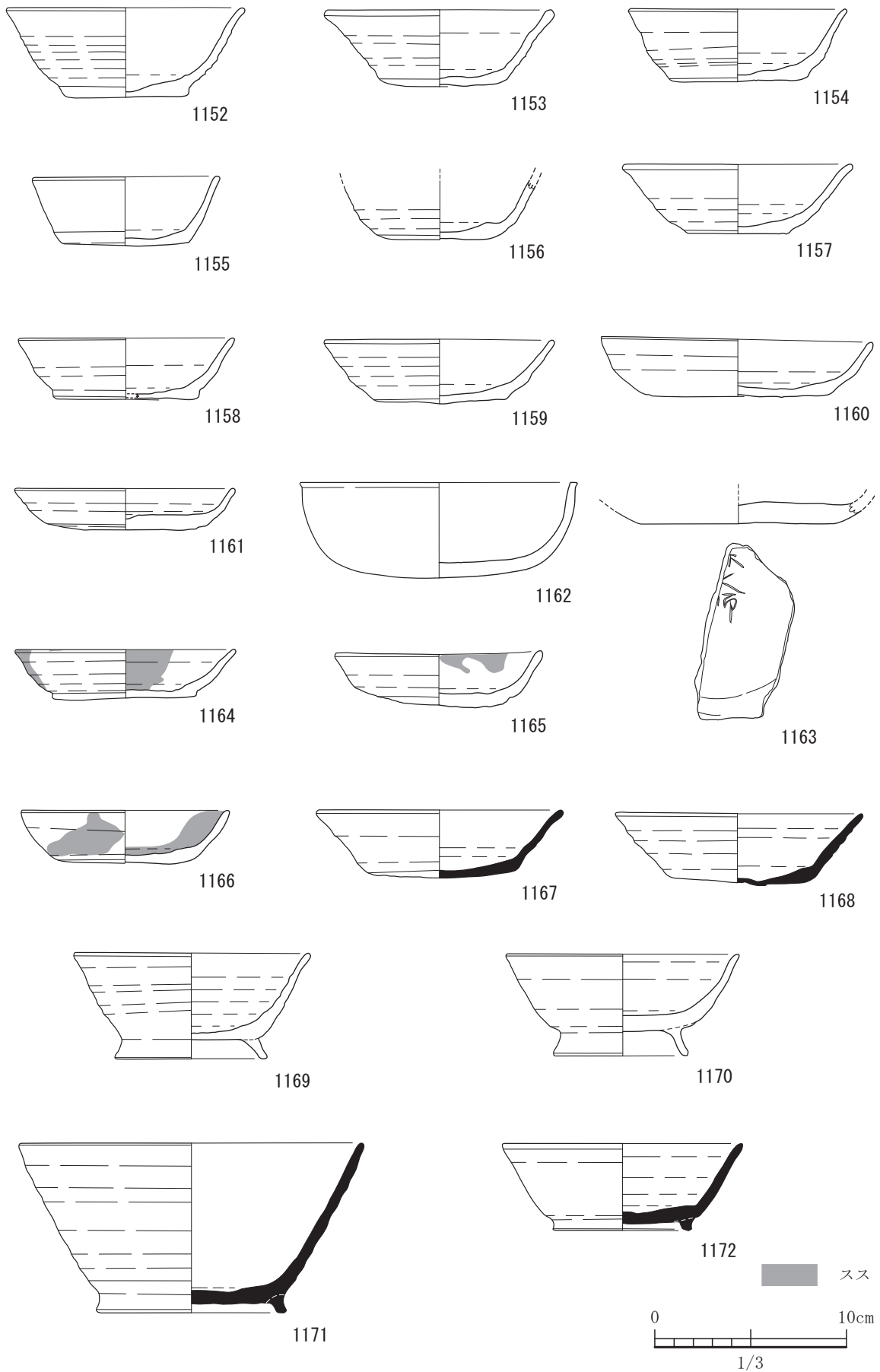


図-418 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 32（すべてS=1/3）

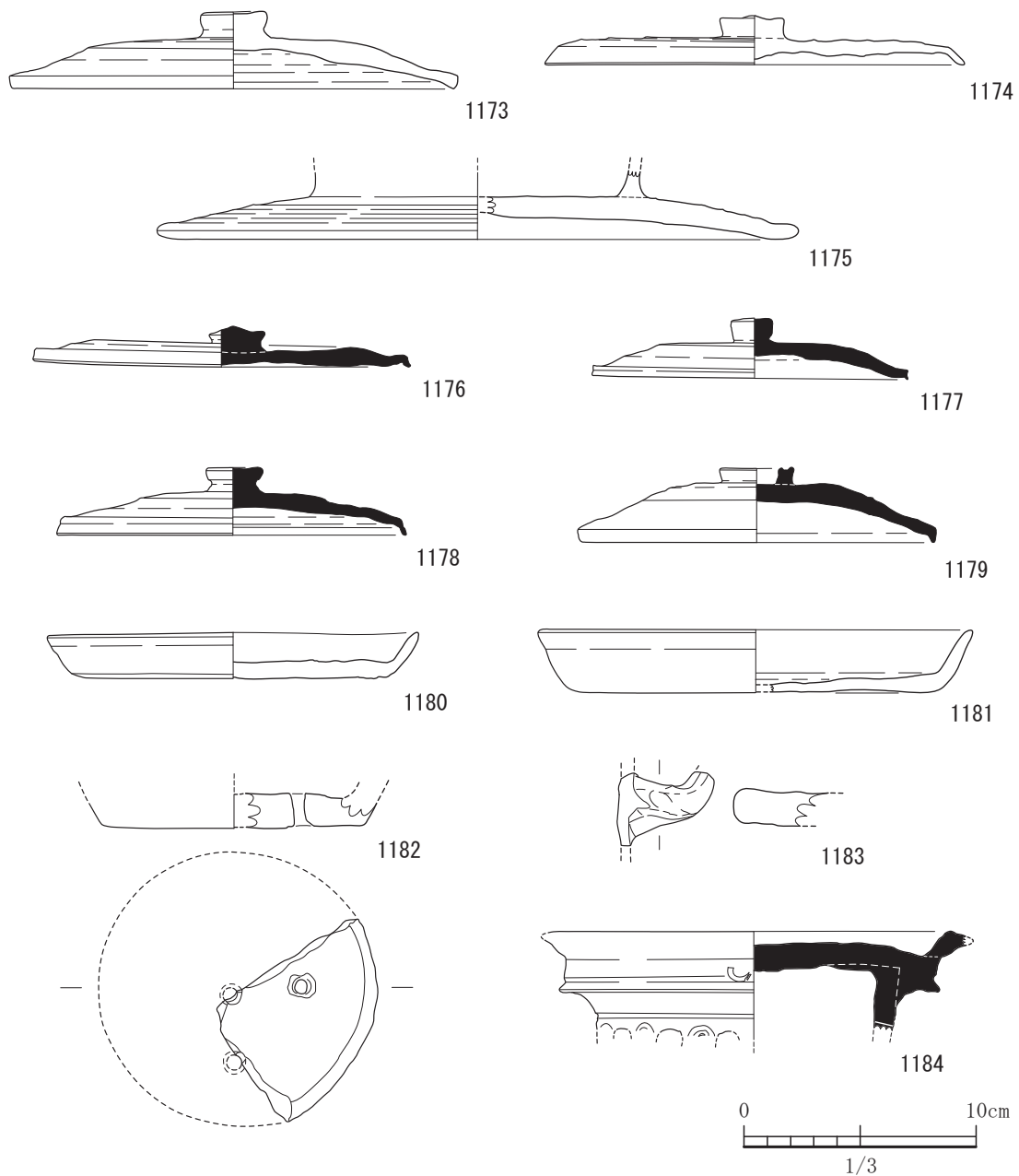


図-419 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 33（すべてS=1/3）

う。1169と1170は土師器の椀である。1171と1172は須恵器の椀である。1171は体部は直線的にのび底部と体部の境界付近に断面形状が四角形の高台を貼り付ける。器高は高い。1172は小形である。やはり8世紀後半期の所産であろう。1173から1175まで土師器の蓋である。扁平である。1175はつまみというより紐とおしに使われる鈕であったかもしれない。欠損しているので不明である。1176から1179までは須恵器の蓋である。1179は輪状のつまみをもつ。1182

は甑の一部であろうが不明。穿孔は5穴あったのではなかろうか。1184は、円面硯である。側面にスタンプが見られる。8世紀後半期の所産であろうか。

1187はサヌカイト製の石匙である。丁寧に刃部を作り上げている。1188から1192まで打製石鏃である。1191はチャート製で剥離面が残る。1193は三日月形石器で鋭利な刃部を作り出しているわけではない。1194は磨製石鏃で基部が欠損している。片岩製である。1195は剥片石器である。両面加工のスクレ



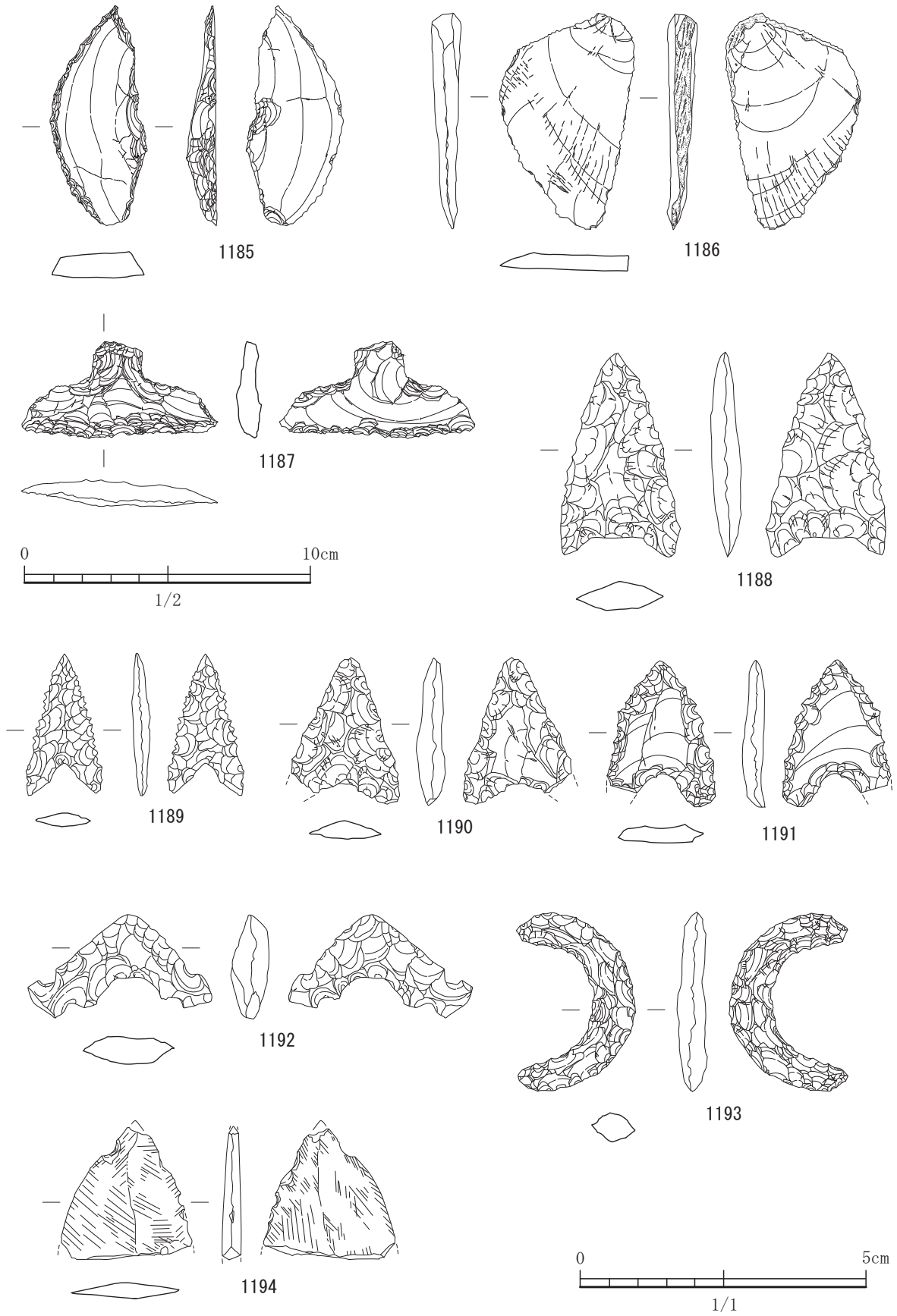
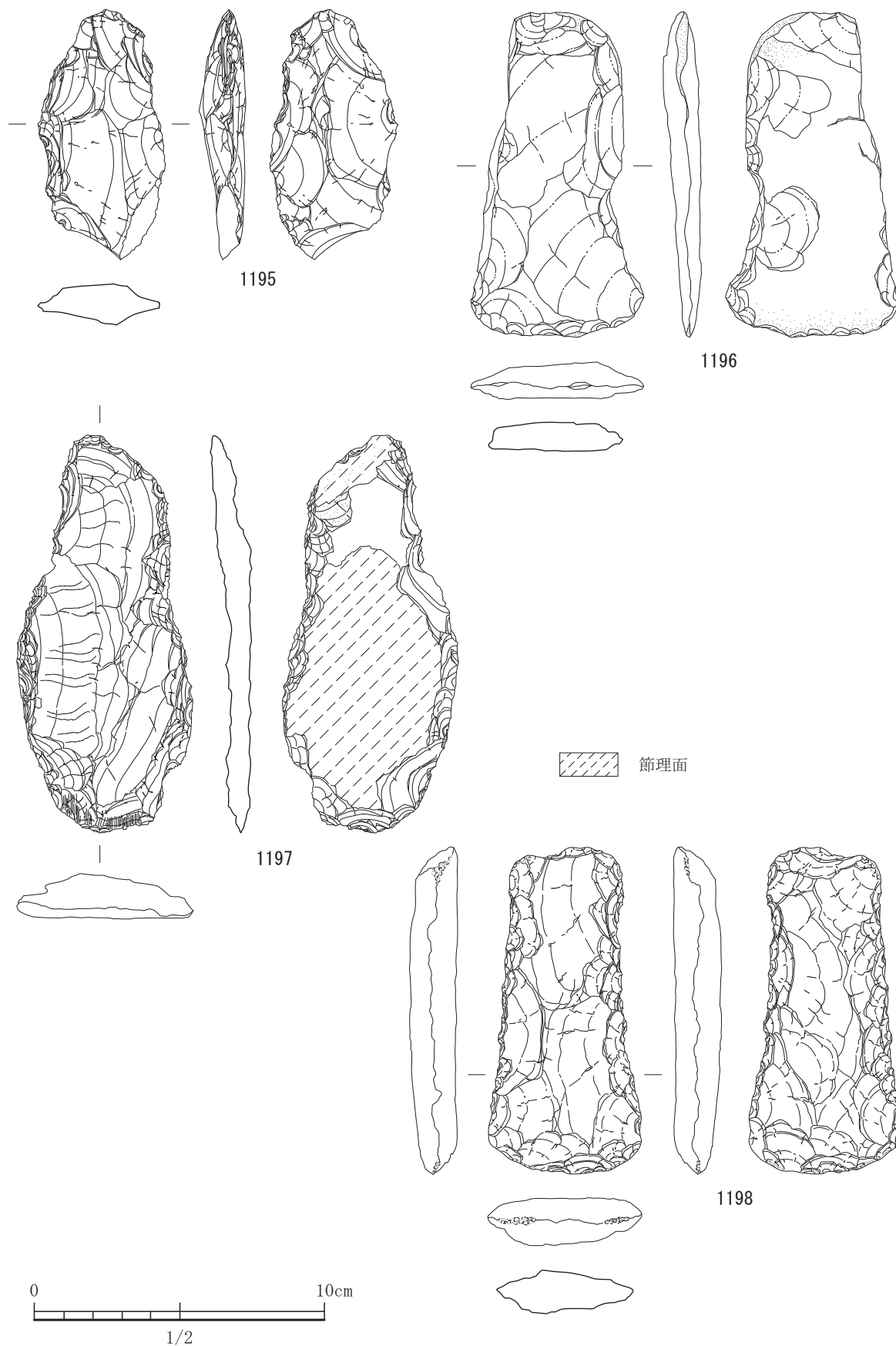


图-420 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 34 (S=1/1, 1185~1187はS=1/2)



図一421 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 35 (すべてS=1/2)

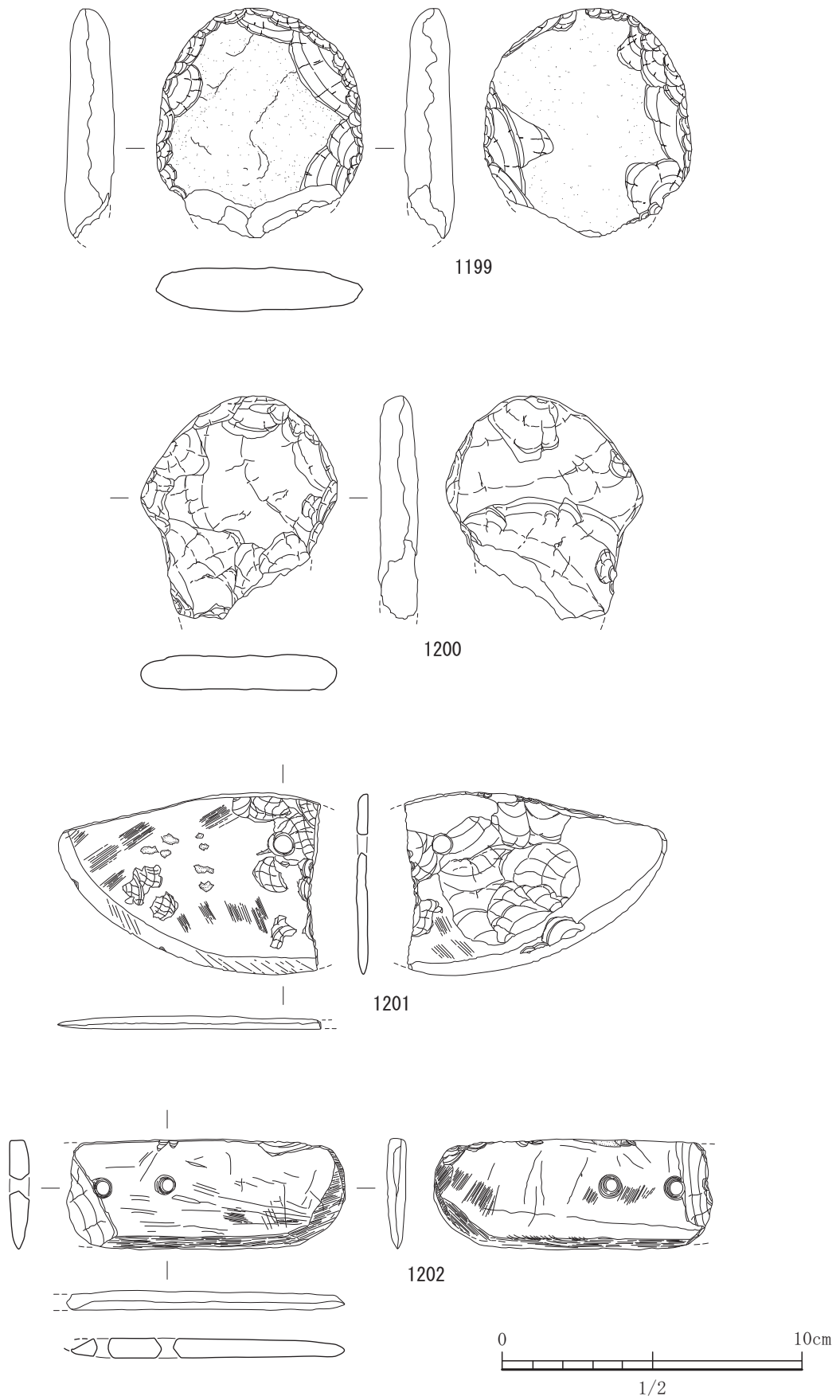


図-422 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 36（すべてS=1/2）

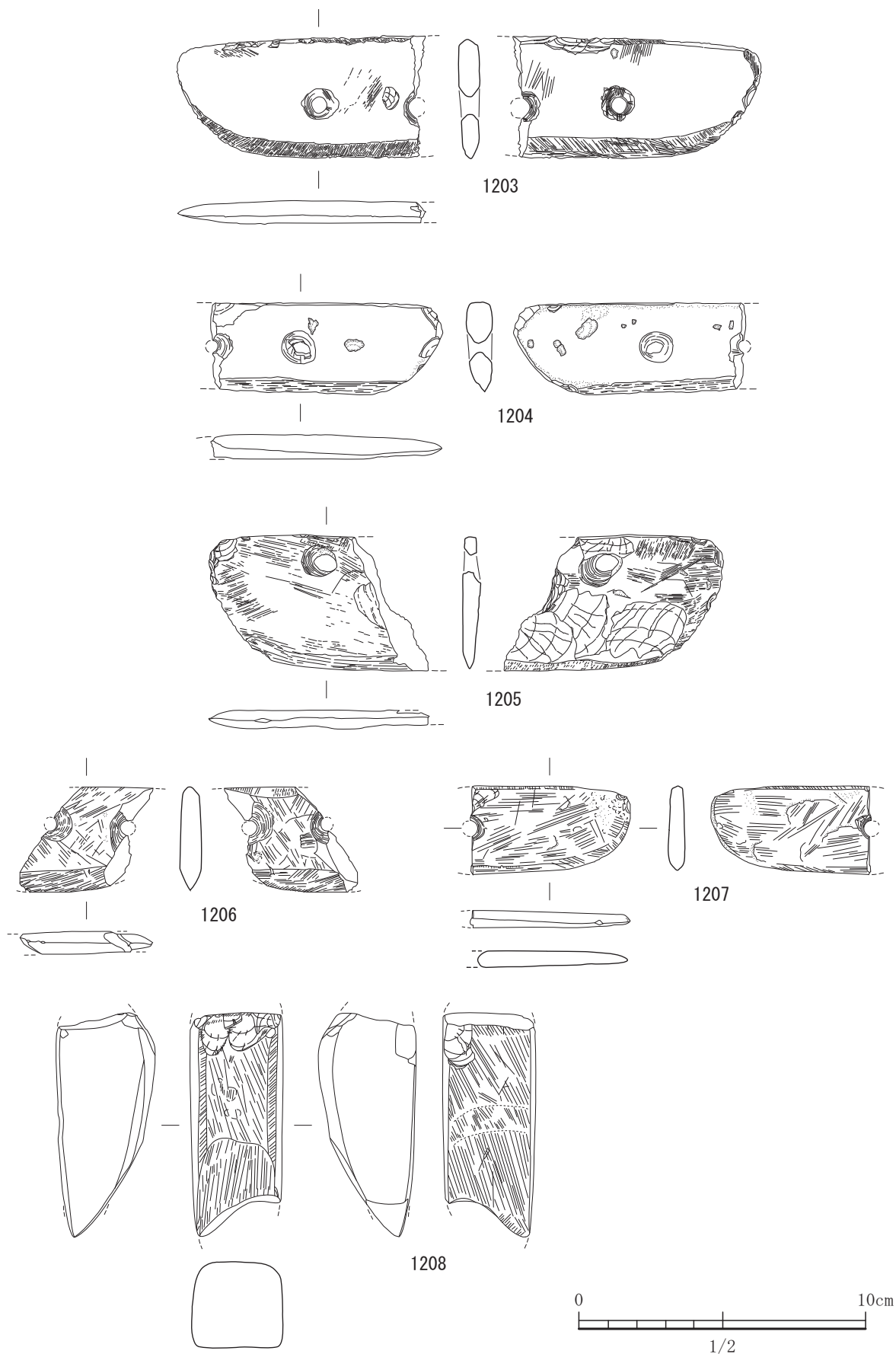


図-423 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 37（すべてS=1/2）

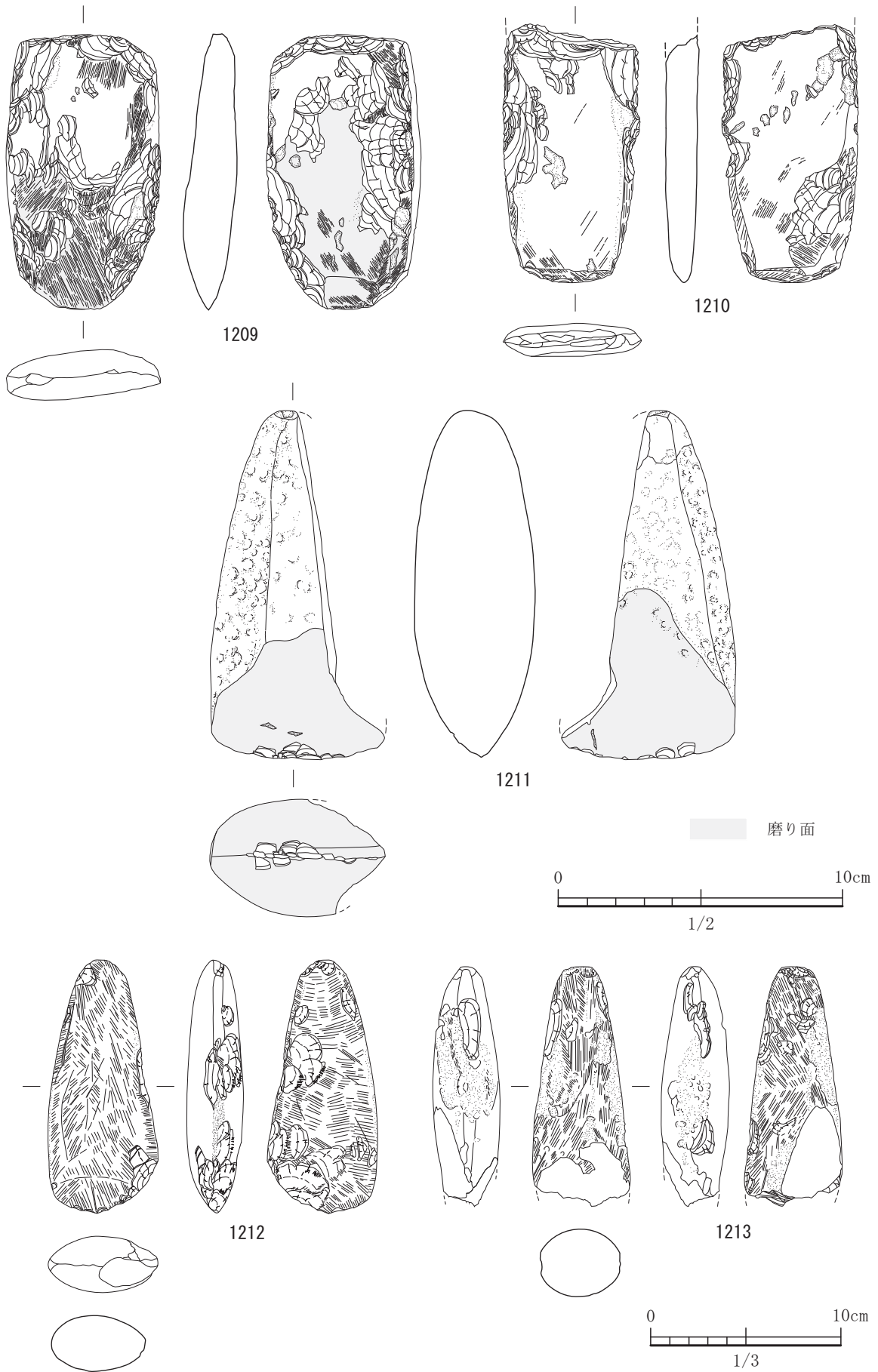


図-424 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 38 (S=1/2, 1212, 1213は S=1/3)



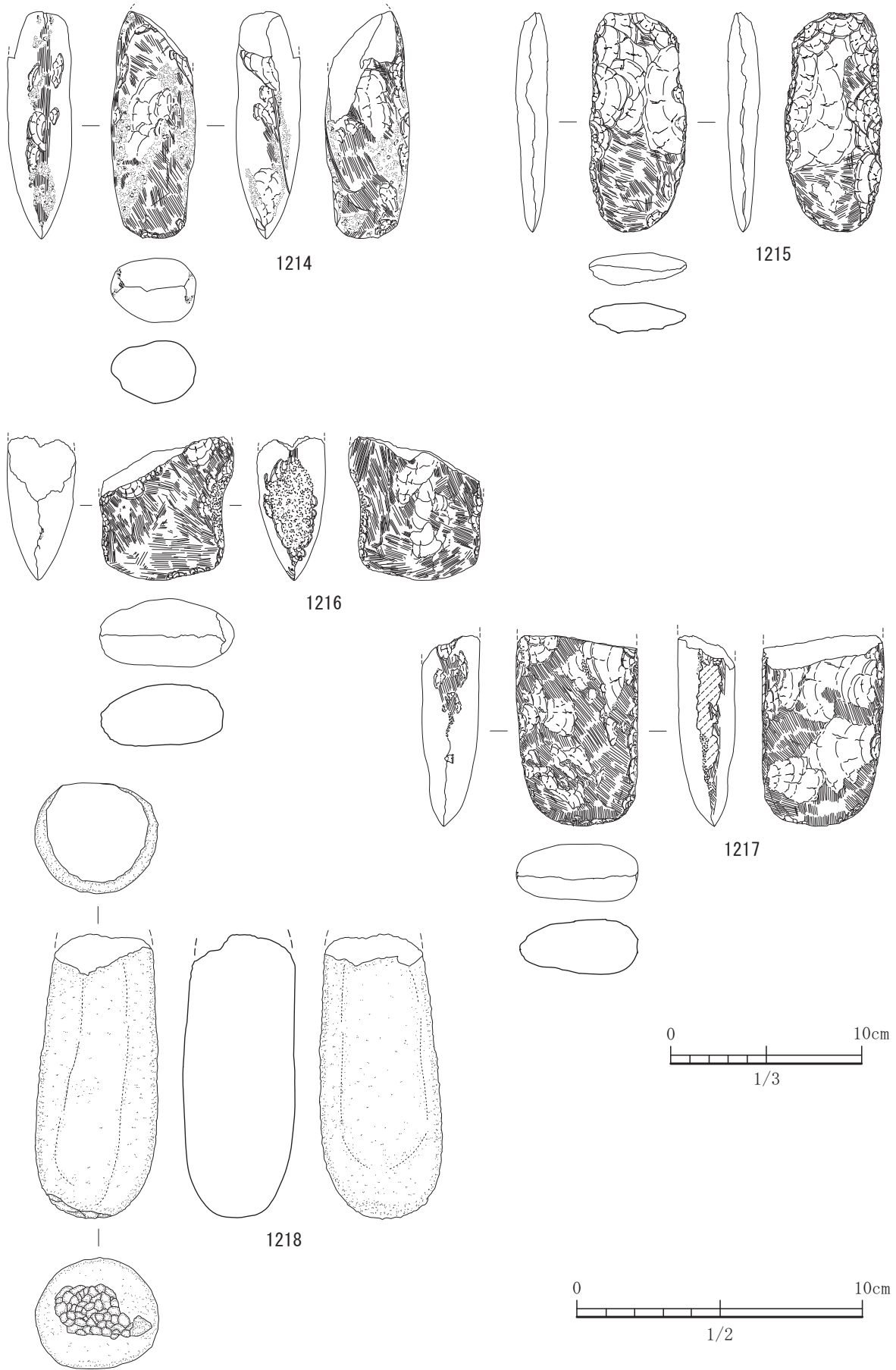


图-425 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 39 (S=1/3, 1218はS=1/2)

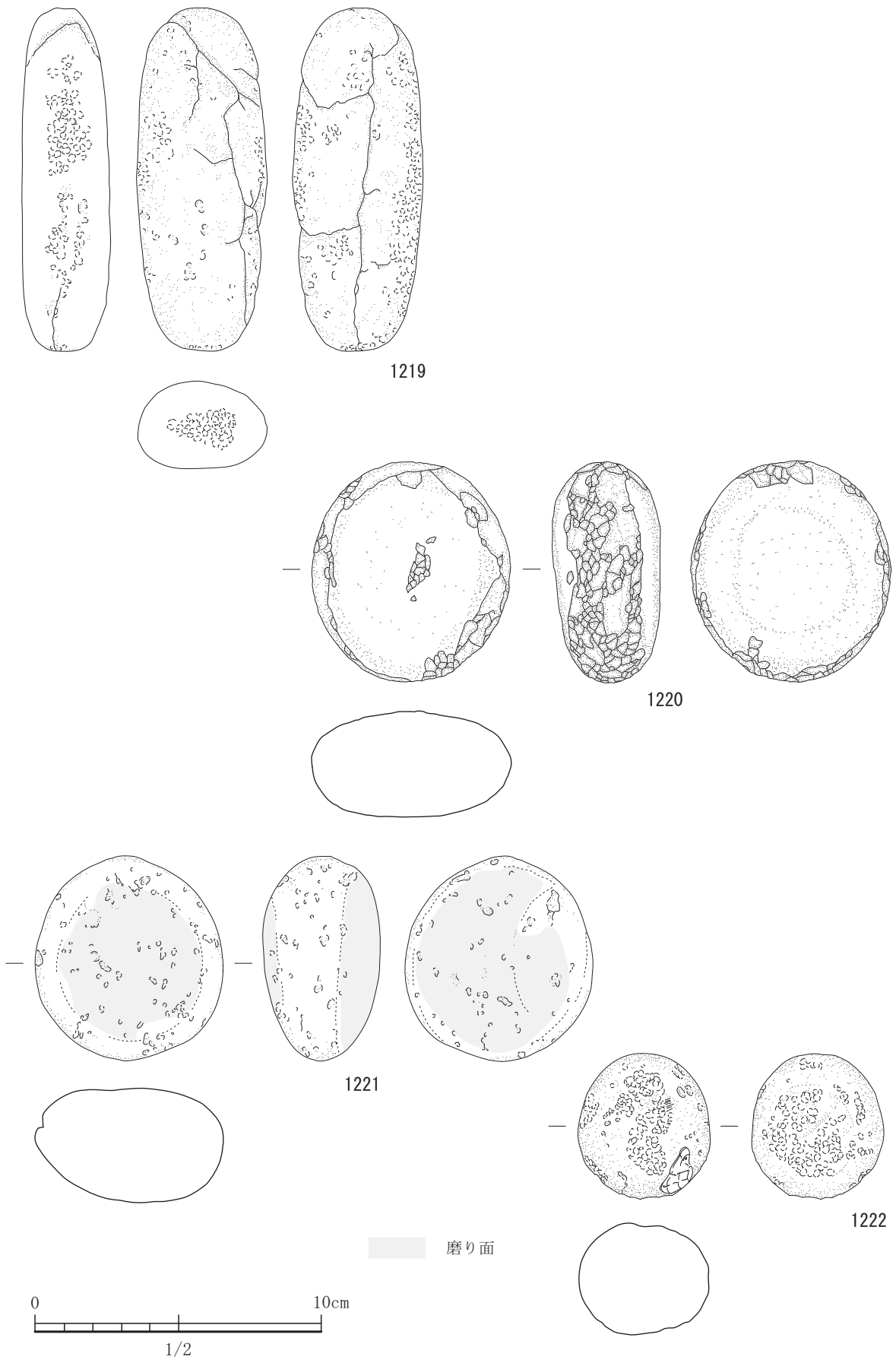


図-426 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 40（すべてS=1/2）

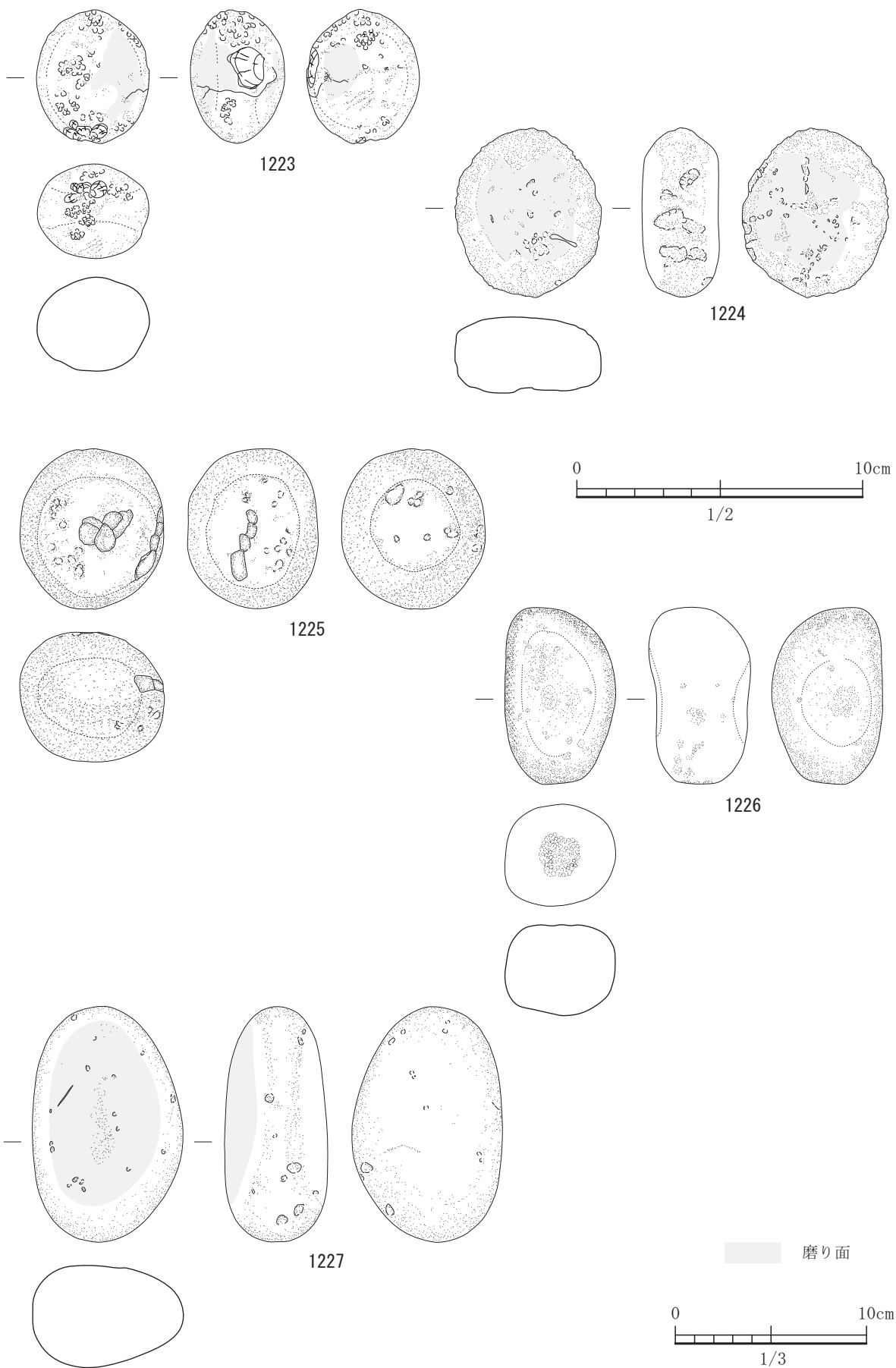


図-427 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 41 (S=1/3, 1223, 1224はS=1/2)

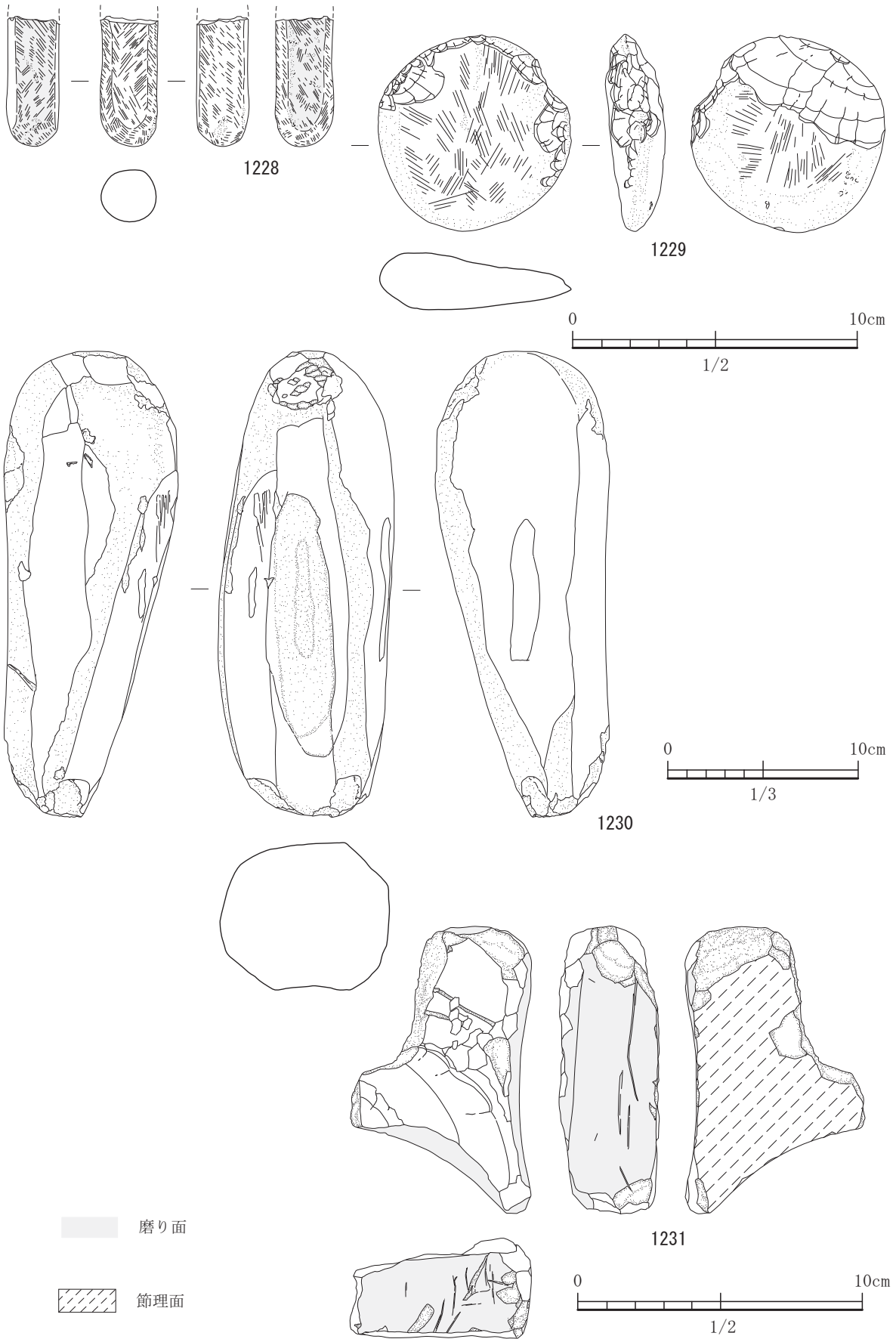


図-428 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 42 (S=1/2, 1230はS=1/3)

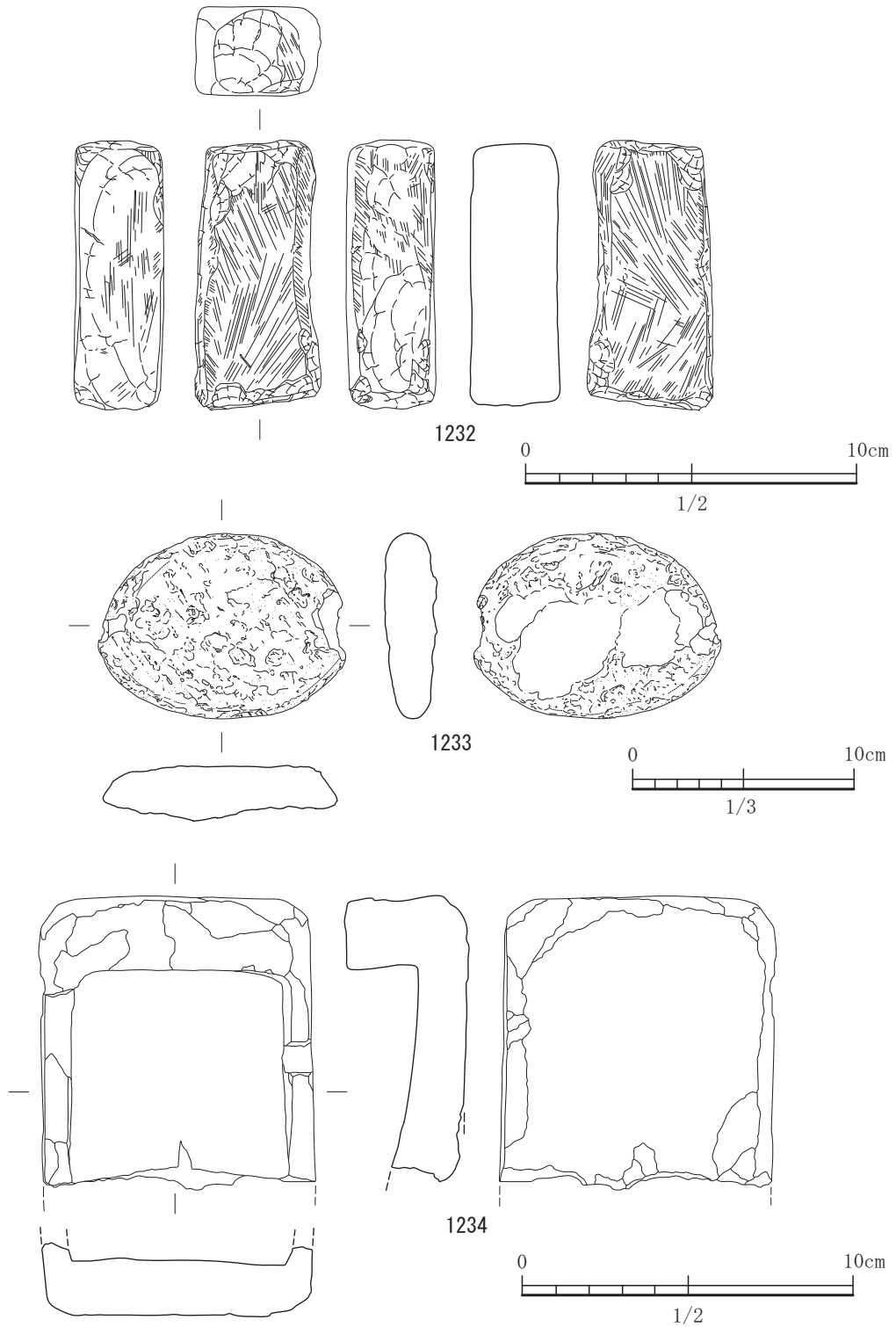


図-429 平坦地区第2包含層(2b層)出土遺物実測図 43 (S=1/2, 1233はS=1/3)

イパーであろう。1196から1200まで打製石斧である。1196はえぐりを作り上げている。1201から1207まで石包丁である。1208から1217までは磨製石斧である。柱状片刃石斧で折れて欠損している。1216は蛇紋岩

製である。1218と1219は敲石である。明瞭な敲打痕が認められる。1220から1225まで磨石である。1221は全面に磨痕が認められる。1226は敲石である。全体に被熱を受けた痕跡が残る。1228は砥石で全面に

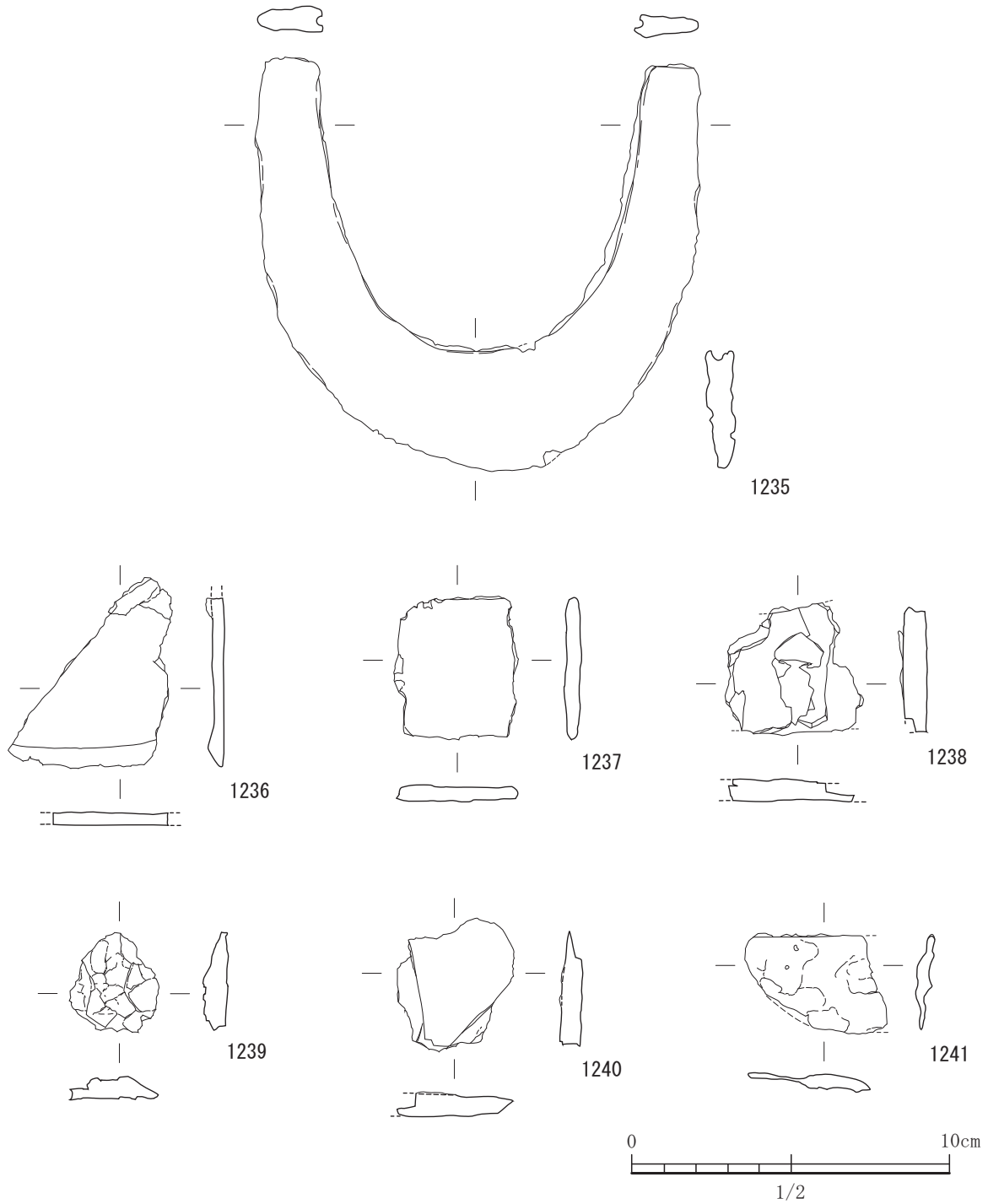


図-430 平坦地区第2包含層（2b層）出土遺物実測図 44（すべてS=1/2）

擦痕が見られる。1229はあまり使用されてはいないようである。1231は砥石である。石材はリソイダイトである。3面の使用面が見られる。1233は浮子であろう。端を窪ませた部分が2箇所認められる。軽石製である。1234は石製硯である。石材はリソイダイトである。1235は鋏先である。完形である。1236

は刀子であろうか。1237から1241は不明鉄器で用途はわからない。

**平坦地区第1包含層（2a層）出土遺物**

1242から1245まで縄文土器である。1242は縄文後期の辛川式であり磨消縄文が見られる。1243は縄文



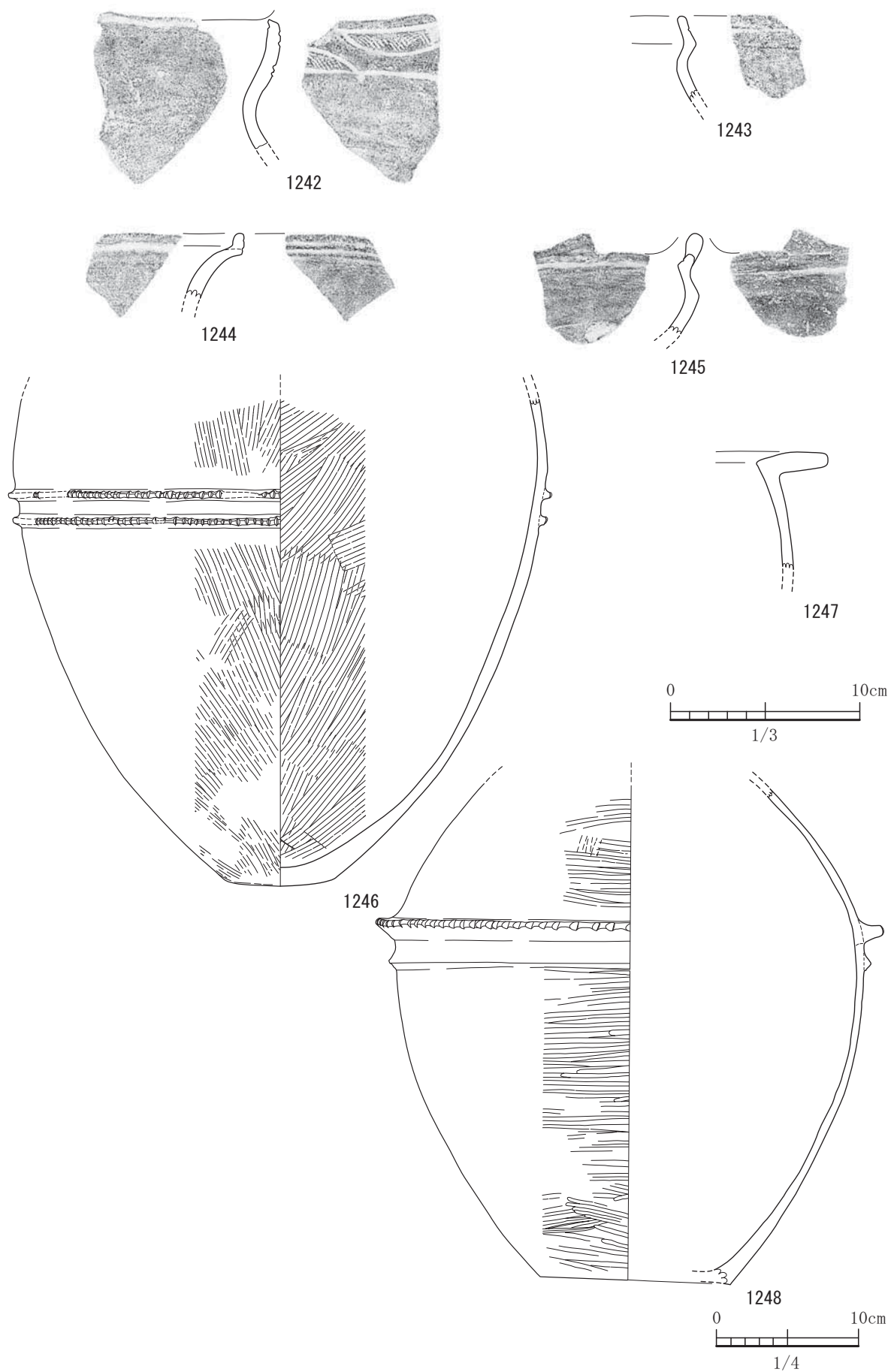


図-431 平坦地区第1包含層(2a層)出土遺物実測図 1 (S=1/3, 1246, 1248 は S=1/4)

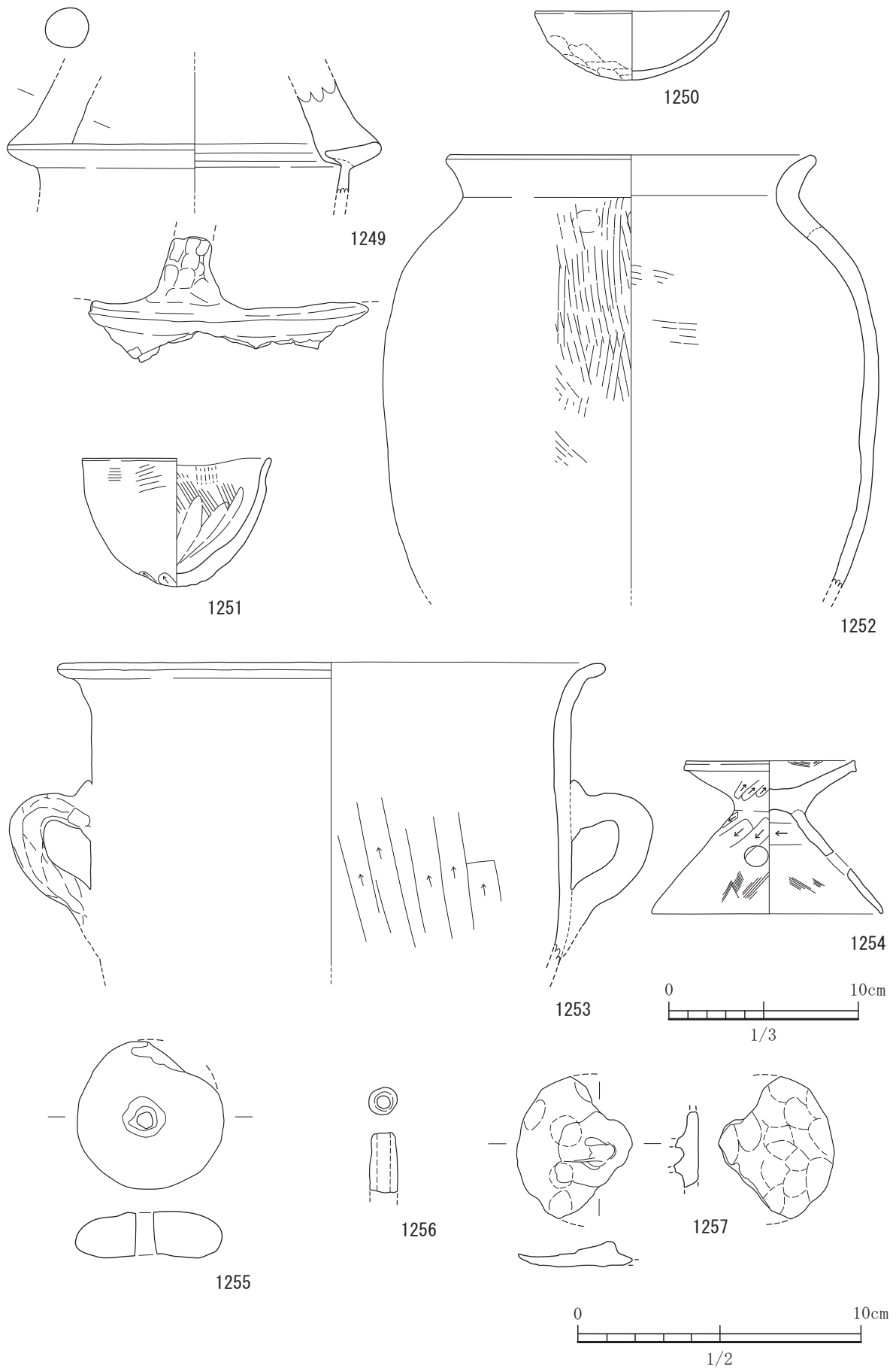


図-432 平坦地区第1包含層(2a層)出土遺物実測図 2 (S=1/3, 1255~1257はS=1/2)

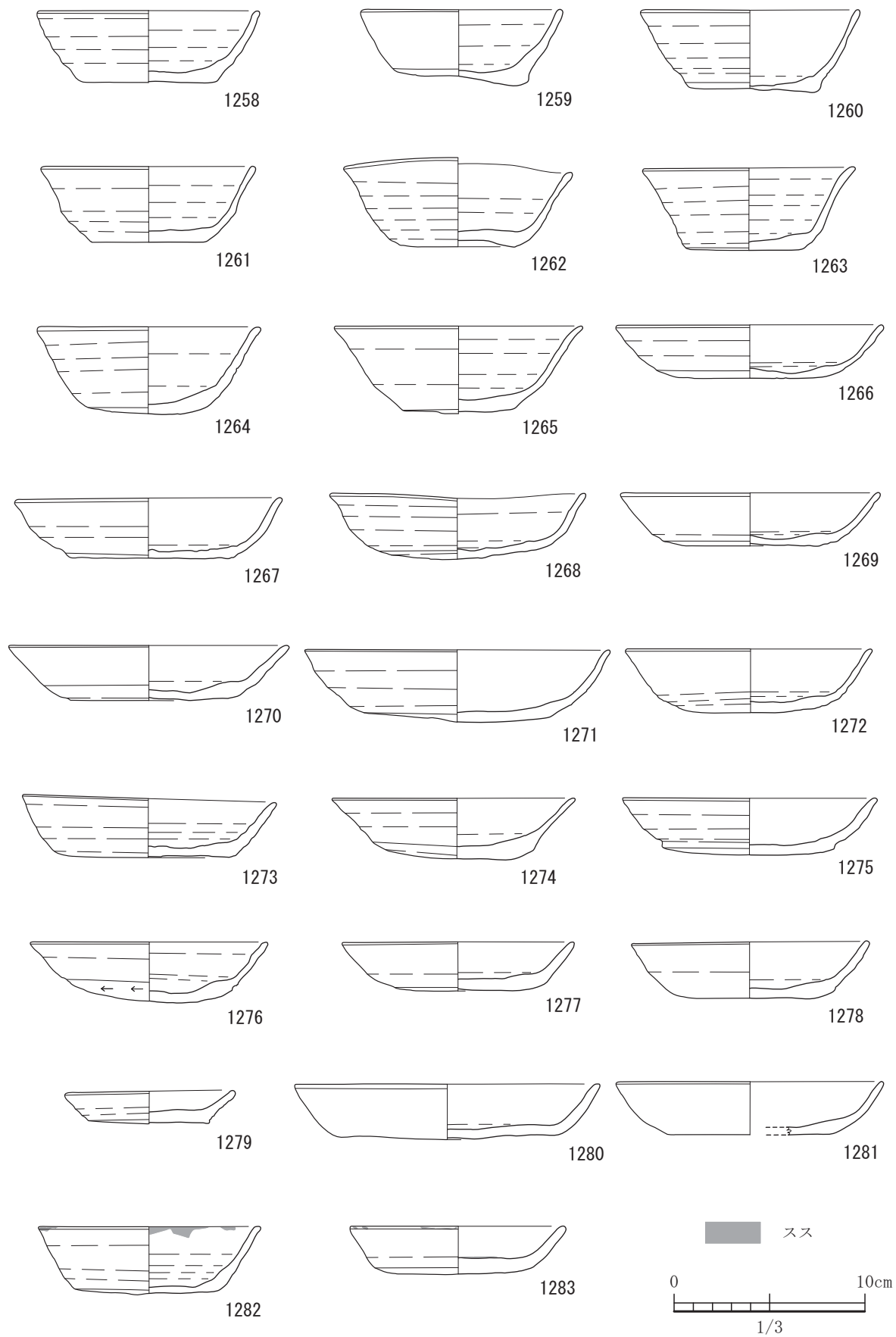


図-433 平坦地区第1包含層(2a層)出土遺物実測図 3 (すべてS=1/3)

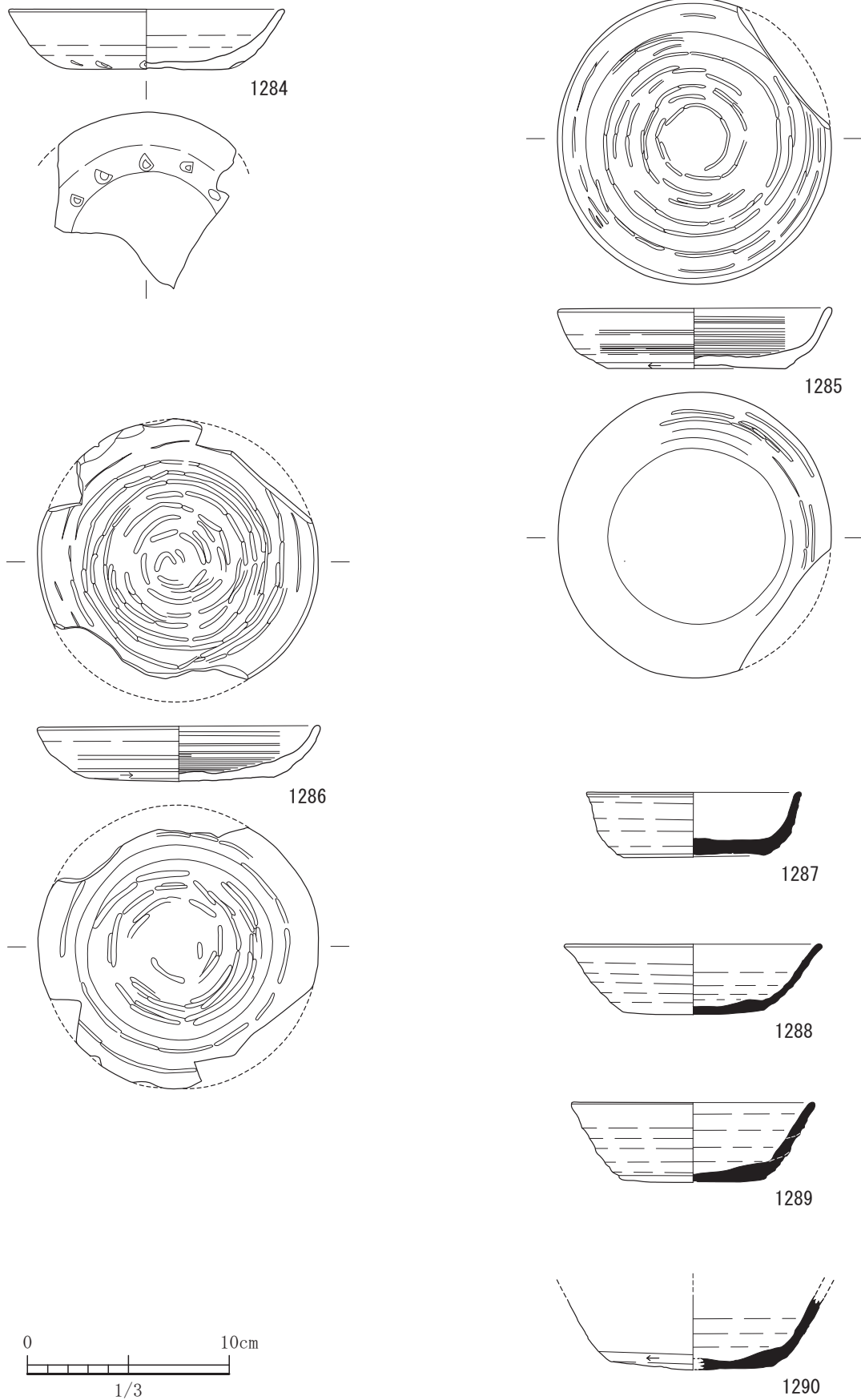


図-434 平坦地区第1包含層（2a層）出土遺物実測図 4（すべてS=1/3）

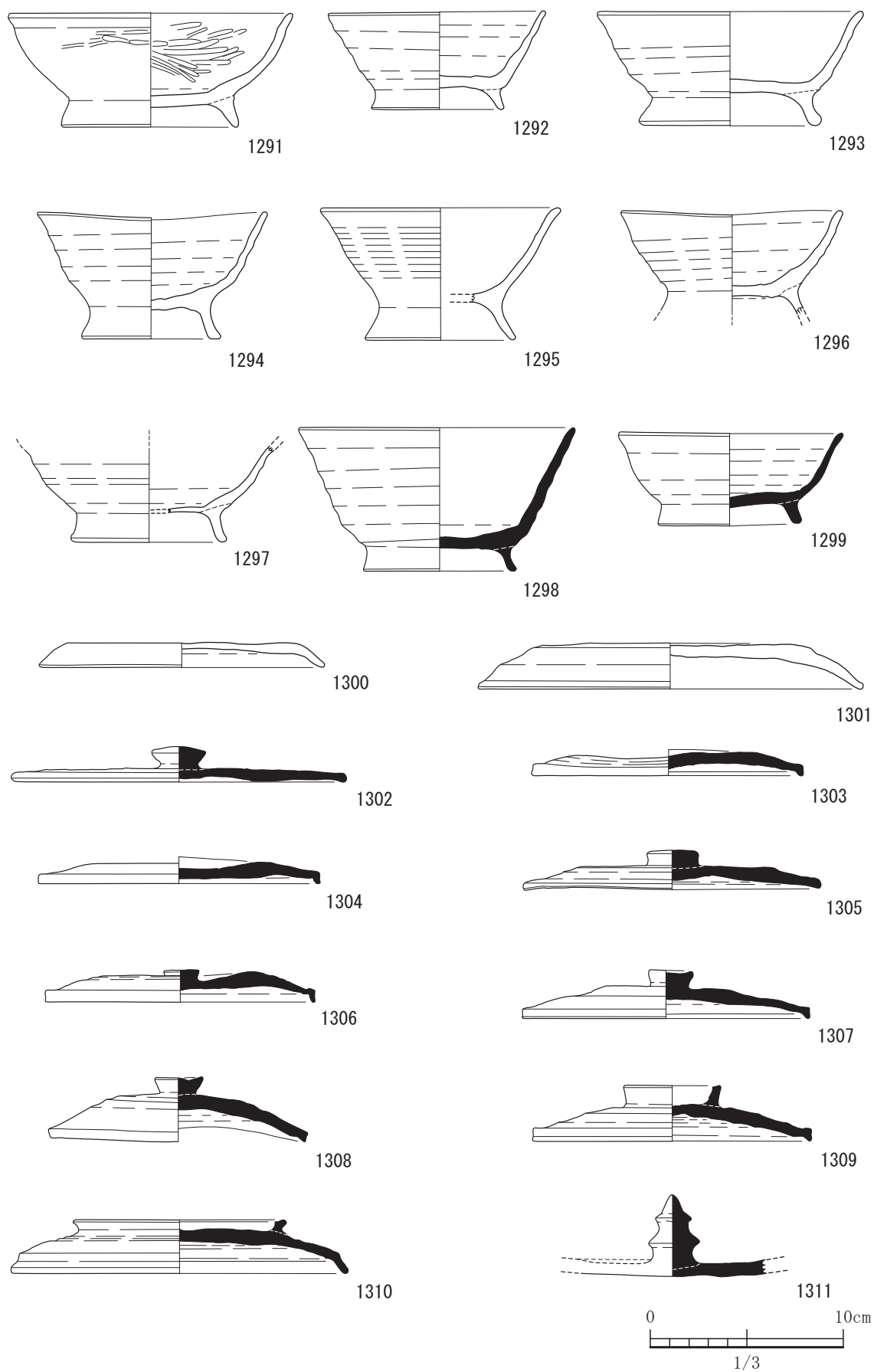


図-435 平坦地区第1包含層(2a層)出土遺物実測図 5 (すべてS=1/3)

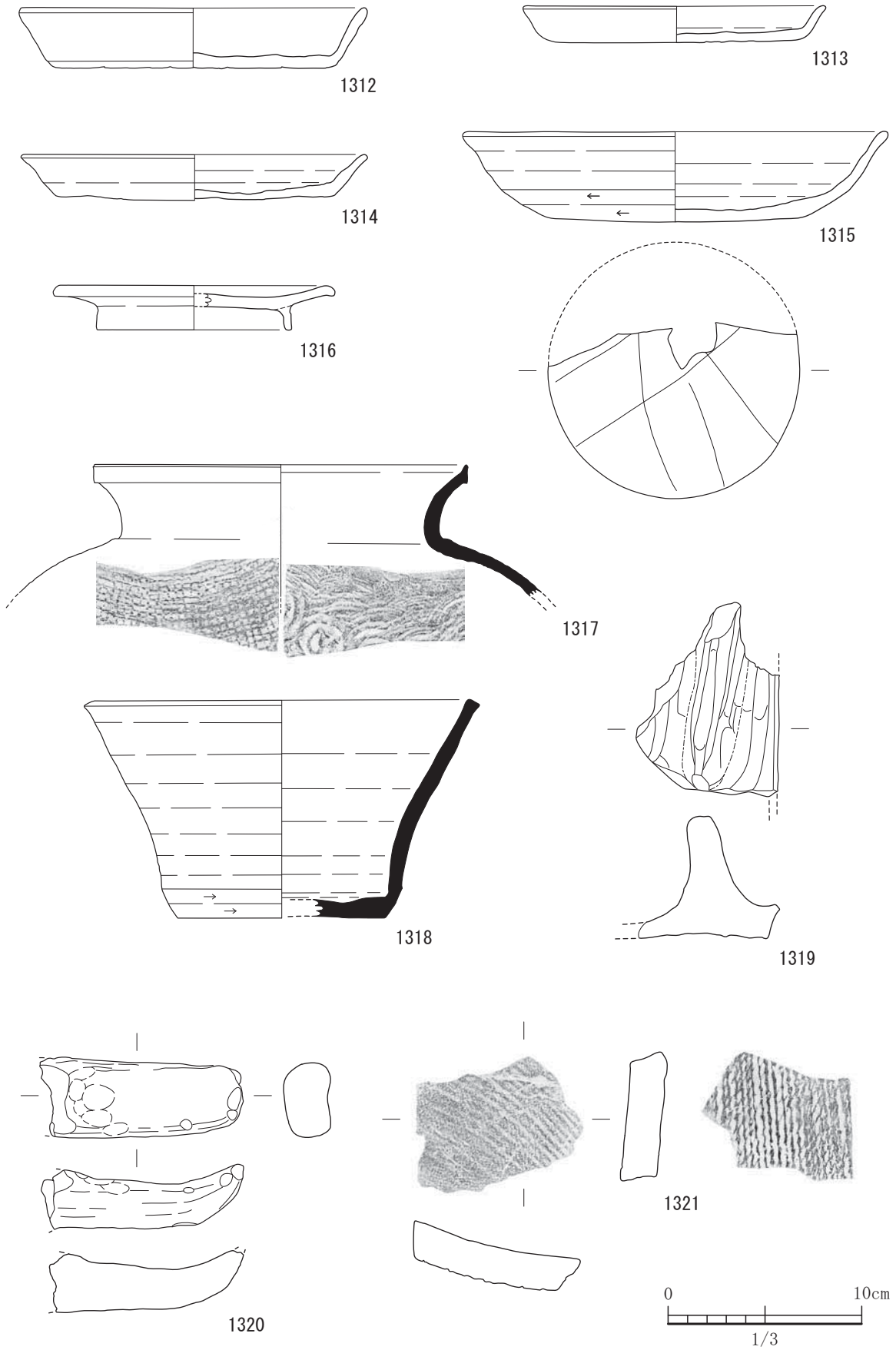


図-436 平坦地区第1包含層(2a層)出土遺物実測図 6 (すべてS=1/3)



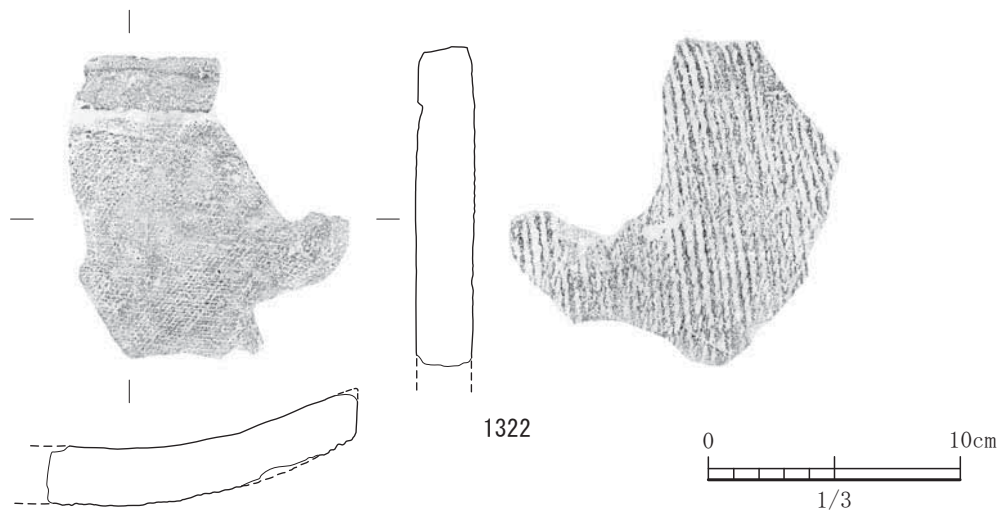


図-437 平坦地区第1包含層(2a層)出土遺物実測図 7 (S=1/3)

晩期の天城式の深鉢である。頸部から口縁部にかけての屈曲がゆるやかである。1244は天城式の浅鉢である。屈曲はそれほどきつくない。1245は縄文晩期の黒川式である。リボン状突起を口縁につける。1247は甕形土器の口縁部である。丹塗土器である。口縁端部を少し下に垂らしぎみである。1248は弥生時代中期後半から後期初頭の壺形土器であろう。最大胴部に刻み目突帯文と断面が三角形の突帯文をそれぞれ1条ずつめぐらす。1249は甕形土器の口縁部である。黒髪式である。バスケット型の把手を平縁の口縁部につける。1250は古墳時代前期の坏であろう。1251は小形の鉢である。底部はケズリを施し丸みを出しやや尖底ぎみである。1253は胴部には把手がつく。甑として利用したと思われる。1254は庄内式系小形器台である。受け部のつまみだしはほとんどない。穿孔は3箇所に施す。1255は土製の紡錘車である。穿孔に使用痕が認められる。1257は土製の模造鏡である。1/2程度の残存である。1258から1286まで土師器の坏である。基本的に底部が回転ヘラ切り離した後ナデ調整で体部の内外面は回転ナデである。また体部はほぼ直線的に立ち上がる。1267は体部下位にヘラケズリを施し丸みを作り上げる。1270と1271にも体部下位にヘラケズリを施す。1274も体部にヘラケズリを施す。1276には外面底部と体部の境付近に工具による沈線が見られる。1282は6箇所にわたり灯芯の跡が見られる。灯明皿として使用されていたようである。1283は見込み部と口縁端部付近に油煙が認められる。灯明皿として使用され

たようである。1284は底部と体部の境界に凹点文を均等に施している。1285と1286は棒状工具によるミガキ状のヨコナデが施されている。底部は回転ヘラ切り離した後未調整である。1287から1290まで須恵器の坏である。1287は底部と体部の境界は丸みを帯びて上方へ立ち上がる。内外面ともに丁寧に仕上げている。1288から1290まで体部は直線的に延びる。1291は黒色土器A類である。1292から1297まで土師器の椀である。1294と1295は高台が高い。1298から1299まで須恵器の椀である。直線的な体部であるが1299は端部で少し外反ぎみである。1300と1301は土師器の蓋である。扁平でつまみが見つからない。1302から1310までは須恵器の蓋である。1309と1310は輪状のつまみであるが1310は大きい。1311は宝珠形のつまみをもつ。1312から1315までは盤である。1315にはニードル状の細い工具で線刻を施している。1316は台付盤である。

1317は須恵器の壺である。胴部内面は同心円状のタタキで外面が格子目のタタキである。口縁端部は外側を平坦に作りあげている。1318は須恵器の鉢である。赤焼けした須恵器であり色調が橙色である。体部下位にヘラケズリを施す。1319は移動式カマドの一部である。1320は土師器の杓の把手である。端部がややそっている。1321と1322は古代の平瓦である。ともに凹面が布目で凸面が縄目である。1322は被熱による赤色化が見られる。1323は白磁の椀である。高台のケズリ出しは浅く、側面には沈線状の窪みが見受けられる。胴部の上半の一部が欠損して

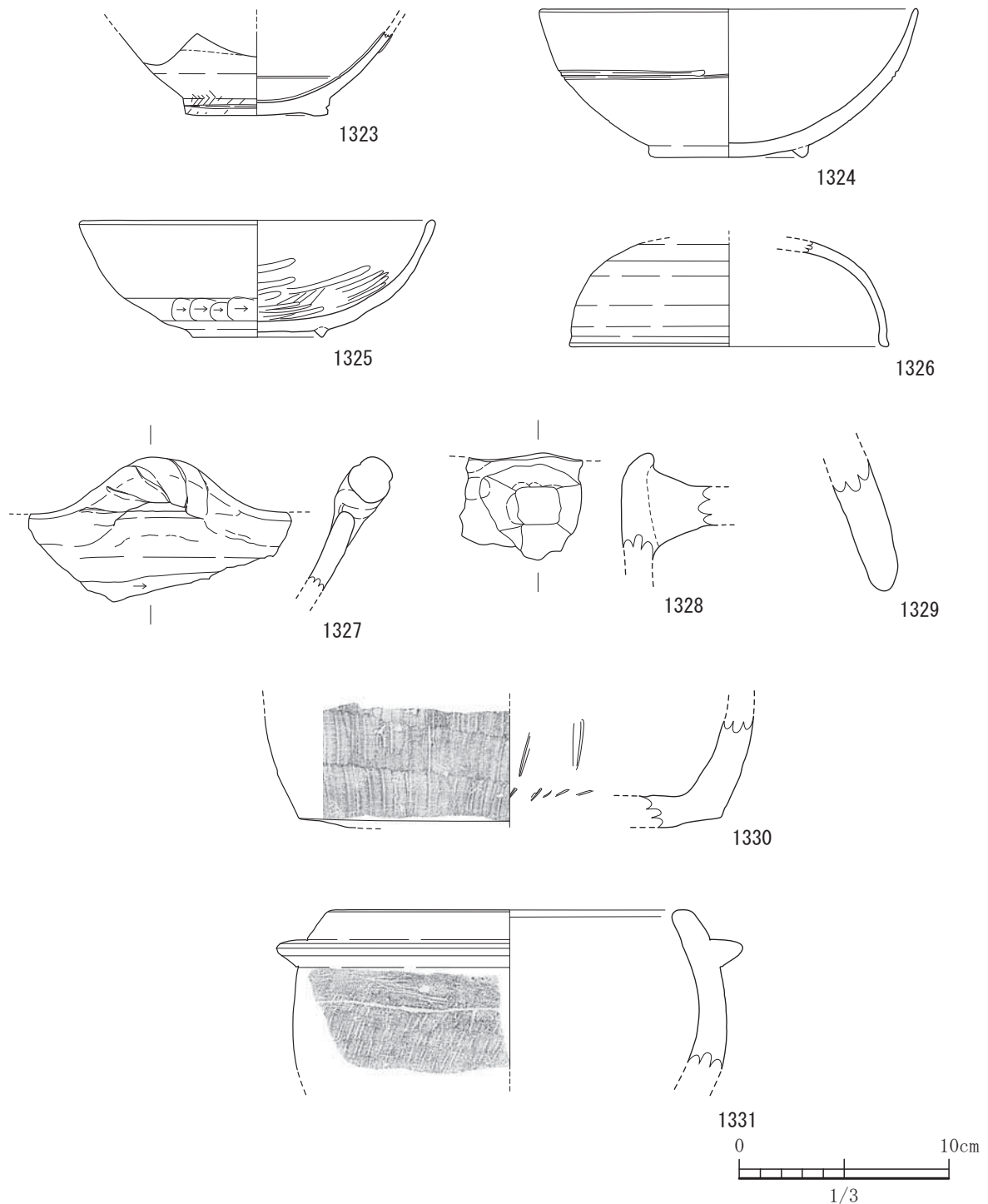


図-438 平坦地区第1包含層(2a層)出土遺物実測図 8 (すべてS=1/3)

いるが、釉を施しているのは体部上半のみで以下には施していない。1324は瓦器質碗である。高台は小さく貼り付け体部の上半と下半を分ける沈線をめぐらしている。始点とはずれて終わらせている。1325も瓦器質碗である。内面はミガキを施している。外面には体部下位にヘラケズリを施す。1326は瓦器質

の蓋である。天井部はヘラケズリ後ミガキその他はナデ後ミガキ調整を施す。天井部は欠損。1327は土師器の焙烙の把手であろう。中世から近世の所産であろう。用途的には豆などを煎ったりするものである。1328は土師器の把手である。口縁部に外向きにつけてあるようである。1329は瓦器質の三足土器

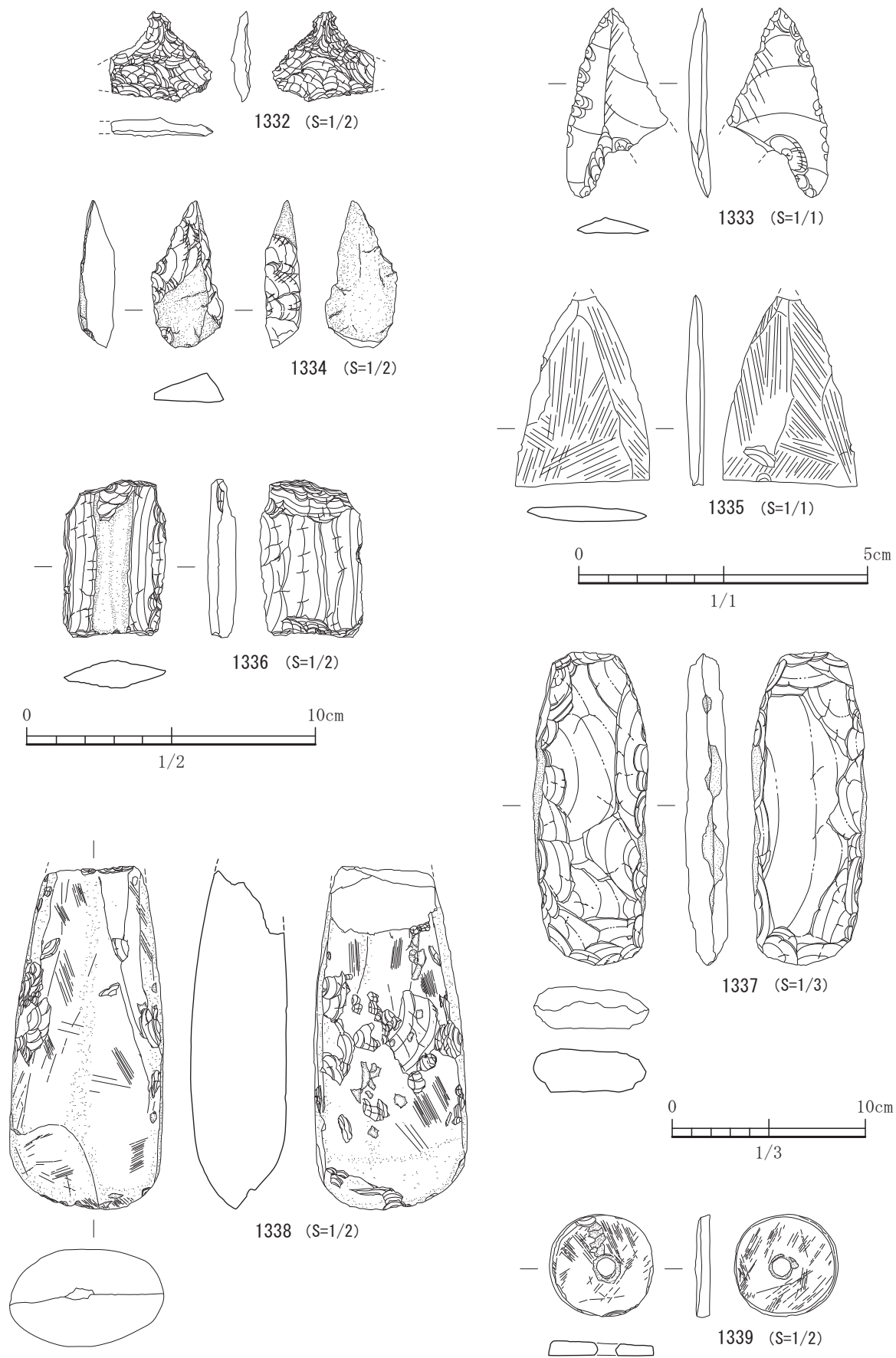


图-439 平坦地区第1包含層(2a層)出土遺物実測图 9

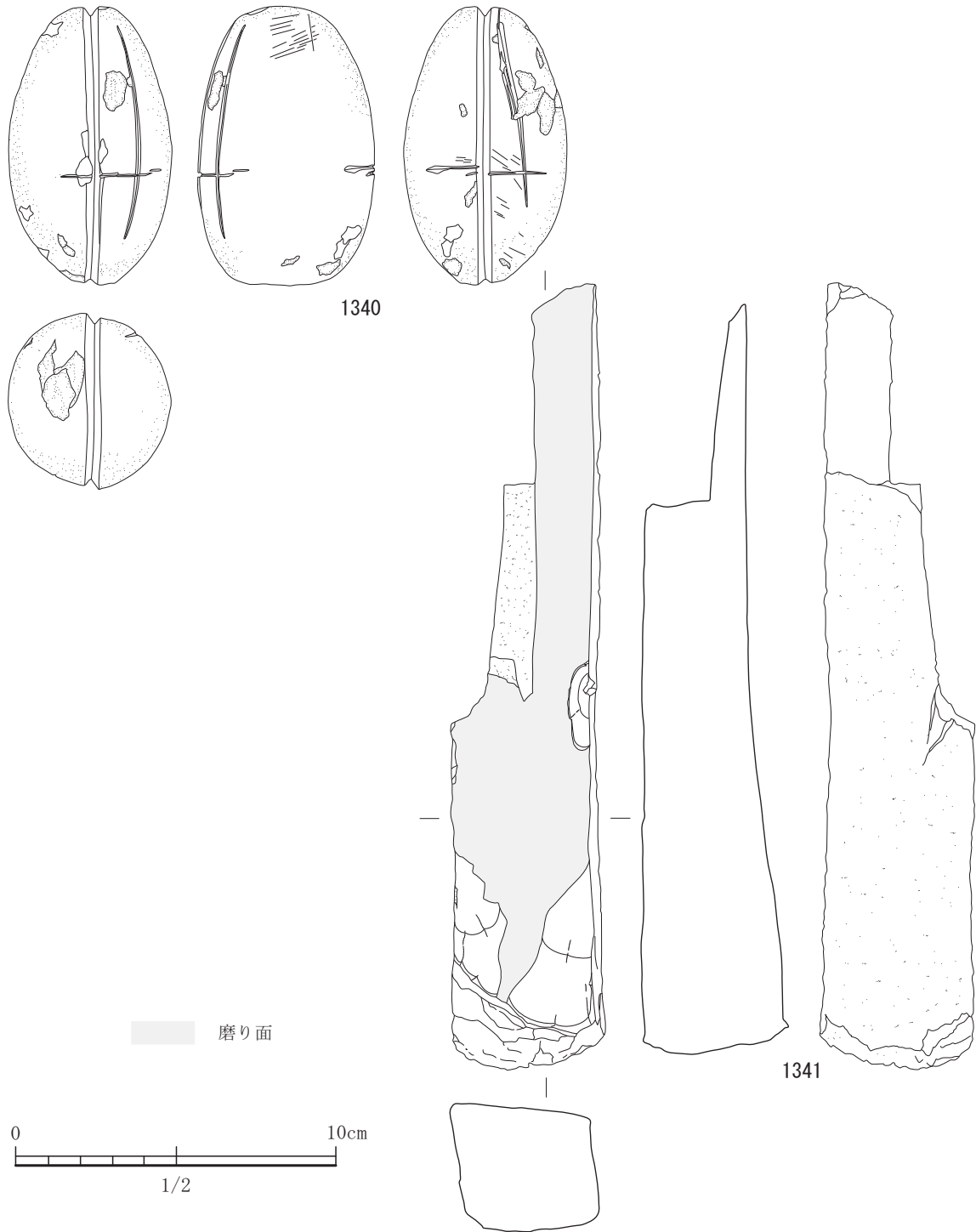


図-440 平坦地区第1包含層(2a層)出土遺物実測図 10 (すべてS=1/2)

の脚部であろう。1330は石鍋である。石材は西九州産の滑石であろう。底部から体部の一部でありほとんどが欠損している。1331も石鍋である。把手はヨコ置きである。外面にはススが付着している。1332は石匙で、石材はサヌカイトである。欠損している。

1333は西北九州産の漆黒色黒曜石製の打製石鎌である。1334は剥片石器で、石材は結晶質石灰岩であり木葉山に産出するものと考えられる。1335は磨製石鎌で、石材は頁岩である。1336は石剣であろう。頁岩の層理を利用しながら意識的に色の違いを作り出

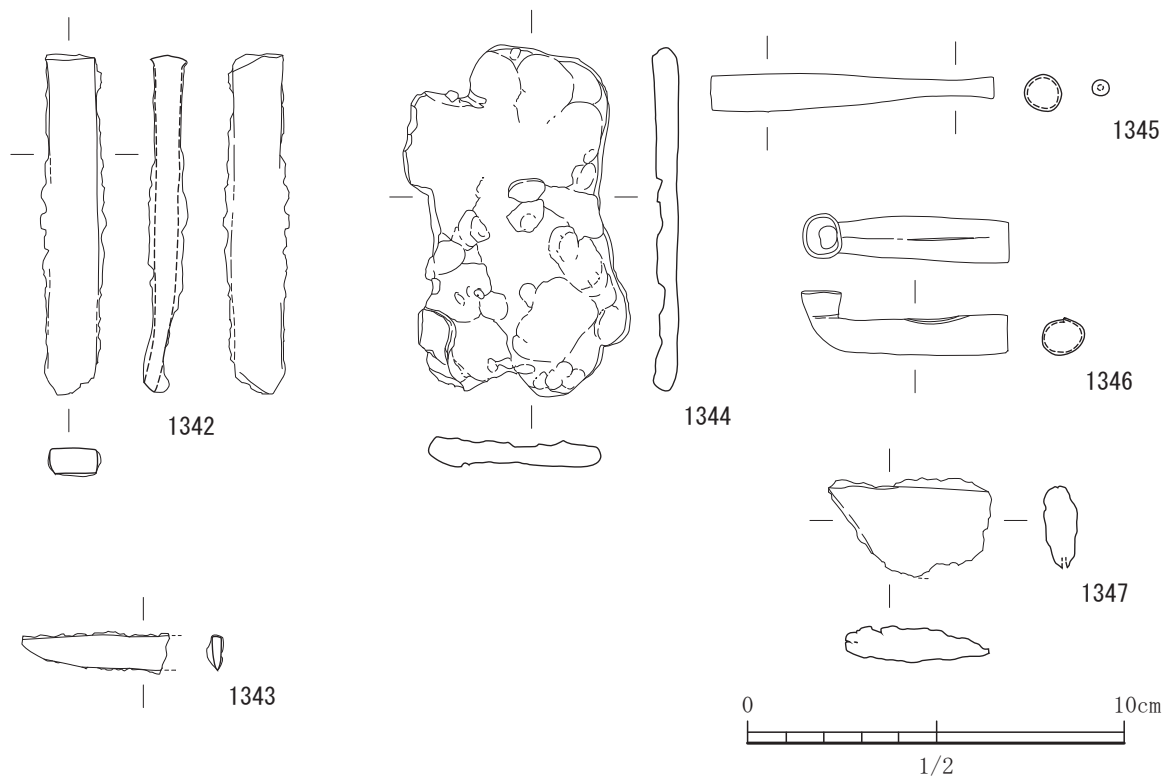


図-441 平坦地区第1包含層（2a層）出土遺物実測図 11（すべてS=1/2）

している。1337は打製石斧である。石材は変ハンレイ岩で山鹿市で産出するものであろう。1338は磨製石斧である。石材は頁岩である。1339は紡錘車である。石材は金峰山系の輝石安山岩であらう。孔の口径は8mmである。1340は石錘である。長軸方向に窪みが一週めぐらされている。それに直交するかのようにより一部に窪みが見受けられる。石材は砂岩である。この玉名地域では産出しない石であり他から持ちこまれている。1341は砥石である。使用面は1面である。石材は頁岩である。1342は鏝である。断面形状は四角形である。1343は刀子である。1344は鉄素材である。重さは131.8gである。1345と1346はキセルである。銅製である。1347は不明鉄器である。

#### 表土から出土した遺物

1348は縄文土器である。縄文時代晩期の天城式と思われる。頸部から口縁部への屈曲もゆるやかである。4条の沈線文を施す。1349は弥生時代中期後半から後期初頭の甕形土器である。頸部下位には断面形状が三角形の突帯が一週めぐる。外面にはススが付着している。1350は把手である。1351は弥生中期後半から後期初頭のバスケット型の把手がつく甕形

土器の口縁部である。黒髪式である。1352は土錘である。

#### カクランから出土した遺物

1353は縄文土器で縄文後期の北久根山式の深鉢であらう。磨消縄文が施してある。刺突列点文がある。1354は北久根山式の深鉢であらう。波状口縁であり貼付文がある。1355は弥生中期後半から後期初頭の甕形土器である。口縁部が平縁である。1357は鉢である。口縁部は平縁となり端部はやや垂れ下がる。須玖Ⅱ式であらう。甕棺墓に使用されていたものかもしれない。1360は手捏ね土器である。赤色顔料痕が一部見受けられる。1361は坏で体部が大きく開いて直線的である。内面には回転ヘラミガキを施している。8世紀後葉ぐらいであらうか。1362から1364は土師器の椀である。1364は高台が細く長い。1365は須恵器の蓋である。平坦な天井部である。1366は坏で底部が糸切り離しであり中世の所産である。1367は近世の泥面子である。木葉猿ではないだろうか。1368も泥面子である。魚の形をしているようである。

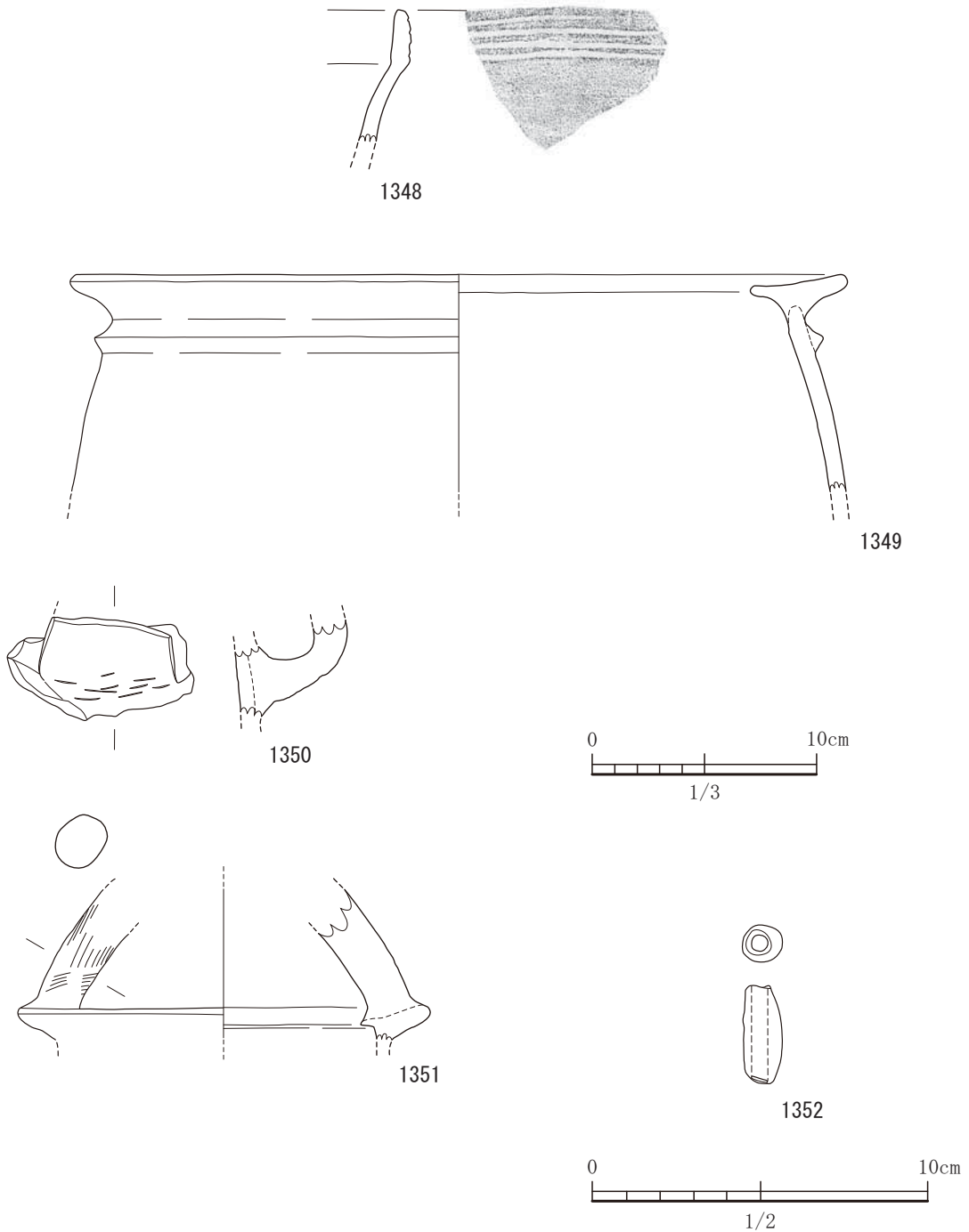


図-442 表土出土遺物実測図 (S=1/3, 1352はS=1/2)

2 湿地区

(1) 湿地区の遺構

湿地区で検出された遺構は3区の1号杭列のみである。1号杭列は調査区の西側の基本土層の3層で検出されたもので、検出した時点で杭は剥平を受け欠損した状態であった。基本土層3層には中世の遺

物が圧倒的である。よって少なくとも中世以降の杭列ではないかと考えている。杭は0.77m～0.90mの間隔で打ちこまれており基本土層5層まで到達していた。杭が並ぶ方向はN37°Wであった。舌状台地から突き出るように配列されている。この杭列の用途については不明である。



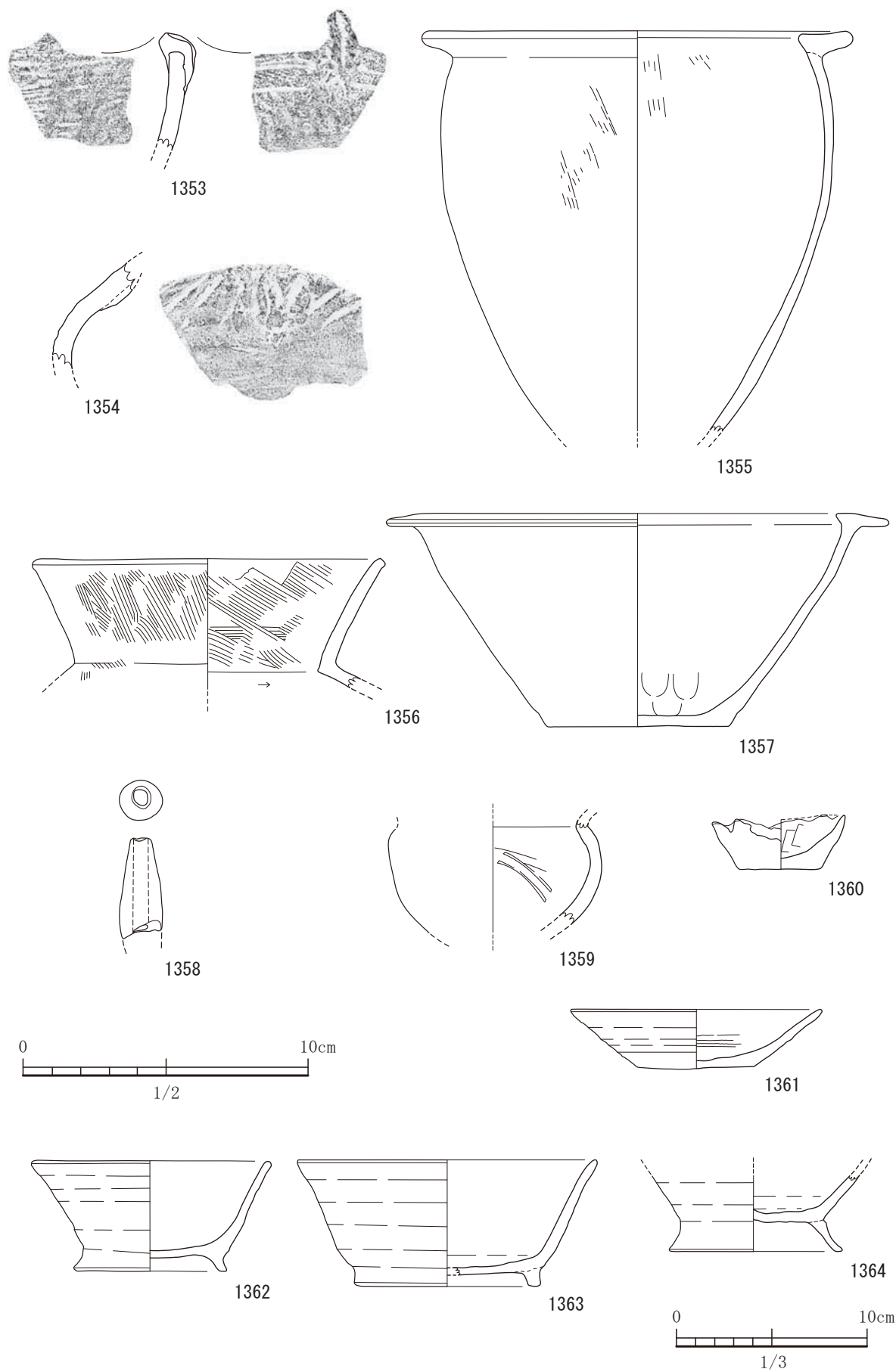


図-443 カクラン出土遺物実測図 1 (S=1/3, 1358はS=1/2)

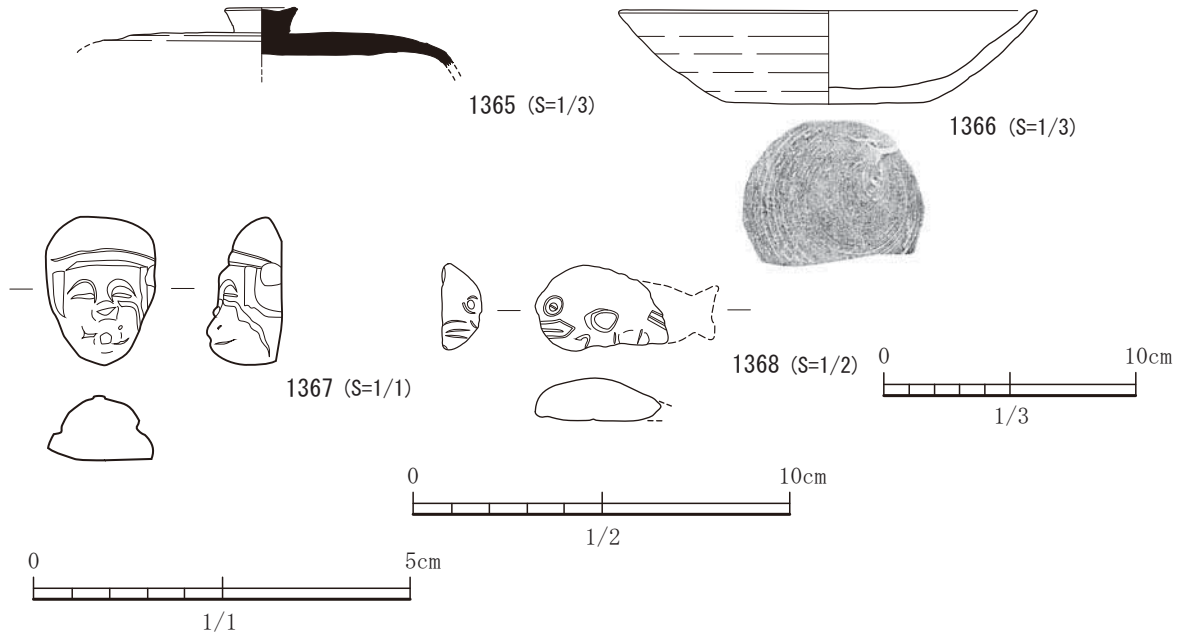
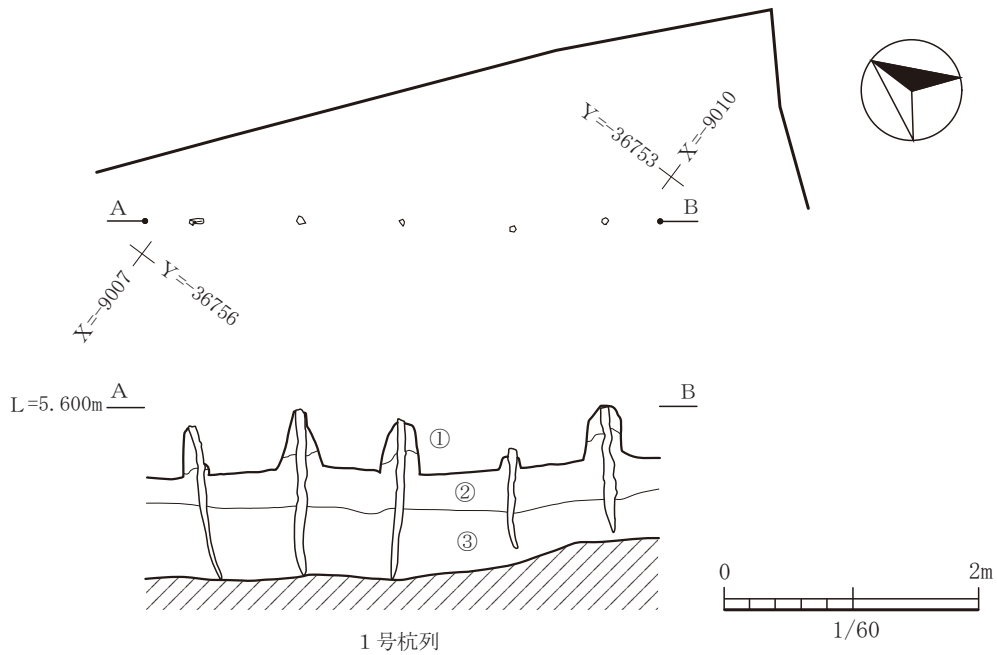


図-444 カクラン出土遺物実測図 2



- ①基本土層3層：黒色(10YR2/1)粘質土。直径5cmの礫(片岩)を多く含む。下位ほど木片を含むようになる。
- ②基本土層4層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土。植物根が含まれる。
- ③基本土層5層：褐灰色(10YR4/1)粘土。植物の枝が多量に含まれる。

図-445 1号杭列平面図及び断面図 (縮尺 1/60)

(2) 湿地区の遺物包含層から出土した遺物

湿地区とは、調査3区と調査4区のことをさす。今回調査を行った地区は、平坦地区の西側の低湿地部である。湿地であるがゆえ、水と粘性土により大気から遮断されていたために土器のみならず木製品等の保存状態もよい。

包含層は、3層あり、上位の層から第1包含層(2層)、第2包含層(3層)、第3包含層(4層)と命名した。それぞれの包含層から出土した土器の個体数を示したのが表-3である。

第1包含層(2層)は、現代の水田の耕作土である表土を剥いだところで出てきた層である。出土遺物を見ても弥生時代から中世までの1~2点程度であり、非常にあたらしいと思われるがよくわからない。

第2包含層(3層)は、古代から中世の遺物が中心であり、77%を占める。弥生時代や古墳時代の遺物は流れ込みによるものであろうと思われる。本層は、奈良時代から鎌倉時代にかけて形成されたものと考えられる。

第3包含層(4層)が最も深い層である。縄文時代から古墳時代まで2点から3点ほど均等に生まれ、分布曲線というピークが見られない。いつの時代に形成されたかは不明であるが古代以降の遺物が含まれていないことから、おおよそ古墳時代付近で形成されたものであろう。本層の下位からは、洪水時に見られる流木等の掃き寄せされたような堆積状況を示している。この層のトップが放射性炭素年代測定の結果約1030年前(理化学分析;表-4)を示して

いるので、平安時代以前に形成された層であろうと考えられる。堆積状況等から古い時代の遺物が流れ込んだ可能性が高いと考えている。

湿地区からの特筆すべき出土遺物としては、土器では、弥生土器で丹塗りの高坏や広口壺。墨書を施した須恵器。布目瓦や瓦器質土器等があげられる。また、木器では櫛等が出土している。詳細な遺物の形状や法量については、次頁以降に掲載している遺物実測図や出土遺物観察表を参照していただきたい。

出土した遺物は実測可能なものは1369から1433までの65点である。1369は縄文時代晩期の深鉢であろう。頸部の傾きが緩やかで口縁部にかけての屈曲も弱い。1370は縄文時代晩期の浅鉢である。端部近くで外面から窪みをつけることで口縁部を作りあげている。1371は弥生中期後半から後期初頭期の壺形土器である。口縁部は平縁で胴部上半には断面形状が三角形の突帯を2箇所めぐらしている。1372も弥生中期後半から後期初頭期の壺形土器である。胴部外面はミガキで仕上げている。1375は古墳時代前期の小形丸底壺である。外面は漆を塗った黒丹塗土器である。1380は蛇紋岩製の磨製石斧である。1381は滑石製の石製品である。完形である。凹面に2箇所浅い孔がつけられている。

1382は平縁の口縁部に暗文が見られる。弥生中期後半から後期初頭の所産である。1383と1384は丹塗土器である。1383は高坏の脚部であろう。1384の胴部残存部の最下部に黒丹と思われるものが認められる。1385は器壁が薄い。1386は坏部で上半と下半を段をつけて分けている。ヘラミガキを施している

表-3 湿地区遺物包含層から出土した土器の個体数

時代 層位	縄文時代 (後期・晩期)	弥生時代 (中期後半)	古墳時代 (前期)	古代 (奈良・平安)	中世 (鎌倉)
湿地区 第3包含層 (4層)	2	3	2	0	0
湿地区 第2包含層 (3層)	0	3	6	9	21
湿地区 第1包含層 (2層)	0	1	1	0	2

\* 数値は形状がわかる程度に接合できた個体数

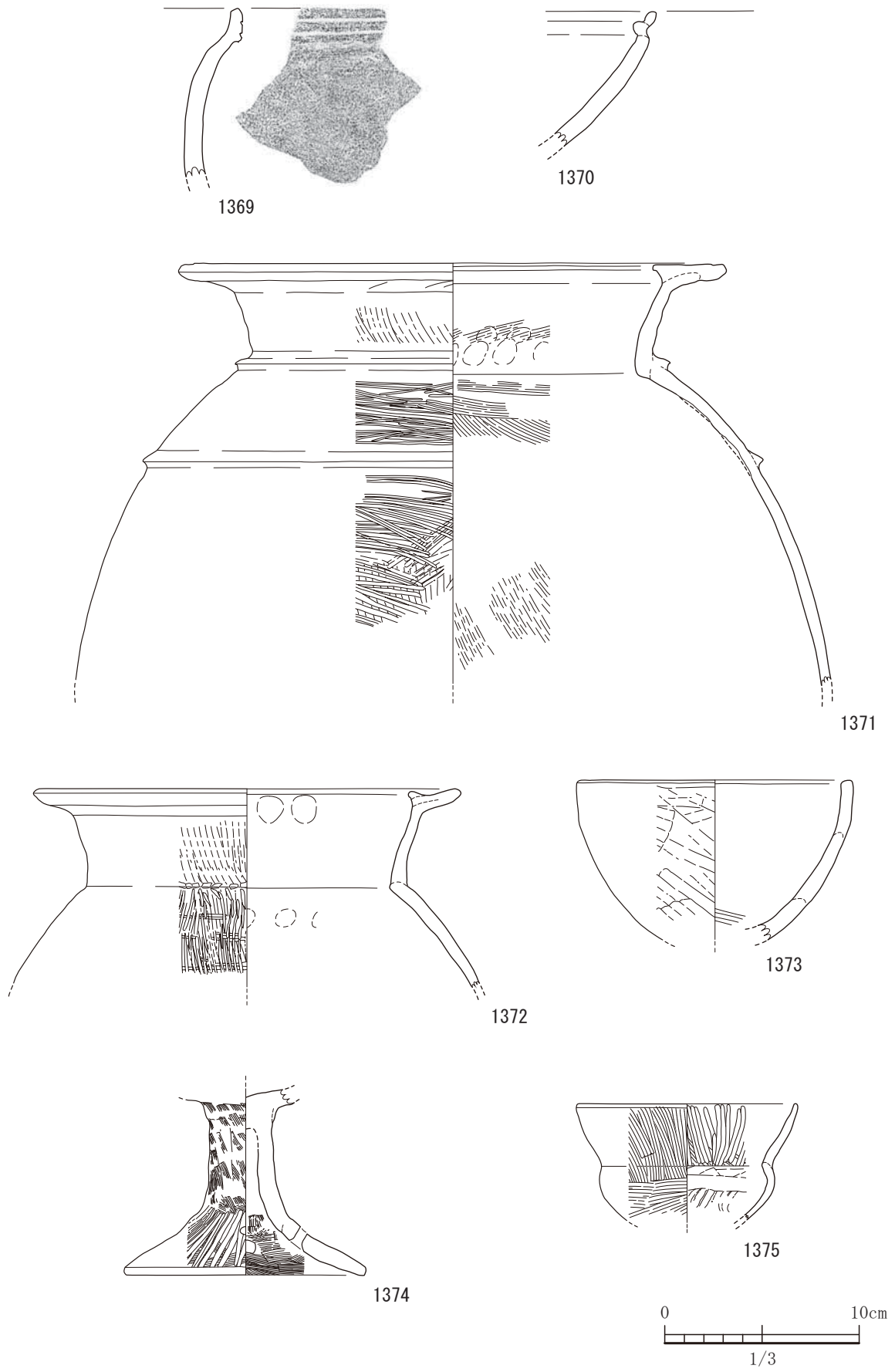


図-446 湿地区第3包含層（4層）出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

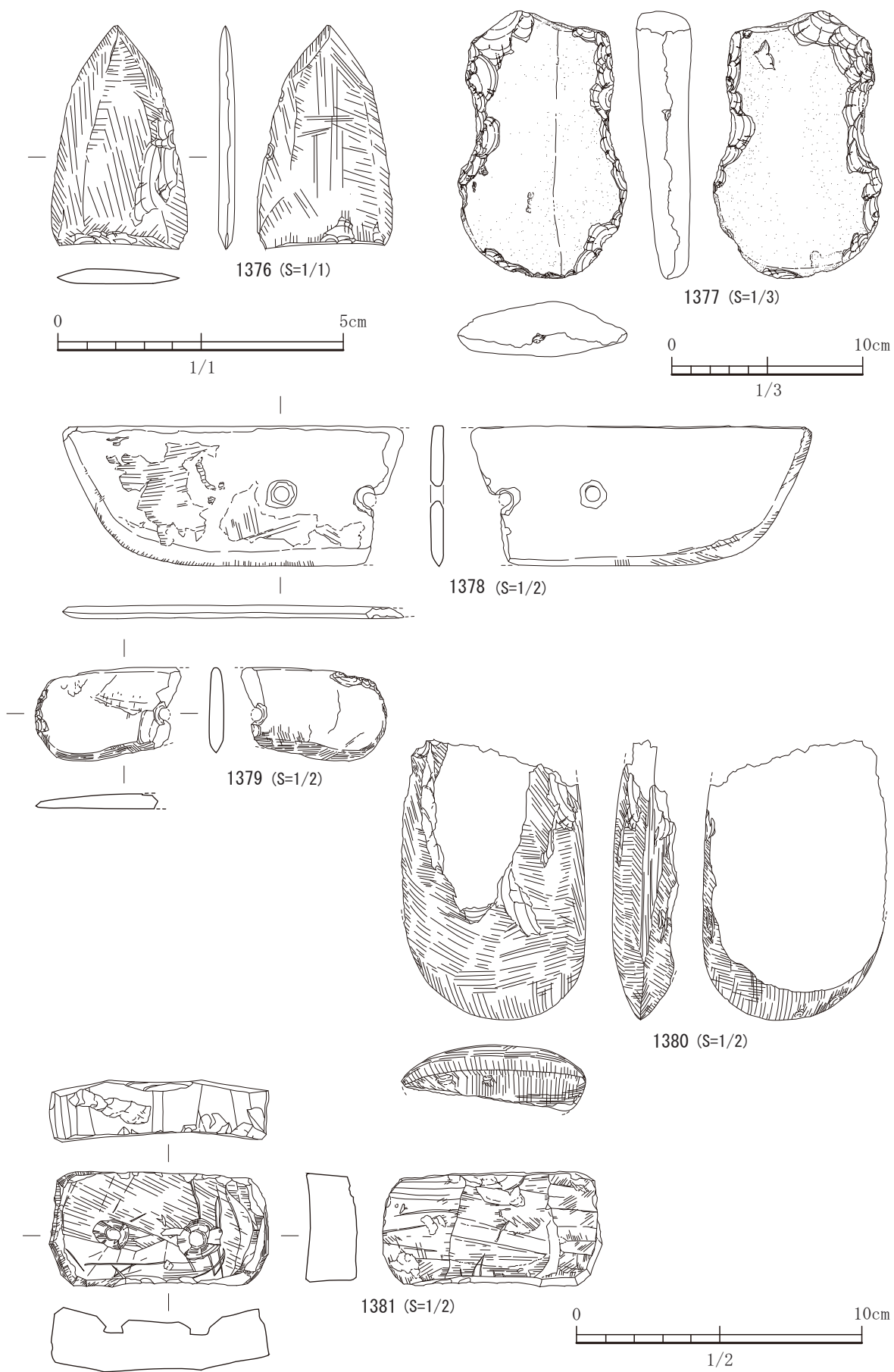


図-447 湿地区第3包含層（4層）出土遺物実測図 2

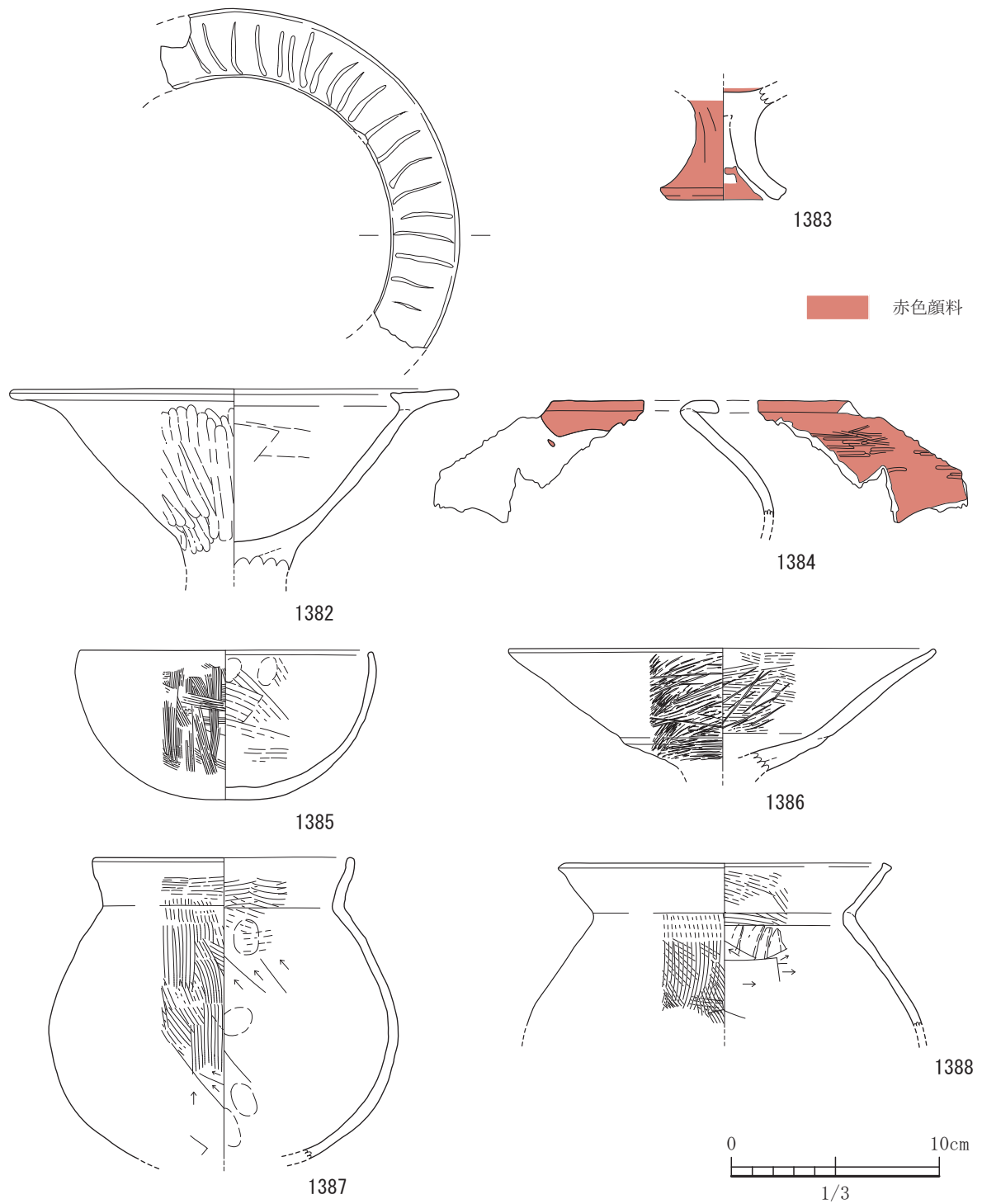


図-448 湿地区第2包含層（3層）出土遺物実測図 1 (すべてS=1/3)

が粗い。1387は小形の甕でやや下膨れである。1389は口縁部の幅が広くなり直線的で古墳時代中期の所産であろう。1390は古墳時代前期の小形丸底壺である。1393と1394は須恵器の坏である。墨書を施してあるが釈読できない。1395は黒色土器A類であ

る。1396は高台が細く長い。体部には丸みがみられる。10世紀前半頃のものだろうか。1398は須恵器の椀である。底部に「菌」と墨書されている。体部外面にも墨書があるが、釈読できない。9世紀前半の所産であろう。1399は二耳壺である。反転復元して



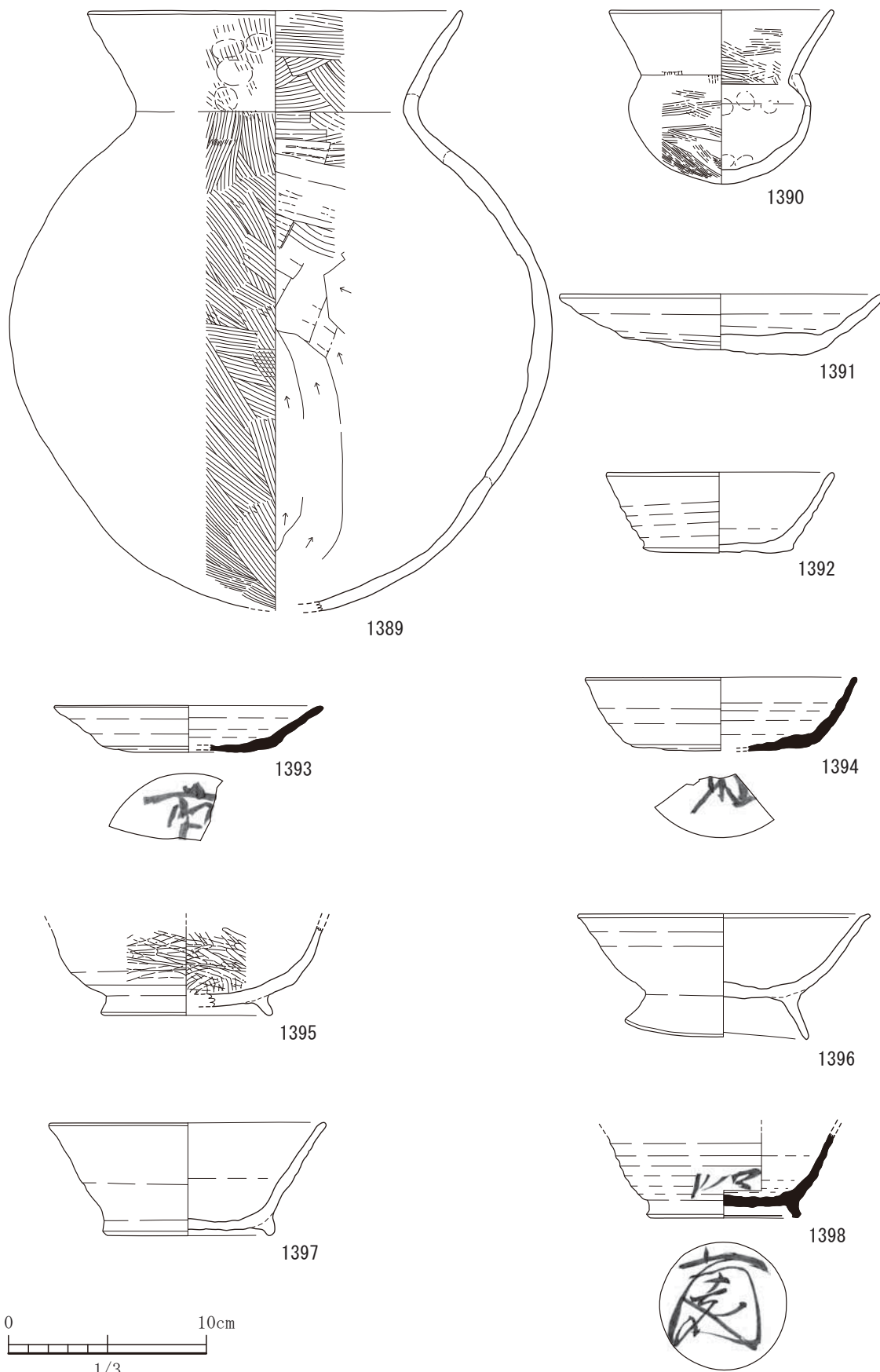


図-449 湿地区第2包含層（3層）出土遺物実測図 2 (すべてS=1/3)

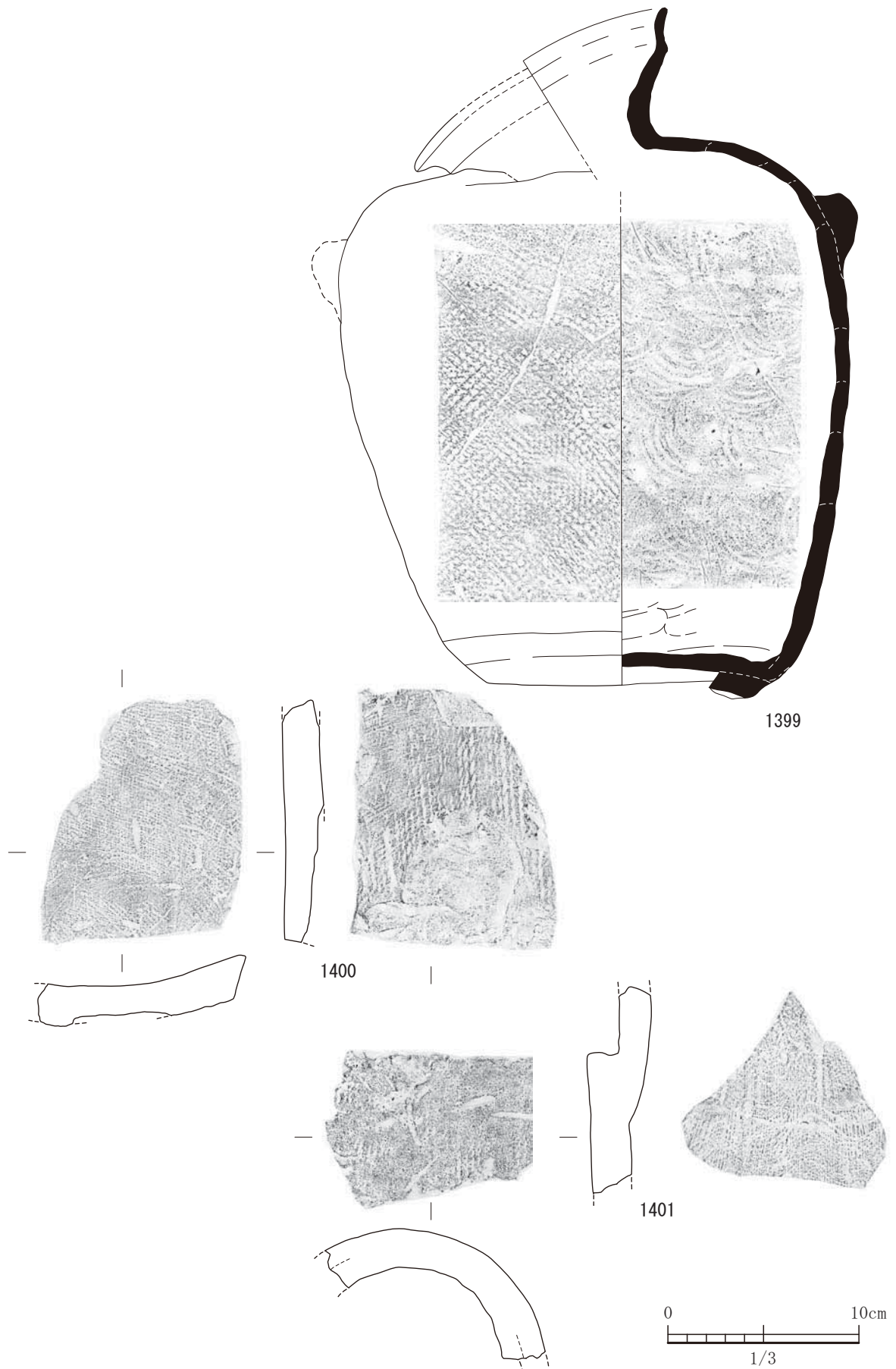


図-450 湿地区第2包含層（3層）出土遺物実測図 3（すべてS=1/3）

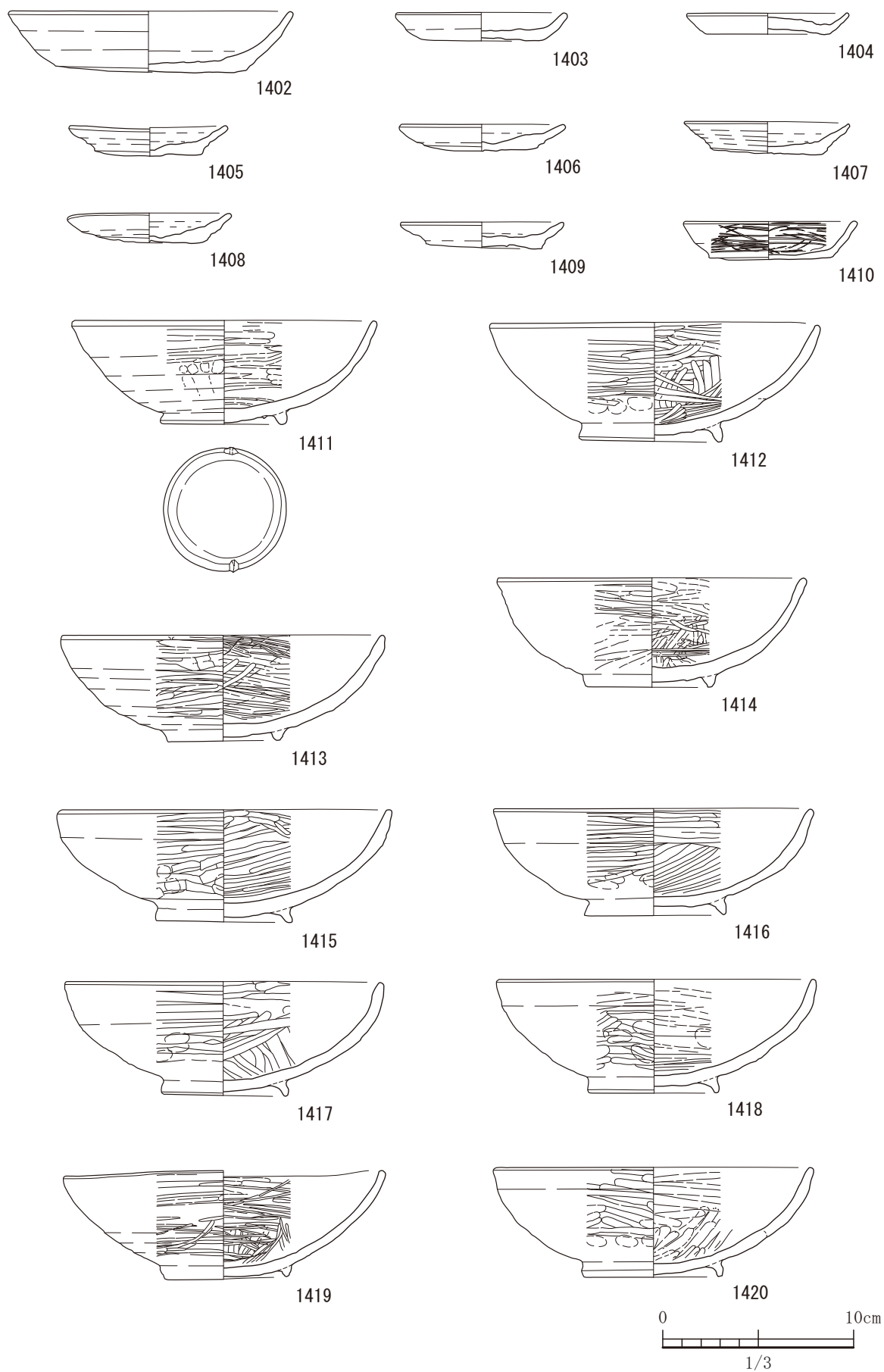


図-451 湿地区第2包含層（3層）出土遺物実測図 4 (すべてS=1/3)

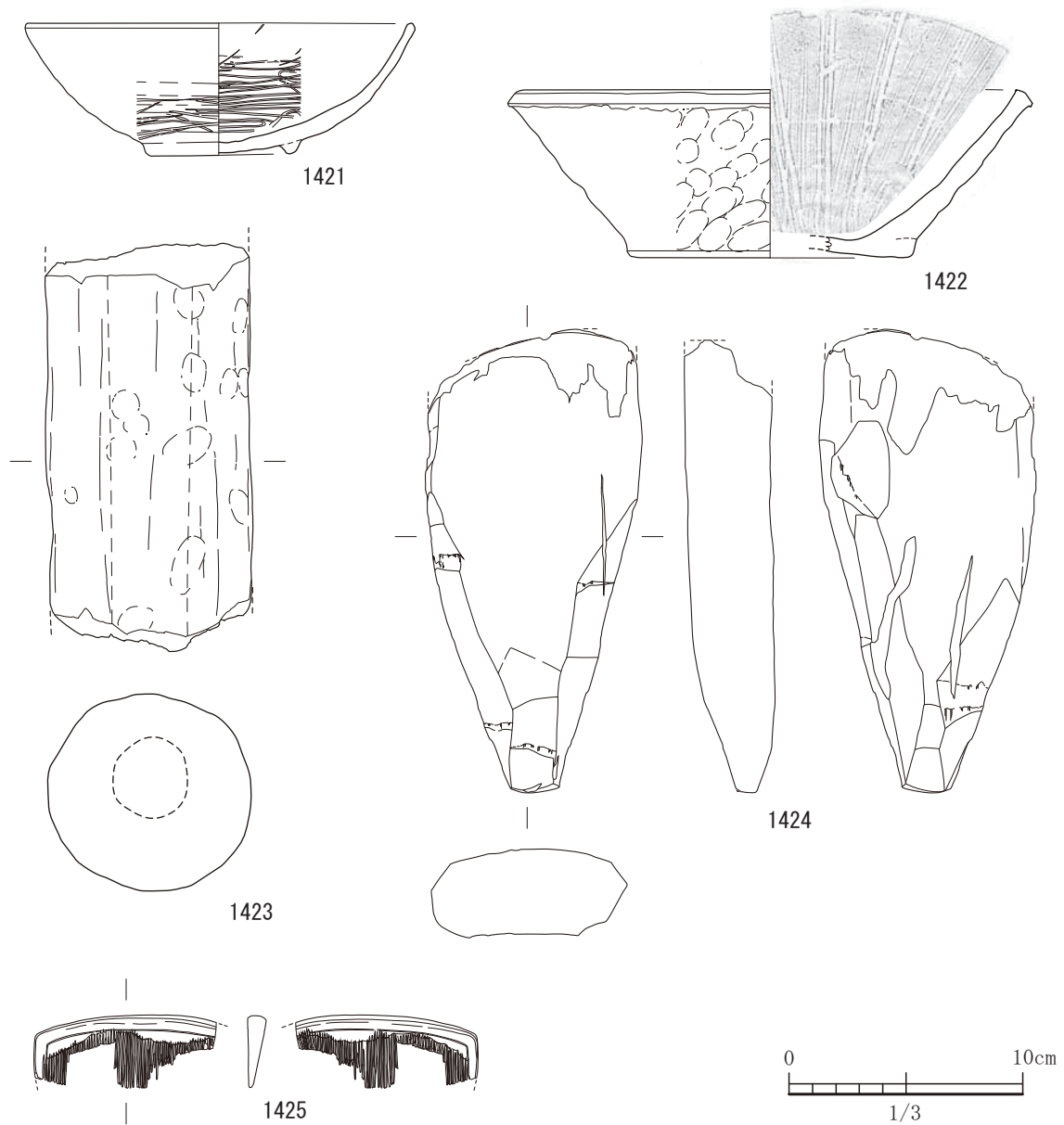


図-452 湿地区第2包含層（3層）出土遺物実測図 5 (すべてS=1/3)

いる。胴部肩の下部に耳状の把手が2箇所つけられていたと考えられる。頸部から口縁部にかけて、折れ曲がり、歪な形状を呈している。その倒れている側と反対側の底部には土器片が付着している。付着したまま焼いたようである。そのため全体的に図上左側に傾斜し歪んでいると考えられる。1400は平瓦で1401は丸瓦である。両方とも凹面が布目で凸面が縄目である。1402は土師器の坏である。底部は糸切り離しであり中世の所産である。1403から1410は土師器の皿である。1403と1404は底部には糸切り離しの痕

跡が見られ内外面にススが付着している。1405から1409まで底部はヘラ切り離し後ナデ調整であり1406には内外面にススが付着している。1410は底部は糸切り離しであり板状圧痕が見られる。1411から1421まで瓦器質碗である。平坦地区の11号溝と同じものが出土している。この11号溝の埋積時期が11世紀後半から12世紀前半でありこの時期の瓦器質碗であろう。1411は高台に2箇所切り込みを入れてある。1412及び1413には底部に「×」状のヘラ記号がある。1422も瓦器質のすり鉢である。口縁端部は面

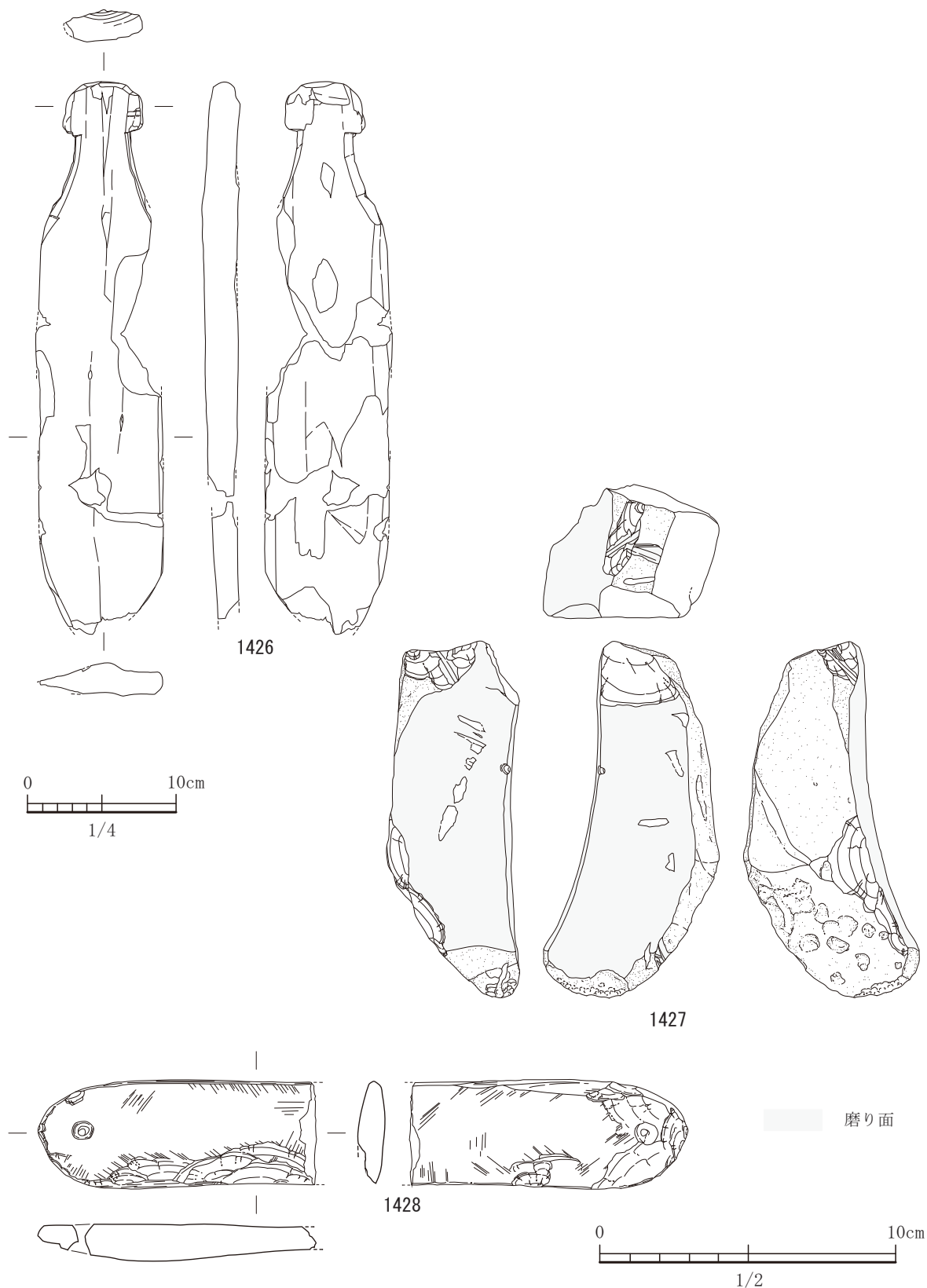


図-453 湿地区第2包含層（3層）出土遺物実測図 6 (S=1/2, 1426 は S=1/4)

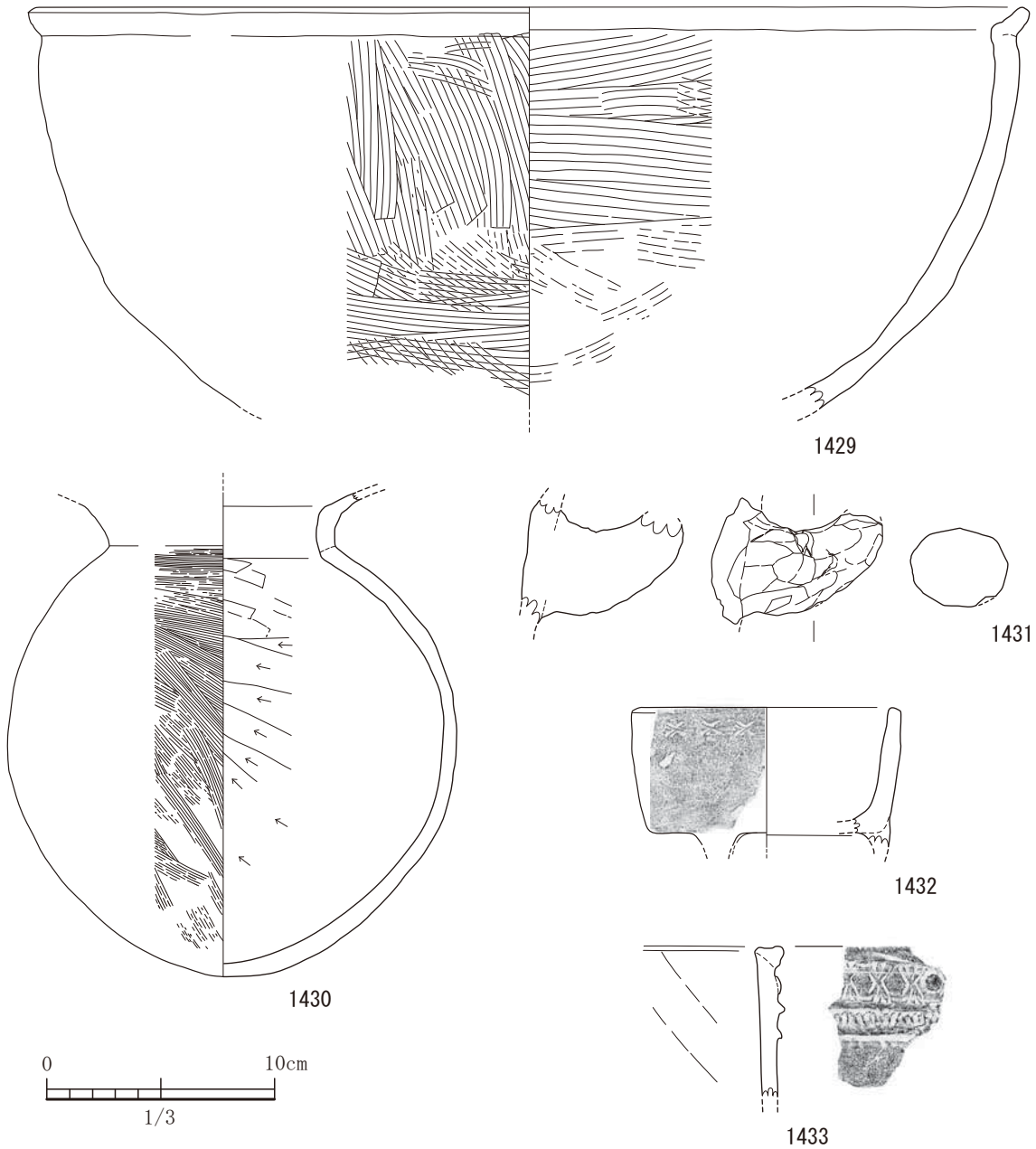


図-454 湿地区第1包含層（2層）出土遺物実測図（すべてS=1/3）

取りが施されている。1423は轆の羽口である。鍛冶用であろう。1424は杭の先端部であろう。1425は櫛である。樹種はヌルデである。1426は有頭状の加工がある。両端にあったと思われる。両端にあれば足板であろう。樹種はクリである。1427は砥石で、石材はリソイダイト（天草砥石）である。1428は穿孔を施してある棒状石製品である。刃部は作られていない。石材は木葉山付近に産する片岩である。1429は鉢である。内外面ともにハケ目調整である。口縁

部のみヨコナデである。内外面にススが付着している。1430は土師器の壺である。器壁は厚く、調整で外面は図上で左上がりのハケ目調整で、内面は図上で左上がりのケズリを施す。古墳時代であるが詳細時期は不明。1431は把手である。古代の甕か鉢のものであろう。1432は三足土器であろう。X状文が口縁端部付近に見られる。中世であろう。1433は瓦器質の火鉢である。X状文と浮文が見られる。



この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 264 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 北の崎遺跡 釧拔遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL： <http://www.kumamoto-bunho.jp/>